有島武郎全集　第拾巻

右より長男敏作、次男作治、三男作三

著者と三人の愛兒（大正七年六月）

第十巻目次

目次　二

有島武郎全集　第十巻

観想録（其二）

――日記――

第九巻

一九〇六年（明治三十九年）

ファニーに捧ぐ

八月三十日。（——九月十三日迄原文英文）霧深し。於ニュー・ヨーク。

いとしきファニーよ、我が夢の織りなせることよなき者よ。塵の世の汚れに、ゆめ觸れず、現世の者、君を眼もて見しことなし。たゞ我のみ、否、我とてもたゞ夢枕に見しのみ。されども君在す、眞に我と共に在す。君が腕は我が襟に、君が唇は我が唇に觸れ、君が胸我が胸に觸るゝを覺ゆ。おゝ君よ、夢か、幻か。否、怖ろしの現世。夢あり、然して君あり。然して君います、狂ほしくも戀しき君よ。君よ、我を愛し給ふや。かすかなる、かすかなる君がつぶやき聞きも得ず。遙かに響き、我心凍る。何とや、何と、何との給ふや。口を出づれど、聞きも得られず。ファニー、我を抱き給へ。さなり、さなり、堅く抱き給へ。おゝ、神のみぞ知る！

ファニーよ、永遠の沈默の內に、身を果てむ。ゆめ何人にも知らすな。

されど、いざ、君のいとしくも抱き給ふ間に、退屈なる物語をせさせ給へ。この現世の人の世の物語は、君が腹立しきまでに堪へ得られぬものならむ。さはれ、憐み給へ、パンを口にして生くるこのみじめなる人間、我を。

いとしきファニーよ。この日記は、プリンツェス・アイリーン號上に於て、筆を染むる心組なりき。されど今日、何とな

く、君に語らまほしき心とはなりぬ。

我が友に會ひ、別れを告げて、シーブライトよりの歸るさ、美しきものを空に見ぬ。穩かなる水の面を走る渡船の上なりき。眼をあぐれば、眞珠の如き、虹の如き、蛋白石の少女の髮と、幼兒の頰とを見出でぬ。雲なりと言ひ給ふや。陽は正に沈む。さなり、沈みつゝあり。將に沈まんとする陽と相對して、死の門のとばりにふさはしき、鈍き鉛色の大いなる幕を見出でぬ。霧の近づくなりと言ひ給ふや。ひたすらに我は見入りぬ。

心安かれ、我が物語は此處に終る。――待たれよ、話變れど、君はブライアン氏を知り給はむ。彼の人は、プリンツェス・アイリーン號にて、一昨夜この地に來りぬ。彼の人を知り給はずや。彼の人は、大統領候補者にして、大雄辯家なり。彼が言說は銀の如く響き、彼が政策も亦然りと、世の人は言ふ。人あつて、數千年の後にこの頁を手にするやも知らず。若し歷史を編む人あらば、ブライアンの名を見出すならむ。その名を如何にあつかふべきや。

如何なれば、君、いとはしげの面持し給ふや。

八月三十一日。 晴。ニューヨーク市。いとしいファニーよ。今日はさして語ることもない。喧噪の街をさまよひ歩いたばかり。二書（バッテン著「英國思想の變遷」及びアダム著「歷史文學の形態」）を求め、日本に送附。

喜び給へ、我が天使、日はうらゝかに晴れ渡り行く。月は次第に圓味を增して行く。君よ、我に笑みを送り給へ、レッド・セエヂ、賜うた折りの笑みをもつて我に笑みを送り給へ。又會ふ日まで。

九日一日。 土曜。いとしいファニー。此國での最後の日が來た。數限りない、甘いそして悲しい思ひ出が胸に迫る。此國が、自己を考へさせ、自由な思索をなさしめた事を何よりも先きに言はねばならない。小兒のやうに自由に生活し、自己の建設、思想の建設等に多くの事を爲し得た。自分に取つてこれ以上難有い事はない。自己の顏が、他人の顏と異なる如くに、一個特異のものとなり得たのだ。人間の一生には何等かの特長がなくてはならない。美しさもあらうし、弱さもあらう。先人の

歩んだ道を、歩一歩、歩く生涯を送る位ゐならば、生きて居ない方が好い。生活ぢやない、死だ。ね、さうでせう、ファニー。

けれどファニー、考へて下さい。一つの事がまだ出來ずに居るのです。行爲とは言はず、思想の獨立を得ようと努めて來た。然し、依然として、因襲・傳統の奴隷である。因襲・傳統を嫌惡し、恐怖する。何故に、――得て彼等に支配されがちだからである。あゝ、思想・行爲等に於て獨立自存となり得た日が來たら、どれ程喜ばしい事であらう。その時、その時こそ、目的は達せられたのだ、そして、狂喜して叫ぶであらう。他に一事、個人的の事だが、大切な、此處に言つておかねばならぬ事がある。始めてお會ひした夜を覺えておゐでゞすか。うら寂しい夜の散歩から歸つて來たあの夜の事を。戸口を入つて戸外の寒さから暖い爐邊に入つた時、あなたは戸をあけて、私を先きに入れて下さつた。それからなんです、ファニー、あなたの僕となつたのは。さうして、心の奧底で「見知らぬ者なる我を、君導き入れ給ひぬ」と叫んだのは。

ファニーよ、物知り人達が何と言ふとも、人心には隔りのあるものではないと、堅く信じ知り得たのです。人心とは、同じで、たゞ一つのものなのだ。人心は、限りなく、凡てに擴がり、凡てに充滿して居る。君も我も、この人心を分ち持つて居る。傳統と肉の衣を脱し去つたならば、さうしたならば、その時、我等は皆一にして、同じである。國民性とは何ぞや、家風とは何ぞや、誤解とは何ぞや、思想の懸隔とは何ぞや。凡てこれらのものは消滅し去つて、我々の魂、我々の性格は、不可分の一體に融合するのである。何時の日にか、眞の愛がその眞價を示し、凡ての人間の思想・行爲の凡ての結果の內の最上のものとなる時が來るといふ望みを抱いても、ファニーよ、あなたは愚かな男だとはお思ひにはなりますまい。この目的を目指して努めなければならないのです。

私はアメリカを、コロンブスの發見した國を愛する。自分に缺けてゐればゐるだけ、アメリカ國民にある博愛・强健・寛大の心には驚歎したのです。この國民が、何時の日にか、舊い傳統の夢から醒めて、世界兄弟への進步の先驅となる、と云ふ望を抱かざるを得ないのです。「時代は展開せねばならぬ」とは、現代の進步的人心の當然の結論である。問題は、如何なる展開の方法を採るかにあつて、何故に展開するかの問題ではない。アメリカをして、その解決の光榮を得しめよ。然して、

その名を史上に留めしめよ。

ファニーよ、昨夜は眠り得なかつた。君を想つて、頻りに眠りを破られた。電車、汽車、馬車、荷車の音を、終夜聞きつゞけてゐた。私は窓から、明滅する電光を眺めてゐた。巨大な都、紐育があれなのだ。喧噪に耳を傾ければ、その裡にさ迷ふ魂の叫びが耳をついて來るのである。

今朝、九時、プリンツェス・アイリーン號に乘船。穩やかな天氣、そよとの風もない。船緣は、秋の陽の金光を浴びて居た。一等船室なのは、御存知の筈だ。この旅が、贅澤生活の最後なのだ。一等船客の氣分に觸れる爲めに、九十弗拂つた。

船が波止場を離れる時、多くの人々が淚の跡をにじませてゐた。いとしいファニー、君と共にある身の幸ひを思ひ、多くの人々を哀れんだ事であつた。

ファニーよ、今日一番嬉しかつた事を告げようか。アグネスから手紙、クロウェルから葉書を貰つた事さ。この瞬間に、自分を忘れぬ人々が少なくも數人居るのだ。神よ、彼等に惠を垂れ給へ。アグネスと別れたのは僅かに二箇月前の事だ。どこと取り立てゝ言ふ程の所のない人だ。だが、私はすつかり好きになつた。ファニー、きつとあの人は、私の死んだ妹かもしれない。心から親切にしてあげよう、あの人の幸ひを心から祈る。けれど、ファニー、君は我が魂、我が心、人生の泉なのだ。君なしには、生きて居られないのだ。私をすてゝはいけない、ファニーよ。

船のめぐりを飛び廻る海鳥の姿もない、海上遙かに來てしまつた。空は、この上もなく澄んでゐる。

エマソンの「英國氣質」を大變面白く讀んでゐる。九つになる、賢い、いたづらな、目から鼻に抜けさうな孃ちやんとお友達になつた。その他に老幼の男性。女性は皆無。

九月二日。晴天。大洋上に於て。

昨、十一時より、今日十二時までに、三二二浬。攝氏六七度。

船は、おだやかな水の面を分け進んでゐる。昔からの話でもあらうが、海は何んと女性の姿によく似て居る事だらう。靜

かな日の水には、恍惚たらしめる愛撫がある。さゞ波は笑窪。深さと靜けさを物語る深碧が船を抱いて、巴里娘が、戀の酒盃を飲み乾した靑年を連れ去る樣に、運んで行く。ぞつとする程魅力がある。嫌はうが、棄て去る事は出來ない。人を思ひのまゝに醉もあらゝげずに、だが、一度笑みかけられたら生命にもかゝはるあの笑みで、動かすのだ。あの深い、――底のない深さをもつた笑みで。

乘り合せて居た二人の尼の姿に、眼をひかれた。一人は老いて肥え、一人は若く瘦せてゐる。純黑の衣が二人共よく似合つて居る。私は、尼を見る度に何時でも、特に心をひかれる。淸きにしろ、汚れたものであつたにせよ、彼女等の過去が、私の想像に訴へて來る。人は僧院の生活、特に尼院の生活は、けだかさに心うたれるものがあると言ふ。無言の誡が、そこを統べ治めて居る。けれどこの二人の尼の顏を見て居ると、そんな話は信じられない。御覧、ファニー、何んて身を委せ切つた面持をして居る事だらう。人眼をひくのはあの人達の面持なので、もつて生れた顏付きではないのだ。あの人達の唯一つの望みは處女マリアのやうになりたい事であらう。あの人達の面持で、その望みが分るやうな氣がする。いとしいファニー、あの人達の面持から、あなたのいとしい面影がとらへられるから、あの人達をぢつと見つめて居たいのである。

多くの人に會ひ、多くの事を語つたが、我がいとしき思ひ出なる君に捧げる頁を占めるだけの値はない。

常に倍加する興味をもつて、エマソンの「英國氣質」を讀みつゞける。彼の他の眞面目な論說に比して決して深いものではないが、この書では、樂々と自由に事物を把握して居る。文體も亦飾りけなく、なめらかだが、決して單調に失する事がない。生のまゝであるのは、人でも物でも、常に人を魅するのは、大變面白い事である。

今頃森本は何をして居るか知らん。ファニー、あなたは、彼に同情なさいましたつけ。私は、あの彼に置いて行かれた娘ファニーを可哀相に思ふ。私は、時とすると、祈りの力さへも疑ふのだけれど、私の力が何の役にも立たなくなつた時、私の胸は溢れて、天なる我等の父につぶやくのです。これが祈りなのか知らん。さうとすれば、幸ひだが。

私の友達が、小さくてもよいから、純な、固い、透明な、水晶の樣になりたいものだと言つた事がある。洋上の生活は、

人間をそんな風にしてしまふ。

お休み、ファニー！

九月三日。 月曜。朝晴れ、夕方曇り、風あり。洋上、三五七浬。攝氏七五度。

船は、はてしなく進む。午前中、二三の靑年と後甲板で遊び暮す。我々の話は、ファニーよ、あなたに欠伸を催させる程、平々凡々なものでした。一番面白かつたのは、廣い知識と交際、エマソン、ローウェル、パァカー、ロングフェロー等と交りのある老僧との話でした。彼の實生活の如何は知らないが、彼の宗教觀は甚だ立派なものである。私は大好きになつた。

七百名の伊太利の勞働者が、穩かな船路を樂しんで居る下級船室を見るのが好きだ。なつかしい思ひ出の未だに殘る彼等の故郷を見に、伊太利に歸れるだけの金を得たのださうだ。大變愉快さうだ。ぎごちない顏に、どことなく子供らしい無邪氣な表情が見える。これ程の單純さ。單純なものは、美の一要素なのだ。フェルトの帽子を被つた靑年が、風笛を奏ではじめた。圓く環を描いて、人々が彼の周圍に集つた。その圓の中に二人の男が入つて、大變原始的な妙なダンスをはじめた。皆の顏が持前の晴れやかな笑みに輝き、笑聲と拍子をとる音とが入り混つて居た。どうして一等船客の人達よりも幸福なのだらう。一等船客の一人が、彼等は單純で安價に滿足するから、あれ程人生が樂しめるのだと、輕蔑して言つた。單純さ、おとなしい心をもつて居る事が、罪惡だらうか。一等船客は、甚だ奇妙な論理を弄して居る。

船中には、明瞭に三つの社會がある。相互にくつきりと區別がある。一等船客は貴族だ。音樂、豐滿な食事、くだらぬ饒舌が彼等の仕事だ。もし、何處に行くのか、どの位ゐ滯在するのかと訊ねたら、自分は海上に今居るのさと答へるだらう。彼等の旅に、これと言つて目當はないのだ。行きたい處へ行くのだ。船の動搖の一番少ない中間を、彼等は占めてゐる。

それから二等船客。船の後方に居る。船の噸數から速度まで、引いては、船の到着の時間まで知つて居る程、それほど事細かな旅の計畫をたてゝ居る人達だ。無駄な話はせず、實利實益に滿ちた話をする。自由に振舞つて居る。その人達の望みは、何時か一等船客になる事にある。

最後に三等船客。彼等は種々雜多だ。彼等は規律が大嫌ひ、規律だてられゝば、機械的に動かされることを知つて居るから。そして機械的に動かされては、本能を自由に揮ふ餘地が少しもないのを知つて居るから。彼等は現在を享樂して居る。明日の日に心わづらふ事をしない。野の花のやうだ。何時かは、遲かれ早かれ、死の幕に被はれるのを知つて居る。だから、自然のまゝに從ふのだ。何と氣樂な自然さだらう。

そして、不思議な事には、これ等の三つの階級は、船賃として拂つた金額で、はつきり區別されて居るのだ。

夜になつたら、海は荒れ初めた。雄々しい姿を表はして來た。浪と雲の不思議な姿を見つめながら、十一時まで起きて居た。いとしい、こよなくいとしいファニー、戀する君よ!

九月四日。 火曜。曇り。洋上、三八四浬。攝氏七八度。

目がさめたら頭痛がする。重くるしい濕氣だ。船はメキシコ灣流の中に入つたのだ。

ファニー、あなたと、あの——の路を一緒にさ迷つた十一月の星月夜だつた。あなたが握る强さが、私の手にぎゆつ、ぎゆつと感じて來た。あなたの時折りの眼眸に、御空の輝きが閃いてゐた。冬空の寒さが、二人の心の溫かさを物語つてくれた。あの夜からあなたは私を愛して下さつた。それから、愛するファニーよ、二人の情愛は、時の進むにつれて濃くなつて行つた。君は心深くその愛を祕め、私も亦同じ樣に祕しかくしてゐた。二人の間に何が起きたかは、知る人もない。お別れする時、ひと知れずひそかにあなたが淚を流されたのは、たゞふとした出來事だつたのか知らん。否、淚は、かりそめに流れるものではない。世は如何になるとも、君我と共に在り。人の世の歷史の中で、最大の愛を示した戀人に會はう。より好く、より賢くはなくとも、彼にまさつて深く愛し得る事を見せるであらう。おゝ神よ。心强からしめよ、戀の焰、我が全身を燒きつくさんとすれば。戀して止まず。彼女を思へば、叫ばざるを得ず。この傷を癒すは誰。年一年、戀にこがれて、さうだ、戀ひこがれて死ぬまで、思ひは深く〳〵胸を嚙む。

何だ! 又くだらない事を。言葉とは、戀の無益の使ひである事は知つてゐる。ファニー、もう二度と君の事は口にすまいよ。

昨日、海が荒れはじめたと言つた。今日は尙ほひどい。海は衣を脫ぎ棄てゝ、見よ、見よ、海は異つた美を表はし始めた。然し、彼女の怒は、尙ほ足らぬ。海のあらはな雄大さを語るのには、荒れ狂ふ他日を待たねばならぬ。

みじめなのは、御覽、下級船客だ。浪の飛沫が全甲板を被ひ、そのしぶきを浴びて人々はずぶ濡れだ。その濡れた甲板にひどく船暈してゐる婦人が臥つてゐる。多分その婦人の夫だらう、その横でやさしく看護をして居る男がある。この有樣が眼についたので、時々その場をのぞいて見た。その度に、男は女の側に居た。ファニー、あなたがこの場に居たら、卽座にその場に行つて、鳩のやうな眼を、怒りの淚に濡しながら、事務員に、一等船室の上等のところへ、二人を伴れて行くやうに言ひつけることでせう。

物わびしい夜だ。心悲しく、心にしつかと刻まれて居るいくつかの名を想ひ起した。丁度指の數ほどある！　これが、自分の地上の生活の泉なのだ。私は只、その人々の爲めだけに生きて居るのだ。

私の性格を恥ぢる。私は弱い。ファニーよ、憐れんでくれ。

九月五日。水曜。稍ゝ曇り。洋上、三七二浬。攝氏七五度。

今日は多分、若い尼さん達の眼が、見られるであらう。常に純でしとやかなその面持は、私の心を亂して羞恥を覺えさせる。けれど、彼女だけなのだ、私の心を牽くのは。

よく觀察すればするほど、三等船客の善良さ寬大さをより深く信じるやうになる。實に心にくい人々だ。見るからに全くの伊太利人種ではない栗色の髮、黃色の顏のうら若い一婦人が、他の船客に交つて居るのを見つけた。三等船客が堪へ忍ばねばならないやうなつらい境遇に平然として居られる程、いかついどの顏が彼女を魅する力があつたのだらう。その婦人の生涯を面白く空想で描いて見た。けれど、ファニー、書き送るには餘りに話が長過ぎる。

エマソンの「英國氣質」讀了。興味と益する所が甚だあるものと思ふ。この書中の彼の文體は、完全、中庸、德富氏の傑作を想はしめるものがある。然しこの種の書物を執筆して、彼の全時間を消費する事は、彼に取つて爲す値ある事か否か疑問

である。かゝる仕事は爲すべきでなかつたと愚考する。讀了後に感じた今一つの事は、東洋・西洋の賢人と呼ばれる人の間に存する差異である。コンコルドの聖人エマソンは、健全なる常識を多分に持ち、一方東洋の賢人は、傲慢奇嬌の天賦を持つて居らねばならぬのだ！　爪を生えるまゝにのばして、無爲の生活を誇る程、無法な事はないと、クロウェル氏は言つた。公平な言葉だ。東洋の賢者とは、この奇嬌な習慣の副産物である、甚だ嫌惡すべきものだ。

森本、アグネス、クロウェル氏に發信。昨夜は空氣がどんよりして居たので、私の眠りも夢が多かつた。森本の夢を見た、そして君、いとしいファニーの夢を。

九月六日。晴。洋上三五〇浬。攝氏七六度。

天氣快晴に赴く。ともあれ、浪の壯大な眺めは得られない。

今日は、取り立てゝ言ふ程の事もない。船中の生活は、段々單調になつて行く。船客達は、チエス、トランプ等をやりはじめ、大半の人達が生のまゝの性格を見せはじめた。夜、或る婦人達の振舞ひが、「ゲイシヤ」を想ひ出さした。ちよつと見知り越しなだけの紳士の首にからみつきながら、「我君を戀す」と云ふ繰り返しのある歌を歌つて、「人間性自然の歌」だと言つてゐる。人間性だつて！

私は、W・ペンの「無位無官」を讀みはじめた。旅中の讀み物には、少々ぎこちないものだ。然し、私の少々だらけた氣分に、訓戒を與へる十分な眞劍味がある。異敎的、不信論的、不可知的な論であらうとも、眞摯な論は、誠實な行爲同樣尊いものである。多分明日の朝は、歐洲大陸の姿を、はじめて見得る事だらう。

お休み、ファニー、可愛い鳩さん。

九月七日。金曜。快晴。洋上、三五五浬。攝氏七六度。

起きて、甲板に出て見たら、眼前に大きな島影が見えた。人々は甲板に出て、まるで紐育の眺めに眼を瞬つて居る魚のやうに、その島影に見入つて居た。その島は、Fayal Pico と呼ばれ、ポルトガル領のアゾレス群島の西端に位ゐするものであ

る。間もなく、遙か東方に、雪白の雲の環を雄大に被つた一死火山が、突如として、海拔七千呎のいたゞきを現はした。直ちに、富士山を想起した。子供の頃に人の得た印象は、不可思議な、强大なものである。凡ての聯想は幼時に歸つて行き、そこで適當の對象を見出すものである。

海圖で見ると、群島は五つの島から出來て居る。卽ち Fayal Pico 島(此處に我々の見た大火山がある)、São Jorge Graciosa, Terceira, São Miguel, Santa Maria の諸島である。São Miguel 島は、人口一萬を越え、群島第一の大島と言はれて居る。土地は決して肥沃ではなく、土地の表面の肥沃な土壤の流出するのを防ぐ爲めに、傾斜した壁をつくらねばならないのだ。私の一瞥した所から見ると、主なる農產物は、大麥、小麥、果樹、特にオレンヂ等らしい。São Jorge 島と Pico 島との間を通過する時、São Jorge 島の間近を通つたので、その古風な小ぎれいな町を見る事が出來た。凡ての建物は、著しくスペイン風である。白壁、赤瓦の建物は、赤土のところ〴〵が深綠の草、樹で被はれて居るその周圍と、大變氣持のよい對象をなしてゐる。けれど、ファニー、此處で一生涯を送る氣持になれますか。きつと嫌だと仰しやるでせう。若し私と一緒ならばいゝけれどゝ仰しやるかも知れない。けれど、どうして、この美しい寂しい島よりも、ずつと便利な騷がしい所の方がお好きなんですか。あなたが、世間的な性質だからか知らん。と言ふのは、人々の間やあなたに起つた出來事を、知り知らせ合つて、慰められるからか知らん。それとも、あなたに高いにしろ低いにしろ何か理想があつて、同胞に弘めたい、それには、小さい島に居てはその使命を果すのに不便だからなのか知らん。此處に障害があるのだ！　男性は男性であり、人間は人間でしか有り得ない。我々は、我々の欲する所に從ふのだ。此處に我々の弱さがある。けれどこの弱さあるが故に、强大になり得るのだ。

午後、人界を離れた心にくい諸島の影を見失つた。そして船は再び涯て知らぬ洋上に出た。あの子供達は、すつかりあの若い尼さんと仲好くなつた。黑衣の天使のやうな若い尼さんが赤いバラのやうな頰をした二人の子供を兩手につれて居るのは本當に美しい繪を見るやうだ。淚の出る程、感激した。

月は次第にかけて行く。今夜は、九時半頃に昇つた。月の黃金色の反影が、洋上に素晴しく散り敷いた。私は眺めつゞけ

て居た。私の心の神殿は、あなたの思ひに滿たされた。

九月八日。快晴。洋上三五三浬。攝氏七七度。

船は、依然として洋上を走る。リトンの「ポンペイ最後の日」を讀みはじめた。ポンペイの生活を描いた有名な小說で、今日まで手にしなかつたものだ。最初の頁から、著しく、著者の學識を誇示して描かれて居る。英國紳士の誇りであり缺く可からざる肩書である人間智が、飾つた調子で表はれて居る。彼の博識のおかげで、一度は榮えたその都の內的外的の生活に就いて、多分に知る事が出來る。その場所に自分が行かうとして居るのだと思ふと、興味は亦一段と增して來る。

午後は子供達と、大半遊び暮した。夜は再び讀書。

九月九日。快晴。洋上三四三浬。攝氏七三度。

風が變つて、逆風になつた。それで船の進みは遲々としてゐる。今朝、座談室で祈禱會があつたので出席した。純然たる貴族的の集會だつた。貴族と云ふものを、アメリカ流に富の高さできめるとすれば。嫌な氣持にさせられた。この時ほど、宗教の傳統的形式を、敏く感じた事はない。

午前、午後、「ポンペイ最後の日」を讀む。夜は、船客の中の一靑年と、喫煙室で談笑。實際、かうした「談笑」には、取り柄は少ないものだが、併し、これが社交の重な要素なのだ。卓上で談話の人並すぐれて巧みな人は、仲間からもてはやされる。談笑にふけつた後では、私はきつと、心中に深い後悔を覺えて、茫然とするのである。

いとしいファニー、あなたの魅力は、しつかり私をとらへて居る。眼のあたりにせよ、想像にせよ、純な心の優しい處女を見る度に、直ぐに君を想起する。涙が兩眼を傳ふ、――涙、その涙が私の心を淸め、私の傷を癒してくれる。君の上に惠みあれ！　君の眼に、人の世の暗黑な一面を見せ給ふな。君が汚れに染むからではない、君の心は、かゝる恐ろしきものを目擊する衝動を忍ぶには餘りにも氣高いからだ。

夜がふける。私は身を橫たへよう。そして君が夢に出て、我をなぐさめて下さるだらう。

九月十日。月曜。快晴。半日洋上。半日、ジブラルタル。洋上、三五二浬。攝氏七五度。

歐洲大陸を見得るのみならず、午後には足をふみ入れるのだと思ふと、何だか愉快な不安を感じる。何にもしなかつたから、ファニー、午後の四時に上陸したジブラルタルに就てゞも、澤山お話をしませう。

午前十一時頃、スペイン沿岸が見える地點まで來た。多くの地理學者が書いて居るやうに、スペイン半島は、その氣候、地質、荒漠たる地味と云ふ點で、實質上アフリカ大陸に屬して居る。全く沿岸は荒涼たるもので、所々に森と草原があつて、その附近に白壁、赤瓦の古風な小村が在る。あの有名な惡魔の塔（デビルス・タワー）は、三哩に亙つて立ち列んで居る。間もなくアフリカ沿岸が、薄い潮霧の幕に被はれて、一段と神祕に、一段と高く峨々たる姿を現はして來た。これで、ファニー、私は四大陸を見たのだ――アジア、アメリカ、ヨーロッパと、そしてアフリカを。

船は穩かに歩みを進めて、勇將ネルソンが、旗下の艦隊に、「英國は、諸君が義務を果さんことを豫期す」と信號した不滅の物語を語る、トラファルガル灣口に入つた。同船の一英人が、私の側に來て、殆んど崇敬せんばかりの態度で、灣を指さして、海戰の概略を物語つてくれた。ファニー、私は戰爭には興味はない。けれど、ネルソンの全く沒自我の生涯を想起して、私は知らず識らず帽を脫して、時代精神を完全に具現した雄々しい英雄に、心からなる敬意を拂つた。

船は、この戰の跡を後にして、タリファ岬（Cape Tarifa）を横切つた。このタリファと云ふ名から "Tariff"（譯者註―關稅）と云ふ名詞が派生したのである。海に突出した小地域で、四五百位ゐの住民を有する小村がある。この繪のやうな場所でバイロンの「コルセール」（"The Corsair"）の頁から拔け出して來たやうな勇猛果敢な海賊の一隊が、この地を横切る船を待つて居て、專制君主のやうな權力で貢物を强奪した樣を想像しても見よ。年老いた人の世の歷史が、未だ黃色に渦卷く毛髮を貯へてゐた靑春の頃を想起せよ。あの果敢な、悔ゆる事を知らぬ古代の海國民、フェニキア人は、勇しくもこの海峽を越えて船を進め、ブリトンの銅を、北方の琥珀を持ち歸つたのだ。水の一滴にもその歷史がある。

太古を想ひめぐらしてゐると、突如、「ジブラルタルだ」と言ふ叫びを耳にして、幻想からあからさまな現實に目醒めた。

見よ、船の先きに、あの世界に名高い岩――驚かされて蓬々たる巨頭を、雄然と半ばもたげたライオンのやうな岩が立つて居る。英國民の强大な齒の一つなのだ。時到れば、歐洲の咽喉を嚙むのである。歐洲はそれあるが爲めに震駭する、さうしてその時我々はこの呪はれた地を責めるのである。

三時頃船は水上に鋭いカーヴを描いて、灣の眞中に錨をおろした。夏の陽は、その燦然たる光りを到る處に投げて居る。靑い地中海の水と空の上にも、半熱帶性植物の點々として生えてゐる黃色味がゝつた白い石灰岩の上にも。

若いパ大學の藥學生徒アウターブリッヂ氏と、少年ウェラー君と私とが一隊をなして四時頃に上陸した。波止場に、種々雜多な民族の居るのには驚いた。我々は馬車をやとつた、そして果物市場を通過した。そこには、ムアー人やアラビヤ人が、あの非常に美々しい衣服をまとつて集つて居た。英國步哨が嚴重に警戒してゐる門を通つて、大通りに出た。通りは狹く、曲折して居て、大體が急傾斜をなしてゐる。どの家にも狹い入口があつて、建物にかこまれた廣場に通じて居る。壁は白堊で、赤い丘と淡綠の窓掛けと云ふ氣持のよい色調をなして居るのが、屢ゝ見受けられる。驢馬が主な交通機關である。可成りよく荷を積んで居た。そして鞭打つ音が、方々から聞えて來た。住民は、英人、スペイン人、ムアー人、アラビヤ人、猶太人及びその他の人種である。豐な者は飾りつきの扇を持ち、貧しい者はけば〳〵しい色のショールを掛けたスペイン女、ステッキを手に、帽子を頭のはじにのせた英國兵、猫脊の黑衣をまとつた猶太の法律博士、派手な着物で傲然と異樣な調子で濶步するムアーの商人などを見かけるでせう。ねえ、ファニー、私はこれ程面白い光景を見た事はないんです。

我々は砲臺に登つて行つて、五百呎の高所から數多くの大砲がスペイン國境に向つて突出してゐる隱現砲臺を見た。もつと高所の砲臺は、遙かに近代的な、遙かに精巧な砲を備へ付けて居ると言はれて居るが、特別許可を得ないでは登ることは禁じられて居る。兵士達は毎日、三ガロンの雨水と十五ガロンの海水で生きて居る。雨水を集める方法は、立派なものである。百エーカーの嶮しい土地が、完全にセメントで堅めてある。二個所に同樣の設備がしてある。岩石地の長さが、二哩半と言はれ、三個のトンネルで通じて居る。各個所の設備は、仕事の偉大さと永久性を示して居る。

それから我々は、岩石地とスペイン國土とを區別して居る、中立地帶へ車を驅つた。岩石は、スペインの國土に砂上の狹い地帶で續いてゐる。中立地帶の幅は、六千ヤードと言はれ、兩國側に番兵所が立つて居る。スペイン側では日中は步哨をおかないのに、英國側では、重々しく武裝した步哨が、傲然と國境を巡囘して居る。

所で、ファニー、私は種々雜多な記述をして來た。けれど、もう二つの事を、あなたに話したい――それは、花と子供達。花は美しく、香り高く、子供達は暗い顏付で眼が大きい。兩方ともすぐに好きになつた。

七時過ぎに船に歸つた。八時頃船は港を去つた。船は地中海の中部に進み入り、私は夢の國へ行くのだ。ファニー、自分にもどうしたわけか解らないが、今夜はひどく氣がふさぐ。

上陸する人達が多かつた。

九月十一日。火曜。快晴。二三二浬。攝氏七四度。

再び、單調な洋上の航海。今日は、ファニー、大して話す事もない。たゞひどく憂鬱なだけだ。顏見知りの人達皆を避けて、中甲板を獨り散步した。ふと一羽の小鳥が、ねぐらから迷ひ出しでもしたのだらう、陸地を離れて飛んで來て、船上に疲れた羽を休めようとしても、船客達の歡聲にさまたげられて、可哀相にそれが出來ずに居るのを見かけた。驚かされては、疲れ切つた羽を二倍の努力で羽搏きながら、船から飛んで行く。けれど、嗚呼、力は盡き、陸影は見えず、たゞこの無慈悲な船に、休み場所を求めて歸つて來る外なかつた。

夜、ヘイフォード氏と、宗教に就いて長い事話した。彼はユニテリアン敎徒だ。彼の意見に、殆ど大部分贊成し得た。然し、彼の宗敎に對する態度が、他人にとつて滿足なものであらうか。人の宗敎的自然の欲求が、ユニテリアン敎の如き敎義で充たされ得ようか。カソリックとか所謂正敎的キリスト敎は、過去の事である。傳統と儀禮から解放された眞の宗敎的欲求は、一度、セント・アウガステンやルーテルによつて叫ばれた信仰には、決して安心立命し得ないのだ。それ等の敎義は、一度敎義として信服してみると、笑止にも現代の思潮とは餘りに相反するを見る。然らば、傳統の束縛を破壞した精神が、如何して、

船暈の爲めに何一つしなかつた。夕方海は再び穩かになつて、私の苦痛もすつかり去つたのだけれど。

明日はナポリに着くのだ、そして、其處で壬生馬に會へるのだ！

九月十三日。木曜。半ば曇り。洋上三四六浬。五八浬でナポリ港に着く。

非常な期待をもつて目覺めた。けれど、陸は遙かに遠く、船は涯しない洋上を進んでゐた。

十一時頃、陸影を認める。晝食後になつて明瞭になり、所々に古城、人里の散在する繪のやうな陸が表はれた。それから、靜かに眠るヴェスビオが舳に、それから一對の門石のやうにナポリの灣口を守つてゐるカプリ、イスキアの二島が、現はれて來た。それから船が、左の方に進路を變へた時、あの有名な伊太利の港が見得るやうになつた。

〔以下邦文〕古劇場のやうな形に段をなして立てられたネープルスの町に船が圍まれると、小さな艀が樂人、潛水者、果物商を乘せて近づいて來る。其中に壬生馬を見附けた。

稅關も町も唯喧ましい厭な心地で、馬車で Via Paldenope と云ふ海沿ひの美しい街道に立てられた Pension Francaise と云ふのに着いた。早速森本、Agnes 其他の人々に手紙を書いて居る中に、壬生馬がトランクの處分をして歸つて來た。母上、愛子の寫眞及び手紙を見た。

窓から見ると靑い海が見えて、左の方に古い Castello dell' Ovo と云ふ城が海の中に立つて居る。それを越えて Vesvio が見える。壬生馬の手紙には「ヴェスビオの火流るゝ」とあつたが、此頃はよく眠つて居るので煙すら昇らない。

夕食後一寸町を散歩した。餘り遲くなると危險だと壬生馬が云ふから歸つて寢に就いた。

九月十四日。金曜。晴。石疊の上をガラ〳〵と見物人を乘せた馬車が走るので眼が覺めた。八時半で、壬生馬は既に起きて居た。樂なやうで居て船旅は疲れる。陸に上ると自分に歸るまでには暇が要る。

昨夜購うた案內記で順を立てゝ、朝、海沿ひの公街を東に Castel dell' Ovo に出で、Piazzo Reale と Piazza Plebiscito を見

た。離宮は文藝復興のごて／＼しない形で惡くはない。歴代の宮主が門番のやうにずらりと立ち列んで居る。

Piazza Plebiscito から S. Francesco da Paola を見たのもいゝ。低い Dome の石の靑いずつしりした寺の兩側に、廻廊が S. Pietro の式で出來て居る。それから町を少し歩いて今日は家に歸つた。

一體 Naples と云ふ町は大變歴史の古い町で、希臘が時の文明を支配して伊太利の所在に植民市を置いた頃出來た一つの町で、初めは二邑からなつて居つた。Palaepolis と Neapolis と云つたが、年の移るまゝに Neapolis が遂に市全體の名になつたと云ふ事である。灣の形が美しくて水の色が殊に靑い。野には葡萄と無花果と橄欖とが豐かに實る。希臘人が此處に來ると故鄕の思ひをなした事であらう。それから羅馬國民の威勢が附いて來て、奢侈が社會生存の一必要物のやうに認められる時代が來ると、Naples は再び立つて其欲望を滿足せしむる市街となつた。希臘のとは違つて成り上りと云ふやうな羅馬の文明が、此市を如何程不潔にしたかは Petronius が「墮落せる行動の市」と名を附けたので判る。然し流石に Naples は Naples だ。一面此惡名を受けながら他面には「ほゝゑめる市」、「Idle and Learned」と云ふやうな名を持つて居たとの事である。

確か不品行病と云ふ病氣が歐洲に蔓延して東洋にまで及んだのも、其起原は此市からだと覺えて居るが。

風俗が大變降り坂になつてゐるやうだ。市全體が雜然として狂氣のやうに騷いで居る。こんな所で大仕掛の商業取引が出來るものであらうか。New York の喧しいのとは精神が違ふ。まあ道を歩くと馬車の御者がパチンと鞭を鳴らして命令的に客を呼ぶ。靴磨きは路傍で破れさうに靴臺を敲きながら怒つたやうに人を呼ぶ。四辻には必ず人が四五人立つて居て芝居もどきに大柄な手眞似で立話をして居る。乞食が袖を引かん許りに逼つて來る。傍を通る兵士の佩劍が危ない。割合に高く建てゝある家々は頭から砂塵を被つて窓や看板や壁に寄せて乾してある白い物がゲラ／＼と無意味に笑つて居る。處狹い迄多い寺院は一樣に黑ずんで、物やかましい食客がふざけ散らす家人を尻眼にかけた體裁だ。それから泥棒程の面相をした人が皆僧衣を纏つて蚤のやうに蠢いて居る。賣淫婦が白々しい顏で歩いて居る。馬車が塵と動搖で顰めつ面をした見物人を乘せて縦横に石疊の上を走る。正直で愚かし相な田舍の娘が、乳を賣るので山羊の群を連れて歩くのを見てほつと息をつき、人のやゝ

少い海岸を歩いて微かながら潮の香を嗅ぐ時、ほつと息をつく位ゐのものだ。僕は Chicago に住まふともこんな市には住み度くない。「死の舞踏」と云ふ畫がよくあるが、此市をそれに比べて見るのは餘りに思ひ過ぎた沙汰か知らん。

午後は少し風のある日だつたが、麗しい秋日和であつた。San Martino と云ふのを訪はうと電車に乘つた。

船の上で見ると、白い墓のやうに靑い山を染め拔いた一帶の町から飛び離れて、岡の上に一つ黑い重い建物が空の新しい朝の色に際立つてゐるのを人に問うたら、よくは知らないが多分は僧庵だらうと云つた。嚴かな感じを起して暫く見やつたのが今から思へば此 San Martino だ。

岡を電車で登りつめて少し歩くと、思ふ所に出た。寒い程古い壁が高く聳えて居る。それを潛ると左に御寺があつて、突き當りが Museo になつて居る。四時迄と云ふに既に三時二十分程である。室の中は此所彼所に薄暗が出來て居る。兎に角大方はさまようたが固より心を籠めて見る事は出來なかつた。唯一の此日僕に忘れられない事は、初めて古代の fresco と云ふものゝ尊さを眼のあたり見た事だ。も少し立派な眼識を持つて居たならば、其時の感じは更に深いものであつたらう。然し僕の受けたのも僕丈けには十分のものであつた。いゝものだと心から滿足した。

僧庵の內庭も今からでも直ぐ眼前にはつきり浮ぶ。丁度日本の古い寺の庭を見るやうで、折柄の秋草が咲き亂れて居る。去年自然が落した所に種子は埋つて、其儘今年の花となつた。

閉された門を態々開いてもらつて院を出ると夕方の光が Naples の灣に照して居た。高い處から見ると可憐な市だ。坊主のやうな松の樹や、仙者のやうな橄欖や、少女のやうな葡萄や、豫言者のやうなサイプラスが處まんだらに市を彩つて意味のない市のさゝやきがヴェスビヤスの方に流れる。

九月十五日。土曜。晴。今朝は有名な National Museum を見に行つた。大理石の伏獅子を左に見て場內に入ると、羅馬の捕虜となつた蠻酋長の立像がある。其手と足の具合を自分で擬ねて見る程熱心に眺めて、上作と斷定を下したが、此位ゐの上作は此 Museum には澤山有り過ぎるから急がねばならぬ。〔以下日記中絕〕

十月一日。〔此日壬生馬〕月曜。晴。今朝は月が代つたと云ふに、暢氣さうに九時一寸前まで眠つた。松尾(**Mazzoni**)がカラブリヤに今夕立つと云うて來て、一時は中々の混雜でやつと家を出た。毎日良い天氣だ。コルソも Via Babuina も馬鹿な通りだ。捜すと云ふのに理髮屋が一軒もない。月始めには十七日を極めこむのかしらん。ナポリ以來の垢を Aqua Marcia で濯いだ後でBarsini のガレリを見に行く。ムリロの母子と小さなバンダイクのキリストの死、ルウベンスの肖像等があつた。古いものでは、F. Angelico の最終の裁判、昇天などが混つてあつた。有名な銅板畫は整理中で見られなかつたのは殘念。古い美術史は個人的でない、單調になり易い。ポンペイ流とローマ流とルウブル流とを見たら、民族的美術が個人性に移る趣が面白い事であらう。西洋人に日本畫の單調が氣にならない程に、日本人には宗教畫の千篇一律が氣にならぬものと思はれる。Monte Gianicolo と Villa Doria Pantilj に秋の夕日を樂しむ。

十月二日。火曜。晴。日記を壬生馬と交代でつけようと云ひながら、今日迄延ばしてしまつた。既往は追はず、今日から始める。

昨夕、莊司といふ海軍の人によばれてスキヤキの馳走になつた後、Colosseum で十四夜の月を見たから寢坊をした。パンと珈琲の朝食を喰ひ喰ひ繪端書を二人で三枚書いた。それから歩いて Castelo Santa Angelo に行つた。Tiber の河添ひで、石で出來た古風の橋のとつゝきに黑く立つて居る。

橋欄の上一列の大理石像あり。道を越えて門を入る。人未だ到らず。守衞と兵卒と相徘徊す。Beatrice Cenci, Geordano Bruno 等の牢獄あり。Bruno の獄、狹隘、膝を容るゝに過ぎず。食は石室の一角なる一孔より投入せられたりと傳ふ。「我を死刑に處せんとする卿等は、我が感ずるよりも深き恐怖もて宣告の文を讀み給ふなる可し」と云ひたる Bruno は、此處に幽囚の日を送れるなるか。此石室に舊骸失せて新想起りしなるか。大なる思潮の轉向は一個の史詩なるかな。

此城は初め Hadorian 帝の墳墓なりしを、後代歷代の法王が守兵を置きて城壘となせるなり。ラファエル畫派の人、室內の裝飾をなせりと傳ふ。法王が聖眠せる一室の壁には Psyche と Cupid が傳記の華々しきが、華々しく描きなされたり。Romans

が描きたる壁畫の Pompeii 式なるは重みありてうれし。

去りて Vatican 宮に Raphael's Stanze を見る。Stanza della Signatura, Stanza d'Eliodoro, Stanza dell' Incendio 及び Sala di Constantino の四閣より成る。見たる所は僅かに第一者と第三者なりき。殊に第一者は各壁の色彩と形體と及び其凡ての調和、「アゼンの學派」の典雅、「詩」(Paruassus) の神韻、Disputa の莊嚴、Prudence, Fortitude Temperance の均整。完作とは是れを云ふにや。觀者をして安々としたる豐かなる心を起さしむ。Raphael を見る毎に余の起す不可思議なる精神的作用は、深甚なる安靜の思ひなり。家に歸りて後、暫時午睡。此處彼處に壬生馬と端書を出す。

〔以下三行壬生馬〕月、十五夜。夕食後散歩。St. Augustine の事など語り合ふ。月が日傘をさして居る。圓月は朧ろげにかすんで、夜の氣が冷々とする。高い家の間を唄ふ美しい聲の人がある。

新聞に八十三度と書いてあつた。一番町の櫻の蟲葉も悉く落ちて了ふ頃だが、プラタノは未だ命がある。

十月三日。水曜。晴。朝 Museo Nationale に行つた。崖が崩れたやうにガラリとした古い建築の中にある所のものこれなり。廣場の噴水に對して目覺むる計りの對照なり。Marble statue of kneeling Youth (頭と手がない。色が綺麗な) Constanzi 劇場の壁畫の凡て、殊に第八室の出口なる女像(横向きて椅子にかゝれる) Head of sleeping Erinys (Medusa Ludovisi と稱せらるゝもの)、Juno Ludovisi (は Goethe が no word can give any idea of it ; it is like a poem of Homer" と云へるものゝ出)、其他彫刻の數々厭かざるもの多し。第八室(Museo Bovcampazni) なる Satyr pouring Wine の Satyr が足下に口開きたる虎は、バビロン、アッシリヤの浮彫りを思はしめて*

*形體更に刻精。Barbizon 派の彫刻家某(名は忘れたり、Barbizon 派と云はんもいかゞ) が力と生命とある刀鑿の規範は、此あたりより來れるにや。

Museo 內の廣庭、Michael Angelo が設計に成れりと傳ふれども其特色は認め難し。中央に高々と聳えたる cyplus も此天才が植ゑたるなりと傳へらるれど、此人はかくの如き位置にかくの如く高く育つ樹

を覗きたりとは思はれず。されども庭は荒れたり。薔薇、野菊、萩、芙蓉などの亂れ咲きたる哀れさよ。廊欄に身を倚せて靜かに立てば、光強く熱弱き日の目豐かなるが、更に荒凉の感を加ふ。

十二日公使館にて日下部氏の馳走となる。我等の外に莊司、今井夫妻、藤田の四氏あり。夕方おはぎ。壬生馬の畫を見る。

十月四日。 木曜。少々曇。夕晴。昨日の御馳走に二人ともやられて腹下しをした。これまで時々大食をし過ぎたから、腸胃の掃除には好都合だらう。

朝 Villa Borghaese に行つて見たが、十月十五日までは修繕のために閉館するとの事で失望した。庭で若い人々が四五人 tambrellino を遊んで居る。ポンと張りのある音が木靈に響いて品のいゝ遊びだ。

仕方がないから Vatican の博物館を見に行つた。十一時から三時まで傍目もふらずに見たら非常に疲れた。名作が夥しいので一々取り立てるのは愚かな事。各作物の印象すら中々明瞭である事が出來ぬ。唯目のあたり Laocoon, Apollo, Niles, Zeus 等の神品と相對した事と、Apollo の前で意味の解らない涙が一二滴こぼれた事を記して置かう、

壬生馬は下痢のために籠城して武郎の肖像に色を附けた。

夕食後、二人で夏目氏の新作「草枕」と云ふのを讀んだ。中々面白い觀察と描寫がある。純客觀のものが書ける人ではないかと、これは二人が一致した。

愛子から端書が兩人に一枚づゝ屆いた。輕井澤から出たのだ。

月が見もしない中に缺けて行く。

十月五日。〔此日壬生馬〕晴。パン二個に對する cafe latte は少し不足のやうだ。それを加減して最後まで少しなりとも殘す手際は、人間でなければ出來ない藝當であらう――それ程覺えのよい吾々も未だ旅行の計畫が出來ないのは甚だ心細い事である――赤丸に乘つて Foro caesarum の前で下りる。米國の夫婦らしい人と同處から同處まで乘り合つた。此人が同處に行くと云ふ事は以心傳心で解つた。先方も解つて居るのであらう。

朝の麗日が古蹟を輝かして居る樣、雨よりも風よりも面白く感じられる。兄上に「あの破壞した古柱などは古くからあの儘であつたとしか考へられぬ。歷史家はそれ等から歷史を捏造したやうだ」と。余に「シーザー、アントニアスなどと、此頭なる石片とを結びつけるのは難儀な事である」と云はれた。傍で「カタコンベの古ランプ召せ」と、爺、我等に勸める。自分等は欲しいとも別に思はぬが、日本の誰かゞこんなものを得たらばうれしがりさうなとの考を起さゞるを得ない。

Museo Capitolino に入る。余には數度目、兄上には初めて。同じ二つの目でも異らざるを得ない。これからの日記もその通りであらう。先日から疑つて居た時代と云ふものは必ず進步しつゝ行くものである、例へば動物學の或る動物の發達史の如くにである――色々の事實は人を僞るものであるが故に、此原理を信仰して見るべしと定めたが、古代技藝の高潮はもう疑ふの隙がない。人間の趣味も技術も墮落するもの、決して研究の上の研究が數学的に效果を收め得るものではない。歷史は發達史ではなくつて凸凹史であると云ふ新說でもなんでもない事を確信する――確信するには、己の趣味と目とを定規とするより仕方がない。その定規の狂うた時は悲しさと恥とを感ぜねばならぬ。――それを覺悟して確信する。すると何か新しい眞理であるやうに自分丈けは思ふに由つて認めて置く。餓ゑたか、近くの狼が檻の中から、物凄い聲を立てゝ泣き叫び狂ふ間に、吾々は古名作を味ふ――スケッチをつくる。ドンが鳴る。寺院の鐘を打つ。博物館を出てシャイロック爺の店で午食をする。秋の葡萄の粒を算用して客へ出す。可愛い子供でも持つたらあゝはならなかつたのであらうが、細君が夜逃げをしてからあゝ云ふ風になつたとも想像されよう。

Mons Palatinus に入る。Giulius Helus Sutosa は靴屋の元祖也。其石碑あり。Donus Tiberiana の庭へ上る處に新しい階段があつて、水が流れて瀧になつてゐる。レアンドラが咲いて、水草の靑々たる中にたれかゝつて居る風情は眞に古い。古蹟は無理に昔を偲べと人に逼るやうで、あの幽かな水の音は、そゞろに人を昔へつれて行く。肉體的に疲勞を感ずる午の酒の故もあらう――水の音で一睡したらよさゝうな肌合に、風と日とが靑葉から通うて來る。

クストウデに案内されて七丘の眺め、Foro の眺め、St. Maria Antiqua— Tempiodi Augusti— Bermolm— Tempio Magnae

Maeris—Dom Liviae— Templum Jaris Victori—Domus Augustas— 崖を下りて Exedra—Domus Augustiana—Stadium—Domus Septinisi Severi—Paedaogium と云ふ順序に一々見物して、時々眼を上げて Caracala や Circus Maximus の古蹟を望むのは愉快な事である。殊に思ひ出して描く時の方が一層よい。印象も未だ鮮々として居る。スケッチをして寺の鐘が幾つも幾つも鳴る迄パラチノの丘に居た。今度は何時誰と見る事が出來るのであるか——もう見られないのかも知れない。見度いと云ふ念より見られないからと云ふ念の方が、悲しく思へば思はれる。戀人ならば見られないと云うて悲しくも感じよう、菓子ならば見られないと云うて悲しくはなく、見たい喰ひたいと云ふ方が先きになる。三人繪かきが繪を描きに來た。他人の繪を描いて居る處は、何となく馬鹿げて見える。何故なれば、目には一度にもつと多い、大きい、美はしいものが入るからである。理由にはなるまいが、人は必ず左樣に考へる。

夜、増井が話しに來た。大きな聲で話をして近室は迷惑だらうが興はある。五層を下りる時間があつて、大門をとざす音。往來の人通りは少くなつた。秋の凡てが白青い石道の上にあり。増井の帽子が歸つて行く。喰ひ殘した秋の實が卓上にあり。晝の疲れは休まないでも過ぎて終つた——。

〔以下武郎〕挿んであるケシの花片は Augustus Tablinum の前、昔は porch であつた大きな圓柱の缺けたのが轉がつたり、Corinthian crown が地に跪いたりして居る所に、たつた一つ咲いて居たから摘んでしまつたのだ。Rossetti の「ピヤトリスの死」で眼をつぶつて面をやゝふり仰いだゆかしい人の手には、此花が置いてあると直ぐ思ひ出して、綺麗だけれども哀れの深い花と悟つた。これからどんな所で見ても、此花は今日の聯想を以て僕に逼る事だらう。因緣だ。因緣だ（玆にさゝやかな押花挿まれてあり）。

十月六日。土曜。晴。來る處を知り、行く處を知れるものゝ心は悲しきかな。秋の雲はかくて我等が眼に悲しきなり。

朝、壬生馬は日下部氏と共に鑄造家を訪ひたれば、武郎は獨り電車に乘りて Palazzo Conservatori に到りぬ。蒐集せられたる品物は甚だ多く、良惡混合の嫌ひなきにあらず。階を上りたる中階の壁に見らるゝ M. Aurelius の monument にありし

てふ relief は、帝國末葉の作品として心留む可きものなる可し。彫刻よりも浮彫に、浮彫よりも繪畫に心牽かれ易き所以は何なる可き。我等が翫賞の力後者に慣れたるが故か、將た繪畫は彫刻に比して一段製作の苦心を要し、含蓄する所從つて多きに依るか。Space の經濟前者にあらずして後者にあるが故にはあらざるか。若し其原因を第三者なりとすれば、繪畫は彫刻に比して一頭地を拔けりと云はざる可からず。

Space の經濟とは何ぞや。單純てふ事實が美を構成する一要素なりとせば、美の顯成のためには、美術家は常に視角の收容し得可き區域の廣狹に對して考慮する所なかる可からず。古人が壁畫を作るに當り適度に區劃を設けて過大の畫面を成さしめざる所以も、要するに此原則に基づけるに過ぎざる可し。過大なる時間ある詩歌が讀者に一種の苦痛を與ふる如く、過大なる空間ある畫圖は觀者の感興をして索然たらしむ。是れ空間に經濟を要する所以なり。

此觀念を眞として彫刻を見よ。彫刻物によりて表現せらる可き作者の美觀は、一面を見たるのみにして盡くる事能はず。作者は石の一面を刻し、次に他面を刻み、更に又他面を刻まざる可からず。觀者が其製作に對する時、與へらる可き印象の散漫となるは理の當然なりと稱せざる可からず、眼を閉ぢて美香をかぎ、鼻を蔽ひて麗色を見、而して面を背けて薔薇の眞を歡ばんとするは、觀嗅同時にするの時と何れぞ。

靑銅器の室に痛く損じたる馬あり。生きて走らんとす。

階上なる畫圖室には最も長く留りて心深く見たる作多し。Caravaggio の “Fortune-teller” は忠實なる作なる可し。Guido Reni の “Blessed Soul” は其半成なるが故に注目を惹く。Velazquez の自畫像は生ける如し。流れたる髮影にひたれる襟の色など。

例の家にて晝食す。增井氏もあり。見るに悲しき面ばせかな、生氣なし。かくても世に生くる、世に生きんとする、あらず、世に生きざる可からずと信ぜんとする、其不可思議なる力の源は何處にあるなるや。此同じき力亦我をも拉して世に活かしむ。我等が此世に活くるを見るに、其生くる所以を明白に解し得可しとの希望だにあらず。醉生夢死と云ひけん古人の

冷語を、誰か先づ石もて打ち得るものぞ。我茲にかく記して而して明日再び床上に眼を閉く可し。

晝食に葡萄したゝか喰ひて壬生馬と共に公使館に到り、壬生馬のトランクより彼れ是れ出して眺めなどす。彼がスケッチ帖、一別以來の彼が生活を叙して餘蘊なし。薄明なる物置の一隅に坐して展き見るに時の移るを忘る。壬生馬我にとて、藤村の「破戒」を出だす。

歸宅して少しく讀む。マッオニ來る。不圖心沈む。畫でも描かばと試む。

雨に逢はざる事久しければ戀しうなりぬ。二日ばかり垂れ籠めて濕りたる空も面白かる可し。雨なき國の人は殘虐の性を養ひ成すとは、聞かずとも思ひ至る可き事ならずや。

夜靜か。壬生馬は夏成りし詩の淨書に、我はこれより手紙認む可し。

十月七日。〔此日壬生馬〕日曜。晴。九時半松尾と Campidolio の丘上に逢ふ。ルネッサンスの、剪りたてたる如き三建築の上に、晴々したる空の高き。其間に表はるゝ光と影を織りなす線は即ち力なり。畫家はこれを明覺して描く可し。唯一つの線を用ひて彼の空に移り行かば、其は自然を知らざるものと云ふ可し。

箱馬車幾十輛となく廣場に群がる。市廳に於て結婚の儀式あるが爲めなり。我等も一瞥を與へぬ。出入りは自由にして、結婚者の數は指折りて數ふべし。其の亂雜簡單思ふ可し。

又此處の博物館を見て Foro romano に到る。Saturn Tempel—Basilica Julia—Kastor Tempel—S. Maria Libera trica—Vona-ria—Atrium Vestae—Arco Titus—より一廻轉して遙かに Tempel der Venus und Roma の Colosseum の前に立つを見、Bashilica Castantino—Temp. Sacrae Urbis—Temp. faustiano e Antonius—Temp. di Jul. Besare—Rostra Julia に兒上の Shakespeare の一節を誦するを聞き、圓き石道の Foro romano に出で Piokas—Säule—Umbilicus rostra—Arco Severus 等順次に見物す。所謂一石片を知るものゝためには、萬卷の史書に勝りて饒舌なるものあるべし。石片の間に老番人の午食せる、草木を養へるあり——夕暮は Acqua Acetosa にチベル河畔に行つて夕食もした。川のくれ、酒屋の村人、水汲の勞働者、自分等が伊人であ

つたら如何なる感がする。我々と同じではあるまい。訪問した Fidalma の家も見えぬ暗き夜、松尾が大きな聲を出して歌ふ。

十月八日。月曜。晴。又晴れぬ。被紙を二度交へたる Baedeker 案内記に携へられて San Giovanni in Lateano に遊ぶ。Basilica の新しきものにて、alter を除きたる外には取り立てゝ云ふものあらず。Prof. Moore の鞏に倣ふとにはあらざれども、Basilica 形の粛整は人の心を引きしむる心地あり。1308 に燒失せし後、Clement V. 再興して壁畫を Giotto に造らしめたるが 1360 再び祝融の災ありて、百代の寶作亦灰燼に歸せしとぞ。方三尺計りなる彼が壁畫の僅かに其厄を免がれしもの aisle の柱に飾られたり。片鱗にして青龍の氣を吐くもの。後景に用ひられたる空の色など尊しと云はば稍ゝふさひたりや。Gothic work なる Canopy も、全體の比例よく整ひて、見るに眼の苦しみなし。

Palazzo del Laterano に The Christian Museum を見る。初代基督敎徒の美術を窺知せんには屈竟の場所なるべし。彼等が技術のビザンチンの臭味を帶びて、開展の餘地なき事など語り合ふ。取る可きは小兒の如き單純なる行き方なり。畫室には多くの蒐集なけれども、Benozzo Gozzoli の St. Thomas, Fra Filippo Lippi の Coronation of the Virgin など心深く打眺めたり。壬生馬敎へて云ふ、Gozzoli は Pre-Raphaelites を激成せし畫家なりと。「思無邪」と云ふ可きやなど我は云へり。壬生馬又曰く、爾後發達す可き繪畫の進路に二あり、自然主義ならば極端なる自然主義、理想主義ならば大膽なる理想主義、二者の中間に立たんとするものは倒ると。

晝食をしたゝめて後、米國新敎會堂 (S. Paul's Church) に Burne Jones の壁畫を見る。Mosaic の色も心地も人目を欹つ。歸後、Tiber 河の畫に着色。夕方、壬生馬は莊司氏より依賴せられたる法令の反譯に、我はマッオニとタイバー河畔を散歩す。橋のあなた取り分けて赤き星一つ見たり。名は何と云ふにや。Caesar が斬られたる前の夜に顯はれしもかゝる光なりしにや。

夜、公使館にて石井と云ふ横濱第一銀行とかの支配人に逢ふ。我の嫌ひな人なりし。甘つたるい口を利く人なり。

十月九日。火曜。晴。朝霧立ち籠めたり。秋のさだかに來れるを告げ顏なり。秋を唯美しき季節とのみ見て、其中に濳き

悲哀を感じつゝ、四季の中秋に越えたるよき時はあらずと思ひたりし日は若かりしかな。かの時に比すれば我も亦世の悲しみを少しく多く知りぬ。痛慘の思もて秋を迎ふる毎に、春の來るを惡みし札幌の過去羨しき事なきにあらず。

朝獨り Colosseum の傍なる San Clemente に遊ぶ。これ亦峻嚴なる Basilica なれども、調和を思はざる修繕の跡人をして厭惡の眼を蔽はしむ。alter の mosaic 見つ可し。寺に入りて左側なる龕室の壁畫 Musaccio の手に成れるものなりと云ふ。Santa Catharine の傳は左に、St. Ambrose の傳は右に、中央には基督磔刑の畫あり。嚴烈なる筆路は慘としてたけなはなる秋の如し。思へば文藝復興の氣を產み成したるもの、希臘文明の西漸、生活の餘裕、平和の克復、其他十指を折るに堪へたる種々の原因あるべしと雖も、其最大なるものを求めば暗黑の世と稱せられたる中世紀が產みたる自由都市の精神なり。人人本來の自己に歸り、個性の尊嚴を覺知し、社會的存在の意義は生存競爭にあらずして男らしき相互扶助なるを教へられ、迷信と然らざるとを問はず、眞面目なる宗教的本能の指導によりて動きし第十三、十四世紀の強き精神は、第十五世紀の母なり。Giotto と Fra Angelico となかりしならば、Raphael と Angelo とは如何にして生まる可かりしぞ。嗚呼 Assisi. 我は彼處に Giotto の壁畫を見るの日を待ちて餓うるが如し。我が伊太利旅行の月日と旅資とは San Francesco に到る事によりて酬はる可し。我にとりては Assisi は宛ら伊太利の寶庫の如し。

去りて Pantheon に到る。圓堂の頂きなる圓窓より、空の光射下して冷き石を明かに照らせり。物見高く他所ならば罵り合ふ可き人も、玆には靴の踵を擧げて歩む可し。時代精神の其遺物に體現せらるゝかくまでなる可しとは思ひがけざりき。暴君 Humbelt the First の墓と Raphael とは相對して築かれたり。暴君の前には夥しき花環ありて衞士これを守れり。Raphael のには、壁に彼が半身像ありて Card. Bembo が記したる墓碑銘(Pope の英譯)の

Ille hic est Raphael, timuit quo sospite vinci
　Rerum magna pareus, et moriente mori.
　　Living, great Nature feared he might outvie

Her works, and, dying, fears herself may die.

(Epitaph osSir G. Kneller)

と云へるがあり。

午後、藤村の「破戒」を讀む間、壬生馬、我を描く。

〔以下九行壬生馬〕手紙など書きて莊司氏に飜譯を持ち行く。午後描く事あり。五時半、松尾、少年 Ugo を伴れて來る。共にコルンを歩みて歸る。

夜。――人生に直接になれ。これに酬ゆると云ふ事は職業等の如何を問はず其人の起居、談笑、憤怒の間にもある事なれば、浮世より緣遠く思はるゝ科學者なども安立の地を自家に造り得可きものなりとの余の見に、兄上は、無論それはあり得可き事なれども、偉大なる人格は更に世と密接なる位置を求むるものにして、某人の爲めに某科學某職業は其衆生報恩の良心を滿足せしめざるものなりと。余は生涯己の人格の不足と缺點とに苦しむ間余は獨り山居しても衆生報恩の良心に責めらるゝ事なかる可し、など思ふ折、增井話しに來る。話の後半は米國に於ける畫家の生活し得べきや否やの問題なり。友の眞の畫家たるべき野心を自ら捨て、――悲しく――これを生活の道となさんとする。余は又可なりと思ふ。唯余は彼の生涯につき、畫風につき、何事をも眞實なる忠言をなし得ざるを悲しむ。人我が忠ならざるを攻めんか。我人の恕なきを攻めんか。

十月十日、水曜。晴。朝、窓を排すれば再び霧。古市壁の少しく白み、Villa Borghese の松遠く煙り稍〻しめやかなる石疊の上を車の音既に忙しからんとす。七時。

歩して Galleria Pallavicini に畫を見る。知られたるは Guido Reni の “Aurora” 花を日神の車前に撒くと云へる天井の壁畫なり。其摸寫の其下に陳列せられたるもの一點の上に出づ。Titian の “Vanity” と云へるがあり。戯畫ある壁の切り抜きあり。Alessameno と云へる基督敎徒、驢馬の首を附せられて、十字架上にある基督を禮拜せり。其下に記して曰く、“Alessameno Adora Dio” と。

去りて Museo Kircheriano に入る。Jesuit 僧 Kircher の蒐集する處にして、今はこれに加ふるに Ethnological and prehistoric collections を以つてす。Ethnological collection はさしたるものにはあらざれども、Prehistoric collection は有益なる蒐集なるが如し。石、銅、鐵の各時期間に於ける我等が父祖の爲せし所を窺ふに足る。

晝食後 Pantheon 前にマツオニを待ち、共にユダヤ人の商へる古物市場に到る。鷲鼻の下品なる人々臭き水などの溜れる石疊の上に小店を列べて賣れり。古き貴金屬の光り、新しき珠石の輝き、チーズの臭、赤き頭巾の色重き綾をなして、其間を買手のいでたち種々なるが行き交ふ。Gorky の作品の中などにある可き光景なり。

此市場は Campo di Fiore と云へる青物の市場に續けり。我等の到れる頃は其日の事終りて花屋の店と野菜などの切れはし殘りたり。細長き廣場の中央に Giordano Bruno の碑あり。此地、此我等が立ちし地點にて、此硬骨の哲學者は燒かれたるなりとぞ。John Huss も亦此處にて殺されしなるべし。我嘗て彼の傳を讀みて、其爲人の甚だ人らしかりし事を慕へり。今目前彼の血が烟となりし所に立てば、更に彼が昂々として節に殉ぜし跡を回顧せざるを得ず。我は Fore Romano に立ちて Caesar と Antony とを髣髴する事能はず。而してこれ我が深く願ふ所にもあらざりき。而して今此地に立てば Bruno が謦咳は殆んど我が鼓膜を打たんとす。Caesar と Antony との世は既に逝きぬ。Bruno の世は漸く曙光ならんとす。今の世に生くるもの誰か彼に於て我と同じき血脈の搏てるを直感せざるを得可き。塵に等しき我をして、衷心の同情と尊敬とを此偉大なる人格に獻ぐるを敢てせしめよ。「眞理は學者の有にあらず、僧侶の有にあらず、眞理を尊敬するものゝ有なり」と云ひて、そを行ひし人は死す可けんや。

Palazzo Faruese は Bruno が銅像の傍に立てり。威嚴ある建築なり。夕暮、畫人町に Hugo Belnasconi と云へる壬生馬の友なる畫家を訪ひて其畫を見る。高き額を持てる靜やかなる人なり。其畫は特殊の色彩と調子とを以て成り、一度受けたる印象容易に忘れ難しと、壬生馬我に語れり。爾かある可し。歸路 Villa Borghese の池のほとりを靜かに歩みて家に歸る。此日一度雲稍ゝ起りて又晴れ終りぬ。些事に齷齪する事を止めざれば心細き未來なる可し。

談論一時半迄。余は四時に眠につく。

十月十一日。〔此日壬生馬〕木曜。Tivoli は Roma の平原から東北にある Sabine 連山の一角にある山村、人口一萬許。瀧と古い別業の跡と眺望とで羅馬の一名所に數へられて居る。程遠からず Tibur の古市があつて古ローマ人の苦悶の歴史を偲ばせて居る。我々は Porta S. Lorenzo から出る輕便鐵道で行く。今日は莊司氏が御馳走をとの事である。――多くの外國人の遊覧者を乘せたる列車は Campagna の荒凉たる黃塵の中を風を切つて走る。白く塵に埋つた荷馬車などが追ひ越されると、天心から落ちる秋の日が、再び靑ざめた野草などを幽鬱に見せる。――烈しい天の光が物を幽鬱に現出すると云ふ事は、僅かな場合であらうが遠い趣である。Campagna に於ては少くとも度々この現象を見る。此野はこぢつければ、古英雄が心で泣いて居る感がある。それでなければ、古の事を懷ふにふさはしい野の樣である。野川は唯一の Bagni (delle Acque Albule) の近くで見た許りである。此溫泉場では硫黃の香を嗅いだ。日の光と此香と塵の色とは破壞された土地と云ふ感がする。大涌谷の湯の花澤、あの邊にさまよふ人の心を今汽車中にある己の身に盛り入れたやうだ――吾々の見つゝ走つた道は古い Via Tiburtna で墓地 (Sepolero della fomiglia Pfanzia) 其他の遺蹟がある――Villa Adriana に行くべく此處で下車する。Tivoli に向ふ馬車が（鞭をならして）二三人づゝ乘せて葡萄畑の間を走る。前に行く馬車、後に來る馬車、其の間の距離も定かではない。黃色い塵が舞ひ上るとそれに日が照る。

此七十萬メートル平方の事を書く事は中々出來ない。要するに Adriano 帝が休養の別業として埃及及び希臘での所見に基いて、壯大な計畫と雄偉な趣味で作つたものであるが、他の羅馬の習慣と趣味に反く事は出來なかつた樣だ―― Teatro Greco―Poikile―Sala dei filosofi―Rotonda (Natatojo と思はれたのは誤りで寧ろ Triclinio estivo の方が適當であらう) ―― Palazzo di Adriano―Biblioteca―Triclinio―Peristilio dorico―Triclinio―Basilica―Termi (piccolo e gronde)―l'accademia――等、多くのものが一個をなして居る處は、上乘の Villa と云はねばならぬ。――嗚呼靜かなる秋の午の景色であつた。古蹟の間には必ず古い古い橄欖の森がある。さもなくばチプレスの古木が聳えて居る。橄欖の實は黑くなつて落ちたのもある。それを口に

入れて苦い味を樂む。日の光が其の葉を銀光に照らす。照らす許りではない、自由に射し入る。此木の美しいのは光線が射し入り易い處にある。枝づたひに鳥が啼く。小さくなつた花があちこちに草の間に咲いて居る。風が遙かな靑い連山を流れて、吾々を古い階段の上に吹く。あゝたまらない幸ひな日だ。僕のやうに自然の働きならばつまらん事でも感心して居る者には此上の望も悦びもないかと考へられる。自然と心中する狂者の心と餘り隔りもないやうだ――村まで馬車で三十分ばかり。Tempio della Sibilla の下には料理屋がある。Subiaco から來る川が、此處にローマニヤに落ちる水の姿、濕氣の充ちた暗い溪谷の有樣、その谷を飛び交ふ靈鳥の樣を、眺め入つて酒をかたむける。喜ばざるを得ない。假令 Burt が泣いて居ようが、影の如くまとうて來ようが、天地の悦びは人の悲みに勝ち得るものである。さなくとも、詩人や畫家は世人よりも深く恩惠を享くる特權があるものであるから、それで吾々の世界は耀いて居る。圓く谷を車行して瀧と深い下の流と村の有樣を見る。Orazio が詩を考へたのも此邊だとか。Villa d'este の庭園は美しい水とチプレスの舞臺である。

夕暮の Campagna には羊が居た。草が煙つた。六時にはローマに着した。點燈の頃である。

十月十二日。金曜。晴。昨夜、大風屋を遶り、今朝はちぎれたる雲、空にありしが、やがて深き碧色の秋となりぬ。朝は出で立つ可き旅行の計畫をなさんとて讀書す。壬生馬は昨日 Villa Adriana にて得來れる大理石片の上に描く。

中食後、共に旅費並に滯在費の概略を計算す。「面倒臭し。Cook に依賴せんか」「これだから旅は藥になる」など。

夕刻マッオニ來る。例の如く共に散歩して Porta Pia に到る。今九時半、これより讀書す可し。

十月十三日。土曜。晴。朝、武郎一人にて Vati an の Library に到る。四五十人の觀者、一人の導者に從ひたれば、其說明など一々聞き取り難し。館は第十七世紀の、華に過ぎて拔下れるもの。見るに足らず。名ある詩人が淨寫せりと傳へらるゝ Dante の "Divina Comedia" の稿本などもあれども、讀み得ざる我にはさしたる感興もなし。Luther が書翰など其當時を想ひ見ん料には屈竟なる可し。諸國の王室人民より寄附せられたりてふ稀有の品も、美術としての立場より見ば如何なるべき。唯一つ去り難き想ひせしめしは Aldobrandine Nuptials と稱せらるゝ古名壁畫ある一室なり。何れの書にも否はん計りのゆか

しき色彩形式あり。惜むらくは永く佇立の暇を得ざりし事なり。

再び Museum に入りて Laokoon 及び Apollo 其他の古作を見る。前者に於ては縱横の氣横溢せんとして然かもせざる所、後者に於ては整肅の體典型に陷らんとして然かもせざる所、何等の藝術直覺の高潮ぞ。何れを何れと定めんには烏滸の業なる可し。されども我は、我一個の趣味として後者の單純なる統一を愛す。

午後、壬生馬、齒醫者に到りて、永く彼を惱ませし齒を拔き取る。

すつきりと蟲齒を拔きし小春かな

我は痔を再發す。半日の不快に家に籠りて藤村の「破戒」を讀む。此書の主人公は、若し現世にあり得可からざる人格なりとするも、確かに讀者の同情に値するに足れり。これ藤村が創作の人物に對する同情の量を示すものにあらずや。彼が淋しくして然かも迫らざる秋の野川の如き思想の傾向は、此書の片言隻句の中にもあからさまなり。彼が思量は、內觀的考察的にして、これを將ゐるに一味遠寂なる情味を以てするものか。未だ讀了せざれば兎角は云ひ得ず。

夕刻より日下部氏の夜食に招かる。さしたる事もなし。

十月十四日。〔此日壬生馬〕日曜。雨。兄上は午前のうちVio nazionale の米國教會場に到らる。われは家に留りて古き畫の訂正など試む。此朝四時頃、日下部氏の依賴せる畫の下畫を試みしが成らず。瞑目する時は明々と美しき形色の目に浮べるを、描けば何んの醜態ぞ。われ思ふに、われは形より入りて想に入る可き確實なる道を知らざるなりと。畫稿を破る。

三時半 Conte Rossi を訪ふ。伴はれて Vaticano に行く。法王謁見の件につきて許可を得んがためなり。其筋の人なきがため二時間を宮中の廻廊、議室、法王のアッパルタメントに迄到りて、其華美靜肅の樣を見る。恰も雨、夕日の黃に煙りて、灰色の形おぼろなる天蓋の裡より稻妻の細き流れ、小龍の走る圖を思はしむ。P. di. S. Pietro も小さく形よく見らる。Tras-Tevere のマッチ箱然たる民家、其間を行く人の黑點、何となく不安の樣に、基督の終りの日近きゼルザレムの光景も忍ばる。六時頃、燈火の海老色に照す室のうちに Mon Sionor Bisli に逢ふ。未だ年もさまでは老いぬ人なれども、其椅子は重要なる地位に

して Caldinale に進むの階段なりなどゝ聞かせり。尙ほ濕ぽき雨降る。日曜なれば人通りはあり。我等を紹介せし Monsignor Pittoli をP. di. Gesù の Palaz-Cenci に訪ふ。丈高き品ある僧なり。

尙ほ雨降る。風は東にめぐりてシロッコは止みぬ。雨の色は夜と電光のものになれり。增井の前をよぎる。如何せしぞと思ふ。乳屋にて何かしたゝめて歸り、今日の事、日本の文學者の事語りて十一時に眠る。雨尙ほ止まず。雨の音、街上の並木に鳴るが聞こゆ。馬車の音もなし。

十月十五日。月曜。雨。雨一日降り暮しぬ。永く願ひたるなれば我は嬉しと思ひぬ。夏なりせば更に麗しかりしなる可し。夕になりては、冬時雨とも云はまほしき街路の様稍ゝ心細し。

朝、壬生馬は畫布に向ひ、我は心籠めて Ruskin の "Lectures on Art" を讀みぬ。中食後、共に額緣屋に到り、又寫眞屋に到りて、羅馬に保存されたる古名作の寫眞を購ふ。

夕方我は暫く增井氏を訪ひ、家に歸ればマッオニ氏あり。

夜再び Ruskin を讀む。藝術と倫理との關係を說ける所、心深く讀まるゝもの多し。「藝術が其發達の高潮に赴きし時は、民衆の倫理的傾向が同方向に高進する時にして、其傾向絕頂に達して統一的均衡を失ひ、相互の主張が自己を辯護し自己を說明するに到りて、藝術の衰運來る」と云へるが如きは傾聽す可し。

壬生馬と「座右銘」を讀みて、古人の苦心を思ふ。奇徑を經盡して坦々たる大道に入りし人の云ふ所、肅然として人の肺腑を衝くものあり。

今朝、隣室に住める新聞記者なりと云ふ人、家人と意合はずとかにて他處に移りぬ。打ち聞くに、云ひ罵りつゝ荷を造る音何とはなく人の心を傘く。窓の外には雨しと〳〵と降り居たり。Ruskin を讀みながら、かの人が移れる室にしめりたる荷の着く樣を想像して、石版に徒ら書きせし時のやうに……。

十月十六日。〔此日壬生馬〕火曜。雨。尙ほ雨降る。街道の馬車濡れ、馭者臺の傘重げに見ゆ。三四度日光微笑を示せし

が又暗くなりて雨降る。

Conte Rossi の好意より砲兵第一聯隊と 1650 に基礎おかれたる――聯隊を見る。殊に云ふべきは、小なれども記念館の設けある事なり。雨の兵營の様は。鷄の雨に濡るゝ母屋のほとりを思はしむ。夕ぐれ Corso に出でゝ旅行の計畫などたしかむ。時間表を求む。

此夕、吉岡氏に宛てゝ博覧會閉會の時期を確むる手紙を、兄上認めらる。

十月十七日。水曜。晴。旅立つ可き日漸く近づきたるに、荷の取纒めなど二人なれば思ひ知る可し。

朝は心籠めて Ruskin の "Lectures on Art" を讀み、午後より Villa Borghese の美術館に到る。Titian の所謂「天上地下の愛」、Correggio の "Danae", Raphael の「基督の葬り」其他有數の名畫と、Bernini の腕尙は若かりし時の偉作と稱せらるるもの多く蒐められたり。日毎に名作を見たる我が眼は盲となりぬ。日に向つて瞼を閉づるが如し。五彩綾をなして眼を過れど、何とそを云ひ定む可き。思へば同じき人生を稟けて人の爲したる跡をだに追ひ難し。

三時半頃家に歸ればマツオニ氏あり。壬生馬其畫を作る。我は Ruskin を讀みなどす。彼の線と影とを說ける章最も注讀す可し。其繪畫の發達を論じて Greek 及び Gothic の二派となし、其特長を說けるあたり我の嘗て知らざる機警の着眼なれども、尙ほ其說の當に服さんには多少の思索をなすの餘地あるが如し。

夜、日下部氏を訪ふ。雜談十時半に至る。歸途茶に醉ひて二人とも眠る事能はず。壬生馬は起きて手紙など認む。我も久振りにて澤山の端書書けり。Edith Hall, Fanny, Andrew, Elkinton, 松平保男、白鳥庫吉、宮部金吾、河野信子其他。

十月十八日。〔此日壬生馬〕木曜。兄上 Galleria di Doria に到らる。今日は閉されたれば、果し給はず。彼の Velasquez が名作を見でや行き給ふべき。サイモンズが例の伊太利紀行を求めて歸らる。うらやましき事なり。われはトランク買ひに行けり。一年の間にトランク一つの荷を作れりと見ゆ。

松尾の畫像を作る。夜、今井氏の新居にトランクの飾られん許りなるを見る。快談夜半に到りて歸宅す。今夜も茶に浮か

されて四時迄。

十月十九日。金曜。晴。今朝は忙しき日。何せん此せんとて、順序を定めたるに、壬生馬、日下部氏に送る可き畫を描き初めて十一時に至り、余も亦それを見て同じき時に至る。

午後は壬生馬、マツオニと町に買物其他旅行の準備をなす（これは間違ひ）。

夕方余マツオニに伴はれて Count Rossi を訪ひ、Pope と會見の件に就て話す。Count 明日余をバチカンに伴はんと約す。

怠りたれば十八日よりの日記は Assisi に着して後記す所なり。心のみ忙はしく爲したる所を忘れ果てたれば、日記とせんにはふさはしからざる日なる可し。

此夜增井氏と共に夕飯を喰ひ活動寫眞を見る。Fidalma を訪ひて畫像を與ふ。

十月二十日。〔此日壬生馬〕土曜。晴。今日の出發を思ひ止む。

兄上、朝 Conte Rossi と伴ひて Vaticano に到らる。彼等の優柔不斷なるは、會見を停止せるの原因たるべし。銀行に到り信用手形を作り、明日の乘車券を求め、公使館よりの兄上とスカジナボに會し、松尾と三人にて食す。

巴里に送る可きトランクは三個既になりたり。夕ぐれ、莊司氏に到りて別れを告ぐ。夜食は日下部氏のもとにて。

今井氏より字書、Merabiglia 氏より Uffici の歷史を送らる。

天に三日月あり。余は一年のねんごろなりしローマを思ひつゝ今宵は晩からず眠れり。

十月二十一日。日曜。快晴。ベネチヤにてよき月見す可しなど云ひつゝ、朝、荷を造り終りぬ。壬生馬の顏には一年半相知の地を去る可き苦しみの色ありき。

朝、莊司氏告別に來らる。マツオニも亦。「道中御大切」と云へる語を昨日習ひ置きて諳誦したる彼の心愛す可し。

十二時 Count Rossi、增井、日下部、マツオニの諸氏に送られて羅馬を辭す。

Tiber 河に沿うて北行する汽車の窓よりは、羅馬をめぐる春の波の如き野漸く崛起して、秋の海のやゝ狂ひたる樣となれ

るを見る。草の色の凋落の時に遇ひて一度萠芽の緑に歸りしが、今は其力も失せて乾きて黄となり樺となり行くさへあるに、赤き色の殊になつかしく眺めらるゝは、秋のやがて深からんとするを知る可し。形圓く豐饒の相を籠めたる堆草も、家畜の料に切採せられて嶄然として一面峭壁の如くなれる、羊飼ふ野に立てる牧夫の杖に倚れるが、物哀れに眺めらるゝなども亦歳の老ゆるを語り顔なり。Orte より Tebere の支流 Nera と云ふに沿うて稍ゝ北東に走る。壬生馬が急ぎ購ひ來れるパンと冷肉とを喰ひつゝ尙ほ過眼の風光を樂しむ。Orte より北は道愈ゝ山がかりて住める人の心も思ひやられぬ。Terni より Spoleto の間、風光殊に愛す可し。我等が過ぐる處には、淸くして甚だ痩せたる溪流、山脚の削れるが如き麓を走り、山壁は白巖靑叢を衣して聳立せるが如く碧き秋の空を襲ふ。銃を携へて徘徊せる少年や、岩の上に干されたる白き布にも人の住めるは明かなれども、家は何處にとも分かず。ふと窓外を見れば、小さき家岩の蔭にあり。岩に倚りて我等が汽車を眺め居たる一群の少女に、汽車の中なる一女客、紙に包める色種々なるリボンを投げ與へぬ。少女等の眼は輝きて聲高く「感謝、感謝」と呼ぶに應じて、車内の女子は幾度か手を唇に當てゝ、接吻の意を通じぬ。若し都會の塵の中に、此貴女と此少女と相見なば、貴女は憍慢の形もて少女は羨嫉の眦もて相迎へ相送るなる可し。されども自然は此强執なる障壁を粉碎せり。少女は貴女を怖れず、貴女は少女を卑まず、共に交せし歡笑の中には平等の外に何物もあらざりき。我は此小なる事實のために痛く動かされぬ。人は遂に責む可きものにあらず。可憐なる彼等の內光が其牢獄の暗きを厭ふ事の如何に切なるものあるかは、世の苦味を知らざるの人の思ひ到る可き境にはあらざる可し。

　Foligno に車を代へて Assisi に達せし時は午後四時十九分なりき。旅宿の乘合馬車に乘りて Assisi に向ふ。馬車は葡萄畑の間を走りて橄欖園を過ぎ、左に San Francesco の巨刹、城の如く山背を壓せるを眺めつゝ Hotel Leone に着しぬ。

　直に導者に伴はれて Saint Clara の尼院に到る。死せるが如く靜まりし町は淸淨なる舖石に冷えて、西の空には澄みたる空に月の光あり。寺は荒削りの大理石もて建てたる初代ゴシックなり。鐘樓の Lombardy 型なるが殊に古香あり。戶を排して內に入れば、夕暗の白壁に映ずる色の美しさ云ふ可からず。左方の一龕に St. Clara が教友の遺骨あるを見すると云ふ

に、重き思ひもて待てる間、灯ともされたる白障のあなたに人の影一度二度動きたる後閉かれぬ。黒衣して首垂れたる尼、金襴に裹まれて色さびれたる髑髏、地は Assisi、節は秋、時は夕暮、何とはなき忝なさ、心の奥深く沁むを禁ずる能はず。階段を下りて St. Clara の遺骨を見に行きし時も、導者の燭火さへ覺束なき斗り暗みたるに、何處よりとも知らず梵唄の聲したる、我も亦あながち捨て果つ可き心のみにてはあらざりきとつら〳〵思ひぬ。

寺を出でゝ右に（此寺には今尼二十餘人ありと云ふ）公園に沿ひたる道を斜に上りて、遙かに Umbria の平野 Tescio を挾みて流るゝを見、Amphitheatre の廣場に出で Duomo（San Francesco の立像 Dupre によりて作られたるがある處）の古色を見、Tempio di Minerva に美しき一列の Corinthian columnade を見、更に Kiesa Nuova に S. Francesco が生れたる跡を弔ひて家に歸れば、日は既に暮れて靜かなる街に靜かなる灯ともりぬ。

嘗て Sebatier の S. Erancis 傳を讀みて、我は此聖者の最も基督に近き人なりしを思ひぬ。S. Benedict が荊棘と巖角に身を劃きて修養せし石窖の内に、薔薇を植ゑし人は彼なりき。足れり、世にこれに勝りて美しき事をなす能はず。Benedict の人格を知り、Francis の天資を知り、而して此薔薇の事を思へば、人格交渉の眞境涼しくして掬はんに餘りたるかな。

Assisi は人口五千三百三十八、Mt. Sebasuno の額に位置し海を拔く事千三百四十五フート。橄欖と葡萄とに滿ちたる Umbria 平原の西遠く Perugia の町白く輝き、南には Mt. Falco の連山、西北には Tescio の河床、一は靑く一は白く、鐘の聲と落日の殊によき所なり。Hotel Leone.

十月二十二日。〔此日壬生馬〕月曜。窓を押せば、曉光天に充ちたれども、眼下の平野は白霧波の如く重り渡りて見えず。僅かに S. Maria degli Angeli の尖塔の見ゆるなど甚だをかし。

羅馬附近の村落に比して、道路、家屋内共淸潔なると、木材の使用多き、路傍の Madonna の畫像の無下に卑しからぬ陶器の裝飾を見るなど特色と云ふ可し。

今朝は San Francesco 寺院を見る。Toscana 前に近き初代ゴシック式のさびたる建築なり。材料は此地方より出づる卵色と

肉色の火成岩より成る。表情は單純にして稍ゝ放漫なり。之を縱橫に區劃する柱などの乏しければならん。正面にある圓窓の明確なるは美しき眼の如し。入口はゴシックの併行柱の形いと美し。

同寺は三階に分たる。我等は先づ其中堂に入り Cimabue の唯一の毀はれたる Madonna と S. Francesco の壁畫を見る。運筆は伸びて顏の表情は溫和なり。時には愛す可き graciosa を有せり。色も單調、composizione も單調なれども、甚だしく裝飾的傾きあり。Giotto が師より異りたるは其の意味なり。其の Doramatico の構圖にあり。實に彼の圖は語らんが爲めに人あり、木あり、家あり、然して彼が思ふ所は最も熱心に子供の如く語らる。愛す可きは卽ちこゝなり。Cimabue が女性に、天使に、優れたるが如く、Giotto は男性に、聖人に於て、其技の最も適せるを見る。

堂內は暗く、壁畫はあはれに損じたり。地下には此聖人が墓地あり。三階には Cimabue, Giotto 及其弟子等の壁畫あり。破損甚だしくして全體には旣に效果を缺く。朝日によりてステンドグラス美しく光れども、之は名作にはあらず。

晝に歸れば平原の霞も散りて空中は白く日光は黃に見ゆ。古くは convento なりし長き廊上に佇みて、橄欖畑と Tescio の白き石の河原を見る。描けるが如き街道眞白なり。彼の連山迄。あゝ大なる野の表情なる哉。此邊の人口散稀にて Romagna の比にあらず。點々たるは農家なるべし。此廣野を照らす日は又廊に立つ我等を照らす。廊には訪問の人の名などはりたるあり。今は小學敎師の孤兒を收容する學校なり。無邪氣なる靑年の黑きラシヤ服つけたるが來り喰ふべき食堂あり。白き食卓の上にパンあり。我等亦小學に生徒たりき。其時伊太利の地を思はず、此等の少年あるをさへ想像せざりき。

畫など買ひ集む。――午食す。――驢馬に跨りて橄欖樹畑の間を Monte Subasio に登る。今秋は橄欖の實の當りて、枝に充ちたり。未だ靑きものあれど旣に赤らみ、黑みたるもあり。其葉の色の美妙なるに、此果實をつけたる、其の溫き秋の日、何と云ふ可き。此樹程品高くして淸淨なるは稀なり。材は堅くして十五年たゝでは實を結ばぬと云ふ。さもあるべき事と思はる。

一時間半にして S. Maria della Carceri に着す。S. Francesco が樣々の奇蹟を遺したる傳說を傳ふ。最も人の肺腑を突くは

其の岩の床と木の枕なり。Bernardio は後幾百年、彼の修行のあとを玆に來りて習ふ。僧は四人僕は二人住めりと云へり。
S. Doniano 寺院を訪ひて歸舍。夜は同宿の英人と三人にて散歩に出づ。Perugia は岡の上の市なればかくれず。星光り、月山に近く、蟲なく。

十月二十三日。火曜。晴。戸を敲かれて眼を覺し、燭に灯すれば五時半。曉の鐘深くこめたる霧の中にうづまき鳴りぬ。面白きは鹿島立ちする旅の心なり。夜ならぬに燈して面洗はんに瓶の水は冷えたり。新しきは悪し、是をとて昨日相知となりし英人に、一昨日焼きしと覺ゆるパンをわけられて香ある蜜に朝食を終る。

馬の鼻息白む程に薄寒き朝なりき。馬車を驅りて山を下り霧の中に入る。伴となりし英人の頰は殊に赤く「見よ、彼の老婆の包み物頭に乘せたるは、我等よりも夙く覺めたり」「此園の花は美はしからずや」「豚、豚、二匹否三匹」、「少女の追ひ行く眠げなる牝牛を見よ」など云ふ。

馬車はやがて停車場の傍なる Santa Maria degli Angeli に着す。霧を分けて尖塔の十字を照らす日の影美しなど云ひて入る。打見たる所大なれども稍〻貧しき心地なり。圓堂の直下に S. Francisco の敬虔なる母が祈を籠めて聖者を産みしと傳ふる小龕あり。Portiuncuea と云ふ。聖者は其傍に死せるなりとぞ。棘なき薔薇、S. Bernardino が祈りこめたる小庵など見る。僧の與へたる紙片を見れば S. Francesco が告白の條々あり。

(一)我が神我が凡て。(二)我が衷に積まれたる禍祉を思ふに、あらゆる悲哀あらゆる苦痛親しむに堪へたり。(三)神の愛は人をして愛せしめずば止まず。(四)淸からんとするものは世を捨てざるべからず。(五)神階を蹈まんもの人街にある可けんや。(六)我を義しとするは神の責むる所となるなり。我を責むるは神の義しとする所となるなり。(七)試練に堪ふるは德を立つるの道なり。(八)惡人に忠ならざるもの善者とは云ふ可からず。(九)我「讃馬里亞」と云へば、大空伏拜し、天使喜悦し、黄地榮樂し、地獄震動し、悪魔駭走すべし

去りて停車場に到り二十分程遲れて來りし汽車に投ず。沿道の平野多くは果樹と野菜を植ゑたり。古き Etrascan の土窟

の墓ある所なども、Perugia に到る前には過ぎたる可きなれども、何處とも定め難かりき。九時近く Perugia に着す。

なだらかなる岡の頂に甲被せたる如く、町は東より西に亙りて美しく築かれたり。古來敢爲と血氣とを以て名ありと傳へらる。電車岡を登り盡して Piazza Danti に到る。直ちに Municipio の古趣饒かなる Gothic 型なるを入りて、Pinacteca に Umbrian Arts を見る。Fra Angelico, Gozzoli, Bernardino, Perugino, Signorelli 等の作品の數多くを集めたり。Umbrian Arts は Siena 市を中央として起れる畫派にして、靜肅典整を以て旨としたれば女人の相、殊に芽出度きを以て名ありと云へり。Perugino の畫品殊に高し。Fra Angelico に到りては、美容の中に淸純の氣聳え其作品に變化なけれども、敬虔なる心情の流露は、見る人をして彼の失點を忘れて彼を愛せしむ。されども彼の畫風は最も發展を缺ける畫風なり。宜なり、彼の流跡遠きに從つて愈〻命なく、遂に頽然として形式に嵌入せられし一族の畫人を生ぜし事や。
Cambio di Banka を見る。Perugino が畢生の傑作なる壁畫のある所なり。形體の整肅と composition の完結に於ては、殆んど完域に達せりと云ふべし。

中食後 S. Bernardino に到る。Florence の彫刻家 Ajostino d'Antonio di Duccio が建つる所(1457—61)。Fronte の浮彫は高村光雲氏の諸作を思はしむ。自在縱横なる衣襞の陰に、Gothic の趣味を含みたる人の形あり。音樂に近き行き方なり。美術學校をも參觀したれども云ふに足らず。

Universita に到る。Museum of l trascan and Roman antiquities と云へるに有益なる蒐集あれども、我の乏薄なる智見は遂に其眞價を知るに由なし。

かくて道の上に、二人行交ふに足る計り橋を架して通路となせる古風の街を通りて、S. Severo に到る。一壁畫に Raphael が後年の發達を卜ふ可き作と、Perugino が頽老の力弓の末の如きを一つとせるがあり。滿幅泣けるが如し。Pizzo d. Prone に到りて下瞰、東方北方の丘や原や秋の日に浴して冷かに輝きたるを眺め、Cathedral を見、後汽車に投ず。此市海拔 1615 ft. 人口二萬餘を有し Umbria 州の首都なり。

日赤々と夕暮るゝ頃 Lago Trasi を過ぐ。Hannibal が陣して、霧に乗じて羅馬軍を潰走せしめし所なりと云ふ。Tebere と Arno とは此に南北相分るゝなり。

夜汽車の様を何と云ふ可きなど、稍ゝ風邪を得たる壬生馬が云ふに、「一言もて掩へば不定の姿なるにや」と我答ふ。「死屍を揺る様なり」と彼も云ひて、二人とも夢と幻との間を行く。汽車九時頃 Florence に着す。旅館の馬車の窓を悉く閉ぢて外套の襟を立つ、ちら／＼と街燈に照らされたる Duomo の巨影などに驚く。如何なる町と定めんには夜餘りに暗かりき。

Pensione Lucchesi, Lung-Arno della Zecca No. 16.

十月二十四日。（此日壬生馬）水曜。吾等が宿りしは緑茶の濁りし色のアルノ河に臨める Della Zecca の Pensione Lucchesi といへるなり。今朝は天晴れず、白霧濛々として、この美装の天才と藝術の市は一層の輕妙なる調和を呈せり。圓堂と鐘塔の其白霧の間に幽かなるを想へ。其下には古き宮殿あり。宮殿の裡には千古の名作を藏するを想へ。嘗て幾十の天才此川に臨みて、我等が想像し得ざる程高遠靈妙なる自然と人生の内部を考察し、美術に潮の如き感興を寄せたり――其後幾千の旅人は今我等の如く其天才と作品とを愛慕して來りしぞ。彼等皆死して我等殘れり。我等去りて又誰か來る。來るもの、來りしものは皆その知識の戸を開いて此大寶を藏し歸らんとせり。然れども石上に靜思せし人 (Sasso di Dante) に映ぜし Duomo の高と大とに、Dattistero に "Mio bel San Giovanni" と嘆ぜし美と調諧と、亦誰の頭腦にかうつる。Firenze に來り思ふものは高遠なる知識なり。倦む事を知らざる考察の理性なり。彼等の詩、彼等の美術はかくの如き高さあるものなり。彼等は人生の職場にありて悠々として勝利を得、更に智界の天に放遊するに似たり。讃む可きは神、讃む可きは神が人を通じて自然に觸れしめたる知識の複雜、高遠なる哉。

Piazza S. Croce は程遠からず。其處には Dante の立像あり。四つの盾に其作品の名を記せるが彼を圍めり。近くには Pal. dell' Antella 及び Agostino della Seta の如き活版場などに當てられたる、又フロレンスの富みたるを知る可き也。

Duomo (La Cathedrale di Santa) に入る。堂は市の中央、其偉大、壯麗一々記す可き閑なし (479 枚)。圓塔に登る。尚は霧

晴れず。到れば即ちローマの S. Pietro に登りし日を思ふ。玆は單に Campanile di Giotto 及び Torre di Palazzo vecchio のみにても奇鋒人を驚かすに足る。Battistero (477) と其銅扉 Lorenzo Ghiberti の作なるなど見て歸舍す。

〔以下武郎〕Florence は物乞ひの多き市なり。世に捨てられて世を捨てず。人の憐みを受けて人を呪ふ。親ありしならんも今は他界の人。子なしたらんに今は相知る事なし。夜々に物思ふ事多くして、晝は働く可き腕を空しく垂れたり。我が欲するところは他が欲するところならず。昨日睦びし友は今日の仇敵。歴史なき過去を創りて希望定かならぬ未來を追ふ。要なき嘆き心を彼も棄けて、たまさかには人戀ひつる事あらんも、其花は摘む人も見る目もなくて枯れ凋みぬ。訴を聞かんと云ふ耳なければ其口はもだす。其眼には日の光も月の色も只一つなり。人の嘖笑を買ふ可きむさき衣をつけて、平然として知らざる如き其心悲しからずや。我は物乞を憐れむ。

午後、壬生馬は風邪の爲めに宿に殘り、我はひとりにて Santa Croce に到る。ダンテ、ガレリオ、マキヤベリー等の monument あり。Giotto の fresco 大にして尊きが、改描せられていたましき限りなるがあり。

十月二十五日。〔此日壬生馬〕木曜。醜矮なる我等二人は、未だ朝、往來のしげき頃、傲然として Ponte Vecchio を渡る。橋の左側には二階をなせる長廊ありて Uffici より Pitti 宮に通ず。其下及右側には露店の如き、金銀細工、木細工、繪端書、寫眞屋等ありて客を招く。往來の人には近在より市に入り來るもの、工場に行くと覺しきもの、學校に行く生徒、小さきを伴ふ下女、買物に出づる主婦、想像以外に多きは見物の外國人なり。馬車、自轉車、荷車多數にてその樣何と評すべき。しかも其間には中世紀の懷古あり。古き繪卷物に市の繁榮の圖を見るが如し。彼等我等を見物す。我等彼等を愚物視す。彼等微笑す。我等不快を感ず。

Santo Spirito 寺に入る (1433—90)。フロレンスの大部分の寺院は外面の剝脫して石骨を表はせる、これもその一つなり。Filipino Lippi, Raffaellino del Garbo などあれど取り出づべき作にもあらず。

Carmine 寺 (1268) に到る。數步のみ。此寺には彼の有名なる Massaccio 及び Filpino Lippi が壁畫ある唯一の Cappella

を殘す。他は白堊若しくはバロックの畫を以て塗抹し終れり。大小六面、內四面は左右にありて其大さも構圖も注意を牽く。M. の Pietro と魚腹の金、及び F. の Pietro が王子を蘇生せしむるの圖、これに對しては F. の群羊を淸むるの圖、其下に F. の Pietro の十字架あり。窓より入る光線も多く、圖も最もよく保存せられたるもの丶一つなるべし。未だ Gitto の面影も Cimabue が香も殘れども、構圖の複雜となり、明暗の法を知り、表情の種類を增し、個性を加へ、色法の巧となれる當時にありて、大々的發見進步たりしや云ふを俟たざるなり。か丶る歷史的に興味ある作品に先づ一層の尊敬を拂ふは一般の人情と云ふべきか。

出で丶 Galleria Pitti に到る。繪畫の名作を蒐むるルーブルは知らず、伊太利第一となす。多年目に觸れ自ら畜へ自らの書齋を飾りし圖の原畫が、目前に表はる快味はいかばかりぞ。一々取りて評價するの閑だになけれど、要するに復古前期の作品にはよきもの少く(一つは壁畫皆無なれば)、後期のものは集め得て遺憾なし。ラファエルの十三品、アンドレアの十三品(達筆なれども好ましからず)、チチアンの重要なる作、ペルジノなど一つ一つ玉の如く磨きたる作のみ選びて、善美の宮中に藏む。羨望す可き事なり。されど眞の美術の翫賞はか丶る中にあり得可きや。

斯の如き Galleria が、か丶る繪畫を翫賞すべき方法に適せるや、是は疑問なり。少くとも理想的の陳列法にはあらざるなり。ローマの近郊に Villa Madama を訪ひし夕暮は、ラファエルが下畫の Amore が畫のいかに耀きたるぞ。

午食後 Accademia delle belle arti を訪づる。先づアンゼロが Davido あり。余は有名なる程に作の値を認むる事能はざりき。その頭は大に、その手は大に、其表情は陰性的なり(非女性的)。シエナ、フロレンス派の宗教畫(多くは◯形をなせる金代の位牌樣のもの)ありたれども千篇一律的にして數日來幾百を見たる眼には厭きたり。要するに宗教畫家も壁畫に於てこそ高下あれ、位牌を描く時はあはれなるものなり。宗教が僞善的束縛方便のあと寧ろ憤慨すべし。

ペルジノ、ギルランダイヨもあれど、茲には唯一つボッチシェリが「春」を記すべし。我等はこの世界的名作の前に立ちたる今日此時を全生涯忘る丶事なからん。これよりよき畫を見る事又とあるべきか。あり得べきか。恐らくは疑問なるべ

し。寫眞版を見たるものは、見ざるものより此原圖を想像し得ざるならん。か丶る程度に於て我々の想像を超越せり。汝愚少、畫師と名のるを恥ぢよ。筆をとつてカンバスに向ふを恥ぢよ。汝の理想の低度なるを恥ぢよ恥ぢよ。而して今汝の此畫に對し得たる喜びと惠みとを深く謝し永へに思へ。汝は偉人に逢はんことを求めたるよりも多く何故に此の機を待たざりし。それよりも尙ほ多くの感化を得んと願はざる？　汝が心愚暗なればならざるか、三省せよ。

S. Lorenzo の內院のみ見てアンゼロが晝夜の彫刻は見で歸る。夕食は七時、食卓には獨、露、米の御バアサンあり。きまりきつた話をして食事をなす。

氣候、身心に適すと云はざる可からず。余の風邪も診察のよかりしため全快せり。

十月二十六日。金曜。晴。朝は稍〻深き霧。此市に羅馬の如く心より晴る丶日とてあらざるが如し。

Basari によりて造られし Palazzo degli Uffici なる Uffici Gallery に到る。Palazzo Vecchio の望樓を背景に見る回廊の美しきを經て、Arno より行けば右手なる戶より入る。古今諸家の自畫像あり。Pre-Raphaelities の二家あり。此畫派の畫を見たりしは今日が始めてなり。更に形よき階段を昇れば、東の回廊あり。曲線を用ひざる嚴肅なる構造にして、一端に立ちて他端を望めば、中々に趣ある家匠の苦心なり。諸名畫家の sketch、石彫像及び早き頃の Florence 派の畫を掲げたり。第一者殊に我等の注目を惹く。西の回廊も亦大差なし。興に入りて眺めたれば sketch の觀覽のみにて歸舍す可き時は逼りぬ。僅かに殘れる暇を盜みて Senole Venete, Sala Toscana, S. d. Nascita, S. d. Lorenzo Monaco を見る。Filipo Lippi, Botticelli, Leonardo da Vinci, Michael Angeeo 等の作あり。Sodoma の S. Sebastiano も亦あり。Lippi にては "Annunciation" の神韶、Botticelli にては「Venus の誕生」「聖母」の純透（此二字に大なる苦心あり）Leonardo の暗幽、Angelo の孤峭。Titian 等 Venice 派の諸作亦多し。"Francesco Maria della Rovere," Duke and Duchess of Urbino の肖像と、"Flora" と稱せらる丶美しき作など比べ見るに、彼が舊衣を脫して新衣を着けたる跡明らさまなり。觀覽半ばにして歸舍、中食。

午後 S. Marco と Monastery に到る。寺はさして云ふ可き事なけれども、Monastery は我等に忘る可からざる印象を與へ

たり。戸を入れば荒るゝに任せし Court あり。凡て伊太利の寺は日本の本願寺流のそれの如く、市の中央に建てられたれば、眞言、禪などの神々しき境にあるを見慣れたる我等が眼には、寺と云はんよりも集會所と名づけん方ふさはしく思はるるに、獨り Court のみは何處にても市の塵を受けず顔なる寂びを持てり。大方は方形なる中央に井戸若しくは噴水ありて、其周圍には芝を植ゑたり。花はあるもあり、なきもあり。取り繞らされたる回廊は、趣ある柱の列に穹狀の天井を張りて、石疊の秋は殊に靴の音高く聞ゆ。周圍を取り繞らしたれば日光は常に回廊の半部を照らすに過ぎず。彼方なる隅に若き Dominican の白衣着けたる尼ありて、十字架の基督を寫生しつゝあり。被物深く着けたれば顔は見えず、手の美しき人なりと知りぬ。

回廊の一庵に十字架上の基督を中央に諸聖の竝び立てるを Angelico の筆にせるがあり。暗き階を上りて Monastery に入る。Fra Angelico の名作續々として我等を迎ふるは茲なり。

戸を排して眼を轉ずる暇もなく向ひたる壁には Anonciation あり。天法を受くる聖母の面には、期待の決意あり。膝を屈めて恭しく使命を奏する天使には驚美の面ばせあり。凸凹相合ひて僅かにも忽せならず。其感情の純淸にして虔微なる、見る人の心をして靄々として深く懸れる一縷の藕絲をたどるの想あらしむ。其左なる第一の小室には「マグダレナのマリヤ基督に遇ふの圖」あり。雲、木、草、人、寸毫の塵芥なし。其他壁畫の數、一庵毎にありて十指を盡さんとす。前にも云へるが如く、Fra Angelico の天受は大ならず、又廣からず、深くさへあらず。例へば群山の懷に湛へられたる小さき池の如し。其池は容易く周圍を繞るに足る可し。危巖の聳ゆる事もなく、大樹の立てる事もなく、風の落つる事もなく、魚の躍る事もなし。唯澄然として淸き水、池の凹めるに滿つ。近づく人、水に波紋を成さん事を恐れ、思はず足をそばたて袖を抱く可し。怒濤とは相知らず。頽嵐とは相關せず。されども自然を友とするものゝ眼には、此池は儼然として怒濤と頽嵐と共に自然の寵兒なり。

サボナローラの庵室あり。三部より成る。耳にかすかなる市のさゞめきを聞きて、罪惡と奢侈とに降り行く人の世を嘆き

つゝ讀みたりと覺ゆる聖書と法話の草稿とは、今も其處なる古き机の上にあり。殊に我等が想像の力をして其當時を深く想はしむるは、彼が大道の說法に揭げたりと聞く手幡なり。「今は末法の世なり、昔に歸れ」と云ひて、市民をして美衣を燒き、美音を遠ざけ、涙と祈とに親みて、此「花の市」を變じて基督の磔せられしエルサレムの午後の如き寂寥に入らしめし彼が氣鋒は、宛ら我が日蓮を想見せしむ。

後 Piazza Michael Angelo に到る。岡上の眺望と夕陽とを樂しむ。

十月二十七日。〔此日壬生馬〕土曜。朝、昨夜の雨のあとより後、晴れず降らず。

今朝も、昨日兄上の細記し給へる Uffici 宮に到る。中には今日始めて見たるものあり。Tribuna の壯觀の如きもその一つなり。僧 Lippi の奇鋒なる、Botticelli の俊銳なる、彷徨するに忍びざるものあり。Sodoma の S. Sebastiano も多年寫眞に見しものを目前にしては、轉た感嘆の深きを覺ゆ。何ぞ流るゝ泪の聖くして、その肉體の傷みあれども輕きや。色彩の淸雅なるも賞するの遑なし。われは目を掩うて去る。

ニヨベの室（古ローマ、二十人餘にて一群をなすべきもの）、Rubens の室、Van der Goes の室、Baroccio の室、Giovanni da S. Giovanni の室、彫刻の室、デッサンの室を見る。一々は書く折なし。

午後、アンゼロが不朽の作を藏むる聖ロレンツォ (Cappella principe e nuova) に到り、去り難く靜觀に耽る。

Chiesa S. Maria novella と其古色掬するに餘りある Chiostro に到る。黑き壁畫の間、繁き草の中庭ありてバラの紅なるが咲けり。

Or San Michele の方形なる寺に入りし頃は夕闇となりぬ。親は子を敎へつゝ、案內をなす。子は親に習ひつゝ案內をなす。暗き寺內に踞する幾多の老衰の婦人と、燭光と、香と煙と、夕の鐘と、ステンドグラスの色合とを思へ。此寺は十三世紀のゴシックにして、內なる Andrea di Cione の Tabernakel と共に名物の一つなり。外觀の古純なるを愛す可し。

アルノの岸にて菜の花求めて歸る。おそく迄語り更かして眠につく。

十月二十八日。〔此日壬生馬〕日曜。曇り、少し風。昨夜、屢々 S. Sebastiano に似たる人の笞うたれ、泣き悲む悪夢に襲はれたるためか、此朝も氣分勝れず。未だ朝霧の川の面を去らず、Colli（所謂）の紅葉も白き頃、岸に立ちて川の流のゆるく下るを見る。F市を去るも一日とはなりぬるよ。一日は Manucci を訪づれたれども、見る事果さゞりき。彼には逢はざるべしなど、境につれ時にふれて人は考ふ。十時には Badia に Filipino の父 と Botticelli の變化の跡面白きを見終りて Museo Nationale に到る。武器、石像、印石、陶器、織物、銅像（Donatello の作多し、アンゼロの Davido と彼との比較）紋章、寶石類、いと貴きものなり（地獄、極樂圖中にダンテの有名なる像あり。彼の S. M. Navellaのものと考へんは面白き事なるべし）。

電車 Fiesole に行く。エトルスカンの古市なり。フイレンツヱの大谿谷に人家花の如く白く赤く、寺は立ちて語らんとするが如く、秋の黄、緑なる草木茂りてこれを何にか譬ふべき。寺、僧院、Museo, Terme romagna 及び etroscano の遺物あれども、自然の勝りたるに若かず。貧民來りて花、麥藁細工を賣る。

雨雲はフロレンス市の上に、大谷の上に、アペニノの山の上に、重くかさなり合ふ。此アルノ河に臨める岡、アペニノの山上に住みたりし人民は、春の菖蒲、夏の百合、秋の紅葉する花の町を眺め、其美しさに引かれて彼處に移り住みたりなど覺ゆ。Villa Palmieri の白き壁や、低き丘上に見ゆ。Decamerone に二十人の佳人才子が集ひて彼の物語をせしと書かれたるはそこなりとか。ベックリンが晩年の作をものせしその眠りし別莊もありとよ。

此地に愛らしき子供の集ひ三つを見たり。一つは花賣り、一つは「去る美しき日」と「蝶の歌」を唄ふ群、一つは無花果の枝にさがりて笑ふ群、一歩々々我等は、子供の世界の別に偉大高尚なる區劃を宇宙の一隅に保てるを見る。保てるを信ず。而して我等の再び歸らざる悲しみは、これを見る事によりて聊かの慰藉を得ざる可からざるなり。世の父兄たらんものは、如何に細心なる注意をもつて彼等の戯むるゝ日を保護せざる可からざるか。一度破れたる瓶は、遂に新たなるものを以て代へざる可からず。

橄欖、白楊、川楊、サイプレスの林と葡萄、花園の間を急下して、電車は再び市に歸る。Fiesole は依然として北東に見

ゆ。Duomo も塔も何れとも定めがたくて。Arco Trionfale—Viale Filippo Strozzi—Viale Umberto と市の東より北、西へと外郭をめぐる家並も凡て新式にして、道路も廣く甚だ衞生的なり。衞生は近世の誇りなり。これ丈けにて彼等は生くるに足る。道傍に殘りたる古壁のあはれ氣なるも取り除くべし。日本人が、東京市を悲しくも惡化するにも劣らざる可し。Le Cascine には夕方の散策なるべし、日曜日の事なれば群集蛾行す。

此夜は明朝出立の支度す。

十月二十九日　月曜。雨。朝四時半、點りたる電燈に眼を覺して、Bologna に旅立つ。汽車は六時近かりき。雨のそぼ降る中を、我等は Florence のなつかしさと別れたり。

暗ければ腕こまねきて睡るともなく眼を閉ぢて、夜の明けはなれたる頃窓外を望めば、我等は既に Pistoia を經て Apenine の山中にありき。伊太利の脊骨となれる此連山が Alps となせる鋭角の山懷、Po 河をさしはさみて東に開けたる Lombardi-Emilia の大平原を北に眺めつゝ立てるが Bologna なり。着きたるは十時。沿道の風光、足柄を越ゆるが如き心あり。そぼ降る雨の中に立てる小驛に、瘦せたる水、早瀨をなして流れ、小さき家、崖によりて立ち、停車場の倉庫に鷄のうづくまり、路行く人の足つま立てたるなど、寒村に秋來りし樣は憐れなるものなり。

電車にて Piazza V. Emmanuele に到り、其南に立てる S. Petronia を見る。市の守護聖を記念せるものにして、工は 1390 に起され、當時の市民が繁榮の印として其大いさ伊太利第一たらん事を期せしも、其抱負は此大建築を成就せんには餘りに小さく、業半ばにして其企圖を變じて大成の運びに至らざりしものなりと云ふ。内部の均衡は Florence の Duomo を凌駕するものありと云ふものあれども、我等が眼はそを發見し難かりき。内龕の畫は Francia 等 Florence 畫派に對して僅かに自支をなし得たる此市の畫家によりて成れども、一見して Florence 畫派を去る事甚だ遠きを見る。

Museo Civico を見んとて、我等は計らずも Bologna が誇りたる舊大學に遊びぬ。瘦せて丈高き人出でゝ我等を導き、先づ其圖書館を見せしむ。170,000 册の書籍と 2700 の草稿とは其中に貯へられたりと云ふ。Irving が其輕快の筆に、指して學

者の墳場と云ひしものも、眼のあたり之を見れば尊さに心のときめくを覺ゆ。塵を蒙りて表紙のみ人の目に觸るゝ幾百册の書も、血もて成りし頭腦の所産なりと思へ。若し假りに此處にうたゝ寢して深更に至らば、我等は必ず名を擧げて或は人に知られずして世を去りし學者の靈魂が、交る〳〵來りて悲しき物語をすべしなど思ふ。壁には描きつめたる紋章ありて各紋章の下には、此大學が世界的名聲を有せし時來り遊びし學生の名を記したり。來り遊べるものゝ中には、ブリテンあり、獨逸あり、ゴールあり、印度あり、亞米利加あり、支那あり。其他全部精巧なる木造の解剖室あり。當時其道に一條の貢獻をなしたる學者の立像は、今も嚴然として室に入るものを見守れり。(此處空白)も亦戸を排して入る左方なる段上に立てり。

晝飯喰へる料理屋にて、日本を好む事伊太利よりも甚しと云ふ伊太利の海軍士官に會し、別るゝ時は頻りに kiss されたり。幼なかりし時を除きて kiss せられたるは抑ゝ之れを以て嚆矢とす可し。

Academia di belle Arti に此町の畫派が殘せる作物と Raphael が S. Secilia の巨畫を見(尚午前には S. Pietro をも見たり。市第一の大建築にして殊に其 alter には肅整なる方柱を用ひて捨て難きものなりき)、再び電車に乘じて停車場に到る。雨は小休みなく降り續けたり。

Bologna の誇りは近世的の組織を有する學問の淵叢となれるにあり。嘗て市民法王黨の有力なる股肱となり、獨立市の間に強大なる威勢を示したるの外、今日に至り尚眠るの外を知らざる此市は、此一事あるによりて眠れども死せず。

三時近く發したる汽車は平原の中に入りて山を望む可からずなりぬ。日本のそれの如く汎く耕されたる畑の間には、規則正しくピヨッポ樹並び植ゑられたり。亞麻の產出亦多しと云ふ。落日などの美しき所なるべし。

Ferrara と云へるにて、面白き旅の伊太利人ミラノ歸りの心も財囊も輕く、車を降りて家に歸り行くを送れる頃は、日深々と暮れぬ。空曇りて夜となる日は、希望なく淋しさの極みなりなど、壬生馬と語り合ひしは暫く前なり。Padua は綾目も分かず過ぎたり。右も左も水。灯の寥く映じたる中を汽車の行く音のみ高くて、やがて Venice に入りぬ。睡り入りたる幼兒を接吻と抱擁もて覺さんと努むる母の美しさを見たり。

Gondola に乘るに夜は暗くて風情に逼る。壬生馬は Gondola の極めて詩的なるを賞して措かず。寒さをさへ忘れたるものの如し。我はそれにも增して開港場の人の心の厭はしさを思ひ續けたれば快からず。宿に着せる後は二人とも此町の人を憤りぬ。

窓より下瞰すれば狹き町に數多の人行き交ひたり。夜は中々に寒かりき。Hotel Cappello nero (Presso la Piazza di S. Marco)

十月三十日。火曜。曇。むつくり起きて、宿屋で飯を喰ふのが厭だと云ふので、Piazzetta に行つてパンをかじつた。眼の前に S. Marco が、東洋あたりの宮女が酒に輝いた眼元で長椅子の上に臥ねてゐる樣な姿である。鋪石の上には鳩が群れて居る。外套を着た男と、ショールを羽織つた女が閒遠に珈琲店の前を通る。

海岸に出て見ると風が薄寒く波が稍〻騷いで、岸には形の美しい Gondola が舳を竝べて居る。Palazzo Ducale は直ぐ右手に見える。Gothic 風の柱や、capital や彫刻が一つ一つ形をちがへて美しく回廊を形造つてゐる。上にもう一階其上の回廊のない三階の大理石とが、潮に吹かれてさびた色になつて居る。入口を這入ると中庭がある。Gothic の下から上へ延びよう延びようとする其各尖端に、形のいゝ大理石像が立つて居て、二つある井戸の靑銅の側が古い鏽で靑い。眼まぐるしい筈の、立つたり居たりした姿が、此處ではさうでなく其中に一種の諧調を感じて、惡くないのが不思議だ。階もいゝ。階を登つて行くと Tintoretto, Paolo Veronese, Palma, Giovane 等 Venetian 派後期を代表す可き畫家の壁畫に滿ちた室々がある。Venice と云ふ所は何もかも特有な町で、伊太利全體が趨つた軌道を共にしない趣がある。繪畫の如きも確かに特殊の傾向を有して、華麗な色彩と渾琢な筆路と現世の安樂とで香うて居る。Botticelli の宗教畫と云ふものは、Botticelli の作を宗教として見る人の眼にのみ宗教畫であるやうに、Venice 畫派の天國は Venice 人にのみ天國である。Venice は希臘人を超越して東洋人の中にのみ見出し得る程の現世崇拜者である事が判る。單純直截に傾く形體の美よりも、渾積絢燦に赴く色彩の美を渴仰した事も判る。Lear の町ではなくつて Antonio の町である事が判る。Ophelia の町でなくつて Bianka の町である事が判る。

San Marco は美しい御寺だ。内部の mosaic の天井と壁畫とは他に見る可からざる絢爛を極めて居る。よかれあしかれ其

地方の全精神が殘る隈なく顯はれた所に、微塵も他の摸擬を許さゞる美が發揮せられてゐる。此寺の設計をした人の頭腦には、當時の Venice が、Venice の全體が小宇宙をなして居つた事であらう。

Palazzo Ducale で連れになつた舟橋と云ふ建築家と一處に舟で Isoladi S. Giorgio の S. Giorgia を見、それから La Giudecca の Il Redentore と本街の S. Maria della Salute とを訪うた。最後の一列の他の異つた圓堂形なる外には云ふ可きこともない。岡に上つてから Pt. di Riallo を見て夕食を Marco の近所でしたゝめつ、長話をしてから別れて宿に歸つた。五十九度。

十月三十一日。水曜。雨。朝、船橋君が來て、誘はれて外出。S. Marco の廣場から川蒸汽で對岸に渡つて Accademia di Bella Arti を見た。初代から末葉に至るまでの Venetian masters の作物が大變よく集めてあつて非常に面白い。此處の畫を見るには Raphael や、Leonardo や、Giotto を見るのと同じ心持ちで見てはいけないだらう。Vittore cardaccio の畫なぞは歷史的研究には殊に價値のあるもので、彼から發展した Venetian School が色彩に形式に如何なる連絡を保つて居るかを見るのは非常に愉快だ。Paolo Veronese の "The Supper in the House of Levi," Paris Bordone の「漁人聖馬可より得たる指輪を Duke に捧ぐる圖」、其他 Titian の Assumption, Pieta（彼が九十九歲の作、最後のもの）及び「洗禮のヨハネ」など稀有に難有い作と云ふ可きものであらう。

それから壬生馬の畫友なる伊太利人に導かれて、丸で迷路のやうなこの町の細道をうねり廻つた末十二時近くMuseo Civico に達した。雨は依然として降つて居る。Museo Civico から Grand Canal を眺めると、水の色が類のない色彩を帶びて、それに古い建物の色褪せた赤や靑や黃な色が映つる樣は、Arno 河畔にのみ比儔を見出し得可き眺めだ。

Museo の court-yard には、古い Romanesque の桂冠が轉つて居るが、一つ一つに見所が多い。階上には武器が少し、畫が少し、試畫、スケッチの類が少々あるが、急ぎ旅の眼には留り難いものが多い。分館に Michael Angelo の Leda の copy がある。技術としてはしつかりしたものだらう。

葡萄棚が家の前にあつて窓から透すと葉が美しい。寺の鐘がつい近所で聞こえる所で中食をしたゝめたが、多からざる畫

餉に一時間を館で費した。

S. Frari と云ふ寺が S. Marco に次ぐ壯麗な廣大な御寺だと聞いて三人で詣でたけれども、修繕最中で何も見る事が出來なかつた。形なぞから云ふと矢張ごて／＼した復興後期のものだ。こんな寺を澤山見て歩いて居ると伊太利に來た甲斐がなくなるやうだ。

S. Marco まで來て三人で此美しい寺に名殘を惜んだ。Symonds の "Venetian Medley" を讀むと、一夜大水 Venice を襲うて Palazzo Ducale も S. Marco も、見るが中に水底に沒し、Campanile は水の上に宛ら葦のやうに戰いたと書いてあるが、Symonds の夢に戰いた此塔は、我等の現には形も影も消え失せて、新たに初められた大工事が其跡を穢して居る。暗くなつたから船橋君とは獨逸での再會を期して、別れて家に歸つた。夕食後、稍〻激しい風を犯して海沿の廣街を散歩しつゝ色々な話をした。此近邊に一つの井戸があつて、其處に水を汲みに來る若い女の姿が、優美である事なども其中にあつた。總じて此町の女は黑い色のショールを肩からかけて居るが、しめやかで、なよやかで、非常に女に似合ふ。途中で雨に遇うた。家に歸ると壬生馬の知り合の Naples の外國語學校の日本語の敎師が來た。餘程變つた面白い人であつた。夜は晚くまで話をした。

十一月一日。木曜。雨。六時半頃宿を出で、被ひ物のある Gondola で停車場に行つた。着くと立つまで雨で、Venice では雨空の外に何も見なかつた。羅馬から心賴みにして來た月も遂に見ずに終つた。然し若し Venice を「悲しい市」と人の云ふのが本當ならば、我等は泣いた Venice をよく眺めた譯である。

七時十五分に汽車が出て、割合に單調な沿道の雨を見ながら、十二時少し過ぐる頃 Milan 停車場に着いた。直ちに馬車を傭うて、サルトリと云ふ壬生馬の交友上の友を訪うたが、宿が變つて判らない。仕方なしに Hotel Falcone (Via Falcone) に投宿する事にして、直ちに博覽會に赴いた。日本の水產館で日本部の委員に遇ひ、美術館を見て失望を贏ち得て、すごすご雨の中を宿に歸つた。早寢。Hotel Falcone (Via Falcone)

十一月二日。金曜。雨。今日も亦雨。朝、サルトリ氏を訪ひ、伴はれて再び博覧會に到り、終日會場の中にあり。博覧會ほど第十九世紀的傾向を暴露せるものはあらざる可し。佛國の出品物に至りては、注視を惹くもの所在なきにあらず。器械部は精巧を極めて、我等其道の知識淺少なるものをして喫驚の外なからしむ。

夜 Corso に散歩。爲す事なき儘に活動寫眞など見る。大なる Duomo は其傍に空を拔きて聳えたり。

十一月三日。土曜。雨。亦雨。朝、壬生馬、頭痛と嘔氣とを催す。朝、サルトリが周旋し吳れたる家に移る。夕に至りて壬生馬の患をこたる。我は Symonds の "Sketches of Italy" など繙讀す (Via Agnello 6.)。

十一月四日。日曜。雨勝ちの曇。幾度か晴れ間を見せて雲は忽ち空を閉ぢぬ。世は秋を經て既に冬。黃葉は尙枝ながらに、人の襟かき合せて街を往く樣、哀れむに堪へたり。

朝、共に連れ立ちて Cathedral を見る。我等が此國に來りてより、佛國に發達して其極致を極めし Gothic 型の純粹なるものを見るは、今日が初めてなり。凡そ Roman, Romanesque より Renaissance に至るまで、伊太利の建築は常に北方の諸國を指導したりしが、獨り Gothic に至りては其發達全く北方にあり。此寺院の如きも其竣工に長日月を要せしは、偏に獨逸佛國の建築者に協議安問せし事屢〻なりしが故なりと云へり。Gothic 建築の本意は殆んど極端に至らんとするまで音樂的なるにあるべし。而もその樂音は單純なる樂器の出し得可きそれにはあらずして、まさに合奏樂のそれに似たり。嚠然として、音色を異にせる樂聲起りて空氣を攪拌し、一は高く上り、一は低く下り、他は滯り一は伸び、上下伸縮自在に規矩を縱横して而もこれを大聽すれば、あらゆる音色を貫通する無聲の聲、切々として耳心を貫き來るが如く、立ちて Gothic の寺院を望めば、空際をかぎる堆石の上下宛ら一個の音樂を聞くの想を禁ずる能はざらしむ。戸を入れば、內部は暗みて人の面も定かならぬに Stained glass を漏るゝ晝の光、琥珀を溶きたるが如き色に染えたり。今日は安息日なれば詣づる人々多く、永く留まり見んには便りよからず。一亙り見たるのみにて踵を返し、Leonardo da Vinici の monument ある Piazza を經て Palazzo di Brera に Pinacoteca を見る。

Fresco の面白きもの多き中に Borgognone, Bernardino Luini などの作最も注意に値す。すべて Luini の作は自己の發展確かにして想像も亦豐かに深く、運筆にも輕々しきを加へざれば、何れも觀者の注意を牽かざるはなし。尙深く學ばゞ、彼は想像以外に美術の大觀を開くものある可し。Titian の三作いつもながら危なげなり。Raphael が Perugino の桎梏より超脫せし頃の傑作なりと稱せらる。"Nuptials of Virgin" は畫家が年少なりし頃の豐麗なる感情と、肅整なる美意識とを披瀝して餘蘊なきものなる可しと雖も、彼が大傑作として、彼にあらざれば成就する可からざるもの其處にありと云はんは如何ならん。Veronese の諸作亦注意す可きもの多し。

中食後、散步して第十八世紀に Roma の Pantheon の形に擬へて作られたる San Carlo を見て歸舍。壬生馬は就床して夢に遊び、我は戯畫して夕に至りぬ。

十一月五日。 月曜。雨。依然として雨。朝、奮發して武郎獨り博覽會に到り、終日を費して全部の觀覽を終る。雜然として頭に亂入せる觀想を記せんには、此日記すらも餘りに尊し。

夜、諸方に端書など認む。又旅費の概算などしてつまらぬ事に驚く。壬生馬の風邪は快方なれども未だ全癒せず。夕刻、渡邊氏來る。

Symonds、其の "The Gondolier's Wedding" に於て Gondolier が生活の一般を披露せり。其略に曰く、運河の此處彼處に、Gondola の繫泊所あり、Traghetti と云ふ。London に於ける客馬車待合所に比すべし。第一目的は往來の人を彼岸に致すにあれども求めに應じては其繫泊を離れて運河を上下する事あるは亦彼の客馬車に異ならず。市廳制規して一 Traghetto には必ず二隻以上の Gondola を備へしむ。今一人の壯丁ありて Gondola の生活をなさんと欲せば、此空位ある Traghetto を求めて其一員たらざる可からず。彼其一員となるや、彼の舟は一定の番號を受け、彼は一種の guild の會員となれるものにして、年次其所屬の guild に一定の金額を納むるなり。金額は Traghetto によりて異る。其收入多くして市廳の課稅すること多きものにありては、會費も亦多からざるを得ず。最高を二十五フランとして最低を七フランとせば大過なからんか。Symonds

が知れる Traghelto の中に Madonna del giolio と云へるがあり。岸に沿ひたる葡萄棚の下に、古く寂びたる Venezia 派の扁額かゝれり。好奇の人ありて奇價を薦めたれども、估る事をせざりしなど記したり。

Gondolier が一日の收入は、所によりて差ある事固よりなり。總じて Grand Canal にあるものは得る所多く、Gindecca などにあるものは Venecia の市の營みを窺ひて安き心もなしと云ふ。美くしき Gondola 持ちて心利きたる若者が一日の收入は時に十五フランを過ぐる事さへあれども、時々の上下ありて頼む可からず。されば多くの Gondolier は外遊の客を求めて、月極の俸給に入金の確實なるものを望むもの多し。一日の所得五フラン內外に過ぎざれど、二三年の後には一隻の新しき Gondola を購ひ、妻を迎へ家を構ふるに餘りありと云へり。Gondolier のかく一人の客の常傭となるものと雖も、籍を Traghetta に置くは其誇りにして、其が爲めには Traghetta によつて得る所なきも、多少の金額を入れて其會員たるを望むと云へり。「雲州」「讃岐」など呼び交せし昔も偲ばれて、彼等の間に名を呼ぶは少なく、多くは所屬の Traghetta の名に番號を加へて相呼應す。

新しき Gondola を求めんには千フランを要す可し。其古りて用に堪へざるに至りし時、木部のみを賣拂すれば八十フランの償還金を得可し。新しき木部を得んにはこれに二百フランを補足せざる可からず。Gondola の生命は六年より七年なる可し。Gondolier たらんとするものは多くは先づ古き船を二百フラン內外に求め、使用の間に補塡す可きものは補塡し、木部の用をなさゞるに至りて新しき木部を購ひ、之に舊在の金屬其他の裝飾品を施して新しき Gondola の所持者となるなり。されども Gondola は不斷の修復を要す。ぬるみて鹽氣の少き海水は最も海藻の發生に適し、夏の間は必ず四週に一度其船腹を淨めざる可からず。是を一度する每に彼は五フランを拂はざる可からず。其他諸附屬品の消耗、船體の塗代など數ふれば Gondolier の眉を顰む可き數々の事多しとなり。

水上に住みて定家する所なく常に公衆の群中に交りて人と相交涉しながら、Gondolier の心は Naples の舟人の光の如く邪まならず。强靭なる克己の性に加へて生活に戯るゝの餘澤あり。其生活の深度を窺ふに從つて詩に滿てる Venecia の中にも

詩的なる所以を思うて Symonds は曰く、「彼等の生活は常に窮迫の體ありて、苦勞せざればパンを得るに由なきも、働けば活き得るの希望は確實なり。冬の寒さ、潮の惡しさ、色々に堪へ易からざる障碍あれども、おしなぶれば其市の日の光は凡てに勝ちて心を温むるに足れり。獲て耆るの餘裕なく、苦鬪して致命に及ぶの窮迫なし。Gondolier てふ名を想起すれば、直ちに確乎として他と混雜す可からざる一種怡樂するに堪へたる人格あるを覺えざる能はざる所以なる可し」と。

十一月六日。火曜。雨。今日も亦雨なりき。

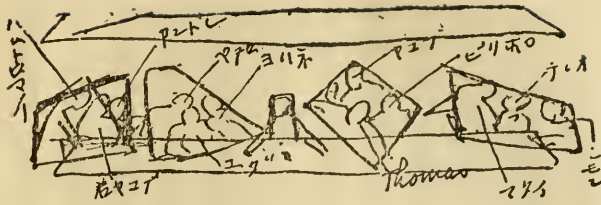
處を異にし時を隔てゝ、藝術が人文の高潮に達したるもの三。一をギリシャ藝術とし、二をゴシック藝術とし、三を伊太利復興期の藝術とす。凡そ藝術と目標す可きものが發達の高潮を示す時代を見るに、必ず智的方面が綜合的傾向を示せる時にあるものゝ如し。ペリクレスが外敵を制し所在の市街を服し、人心の傾向一途に歸して適處を確立するの必要を感じ、辯論の哲學が人事に直觸せる宗教的本能に陶冶せられたる時、フィデヤス、ソフォクレス、アリストファネス等の大才は儕出せり。驚異す可き事體の一致は、亦ゴシック美術發達の上に見る事を得べし。久しく東漸し來る移民の動搖に惱まされ、無法の權威を貪りし法王廳の壓制に眠りし北方の人民が、自由市と guild の組成によりて獨立自治の覺醒に遇ひ、常に外來の刺戟に應ずるの暇なかりし人心が、内向の餘裕を得て、一個の團體(一國にせよ、一市にせよ)が注意する所、其團體内部全體の事に涉るものあるに至りて、鬱然としてゴシック美術の名花は綻び初めたり。復興期に於ける美意識の發展も亦然らざるはなし。若し綜合的傾向を帶びたる希臘盛代の文明が、フロレンスに住みたる巨頭を覺醒する事なかりしならば、而して此覺醒が Leonardo da Vinci, Mihcael Angelo の如き humanist を生む事なかりしならば、かくばかり華麗なる人心の覺醒は我等が歴史を飾る事なくして終りしならん。今は光榮ある三大時期を軒輊して何れを優秀となすべきかは、識者も亦惑ふ所なるべければ、物知らざる輩の嘴をさしはさむ可き所にはあらざる可けれども、一事の誰が眼にも否む可からざるは、此三大時期が各自に發揮したる特色なり。希臘とゴシックとは創造的 (creative)なり。復興期は大成的なり。されば、前二者には時に單調未完の悲みありて、後一者には誇大不整の嫌ひあり。我は Milano の Duomo を仰ぎ、これを復興期の建築に比して、直ちに其明斷

なる例證に遇ひたるを思はざる能はず。假りに頭裡にゴシック寺院を思ひ浮ぶれば、尖頭の長柱矗々として空を仰ぎ、雜然紛然一種厭惡の意を禁ずる能はざらしむるものなきにあらず。眼のあたり見る人にも此感は尙免れ難し。されども一度其堂に入り屋に上り細部を觀視し、顧みてかの復興期が產みたる建築を思へば其雜駁殆んど堪へ難からんとす。我等は再び裸にして花を冠りたるアルカデヤの昔に住まず。心漸く複糾して自ら華麗と彩潤に親しむ。ゴシックも復興期も等しく此人心潮流の需要に應じたるものながら、一は自ら創り他は假りたるの跡遂に否む可からず。暫くゴシックが走りし極端なる傾向を想して大體の傾向を擧べよ。何ぞ其の自創的にして發展の餘地裕かに而して美的直覺の花の如きや。不幸にして、ゴシック的藝術を產みたる精神は其餘りに高かりしが故に、早く花とならずして萎み落ちぬ。急湍の勢もて走る時代は其萎花の上に回古の文化を樹立し、倒天の力もて馳せて現代の文化を生みなせり。知らず、ゴシックの僅かに蕾して空しく摧かれし文化は、其種子を後代に見出し難くして止むべきか。或は現代が繼承せる文明組織に漸く倦まんとする人心は、洄流を溯りてゴシックの文化に、新たなる活泉を求め出づ可きか。我等が來る可き藝術（獨り藝術のみにあらざれども）の發展に關して、不斷の興趣もて觀察す可きは、此點にありと我は思ふ。

人は漸く部分に厭き初めたり。科學は漸く各分科の綜合する所が、歷史の事實となす角度に就いて學び初めたり。社會科學は metaphysics と交涉せる諸點に注視し初めたり。人心の傾向は、暗々裡に、前世が知らざりし世界的思想を求めつゝあり。淸新なる藝術が生る可き舞臺には、背景帷幕の備へ漸く成らんとするものに似たり。開場の夕、袖を振る優人は復興期の人の心を以て舞ふ可きや、將たゴシックの世の意もて歌はんとするや。

十一月七日――十一日

日の照る時は僅かで、北伊太利の空は大抵雲と雨とでじつとりして居た。何と云ふ事もないので、日記は遂に怠る事となつた。

見たものは Sta. Maria della Grazie で、Leonardo da Vinci の悲しき壁畫が筆頭であらう。薄寒い朝 Bramante の、流石に

厭惡の氣のない寺の外圍の、冷えた石壁を見てから court の中に這入つた。細長い室の一端を占領して、キリストが首を垂れて居られる。痛ましく缺損した此所彼所を傍の摸寫と引き比べて、僅かに古人の筆路を辿つた。基督の右手にはヨハネが首を回して、匕首を握つて一方の手を其肩にかけたピーターに聞いて居る。ユダが其間に挾つて机にのめる樣に恐懼の狀が讀まれる。右手にはヤコブとトーマス驚駭したる一微心、一は疑惑したる自賴心、表情の心理的なのは云ふ迄もない。其他弟子の誰れ彼れも、確かに他人の摸擬を許さぬ力がある。配置にも非常な苦心がある樣だ。基督が中央に十二の弟子が四組の集群をなして居る。それを直線で顯はして見ると（玆に二個の略圖あり。圖式略す）の樣になる。基督は全畫幅の中央から少し右方に描かれて居る。全體の figure の配合に音樂的の傾向はないが繪畫的の配合としては實に稀に見る所のものだと思つた。又 Leonardo が此畫に云はせた心地を Goethe は解釋して、主と十二弟子が一夕平和なる小晩餐をして居た時、主が突然例の語を發せられたので、弟子が愕然と騷いだ所だとあるさうだが、聖書を讀んで見ると、此晩餐があつた時は、弟子の間に既に一種理由の解らない疑懼の念がわだかまつて居た事が朧に見える樣だが、此畫も此名狀す可からざる弟子の疑懼が一段の解決を得て、弟子の驚愕と一層深甚な疑懼とを惹き起すに至つた場合として見た方が、更に強い印象を受けるやうに思ふがどうであらう。壬生馬は此畫中に口を開いて物云へる人を算へて、Thomas 主に語り、シモン、マタイとテニオに語れる外なしと結論せり。ペテロも亦ヨハネに語りつゝありとは我が思へる所なり。他に壬生馬の觀察せる所を記せば（一）天色最も明かなり。（二）左より右へ光線。（三）主に語れるは一人。（四）弟子に語れるも一人なり。（五）他は悶き若しくは放心す。（六）他の figures に對して心的干渉なきものはユダ一人なり。（七）髮の色〔ペテロの白とユダの黑〕云々。Leonardo の畫は Michael Angelo の畫よりも遙かに解らないやうだ。一は其表情法が始終内面的であるにも依るのだらうし、一は彼自身の性格や智見が非常に複雜な關係にあつた事にも依ると思ふ。Dostoievsky のやうな所があるのではあるまいか。

博覽會内で Geovanni Segantine の遺筆を見たのも記憶す可き一つであらう。壬生馬の云ふ所によれば、此畫家は伊國人でアルプスの山中に孤居して線で畫を描いた人ださうだ。其妻子を捨てゝ山に入り、細心にして自然の研究に耽りながら、其作物を見ると惑ふ所の多かつた人であつた事が明瞭に判る。其のあれからこれ、これからあれに踏み迷つた樣を想像すると、彼の生涯が如何に悲壯であつたかと云ふ事がしみじみと思ひやられる。苦作をしながら迷ふのは力の足らない證據。力が足りないで苦作をするのは向上心、少くとも突進力のある證據。突進力がありながら中道にして斃れたのを思ふと悲しい。「大雪中の小さい葬式」は未成であつたが、心持の深い作であつた。第一此展覽會の畫では Segantini は完全に代表されて居ないらしい。

もう一つ記憶す可きは Duomo の上に登つてゴシック寺院建築の內容を見た事であらう。Milano の Duomo は宏大なる寺の一つであると云ふ事は、世界中に名高い事實だから此處に其大さを現はして見る必要はないが、最も僕の注意を牽いたのは其部分の全體に對する調和と云ふ事だつた。伊太利の中部から北部にかけて旅をして居ると、常に接するものは復興期の遺蹟だが、僕はどうしても其建築の中に不調和を感ぜざるを得なんだ。有名な Bramante の Palazzo Pitti の如きは、さすがに初期文藝復興時代の雄大な氣魄と、明晰な復古的感能とを表顯して居るが、一歩進んで考へて見ると、此建築の中から Gothic の分子を取り割いて、これが復興期の創作だと云ふ可き部分はどれ程だらう。それが下つて Roma の S. Pietro となり、Naples の Sta. Maria となり、Bologna の S. Pietro となり、Venice の Sta. Maria della Grazie となり、Florence の S.——となり Milan の Sta. Maria della Passione となるに至つては、あの華やかに競ひ立つた復興期の末路の早さ、覺束なさに痛ましい思をする程になる。最も有名な S. Pietro を取つて考へて見ても、どうも物足りない不調和を感ぜずには居られない。第一、porch の簡整な Corinthian の柱の上に飴細工の樣にひねくれた一列の像が立つてゐる。Friese も高過ぎる(壬生馬の云ふやうに)。內部の Dome と Nave 及 Transcept aisle との比例はさすがにいゝが、もつと細かい部分(例へば角柱の裝飾、角柱と角柱との間の arch の friese となす關係、alter の裝飾)に立ち入つて見ると、小細工人のしさうな下凡な失敗が此處彼處に見出される。それを見た眼で Milan の Duomo を見ると、遙かに心地のよい建築である事が判る。固より此寺院は Gothic

architecture の例としては決して完全なものではあるまい。造られた時代も、長い間かゝつて新舊技工の優劣もある事だからおつかぶせの評をする事は無責任に近い話だが、此建築が體顯しようとした表情や意味やは、全體として見ても部分々々を見ても、直ぐ胸に答へる事丈けは確かだと云へよう。同一方向に走つてる感情が不自然の屈曲なしに進んで居る點は否む事が出來ない。全體と部分とが始終互に顧み合うて居ると云ふ事が、見る人に美しい安意を與へる。あの最も不自然に近い裝飾法を用ひて、最も美感を殺ぐ可き直線の助けを借りて而も其全體に意味を與へ、感情を與へ、美趣を與へ得たる人々の心の凉しさは思ひやられる。

Saltori と云ふ江戸ッ兒風な伊太利人と、堀と云ふ几帳面な肺をわづらつて居る青年と、渡邊と云ふ東洋豪傑的な青年とは、僕等が此地の滯在中の伴侶であつた。己れの事に打かまけて心ない腹立てや、風のやうな悲しみやら、罪のない笑ひやをして居るものゝ、時々人の身の上を思ふと馬鹿な顏はして居られない。

——Schweiz——

十一月十一日。曇。日曜。朝、十一時近く美蘭を辭す。堀、渡邊氏來り送る、Lombardia の平野を北に登れば、地勢漸く變じ民情亦從つて變る。Lago Magiore の風光譬へなきを經終る頃、Alps 連山の頂、雪を冠して立てるを見る。(過眼の地 Arona より Pallanza) Varzo より Brieg に到る間、Sempion の大トンネル急行列車にて約三十分を要す。汽車 Rhone を西行す。之に沿うて夕刻 Lago Geneva を見、Montreux を經、シロンの古城水に出でたるを樹間より眺めつゝ七時四十八分 Lausanne に入る。岩下、猪原の二君來り迎ふ。Hotel Eden に投宿。夜、話盡きずして十一時半に到る、多くは Hotel の研究なり。猪原君よく談ず。

十一月十二日。曇。月曜。朝、入浴して Montreux 行を企つ。汽船なくして發する能はず。Shelley が投死したる Lago Geneva に浮ぶ。美人あり來り談ず。字名して「湖上の美人」と云ふ。歸路、岩下の家を訪ひ、夜、球突きす。寒し。湖上白鳥ありて遊ぶ。婦人小兒、舟遊を樂しむ事甚だし。沿岸の秋、まさに最後の名殘を留む。

十一月十三日。曇。風。火曜。朝、四人同行 Geneva に遊ぶ。Museum Rath 及び公園市内を見る。Rhone 此湖より發し

て西流、色藍青の如し。教育の事、工業の事、公共事業の設置殊に人目を牽く。

夕刻、市を辭して Lausanne に歸る。夜、論談。

十一月十四日。曇。水曜。Cathedral 及市を見、午後二時十五分此地を辭して Bern に向ふ。猪原氏同行。波行する高原の樣。赤屋ある農家。四時四十七分 Bern に着し、中世紀の遺家極めて多く噴水、時計樓其他市に見易からざる古香を有せる町を經て、Hotel des Boulangers に着す。此夜、亦猪原氏と Hotel の研究す。

十一月十五日。曇。木曜。朝、市内を見物す。本町を經て Nedeck Bridge に到り Aare の岨下を流るゝを見る。草靑くして落葉黄に、金砂子の如しと壬生馬云ふ。橋外の態を見、河の右岸に沿うて此町の全景（Gothic 的古香ある）を眺めつゝ徐行、Historical Museum に到る。Schweiz 中世の室内構造及び橇、湖上住居の上民の遺體、最も我等が注視を牽く。河を渡りて國會議事堂の開會中なるを見る。議員の用語佛、獨、伊。中食後 Art Museo を見る。Fel linand Hodler の William Tell、「晝」、「夜」、「勞れ」、Arnold Böcklin の「海の靜かさ」、Millet の「Wanner の像」Stanffer（Bern）の Geneva Charles Giron 等注意す可し。

夕五時十五分發、Lucerne に七時四十八分着。猪原氏は Bern に別れ、Interlccken に向ふ。Hotel Rötoli に投宿。

十一月十六日。曇。金曜。朝、古橋を渡り亦 Hof Kirche に行く。十時少し過ぐる頃、汽船に乘じて Lucerne, Vierwald, Stätter 及び Urner の四湖に遊ぶ。過眼の諸山 Piratus, Stauserhausen, Rigi, 其他、冠雪の諸山を見る。Schiller's Stein, Tell's Capperan を經 Flüen に着し、上陸して少しく散策す。天雨降らんとし、壬生馬、來年來る可き宿屋をねらひ置く。山色明媚、水態透潤、奇峭を極む。夜小兒來る。階下の喫煙室に町の靑年十數人來りピヤノに合せてオペラを練習す。聲調最も聞く可し。

十一月十七日。曇。土曜。朝、Thorwaldsen の岩刻の獅子を見、氷河園に到る。Labyrinth にては田舍者時に一驚を喫す。Bloch によりて設計せられたる戰爭平和博物館を見る。印象を受くる事多し。

午後一時七分、市を辭して、二時二十三分 Zurich に着す。Buchmann 先づ來り迎へ、次で G. Ganper 及び A. Schmid に

會す。五人を伴うて Künstlergut に向ふ。Hodler, Böcklin, Keller の作を集めたり。第二者「老」最もよし。大學附屬圖書館に日本錦繪の蒐集を見、後 Urich に老婦人の家を訪ひて茶の御馳走になる。

夜陰、此市を辭して Schuffhausen Hotel Schwanen に入る。靜寂古雅の市。此夜 Gamper 我等の爲めに Violin-cello を彈じ、Hotel の娘 Tildi、瑞西の野唄を唄ふ。

十一月十八日。曇。日曜。朝、晩起、旅の勞れを醫す。午後 G. B. S. と共に、Singapore にて巨產を蓄へ得し Stutzenegger 氏を訪ふ。次男 Hans 氏畫と樂とに長ず。其畫室に作を見る。巨大の作物多く亦特長あり。家を辭する時やゝ日傾く、Gamper 庭中の草花を採りて我に與ふ。

歸路、畫家が名づけて「富士山」と稱する山頂を平野の彼方に見る。

夜、Emma Forster の饗應となる。Gamper の兄、Gamper と piano と violincello との合奏をなし Emma 亦獨唱す。

十一月十九日。曇。月曜。朝、同行、Minster の Cloister と有名なる Gloke とを見る。"Vivos voco, Mortuos plago, Flugura frago." と云へる Schiller が Das Lied von der Glocke の題字となせる銘、刻まれたり。Goethe 此處に遊び書して Schiller に送れるもの。1448 の鑄造なりと云ふ。

辭して Munot 城に登る。樓守に鈴を傳ふれば樓上の窓より綱を傳へて鍵を渡す。樓上の眺望絕佳。寫眞す。後 Gamper の畫室に歸りて其作を見る。水彩畫と lithograph 多くを占む。

午後相伴ひて Falls of Rhine に遊ぶ。左岸なる丘上に Schloss Laufen あり。瀧は幅員 125 yd、高さ殆んど百 feet、中歐の一大奇觀たり。一行小兒の如くなりて之れに戲る。右岸の小亭に少憩して歸家。

十一月二十日。曇。火曜。朝、一行 Tildi, Emma, Lili 等と共に Schmid の家ある Disslausen に向ひて汽車に乘ず。一行の目的は彼所に汽船を備ひ同乘して Schuffhausen に歸るにありしも、風激しくして行を企つる事能はず。已むを得ず橋畔の小亭に會話す。又戲畫す。Alps の山より來れると云へる老爺あり。我等の爲めに山中の歌數曲を吟じ、又河畔に出でゝ

Alpen-horn を吹く。悲音嫋々として人を傷ましむ。

夕刻風止む。即ち汽船に乘ず。雨遂に到る。此夜 violin と violincello の concert を hotel の一室に聞く。演ぜられし所 Mozart, Hayden, Bethoven, Schumann、樂む事甚し。

Lili、伊國の花 Mimosa を齎し歸りて我等に贈る。

十一月二十一日。水曜。曇。朝、Heimatschuty 發行の雜誌を註文す。

午後 Gamper, Buchmann に伴はれて公共小學校に到り、第一、第二年級の獨逸語竝に歷史講座を見る。日本の切手を生徒に與ふ。

辭して Lili の家を訪ひ、茶の御馳走になる。Emma、我等の爲めに黃菊白菊を贈る。

夜、Stutzenegger 氏の晩餐に招かる。壬生馬「花咲かば」を謠ひ、我「烈路高島」を唄ふ。

十一月二十二日。木曜、曇。一行及び Lili と Bâle に壬生馬の友 Zubrel を訪ふ。汽車途に Schwarzwald 及び Schakingen を經、一は Karlbach の "Kaltherz" 一は Schaffel の "Trampeter von Sahakingen" を以て我が既に知れる所。過眼の風光更に舊知の思あり。Bâle は瑞西國第三位にある大都會なり。Pinaketaka. に Zubrel に會し、畫堂を見る。Böcklin の壁畫、Holbein, Böcklin の諸作等注意に値するもの頗る多し。

Munster 及び Rahthause 共に頗る人目を牽く。

歸時、車中の快笑。歸宿せしは晩かりき。

朝、Gamper が齎したる作物を見る。馬車を驅りて Reisenan 其他の郊外に遊び、又 Amsler 氏の畫室を訪ひ、Stutznegger 氏に暇乞ひし、Lily の家に暇乞ひし、又 Emma の處にて晩くまで遊び戲むる。

十一月二十三日。金曜。晴。朝十二時十分 Schaffhausen を辭して涕涙を垂る。

Gamper, Buchmann 送行して Znrich に出で、Historical Museum（潤澤なる蒐集）を見、後山上より落日の Zurich 湖竝に

冠雪の Alps 連山を望む。景情共に絶佳。林樾を經て市に歸り、點燈時 Ulrich 夫人の家を訪ふ。Schmid, Tildi あり。茶菓。夜に入りて散策し月明の湖畔を行く。月の傍に輝けるが Venus, Elf 水中に歌謠して人を誘ひて幽界に陷らしむ。汽車に乘じて夜行く。夢に赤き火の機關車にともされたるが、遠く更に遠し。好めるは秋と春。春には常に期待あり。人を誘ひて何者かを求めしむれども、我嘗て其の何なるかを知らずなど Tildi 語る。

夜食後會話。家を辭して停車場に到る。十一時二十分に發す可かりし汽車、四十分に發せり。共に別れを惜む。

此夜、武郎の頭亂るゝ事甚し。車中に呻吟殆んど一睡をなさず。まゐりたる氣味なり。

Deutzland ——

十一月二十四日。土曜。霧。朝七時 München に着す。Hotel Rother Halm に入り十二時頃まで苦しき夢の境を辿る。午後 Old National Museum に到る。陳列品の整然たるに驚く。Maximilian Brücke より Maximilneum を經、公園を散策して歸宿す。

十一月二十五日。〔此日壬生馬〕日曜。朝霧。晴。當市が凡ての富を積むとも其所有物美術品の高價なるに及ばずと云はるも、恐らくは此一 Alten Pinakothek を重しとするが故にあらざるか。

開館は十時なり。濃霧かゝりて頗寒し。屋根の黑き山形、枯枝の大木ゆかしと思はる。霧の高さは僅か三十丈もあらんか、塔の頂點に朝日の光る事などもあるべしと思はる。かゝる暗鬱なる世界（此頃七時半燈を消し五時には又點燈せり）にある者が、此物質的文明を築きたる眞に賞讃す可きなり。又それと共に美術的智能の幼稚なりしをも咎む可きにはあらざるべし。自然の明快にして樂みを與ふるや、其民遊戲し、自然の暗澹たるや、其民先づ自己の保護に忙しくして、遊戲を求むれども其時を失ふに至らん。伊太利の國民が藝術に迷へるは、知識的素養が過度なる感情、肉體の遊戲に打ち負けたる時代なるが故のみ。彼等が藝術に遠く見しものは今地上にあり。今地上にあるものは、明日何れにか向はんとするや。それは反問の材となすには足らず。思想の偉材が獨逸國內にありてすら南より出づると云ふにあらずや。此市の民を見るに瑞西の如き質朴

の性と明確なる智的判斷力とに富むが如し。彼等は尙ほ進歩す可き既約あり。未來現今は兎にも角にも、進歩すべき民、見て心地よき民なり。悅しく思はるゝ世の一事なり。徒らに既往を顧み、悅び悲しむ事なかれ。これ若き民のなすべき處にあらざればなり。唯善き若き民よと友の如くに讃めんと思へ！

和蘭陀畫家の蒐集には富みたり。レンブラントの肖像は云ふまでもなし。其製作も三四を見たり。彼の先驅者を並べ見るに、既にレンブラントの來らんとするを待てるが如し。彼は立ちて寫實の道より其の求めに應じたれども、想像力は未だ必ずしも前代の束縛を脫せず。思ふに凡て藝術に寫實の與ふる最大なる恩惠は、自由と新鮮に過ぎず。未だ藝術の中心たるべき想像と天才とを左右せしものあるを見ざるなり。故に天才ありて想像饒かなる作者には寫實の事同意義にあらざるを知らん乎。バンダイクとヴェラスケスが同年に生れたるを偶然に知りたるが、こはいと面白し。稍ゝ早く先生分なれどチチアンを加ふれば、或點に於て三國の似たる畫家と云ふを得ん。その形の似て心の同じからざる亦面白い哉。

Rubens には中央の廣き一室を與へられたり。作の數三十にも餘らん。Uffici の諸作より重要なり。彼が運筆の妙、色彩の自由、製作の精力、構圖の大皆喜ぶべきに似たり。しかも余の好まざるものあるは何んぞや……。或は其作の、目に映りて智と情とに逼り來るものを缺けるが故にあらざるか。彼が肖像を見るに、作中の人物の肥滿樂天的なるに反して、瘦せて蒼き顏色をなせり。これ甚だ考ふべき現象なり。

伊太利の室に入れば故鄕に入るの思、油然として湧き來る。伊太利の恩惠なくして一事をもなし得ざる北歐の諸國が、今は我が物顏に其末路を指す。これを何とか云はんや。外にベニス、スパニヤの畫派あり。

西畫派の後世に殘せし一大罪は既にベラスケス、ムリロに表はるゝ黑色の亂用なり。デカの畫は或は多く西畫派の感化にはあらざるか。疑を存す。

更に興味深かりしは、初代の獨逸派の作品なり。我は殆んど始めて見たる事なれば甚だ愉快を感じたり。獨逸派と雖も北歐即ち白、和の感化が曼に入りし跡なり。今茲には略す。

畫堂に逍遙せる二人の日本學生に逢ひて歸途に着く。

日曜の事とて諸方の Museo 閉されたれば、停車場に廻遊切符を問ひ合せたれど果さず。イザルの川霧深くなりて雨に似たれど Englischer Garten を見んとて Siges Thor より電車を下る。三間先は見えず。夕方の氣候寒くなりたれば僅かに見て歸る。かゝる霧の中にありて濕氣の少なきは怪しむべし。

夜、家一君の紹介し呉れたる大瀧君を訪ふ。不在。日曜、日本人會あれば行つて見る。留學生氣質を物すべき種にもやなるべき。霧あがり天黑かりし。Marien Platz の自動車の客待ちもなく人通の傘も少く、電車が電火を放つて例の音を立てゝ線路を走る。靴の底がじた〳〵となる。

十一月二十六日。月曜。曇。昨日約したれば朝、大瀧君其友三宅氏と共に來り、我等を誘ひて Academy of Fine-art に、日本より來學の畫家安田氏を訪ふ。寢坊して來らず。止むなく彼を其家に訪はんとして途中に相會す。再び Academy に到る。何の得る處なし。Academy を辭して Nem Pinakotheka に到る。Karlbach, Lenbach, Feuerbach, Herterich, 等 München の畫壇に生命と統一を與へたりてふ人々の作あれども、最後の一人を除くの外は甚だしく我等の注意を惹くものあらざりき。Böcklin の "Waves" は傑作と稱すべし。大波の中に男女の人魚游泳せるもの。他に Watts の小作あり。彼の作を見たるは今が初めてなり。

午食後二人にて Schack Gallery に到る。階下は殆んど Böcklin の作もて滿されたり。"The Shepherd's Complaint," "Villa on the Sea" 等見る可し。階上に M. von Schwind の小作十數あり。中に就きて構圖の淸新なるもの、漁女の湖面に水かゞみせる、神女の空にかゝれるなど。

家に歸りて後、銀行に到りて金を受取り、夜は買物などす。

十一月二十七日。火曜。曇。朝、Frauen Kirche, Pietrus K. 等を訪ひたる後、Bavaria National Museum に到る。蒐集の多、ひたすら人目を驚かしむ。若し精細に各時代の差異特長を研究しなば、我が論文の材料となさんには屈竟のものあるべか

りしならんも、餘りに多ければ只打ち過ぎぬ。

Schiller の用ひたりてふ机、鵞ペン、遺髪、Bismarck の杖、略帽なども あり。

午後暫く休憩して後雨を冒して Library に到り、久濶にして靜讀の小時間を樂む。Brandes の回顧錄英譯されたりと云ふ。一日も早く見まほしきものゝ一なり。Library の建築は Ratisbom 型の最上の一例なりと云ふ。要するに溶解せられざる古代建築結晶片の集合に過ぎず。

此夜大瀧君に誘はれて日本に在留せりてふ一細菌學者の「日本藝術講話」をさる集會所に聞く。語通ぜざれば悲しくも唯默す可きのみ。後大瀧、二木、安田、一人の獨逸人と共に王室附ビーヤ・ホールに到りて其規模を見る。六千人を收む可しとなり。大堂の中樂聲盛に起り殆んど空席なし。空氣は莨煙と酒氣とにて鉛の如く重くなれども、かの Teuton の子はよく語り、よく笑ひ、且つよく飲む。

寢に着きしは十二時稍ゝ過ぐる頃なりき。ビーヤ・ホールにて會せし二人の日本人を合せて我等七人。

十一月二十八日。水曜。曇。朝六時二十分程の汽車に乘ず。暗ければ汽車の木椅に凭りてうと〳〵まどろむ。漸く空明るくなれる頃、窓外を望めば、純獨逸的の風光は我等の眼前に開かれたり。規則正しき殖林、平らなる低野、低き岸に溢れ曲りて流るゝ小川、手を組みたる如く睦ましげに此處彼處相隔りて立てる村落、瑞西山頂の奇峭は此に來りて漸く平凡なる我等が世界の風光となりぬ。松、樺の林際立ちて見やらる。汽車 Nürnberg に着せしは、午前十時半頃。Hotel Victoria に投ず。

直ちに宿を出でゝ Germanissche Museum に到る。Carthesian Monastery の古建築の中にあり。一方には舊壁障をなして、Monastery は此古き都の雨の中に暗く立てり。獨逸の市の何れの Mseum に到りてもひたすらに驚かるゝは、蒐集の夥多にして秩序正しきにあり。此館亦其例に漏れず Romanesque, Gothic の古彫刻は殊に熟視の價値裕かに、此市に名高き人形、玩具及び科學實驗器の古き遺物は甚だ目を牽けり。古代服裝の模型に代ふるに諸名畫の摸寫を以てせるは亦此館の一特色と見る可し。繪畫には獨逸派の作多少を收めたれども、Dürer 等重要なる人々の大作は、此市より München に移されて今は多

からず。

午後は市内の見物に費す。St. Lorenzo の大厦を仰ぎて後、Haupt Market に "Schöner u. Neptun Brünnen" を見、St. Sebaldus に St. Sebald's Shrine ("Sebaldus Grab") と稱せらるゝ Peter Vischer が十一年を費して大成したる Shrine の純獨逸藝術の高潮を示せるものを見、Dürer の立像碑を經て其舊居を訪れぬ。鐵の如く冷やかに黒く立てる城壁の一門に對して、街角の小地積を占めたるもの。これ彼が畫室に用ゐしと云ふ。階下の數室の古臭に滿ちたるを經て階上に登れば、其客室と食堂と庖厨とあり。彼が用ゐ慣れしものゝ凡てと sketches の珍らかなるものと其四壁を飾れり。更に三階に到れば其木版陳列せられたり。"Melancholia" と稱する一木版畫の reproduction を購ひて歸る。あはれ Dürer、彼の畫は多くの人に解せらるべきそれにあらざりき。北方の寒氣に屈曲して育ちたる如き其天才は、厭惡をさへ催さしめんとする形體と表想の中に嵌入せられたり。されども彼が筆の中には力あり、氣あり、熱烈なる一滴の涙あり。傲岸なる潜獸の悲みあり。言筆顯はし難き一種人心深奥の聲を捕へ得て、其作を熟視すれば我が心知らずして掻きむしらるゝ如きを覺ゆ。我は、彼が深刻を好むを禁ずる事能はず。

Dürer の家に向ひて立てる Thiergarten Thur を經て丘上に登り、Burg の石墻によりて四望す。蒼古の景情。丘を下りて Egidien platz に Melanchton の立像と其の創立にかゝる Gymnasium を見、Tuchenstrasse に形面白き court 二三を見、Vordere-Insel を經て歸舍す。點燈時、夜、散步。

十一月二十九日。 木曜。曇。風。朝、電車を Maximian Platz に取り、Max. Brücke 上に立ちて Nürnberg の古き兩岸の家々を見る。河の水黄に濁り、岸の木黒く枯れ、古き家々の瓦は朱に赤く、壁は灰に黑みたり。空を仰げば溶として鉛の如き雲蕭々たる秋の雨をくだす。

午前十時某分、汽車に乘じて Dresden に向ふ。過眼の風光、前路と甚だ多く異ることなし。列車漸く Dresden に近からんとする頃、走丘の線路に逼りて谿流を遠く眼下にしたるが如き所數次ありき。曠野時々群鳥ありて亂れ飛ぶ。車中 Stuttgart

より來れりと云ふ一人の Dresden に保姆たるべき娘を携へたるがあり。會話を求め西歐の葡萄酒などを薦む。我何ぞ人に近づき親しむを厭ふの心此の如く甚しき。好し二三の温情を心にしめて曠野に活くる人たるに任ぜん。

風激しき夕、七時汽車 Dresden に入る。停車場前の Central Hotel に投ず。晩食後散策して Kgn. Carola Brücke のほとりにまで到る。

十一月三十日。金曜。曇。風。餘りと云へば憤ろしき空よ。我が日記のペーヂを繰り見て、汝は若き二つの旅心を憐まざるや。

朝、Alt Markt を經、Rathhouse Königl. Platz を Hof Kirche を左に見つゝ Elbe 河に出で、左折して Rococo 建築の精華と稱せらるゝ Zwinger の Art Museum を見る。其蒐集の遍きと精なるとに於て Uffici, Pitti, Louvre と並び稱せらるゝもの是れ。神々しさの極みを盡したる Raphael の "Sistine Madonna" のある所は是れ。我等が想像の達境の狹きは、此畫に見て亦つくづくと思ひ知らる可し。打見て唯驚くのみ。かくある可しなど永く永く思ひ設けたる空中の樓閣はバベルの塔の如く跡もなく壞れ失せて、驚嘆の眼の前に神と其母とは、普遍の光明常住の自在の中に立ち給へり。圓かなるその筆よ、圓かなる其心よ。

Titian, Palma Vecchio, Veronese, Claude Lorrain, Rubens, Van Dyck, Franc's Hals, Rembrandt, Horbein 等の諸作あり。一々稱嘆すべきもの。忙はしく晝食をしたゝめて再び館に入れるに、昨日汽車の中に遇ひたる人に遇へり。三時館を出でて彼等と Opera House の廣場に遇ひ、電車に乘じて Rochwitz の丘上に到りて caffee など飲む。

飲食後 G. Gamper の父の家庭を Lilian gasse に訪る。一家出で迎へて歡待舊知の如し。

十二月一日。土曜。曇。朝 Gamper 氏の家に。其令孃 Bertha と再び Art Museum に到りて新時代の畫を見る。注意す可きもの甚だ多し。Böcklin の "Der Krieg," "Sommer," George Courbel の "Stein Klopfer," Charles du Chavannes の「海の夕づき」とも云ふべき作其他。

Arnold Picture Exhibition を見る。現在當市の美術家の作を集めたるもの。見るを恥づべきもの。

Zuringear 西方の池端より丘上を經て Gamper 氏に到り、中食の御馳走となる。Bertha、我等がために Chopin を彈ず、Bertha はすなほなる心持てる若き婦人なり。

食後老いたる Gamper 氏と共に停車場より二時十三分の汽車を取る。Berlin に着せしは四時やゝ過ぎ。Hotel Holstein に入る。

第十卷

一九〇六年（明治三十九年）〔承前〕

根なし藻

ちゝはゝのみそばにさゝぐ

十二月二日。日曜。雨。窓より望めば Inhalter 停車場の黄なる煉瓦、冬の雨に濡れて、道行く人、馬車、電車の聲、唯囂し。自然如何に狂ふとも其聲には常に破る可からざる調和あるものを、人自然の一分子と生れて何故にしかく自然の調和を破るに巧みなるや。朝、Museum für Völkerkunde を見る。例によりて蒐集の汎き事驚くに堪へたり。Mexico 土番の石に刻みし彫刻物など、其技倆の卓越せるに心牽かる。見終らざるに時來りしかば辭し出づ。

午後寫眞し、大使館に來書を受取る。中には母上の音信あり。他に我が許には森本より二通、Fanny, Agnes より各〻一通あり。心焼くが如くなりて歸途歩みながら貪り讀む。何れも心籠めたるうれしき音信なり。森本は夫子先生の生活の樣と遠離の悲みを傳へ、Fanny は我に新しく生れたる小猫に名を與へん事を乞ひ來り（我は「ふじ」と命じたり）、Agnes は Esther の長じて歩み且つ語るに至れるを報じたり。

何事もさて措きて家に歸り、彼等に送る可き手紙端書など認む。壬生馬に高山氏の「想華及び感想」を送れるものあり。取りて其書簡文を讀む。彼の情の細かにして且つ其生の憐れむ可き跡など、今日の神經昂れる我等には、中々に讀むに堪へざるものあり。

Gamper 氏の夕刻此市を去るを、停車場に送らんとして遂に遇ふ事能はず。

十二月三日。 日曜。雨。朝、National Gallery に遊ぶ。Böcklin の "Christ and Mary," "Meeresbrandung," "Ein Frühlingstag," "Der Eremit," "A. Böcklin mit Tode," "Kreuzabnahme Christo," "Damen Bildung" 等あり。Has von Marees (1837—1887) の諸作は、其技倆甚だ稚拙にして而も風韻の自ら人の心を牽くもの。其他近代諸畫家の作多く收めたれども、さして注意に値するものは見當らざりき。此所にて遇ひたる Boston の西浦と云へる日下部氏の同窓と共に中食を Friedrich Brücke の河向ひにしたゝめ、後 Hof Kirche を見る。Italian Renaissance style にして J. C. and Julius Raschdorf が 1894 に工を創めたるものなりと云ふ。内部の壁畫其他未だ成らざゝものあり。外面全部の形式は其大體に於て大過なきが如し。歴代の帝王宮親は院內左方の一堂の中に眠れり。規模甚だ豪壯なれども、藝術として其價値を批判せられたらんには、若干の傲顔をかなし得可き。

後、銀行に到り 500 franks を受取りて歸舍す。さらぬだに短き日の雨さへ降り添へたれば、街頭に灯ともすは四時半に滿たざる程よりなり。

夜、話題我等が未來の事業に移り、二人耳の熱するを覺えず。我等が信念に對する互の觀想も亦

十二月四日。 火曜。雨。朝、Post Office に到れる後、王宮を見る。室に入れば、案內者仁王の草鞋の如き上草履を持ち來りて我等に穿たしむ。我は、現在の貴族根性とは滑稽主義と稱す可きものなりなど思ふ。

各室の瑰麗は人目を聳つるに堪へたり。Goblan 織の座枕、純金の脚を有せる椅子や、一々手もて縫ひなほせりてふ王座の帷幄や、窓を透して見える Unter der Linden の眺めや、此や彼や。人は斯く物事を複雜にして活きざればえらからざるなりとよ。

大宮を造りて彫らしむるに Michael Angelo なく、描かしむるに Raphael なく、已むを得ずして珠を躍らしめ金を舞はしむ。憐れむ可きに非ずや。

Old Museum に到る。第十六、十七世紀に成されたる Persia, 印度等の彩畫甚だ我等が興趣を促せり。Arabia, Egypt の古陶器も亦然り。Egyptian Museum の如きも、其陳列の法、蒐集の澤に於て範を取るに足れり。後 Pergamon Musem に到る。Pergamon の alter の外郭の腰に彫られたる彫刻を、運び移して此に置きたるもの、缺損中々に甚しけれども、當年これを造りし人々の心の優しさは香はん計りにして、Greek 自然神敎の全豹は宛ら眠れる豹の我等が前に其眼を開きたるが如し。希臘の美術に心潜めたる人、此市に此物を見るは如何なる慰藉なる可きぞ。

電車に乘じて Charlottenburg に到る。天雪ふらんとして寒き事甚だし。日本人の多く住めるは此所なりとぞ。見る可きものも見ずして急ぎ家に歸る。

父上母上其他の事しみ〴〵と語る。

十二月五日。水曜。雨。Frederich Museum に到る。下には彫刻物古器其他。階上の繪畫館は午後に殘して中食す。Netherland 及び獨逸畫派の諸作をも見終らざる中に時間迫りしかば、出でゝ歸途、土產物など買ひ家に歸る。

今夜王室附 Opera House に Strauss の "Salome" 演ぜらるゝ筈なりしかば、これに到りたれども切符は賣り切れたり。Schauspiel Haus に "Hamlet" を見る。我の見たるもの米國に於て Mansfield と Sarah Bernhardt, 獨逸に於て Matkowsky.

歸舍後大に疲勞す。

十二月六日。木曜。雨。朝、Frederich Museum に到りて殘餘の陳列品を見る。Botticelli の高きと Raphael の尊きとは、何の點に於て異れるなど。Rembrandt の「兜被れる人」と云へるも此にあり。

大使館に到り又寫眞の見本を見る。大使館には又諸方よりの來狀あり。家に歸りて其返事など書く。壬生馬に中央公論の「夏期附錄」を送れるものあり。讀む。特に注意す可きものなし。

十二月七日。金曜。雨。Gamper の友 Weis と云へる畫家に遇ひ得可き由もやと、昨日出發す可きを今日に延ばしたれども遂に遇ひ得ず。Kunstgewerbe, Völkerkunde Museum を見る。我等が最も注意せるは日本のものなり。欧洲の中心にありて

日本のものに注意する我心に注意す可きなり。

午後、Tier Garten に到る。獅子、虎、牝獅など。

夕刻五時五十五分の汽車に乘じて此面白からぬ印象を受けたる Berlin を去る。車中一人の絹商と知る。共に Central Hotel に宿す。散步す。九時過ぎ彼の伴へる娼婦と共に夜食す。彼女棚橋と云へる日本人を知る。歸途黒人の南京豆を賣るもの、我等を「我が黨の人」と呼びて握手す。

世の中はかゝる可きもの。かゝる世の中と交渉す可き我が近き未來を思うて膚に粟す。

十二月八日。土曜。晴。朝、Museum に到る。階下には彫刻あり。Klinger のもの奇怪。Mennier の小作ながら面白き方向に行けるもの。階上 Preller の "Landscapes illustrative of the Odyssey" は歷史的に注意す可きものなる可し。Lenbach の Wilhelm, Bismarck, Moltke 其他は彼が作物中注意すべきものなるべく、Böcklin の "Frühlingshymne," "Island of the Dead," 等此にあり。Van Gebhardt とは何人ぞや。"In the days of Reformation" と云へる一作今に忘れ難し。

Museum の中に Leij ziger Künstler Verein の展覽會を見る。Ludwig von Hoffmann のおばけ見たいな繪。Friz Erler 氏の作五枚。

郵便局に到りしに Orga Ditch の母君より手紙あり。同孃はボナサイレスにありと云ひ越したれば Bonn には行かぬ事にせり。Historische Museum に到りたれども入る事能はず。吉田熊次君を Albert St. に訪へば Lyon に去りて在らず。Büchergewerbe Museum に到れば日既に暮れて半ばならざるに閉されたり。直ちに Tildi の兄 Otto 君を Elisen St. に訪ひたれども不在。夜六時五十分の汽車に乘じて此最も忌むべき町を去る。汽車の Weimar に着せし時九時十三分。停車場を出づれば地には雪の名殘あり。夜は冴えて冷かなる星の輝き。嗚呼、我等は Schweiz 以來此處に再び温き人寰の客となりぬ。Sächsonische Hof に投宿。

十二月九日。日曜。曇。夕より雪。宿舍の前には 1488—99 に建てられたる St. Peter and St. Paul 卽ち Stadt-kirche あ

り。觀覽を乞はんとて入れば、正に集會の時にて讃歌の聞ゆる儘に、辭して廣場の Herder の Statue を仰ぎ、降誕祭の用意にとて置かれたる樅の樹の緑に、粉雪の散るを歳の暮れ行くに思ひ副へて、Grand-ducal Palace に到れば此も亦閉されたり。Ilm 河を隔てゝ、Goethe が設計に成れりてふ公園一帶の木立を望みつゝ、去りて Museum に向ふ。なだらかなる高低ある街路の屈曲多きに、物々しからぬ家屋立ち竝びたり。今日は安息日なれば、少年少女の雪を珍らしと遊び戯るゝ様の快活なるを樂しみ見る。Museum の前に立ちて南方一帶の市街を望めば勾配急なる屋根、木造多き家屋、葉落ち盡したる林のたゞずまひなど、宛ら和蘭風景畫家の作を見るの思ひあり。博物館も時間尙早かりしかば、郵便局の傍なる Kunstausstellung に到る。右方の各室には日本陶漆器繪畫の蒐集あり。左方には此地の畫家の展覽會あり。大作と稱す可きものは多からざれども、其意氣に於て實力に於て侮り難きものあり。二階三階なる古器類にも新しき畫にも、此町の公爵が世々藝術の心掛け厚かりし人なる事を思ひ知らしむ。Monet の繪一面あり。

去りて Museum に到る。收むる所甚だ多からず。中世に於ける獨逸及び Netherland の畫家の作品二三を除きては階上なる Preller の壁畫に注意す可し。

去りて直ちに Goethe National Museum を訪ふ。街路を南下して Wieland Platz に Wieland の立像を望み、坂がかれる雪解の道を爪先き下りに右すれば、右に建てる家こそ是れなり。家前なる石疊の廣場の中央より稍ゝ遠く、飾りなき Quellen あり。家は灰黄色の色に塗りなされたる土壁にて、白くさめたる靑の窓蓋ある三階建てなり。公爵の詩人に賜ひし所なりと云ふ。我嘗て英國の評論家某(其名を失したり)の懷想記を讀みし事あり。彼が Weimar に留學せる時の條に Goethe が晩年の生活の樣を描きて曰く、『日を定めて英國より留學せる靑年を集め見るは此光榮の主なる詩聖の喜びとする所にして、當時其數少なからざりしブリテンの子等は、一夕爐邊の與會に積日羇旅の寂寞を醫し得たりき。詩人 Coleridge の如きも亦其一人たりき。我は頑偏の性、かゝる席に出づるは多からざりしかども、一度は詩聖が大臣の制服を裝ひて可憐なる孫女に送られつゝ馬車に乘らんとするを見、一度は其家に參して白髪銀の如き老詩人が、燃ゆるが如き緋衣を纏ひ巍然たる巨驅を動かして室

より室に過り行けるを見たり(此時は Goethe 公務の繁多と老齢の自然とに取り紛れて英國學生の招待は其子息夫妻是れに當りき)。我は今に至るまで、かばかり「時」の窮迫に對して餘裕ありし人を見たる事なし』と。我が頭中には是等の光景卒然として浮び來りぬ。戶を入りて右折し Goethe が設計に成れりと云ふ階を拾ひて、其鑛石類を集めたる室に入る。細長なる室の兩側に簞笥と棚とを設けて其中に蒐集あり。更に階を上れば二階に到る可し。客間なる四室と、廣き廊下めきて彼が客を集めて會食したりといふ一室とより成る。悉く彼が友及び己れの肖像、彫像、畫友の風景、自畫の風景畫、友の贈物もて飾られたり。廊下を下れば此に其妻が住みたりてふ狹き二室あり。其戶を排すれば捨て難き生垣、枝繁き梢などある細長き庭あり。夏葉繁りて薔薇など香ふ頃此處に來らんにはなど思ふ。庭の一隅には小亭あり。彼が鑛物の採集此所にも貯へられたりと云ふ。Carlyle の妻が崇拜の餘り、切りて送りたる頭髮も亦友の贈物の中に收められたり。三階に上れば、動物の標本室及び理化學實驗室あり。彼が、頭骨の構造は一種特殊の骨より成れるにあらずして、脊髓骨の最上の三個變形してかくなれるものなりとの新說も、Newton の色の原理に拮抗して、凡ての色彩は白色と黑色とがなす關係の如何にあるに過ぎずとなせる假說も、此二室より出でたるを思へ。

階を下りて鑛物標本室の中央の戶を入れば、此に彼が讀書室あり。右には一連の書棚、中央には素木(しらき)造りの大なる椅子、其右なる手枕の上に肱を持たせつゝ向ひに坐せる Eckermann に Faust を口述し、Hermann und Dorothea を口述し (Hermann u. Dorothea は Jena に於て書かれたるものなる事を發見せり)、更に人事の百般に亙りて其周到該博なる智見と感情とを傾倒せし所は此なり。書の上には、試驗の爲めに用ひられたるフラスコと、藥劑の入りたる罎の置かれたるあり。二つの窓よりは、庭の枯枝の疏として雪空に枝を交はす様 Dürer の畫を見る如し。床も素木のまゝなり。

室の左方に戶あり。開けば其廣さ凡そ六疊なる可し。窓一つ。彼方の一隅にこれも素木なる小さき寢臺一つ、綠塵消して綿の綻び出でたる被に蔽はれたり。死する時倚りて其義女の手を取りつゝ "Mehr Licht" と呼びたる安樂椅子は寢臺の傍にあり。綠の色は悲しくあせたり。椅子の右なる小卓の上には珈琲茶碗一個、藥罎一個、寒暖計一個、椅子の後方の壁上に

は眼鏡一個、他の側の壁には鑛物標本表一枚。同じく毛氈もなき素床の上に此人間の王は眠りたるなりとよ。

出でてHotel Weiss Schwan に中食す。處の様、客の種、我等が心境共に Schaffhausen の樂しき團欒の時を想起せしむ。

Hof Theatre の前には Goethe-Schiller Monument あり。

家に歸りて後、壬生馬我が肖像を描き續く。此夜雪。靜かに靜かに更けたり。

〔以下壬生馬〕吾等が室は北に向ひて高く小さき窓あり。其下に二段の踏臺を置きたり。戸外を眺めんが爲めか。直ぐ前には洋服屋(?)あり。此頃は歳末にて新たなるを買ふ人も多きにや。雪降るを往來に曝したるなど何となく景氣よし。その二階三階は商家の人々が住むなるべきか、白きカーテンの奥に寢臺の頭など見ゆ。壁も白くして夜の靑白き光に見るとき殊に美し。我等が窓のガラス一重なるにかへて例の二重ガラス、其間に草花を置くを俗となす。朝夕ガラスの汗ばみて白き時など花は二倍にも三倍にも美しく見ゆ。兄上は花を愛し給ふの性より、住む人の心もゆかしと云ひ給ふ。やゝ右に町の寺塔と長き屋根と見ゆ。初の日はまだらに黑き瓦を見せしが、今は全く白うなりぬ。心の奥まで印象するが如き純白の色が時々の移り變りは、最も生が心を惹けり。雜遝なる色彩の感のうちにて、白と黑ほど捕へ難きはなかるべし。されば、古來の畫家も黑白につきて明確なる感覺を表はせしと思ふは少し。彼の土佐繪などには、驚く可き放膽の調和を許れるものあるを覺ゆれども、未だ光線の考なき時代なれば多く云ふに足らず。寺の壁は鼠色(土色)なり。此の畔に Tannenbaum の、降誕祭用にとて積まれたるに、雪の鹿子まだらに殘れる、眞に詩境の絶頂なり。賣れる嫗、余等に購へよと云ふ。値を問へば三マクなりと云へり。牛の乳房の如き樺色の實幾つとなく垂れたり。物心あるより忘れ難かるべき此聖樹に對する歐洲人の感想と、我等との差は如何ばかりぞ。一樹木に對して既に同一ならざる趣味を養ふ、東西の趣味を云々するもの多く留意せざる可からざるや明かなり。

見よ、人は自ら自然を遥々するものにあらず。ショーペンハウエルが、自然に放遊するものも亦一卷の書册を要すと云へる心同じからずと雖も、裸々として自然の懷に入らんとする事易き業なるべきや。況んや新しき自然の祕言を探らんとするに

於てをや。「自然を研究するは詩人が一生の重荷なり」と云へる言、「公開の祕密」と稱せる義、自然は散策すれば自ら眼中に入ると思へる徒には解し難き境なるべきか。しからば如何にして自然を知らんか。これ疑問なり。われは畫家ならんと欲するが故に、わが道は先づ自然と古作物との關係より始まる。而してわが眼とわが作との證明に聞き次にわが理性的判斷に訴ふ。然れども更に大なるは純高なる心理に映ぜる自然の天啓ならざる可からず。而して總ての崇拜すべき作者の inspiration もこれを捨てざる可からず。故に先づ畫家たる前に自信ある人とならざる可からざるに似たり。或は思ふ、自覺ある高き世に入らんが爲めに藝術家たらんとするにあらざるか。人たらんが爲めに藝術に入るにはあらざるか。

四周の壁は質惡しき白堊なり。なきに勝れる畫をかゝぐ。博物館にて屢ゝ見たる陶器の大煖爐あり、溫度の永く保つ事妙なり。

寢臺には白き毛布團一枚のみ。これにてもさまで寒からず。戸外は一度、室内も九度と云ふなれど。唯羽毛の一處にかたまりて團子をなすは閉口なり。

洗面臺は例の如し。寢臺二つある室なれば必ず二對あり。夫妻と雖も尙ほ個人主義なるは押して知るべし。その壁に白き木綿の幅一尺長三尺許りの額樣のものあり。赤き木綿の絲にて幼稚なれども趣ある模樣を縫ひたり。例のクローバづくし。中央に Traume Süss と記さる。われは此二字、此模樣を見て純然たる獨逸、純然たるワイマーに在るの心地せり。純の純なるカラクテリスティッシュなるものは東西を論ぜず、かゝる片田舍の日用品のうちに殘るぞうれしき。

ワイマーの初夜、せめては兩詩聖が俤にても夢に入れかしと祈りつゝ床に就きたりし。

われは夜中父上の新築に火事起り、われ家根に登り試みたれば足の裏の熱し堪へ難かるを夢みぬ。翌朝兄上に語れば、兄上も友にハンカチーフを乞はれたれども汚れ居たるにて困じたりと夢み給ひし由。「甘夢」も樂しきワイマーの二日目の大笑とはなり終んぬ。

十二月十日。〔以下武郎〕月曜。朝晴。夕雪。窓より窺へば壬生馬が細に記したる小間物店の白き屋根を越えて、心行く計り晴

れたる室は、宛ら瑠璃の如かりしが、更衣し朝餉して舎を出づる頃は、北方の習ひや此處彼處に雲蟠りぬ。

Schiller が舊居は最も繁忙なる Schiller Strasse の俗熙なる近代建築物の向う兩隣りに寂しう立てり。Goethe の家の如き灰色の壁は當時の習俗なりしなる可し。戸を排して入れば美しき小猫あり、驚立して廊下の隅に立ち去るを見たる外、鈴を引く事數度なるも人出で來らず。四圍は森閑として鋪石も壁も等しく冷えたり。卒如として Schiller の人格を思ひ起し、我は猫を呼びて戯れんと屈したる膝を立てゝ、嚴肅なる思ひに胸の窄めらるゝが如きを覺えたりき。

やがて一人の若き婦人いそ〱と歸り來り、外衣を脱ぐ程もなく寒空に赤き頰を其儘、鍵二三を携へて我等を二階に案内しぬ。言葉も心ばへも顏までも Avondale なる Margarete に似て眺めらるゝに、駝背なるが哀れを添へぬ。

Schiller が 2000 dollers を投じて求めたりてふ此家の階下は、他の用に供せられ（一階は番人の住室其他、二階は Goethe, Shakespeare の研究會あり。古くは詩人の家族住せしとぞ。三階は展覽所）、階上に其遺品を集めたり。階段にも廊下の此處彼處にも彼を慕ひて贈り越したる花環に、様々のリボン掛けたる數多し。入りたる部屋は切符と記念品を賣れり。次室は客間なるべし。質素なる家具棋盤など置かれたり。次室は彼が讀書室なり、稍ゝ廣くして二方に窓あり。入りて次の隅には piano と guitar 様の樂器あり。Schiller は天性音樂に執愛深かりしかども自ら樂する能はず、妻の奏づるを聞き喜ぶを習ひとしたりなど案内の婦人語る。右方の壁際には書笈あり。詩聖の死後諸方に散佚して、收容せられたる分甚だ少しと云へり。二方の窓の間に書机あり。München の Museum にて見たるに酷似せる素木のものにて、"Wilhelm Tell" の如きは、恐らくは此机上に記されたるものなるべし。今は彼が自筆の遺紙數枚を陳列しあり。其後方に彼が永眠せる寢臺あり。仰慕の人々が心籠めたる花環もて埋められ Jagemann の Schiller 畫像其間に据ゑられたり。床傍に小卓ありて、彼が最少の小兒の bust を置けり。小卓の傍なる戸を排すればまた一室あり。今は置き餘れる花環の萎み枯れ、塵を被りて處狹きまでに積まれたり（玆に Goethe の書齋と死室、Schiller の客間と書齋の間取圖記しあり）。

Schiller を回顧するは、實に悲壯なる守城の昔談りを聞くの想せずや。彼が感じ易く動き易き心と身とを持して、獨逸に

於ける文藝興起の大業に當るや、內に衣食給せず、外に强敵多く、僅かに占め得たる地步を固守するの苦は、我思ふに時に彼をして殆んど絕望の聲を發せしめしならんか。而も此窮境にありて更に奮激し發憤し、肺患を得、若く死して、而して後漸く已みし其盡瘁の世路を思へば、誰か心深き同情の淚なきを得んや。Goethe の大は人をして尊敬を捧げしむれども同情を與へしめず。Schiller に至りては實に我等が居常の苦痛に對して同じき痛みを有せし人。我等彼に同情せざらんとするも得ず。彼を愛せざらんとするも得ず。Goethe を家康の遑らざる泰安に比すれば Schiller を木村長門が銳敏なる情緖に比すべし。淸くして悲しかりしは彼が短き苦悶の生涯なりしかな。

Schiller が家前の書店に入り、壬生馬は "Weimar," "Goethe und die lustige Zeit in Weimar," von August Diezmann を購ひ、我は "Goethes Selbstzeugnisse über seine Stellung zur religiokirchlichen Frage." Th. Vogel. 19.0. Druck u. Verlag von B. G. Teubner 及び "Schiller-Brevier von Hugo Oswald." Schuster & Loeffler 1905. を購ふ。

書を購ひたる喜びに、他には到らずして直ちに家に歸り打ち開き見などす。我が購ひたるは、厚君に送らんとてなり。

午後 Friedrich Hof に Goethe, Schiller の墓を見んとて行く。雪の中を町の漸く疎らとなりて、小兒の橇などもて打ち戯れたる邊りに入口あり。入れば何處も墓場は墓場なり。まして人の來る事少なき所なれば、白雪の地に布けるをや。葬寺の壁にもたれて、早傾き行く午後の日の薄く照らして、空氣の白みたる中に立つ小さき常磐木、大なる枯木立、綠もて被ひたる墓、花もて飾りたる塚など打ち眺む。細逕を廻り廻りて Hof Fürsten Kirche に到る。小高き丘際に立てられたる希臘形の小寺なり。階によりて打ち眺むるに、小禽の喈々として淡き日にさゝ鳴くを見る(さゝ鳴くと云へる語の意を、今日心より了せるを覺えたり)。寺背を圍りて累々たる墓塋の間を經、彼方なる曠野に出づ。渺茫として布を布けるが如き獨逸平原に、雲低く垂れたる眺め何にか譬ふべき。寒氣を忘れて佇立顧望する事多時。更に道を囘して墳塋の間に入れば、新墓の爲めに二人して掘りたる穴あり。今日此土中の人となるは誰なる可き。孔の周圍に布かれたる靑葉土と交りて、白を點ずる雪、風寒うして靴の音きしる。道にして黑衣、花を携へたる幾群の老若に遇ふ。Nietzsche Archiv に向ふの道に數人の少女が雪辷りせる

に遇ふ。嘻々たる其笑靨と今見たりし光景とを思ひ比ぶれば、直ちにこれ解き難き人生の謎。我死せば、印計りの石を後方羊蹄山の麓に立てゝ、我が亡骸を其下に埋めよと我壬生馬に乞へば、壬生馬は鹿野山の上に眠らんと云ふ。

Nietzsche Archiv に入る能はざりき。歸路 Natural Science Museum の傍なる繪畫展覽會を見、後 Iren 河を越えて Goethe が設計に成れる公園に入る。河の逶迤屈曲して流るゝに、山峽の平地を利して、實に趣き自然を見るが如き園のたゝずまひなり。Goethe が倚るを愛したりてふ "Genio Huius Loci" の三字を刻みたる蛇の石も過り見たり。夏には詩聖が來り宿りしてふ質素なる小亭も見たり。雪を見、河添ひの平野を見、更に北方の木立の樣を見れば、我が五年の札幌の生活、目睫の間に浮ぶ。

夜再び靜かに靜かに更けぬ。

雪の往來。〔以下壬生馬〕

僕に取つては伊太利の風景より、瑞西の山と湖より、此單調荒寥たる北歐の雪景色が珍らしい。München から Berlin に行く間既にゆるやかな岡と、造林の長く續いた原野、それに、流るゝ岸の低い小川などの冬枯の樣を見て車窓を捨て難く思うた。然し今此淸い町に來て、詩聖の餘香に心を洗つて此新しい白い雪を見れば、更に珍らしい物を見たかの如く非常な喜びを受ける。

Goethe と云ふ名を始めて聞き知つたのは幾歲の時、何の本であつたか、誰の話であつたか覺えて居らない。多分格言集などでゲーテと書いてあつたのを見たらう。其後學校の讀本に小さな詩などがあつた。その題もよく覺えて居る。それから Werthers Leiden と云ふ本がある事を知り、卒然として崇拜者の列に加はつた。其肖像畫の寫眞、其全集の美本、其傳記を見聞きするにつれ、幾度か未だ生きてゐる人の樣に思ひ慕うて、心祕かに指導者の如くに尊重したか―― Werthers Leiden の如く強い渴望を持つて臨んだ本は未だない。而して Dorothea の如く渾圓たる作と思ふのも未だない。その中に巖元氏の知を得て、詩聖が眞價に就いて、より確實な意見を成す事が出來るやうになつた。然し渴仰の度は印度の夏を見るにつけ、ギリシ

ヤの古名作を見るにつけ、種々の喜憂を味ふにつけ、益〻增大するかと疑はれる。其癖僕は別に此詩人を硏究した譯でも何でもないが妙な事があるものだ。天然に默契でもあるかのやうに信じて居る人々には先代に目標とすべき天才がある。而して僕は Goethe のクヂに當つた一人であるかと考へらるゝのである。故に僕には一種の美しい Imagination である。僕は何も歷史的に其人格を確め其經歷を知る要はない。寧ろ我が學び知つた善美な考をもつて、此詩聖を湍むればよいのである——かゝる人の住んだ Weimar の夢の如く己れに迫り、「若きフヒイ」の逍遙を羨ましがつたのは無理もない事。今其町に來て其古家舊跡を訪ひ、其歷史を讀み、其人が嘗て見しと思ふ丘陵、小川、林を見て喜ぶのは當然。美しい自然が一層美しく見えるのも敢て無理は云へない。

嘗て英夫と淺蟲に雪を見に行つて失敗して歸つた時、母上に歌を作られて赤恥をかいたので、雪の印象は甚だ惡い。も一つ自分は降雪の深い國などで、生活する事は出來ない體であると信じて居た。然るに今目前に此雪の村を見て、自分の想像の意外なのに吃驚する。

雪程淋しい、深い淸さを持つて地を被ふものがあるか。僕は吹雪に呼吸し、軟い雪を踏みしめるのを甚だ心地よく感ずる。面を北風に吹かせても思つた程のものでもないと思つた。唯春先、雪の溶ける頃は厭な事であらう。今でも雪水の往來に溜るのは嫌だ。

家の入口などは箒で除ける。坂道には赤い砂利でもつて往來を撒く。すべつて轉ばぬためである。雪國では毎日一度位は降雪するやうだ。此砂利を毎日毎日撒くと雪の溶ける頃は、中高に蒲鉾形に道が出來る事であらう。

屋根も北向はもう眞白だ。南向に黑い瓦、赤い瓦が時々見える。三角塔のやうな高い屋根の赤瓦は日本では見られない。遠い岡の上の細長い森林はづれのポチ〳〵した民家、近い林の下道の黑いのなど北歐の詩趣であらう。も一つ風車の粉挽小屋がある。

北歐の人間は沈默である。食堂などでも家族的の群と思はれるに、會話もしないで食うて居る。男が長靴で雪の上を歩い

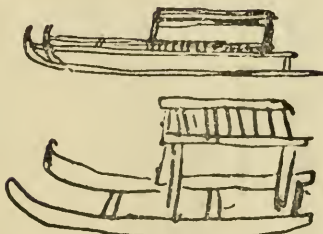
て行く様は實に沈着な態度である。中學生は例の華やかな色の制帽にトンビを羽織つて歩くが、これも沈着な歩を運んで少年の嘻々たる群集をさへ顧みもせぬ。

女は地味な黒衣を着るのが多い。毛皮の帽子も時々見るが實によく似合ふ。ツバの廣いのは風の吹く時不快な感を與へる。少女は色の濃い頭巾様のものを被るがこれはよい。メルヘン的だ。赤のビロウド最も適せるが如し。女は顔の形に於て伊太利人の敵にあらざれども、domestic にしてしつとりと情深く見ゆ。體の形は上乘なり。細くして脚長く、體を前にかゞめて急ぎ林より出

（女の被り物）

で來る様など悪しからず。右手にて裾を取る手に褐色の手袋も似合ふ。時々書籍を持てる女に逢ふ。車中にても讀書若しくは新聞に目を曝せり。理窟は云はねども知識慾は深しと思はる。賴母しき事なり。獨逸人のえらくなりしは女が半分金鶏勳章なるべし。日本の若き女は、よりラテン的な婦人たらんことを欲せざるか。これは教育者と時代の罪にして、元の女性の本性を考ふるの要はなきか。

次に少年少女の群なり。頬赤くして快活、どこか暢氣な所あり。例へば、雪を投ぐるに急所を狙ふ事を知らず。雪を固くする事すら知らず。投げつけられて泣き、若しくは怒るらしき風もなし。笑ひ嘻々然たり。喧嘩を以て遊戯の一つと心得る日本の少年大に反省すべし。男童は少女に對して一段尊敬を拂へる如く、少女は寧ろ男兒に親愛の態度を取る。童兒の群は家庭的即ち兄弟姉妹か若しくは數人の男、數人の女となれり。學校に行くにはランドセルを負ふ。歸り途は雪をいたづらしつゝあれば、中々歸り着かぬ事なるべし。彼等の戯るゝは自己的なり、獨立的なり。人に束縛せらるゝを好まず。束縛することをも好まざるが如し。これ大に眼に立つ特長なり。彼等は戸外の運動を甚だ好むと見ゆ。雪に對しては殊に親愛の情あるものゝ如し。夕日既に落ちて六七時頃になれども歸らず。それは彼等に雪滑りの喜びあればならん。鐵製のものと木製の炬燵櫓的のものとあり。前者には三人程乘りて少女の引き行くを見たり。輕き

（上鐵製・下木製の雪滑り）

ものなるべし。後者は主に坂より滑り落つる時臀の下に置くものにて形も小なり。誰さんのはよし、われのは惡し、此度のクリスマスに買ひ求め度きは、彼の町の彼の店にありなど云ふ事もあるべし。

町内の坂道、公園の丘、何處にてもお構ひなく滑りたのしむ樣、屢〻佇立して去り難き可愛さなり。

我は彼等の餘念なく同じ事を繰り返しつゝ嬉笑の盡くる事なきを見る時、潸然として心泣かんとす。美しき國あり、われは一度其門を出でたるに、早や他の人々來りて住めり。今歸り來りて其境内を見るに、此等の美しく可愛らしき少年つどひつつ歌ひ舞へり。われは既にわが丈の延びたるが爲め、其城門に入る事能はざるを知るが故に、此堪へ難き煩悶を胸にして佇める也。彼等は、われも嘗てかくの如き樂しき民なりしを思はず、われを見れども知らざるが如し。われ其衣の雪を拂ひやれば訝しく思ひ、われを汝が友とせよと云へば、此男狂せりと思ふ。われ汝等の心を知る如く、汝等われの心を知らざればなり。かくては智も亦要なきもの哉――少年の甘きを思ふが中に、少年の甘き戀を忘るゝ事能はざるは萬人皆一つなり。

美しき哉君等が髮、君等が長き脚、君等が赤き頰、君等が快活なる天賦。われ亦かくの如く樂しき日ありき。其寶は奪はれて今唯此身殘れり。いま〳〵しき此身ならずや。

われ君等の永くこゝにあらざるを知り、われ別に樂しむべき天地にあるを知る、知ると雖もわれ君等に恍惚として眺め入るものは何ぞ。わが心古りたるか。君が喜び大なるか。われは君等が嬉笑に勵まされたりと信じつゝ手を伴はれて君等が滑らかなる坂道を驅け下りたり。我は此時若くなり得たりと欺かんとせり………一町にして赤き帽子は辷り下りたり………二町目にして振り返れる時黑き毛皮の帽子は辷り下りたり………彼等は餘念なし。彼の林には橇を引きて母に伴はれて行く少女あり。天暗からんとす。ニイチエが狂死せし家は其頂に建てり。………われ泣かんとして笑へり。………

〔以下武郎〕　覺束なき我が兩詩聖の知識の過去を思ふに、雜誌小本にて得たりし朧ろげなるそれは措き、嘗て白鳥氏の塾にありし頃、土曜日毎の小話會に一夜氏は Shakespeare の獨譯と、Goethe の詩集とを持ち來りて我等に示したる時、我は稍〻强き impression を受けたりき。札幌に行ける後には内村氏の「求安錄」に、Goethe が Faust の夜の默想の一部を譯されたる

を心深く讀みぬ。新渡戸氏が"Sartor Resartus"を講じたる頃には、Goethe, Schiller の名は幾度か其唇頭に上りて、我等は朧げながら其爲人の片々を思ひ見たりき。次いで彼と我との間に、苦悶の世來りし時、彼が東京より購ひ寄せたる Goethe の"Sorrows of Werther" と Burke の "Beauty and Sublime" とは、我等が眼には天啓なりき。「若き悲み」は一夜は彼の手に、一夜は我が眼に繙かれ曝されて、其表紙の薄き紙は落ちページには赤青の條、涙痕をすら留めたり。次で彼は Schiller の "Resignation" に執着し、我は同じき人の "Longing" を覺束なき筆に譯しぬ。一度 Goethe の "Werthers Leiden" を讀む。Schiller の "Räuber" は自ら我が友ならざるべからず。我は圖書館よりその英譯を借り來りて "Räuber," "Maid of Orleans," "Hymn of Bell" 其他の詩篇を貪り讀みぬ。殊に Moore が、かの Danube 河畔の落日に對して、少年の時を回顧する一節は、今も我が記憶の中に留まりて消えもやらず。Goethe の "Erlkönig," Schiller の "Hoffnung" など諳記したるも此時なり。留學の末期に我が米國に註文したる "Faust" の英獨對文の一册は、再び我等が渴望を醫す可き大なるものなりき。淺き世路の經驗少き文學の知識を以てするなれば、固より此大作の眞趣を解するが如きは、願ひても及び難き所なりしかど、憐れむ可き Margarete が窓に倚りて歌ふ小唄、寺門に泣き倒るゝ悲しき煩悶、牢獄の悲劇なとは我等が激し易き少年の情を動かして、彼が白衣せる Margarete を其室の窓被にマザ〳〵と見たりしも亦此時なりき。同じき時に註文したりし "Miscellaneous of Carlyle" に、Schiller, Goethe の傳あり。Goethe の死を哀悼する文あり。獨逸文學の傾向を論ずるの文あり。我は亦此等に多大の興趣を有したり。東京に出でゝ後は "Faust" と "Sorrows of Werther" を繰り返し讀むを以て樂みとなし、後者の如きは換讀八回に至りしが、其書は我が米國に赴ける時、途に Seattle の旅館にて失ひ終れり。惜しければ書を送りて友に其捜索を求めたれども回り來らざりき。

教室にて受くる文學の講義は何時もあきたらぬものなるぞ不思議なる。我が Haverford College にありし一年の間、二詩聖の作にして讀ませられしもの Goethe にては "Götz von Berlichingen," "Hermann u. Dorothea," Schiller にては "Wilhelm Tell" なりしかども、我が不足なる獨逸語の知識は、よくこれを翫味すること能はざりき。唯 "Hermann u. Dorothea" は

Goethe が後年の傑作として其 Idylic sentiment の幽奧にして滴々清新の味に滿ちたるは、我が不足の智も亦拒むべからず。學餘自ら好んで誦讀せし事屢々なりき。

去つて Harvard に到れる頃は、我が滿心の傾向は痛く變調を來して、既に成りし思想に行きて、其處に慰藉を求めんとするの慾は全く盡滅し、我は渴するものゝ如く獨逸當代の文學に走りしかば、我が手垢じみたる Faust も開かるゝ事稀なりき。

Washington に移りてよりも、我が生活は單に北歐文學を貪讀するにありて他にあらず。Goethe の "Apprenticeship of Wilhelm Meister" を讀まんとて試みたる事あれども、我が當時の頭腦はこれを續くる事を許さゞりき。古本屋を漁りて得たる "Correspondence of Goethe and Carlyle" は零細なる手簡の集なれば、不退の興味もて初より終りまで讀み終りぬ。

我が此二詩聖となし得る今後の交渉は、如何なり行く可きか。願くば我が凡劣なる智情の火を搔き立てゝ、何時の時にか彼等が靈藥の淨音裡に逍遙し得るの喜びを得ん事なり。

此地の電車にては Conductor なく切符を發賣せず。客人は單に車中の小箱に金十錢を投ずるなり。

十二月十一日。 火曜。曇。晚起。朝、雪の中を Goethe-Schiller Archiv (1896 年建築成る) に到る。Ilm 河の彼岸にある廣漠なる一構なり。內に入れば創立間もなきにや、一家寥然として無人の居の如し。階上には Goethe, Schiller の MSS. [manuscripts] 及び其友のものあり。Herder, Wieland, Byron, Heine, C. von Stein, 其他數多し。Goethe が MSS. の中には "Werthers Leiden," "Faust" "Italienische Reise," "Hermann u. Dorothea" 其他、Schiller が MSS. の中には "Wilhelm Tell," "Wallenstein" 其他、Goethe Society の library 亦此建築の中にありて、蒐集せられたる書籍甚だ少なからず。高橋五郎和譯 "Faust" 及び「獨逸奇譚狐の裁判」なども同列の榮を辱うしたり。凡そ我等が此の如き所に遊びて、只管駭心に堪へざるは、歐洲の國民がその產みたる天才に對するの態度なり。Schiller が "Wilhelm Tell" の原稿には覺束なき筆にて女の横顏一つ描かれたり。草稿紙の端に「へへののもへじ」など書きさし類なるべし。

歸宿し中食。其後はなまけて見物に出でず。壬生馬は、昨日見たりし常磐木の、雪の中に靑く染め出されたるを描き試み、

我もつまらぬ sketch に色なすりて日の暮るゝ程になりぬ。餘りなりとて出でゝ公園に散歩す。幾度も幾度も畫にしたるを見て、今は古臭堪へ難しと思ひ居たる枯林に日沈む。雪の雲の樣も自然其物に對へば盡きせぬ形色あり。見ずや靄々として天を仰ぐ幹、枝、梢の深刻なる喪色、沈み沈みて打重なりたる天、黃の雲の後にホト〳〵燐の如き日の光ありて彩をなせる樣、思へば深甚なる休息の心よ。靜かに、されども速く暮れゆく冬の日の終りを描き盡し得る筆あらば祝福さる可し。

夜三度、靜かに靜かに更けぬ。

十二月十二日。水曜。雪、朝、Residenz Palatz に到る。門を入りて左に Chapel あり。多く注目を拂ふ可きものなし。Herders Zimmer, これに隣りてあり。Jäger の fresco あり。それを左に中央の戸を入れば Goethe のそれあり。Neher の fresco 入りて左には Wieland のそれ、Preller の fresco, 右には Schiller のそれ。Neher の fresco, Raphael を畫聖と仰ぎて苟も其轍を出でざらんと勉めたる流派の人々の作と覺し。

東方の一長屋は Goethe の design に成れるものなりと云ふ。彼が建築に對する知識の如何は、其知識なき我等の推知し得る所にあらざれども、彼が趣味は、文藝復興の中期を目懸けたるにはあらずやと思はる。Dome と柱との調和を計りし Bramante が失敗は、此處にも繰り返されたるが如し、窓の線と柱、柱と天井との關係は、Vatican にも見ざる肅整の趣味あるが如し。Goethe は又此建築の中に、一も純獨逸の趣味を納れじと勉めたるが如し。(建築材料は殆んど木材と錦布の類のみ。唯 Maria Paulowna の室が、近在より出づる赤色の花崗岩の一種より成れるを見たり。伊太利の石中より來れる我等には珍らし) 其全體が表顯する趣味と感情も、希臘文化に浴したる南方のそれなり。尙ほ一の注意を要するは、第十八世紀に於ける佛國の好尙に擬したる裝飾品の多く用ひられたる事なり。彼の國が齎し慣れし文學の潮流に拮抗して獨立の旌旗を飜へせし此人も、其染潤の致す所、遂にかの浮華嬌麗なる傾向を捨つるを忘れたりしにや。

Maria Paulowna (d. 1859) は婦人ながらに趣味廣汎なる人なりしが如し。其の露國より齎らせるもの、若しくは設計に成りしものゝ中には、中々に捨て難きもの多し。

突き當りて左に曲れる一室に Leonardo da Vinci が「最後の晩餐」の study あり。基督の頭は見當らず。舞踏室、鏡の間を經て內部の廣間に入れば、一畫家ありて大なる畫面に對して製作しつゝあり。傍には侍人一人例のさだまりたる姿にて立てり〔茲に Dichter Zimmer 並に Goethes Zimmer の間取圖を記せり〕。

〔以下三行壬生馬〕 Maria Paulowna が Karls Friedrich の配偶として Weimar の文林に貢献する所ありしは兄上の記し給へる如し。而して此文藝運動の導火者とも云ふべき Karl August が同齡の室、花の如き Liuse が助力と皷舞をも逸すべからず。又 Sofia が容色と蒐集の貴さも、此宮を去るものゝ忘れ難き所なるべきか。

〔以下武郎〕 Library に到る。亦公爵家の創立にかゝる所。二十五萬の書、八千の圖を集めたりと云ふ。戶を排して內に入れば、英語を最も正確に且つ紳士的に話し得る圖書係、我等を迎へて懇切に案內者を呼び吳れぬ。彼に從つて藏書室に入る。底冷えする大堂に書籍は塵を蒙りて竝び立ち、白堊大理石の肖像及び描き油繪の畫像は、此處彼處、處狹きまで掲げられたり。

Goethe が Apollo の如き、Schiller の後頭削りて取りたるが如き半身像の Dennecker によりて造られたるも亦其中にあり(Alexander Fr:foli の作？ Jagemann の Schiller が死顏の原畫も此所に藏せらる)。階上には Goethe が採集せる喬木の標本、Frederick the Great が用ひし杖等あり。其の向へる一室は Goethe が居りて讀書に耽りし所なりと云ふ。窓に對して廣場の彼方に C. von Stein が住めりてふ長屋めきたる一棟を見得可し。

屋後には小塔あり(Amtage Margaretaé—1671—の刻字あり)。其階は一人の罪囚大なる瓣を彫りて造れるものなりと云ふ。其罪は何なりしか。其爲人は如何なりしか。唯彼が堅忍の一事業は今も殘れり。

再び Hotel Schwan にて中食。一畫を成す。夕食後、Liszt Museum に到る。Goethe の舊家を Wieland Denkmal の方に眞直に行けば、家並の盡きたる所に、四角なる二階立の家あるはそれなり。內に入れば、三十年以上彼に侍したりと云へる賤しげならず見ゆる老女、我等を案內す。

五時半には誤たず起床せし人なる事、若くして美しく小さく指長き手を持てる人なりし事、日曜毎に文士樂人滿堂して管絃の戯れに餘念なかりし事、老いては其髪白くして雪の如く、窓邊に坐せる時は來往の人窓下に來り集ひて其仙容を仰望せし事、終生人に不機嫌の貌を示せし事なかりしなど語り、これは彼が日曜の集會の後倚りて必ず眠りたる長椅子、これは「基督の像」、これは "S. Francisco" 此二物は彼が床傍の伴侶なり、これは彼が小影姿に賜ひしもの、床傍なる無絃のピアノは彼が夜毎指をならさんとて用ひしものなど語る。彼女に取りては、世に Liszt にまさりて大なるものある事なし。部屋は階上にありて三より成る。最大なるものは客室、これに隣りて小なる寝室と食堂とあり。

家を出でて Park を散歩す。雪は降らねど稍ゝ厚く積みて、一掬すれば直ちに好個の雪丸を得べし。Liszt の大理石像は雪の中に白く立てり。

案内者を得て Friedrich Hof. なる Fürst-gruft に到る。

Gruft 前の並木の道は美しきものなり。戸を排して入れば、此處は永久薄暗の世にて、贈られて凋みたる花環葉環に垂れ下げる赤、白、黄、靑、綠、紫のリボンの色何と云ふべき。やがて墓守の階下に灯したりと云ふに、降れば暗き石窟の中、幽かにランプの火點れり。古き公爵家の棺槨は宛ら死者の如く累々として横はる。其中階段に最も近く樫の大棺二つ、ひたと接して相並べるは、Goethe と Schiller のそれなり。棺の一端には事々しからぬ字體にて Goethe, Schiller と書かれたり。頭の方に金屬製の月桂葉冠あり。Goethe のは Poland の贈りしものにして白金、Schiller のは Hanburg の贈りしものにして銀(死後贈物などはめつたにせぬ事なり。これを見て知るべし)。

公爵家の棺槨にして第十五世紀に屬するものには、面白き形のものあり。横斷面確然として六角形をなす。

夜四度、靜かに靜かに更けぬ。

十二月十三日。木曜。强風。朝から晩まで畫(精しくは十一時より四時までのみ)。夕刻散歩して Eroriers Garten の小池を一巡りす (Schwan-See)。夜は此地の Goethe u. Schiller Monument ある由緒古き Theater (珍らしき時に Shakespeare 演

ぜられ、Goethe の 'Faust' 後篇竝に Wagner の "Lohengrin" 初めて試演せられし所なりと云ふ）に Schiller "Die Braut von Messina" を見る。

夜五度、靜かに靜かに更けぬ。

十二月十四日。金曜。曇。名殘を惜しむべく朝四度 Park に到る。水に臨みし林を眺めなど、行き行きて遂に Ober Weimar に到る。地に別るゝの悲みにして、此の如く切なるは、我等の多く味ひ知らざるところなりと云ふべし。

過ぎし世の煉りなせし圓らかなる珠、日照らせば喜びの色、月射せば愁の姿。

Garten Haus に到る。Goethe が晩年の七星霜を過せしは此なりしとぞ。簡素單一、かの紛糾せる心情を抱きし人の住みし所なりとは、誰も思ひ掛け得ざる可し。北に面せる方に彼が寢室あり。旅用の臥床の傍に一小卓あり。Hartz? の石を其內に嵌して其裏には

"Nur fort, nur fort! Müssen noch zu grossen Ehre kommen, ehe wir die Hälse brechen Titschbein;
Vors'chtig, zwischen den Moos bedeckenschlüpfrigne Felsstücken können leicht die Beine stecken bleiben!

の句書かれたり。

家に歸りて中食。午後二時三十八分の汽車に乘じて Weimar を去る。

Türingen Wald を左に見、昨夜見し悲劇の役者と同車し、三時三十分 Eisenach に入る。着後 Luther Denkmal, Bach Denkmal, Luthers Haus 等を見、散髮す（昨夜見し役者と同車一寸妙）。

窓前 balcony に出づれば雪霏々として降れり。街燈の周圍は赤みて、雪の上より下に輕く降り行く樣は、寂しさの極みなり。巡邏の人の耀ける制服と戛々たる靴の音。十一時十五分にして、向へる家並の燈は凍えて死する人の如くフッフッとかつ消えて、やがて天地は燐の如き雪明となり行くなるべし。

十二月十五日。土曜。曇りては晴る。朝、町を南に下り家並の斑らとなれる邊より右折して Reuters Villa に到る。

Reuter は Low Germany の詩人にして 1874 に死せりと云ふ。我等は嘗て其名をだに聞きし事なければ、從つて二階なる其遺品に對して多くの感興を有する事能はず。察するに彼は幸運なる詩人なりしが如し。其家居の廣大なるは、我等が今迄に見たる詩人、畫家、音樂家の何者（恐らくは Lowell のそれを除きて）にも勝れたり。されども彼の交遊する所は割合に廣からざりしが如し。彼は亦畫く事に巧みに、自然科學に對しても多少の趣味を有したるに似たり。

隣室に Wagner Museum ありて彼の肖像、友の記念品其他蒐集せられたるもの尠なからざれども、我が彼に對する知識も亦寡少にして多く記し得べきものなし。此館内にて一人の若き獨逸の商人と相知るに至り、彼と共に出でゝ Wartburg に向ふ。Reuter St. を尚ほ南すれば、道は漸く爪先き上りとなりて、樹の上には木鼠などを見ぬ。我等は既に Tiiringen Wald の一部に入れるなり。森の此處彼處 T. W. V. と云へるが樹上に札せられ、赤及び靑の目標も亦幹上に塗られたり。樹木の種類は樅最も多きを占め、白楊、白樫、樫、榛等其間を點綴せり。昨夜積みし雪は、風なき儘に今も尚ほ千條萬枝の簪となり、微風梢を渡れば燦然として星屑となり銀塵となりて散る。暫くは人跡ありし細道も遂には鹿の遊びし跡のみとなり、足を留めて森閑たる森の中に啄木鳥の聲を尋ね姿を求めなどす。樅は喬木中の癖、枝を水平に擴げて林立し、打ち透せば立縞模樣なり。尚更に美しきは、疎らなる木立を通じて彼方に日を浴びたる山の背を望みたる時。

今は眼界も漸く開けて我等が穿ち行く森林の盡くる處には、必ず眼もはるばると波のうねれる山の背の、木立は黑く雪は白く重き空に打ち續きて、冬の日の幽かなる光に呼吸するが如きを見る。自由の生るべき處とはこれか。

逶迤たる山の雪軟かき道、一度は老いたる人の一人して土を穿てるを見、再度は小阿亭の傍に老夫と小兒三人ばかりの女の籠かたげたるを見、更に勾配の急なるを攀ぢ行けば、仰ぐ計り高き邊りに城壁の重々しき色を捕へ得たり。Eisenach の町より高き事 565 ft. 海を拔く事 1290 ft. なりと云ふ。

城門の橋の上には兵士ありて守れり。突き當りには旅亭あり。案内者を此に傭ひて城門を入る。城の建てられしは 1070 Lewis the Springer によりてなりと云はる。獨逸現存の中世紀城郭の中最善最美の典型として指さゝれたるもの。形は英國

に發達したる castle の外觀的美容なく、又佛國の chateau の齋整もあらず。されども Romanesque の精神を傳へて其外容の純朴は偶々一種好古の思を動かすが如し。戸を排して入れば小廣き土間あり。柱には猪の首、壁には牡牛の頭付の皮を掲げたり。門樓には此所より登り得べし。

更に進みて左手なる戸より入るに純 Romanesque の廊下あり。Schwind の描ける Andreus II の王妃 Elizabeth の一壁畫あり。突當れる所に Chapel あり。皆近世の restoration になれども、勉めて當代の趣味によりたるものなりと云へば、見て快からざるはなし。Sangersaal は當時獨逸の卽興的詩人卽ち minstrel の歌爭ひの畫と、主座の彼方には Darmstadt の Ritgen 及び Hoffmann の詩の一節もて飾りあり。Landgrafen Zimmer には Springer に次いで此城に居りし Landgrafes の家歷中より七個を選びて fresco となせり。共に Schwind の描く所なり。

三階には Cologne の Welter が Ritgen の考案に從つて描きし裝飾ある Banquet Hall あり。其趣味の花の如くにして而も木强幼稚なる、當時の騎士の心を形となせるが如し。我嘗て Basel の Rathhaus に期せずして表現せられし室內裝飾の趣味に、强靱なるもののあるを認めしが、今此城を見て亦しかく感ぜざる能はざりき。

Landgrafenhaus は全室 Mosaic に成り、趣味は悉く Romanesque なれども、物眞似の厭氣は如何にして免るゝことを得べき。Ritterhaus に Luther が聖書を飜譯したりてふ一室も見たり。Cranach が Luther の父母、Luther, Melanchton の像の掲げられある下に頑丈なる机あり。椅子は反對の壁に置かれ、机の下には大象 (mammoth) の脊骨の一つ足臺として置かれたり。入口に近く戸あり。窓よりは Eisenach 一帶を超えて山々の形、目も遙かなり。思ふに大なる思想囘轉の源頭をなせる……云はずもがな。

辭して再び山を下り、Annatal と云へる細谿に下りて山峽の間を行く。峽漸く逼りて巖に相對する事三尺に滿たざる所あり。仰げば倒蔽の樹枝を超えて一道の雲日和を見、岩は悉く苔と雪と氷柱の衣着たり。Elf-grotto など云ふもあり。脚下には雪融けて湍をなし、足を留めて聞けば淙々の聲をなす。Grotto Azuore 以來の奇景とすべし。行く事稍々二十分にして峽

盡き谿逕稍ゝ開け、仰ぎたる雪の中を無二に登れば、やゝ傾きたる午後の日、雲をもれ林をもれて射す。美しさ云ふ可からず。Hohe Sonne と云へる山宿に入りて中食す。

三時二十五分此を發し、再び松柏の間を貫きて歸路に就く。逕路に獸跡多し。小鹿二頭を山腹に見などす。雪に沈み行く夕陽の色。

薄暮 Göpelskuppe に登臨し、山懷なる村や、市やにともりたる灯の可憐なるを嘆稱し、獨逸の友を停車場に送りて歸宿。濡れたる靴下など乾しながら、兵營生活の昔など想ひ出でゝ笑ふ。

十二月十六日。日曜。曇。朝九時某分 Eisenach を辭して汽車に乘ず。Türingen Wald (Herz Deutschland とも呼ばる)は依然として車窓の兩側に涌れり。されども此大森林の核心とも云ふべきは、西は Eisenach を南北に貫く線に初まり、東 Weimar を南北に貫く線に終る。其幅員 $70^m \times 6-22^m$ に達す。Ilmenau を南北に貫くの線、其地形に於てほゞ此森林を兩分す。我は未だ嘗て樹木に滿てる砂漠とも云ふべき此大地域が與ふる特殊なる印象を云ひ表はすべき語を知らず。日本に於ける森林が與ふる印象とは大に異れるものあり。其輪廓の茫漠とし屈起の定かならぬ、一種陰鬱の氣あり而も小兒らしき深刻を有せるなど、假りにこれを Märchen 的と云はんは如何に。

Frankfurt 近くなりては地形漸く變じて、おしなべて平原と多く異る所なかりき。汽車の、歐洲第一なりと稱せらるゝ停車場に着せしは一時前後なりしなるべし。直ちに Hotel Kaestner に投じ、朝作り置きし腹を便りに見物を初む。

茲に來りて直ちに注目を促がすものは風俗の激變なり。啻に風俗のみならず、容貌身の取りなしまで、我等は既に純獨逸的風土の中にあらざるを覺らしむ。我等が經來りし Weimar, Eisenach は獨逸國中にありても、殊に歷史と因みある處にして風俗も亦今の世には遠ざかれる所甚だ多し。其印象の反動も亦我等が驚愕を助けたるにや、壬生馬は再び伊太利に歸れるの思ひをなしたりと云ひ、我は町の新たに、何處ともなくせはしき樣に、米國市街の面影を呼び起しぬ。

Kaiser-strasse を經て Hirschgraben に Goethe の舊家を訪ふ。安息日なれば開かず。家の形は此市の古き部分には多かるべ

き構造にして、其大さは尋常以上と稱すべく、Goethe の父なる人が當時に於ける富有の度を想ふに足る可し。Goethe 及び Schiller の Denkmal を見たれども、兩つながら云ふに足らず。唯大なるのみなり。

市の東端なる Zoologischer Garten に到る。貴族的なる鸚鵡、老いて甚だ痩せたる虎、囀る小禽、默して眼と肩とを張れる鷙鳥類など、見入れば見入る程に興味多し。

Palmegarten は市の西端にあり。酷烈なる寒氣を冒してこれに到る。右手なる大温室には Palm 屬植物に加へて人の愛づべき花卉種々を集めたり。戸を排して入れば、水氣多き温き空氣に爽かなる植物園固有の香氣人を包みて、心溶くるが如きを覺えしむ。Tulip、菊、水藻、椿、薫蘭、櫻草など、夕暮の日に對して色えならぬもの、花前の微風に對して香ゆかしきものなど、紫色の紅と藍との混合色なるに係らず、其光線に對する反應の不可思議なるを壬生馬の語れるも此時なり。

左手なる大温室は純粹なる Palm のみを以て滿ちたり。これに附屬して音樂堂あり。内に入れば盛裝巴里の人を思はしむる男女、電燈の光の下に色晝も及ぶまじき葉蔭を歩む。我等も其群に入りて小高き處にある小椅子に坐し、此熱帶的大觀に心を奪はれぬ。熱帶植物の特性は枝少なく葉の大なる事にして、寒帶植物の特質は枝細かに葉の小なる事なり。一は優美深邃の姿にして、一は强勁深刻の形なり。驚くべきかな、神の自然に賦與して人を鑄らんとするの熔爐。

夕食を附屬の食堂になしつゝ階上の管絃樂を聞く。皿匙の音喧しくて聞くべからず。

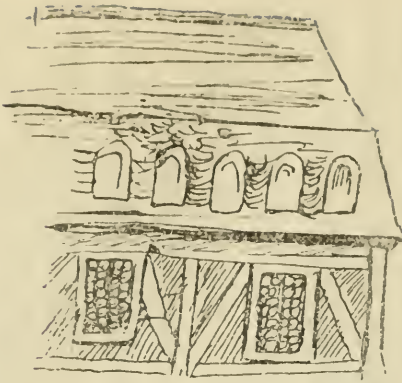
十二月十七日。月曜、曇、朝、再び Goethe の舊家を訪ふ。戸を排して左に、其母の織り慣れたりてふ Lace を作る柄竝に尺度、Goethe が作りたりてふ其母の影像などあり。これに隣りて厨、甚だ小なりと雖も器物は皆低廉なるものにあらず。階上に至る階段には父が伊太利より齎したる風景畫其他あり(茲に家屋の間取圖二個記しあり)。

戸を排して入れば其應接室なり。殊に事務室の椅子、机其他は精巧のものなり。左方なる圖書室には書棚の中に Goethe の父が編纂したる市法の大集あり。

三階は圖の如し。書室には平凡なる畫を集めあり。Goethe の母の室には、彼女が劇場に到る時携へたりと傳ふる行燈あ

り。蠟燭二本を灯すべし（玆に間取圖一つ描けり）。

Burgomaster は三本、法律家は二本、庶民は一本を用ひてその階級を明かにするの習慣なりしとぞ。次室は即ち此大詩人が 1749 八月二十八日に呱々の聲を擧げたる所なりと云ふ。Goethe の Büste 花環を冠して此光榮の地を記念せり。四階は Goethe が活動の王國なり。彼は二十七歳（編者註、ベデカには1749—1765 即ち、十六年間居りたるなり）にして此市を去り、Weimar に移れりと云ふ（玆に間取圖一つ描けり）。

是れ實に此多情多恨にして容姿神の如かりし詩人が、其少年の樂しかりし時と、靑年の苦しかりし時と、壯年の成功の曙光漸く其頭を照さんとせる間を過せる處なり。彼は此處に住める間に於て "Werther's Leiden," "Kravigo," "Faust," "Egmont" 等の稿を終へ若しくは筆を起せし所なりと云ふ。質素なる机の周圍には十數册の小形なる書籍あり。中には彼が極めて幼稚なる折、家庭教師より授けられたりと覺しきものあり。壁には彼が造りたりてふ其友等の影像飾られたり。左方なる寢室には、窓に倚りたる壁際に寢臺一個ある外中央に彼が其 "Wilhelm Meister" の初頭に擧げし人形芝居の舞臺あり。彼が少年時代の好奇心の如何に奇拔にして而も瞑想的のものなりしかは、彼が當時描きし疑惑の表白が、殆んど深き哲學的質疑として我等の耳朶を撲ち來るを以て知る事を得べし。右方には Goethe の勉強室あり。此は師の坐したる所、此は彼自らが坐したる所など導者語る。辭して階下に下り。裏口より出で、形よき井戸に沿ひたる石垣を潜れば Goethe Museum に到るべし。其戸に立ちて Goethe が住まひし四階の attic より其父母の居室客間さては庖厨を一目に見やるは中々に捨て難き風情なり。

Museum の中には小なれども囘顧頗る多き色々なるもの集められたり。Goethe が色彩論の一例に擧げられたる蛇の畫ある glass cup, 詩人が Lotte に贈りたりてふ頸輪、詩人が少老の小影色々、死面、詩人が兩親の影像其他。Goethe の母の面は、美はしと云ふ質にあらざる可けれども、叡智もて輝くが如し。

Römer は Rathaus の別稱なり。Goethe の家より古建築の民家多き數衢を過ぎたる所にあり。近世の建築としては、其趣味の純雅喜ぶ可し。最も慘ましきは古き建築物の漸く年を經て改築するの已むを得ざるもの多き事なり。來年來りて此市に遊ばんもの我等が見たりし老屋を見るの喜びなかるべし。

此市の建築法(庶民の家屋)に於て最も注目を牽くは、attic の窓の著しく多くして、相互の間の狹き事なり。Goethe の家を、後方より見たる時の屋上の如きは其の一例とすべし。階上の階下より突出づる傾向は無きにあらねども、さして著しからず。壁の組木を表面に顯はすは此邊一般の風習にして、後期に於ては必要以外に、裝飾の爲め支木を挿入したるもの多しと見受けたり〔こゝに attic 及び二階の窓と壁の組木とを示せる圖描けり〕。Römer の向側に立てる Pauls Kirche と云ふ風變りの寺を觀、Ober Mainz Brücke と云へる古風なる橋を渡りて、汽船の曳船したるが上下する Mainz 河の濁流の河水に、多の風の嚴しく渡り來るを凌ぎつゝ、Stadt'iches Kunst Institut の Museum に至る。大階段を半ば上りたる壁上に W. Tischbein の筆に成りし Göethe が伊太利の古跡を弔へるの大額あり。人は幅廣き黑の帽子を頂き、白の外衣の下に赤色の上衣、黃色のズボンを着、水色の靴下を穿ちて崩れたる大理石片の上に倚れり。若し此畫の主題 Göethe にあらざりせば、見ん人の多くは注意せずして看過し去るべし。Göethe の expression には一種の到達あり。

Rembrandt の“Blendung Simons”は、大幅にして出精の作なるべけれども、彼は到底此種の畫題の作者たる可き資格を缺けりと云はざる可からず。Rubens の粗放卑俗なれども、大膽不羈自在なる想像と運筆は、Rembrandt の空しく絕念して苟も野心を此に動かす可からざりし所ならずや。Goyen の“Haarlemer Meer”は其銀光橄欖の葉の如き色彩と、拙なげにして而も眞境を捕へ得たる水の活動とに於て、我等の興會を新たにせしむ。Botticelli の“Madonna, Christ, John”は骨肉の關係不明瞭にして表情も亦純ならず、凡作。“Simonetha”に至りては暗黑なる後景の、表に浮ぶが如く右面を示して、肩までを出せる女性の、筆路の純一、表情の超越、彼にあらずんば亦誰かこれを能くし得べき。

近世の畫家に於ては Hans Thoma の作「自畫像」、「少女」其他、自ら開拓せる一路を示して、我等の同情を促す事多し。

Böcklin の "Villa am Meer" 血の如き暮色、黒雲の間に漲りて、荒れたる例の古荘の岩を打つ波路を輝かせり。同じ構圖にして時を異にせる作を屢ゝ見たり。これは第三なりき。

此夕汽車に乘じて Mainz に向ふ。明日船を此處に得て Rhein 河を下り Köln に到らばやと思ひたればなり。汽車 Mainz に着せし時は點燈の後。Hotel Germania に到れば暖室器なくランプなし。不平の餘り寒氣を冒して市内を縱横し、Rhein 河の寒風に身を曝す事暫くにして歸る。二人共稍ゝ風邪に冒さる。

我等は再び Rhein 河畔に出でぬ。Reinfall の上流に早瀨をなし、深綠の水となりて滑かなる石の上を走り、更に瀑上に到りて一倒千萬噸の白雪を吐き、山嶽を出でゝは獨逸平野の悠和なる流水となりて、其兩岸に、溫暖なる氣候と甘美なる葡萄とを與へつゝ、自らは北海の波荒き磯際に、此回想いと深き河に遇ひぬ。

十二月十八日。火曜。晴。昨夜心を盡して、此處より船の Köln に出づ可きかを問ひ歩きたれども、要領を得ざれば、今朝今一度試みんものをと河岸に出づ。旭日は將に我等が向ひ立てる河の右手遠く雲を分けて出で來れり。雲態光樣 Turner の畫を其儘なり。河上には寒靄長く引いて水低く流れ、岸上には、船人の參々伍々面白き群を造りて相語れり。我は彼岸に piopio の規則正しく相連れるを見、水鳥の啼かずして羽音輕く水上を行くを見、過ぎ行く船を見、橋上の人を見、水鄕の冬の朝の面白き景色を眺め入りぬ。我等が入りて問はんとする切符賣捌所よりは、既に一人の靑年、案内記携へたるが出で行きぬ。船のなきに失望して橋の袂に來れるに、一少女の露西亞帽被りたるが、足を巡らしつゝつく〴〵我等を見て過ぎぬ。人少なに乘せたる電車、橋を渡り來りて右に折れ去りぬ。橋の上には霜置きて、キラ〱と旭に光る。巡査の赤き鼻して兩手を衣囊に收めたるに遇ひぬ。だら〱坂を下り切る頃商店用の automobile 宛ら疾風の如く我等を過れり。かの忌む可き惡臭は凍るが如く我等が鼻を襲ふ。Palace の角には四十恰好の男、用もなげなるにほくそ笑みつゝ立てり。寒さを身に沁みて覺ゆる我等にはそのほくそ笑むが面憎し。兵士二人細長き軍用車の後を押し、他の一人は手袋なき手を、冷えて凍りたりと見ゆる車の梶棒に易々と乘せて、勇ましく傍を過ぎぬ。かくて我等は漸く人影繁き町に入り、Dom を見、靑物市の香の鮮かなる

を喫ぎて Hotel に歸り、停車場より九時二十三分の汽車に乗る。九時五十五分に乗る方都合よかりしを、宿屋の客引きの男の年老いたるが祟りたるなり。

汽車は先づ Wiesbaden に入り、更に發して Rhein の右岸に沿うて走る。空は晴れ又曇りて定かならず。河は Bingen を對岸に望む頃より、漸く雙眸の間に收む可くなりぬ。河幅は思ひし程に廣けれども、深さは如何かと怪しまる。唯其兩岸の地勢甚だ平坦ならず、押しなべて云へば、急斜面を有する二つの丘岡の間に挾りて走るものこれ Rhein なれば、深度も思ひしよりは深きにや。河に對してなせる斜面は、大方は耕されて葡萄園をなせり。車窓より見下すに、直なる枝柱を規則正しく立て連ねたる果園に廐肥を施したるに、霜置きてなせる色の土との相交りて、紫に似て而も異りたる潤彩、これに連りて枯林疎らに立てる牧場の冬枯れんとする緑、更にそれを超えて一帶重く濁りて見ゆる Rhein の流れ、愛望す可し。河に沿ひ岡に臨みて古城塞の荒跡あり。烽火すれば望み得る距離と覺えし。山質は、屋根となす可き石板の産出に適せるにや、將た石炭の礦脈なるにや、此處彼處の岸の土黒みて、山の根を穿てる坑も見ゆ。曳船の多くに積みたるは此黒き物なり。此河に浮べる小舟は du Chavane の『貧しき漁夫』のそれにあるが如き單純のものにして、多くは彩色も華かならず。舵は其形稍〻常のものと異れり。城塞の形は我等が見たりし Wartburg のそれとは大に異り、甚だ佛國の château に似たるものあり。山腹には樹木甚だ多かるべしとも亦甚だ大なりとも思はれず。夏に入りて樹々翠緑を衣する頃には、山には薄化粧の趣きある可し。過眼の村市には新しきものあり、古きものあり。新しきものは煉瓦造りにして旅館及び汽船問屋風のもの多く、古き方は農家漁家これに交りて役場、豪家、寺などの塔や樓や其他平和を守り顏なり。家畜の飼養は思ひしに反して物々しからず。

我等が Köln に達するの前、經たる市街の主なるもの、右岸にありては Neuwied, 左岸にありては Koblenz, Bonn 等なり。停車場に着せしは一時近くなりしならんか。停車場を出づれば Köln 巨寺の塔頭鬱然として我等を壓す。Hotel St. Paul に投宿す。

直ちに宿を出でゝ Dom を見る。塔の高さ五十九間、寺院の長さ 525 ft. と稱せらる。形は純 Gothic にして aisle の屋根は nave よりも遙かに低く、柱の形は其整美に於て Milan を凌ぐ。外面に於ては――殊に、前面後面より見たる場合に於て――Milan の Dom 一段の上にあるが如し。彼は其技巧の優雅を以て勝り、此は表趣の莊重を以て優れたりとすべきか。用材は皆白砂岩にして程遠からぬ Rhein 河畔の山より出せりと云へり。Wallraf-Richartz Museum を見る。階下には古今の彫刻物の模作、原作少なからずあり。就中、古希臘並に Pompeii 彫刻物の模造に色彩を施したる――其當時に於てなされたるものと假定して――ものを見る。其色彩の正確なるや否やは第二として、我等の眼には最も新しく興味多かりき。云ふ迄もなく Klinger の企圖したる所も、此復古の精神にありしならん。

階上には繪畫の展覽あり。Thoma の「夏景色」、Böcklin の「海賊」注意す可し。後者の大膽なる構圖、精緻なる自然の理想化的描寫、驚異すべき色彩。

Köln とは云はず、Mainz に於て我等は既に市民の中に、水の民の分子甚だ多きを認めぬ。一種快活の氣、自恃の風、自ら旅人の心を打つ。我等は永く永く地の人のみを見て水の人を見ざりき。

Baedecker と端書とを求め、旅宿に歸りて諸方に手紙端書など認む。壬生馬は羅馬に荷物の事に就きて、我はロンドンに郵船の事に就きて。此夜一寸散歩す。

十二月十九日。水曜。曇。朝、Rhein 河畔を東に歩み、十一時頃、Dom の廣場に歸り來りて、Dom の塔上に登る。其規模の大、單に我等島國人の心を駭かす。

午後二時二十七分の汽車に乘じて此地を發す。沿道の風光漸く變じて、我等は時に既に Holland に入りしかの思をなす。見る眼も遙かなる平原の彼方此方に並木ありて、地の凹みに水の湛へられたる、岸低き小川の逶迤として流れたる、風車の腕廣く擴げたる皆これなり。樹木の種類も漸く異りて elm に似たるもの多く、松、樅の類甚だしく減少したり。Frankfurt にても Köln にても Eisenach に於けるが如く、降誕祭の爲めにとて樅を處狹き迄廣場に置けるは見ざりき。

我等が汽車は依然として Rhein 河畔に沿うて走れり。されども其風光は再び見るに由なし。其名も和蘭領に入りては、Waal となるなり。我等と同車せる凡ての人は、既に獨逸人にあらずして和蘭人なり。森の子にはあらずして海の子なり。Düsseldorf, Duisburg を經て、我等も亦和蘭地域内の人となりぬ。Utrecht に着する少しく前 Waal は左に我等は右に。夜は早々逼り來て窓外の異風光は望まんに由なし。

汽車の Amsterdam に着せる頃は（遲延して）戸々灯せる事既に久しかりき。寒國の一般の習はしに似ず窓の大なると、車窓の右と左、水黑く光りて燈火を反映するが見やらるゝのみ。

Central Station に着す。日本にて云ふ赤帽は、此地にては黑帽を被りて白服を着けたり。英、佛、獨、何れの國語をも巧みに操る。Hotel に到る沿道にて見る所のものは何となく獨逸と異れり。往來する人の容貌服裝、外國人に對する態度まで。Hotel Suesse に投宿す。其名を愛でゝなり。

十二月二十日。 木曜。曇。Holland の民が家屋の淸潔に對して心燒く樣は、monomania と稱すべしとなり。往來を步き見るに此處彼處の家の窓に、婢婦の甲斐々々しく掃除せるを見る。家屋外壁の石壁すら、一々雜巾掛けしつゝあるを見たり。されども彼等は其服裝に對して他國人よりも淸潔なりとは思はれず。日本人が入浴する事屢〻にして、座敷の掃除頻繁なるが故に、直ちに淸潔を愛するの民なりと云へりし或人の說は如何あらん。汚穢を其儘に見せたる便所、惡臭紛々たる下水、衆人混浴の風呂にたじろかざる無神經を見れば、實に潔癖とは一種の monomania なるに似たり。

都なれば、風俗も歐洲中部の風習を傳へて異樣なるものあるを覺えず。されども和蘭は、和蘭特有の容貌と態度とを有する人民を有せり。彼等は獨逸北部、Scandinavia 半島の民とは異りたる祖先を有するもの ゝ如し。其毛髮は黑暗なるもの多く、鼻梁は其頂きに於て尖り、皮膚は時に純美なるものを見る事あれども、多くは滑淸なりと云ふ可からず。丈けは概して中脊と云ふ可きものなるべし。擧動は海國の民に似ず概して潑剌の氣を缺き、表情も亦稍〻遲鈍なるが如し。唯一つ今も彼等の面に印せられて失せずと思はれしは、牛の如き忍耐の力と獨立自由を希ふ心となり。是れ實に此國民が有する唯一の生命

なるが如し。彼等が勝利を得る所には、自由其槍となり、忍耐其楯なりしなり。

Amsterdam には九十の島嶼ありて、三百の橋梁これを連結すと云ふ。以て其如何なる所なるかを概想す可し。

朝、Hotel の傍なる Dam と云へる廣場に到る。市民が Louis Bonaparte の爲めに造りて獻じたりてふ離宮の立てる所なり。建築は所謂 Dutch Renaissance なるもの、莊重なる外廓最も見るに足る。殊に注意す可きは窓に窓枠のなき事なり。此一種の風習は啻に宮殿のみならず、市民の家にも屢々見る所にして、我等が眼には最も珍奇なる感情を與ふ。此宮殿のそれは(壬生馬が云へるが如く)却つて建築上の成功を助けたるが如し。窓と窓との間の方柱は窓枠なきが爲めに一層、其實質的效果を收め得たるが如し(玆に窓及び窓と窓との間の方柱を示したる挿畫描けり)。

電車に乘りて Ryks Museum に到る。第十六世紀前半に於ける Dutch Renaissance style に型取りて 1877—85 に建築せられたるものと云ふ。

Dutch Renaissance 其他建築の用材となるものは、赤煉瓦にして石を用ゐる事甚だ少く、獨逸國中にては殆んど各市に於て我等が見慣れたりし石板屋根も、此にては瓦となれり。煉瓦を用ゐて建築物全體の品位を卑くするの不利益もありしなる可けれども、其全體の形式に於て此館の價値は稍ゝ疑はる可きものあるが如し。東方の入口より入るに、glass 屋根の廣き court には、武器武具並に造船植民に關する陳列品あり。歷史的に細査せば植民史を講ずる人々には殊に面白き材料あるべし。長崎出島に於ける唐人屋敷の小模型も、亦此中に收められたり。回廊には歷史、寺院の裝飾物、祭器などあり。多く注意す可きものなし。和蘭家具の陳列は興味あるもの多し。如何に多くの東洋趣味が、彼等によりて西洋に輸入せられしかは驚く可きものあるべし。凡そ Arabia, Turky の入寇以來、東洋の美術技藝が西洋を感化せしものゝ最なるものを求めば、指を和蘭の東洋に於ける貿易に屈すべし。支那趣味の陶器、印度趣味の絨毯、金具、濠州趣味の模樣、其他繪畫に於ける構圖の如きも——殊に其風景畫に於ては——東洋の流風に感化せられしものありしにはあらざるか。

階上には和蘭、白耳義の大畫堂あり。凡て和蘭派の畫脈は、二時期に別れて其發達の高潮を來したり。第一期は第十五六

世紀に發達せるものにして、多く伊太利文藝復興期の影響を蒙りて産れたるもの、第二期は第十七世紀に其起原を發せるものにして、宗敎改革、米國發見以後、形而上と形而下とを論ぜず、社會の風潮が全然新方向を指して走りし時期に産れたるものこれなりと云へり。されども此兩時期を通じて和蘭派の畫家をして、伊太利派のそれと全然異らしめたる一事あり。和蘭畫家は如何に强盛なる伊太利藝術の感化の下にありし時と雖も、到底自然主義、寫實主義の壘を捨つる事をせざりき。伊太利畫派は到底理想主義なり。Venice が産みたる驚く可き自然との接觸を以てするとも、これを和蘭畫の最も理想的なる製作に比して、更に理想的なるを否む能はざるなり。若し歐洲の藝術界に、伊太利が希臘より傳承せる藝術に對する態度放棄せられて、これに代るに寫實自然の傾向著しく加はりし事事實なりとせば、而して此事實が藝術進步の障碍をなしたりとせば、和蘭派の繪畫は確かにこれに對して些少ならざる責を負ふべきものなるべし。若しこれに反して歐洲に於ける近世藝術の傾向が、此自然主義寫實主義の收容によりて更に一段の進步をなすべきものなりとせば、和蘭派の繪畫は Shakespear、Beethoven と共に伊太利藝術と月桂冠を分ち被るの所以あるべし。

されば和蘭派の繪畫の種類を最も正當に區分せんには、伊太利に於けるが如き事能はず。色彩と形體とが表顯する感情の類を以て畫派を區分せんとするは、これを和蘭畫派の類別法となし得ざるに似たり。固より Rubens は Rubens の色彩形體ありて自ら其隨從者を作り、Rembrandt は Rembrandt の色彩形體ありて亦其摸擬者を出したりと雖も、これを以て和蘭畫全體の分類をなすに當つて正當の目とは爲す可からず。一を理想派となし一を寫實派となし、苟も伊太利の潮流を逐うて其傾向に懷古の意あるものを一流とし、其筆路如何に南歐の積堆に負ふ所あるも、廻轉の一路を開きて新生と走らんとするものを一派となさば、即ち大過なきを得べきか。若し此則に從ひて和蘭畫を類別すれば Van Dyck の如きは、其筆路に於て色彩に於て伊太利當時の畫と多く選ぶ處なきも、畫板に臨みし精神用意の差によりて寫實派に屬せしむべく、Rubens の如きは其 technique に於て伊太利の畫を去る事遠しと雖も、內容と表情に於ては遂に南歐のものなりしかば、これを理想派に屬せしむるが如し。此の如く類別する事によりて、和蘭畫派の特長は初めて明瞭に我等が理解し得る所となるべきにあらず

や。こは定說となさんは餘りに輕々しき論理なれども、和蘭派の畫作を見るに際して暫く我一個の用意となさんとするのみ。

現實的傾向を養成せしめし動機

（一） 宗教改革

（二） 遠洋貿易

（三） 一五四九 Utrecht union 會議

（四） 一六四八 Westpharia 平和會議に於て和蘭獨立の承認

（五） 私的生活尊嚴の自覺

（六） 自然科學研究の進捗

（七） 新文學の勃興――即ち傳說的文學研究の衰退その他〔參考書略す〕

C. Baddemaker (1653) の「狩りの歸り」は特に其の composition に於ける秀拔の作と稱すべし。此畫家は其作の傳はれるもの甚だ多からずと云ふ。Nic. Maes の "Endless Prayer," "Spinning," "Old Woman working at the Spinning tool," "Dreamer" 等は各〻精整なる結構なり。Frans Hals の畫は其運筆の自在と自家の特長あるに於て、Gerard Terbury の "Paternal Advice" 其他は其精緻なる色彩と一種 classic なる氣性とを以て日常風俗の機微を畫きしもの、Goethe の賞翫に遇ひしも宜なりと云ふ可し。されど彼並びに Dou 等の畫風には既に退縮の氣ありて、絢爛やがて常套に陷らんとするの傾向なきにあらず。G. Dou の畫にして此館にあるものは "Curiosity," "Evening School" 其他なり。外に此二家に類して、其色彩の鮮麗と構圖の特殊なるに於て一頭地を拔けるものに Pieter de Hooch あり。彼は此館に於て "Store-room," "Courtyard of Tavern," 等を以て代表せらる。若し夫れ其色彩に於て technique に於て表情に於て、和蘭畫派の特徵を善惡共に發揮せるものには Jan Steen, Ostade 兄弟等なりと稱すべし。風景畫に於て最も我等の聳目に値するものは、J. van Ruysdael, Hobbema, Jon van Goyen, Jan van der Meer の如きを以て最となす可し。Ruysdael は其作常に一種の形式の中にあり。色彩も亦寒冷にして時

に硬執の厭ひなきにあらざれども、其風景には必ず一種の力あり、必ず一種の活動ありて、classic の形骸の下に、純自然の强き呼吸を畫き試みんとしたるの跡蔽ふ可からず。風景畫の Veronese と稱す可きか。Goyen は純然たる風景畫家なり。彼には一の pretention なく、一の典型なく、直ちに自然の印象を其獨得なる筆に捉へんとしたるもの、畫面全體に雨上りの夕日の如き輝きあり。物の形は sepia と靑色と朱とを用ひて畫きたるが如し。其「老柏」の圖の如きは、廣大深刻人をして Millet の作に見る一種深甚なる印象を思ひ起さしむ。Jan van der Meer は其色彩に一種銀靑の tone ありて寧ろ穩健平調なれども、自然を寫すの工夫に於て發見する處極めて深切。後世の畫家に影響せしもの多きが如し。Corot の銀靑も或は範を彼の流域に採りしにはあらざるか。Hobbema は既に知られたる如く、自然活動の瞬間を捕へ得て極めて造詣する所あるものなり。Jan van der Meer は其色彩の幅の廣さと其命題の種類の多さに於いて、悠々他の諸氏を凌駕するものあり。其 technique は極めて近世的なれども、Goyen の飄逸は彼に於いて遂に認め難し。

Rembrandt の有名なる "Nightwatch" 其他を見て（明日の記事）後、harbour を見んとて停車場に到る。寒風海を吹き來りて寒さ堪ふ可からず。稅關所在の一島に到る事も見合はせて歸る。凍るばかりなる儘に「涙の塔」の傍なる一珈琲店に入りて珈琲を飲む。宛ら薄く溶きたるしるこの如し。家婢の面は汗みどろとなりて、靴にて上る可き床に雜巾掛けをなしつゝあり。素木の机に素木の椅子、湯釜三個は流しにありてキチンとよくしまりたり。黑衣着けたる老女、幅廣き古風の帽子被りて、愚かげに見ゆる少女と共に入り來り、聲高く云ひ罵りつゝ珈琲を飲む。溫りたれば辭して New Market に靑物、魚肉、獸肉、襟卷、ボンネット、金具、其他の市を見る。賣聲高く、歲の市を見る如き彼方には、救世軍の音樂勇ましく聞こえたり。

寒き儘に此日の殘りは宿に籠りて暮し終る。

和蘭語は、其構字に於て發音に於て、獨逸語のそれに酷似せるものあり。Baedecker 案内記の記する所によれば、字の種類は甚だ多くして、字々が表顯する所の意義も亦深奥なるものありと云ふ。

Palace に鐘樓あり。十五分毎に一種音樂の調諧ある音を送り來る。唯其散漫にして鐘聲の趣なき、我等は十五分毎にして

眉を集めたり。

十二月二十一日。金曜。曇。朝、再び Ryks Museum に到る。昨日見たりし Rembrandt に就いて雜記すべし。

彼が "Nightwatch" は 1642 Guild の需めに應じて畫きたるものなりと云へば、彼が三十六歳の時の作にして、彼が舊來の祉福、其愛妻 Saskia の死を加へて痛き頓挫を來せし時なり。Rembrandt の作は三期に分ちて考察し得可し。第一期は未だ自己の全本分を發揮せざりし時。第二期は一種富贍なる金褐もて暗明の極美を畫きし時、第三期は 1656 前後の作にして、色彩全體に於て益々暗調を帶び來り、畫家は此流癖を救はんが爲めに種々の濃色——殊に濃紅の如き——を用ひるに至りし時是れなりと云ふ。されば此 "Nightwatch" は、正に此大家が technique に於ても亦最高潮に達せし時の作と見る事を得べし。打向つて先づ驚かるゝは、我等が嘗て此世に見ざりし潤徹なる彩光なり。次に驚かるゝは其筆路の大膽自由にして、到底四十の齢に達せざる一靑年者とは思ひ及ばず。光の許す限りに立てる人二十二人、手を擧げて語りつゝある壯漢と、槍を構へて開きつゝある秀容の人とは、明らさまに光の中にありて輝けり。右隅にありて太鼓強く打てる鼓手、旗のみは光を浴びしめて己れは陰の中に立てる旗手の如きは、半ば暗き光の中にあり。槍を遠く伸ばしたる武士、痘痕ありと思はるゝ扁平なる顔の人、鷄持てる少女、甲被りて走る樣せる少年、其他は光れる影の中にあり。打見やれば厖然たる大畫。これ一に他の奇なき地上の光景なれども、我等が受くる印象は何とは知らず强甚にして、廣き人生の一部分を明瞭に窺ひ得たるを覺ゆるなり。Springer が Rembrandt の作を見て喚起せらるゝ印象は、Shakespeare 作中の人物によりてせらるゝものと略々同じきの感ありと云へるは、根據ある說と云ふ可し。Rembrandt の人物は常に地上の人なり。而して其意志は堅實に、其感情は平等に、其智性は常識的なり。而も其根柢に當りて一種 dramatic なる突梯あり。Shakespeare が二三の悲劇の高潮は彼の畫中に求め難かるべきも、其劇中に「ワキ」として現はれ來り、其性格行動に於て主人公よりも現實界の人なりと思はしむる人々は、必ず躍如として亦 Rembrandt が畫布の上にも顯はれ來るなり。彼の "Syndics of the Guild of the Clothmakers" も亦珍襲す可し。"Nightwatch" の如き dramatic effect はなけれども、其單調なる色彩の中に疑惑なく曖昧なく、五人の人物を

點じて、所謂視る事久しうして厭く事なきの作をなせり (painted in 1662)。其傍にありし「少女」も亦見て美しき感興を受くべきものなり。"Bride and Bridegroom of Jew" は未成にして且つ彼の想像的能力の缺如を語るものにはあらざるか。"Woman by a Brook" は注意す可き傑作にはあらざる可し。――Composition は彼の常に反して甚だ詩的なり。Sentimentalist はそを喜ぶ事もやあらん。されども Rembrandt の强靱てふ特色は認め難し。Elisabeth Bas の肖像は上作。

中食の後 Jewish quarters を經て動物園に到る。鮭鱒の人工孵化を見んとてなり。寒氣激甚なり。半ば氷にて張りつめたる池の上には、熱帶の氷鳥、戰きながらうづくまれり。憐れむ可し。森の葉、四季に其綠翠の色を變へざる地に生ひ立ちし樂園の人は、今地獄の極下 Iscariot のユダとブルタースとが、首までを現はして齒嚙みしつゝある烈寒世界の囚に繫がれたり。人工孵化は遂に見ること能はずして空しく園を出づ。暮色早く到りて打重なりて沈みたる雲は「死」を見る如し。珈琲一杯に勇を鼓して停車場に荷物を受取りに行く。行き違ひありて受取る事能はず。歸舍す。

十二月二十二日。土曜。朝晴、午後曇。朝、停車場より稅關に荷を受取りに行く。關吏、親切に我等の爲めに周旋す。我等がさゝやかなる trunk は、藁をつめたる大柳行李の中に、鍵を下して蓄へられたり。馬車なければ、大きなる靴穿きたる五十男に荷を負はせて歸る。彼、大道を濶步して、過ぐる人若し彼に道を讓らざれば大喝す。

Six Museum に到る。Six 家の當代の大祖父に當る人が、死後遺したる畫作の蒐集と、他に數點の裝飾品を集めたり。"Portrait of Burgomaster Six," "Anna Weymer" (mother of the Burgomaster Six), "Jan Six" 其他あり。就中第一者は 1654 の作にして、其手腕の大膽縱橫 "Night watch" に似て更に俊快なるものあり。肖像畫家としては、彼は Velasquez と相兩立して畫界の覇者とす可し。Young Holbein の如き、これを彼の傍に立たしむれば、其深邃はありと雖も、氣象の小なるに至りては遂に蔽ふ可からず。

中食を例の心よき老媼と近眼にして瘦せて小なる駒鼠の如き少女ある珈琲店に濟まして、後 Municipal Museum に到る。Ryks Museum の前方の第十七世紀式なる庭園の彼方にあり。畫堂のみを參觀す。古畫は多からず。尊からず。新畫には Holland,

Belgium 及び英佛等の畫家の作あり。A. Mauve, Jos. Iseral, W. H. Mesdag, Will Maris, Ja: Maris 等は近代に於ける Netherland の代表者なり。迷へる羊の如し。彼の濟々たる第十七世紀諸畫家の作を見て此に來れば、「親が苦をして子が樂をして孫が河原で……」なり。——

此日よりの日記は、巴里に着して後一週日の後に記すところなれば、人の記憶の如何に果敢なきものなるかを證する材たるに留まる可し。

Municipal Museum を見たる後宿に歸り、荷を片附けなどして此地を發す。過眼の風光一つ一つ我等の心を牽く。地は繪卷を疊の上に打擴げたる如く平にして、溝渠の水岸をひたすばかりになりて悉く凍りたり。隴畝の殘る隈なく耕されたるは、我等が故國に知れるそれの如し。樹木の種類は川楊、樺、楡等にして、楡は常に一直なる道の兩側に其指多き枝を擴げ、川楊は川添の草と共に生ひ延びて矗々たる枯條を天に捧げたり。樺は屋後の叢、水車の蔭などに其纖淸なる白き幹をほのめかせり。重き空にふさひし風車小屋、家の窓に逼りて立てる河舟の檣、女の被れる白き帽、小兒のなせる赤き襟卷、自轉車に乘りて行く人などを見るに、それも亦畫中のものなり。Ruysdael が描きて名ある Haarem 近郊の平原を經て、海に沿ひつつ(海は望み得ねども)南に下り、點燈近く The Hague に入り、宿屋の馬車に乘り Naples のそれに似たる石疊を搖られつつ、Hotel Central に入る。市第一の旅館なるべし。此夕、館内に夜食す。Wien より來れる女樂人合奏樂を奏す。Mendelssohn の『春の歌』を彈ず。思ひ出づる事甚だ多し。

此夜は寒き雨降りそゝげる儘に、外出せずして讀書などす。窓より眺めば道を隔てゝ一人の男あり。十歲には足らずと見ゆる小兒を肩に負ひて歌謠ふ。其歌何の意なるやを知る由なけれども、打聞くに悲しき音あり。我は冷えたる硝子に額をあてゝこれを見る。行くさ來るさの人頻りに錢を與へて去る。其錢を與ふる人一人一人の心など夢の如く思ふ。

凡て此地の人は歌を好むが如し。

十二月二十三日。日曜。晴曇不定。朝、Plein とて市の中央なる廣場に到る。Holland 中央政府の諸官衙のある所なり。

Museum を見んには時尙早かりしかば、鷗、白鳥などの氷の上に遊べる Vitver と云へる池を經て Willem's Park に到り、Jacob 寺を見(云ふに足らず)、再び池に出で、そを一周して Binnen Hof と云へるに、中世の騎士時代を想ひ起さしむ可き古建築の最も興味深きを見たる後 Mauritius Museum に到る。見たる諸家の作物を、我が分類法によりて分類し試みたるに、次の如き結果を得たり。

Aelst, Van ×	Heem, J. D. ×	Polamedesz ○
Berchem, Nicholas ×	Heemskerck ×	Potter, P. ××○
Beyeren, Van ○○	Helst ×	Ruysch ○
Both, J. ○	Hondecoeter ××	Ruysdael ○○
Brueghel, Jan ×	Jardin ××	Schnyl, F. ×○
Cignani, C. ×	Koninck, S. ○	Steen, Jan. ○○○×
Cornelisz ××	Lastmann, Pieter ×	Teniers (the younger,
Cuyp, A. ××	Lieveus, Jan ○	1610—1690) ×
Delft ×	Memling, H. ○	Terburg ○
Dou, G. ×○	Metsu ×××	Velde, Van ○○×
Dyck, Van ×××	Mieris, (elder) ○	Vermeer, Jan ○×
Everdingen ×	Moreelse, P. (1571—1638) ○	Vos, M. de (1532—1603) ×
Galtzius, H. ××	Netscher ○	Willebroirts (1614—1653) ××
Goyen, J. Van ○○	Ochtervelt ×	Witte, F. de ×
Hals, Fr. ×	Ostade, Van ×	Wouwerman ○○○×

（×は理想的傾向、〇は寫實的傾向）

此單一なる結果を以てしては、何等の結論をも見出し難きも、暫く此に記して他日の參考となす。

此館内にありて特に尊重すべき作物は Rembrandt の "School of Anatomy" (163?; 夜番の畫に先立つ事十年)、"Susanna" (1637)、"Presentation in Temple" (1631) 其他。Van Vermeer の "View of Delft," Paul Potter の "Bull" 等なるべし。Rembrandt の "Anatomy" は蓋し彼が完作と稱す可きものゝ一なる可し。其筆をやるや謹嚴にして忽諸の態度全くなく、彼が其 technique に於て前人未發の法を案出し、親切なる期待を以てこれを此大畫面に施したる跡見つ可し。Van Vermeer の "View of Delft" は驚異す可き作なり。其光線と空氣に對する觀察の精緻にして的確なる、其構圖の一見他の奇なきが如くにして而も工夫の跡多き、其精神に於いて筆路に於いて、我等第十九世紀末葉の畫に接したるものゝ眼に、清新なる感情を覺えしむ。此畫は實に當時に於いて來る可き世紀を豫言せるものなり。大なる努力と實力とが常に時代に先驅して走る實例の一なり。Potter の "Bull" は Louvre にありし時、全畫堂の中第四位に置かれしものなりと云ふ。唯見る厖大の畫幅渾然として一個の自然なり。自然は活き、物言ひ、創り且つ敎ふ。其自然なり。

Gemeente Museum には見るに足るものなし。中食後、電車に乘じて Mestag Museum に到る。Mestag は海の畫家にして、Mauve 其他近世 Flemish 畫家の作品と共に諸所の Museum にあり。其作多く云ふに足らず。然れども彼の蒐集の中には實に他に見る可らざる佛國畫家の作品多し。殊に Barbizon 派の諸家、Millet, Danbigny, Diaz, Delacroix, Rousseau, Corot, Troyon 等は其眞價未だ江湖に喧傳せられざるの前 Mestag 氏これを鑑賞して買集したるものなりと云へば諸畫家が其技倆發達の順序をすら窺ふに足る可き程の蒐集あり。Millet の "Mill at Barbizon" (未成)、"Fisherman's Wife," "The Return" "Hager and Ismael" (大作未成)、Corot の諸風景畫 (伊太利にありし間の作と思はるゝ中には、殆んど Corot たるを疑ふ程のものあり) Rousseau の風景並に動物畫 (Rousseau も亦然り、其初期の畫風に於ては Diaz 等と相距る事甚だ遠からず) 其他 Dupré, Courbet 等佛國近代の名家、伊太利 Flemish 現代の諸作も亦頗る多し。唯其家の構造不完全にして、何れの室にも光線足ら

ざるは遺憾なりき。

嘗て Geneva の Museum に Millet の肖像畫一枚を見てより、我等が頭裏に徂徠しつゝありし Barbizon 畫派の作品は、今日此に我等の渇望を醫す事少々ならざりき。此館の監督をなせる老女の語る所によれば、Millet 等が Barbizon に據りて、新自然主義の旌旗を飜すの先驅をなせし者は、Georges Hickel (1764)(?) にして、彼は Rembrandt の畫流を好愛し常に其作に注意して自己の畫風を助成せりと云ふ。Barbizon 畫派が據りて來るところをほゞ尋ぬべし。

此家には畫作の蒐集の外、陶磁器、銅器、漆器其他中々に多く、一個人のものとしては確かに秀拔のものとす可し。Persia よりの古器の如き形象共に酷愛するに堪へたり。

家を出づる頃は日稍ゝ傾き、雨落ちて鋪石を凍らしめんとする計りなり。電車に乘じて宿に歸る。夕食後市中を散步す。雨は依然として小休みなく降り、人々は降誕祭の準備に忙はしげなり。金色の簪の、白の帽に透きて見ゆる田舍よりの女も多く交りたり。

十二月二十四日、月曜。晴曇不定。朝、The Hague を發す。宿を出でて振り仰げば、我等が後ろには、黄薔薇の雲、夏とは趣異りたる樣にむらがり集りつゝ、行手には影と日向と驚く可き交錯をなしたる雲、各ゝ瞬間にして其形彩を變じつゝありき。雲の色形などに潛める不思議の、我等には解し難き事多き事など語り合ひながら停車場に到る。

列車は再び繰り擴げられたる蓆の如き平原を横切り初めぬ。遠く眺めらるゝ樅の並木、近く立てる川楊の圃など驚くべき風光なり〔玆に風景畫あり〕。風車も亦處々にあり。小兒等頻りに遊戲を樂しむ。

十時近く汽車は Rotterdam に着しぬ。宿泊せずして觀覽せんと思へば、荷などは停車場に預けたる儘、停車場を出づ。町の全體が與ふる impression は甚だ好けれども、町は港なれば人の心は稍荒みたるに似たり。此地にては、昨日より今日にかけて初雪降りたりと云ふに、小兒の大懽び思ふ可し。往來の到る處雪彈飛びて動もすれば凍えたる耳など危し。堀沿ひの道を

行き盡したる處に廣場あり。小學校の前なれば少年少女盛んに雪と戯る。傍に古き風車樓あり。形最も勝れたり。第十八世紀の半ばに造られたる者に似たり。Leuvehaven の水は雪の路と集れる河舟の中を早く流れて、藍の勝ちたる茶色をなし、船にて炊げる烟、河面を偷ひて、女房の洗物などせる様も眺めやらる。永く海の景色を見ざる我等は、岸邊に立ちて飽く事なく海に似たる所多き此河の舟人の生活を打ちまもりぬ。朝は晴れしに今は雪――雪にはあらず、霰と云へるがサラ〱と地を打ち出でぬ。拾ひて見るに、掌上にも解くる事なく可憐なるものなり。Goethe が Werther's Leiden に北國の冬の先驅とてサラ〱と霰の幾群の、野を蔽ひて急雨の如く來り、且つ去り行く様など描けるを思ひ起す可し。

Boymans Museum に到る。Joost Vangeel の "Mother, Nurse and Child," Hobbema, Ruysdael の "River-scene near Dordrecht" (wonderfully transparent), Fred Bol の "Portrait of a Boy with Yellow Dress," 其他。多少見るべきものなきにあらねども、其蒐集は決して饒多なりと云ふ可からず。

雪中を歩して公園に到るの道 De Maas 河畔を過ぐ。Rhine 河の水の幾分を含める此河は、かゝる繁忙なる船舶の懐ろとなれるか。唯見る、海の如く廣く見やらるゝ河沿ひに、歐

洲諸國の旗を飜したる船舶、處狹きまで錨を下して、汽船の煤煙は重き雲に壓せられて登りやらず檣を掠めたり。今日も亦雪の小休みの暇に、空にあたりて色々の雲の形と彩とを見る。美しき苔むしたる並木の幹の青きを、美しなど讃へつゝ公園に入りて、人蹈まぬ雪を此處彼處打歩み、再び町に出で中食す。魚あり、新鮮にして肉のきしりよき事日本を出でゝ以來嘗てなかりし所なり。賞味不斜。

午後三時某分の汽車を取りて Antwerp に向ふ。雪遂に繽紛として到る。大なる自然は、再び我等が汽車の窓外に開かれたり。凝視多時にして厭く事を知らず。殊に汽車 Biesbosch の水上を經たる時の如きは、我れ思はず其景の壯大に打たれて、幾度か眠れる壬生馬を呼び起しぬ。Biesbosch は 1421 の大水の時、堰きたる堤を破りて溢れ出でし水の形成せし所にして、其水七十二の市村を埋め十萬餘の生民を殺し、渺茫たる方四十哩の大水塊をなし、百の小嶼を圍みて今に迨るも尚ほ涸れず。河にあらず湖にあらず、固より海にあらず。沼に近くしてしかも異れる水のたゝずまひ形容を絕せり。

空も漸く暗くなり、今は窓外を望まんにも由なく、折合せて同乘したる二人の獨逸人の、英語を操り得るものあるを求めて——彼は船乘りにて高き位置にある人とも見えざれども、其知識の博く涉りて、頭腦の明晰なるは流石に Prussia 人なり——獨逸に於ける勞働者の狀態、社會主義の勢力、影響、事業等語らひ合ひて、汽車 Antwerp に入りしは五時稍ゝ過ぐる頃。停車場前なる Hotel Terminus に入る。室に温室器なくして寒冷甚だし。已むを得ず雪中を散歩して comedy を見に到る。佛蘭西流のやゝ高尙なる comedy の idea を得、半ばにして家に歸り、直ちに就寢。

十二月二十五日。火曜。晴曇不定。Royal Museum に到る。階下には近代彫刻家の作物甚だ少なからず。Jef. Lambeaux の "Kiss" の如きも亦其中にあり。他の廊は悉く Rubens と Van Dyck の大作の木版、銅板もて滿ちたり。一々細視せば價値多きものある可し。階上には名家の作品約八百を収むと云ふ。Rubens の作品の中には最も興味あるもの多し。"Christ crucified between the Two Thieves" (Le Coup de Lance), "Christ a' la Paille" の如きは、其意氣に於て運筆に於て、古伊太利の諸家と肩を列するに足るものと云ふ可し。されども彼は到底彼たるを免がるゝこと能はず。或人を charm し、或人を戰

かしむ。

Pieter Brueghel と云へる人あり。1564 に生れ 1638 に死せり。其畫品を見るに正に Jan Steen の先驅者たるに似たり。暫く疑を存して他日の考證に待つ。

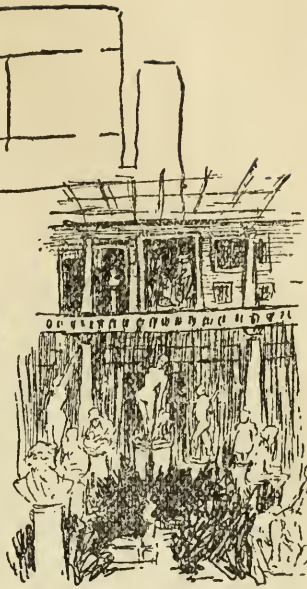
Jordaens の "Sisters of Charity" (此日記を書する時其畫の如何なるものなりしかは記憶に上り來らず) Van Dyck の "Entombment," Rembrandt の "Saskia," Wouwerman の "Riders resting," Membling の "Christ as King of Heaven," Quinten Matsys の "Entombment of Christ" の如きは、我の喜び見たるところなりき。

後電車に乘じて Cathedral に到る。其構造は一種の Gothic style なれども、塔の高さと大さと nave の屋根の高さとの均衡甚だ諧整ならず。蓋し劣作なる可し 此寺院はかの Rubens の有名なる Christ 十字架を下るの畫あるを以て知られたる所なり。今日雪稍ゝ深く積みて、靴は水氣にひたされたり。漕ぐが如くにして寺門に達し、中に入れば、薄暗の間に其畫懸れり。彼の作としては、確かに傑作の一つに數ふ可きものなる可し。傍に Van Dyck の S. Francis の立像あり。無氣力の作なるが如し。寺を出でし頃は雪霏々として至りぬ。

此日午後三時十七分の汽車に乘じて此地を發す。雪益々甚し。車中一人の白耳義人の、僅かに英語を操り得るもの、我等に會話を求め來り種々の事を語る。彼は此國に於ける某大學の卒業生にして Maeterlinck の如きは相知の人なりと云ふ。白耳義の工藝製作の盛大なる趣を語り、其廣く海外に知られざる所以は、英國の資本家が其產物を買入れて、自家製造品としてこれを輸出するに由ると慨嘆し、白耳義は數年來外來の國人に對して自由なる處置をなすに至りしかば、露國、清國其他の革命家にして此地に來り住む者甚だ多しなど語れり。

汽車 Brussel に着せしは六時なりき。彼の老いたる人迎ひに來りつゝありし其少年と共に、我等を停車場前の Hotel Cosmopolite に案內し、いそ〱と出で去りぬ。

夜食後、市內を散步す。風物多く他の都會と異れる所なし。道路の泥濘。

試みに Holland と Belgium とを比するに、前者は獨逸に近く後者は佛國に近しと云ふべきなり。其國語の中にも其差別は見出さるゝが如し。容貌の中にも前者の中には Teuton の type と見るべきもの甚だ多きに反し、後者の中には屢々 Latin 民族の vivacious なる expression を有するもの多きを見る。風俗に於ては Belgium は殆んど一の特色を有せざる國と稱するも大過なかるべし。風光は稍々 Holland に似て而も平凡に、衣裳は全く佛國國民のそれに等しかる可し。小なる國民の悲しきは、其風俗、習慣、容貌の何處にか、爭ひ難きものある事常ながら、Holland の人は、確かに獨往的の氣象に富めるを示し、Switzerland の人は忍耐堅牢なる意志あるを示せるに反して、此國の人には何と特に我等を刺激す可き特殊の氣性あるを見出す事能はざりき。若し一事の注意すべきものありとせば、これ Latin 人種に通有なる生活の遊戲的傾向あることにはあらざるか。Brassel 市が其市を裝飾する事に於て、大國も亦中々及ぶまじき企圖を爲せるが如きは、我等が Holland の如きに見んとて見る能はざる所なり。

十二月二十六日。水曜。雪。此地にても珍らしき雪なりと云へり。晝頃よりかけて繽紛として降る。

朝、泥濘の中を長歩し、道に迷ひなどして辛く Royal Museum に達す。Sculpture（近代）と old painting とを收めたり。此 Museum は初めより此の如き用にとて造られたるものなれば、其構造は最も繪畫彫刻の陳列に適せるが如し。他日我國にて畫堂を造るの必要起りし時の如きは、確かに參考の一となす可き建築なるべし。場の中央は彫刻物陳列場にして光線は天井の硝子を通して來り、彫刻物の間には鉢植ゑの喬木ありて、新鮮の趣を添へたり。階上は彫刻品陳列場の上にありて回廊もて繞らされ、回廊は階下に對して打開きたれば、

向ひの回廊の懸け連ねられたる繪畫を遠見に眺むるも美しく、欄に倚りて階下なる大理石や鐵銅やの彫刻物が青葉の中に排列せられたるを見るも趣き多し。

此館の彫刻物の中には見るべきもの甚だ少なからず。Mennier の作も少なからず陳列せられたり。彼の type の中には、佛國の畫の中にあるべきを模したりと覺ゆるもの少なからずと雖も、其一種他に異りて或る意義を發展せんと試みたる努力は、多とせざる可からず。Braecke の "Reconciliation" C. Dubois の "Seated Figure of a Lady," Van Hove の "Revengeful Slave," Rodin の "The Thinker," 其他我等に深き感興を與へしもの多かりき。

階上に picture gallery あり。此館には Flemish 畫派の作品甚だ饒多なれども、朝來の雪は硝子屋根を埋め盡して日の目を見ず。施したる色彩さへ捗々しく見る事能はざるに失望したり。Rubens のものには大作多かりしも、勝れて秀拔なりと思はるゝは少し。

他の畫圖は暗き儘に、よく見るべき勇氣もなくて、雪中を中食せんとさまよふ。二人とも滑路に轉倒する事數度。

中食後 Musee Moderne be Peinture を見る。特に注意すべきものなし。此市現存の諸畫家展覽會も亦ありたれども、其製作は荷旦の跡ありて他市のそれに比して下凡なるが如し。此館内にて、日本人と見ゆる一婦人に會して、壬生馬近づき問へば、Java 人と和蘭人との雜種なる事を知り得たり。實に和蘭は人種の混雜甚だ多き地なるが如し。

出でゝ Palace of Justice の厖大なる建築を見る。此市が 1,800,000 l. を投じて竣工せる所なりと云ふ。用材に黑色の砂岩を用ゐ、一帶の impression は Eisenach の町端に見たる學生碑のそれに似たり。苦心の跡は到る處に見やらるれども、決して成功の作とは云ふ能はざるが如し。

馬車に乘じて歸舍。此夜英國の一婦人と知る。家族等は此地を辭して英國に歸り、己れは Frankfurt に到る身なれども、Amsterdam より來るべき荷物の到着を待てるものなりと云ふ。母を佛人に持ち自ら亦佛人の快爽あるを以て誇りとなす。

十二月二十七日、木曜。曇。朝、日本公使館に到り留學生吾孫子氏、竝びに書記官大鳥氏に面會す。後最初に思ひ設けたり

し Industrial Museum には到らずして、ぬかるみ路に、面白き形せる馬車の石炭したゝかに積みて、Minniere のに似たる勞働者のそを追ひ行くを、畫となし得可しなど打ち跳む。工藝製造の盛大なるにや、空には常に煤烟の氣籠り、雪は泥の外なる黑き色に染まりたり。阪を下り行けば、汽車の業々しく道の中央を走り行く谷間の如き所は、些かなる公園の外なれば裝ひもなく佇めるを左に折れて、倚ぬかるみ路を暫く泳ぎて小阪を登れば、登り切らぬ折目に Wieltz Museum あり。一生を交友少き畫室の一隅に過し、其の製作せしところは一枚だに賣りし事なく、自ら畫界の覇王を以て任じ、遂に狂して後すべての人と同じき死の門を潛りて去りし稀有の畫家の住家は是れなり。戸を入れば右に彼が畫室ありて、今は其の遺せし大作もて滿されたり。突當りなるそれには其 a sign 及び etude 等を收めたり。石の階に雪やゝ凍りて足下の危ぶまるゝを登りてより、半ば硝子にて張れる表戸の「把手（とって）」を外より握りて來し道に踵を囘せしまで、我等は思へば我等が住みつゝある世とは遙かに隔てたる他の世界にありしなり。實に泥つける足もては蹈み能はざる世界あり。我等が所謂悲喜は、彼處にて其意義を變ずるに似たり。畏懼するに堪へたり。

Brussel 市の內郭を殆んど心臟形に美しき Boulevard 一巡りせり――此市は凡て巴里の好尙を追はんと勉むるに日も亦足らざるものゝ如し――我等が今日中食せる所も其處にあり。宿りつゝある旅館も亦其處にあり。

此日の午後は、かの相知となりし英人を伴ひて植物園に行き、氷辷遊戲を見んと心組みたれば直ちに歸舍せしも、彼女は停車場に到る可き用事ありとの事に、我等のみにて武石と云へる彫刻家の此地にあるを訪れぬ。公使館員の云ふ所によれば、氏は此市に學べる事既に四年、成績拔群にして大に有望の士なりとなり。道を謬りて雪中に彷徨する事多時、辛く Villa Twa と云へる日本趣味の家に其人に會す。壬生馬と暫時溫談。點燈の後歸舍す。遂に彼の英人と約せし時間に間に合はず。

此夜公使館の晩餐に招かれて到る。吾孫子、高橋の兩氏亦あり。大島氏ほゞ人種學の知識に通ず。色々の珍談珍說を聞くを得たり。

此間一日の相違あり。何處にて失ひたりけん。

十二月二十九日。土曜。雪。今日は此特色多からざる市を去ると云ふに、急ぎて見殘したる市中を見物す。

Grand Place に Hotel de Ville を見る。Gothic の而も寺院の用ゐたる式を其儘かゝる官衙に用ゐたるものにして、我等は嘗て Nürnberg に於て其一例を見たる外には他に見ざりしところなり。Jacob van Tihenen (1405) 及び Jacob van Ruysbroeck (1448) の相尋いで造營する所なりと云ふ。最も肅整の作。Netherland に入りてより稀に見る所の純淸の建築なりと云はざる可からず。殊に尖塔の如き眞正 Gothic の表情十分なりと云ふ可し。Place には市場ありて、多くは年老いたる媼涕すゝりながら、ショールにて頭包みたる女の群を相手に商ひせり。

Hotel de Villa の後方なる小街の一角に Mankin Fountain あり。像の高さ約尺半なる可し。昔の人の、荒びたれども無邪氣なる想像が産物となりし一例として興味饒かなるもの。此虛心なる一頑兒はルイ第四世の寵を得て勳章を授けられたりと云ふ。されども彼は今は、近在の市民が事に臨みては作りて着する種々の衣裝に、たゞならぬ滿足を感ずるものゝ如し。買物などして家に歸り、大急ぎにて荷物を纏め直ちに停車場に到らんとするに、彼の英人に遇ふ。荷物未だ來らずとて途方に暮れたる樣に哀れを催す。

稅關に到り荷物を受取りて南停車場より汽車に乘ず。三等に乘りたりしに、そは直行列車にあらずして三度乘替す可きものなりき。夕五時某分には巴里に入る可しとの豫想は全く變じて、此夜十時近くならずしてはと云ふに一方ならず落膽す。Baedeker なければ猿の木より落ちたるも同樣なり。何處を走りつゝあるとも知らず、唯過眼の風光を窓より望み見て、山河のたゝずまひ總て嘗て見たる獨逸西方のそれに似たるなど懷かしむのみ。

白耳義語は漸く佛語に變じたり。我等が汽車の車掌をなせる人僅かに獨逸語を解す。停車場に勤務終れば我等の室に入り來りて談笑す。一日勞働する事十一時間、月に得る所二百法、妻子を扶養するの苦慘堪へ難しと云ひて笑ふ。彼は常に不平する樂天家の一人なりき。

日暮く頃我等の隣室には一隊の兵士入り來り、我等の室には四人の勞働者入り來りぬ――我等の夕暮に經たりし地方は、工業の盛大なる所なりしが如し。所在煙突の聳ゆるを見、亦多數の勞働者が相往來するを見たり――かくて我等の目前に、Gorky が小說の一頁は開かれたり。白耳義製の粗造なる列車は、夕暮に促がされたる如く疾く走り出でたれば、其ゝ搖と音響とは人を病ましむるに足れり。頭上には揮發性少き油燈一つ煙りて、沈みたる空氣を通じて圓寂したるが如き若干の旅心を照せり。かの兵士の一隊と勞働者の一群とは、かゝる光景の中に外方の暗黑より突然として入り來りぬ。後にて聞けば年五十七なりと云ふ。油染みたる大黑帽を、既に白盡したる頭上に戴き、縞は見えぬ服に太きズボン着けたるが、我が左斜めの向座に坐りぬ。他の三人の勞働者は彼の右と前方とに。

車に入ると共に罵聲の如き大喝は彼の房々としたる鬚の下より叫ばれぬ。汽車は動き出でゝ隣りには兵士が心置きなく謠ふ軍歌の聲此處彼處漏れて聞ゆ。

彼は向ひなるやゝ物知りらしき若き男に其鋭鋒を指し向けぬ。我は不幸にして佛語もて語る彼の一語をも解する能はざりしかども、其題目の政治、社會、宗教にまで亙りし事は明かなり。彼は其巖の如き拳を、開かせんとする男の鼻端に突きつけて、引く手も見せず發矢と他の掌に打ち合せ、其瞬間に脣頭は潑剌として轉ぶが如き佛音の罵聲を漏し來るなり。一度出でし罵聲は再び腕と拳との助けを借りて强張し、罵り終つて一座を見廻したる彼の眼は輝くなり。一座の一人これに答へんとして僅かに脣を動かせば、彼の拳は再び待ち設けたる如く其鼻端を掠めて鳴り、彼の罵聲は囂々として車聲を沒し、隣りにて歌へる兵士の歌聲を沒す。我れは快笑もて此健氣なる一老勞働者の雄辯に聞き惚れぬ。彼は誤たず Danton の再生なり。彼は自信の上に論理と理由とを創り、其論理と理由とを以て、他の信仰の權威に絕對的なる否定を加ふる demagogue の絕好の type なり。されど彼の自信には自信あり。彼の性格には純一なる所あり。かくて彼は動かす事を得るなり。見よ、彼が其裂きて破りたるが如き顏形の蔭に、何等强靱なる吸引の力を蓄ふるぞ。

かくの如くにして行く事暫時の後、三人の勞働者は車を辭して、彼一人殘りぬ。彼は車の隅に孤坐して煙草を嚙みつゝ、

時々扉の如き齒を顯はして黑く汚れたる唾を處選ばず吐きつゝありしが、不圖隣室の歌聲に耳傾けて彼は笑ひつゝ立ち上りぬ。何事をかすらんと見る程もなく其巖の如き拳は破れん計りに板壁を叩きて、其無遠慮なる屛は佛國の國歌を謠ひ初めたり。隣室は暫く靜まりてやがて一同の笑聲聞こえぬ。老いたる勞働者はこれに耳をも假す事なく其歌を續けたり。彼は驚くべき美聲を有したり。須臾にして隣室には彼の音調に合して、佛國國歌囂然として起れり。打ち振り向きたる彼は我を見て舌を吐きて、再び其巖の如き拳を擧げて羽目板を三度叩きて大口開きて笑ひたり。

窓の一つ壞れたる室に入りたれば寒氣堪へ難し。瑞西より獨逸にかけての三等は、總て構造よくして且つ淸潔なれども、和蘭に入れば大に劣り白耳義に入れば更に甚し。

汽車の巴里市停車場に入りしは正に夜の十時なりき。出迎所には、除隊になりたるらしき兵士を迎へんとて來れるもの堵の如し。

New Hotel と云へる古き旅館に入る。Stove に焚き入るゝ薪の、中々に溫みを室には齎らさずして、寒さ髓に沁む。不平滿腹、寢に就く。

十二月三十日。 日曜。曇天。我等が苦悶、此日よりぞ初まりける。

先づ求むべきは Baedecker なり。先づ代ふ可きは Hotel なり。我等市の北にありと云ふを便りに、朝、南に向つて Hotel を出づ。今より思へば Bd. de Strasburg を南下して Nortre Dame を過ぎたるが如し。書籍店を求むれども日曜日なれば閉ぢたる所多し。手まね多き事にて巡査に問ひ、僅に一店を求め得たり。かくて Baedecker は我等が掌裏の珠となりぬ。

次に求むべきはよき旅宿なり。殆んど狂氣の如く彼處の宿屋此處の pension と步き廻りたれども、これと思はしきは求め得ず。腹立たしき中に見たる巴里は、女の事々しきより男の風流なるまで、憤りの種ならざるはなき中に、Saine 河の稍ゝ流れ早き綠の色は、深く我等が淋しき旅心を慰めたり。

一九〇七年（明治四十年）

我はかくて日記書く事を全く怠りて今日（一月二十五日）に至りぬ。我が小なる cosmos は大なる都會に入る毎に、其秩序と肅整とを失ひ去るなり。人と云へるものも、人の集合體と云へるものも、其個性を發揮して見らるゝは都會に於てにあらず。田園にありては人は自然の隷屬者なり。都會にありては人は人文史の隷屬者なり。自然との交渉にありては人々各〻其の與る處あり。人文史との交渉に於ては即ち然らず。史上に代表せらるべき若干少數の頭顱を除くの外は、萬人千萬人人文史との交渉を有しながら宛ら飛塵破沫の如くして去る。此の如き多數群集の喧々囂々の中に沒入し、此より一個の秩序を索出せんとするは殆んど不可能事なるに似たり。過去を顧る時我等は其跡轍を追憶し、都會の大なる力と其活動の方向とを觀取し得ざるにあらず。されども目前にて都會に接すれば、宛ら一個苦悶せる giant を見るの想あり。何の苦悶ぞ。何が故の苦悶ぞ。其苦悶を醫し得るは何なるべきぞ。絶えて知るに由なし。Michael Angelo の沈痛なる畫圖を展き見るが如し。

幾度か旅宿を代へたる後遂に Hotel du Louvre に落ち付きぬ。Paris にありても大なる旅館とせらる可きものなり。先べ遇ひし日本人は藤島氏なりき。彼の形容思想の傾向は委しく壬生馬より聞き得たれば、我は氏に遇ふを以て最も興味ある事に思へり。彼は一個の天才ならざれど確かに一個の藝術家なり。其眼は逸才の常の如く輝く事なけれども、其眉宇には裕かに空想と把持の力籠れり。美しとにはあらざれども、特趣ある厚き唇より顋にかけて、彼は云ふ可からざる charm を有せり。一方向に走れる強き vitality は、彼の性格を引力あるものたらしむ。伴はれて最も美しき街路と最も繁忙なる町郭とを見ぬ。近代彫刻物の陳列せられたるものと Louvre 館内なる decorative arts の陳列所とを見たり。日本陶器模造品の若干を除きてはさして驚きはせざりき〔以下日記中絶せり〕。

滯英日記（一月十七日――二月廿二日）

一月十七日。〔以下原文英文〕晴。風。

今朝八時二十五分、汽車はガール・ド・ノルドを發してカレーに向ふ。壬生馬、見送りの爲め停車場に來る。佛國にて彼に會ふは、これが最後ならむ。彼も亦その心地なるが如し。されば、我等の別離に一脈のわびしさありき。

頃に、フランス北部の眺めには、驚く可きものあり。眼を轉ずれば何處にも、ミレーの描く繪宛らの風景あり。廣漠たる野、此處かしこに、浪の如く高低をなす草原、群をなす家畜・羊、小さき牧場・羊の檻のわびしき人影の如く、野中の心安らかなる場所に立てるこれらのものが、物わびしけれどいと心なごむ眺めをつくり成せり。溶くるが如き陽の光りは、冬の日の暖かさもて、萬物を被ひぬ。歐洲に於て、フランスのこの地方、或は佛國全般を見るも、農夫が各自に心好き生活を營み、尙ほその上に非常に役立つ少額の餘分の收入さへも得ると言ひ、最も農業地域として有望なりと稱せらる。クロポトキンの記述によれば、歐洲に於て、最も十分に耕作の行き渉れるは此の地方なりと。然してその生產力は僅に白耳義に一步をゆづるのみなり。

アミアンに着きしは午近き頃なりき。本寺と博物館內の Puvis de clavennes の Fresco とは余が心を動かすこと甚しく、滯在せむかとの心動ける程なりき。

特に人を、ひきつくるものとては……〔以下本文缺〕

二月二十三日。〔以下二十七日まで原文邦文〕晴。

二月二十四日。晴。穩か。

二月二十五日。晴。午前十時頃より波荒る。夜三時頃靜穩。

二月二十六日。晴。穩か。

二月二十七日。晴、朝曇、穩か。十時頃より風出でゝ波甚だ高し。

二月二十八日。快晴。午前より夜に至るまで、天氣頗る良し。曉近く、我等は左の方にジブラルタルの姿を見得たり。夜、月は滿月、洋上靜穩にして深碧なり。オリオン、ペガサス、大熊星、及び無數の星は、彼等の女王の如き地球をめぐりて、歌うたふが如し。

今夜、悲しき夢を見て、叫びぬ。十字を切つて祈る。

二五〇哩 N. 36° 13′. W. 3° 47′.

第十一巻

一九〇七年（明治四十年）（承前）

―うみくが―

三月七日。〔以下原文英文〕晴。寒し。

隣りの室の入口で、ボーイがボート・サイドにぢき着くところだと云つてゐる聲に目が醒めた。暑さが増して來たせゐか、船室は非常に蒸し暑い。甲板に上つて行くと、丁度水先案内船（パイロット・ボート）が着いたところで、海面は浪立つて居り、黄ばんで居り、港近いことを示してゐた。船の前方東の方に、長い灰色の波止場が見えた。白波がその土臺に泡立ち碎けてゐた。更に向うには、海邊の別莊地らしい一列の家が並んでゐた。船客は皆、甲板の上に集つて、陸地のものは一物たりとも見逃すまいとしてゐた。彼等は夢中だつた。習慣とは何と不思議なものであらう、陸地の生産物で生きてゐる者は、常に陸地を自分の半身であるかのやうに考へて居る。

やつと船が港に、と言ふよりは、運河（キアナル）に入つた、と言ふ方がよさゝうだ。我々は投錨中の大きな獨逸船や、石炭積みの支那船や、古風な帆船や、建造中の他の波止場などの傍らを通つた。水は更に黄色を帶びては行つたが、ずつと滑らかになつた。岸の上には、エジプト人、アラビヤ人や、その他の國民が、それ〴〵特有の衣服を着て、往來してゐた。私に取つて、此地は未知の土地であるので、立ち上つて、彼等を觀察し、あらゆる動作をスケッチせずに居られぬほど、好奇の心が烈しく湧かずに居られなかつた。

船が錨を下ろすや否や、船側にボートがむらがり集つて來た。それで、見る眼には益〻興味をまして來た。アラビヤ風の

人達は――華車であるが骨ばつてをり、氣持よく黑い皮膚をしてゐる――ぞろりとした着物を着て、赤いトルコ帽を被り、顏一面に笑ひ乍ら、我々の船に近づいて來た。そして、彼等がその場合々々に適すると思ふと、英語、獨逸語、佛蘭西語、又は土語で、我々に話しかけて來た。此地程、多くの異つた人種の集まつてゐる處は世界になからう。忽ち、石炭人夫が乘つて來た、するとその後から一團の行商人がやつて來た。彼等の內の一人は私に一枚一片でエジプトの切手を賣つた。この切手一枚あれば結構何處でも葉書は出せますよと言ひながら。然し、後で、これらの切手が半片のもので、どれにも、も一枚足さねばならないことが判つた。この町の三つの有名な思ひ出は、無恥な繪畫と、竊盜と、何だかもう一つだと、人々は私に語つた。

私は石川氏と上陸した。我々は先づ船頭と喧嘩し、それからお出かけ先きまでお伴しませうと口說きたてる案內人共を追拂ふので怒り狂ひかねぬ程爭つた。

私が下船する直前に、私よりも先に此處にとゞいてゐた一束の手紙を受取つた。その內には壬生馬からの葉書もあつた。可愛い子供の繪と、お別れの短い詩が書いてあつた。他のは、グムペル、ブーフマンと二人のウリリックからのであつた。ティルディは、葉書と手紙と寫眞三葉を送つてくれた。何と云ふ馬鹿であらう。私は！　譯もなく、淚が頰をつたつた。淚を流したのを氣恥かしく思ひながらも、自分で、自分の行爲を辯解してゐる私であつた。ティルディよ、お前は、私の友達であるかのやうな手紙をくれた。

友達！　これは何と云ふ妙な言葉であらう。ブルータスはシーザーを友と呼んだ。アントニイはブルータスを友と呼んだ。又臆病な卑怯な二人の愛人は、お互ひに友達と呼び合ふ。友達と云ふ名は、屢々卑怯者の避難所である。私はそれを知り過ぎてゐる、そして又お前を友達と呼んでゐる。

我々は日本人の商店に行つて、土產物を少々買つた。そこから他の日本人の船客達と一緒になつて、町を見物に出かけた。一番有名な建物は郵便局であるが、それもパリやロンドンの景物を見なれた眼には、單純で平凡に見える。稅關が多少變つ

てゐて、アラビヤ人の回教寺院に、不思議に似てゐた。街路は不潔で、狹く、家は小さく、住民は乞食の群れのやうに見える。然し乍ら、この半熱帶的都市には、何か云ふに云へない魅力もある。人々の着物の着方、アカシヤの街路樹、赤瓦の家、小さいアラビヤ馬、愚鈍さうな驢馬、風變りな窓かけ、道標、傲慢な役人、瘦せた犬、赤く盛りあがつた大地、バナナやオレンジの撒き散らされた皮、藥屋と肉屋から匂ふ變な香、眞赤な雲、蒼空、漆喰の白壁、奇妙な衣裝の女、ブラ〳〵歩き廻つてゐるもの〻嫌な容子にさへ、町の空氣に調和するものがある。空想は、人を極端から極端に驅り立てるだらう。ある時は、卽座に、この厭な町を去らうと思ふだらうし、又ある時は、あの人々の生活樣式に非常な興味を感じて、彼等と自然を、更に綿密に研究するために暫時留つてゐたくなるであらう。

三時半頃、船は動き初めて、間もなくスエズ運河に入つた。兩側の草木のない堤防の上には、信號標と電柱が點々としてゐた。

夜十一時頃、我々の船は、三艘の汽船をやり過す度に、止らなければならなかつた。どの船も、船の天邊（てつぺん）に探照燈（サーチライト）をつけてゐた。それが星月夜の濃い碧りを通して、太陽からさまよひ出た一本の光線のやうに、くつきりと輝いてゐた。四邊は全く靜寂、時たまボートや綱の水をうつ音や、蒸氣揚錨機（キャプスタン）のグイ〳〵曳張る音、航海長の聲低い命令が靜けさを破つた。私は船尾の船員達が、默々と働いてゐる最上後甲板をさまよつてゐた。運河は强い電燈に照らされて、不知火の流れのやうに見えた。驚いて飛ぶ鳥の姿さへもが、その光りの中に來るとくつきりと見えた。アラビヤ人の船員達は小さなボートに乘つて我々の船の傍で、土語で何か話してゐた。私は今までに、此時ほど不思議な感慨を味つたことはない。私は、自分がアラビヤ物語の主人公のやうな氣がした。その夜は肌寒い位だつた。

三月八日。天氣甚だよし。暖。私が起きた時、船は丁度、ビター湖の波を分けてゐる處だつた。我々の船が進むにつれて景色は益〻面白くなつて行つた。全然薄赤い砂から出來てゐる堤の向うには、こまやかな紫色の陰影のついた、一脈の禿山が連つてゐた。一船客の話では、夜になると時々、豺が汽船から投げすてる食物をもとめて洞窟から出て來て、堤の上を徘

徊するさうだ。運河を七十八哩航行して、十時頃スエズに着いた。陽は既に高く、萬物は色樣々に輝いてゐた。この驚くべき景色を、少しでも傳へ得る者はマネーのみだ。單色が互ひに混り合つて、そして色彩畫家に取つて、單色が決して不十分な道具でないと、人々に信じさせるに足る程の效果（エフエクト）を出してゐる。

スエズは名ばかりの都市だ。モーゼが移り住む人々を引連れて通つた場所は、こゝから餘り遠くないやうに思はれる。

物賣りがポート・サイドの時のやうに、我々の船の周圍に集つて來た。然し、その時より數はずつと少ない。彼等を眺め、陽氣な笑聲を面白く聞いて居た。あの妙な格好の帆船が、こよなく淸い海上のそよ風に追はれて、あちこちと走つてゐた。向ひの陸地に、日本の「梅」のやうな木に花が咲いてゐるのが見え、そして物賣りが、レモン、棗の實、珊瑚、海綿その他骨董品を賣つてゐるのが見えた。

我々の船は他の船　後に續いて、東南に航路を取つて進んで行つた。水は次第に靑く、岡は次第に赤くなつて來た。空はかゞやく霞で眠たげに見えた。暑さが急に增して來た。私はパナマ帽をとり出した（茲に運河のスケッチあり）。

私は移り變る景色を見ながら、終日過した。シナイ山が水平線上から、我々に挨拶した。スエズ灣の赤い不毛の岸邊が正義の神の選民の、退屈な移住を傍觀する人を思ひ浮べさせでもするやうに廣々と擴がつてゐた。子供や老人をひきつれた、働き疲れ切つた奴隷の一群が、不平をこぼしながらも、尙ほまだ救世の希望に縋りながら、放牧の父モーゼに導かれて、燃ゆるやうな土地を歩いて行く。私はその光景をそこに見た、目（ま）のあたり見るやうに思はれた。

夜、星はこよなく輝き渡つてゐた。涯しなくつゞく國土に輝く明るい星月夜は、一神敎に似合はしい搖籃にちがひない。かゝる宗敎は、ギリシャのやうな非常に變化のある自然には、成長し得よう筈もない。

お休みなさい。私に因緣ある人よ、人達よ！

三月九日。 晴天。暖。又陸地が見えなくなつた。船は、人々が「紅海」と呼ぶ、碧綠の海を航行してゐる。私は、トルストイの「アンナ・カレニナ」を讀んで、彼の文學上の識見の深い泉にたゞ驚かされてゐる。實に、彼こそ、人間の心を讀み取

つたものである。然し、その題材の取扱ひ方には、恐らくツルゲネフか、或はフランス作家の克明な模倣の跡がある。晩年の彼がさうであつたやうに、このスタイルから飛躍すべきである。彼の正確な、丹精をこめた心理研究は、彼の上衣——即ちロマンテイシズムによつて、磨かれるどころか、寧ろ妨げられてゐる。ツルゲネフに對しては彼は反對の態度を採つたが、前者の才能に負ふ所大なるものがあるに相違ない。彼の特性——正確な心理研究さへもツルゲネフのそれと同じ傾向を有してゐる。ツルゲネフがこの作(譯者註。アンナ・カレニナ)を、限りない熱心を以て讀み、彼を來るべき時代の指導者(リーディング・スター)と呼んだのは、決して不思議なことではない。

プリンス・ステフアン・オブロンスキイは素晴しい。アンナは、その取扱ひ方が派手であり力強くはあつても、何處か曖昧である。エカテリナはもつと、生き〳〵と書かれてもいゝ、トルストイの小説中には端役の人物がゐないやうに思はれる。凡ての者が、動き、呼吸し、それ〴〵特有の情熱と理智を附與されてゐる。これらの人物の中から、スコットの小説中の凡ての主人公——優雅で、勇壯ではあるが、この世には居りさうもない主人公達に、十分に匹敵し得る名前を樂に指の數程擧げ得られる。

夜、大氣は暑く、蒸し〳〵する。我々は船尾の高甲板に腰をおろして、涼まうとした。あるかないかの微風で。

星の美しさを實感し得るのは、鬱蒼たる木のさゞめきのやうな、熱帶の天地を横ぎつたもののみである。星は歌ひ、舞ひ、下界を冷たく見下ろすのではなく、微笑みかける。私は水の中に不知火を見た。

ひどく咳をしてゐる二人の子供をつれて、子供達の爲めだと云ふので、船室に閉ぢ籠つてゐる若い母親がゐた。彼女は夜になると、しばらくの間、涼しい空氣を呼吸する爲めに甲板の上に出て來た。彼女は頭痛がすると云ひ、その顏は額まで赤味を帶びてゐた。彼女の、疲れてはゐるが、きりつとした顏付は、非常に私の心を牽いた。何處か、ティルディに似てゐて、非常に優雅な白い襟頸をしてゐた。いかなる種類の獻身でも、見る眼には美しいものである。その顏の內には何か神聖なものがあり、假令どんなに見る眼には汚くなつて行つても、墮落の手は及びさうもなく思はれる。

三月十日。日曜。晴天。氣候は刻々と暖くなつて行くやうに思はれる。水は常に青いが、空は多分濕氣が稀薄になつたせ

ゐだらう、靑みが少しなくなつたやうに見えた。

朝、「アンナ」を讀んだ。獨逸の溫泉場でのキテイの生活は、生き〱と描かれて、讀者を牽きつける。ヴァレンカは各頁に光彩陸離と輝く端役人物中の一人である。レビンの所有地での生活は、その生活にふさはしい自然や田園の美しさに讀む者の心を奪ふ程、繪畫的で、眞に迫つてゐる。

勤行に列つたが、全くいやだつた。何故、人はかくまで僞善をなさねばならないのだらう。彼等の勤行をする動機を考へて見よ！　仲間の者を嫌厭の眼を以て見乍ら、勤行をする位ゐなら、全然奉仕しない方がましだ。ある者が罪を犯す場合にも少なくとも、惡事でもしようとする一本氣な處がある。然し、もしあんな態度で勤行をするやうでは全然不眞面目である。彼の唯一の野心は正しいと云はれたいことである。

午後、事務長の勸めによつて、一等船室に移つた。これで、私の同室の者は多少廣々とするだらう。

啄木鳥と鷹が船の周りを飛び廻つてゐるのを見た。それらは、マストの上に留らうとしてゐるのだが、船客の騷ぎに驚いてゐるのである。可愛相な鳥よ！　啄木鳥は遂に見えなくなつた。波に洗ひさらはれたのか、何處か甲板の上にかくれたのか、私は知らない。鷹は、私が夕食に下りて行く時まで、飛び廻つてゐた。二匹とも、どうなつたのかわからない。數頭の五島鯨と、小さな魚とが見えた。

ポート・サイドから、ギリシヤの一少年が乘船してゐた。今晩、船尾高甲板で、その少年が、色々な歌を口ずさみ初めた。我國の子守唄のやうなものであつた。私は歌聲に耳を傾けて、深い感慨に打たれた。

三月十一日。月曜。東南の强風。一等船室は大變暑くて蒸し〱するので、私は夢を見つゞけて、よく眠られなかつた。昨日見た二羽の鳥は何處かに行つてしまつた。朝、シスモンディの「イタリヤ共和國」、午後、トルストイの「アンナ」。夕方、一等船客と二等船客の間に綱引があつて、後者が負けた。シスモンディは非常に面白さうで、且つ敎へらるゝ所がありさうである。讀み續けよう。

或る時は、陰鬱な感情に、又或る時は何か夢のやうな想像に捉へられる。今日、私は、自分がヴァイオリンであるやうに空想してゐたら、まるでヴァイオリンのやうな氣になつた。私はある大音樂會で、非常に樂才のある中年の婦人に扱はれた。見た所、婦人は沈んだ氣持で居るらしい。その弓が私の弦に觸れる度に、私の心臓を貫くやうだつた。そこで私は彼女の感情に合はせて、聲を擧げた。彼女が奏で進むにつれて、私の感じは更に深くなり、最後に私は、彼女の中に身を沒し、私の中に彼女を見出した。それから、言葉ではそれと云へないが、どうして彼女が沈んだ心持になつたか解つた。それは、次のやうなものであつた。彼女は若い時には非常に綺麗であつた。そして、夢のやうな生涯を送つてゐたが、不意に、彼女に一人の男が現れて、そしてその男がヴァイオリンになつてしまつた。そのヴァイオリンこそ私なのである。彼女は、そのヴァイオリンを彈く時には、大變大切に取扱つたが、用ひない時には、塵と埃の山の中に捨てゝおいた。私は、彼女が立派な聽衆の前で演奏し終つた後で受けねばならないこの苦しみを想像してゐた。不意に、私の夢は、不圖した物音で、粉々に砕けた。甲板の上で、まるで蟋蟀の鳴く音そつくりの、物のきしむやうな音が聞えた。その音は人に様々の事を想ひ起させる。

〔以下四行邦文〕○一兩二兩の兩と云ふ字を處によつては雨と讀む。
○いたづら息子酒に醉ひしれて父家に歸る。父脅威して曰く、「放逐せん」。子曰く、「こんなぐるぐるまはる家に居られるもんか」。
○魚屋に行司の司の字を聞く。彼れ曰く「わけはありません、同じくと云ふ字をさんめいにおろして骨付きの方だ」。

三月十二日。火曜。東南風。嵐。船は紅海の入口近くを走つてゐる。波は非常に高い。今日は、イギリス出發以來、一番荒れた日である。多くの船客は船暈にかゝつた。然し、私は至つて健全、丈夫であつた。
朝はシスモンデイの作品を、午後は「アンナ」を讀んで過した。誰かの話すところでは、波は時々マストより高くなるとのことである。それは、莊厳な眺めにちがひない。若し、その爲めに、身を亡すにしても、一生に一度、そんな眺めを見てみ

たいものだ。夕方までに、二つの島の傍を通り過ぎた。夕方、風は凪いで來た。私は非常に理に合はない人間である。私は生きてゐると云ふ事を不可思議に考へる事がある。そしてどうしてもその氣持からぬけられない。時々、私は抑へつけられたやうな心持になり、憂鬱になる。眞に馬鹿なことだ。

三月十三日。水曜。晴。六時頃、我々の船は「十二使徒の島」を通り過ぎた。凹凸の多い、骨ばつたやうな島である。それから、九時頃、遙か向うに、アデンを見た。それから、陸も見えなくなつた。我々は印度洋上にゐるのだ。朝、シスモンディを、午後は「アンナ」、そして四五枚スケッチをした。

三月十四日。木曜。晴。夕方少し荒る。朝、我々はアフリカ海岸の近くを通つてゐた。正午頃になると、海岸は段々近くなつて來た。凹凸のある何も植ゑてゐない自然の高い壇が遙かに廣々と擴がつて、アフリカの中央部に雨雲の侵入を防いでゐる。五島鯨（ポーポス）や鯨が見えたと云ふ話である。

朝、シスモンディ、夜は聖書。

自ら、虚（うつ）ろな生活を憎め。我が魂よ、我が心よ、抱くに足るものを抱き、それを自らの全生命内に沸きかへらしめよ。何の仕事もない生活を憎め。空白であるより、むしろ眞黒であつた方が遙かにいゝ。

昨夜、甲板でダンスがあつた。石川君と私は、踊つてゐる人々の傍を、話しながら、あちこち歩き、眞面目な問題を論じ合つた。彼のキリスト敎に對する不動堅固の信仰のおかげで、私はこの宗派の現狀について、敎へられる所があつた。石川君は愼重な性質（たち）の人である。彼は多くの實際生活を經驗したやうに見える。そして、風俗習慣の人に及ぼす壓倒的の力の如何に強いかを知つてゐる。私は、彼の意見、行爲に同意することは出來ない。さうした者に對して、私はとても堪へ忍び得ぬやうに見える。世間は彼のやうな人を必要としてゐるのだ。彼をして、彼の道を步ましめよ。私は我々の社會に彼を持つことを慶賀するのに人後に落ちる者ではない。

一等室には一條家の人々の他に船客が三人居た。彼等と私の合ふ點は一つもない。彼等は、私と全然異なる天地に住んで

ゐる。彼等は正しいのかも知れない。然し私は、自　の立場を固守せざるを得ない。神に謝す、私の性格も、近頃まであれほどに霧のやうであつたものが、いゝ方面へか、悪い方面へかは、自分にもわからないが、とにかく、段々堅固になつて來てゐる。出來るだけ早く全く自己そのものになりたいものである。個性の實現、これこそ、私の切實に得たいとのぞむものである。

午後、馬鹿な話を喋べり合つた。恥しい事だ。

昨夜、彼女が踊つてゐるのを見て、いやしい人だと思つた。けれど、今日、今朝、私が本を讀んでゐる時にやつて來て彼女は、私をちらと見て微笑んだ。私も微笑み返した。

夕方、波が次第に荒れて來た。我々は、沈み行く夕陽と、去り行くアフリカに、最後の視線を送つた。明日、我々は印度洋の眞中にゐるだらう。

三月十五日。金曜。晴。蒸暑し。朝、シスモンディ。午後、「アンナ」。別段變りなし。アンナは、その離婚のことを、色々考へてゐる。夫はこの問題について、冷淡に振舞つてゐる。レビンは、國の財政に立入つてゐるし、そして凡てが、平凡で、ありふれてゐる。作者自身はよく知つてゐる事にしても、話の筋に深い關係のない事實に深入りすることは、トルストイのいつもの缺點だと私は思つてゐる。

夕方、幻燈。

三月十六日。土曜。晴。蒸暑し。まだすつかり、夜の明け切らない内に、雲は散つてしまつた。朝、シスモンディと、ミシエルの「國民」、午後、「アンナ」。レビンとキテイが新しい氣力を出して、彼等の愛情を新たにした。あちこちに、甚だ面白い心理研究がある。あちこちに、甚だ忠實な寫實的描寫がある。

私を憂鬱にするものは何であらう。今日、私は涙が出て、留めることさへも出來なかつた。而もどうしたのかもわからない。恐らく、自分の内に、不思議な矛盾があるのだらう。私は、時々非常に純になり、時々非常に不純になる。或る時は、

非常に同情深くなり、又或る時は、不合理な位ゐ利己主義になる。この性質の矛盾が何時かはなくなつて欲しいものだ。然し私は、今この矛盾の範圍が廣くとも遺憾だとは思はない。どうか、一個の人間として、生きさせてくれ。他人の批評なんか無視して、私の心の奥底から、いゝこと、惡いこと(もし余に惡いことが出來るなら)をさせてくれ。何でも眞面目にさせてくれ。假令それが罪なことであつても。

明日、宗教的な集りをし、石川君に説教して貰ふやうに取り決めた。どう云ふ風な結果になるかはわからない。恐らく、私は愚かなことをしてゐるのだらう。私は親切になりたい。たゞそれだけである。

壬生馬はどうしてゐるだらう。光は、埒田は、ファンニイは、ティルディは、信子は、愛子は。彼等は私のことを思つてゐることだらう。あなた方に感謝します、私は無爲に生きない、然り、必ず。

三月十七日。日曜。晴。蒸暑し。朝、何をしたか覺えてゐない。考へこんで過したにちがひない。午後、二等船室で會があつた。會には、醫師の山田氏、その他十人の船員が來た。石川君は仲々うまく話した。私は、好奇心や、哲學的思索の爲めではなく、たゞ精神の糧を得る爲めの目的で、會に來た人々の正直さうな顔付を見て、大きな喜びを感じた。農民を限りなく信じたトルストイは正しい。然し、悲しいかな、子供の天地から、遙かに隔たつてゐるやうに自分は全く異つた世界に住んでゐるのだ。

月は五日位ゐだ。夜、甲板上を歩き廻つて、物思ふ事多し。

三月十八日。月曜。晴。暑し。朝、ミシエルの「國民」。午後、「アンナ」。ジョンソン氏が、モーゼについての異教徒の見界を攻撃した刷物を貸して下さつた。題して、「モーゼは間違つてゐたか。」恐ろしく、不合理な無智なものである。キリスト教の教師達が、これらの書物を、眞のキリスト教精神普及の躓く石として、排斥しない限り、今後のキリスト教も、今まで通りのものであらう。

正午頃、跛を引いて、航行出來さうもない船に出會つた。こんな小さなことが、總船客を興奮させた。

大洋の色は次第に、純藍色になつて來る。それを見てゐると、靜かに、奥深い、けれど物悲しい感じがする。波は滑らかで、眼につく程の浪の碎けさへ餘りない。月は次第に大きくなつて行く。

又、甲板で舞踏があつた。彼女が元氣で踊つてゐるのを見た。私は、船室に閉ぢこもつて、「アンナ」を讀み續けた。レビンとキテイの場面が、非常に樂々と描かれてゐる。

三月十九日。火曜。晴。甚だ暑し。今日はロンドンを發つて以來、一番暑い日に違ひない。朝、ミシエル。彼の文體は、ユーゴーの作に、大に影響されてゐる。少くともさうは思へる。讀者に涙を流させるやうな、悲しい數行もある。然し大體に於て、虚飾の痕のあることを否むことが出來ない。G夫人と話して、朝の大半を過した。彼女は三人の子持で、尙ほ明るい少女のやうである。彼女の身體には生命が脈打つてをり、それが彼女に、人を牽きつけるやうな魅力を與へてゐる。

午後、「アンナ」及びデッキ・ビリアード。夜、日記と手紙。

三月二十一日。木曜。晴、曇り。船室の中がひどく暑かつたので、朝三時頃起きた。遊歩甲板の欄干に行つた。空は叢雲に被はれて、恐ろしく暗かつた。時々空を横切つて烈しい稻光りがした。きらめいた後は尙のこと暗い。浪は雪のやうな泡で眞白い。ありとある物がさわ立ち動いてゐる。そして私もその影響をうけた。不意に、私は、悲しい感じに襲はれた。私は欄干を堅く握つて、その感じを追ひ拂はうとしたが、駄目だつた。私は特にティルディの事を考へてゐた。コロンボから彼女に手紙を出さうとしてゐること、その手紙の內容のこと、私が彼女のことを考へてゐる時に、彼女は何をしてゐるだらうと云ふことなどを。私はほんたうに彼女を愛してゐるのか知ら。又は、單なる、一時の感情なのだらうか。彼女の思ひに沈んだ、あどけない、信賴し切つた顏付が、目についてならない。私は再び眠ることが出來なかつた。そして、雲の移り變りを驚きつゝ、心暗く見つめてゐた。私は、我にもなく同じ質問を繰り返してゐた。私は犧牲になるべきか、それとも、犧牲を請ふべきか。永久に解けない謎！

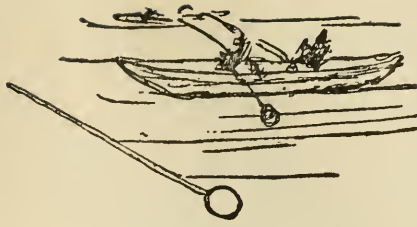
段々に、紅い一線が東の方に忍び寄つて來た。そして朝が來た。雲はありとある色を帶びた。然し、それは私の悲しみの

度合を増すだけだつた。赤色は愚弄し、靑色は嘲笑し、黃色は嘲弄する。あゝ、何時になつたら、私は、神の子に似つかはしい靜かな決意と安心を得ることが出來るのだらう。永久に、神祕の天地の眞中に立ち、繰り返し失敗しつゞけながら、自らの足を何か健實なものゝ上に置かうと努める。父なる神よ、私を導き給へ。神よ、御手にはあらずとも、せめて衣の緣を持たせ給へ。悲しく、雲深い中にその日は明けた。船の前方に低い島の擴がつてゐるのが見えた。セイロンだ。その岸は椰子樹の廣大な森に被はれてゐる。我々は埠頭を過ぎて、帝國軍艦を二隻(筑波、千歲)認めた。それから、內港に投錨した(こ

こに上の物賣りのボートの圖あり」。

忽ち、我々の船は、物賣りのボートと子供の潜水夫達に取圍まれた。ボートは非常に變つたもので、櫂(オール)も普通のとは全然異なり、その先が扇形に造られてゐる。子供の潜水夫は筏乘(いかだのり)と一緒にやつて來た。彼等の皮膚は眞黑である。彼等は、お金を投げて下さい、捕へますと叫ぶ。彼等はかの有名な「タララ・ボンデイエ」を無茶苦茶に歌つた。彼等の生活振りは、人らしさのこの上なくないものである。彼等は、恐らく、兩親に世話されず、憐れに育てられた子供達であらう。私は彼等を見つめて、殆んど泣き出さんばかりであつた。

船を去る人達に別れを告げてから、九時、ランチに乘つて岸に向つた。船を見ると、ガスリイ夫人が、私に、ハンカチを振つてゐるのがわかつた。私は手を振つて、それに答へた。二日前、彼女と話してゐた時、彼女は、自分の夫をもう愛してゐない、彼等の結婚生活が退屈になつて行く、と打ち明けた。私は心から彼女を憐れんだ。彼女は明かに、同情心と、明るい晴やかな、正直な魂を持つてゐる。彼女は何處かティルディに似てゐるから私は彼女が好きだ。彼女が三人の子供の世話をしてゐるのを見ると、私は彼女に同情する。今や、彼女は私に取つて、生きた人間ぢやない。彼女は、私の記憶の中に長くあるだらう、恐らく、もう二度と再び會ふことはなからう。

私は石川君と上陸して、人力車を雇ひ、マリガ・カンダ(Malgia Kanda)に行つた。先づ第一に何よりも私を驚かしたの

は、新緑の樹の葉である。それは私を蘇らしめた。椰子樹が繁り、又、緑がかつた青い水で、白衣を洗つてゐる男のゐる小島の上に立つ赤瓦白ペンキの家で縁取られた湖水に沿つて、我々の人力車の行く時、私は空氣の美しさを、肺の奥底からほめ叫ばざるを得なかつた。殆んど大抵の木は、素晴しいよい匂ひと色の花で飾られてゐる。この上もなく氣持のいゝ微風が、車上の私を撫でる。萬物は豐かで、なごやかで――ツルゲネフの「春の潮」の女主人公を思はせるものがある。約三十分、乘つたところに寺があつた。曹洞宗の僧で、此處で既に三年研究してゐると云ふ橘氏に會つた。彼は白い洋服を着てゐて、非常に簡單であるが、清潔で涼しい、彼の庵に我々を導き入れた。彼は大變聰明さうな青年で、佛僧に特有の、幾分の控目を持つてゐた。庭の形は、どこと言つて美しい所もない。けれど陽の光の與へる感銘は驚くべきものがある。物蔭の色は孔雀の羽のやうに見え、ぎら／＼光る太陽は赤地に、緑の葉に(その他に何があらう)、その光線を浴びせかけてゐた。

彼の話の斷片。

一、一年中で最も暑い季節は四月である。

二、概して云へば、この島には七種族ゐる。卽ち、シンハリセ、タミル、ムーア、マレイ、バルガ(和蘭人とマレイ人の雜種)、英人及び其他。

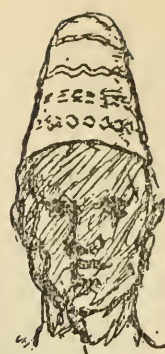
三、行政は立法團によつて行はれてゐる。その代表者は、人口數に比例して、各種族から送られてゐる。

四、小乘佛敎が島の主な宗敎である。その敎本は凡てパリー語で書いてある。サンスクリットで書かれてゐると云ふ大乘を釋迦直接の敎へと云ふのは正しくない。それは師の福音を普及しようと努めた、彼の弟子の書いたものに違ひない。

五、僧侶は嚴重に「一日一食」で暮してゐる。卽ち、正午前に堅い物を食べるが、午後から夜にかけては、たゞ水を飮むばかりだ。三衣一鉢。

六、僧侶の身持は懸命に守られてをり、その結果、人民の無限の尊敬を得てゐる。

七、一般人の品格も概して高まつてゐる。殆んど酒を飮みに出かけるものがない。男女の關係も非常に嚴格である。大半

の者は宗教に凝り固まつてゐる。

それから、彼は我々に寺を一巡させてくれた。この地の人々の藝術趣味は甚だ低級に思へる。佛像は、その出來榮え、甚だ拙く、その持ちものゝ裝飾、配置も、甚だしく沒趣味である。tower（塔――支那、日本ではPagoda と云ふ）の形はこの國特有のものである。それは、下圖の樣な形をしてゐる（茲に中央下の如き塔の圖あり）。この形の原々のおこりは、佛僧の三つの大切な道具、即ち三つの「袈裟」、椀、錫杖から形どられたのだと云はれてゐる。庭には大きな、貴い菩提樹があり、

石の垣で取圍まれてをり、樹の幹には、祭壇が設けてあり、そこには供物が捧げてある。土地の人は、この上もない尊敬を以てこの樹を眺め、葉を摘むとか、樹を害ふやうなことのないのは勿論、宗教的畏怖の念を以て、この樹に會釋するさうである。私は樹を見上げた。またとないほど優雅な姿だ。樺の木のやうな白い幹と、しなやかな枝、太陽の光りが麗はしく輝やく下で、輕やかにきらめくハート型の葉。私も亦、その優美な姿の前に頭を垂れ、佛陀にその終極の悟りを開かしめたこの樹に、心からの尊敬を拂ふやうな心持になつた。人々が佛陀の面影を宿すものでなくとも、かうした熱誠こめて眺めてゐると云ふことを知るのは、美しい心地のするものだ。汎神論とでも、何とでも好きなやうに呼んでよい。

我々は再び人力車を雇つて、そして博物館に行つた。特に注意すべきものは何にもない。然し、自然の美しさは到る處にいたく人の心をそゝる。土人は、至つて簡單な生活をしてゐる。彼等は衣裝や、豐かな食物などを要しないのである。家は小屋位ゐのものだ。動物園、植物園は面白い、特に前者は。植物の成長は潑剌たるもので、非常に生き〳〵としてをり、その綠の葉は、染められたかのやうに見える。土人達は、我々を「主人（マスター）」と呼ぶ。彼等が英國政府の統治の下で、如何なる屈辱を受けてゐるかゞ解る。

我々は港に歸り、五時半頃、船に戻つた。潜水夫達は、まだ船の周りにくつゝいてゐた。

夕方、雲はむらがり、何とも言へぬほど、壯大な、色彩形狀を表はした。それは夏の雲の色、形をしてゐる。あの一見、不可能に見える單色の組合せは、明かに夏雲である。

夜、風は美しく涼しい。我々は船尾の高甲板に腰かけて、港の燈火のきらめく樣を眺めてゐた。時々、悲しい感情が私を襲つて來、浮き雲のやうに通り過ぎた。どうした譯だらう。

船客の多くは船から出てゐた。子供達の元氣な聲が聞えなかつた。

三月二十二日。金曜。涼し。曇。朝、上陸。少し買物。午後二時半、船は港を出た。港を離れるにつれて、棕櫚の樹で鬱蒼と蔽はれてゐた一帶の砂地が、次第々々に魅力を增しながら、その美しさを表はした。風は荒れ氣味で、雲は密集し、數知れぬ幾多の形を採るのである。私はこれまでに、こんな素晴しい空の景色を見たことがない。稻妻、日沒、月光、雨、風、そしてその他さうしたもの。美！

夕方晩く、陸地を見失ひ、再び我々は大洋の眞中にゐた。

私は陸地にあこがれる。然し、一たび上陸すると、不純を嫌ふ心にとらはれて、そして再び大きな、純な大洋にあこがれる。私は、ガスリイ夫人に、私は大海の懷ろに埋葬して欲しいと話したことがある。その時彼女は、死んだら、何處にゐるのか解らなくなるのだから、何處へ埋められても構はないと答へた。彼女は最早こゝにゐないのだ。

海は深碧になつて來た。雲は依然として美しい。雲の美は、島近くの空で、一番よく見られるやうに思へる。

三月二十三日。土曜。暑し。曇。海は荒れ氣味であつた。夕方、烈しい雷雨。我々は、「はやて（スコール）」と云はれてゐる一種特別の俄雨が、屢ゝ起る地方に入つてゐるのだ。遠くの群雲の中に雨の幕が見える。すると、それは非常な速力で近づいて來て、土砂（どしゃ）降りの雨を船に注ぎかける。一瞬間にして、それは通り過ぎ、我々に見えるものは、遠くの雨の幕と、濡れ切つた甲板と、美しく凉しい微風とである。

夕方、凄い雷鳴と稻妻。船の通路に、不知火がかゞやいてゐた。私は、「アンナ」を、限りなき滿足をもつて讀み了つた。これは實に素晴しい作品で、讀者に大きな刺戟を與へる程力強く、涙を催ほさせる程美しい。私の印象では、それは、その高尙な調子と、呵責なき煉獄と、凡てを抱く同情心ある點に於いて、ダンテの「神曲」に十分較べ得られるものである。人の性を見抜く彼の眼は廣くて深い。自然は、トルストイの筆を通して、自らを表はしたやうに思はれる。人間性の二つの流れ、一つは一般の道に逆らひ、他は正道に從つて行くものが、互ひに驚くほど、はつきりと並び進み、果ては同じ運命に終つてゐる。讀者はアンナやキテイの運命を知る事は出來る。然し、トルストイの心理解剖を信じてはじめてあれほどの同情がもてるのだ。キテイの一生は所謂幸福なものである。學ぶべきもの、賞めるべきものが、數多ある――心の貧しさ、感情の卒直さ、曇りのない叡智、調和のとれた情緒、世人に對する合理的な態度など。アンナの場合は異なつてゐる。彼女の生涯は嵐のやうである。否、暴風雨である。彼女は、もし弱者に會ふならば、それを打挫くであらうし、强者に會へば自ら打挫かれるであらう。而も彼女は、兩者を避けようとはしない所か、そのどれかを捉へる事を寧ろ好んでゐる。

神はかゝる人類を生み出す。そして、それは、必ず苦しむ。憐れな魂よ！　生れながらの征服者であると同時に生れながらの敗北者――この世の中の最も悲劇的な逆説である。世人をして、かゝる魂を、その常識と云ふ低級な尺度で測らしめること勿れ。世間は彼女を知つてゐないのだ。彼女はこの世に屬してゐるものではないのだ。――迷子の天使とでも云ふがよからう。可愛相な魂よ！

三月二十四日。日曜。暑し。晴。三人の新しい船客が二等にやつて來た。二人の男と一人の女、皆なイタリヤ人である。この他に、三等へは、セイロンで修業してゐた日本人の一僧侶と、小アジアから來た二人の宣教師が乘り込んで來た。僧侶の名は平井と云ひ、眞言宗に屬するもので、コロンボで約三年修業し、病を得て、その爲めに、豫定より早く引き上げねばならないのだつた。彼は利口で、元氣さうに見える。けれど、何處か狡るさうな樣子もないではない。

午後、集會。石川君は「我々に必要な力」と云ふ題で話した。その後で、いくらかの質問があつた。I君はメチニコフの

「人性論」を返してくれた。私はそれについての彼の意見を訊いた。が然し彼の答へには、何等物にとらはれぬ考究をなした跡がなかつた。

三月二十六日。火曜。暑し。晴。右手にスマトラ島が見えた。色彩は、靑から綠に變つて來てゐる。夜、甲板上に腰を下し、月光の神祕な流れの下で、夢現の心境に入つた。夜は非常に蒸暑い。船員と話をする。彼等はひどく單純である。私は彼等が非常に好きだ。

三月二十七日。水曜。晴。蒸暑し。夜が明けると、非常に蒸暑い。左手に、マレイ半島の岬が見えた。何百と云ふ蝶が、風で島から吹かれて來て、船の上に集まつた。初め、それらは無數の紙片のやうに飛んでゐた。それから船に下りて來て、甲板に留まらうとした。然し、その多くは、再び風に吹き拂はれて、海の中で死んでしまつた。あんな、華奢な翅が、こんな辛い目にあふのを見るのは悲しいことだ。後で、たつた一羽の蝶が、恐らく凡ての內でこれだけだらうが、船の横腹に翅を休めてゐるのを見つけた。この運命の幸せな廻り合せに愉快にならざるを得なかつた。然し、私がかく思つてゐる內に、忽ちそれは飛び去つて、一瞬の後、波の貪慾な口に捕へられた。蝶は六頁前にスケッチしてある〔蝶の圖を略す〕。

午後、日記を書き、デッキ・ビリアードをして過した。

夜、平井和尙と、稍々烈しい議論。畢竟、彼は獨斷論者である。彼の知識は大して深くもなく、議論してゐるその態度は、眞理に對する敬虔さを示してゐない。

壬生馬とティルディへ手紙。

三月二十八日。木曜。晴。暑し。五時半頃起きて甲板に出た。船は緩やかに、シンガポールの入口に向つて進んでゐた。あちこちの燈臺が、曉の空に、微かな光を投げてゐた。凡てが穩やかである。我々は離れ岩の上に建つてゐる燈臺を通り過ぎた。こんな所で、一月か二月暮すのはきつと面白い事だらう。他人の眞の同情が得られない時には、全くの孤獨に避難所を求めるのは人の常だ。全然、何の同情もない人の群れの中に交つてゐることは、出來得るものではない。

船が地峽を通つて進むにつれて、景色は更によくなつて來た。適度の間隔を置いて、程よい隔りをとつて散在してゐる小島は、新鮮な綠の葉で蔽はれ、薄霞に氣持よくぼかされた朝日の光を浴びてゐる。シンガポール地峽の內部は、果てしない美しさに惠まれてゐた。土人の村。土人のジヤンク。

我々は八時頃、埠頭に着いた。船荷を卸すかまびすしい物音が既に始まつてゐた。黑人と支那の苦力が多くこの種の仕事に從事してゐる。

I君と一緒に、町を見物に出掛けた。港から三哩程離れてゐる街まで電車に乘つた。町の主(おも)な住民は支那人で、全人口の約七五パーセントを占めてゐる。街路は支那人で一杯である。金持らしいのもゐれば、勞働者らしいのもゐる。住家はコロンボのより遙かにいゝ。住民も恐しくきちんとしてゐる。植物園に行く。熱帶植物の力强い成長力は驚くべき程だ。我々は湖水の傍を步き、丘を廻り、植物栽培所へ行き、日蔭で休んだ。數人の日本の婦人、明らかに私娼と思はれるものに會つた。

博物館と圖書館に寄つて來た。別に云ふ程のこともない。それからY・M・C・Aの支那支部に入つた。午食。午後休憩。雷鳴、暑氣。それからカソリツク敎會、日本人の私娼窟、海岸などを見物した。五時半、車で歸船。

夜、凉し。美しい月。荷卸しが、夜の十一時頃まで續いてゐた。

三月二十九日。金曜。晴。暑さ甚し。朝、再び上陸。先づ、鳳山寺と云ふ支那の佛寺に行つた。その寺は、町を一眸の下に見下す小山の頂きにある。一僧に會ひ、筆談をした。それからヒンズー敎の寺に行つた。そこの人々は我々が靴のまゝ寺に入ることを拒絕し、罰金を拂へと云ひ張つた。腹が立つたから出て來た。三度目には、回敎の寺に行つた。そこの人々も亦我々の入る事を拒んだ。ロンズト敎の寺の建築は特殊の形をしてゐて奇怪と愚鈍こそその特性である。最後に、監督(エピソコパル)敎會(チヤーチ)に行つた。そこへ、凉しい微風が海邊から吹いて來る。少し步いてから電車に乘り、埠頭に歸つて來た。非常に暑く、荷車を曳く牛が二四、日射病で斃れてゐるのを見た。

午後の内に客は凡て乘船した。日本人は餘りゐない。支那人、印度人、その他各國人。
六時頃、船は波止場を出發し、小さな丈夫さうな水先案内船に導かれて、地峽を通つた。港口の夕景は何とも言へぬ程美しかつた。十五夜の月が丁度昇りかけてゐる所だつた。夕立後の雲の形は非常に美しく、凡ての人々はその美しさに魅せられて立ちつくした程だつた。私は、眞暗になるまで、甲板の上を去り兼ねてゐた。
シンガポールの鳶は特殊である。頭が白い。夕近い港の水の色も亦、草綠に近い特殊の色をしてゐる。
〔欄外に次の句あり〕

塵世蒼桑多轉劫　故郷理亂不關心
爲愛天南好風景　空勞歲月易蹉跎

鳳山寺(新廣澤尊王)聯

三月三十日。土曜。晴。涼し。一等及び二等船客は、殆んど滿員である。我々の船室には、他に二人の船客があり、他の船室にも同じく、澤山船客が乘り込んでゐる。二等には日本の男女各二人づゝと、四五人の支那人がゐた。ライオン齒磨舖の主人の小林さんも、我々と同じ部屋で眠る筈である。私は、所謂日本人が、特に嫌ひだ。彼等は大變氣取つて居り、大變行儀が惡い。私は、心から彼等を憎む。
私は「國民」を讀み初めた。非常に暗示に富んだ個所を見出した。殊に中世紀と文藝復興期の變遷を論じてゐる所などである。この作者は、私が心の中で考へてゐた考へと、そつくり同じ思想を、的確に云ひ現はしてゐる。午後も、ミシエルを讀む。デッキ・ビリアード。小林さんと少し話をする。日記を書く。
支那人の船客の行爲の亂雜と怠惰には驚いた。彼等は、せい〳〵この上もなく忍耐心の強い國民であると云ふ美點があるのみである。
三月三十一日。日曜。晴。風あり。船は大體、眞北に向つて進んでゐた。あちこちに點在する島が見えた。興味ふかく、

つの思想は、その最深の力をもつて、或る時代の人心に潜入し、各人をして時流に從つて思索せしめるのみならず、思潮を感じせしめるものである。

「國民」を讀んだ。然し、私の心にふれたのは、過去の時代の時代思潮だつた。思想の流れの變化は不思議なものだ。或る一

月は段々小さくなつて行く。午後、いつものやうに、宗教の集會。I君は「新生命」と題して、小林さんは、自分の精神實驗について話した。私は、後者を、非常な尊敬の念を以て聞いた。眞の經驗から出た言葉は、どんな言葉でも無限の値がある。一等船室の女畫家が「ロダンの生涯」を持つて來て、我々に見せた。その中には、彼の獨自の作品の挿繪がある。私は彼に壬生馬の繪を見せた。それで、彼の事を思ひ出し、急に彼の思ひ出が、私の心を捉へてしまつた。

四月一日。月曜。曇。風あり。海は正午になつて、荒れ出した。あの禪僧が、余に「肉彈」と云ふ題の本を貸してくれた。私は辛い思ひで讀んだ。余の考へから見る所では、これ程非常に厭はしい日露戰爭の記錄は、今までかつて讀んだことがなかつた。此本を讀んでみて、更に〳〵深く、戰爭の不合理なことを信じた。國家は戰爭などで、國民を死に晒す權利なんかない。國家はその存續の爲めにも或はその榮譽ある存續の爲めにさへも戰爭するのではない。つまらない虛榮心、宥し難い利己心の爲めに戰ふのだ。そして、この目的を達する爲めに、國民に、くだらぬ愛國心を說き、或は又、彼等を人道主義に反する人生觀をもつて煽動する。もし、宗教、倫理、科學、交際、凡ての人間社會の光明の一面が、人類の友愛の境地に向けられつゝあるならば、戰爭は今までとは全然反對の道を取るであらう。

午後、デッキ・ビリアード。夜、波は更に高くなつた。多くの船客は船暈にかゝつたに違ひない。

四月二日。火曜。晴、風あり。海はまだ荒い。朝、ベッドで、ティルディの思ひ出が、はげしく私の心を捉へた。彼女は私の前に、その美點をのみ見せて現はれた。その單純さ、同情深い心、敎養はないが、豐かな理智など。私は彼女を此上もなく愛した。私は彼女を非常にいとしく思つた。然し、結局それが何であらう。私はこの世の中に獨りで生れたのだ。私の鼓動は誰のとも同じく打たない。孤獨だ。然し、自由な生活。汝の孤獨を破る勿れ。されば自由を得ん。

朝、「肉弾」を讀み終つた。あゝ、ファンニイよ！　私はお前を愛す！

四月三日。水曜。曇。風あり。波はまだ高い。船は眞北から西北へと航路を轉じた。多くの人は船暈になつた。終日、シエリーを讀んだり、繪を描いたりして過した。夜、日本の新聞。私は、無限の興味を持つて、波の動きを見つめてゐた。波は舷側に當つては碎け、しぶきで不思議な光景を現出してゐた。荒天の日の海は、特殊な色を帶びてゐる。灰黑色に濃碧を添へたやうな——見てゐて甚だ怖ろしく、魔法使の狂女が、氣味惡い呪ひの言を吐きながら、互ひにあざ笑ひ合つてゐるやうである。

シエリーは、私に非常に興味がある。自然の美を描く辭句には、特に何か獨自なものがある。彼の自然は、常に幻想的であるが、而も眞實である。我々が感じてはゐたが、適當に云ひ現はすことが出來なかつた、これまで隱されてゐた自然の方面を、彼が見たやうに思へる。人性を洞察する彼の不思議な力は、又明かに、その“Cenci”の中に示されてゐる。これは、讀む者に、英國の最古典劇を思はせ、シエクスピアの或ものをさへ思はせる。然し、彼の作品中に於て、常に見出される缺點は、彼の見解及び人生の體驗の範圍の狹さと云ふことは姑く措くとしても、その確乎たる精力を以て作品を續けて行く、十分な忍耐力に缺けてゐること、否、むしろその體力のないと云ふことである。彼はその詩の中に於て、客觀的と云はるべきものを何も持つてゐない。彼は主觀詩人中で最も主觀的な詩人である。これこそ、彼が、限りなき魅力を以て、讀者に興味を與へ、その心を捉へるが、少時經つと、どの讀者も、結局完全に一個のシエリーと同じ氣持になり得なくなつて、讀者を把握する力を失ふ理由である、等々。

日本に於ての私の將來の職業について熟考した。私は確かに、一個の獨立人として、自ら立つ位の能力はある。併しこれだけでは十分でない。過去の歷史に密接な關係を持ち、將來の人道に不離の關係を有するものに、果して私はなり得るだらうか。人は、その眞摯な賢明な努力によつて、全人類と自らを結びつけた時に於てのみ、初めて不滅である。その他の凡てのもの、祈禱、信仰、行爲、他一切は、人を不死——即ち、至幸にするのに決して何の役にも立ち得るものでない。この日

的に達するまで、休む勿れ。

夜、雲は大空を縫ひあげてしまひ、波の碎ける音はもの悲しい。溫度は非常に下つた。印度洋の極熱は今何處に行つてしまつたのだらう。私は故國に近づきつゝあるのだ。故國！　故國は私を迎へるであらう。が然し、悲しいかな、私には故國と呼ぶべきものはない。

私の心は淸く溫かい。それに觸るゝものは幸福に觸るゝものだ。心の淸く、單純なものゝみ、それに觸るゝ道を知つてゐる。神よ、私を許し給へ!!!

四月四日。水曜。曇。涼し。明け方、船の激動で眼が醒めた。水先案內のボートが、港を拔けて、こちらに來るのと、香港の港口にある家の朧げな燈二つとを見た。港は月の光を黑い衣で封じこめた雲に被はれてゐて、薄暗かつた。

我々の船が港の眞中に投錨したのは、三時頃であつた。壬生馬の船がこゝに碇泊した時、彼の描いた繪が、彼のその時の心持を、私に物語つてゐる。海の色は同じやうに綠がゝつてゐた。海中から急に突出てゐる凹凸の山や、漂ふ霞に蔽はれた山の頂きも、彼の繪そのまゝである。波の形、點在する家、散在する家、その他のものも、壬生馬の畫中のものに極めてよく似てゐる。香港の全景は、函館と同じ姿のやうに思はれる。

我々（I君とチヤバイ（chabai とあれど不明））は九時半頃上陸し、山の峯まで通じてゐるケイブル・カアの停車場へ急いだ。停車場までの道は、麗はしく、淸潔だつた。駕籠と人力車が到る處で客を待つてゐた。街路には、まるで名前のわからない各種の植物が植つてゐた。ケイブル・カアで峯まで上るのは、その設備が整つてゐて、何の事故も起きないやうになつてゐると聞くものゝ、殆んど冒險に近い。頂上からの景色は壯大である。それは大して高くもなければ低くもない。どんなものも、はつきりと指し示すことも出來るし、非常に廣い區域を見渡すことも出來る。元氣に滿ちた海神の子なる英國民よ！　彼等はその足跡の印する處、必ず偉大なる足跡を殘して行く。一名ブル（牝牛）と云はれる彼等は、必ず物の核心に嚙みつく。そして一度嚙みつくや、何としてもその强情な把握の手を逃れることは出來ない。かくして、支那がイギリスに屈伏

した最初の瞬間に、イギリスが支那の肩から取つた荷は、南歐の重要地點、香港であつた。尙ほイギリスは、香港の直前にあり、香港に對して陸海軍の堅牢なる根據地たり得る、コーラン半島の後方の地をも手に入れた。町中の凡てのものは、英國民の忍耐、智慧及び活動力を示してゐる。例へばこれ迄この地は、多くの疾患、殊にペストの發源地と云はれてゐて、全白人に怖れられてゐた。然し、その活氣ある衞生處置、豐富な水の供給及び不毛の山腹を、直ちに密林に變じる大規模な殖林によつて、氣候及び衞生狀態は「今日では、極東に於て、此地以上の健康地は殆んどない。」と言はれる程變化した。

我々は植物園に行つた。半熱帶的の花の香と色が、たゞ我々の心を魅したゞけだつた。それから日本人の埋葬されてゐる墓地に行つた。嶮しい山間には植物の深く茂つた、切りたつた谷が狹まれ、あちこちに花崗石の岩が點在してゐた。墓地は谷の底にある。私は、今は亡き日本人の墓の間に立ち、心中一種の苦い、皮肉な微笑を覺えた。何故か自分にも解らない。

それから、日本の賣笑婦のゐる町の一角に歸つて、「そば」「うどん」のある家を見つけた。我々は「餓鬼」のやうに食べた。そして、支那芝居を見る爲めに、大通りに行つたが、無駄だつた。日中（ひなか）だつたので。そこで、支那街を通らねばならなかつたが。けれど、其處は我々には、大變面白かつた。支那人は不思議な國民である。——彼等の勤勉、忍耐而してその體力。

支那椅子を買つて、そして五時半頃船に歸つた。夕方、非常に涼しかつた。私はひどく疲れた。

壬生馬が葉書をくれた。彼の心の優しさ！　私はお金が少しもないから、誰にも何の知らせもしてゐない。二言、三言云ひ送りたくてならない人々——、——、——、——。

北極星がだん／＼と高くなつて來る。眼に見えるものゝ姿が、だん／＼と日本と密接な關係を示して來る。私は非常な興味、尊敬、嫌惡、悲哀、敵意を持つてゐる土地に次第に近づきつゝあるのだ。

今夕吾軀歸故土　他朝君體也相同

香港墓地門上聯

一九〇七年

太田南畝、一家を訪ふ。主人不意に乘じて南畝を轉輾せしめ、起くるに及んで一首を請ふ。南畝答へて曰く、

とんとつく、ことんとこける、すぐ起きる、何とて歌が詠めるものかは。〔以上四行邦文〕

四月五日。金曜。曇。今朝、非常に早く起きた。暗い曉闇の中を甲板に上つた。山の頂は飛び去り行く雲に蔽はれ、町はまだ深く眠つてゐた。家屋の中のやうに一家族が住んでゐるサンパンが船の周りに集つて來た。その小舟の中の人達は今お化粧最中だ。澤山の人達が小舟にかうして住んでゐるのだ。彼等は「琵琶行」の中に書いてあるやうな種類の人々に相違ない。概して彼等は子福者らしい。彼等をよく研究すれば、非常に興味があるに違ひない。九時半、I君と私は上陸して、少し買物をした。I君と別れ、正午歸船。午後は、「國民(ザ・ピープル)」、「萬朝報」その他を讀んで暮した。今日大變怖ろしい話を聞いた。昨夜町で、一人の日本人が四人の同胞に殺されたとのこと。午後、警官がこの事件に關して、船客を調べに來た。私は身慄ひした。ぢつとしては居られず、ひどく鬱いだ心持で、甲板の上を歩き廻つた。今夜、一船客が私に語つた所によると、彼害者は、無賴な放浪者の頭目で、犯人達はその部下のものなのださうだ。彼等は、頭目に不平を抱いてゐたので、「ヤマダ」と云ふ日本人のホテルでこの怖ろしい犯行を行つたのだ。四人の者はうまく〱と逃げおほせて、或る淫賣宿に身を潛めたとのことである。怖ろしいことだ。非常に怖ろしいことだ。

壬生馬、シャップハウゼンの人達、そしてティルディに葉書を出した。

夕方、暗い思ひに襲はれた。夜は雨。

私はアメリカにゐる日本人には嫌な思ひをさせられつけてゐた。然し、それは、香港にゐる日本人の墮落に比すれば、理のない不滿だと云ふことが今になつてわかつた。

四月六日。土曜。曇。風暴し。船荷の積込みが、昨夜から今朝まで續いた。おかげで、此船の出帆が四時のところが、八時に延びた。

船は東口から港を出た。兩側の景色は、まるで繪のやうだ。多くの小島が、凹凸のある海岸に沿つて、あちこちに散在して

ゐる。一風變つた恰好の帆をつけて支那風のジャンクが、海鳥の飛んでゐるやうに漕ぎ廻つてゐた。雲が我々の上に被ひかかつてゐた。非常に暗い日だ。大變寒くなつて來た。午前と午後、「女性の覺醒(アエイキング・オブウイメン)」を讀む。此書は公平だと云ふことは出來ないし、且つ確乎たる科學的研究の結果に基礎をおいた作品と云ふことも出來ない。——何故かと言ふと、此書の中の多くの頁は、理論によつてゞはなく、假設によつて證明されてゐる。然しその內には、讀者の注意と同情を惹くものがあり、熱烈な力强さと正直な表現が含まれてゐる。

I君、山田氏、そして一等船客の一婦人とデッキ・ビリアードをした。

夜は醫師と話して過した。彼はどちらかと云へば明快な頭腦と、非常にいゝ記憶力を持つてゐるが、個性と云ふ程のものは殆んどない。その雄辯、その議論はまるで、單なる石の機械から出て來るやうである。彼の心の空虛な部分は、あの論理的な切り刻む機械で滿たされてゐるに違ひない。鷗が二三羽我々の船について來た。紅海の入口とコロンボとの間、又は、コロンボとシンガポール間では、私達は全く見かけなかつた。

四月七日。日曜。曇。風暴し。雲と雨を伴つて、夜は明けた。我々は再び、暗い雰圍氣の中にある。富士川博士編「人性」を讀んで過した。シンガポールから、船に乘せて連れて來てゐるゴリラの一匹は、寒さに負けて死んだと云ふ話だ。

正午、臺灣海峽に入つて、小さな漁船が、荒波の白く碎けてゐる海上を、矢のやうに早く漕ぎ廻つてゐるのを見た。淋しい冒險生活だ! 私はそれらを見つめて、身體の內に力の湧くのを感じた。尻込みをすることは自殺をすることである。自殺はたつた一度すればそれまでだが、併し尻込みする者は、事實何囘も自殺するのだ。これ以上の恥辱はない。而も、余は、自身の力を疑ひ、想像の角石に躓く人間である。大に注意しなければいけない。

日本に着く時が近づいて來たので、自分の荷物の整理をした。私はティルディの寫眞を見つけて、烈しい、けれど美しい感情に捉へられた。

四月八日。〔省略〕

四月九日。火曜。曇。風暴し。船は黑潮の中に入り、溫度は甚だ上つた。「女性の覺醒」を讀む。甚だ面白し。「母としての女性」の章は特に面白い。母性愛の立派な心理的論述は、すぐれた小說家の見識を凌駕して餘りあるものがある。

正午すぎ、琉球諸島の小島があちこちに見えた。悪石島、諏訪瀨島など。初めて日本の島を見たのだ。ひどい凹凸だ。船はこれ等の諸島の間を通つて、東へと航路を進めて行く。時々大波が舷側にうちつけ、甲板の上に大量の水を迸しらせる。見てゐて面白い。

四月十日。水曜。曇。風暴し。朝早く、船尾高甲板の上に立つて、波と雲の絕えず變つて行く有樣を見つめるのが、今日までの私のこの上もない樂しみであつた。今日はこの樂しみを味ひ得る最後の日である。私は甲板上に、長く〳〵立ちつくした。私は世界中を七箇月間歩き廻つた旅行の道程を、はげしい思ひに浸りながら、心中に思ひめぐらして見た。神はかくもはる〴〵と、私を無事に導き給うた。私の將來に於て、神の私に望み給ふものは何であらう。私は神の足下に、畏れをのゝく。

鳥の一羽は遂に死んだ。茶色の光つた羽と、白い胸をした美しい鳥だつたが。それは波のしぶきに水浸りになつて居た。眼を半ば閉ぢて……可哀相な小鳥！

今朝早く、しと〳〵降る雨の中を、「つばくらめ」が甲板を橫切つて飛んで行つた。私は涙をとゞめ得なかつた。

四月十一日。木曜。ロープを投げる音で眼が醒め、港口を通して、和田岬の長く延びた土地を一瞥した。神戸に着いたのだ。船が近づくにつれて、風景は次第にはつきりして來た。故勝氏が造つた砲臺や、日淸戰爭で分捕つた監査船「蘇江」が見えて來た。水先案内船は、我々の船を檢査醫達に任して去つて行つた。

船の上で、その時に得た最初の「感慨(ステイムング)」を何と現はしたらいゝだらう。優美な姿をした松の木の點在する長い砂濱、曉の鏡のやうな水面を滑らかに進んで行く白帆、まだ眠つてゐるかのやうに集つてゐる一群の小舟(ジャンク)、朝日の新鮮な光に色とり〴〵に彩色された日本の空特有の雲、その柔かい輪廓で神戸の町を圍んでゐる長い一脈の山。これら自然の事象が、絕えず移り變

る印象を以て、私の眼に集り、私の生國の美と愛しさを賞嘆せざるを得ない。——いかに智的の反對があつたにしても。然り、智以外の何かゞある。もしそれが、過去の習慣、經驗の總和であるとするならば、それは、他の凡ての感情を抑へて、人々をして最も親しきものと感ぜしめるに足る力がある。私はそれを否まうともしないし、又否むことも出來ない。私は素純でなければならない。この國の墮落にすつかり愛想をつかす日まで、それとも、この國が私の振舞ひに怒る日まで、私はこの國を愛さなければならない。

船が內港に入つて、小舟やボートの間に碇泊したのは七時半頃だつた。ホテル・ニシムラのボーイがやつて來て、父と直良が波止場で私を待つてゐると告げた。驚いて、ボートを雇つて、岸に急がせた。彼等にそこで會ひ、一言も云はずに手を握つた。私の父！　私の父！　歲月と境遇がその生れながらの性質を幾分歪めたとは云ふものゝ、あなたは尙ほ地上の最も氣高く淸き魂である。私はあなたを誇る。あなたがなさつたやうに氣高く、私の前途を步ましめ給へ。

七月二十六日。〔此日邦文〕　韓國王、××の政府が××を韓國に振ふを訴へるの密使をヘーグの平和會議に派してより、事あれかしと待ち設けたりし××は急轉直下の勢を以て其施設を變じたり。韓王は內閣大臣の慫慂に從ひ、責を引くと稱して位を××なる皇太子に禪り、皇太子は略禮を選んで其日の曉明踐位の事を果せり。韓國の民これを知るに及んで所在蜂起の勢を示し、在韓の本邦人にして害を被りしもの亦少なからず。口實は自暴自棄を産み、自暴自棄は口實を産む。かくて韓國の秕政は底止する所なく、日本の權威は漸く韓國の上に加はらんとす。

韓國は死に瀕せり。

人、一介の蟲の死せんとするを見て、これを憐れむの心あり。一匹の家畜の死せんとするを見て、これを傷むの心あり。一人の人の死せんとするを見て、これを悲しむの心あり。一個の國の死せんとするを見ては、恬然として知らざるものゝ如し。

僞善者とは斯くの如きものを云ふなり。

政治家は好んで云はん、韓國の亡ぶるは其の眞に亡ぶるにあらず。我等は他の國民を扶助し誘導して彼等をして眞正の國政、眞正の保護の下に晏如たらしむるにありと。實業家は好んで云はん、韓國の民當今の生活は眞の生活とは稱すべからず。未だ整然たる殖産事業の基礎なくして焉んぞ人民の休安を云ふべけんや。我等は即ち我が餘裕を以て彼等に施し、その遺利を擧げその亡益を起し、以て其財源を强固ならしむるのみと。軍人は好んで云はん、歐洲列强の東洋に對する飽くなき欲望は萬人の等しく認むる所、而して彼の自治の精神皆無とも稱すべき韓國の存在する如きは、是れやがて列强葛藤の基を東洋に置くものにして、病菌の群集する一個の腐敗物を備ふるが如きのみ。その犯す所とならざれば甚だ幸なり。若し韓國を我が保護の下に置き以て自衞の策を講ぜしむるは、東洋平和を保障せんが爲めに第一の急務なりと。其の云ふ所、等しく皆甚だ好し、されども我が問はんとするは實に是等皮相の言質にはあらず。彼等が抱懷する心事にあり。彼等果して韓國の衰亡を見て一滴の涙を濺ぎ、その死滅を悲しむ事、己が親善の人を喪へる時の如き情を動かせしものありや。かの政治家、實業家、軍人なるもの等の企圖する所は、その最も公平なる心情を以てすら、自國の利益の爲めの故に眼を閉ぢて敢て他國の衰亡を傍觀するにあるのみ。彼等は再び辭を設けて云はん。固より韓國の衰亡は我國の利益なり。されども亦同時に韓國民人の利益なるをも考慮せざる可からず。即ち是れ一擧兩得の策なりと。若し高利貸がその鳥目を貧民に貸付し、貧民これが爲めに一日の食を得たるの事實を以て一擧兩得と云ひ得べくんば、我れ亦躊躇する所なく、かの政治家、實業家、軍人の云ふ所を首肯すべし。されども我は鳥目が貧民を一日の食に救うて、これを生涯の苦痛に死なしむるを知るが故に、斯くの如きを以て一擧兩得と云ふ能はざるが如く、××の政治家、實業家、軍人の爲さんとする所を見て一擧兩得の策とは云ふ事能はざるなり。

少くとも彼等が眞正の意味に於て、韓國とその國民とを愛せざるは爭ふべからざる事實なり。人その愛せざるものに對して何の好意をか與へ得んや。我が信ずる所によれば、安心の爲めにする布施、名譽の爲めにする慈善、外聞の爲めにする公共事業は社會人心を腐敗せしむる最大の毒素なり。最劣の心情を以て最高の行爲をなすが故なり。斯くの如き知行の反離は

偶ゝ人心を虚飾となし、偽善となし、最惡なる人間の標本を作るに止まりて、亦何の補益する所なかる可し。愛なき好意、世に斯くの如く惡むべく賤ふべく懼るべきものはあらず。今の政治家と實業家と軍人とは平然としてこれを爲しつゝあるなり。×××が所謂××××するの時はある可し。韓國の人民が富みて逸樂に耽るの時はある可し。韓國の農夫が日本より資本を得て、怠慢を擅まにする時はあるべし。されども彼等が日本の誘導によりて、教育あり修養あるの紳士たり得るの時は遂に來る事あらじ。

茲に於てか、彼の學者の徒は哂つて云はん。汝も亦馬鹿正直なるかな。一國の勉むる所はその國の富强伸張にあり。焉んぞ他の成敗を顧慮するに暇あらんや。汝が捕へて喋々する所の日本の宣言の如きは、單に皮相なる××に過ぎず、列國互に縱横の策を講じて日も亦足らざるの現時にありて、何者の愚か自己の心情を暴露して他の猜を牽くの愚をなすものあらんや。我が政治家、實業家、武人等の唱道する所は單に一個の對外廣告に過ぎざるのみ。赤裸々なる眞理は××にあり、××××にあり。何の暇ありてか事の××を思ふの暇あらんや。そのこれかを云ふは列强の理想を思へばなり。

善いかな言や。これ寧ろ男らしき告白なり。これ確かに眞理に近きの言なり。然らば我は斯くの如き態度に對して如何なる態度を採るべきか。我は先づ自己の心事に歸りて一考する所なからざるべからず。

我不肖と雖も、弱者を壓制して恬然たり得る無血漢たらんには、少しく男らしき心を有せり。盜賊の如く掠奪を事とせんには、少しく正しき心を有せり。我は又弱者を壓制し盜賊の如く掠奪を事とする人を見たらんには、義憤を發して彼を詰責すべき意氣と勇氣とを有せり。獨り我が××が××を××し××を事とするを見て、平然として舌を二となし筆を枉げてその××のなす所を讃美するの卑陋なる心事を有せざるなり。

不義は如何なる時、如何なる處、如何なる人に於ても不義なり。人は斯の如く云ふものを詰つて融通の利かぬ人と云ふなるべし。さらば偉い哉、融通の利かぬ人や。

ミルトンの筆は愛人の政治家クロンウエルの爲めにのみ活きて動きし。ピーターの舌は大なる信仰の戰の爲めの故にのみ

熱して叫びぬ。事の表面にくらまさるゝ事なく、その眞底に達して我等は我等の立場を定めざるべからず。恐らくは一の爲す所なくして止まん。されども百の誤謬を爲すに比すれば、その差幾何ぞや。

さらば韓國目下の窮狀を救ふの法は、これを如何にすべきぞや。汝は我等の爲さんとする所を批難する上は、別に良策を施すべきものあるなるべし、乞ふこれを聞かんとは、恐らくは彼等が我に逼るの言なる可し。我は謹んで答ふ、我は一層我が人格を養成し、我が知識を發達し、信仰を强固にし、より多くの人を愛し、より多く憎むを惡まん。我は亦我が生涯を純潔高貴なるものとなして、我が周圍の人を善化するを勉めん。唯斯くの如きのみ。

政治家と實業家と軍人と學者との中に、心底よりその隣人を愛するの人出づるなくんば、韓國は偖て措きて自國の救濟をすら爲し得ん事は絕對的に不可能なればなり。我が爲さんとする所を以て迂遠なりと云ふ人あらば、我はこれに答へて然らずと云はん。孔子は百代の聖者なりき。彼は經國濟民を以て本旨となせり。しかも當時の秕政爲すなきを見るや、彼は野に下りて子弟を敎育し、復祖國の事を省みざるに似たりき。されば孔子死して後幾何ならず魯は滅亡の悲運に遇へり。キリストは百代の聖者なりき。彼が四十日の荒野の試練は、如何にして貧民を救ひ、如何にして大國を建立し、如何にして學術を進歩せしめんかにありき。しかも彼人心救濟の最大要務なるを認むるや、斷じて是等凡俗の眼には何よりも必要なりと見ゆるものを排除し、以て心靈の救濟に從へり。彼死して後七十年、その祖國ユダヤは遂に滅亡の悲運に會したり。されども是等の聖者が播きたる種子は、徐々にその萠芽を延ばし、年を閱するに從つて勢力を增進し、彼の政治家、實業家、軍人が賢げに企圖せる所は建ち且つ倒るゝ間に、聖者の唱へたる大なる眞理は、徐ろに確實にその基礎を强固にし感化を廣めつゝあるは、何人も疑ふ能はざる所なり。かの蘇秦張儀の跡那邊にかある。かのフェニシヤの商賈の跡何處にかある。かのアレキサンダーの跡安くにかある。慧眼に似たる近眼者よ、汝は橫に活くるの喜びを知りて、縱に活くるの尊さを知らざるなり。

我これを欲せば、我は尙ほ面白をかしき日を暮し得ざりしにはあらざりき。唯我が慾を制するの極めて嚴格に、出所進退を熟慮し、己れの慾愁を以て人に加へず、己れの憤怒を以て人に移さず、名と富とに諂はず、弱きと貧しきとを侮らざら

んと勉むるものは、世に立ちて聊か遠慮ある男らしき生をなさんとするが故のみ。在天願くは我を鞭撻して、我が終生を通じて曖昧ならざる立場に立ち、永遠に築かれんとする礎に對して、一塊の石を寄與するの榮を得せしめ給はん事を。〔編者曰く、この日の日記は、記事より見て一九〇七年のものではあるまいと思ふが、同一手帳の後部にあるから、便宜上此處に入れおく〕

第十二卷

一九〇八年（明治四十一年）（特に斷り書なきものは原文英文）

一月二十一日。（以下二十七日まで邦文）この日記の今日より始まれる如く、我が生涯の今日より始まるものならば、如何に面白からまし。我が心は今甚だ和かなり。されども我には過去ありて我を離れず。悲痛は、この紙の上に筆執れる今の我が身の上にはあらずして、筆執りつゝも離れず思ひ出でらるゝ過去てふものゝ惡戲なるぞ恨めしき。

去年四月十四日、伊豫丸の甲板を下り小舟に搖られて神戸なる埠頭に立ち、父と直良君とに面を合はせたる時より、我は再び日本の地を踏む可き人となりぬ。九月一日には兵營に入りて、その夏北海道の旅路に得たる諸種の回想を、飾りなき木床の夢に結ぶ身となりぬ、――留萠なる稚き盲按摩、――札幌なる至誠堂の跡、――山形屋のたけ、――瀨川すゑ子の成れの果、――自殺を企てゝ基督信徒となりし盲按摩、――札幌なる舊友が身の上、――兵營にある間に起りし結婚の問題は、我が身に癒す可からざる深き疵を與へぬ。森本君の山角靜子氏との結婚も、亦深き印象を殘しぬ。安子の身の上、志賀の悲劇、其他思ひ設けざる事共は、我が兵營生活の間に起りぬ。十一月末日に兵營を出でたり、十二月に至りては我が札幌農科大學に職を奉ずべき事定りぬ。"Fathers and Sons" の譯は此間に大半稿を成せり。十二月の下旬に河野信子は小柳津氏に嫁ぐべき約整ひぬ。我が東京を去りて、人繁からぬ所に住むべき必要は愈〻迫り來りぬ。一月三日の夜、我は東京を去れり。胸を射られし鳩は、その美しき翼もてその疵を裹みかくすと云ふに、我もこれに劣らじと思ひ定めぬ。夜汽車の淋しき味は、獨逸を旅せる時、壬生馬と共にしみじみ味ひ知りぬ。靑森に着せし時、日は暮れて、雪は街上に堆かりき。翌日船は搖ぎ少

く、雪の海原を横切りて、六日の曉明三時半、半ば凍れる室蘭の港に入りぬ。滿天の星宿、水岸の燈火、黑き水に輝きて、誰やらが成せし etching の如しと、襟かき合はしたゝ厚外套の中に思ひぬ。其の夕には札幌なり。森本君は我々迎へんがために、五度停車場に到れりと聞きて、凡ての顧慮をかいやり捨てゝ北六條西一丁目なるその家に入りしは、やがて夕の六時なりしなるべし。稍面やせて見ゆる彼の妻は美しう余を迎へぬ。

我は英語の講師として學長主事を兼ぬる身となりぬ。偖て今日までは唯面白く暮し來りしが。

森本君の若き妻は病みて十六日流產せり。彼の實母は十九日茅ヶ崎に永眠せり。

何をなす可きやと云へる謎は、一瞬每に我が骨髓に迫る。我が齡を數へ見んも愚かなる業なり。何をなす可きや。昨日より稍々弱き風邪に冒されぬ。朝、學校に出でて、四時間學生に Carlyle の Hero-worship と Lord— の "Science" と云へる essay とを敎ゆ。靑年に對して授業する時のみけ、我は我が力の大部分を暴露し得るなり。午後學長の訓示ありとて出校し、夜は Kropotkin の "Rusian Literature" を味讀して、俄かに成就す可き札幌獨立敎會の歷史の執筆を忽せにしぬ。

煙筒の唆みに溶けたる雪水の垂滴、家根を漏りて天井に落ち、更に飛沫となりて熱したる煖爐の上に落つる音、時を我より奪ひ去らんとする魔の聲の如し。余は今日早く寢ぬ可し。

一月二十二日。水曜。昨日より降り出でたる雪は、霏々として今日も休まず。衣にこぼるゝを見れば、宛ら霰の如きが、小さき粒となりて、風なきに上より下へ、上より下へと降り來るなり。その上より下へ降り來るものを、目も放たず眺め入れば、身は亦其雪粉に誘はれて上より下へ、やがて九仭の底深く沈み行くらん心地す可し。

今日の中に書き終る可き獨立敎會歷史の材料を取り擴げて朝より稿を起す。興俄かに乘じ來りて、夕の五時に至る迄晝食の外は殆ど机を離れず。我は凡ての敎會を愛せず。現存する敎會の制度なるものは、既に我等が溫情を唆むるに足る所ならざるに至りぬ。羅馬法王が維持しつゝある敎會も、Luther が創立せる敎會もその根本の aspect に於ては、誠に大差ある事なけん。現存の敎會に代りて起る可きもの、即ち既生の人々が現存の敎會によりて得來りし安慰と奬勵とは、我等果して何

に於いて求め得べきや切に討究すべき問題なるべしと雖も、少くとも現存の教會は、如何に改良進歩するとも、遂に今後に生るゝgenerationの要求を滿足せしむる事は不可能事なるべし。我は一日も早く此教會の束縛より脫逸せんことを希うて止まず。我は遠からざるにこれを宮部、内村の兩氏に計るべし。されども獨立教會がその困苦の中に苦悶しつゝあるを見て、これを捨つるは實に忍び難きものあり。我は彼女に貢獻することの餘りに少なかりしを恥づ。我は彼女に何物か彼女の生存を强固ならしむるものを與へて彼の教會と緣を絕たん事を希ふ。

夜、教會に到りて我が草稿を朗讀す。

歸途に就きしは十時半なりしなるべし。雪は尙ほ霏々として我を九仭の底に誘ひ行かんとしつゝありき。この雪の爲めに各地との交通は再び途絕えたるならん。

寢ねてより我が著作の事など思ひ續く。Turgenievは譯し終りたる部分を淸書せんか。又は後半の飜譯を始めんか。我が歐洲紀行は何と云ふ文字もて筆を起すべき。

「我が船は、君よ、イスキヤ、アマルフヒの山々を、双眸の中に收め得べきあたりを馳せつゝあり。船跡の穩かなる朝の海に、白き線引きたるが如きを顧みて、九日の船旅の跡思ひめぐらす暇に、眼は再び前途を望み見て、彼處を船の一轉せし時現はれ出づべきネープルスの風景は如何なるべきなど……」其の中に夢となりぬ。

一月二十三日。木曜。我は未だ尙ほ中有に懸れり。身を定めて善かれ惡しかれ心すがく\しくなる迄は、我が心は到底休安を知る事な。この休安を知る事なき我が心こそ尊けれ。これ神が余に與へ給ひし恩惠の中最大なるものなり。休安は或は遂に來る事なからん。されども休安を得んとする心も亦失はるゝ事あらじ。こを失ひ去らんには我は自殺すべし。休安なき人生は悲痛なり。然り、この意に於いて人は悲哀の人なり。人生は悲哀なり。されども休安を得んと勉むる心は何と言ひ定むべきや。或る者はその取る能はざるものを追ふを以て、可憐悲痛の事とすべし。されども默して追はざるの悲哀の心に比ぶれば、我は働ける動ける悲哀を選ぶを敢てせざる能はず。

雪は止みて空は寒く冴えぬ。出校して Socialism と Communism の區別を講究す。會食會あり。會中宮部氏 Mendel 氏の事を語る。氏は crossing によりて、種の改良退化に對し一新說を起し、現時の學界を風靡せるものなりとぞ。余は今日に至るまで、そを知らざりき。余はそを學ばざる可からず。

安子並びに信子より手紙と端書とを得。

夜、社會主義研究會に臨み、Ruskin の "Unto This Last" の講義をなす。逢阪君、社會主義と基督敎の關係を語る。

靜子君夜に入りて再び宜しからず。彼女を憐れむ。

一月二十四日。金曜。又雪となりぬ。出校して一時間土木工科に授業す。三時頃迄 Library にありて家に歸り來れば、佐山君より來書ありて、その實父の死を報じ來る。又死報！

夜、逢阪君來訪。敎會に於ける態度に就き、祈禱に就き、その他宗敎上の諸件に對して談話。余は彼の性格が斯くの如く mould せられしを憐れむの外を知らず。それより直ちに佐山氏を訪ふ。通夜の人多し。原氏亦訪ね來り既往の事ども語り合ひて話柄の盡くる時を知らず。原氏が基督敎に對し信仰を養成せる事なども靜談の中にありき。彼が胸中には驚くべき火潜めり。家に歸り着きしは夜一時頃なりしなるべし。小休みなく降りしきる雪の中を歸る。直ちに就寢。途を行くに林檎の如き小兒少女に遇ふ事多し。彼等可憐にして足をとゞめ見送るに足る。

一月二十五日。土曜。雪は依然として降りしきれり。

朝、愛子及び安子に書を認む。朝 Speaker's Garlands を讀む。又農會に長屋氏を訪うて東北農大學科設立の寄附金をなす。後出校し農藝科の生徒に倫理講話をなす。「倫理講話を聞くの用意」と云ふ題なりき。倫理を聞くは倫理學を聽くとその意義全然相異れる事、倫理とは講者の經驗（讀書境遇修養より得たる）の說話なる事、かゝる意義に於いて、倫理を聞かんとするものは、眞劍ならざるべからざる事、reasoning power を善用して講者の云ふ所を批判せざるべからざる事、批評は批評に止まらず、その批判より歸納し得たる事實を以て、これを自己の ego に問ひ、以てその中に反響を求むべき等是れなり。

午後、佐山氏の葬儀に會す。人々と共に棺を豐平橋まで送る。毛の外套着たる人ありしが、余は彼を美しき男子なりと思ひぬ。徐歩しつゝ死に就きて種々なる事思ひめぐらす。不圖我が身の死ぬる樣など思ひ出づ。痩せたる手を以て、愛する人の手を握りつゝ淋しくほゝゑむ面影など浮ぶ。家に歸りしは三時。

此日朝、圖書館に於いて、秦氏が齎し歸れる壬生馬の畫七枚を得たり。僅かなる時間を惜みて、忙しく開き見たる喜悦は譬ふるに物なかりき。恐らくは彼の畫を解し、彼の畫を憐れみ、彼の畫を愛するに於いて、其情最も强きもの余に如けるはなからん。佐山氏の葬式より歸りて後も、再びこれを靜子氏の病床の傍に披き見て共に賞翫す。壬生馬が去夏瑞西の山中に彷徨して、畫板に對しつゝ、例の習癖なる眉をひそめて景色を見やる面影、宛らに我に逼るが如きを覺えて堪ふ可からず。遂に直ちに端書を裁して彼に送る。

四時より同窓倶樂部にカメラ會集合あり。學長、高岡氏及び學生數人骨牌など弄び、後には消費組合、女子勞働問題など論ぜらる。十時歸宅、森本君と二人して端書を Asa Wing 及び Sanderlin に寄す。

我は寢ねんとし燈は暗し。

四十程になりて、死を熱實に思ひ見るべき齡の來るの時を思ふ。若き中に勉めずば悔多からまし。我は斷じて時間を消費することなかる可し。

今日倫理講話に要する書を求めに、圖書館の圖書室に入りしに宮部先生あり。余を階上に招き余の爲めに婚姻の事に就き懇々と話さる。余も彼に余が是迄の經歷を打明けたり。先生は余に內田氏の第三女を娶らば如何と云はる。余は決心して其周旋を彼に依託せり。成るも悲しからず。成らざるも亦悲しからず。余は又この序に彼に語るに、余が宗教上に關する經過を以てせり。かくて余が心は稍〻安きを得たり。余は余の抱懷せる所を人皆共に知らん事を希ふ。

一月二十六日。 日曜。昨日より、家には下女あらずなりたれば、余が起床前、余の爲めにストーブを焚きくるゝものなし（余は贅澤なる事をしつゝありしなり）。起床して直ちに再び壬生馬の畫に對す。曾遊のことも思へば、彼自身が上の事も思

ひて、余自ら余の何處に住まへるかを忘れ果てたり。食物の用意などして朝餐を終へし時は、教會なる日曜學校始業の時既に過ぎたり。急ぎ結束して之れに赴く。余は强て依賴せられて其の學校長となれるなり。業果てゝ彼等の歌ふ歌を聞きて思はず涙下る。彼等の喉に貯へられたる天上のそれの如き美聲は、余如何にもがくとも再び發する事能はず。彼等が頰邊の紅も亦我に取りては、人に嫁ぎたる戀人の如し。

竹崎氏の說教平凡。禮拜後、總會あり。余は常議員に擧げらる。恥づる事甚し。

歸宅後暫時、逢阪君來る。彼に依賴して獨立教會略歷を淨寫す。夕食後 gramaphone を聞きて感に打たる。美しき樂を聞かざる事抑も幾日ぞ。樂より慰藉を得る機會は、此の地にありては皆無となりぬ。自らの燈に自ら油を注がずば、余は平板の地に投げ出さる可し。

夜 “Science and Poetry” を讀む。一日空晴れ盡しぬ。今正に十一時、橇の鈴の音常程には寒からず。

一月二十七日。月曜。稍ゝ雪。靜子君の病漸く怠る。朝出校して四時間教授し、事務所に東京よりの荷を受け取りて家に歸り、午後は明日獨立教會に朗讀す可き教會歷史を書き、並に家及び壬生馬の畫を送り來りし秦氏に手紙を書く。夜も亦書き續く。又蓄音器を聞きて種々なる感想にうたる。美しき音樂を聞き度きの念燃ゆるが如し。

一月二十八日。火曜。時々雪。

朝出校。ホイットマンの「カーライル論」を讀む。甚だ面白い。午後、臺所仕事（女中がこの數日ゐないものだから）、荷物を解いて過した。それから、我々の教會史の原稿を書いた。

リリイ・バシュリンから葉書が來た。グスタブ・ガンパーとブーフマンは、今羅馬にあり、その爲めに彼女は非常に淋しいと云つて來てゐる。憐れな少女よ！

夜、獨立教會の二十五年祭が行はれた。新渡戶氏が司會した。當夜招待されて來てゐる他派の牧師達の氣を害ふのは覺悟して、教會史を讀んだ。確かに動搖はあつたが、幸にも破裂しなかつた。自作の讃美歌は次の通りである。（以下八行邦文）

一、稜威と榮光を　我が天つ父に
　みながら捧ぐる　今日をことぶけよ
二、天地創りし　其の御手の指に
　かよわき我等も　敎へられたるぞ
三、恐るな荒野も　春には花咲く
　義しき希望の　唯朽ち果てめや
四、唯朽ち果てめや　義しき希望は
　よろこびの聲を　天地に滿てよ

佐藤學長、ローランド氏、田中氏(札幌在住の牧師を代表して)、祝賀演說をする。

獨立教會ー　汝は、日本に於ける數百の教會の中にあつて、「思想及び金錢上の獨立不羈、凡ての宗派を合して一團とする("independence of thonght and money, fusion of all sects into one whole mass")」といふ汝の熱烈に擁護し來れる主義を以て赫赫と立つてゐる。余は汝が各種の艱難、試煉に堪へ來たれるその忍耐を賞嘆せざるを得ない。然し、余に取りては、汝の生命も終りを告げた如く見える。余の考へでは、今日まで使はれて來た意味に於ける教會は、最早必要ではないのである。將來の教會は更に廣く、換言すれば、その中に凡ての宗教を含むものでなければならない。凡ての宗教をして、それらの禮拜及び說教の場所として一堂を持たしめ、その壇より、それら宗教中最もよしと思はるゝものを叫ばしめよ。この理性の時代に於て、宗教とても、世間一般の批評に超越するか、又はその境外にあることは出來ない。人をして、彼等の宗教として最も適するものを、多くの中より選ばしめよ。對抗を避け、そしてその信者のみ傲然として何の益があらうぞ。凡ての宗教を公然と相競はしめよ。時代の要求を滿す眞の宗教は、斯くする事によつて生れ出るであらう。余の心からの願ひは獨立教會がその先驅をなすことである。

歸宅して神に對する强い感謝の情に打たれ、涙を抑へることが出來なかつた。父なる神よ、爲し得べくんば、この貧しき魂を用ひて、あなたの御心を履み行ふ人々の助けとなさしめ給へ。

一月二十九日。水曜。少し暖かになつた。かすかながらも、待たるゝ春のしるしであらうか。此の北地の長い雪多い冬についで來るかゞやかしき春よ！ 柔い草、雲雀の歌、小麥畑の畦、家畜の聲々、子供等の笑聲――を思つただけでも、喜ばしいときめきが心臟を脈打つて流れる樣な心持がする。ともあれ、人間は暖かさを求めるものである。

朝、荷物を片づけるので忙しかつた。森本は親切にも、彼の本箱を半分私に提供してくれた。それに余は自分の愛讀の書を詰め、そして大滿足で眺め入つた。第一段はトルストイ及びイブセンの作品とロシア小說。第二段はカーライルの作品、ゲーテとカーライルの間の書簡集、ラスキンの「近世畫家傳」、クロポトキンの「ロシア文學」及びその他。第三段は、バイロン、ウォーズウォース、ホイットマン、シェリイ、セルヴァンテス、ダンテ(「新生」)、バックルの「英國史」、ギゾーの「政治的(ポリテイカル)罪惡(クライム)」、ミシエルの「國民」及びその他。第四段は、聖オーガスチン、ルナン、「ブルーノー傳」、ブランデスの「イブセン」「シエクスピア」及び政治、文學、歷史方面の日本の書。第五段は、「ジョージ・フホックス傳」、スペンサーの「倫理及び心理學說」、パテンの「英國思想の發達」、プラトーの「リパブリック」、インガーソールの演說集、ゾラの「眞理」、ホガツラー(Foggazalo)の「女性」、ゴールキイの「物語」等々。何とまあごつちやなことであらう。これは正に、余の精神生活の狀態である。正しく言へば、余は錨を下ろすべき港を持つて居ないのだ。今も尙ほ、私は疑ひつゝあり、そして眞理を求める貧しく憐れな乞食に過ぎないのだ。

午後、今晚の獨立教會での演說の用意にのみ時間を費してしまつた。余は熱心に讀んだが、得る所實に少なく、余の知識乏しく、確信少ないことを、結局知らされたのだ。實に、貧しく憐れなものだ！ 然し、余と全然同じ樣に脈うつ若き時代の靑年の耳に、訴へる所少なくないとは誰が云ひ得よう。

夜、教會で演說。演題「疑惑」。眞摯と同情を以て約一時間話す。然し、余の拙なき舌は、自己の心中の感情に調子を合

はし得なかつた。たゞ吃るのみ。畢竟、余は舌の人ではない。竹崎氏も亦、遙かに流暢な辯をふるつた。彼の演題は「生命の終極」と云ふものであつた。聽衆約八十五人。

學生の大石が家まで隨いて來た。その時は曇つてはゐたが、大して寒くはなかつた。蓄音器、雪溶けの滴りおちる音。これから、寢るまでトルストイの論文を讀まう。信子からの葉書、洗練された英語で書いてある。いとしい人！だつて！そんな愚かな氣まぐれ事をするには、世間と言ふものは冷たすぎるのさ。そんな事は口にしないで、高々と笑ふんだ。

一月三十日。木曜。晴天。大分暖い。朝、在宅。逢阪氏來訪。大した話ではない。午後森本と、余の小さな僧庵(クロイスター)を飾る爲にカーテン、テーブル・クロース、その他のものを買ひに出かける。僧庵！　余の庵は入口の左側にある。家と云ふのは吉井敎授の元の住居で、去年の秋森本が借りたのである。廣い庭で圍まれてゐて、今は雪で被はれ、たゞ所々に地肌を見せてゐるだけで、松の木と苅り込んだ灌木のある眞の日本風の庭である。その家は監獄の向ひ側にあり、出入りに見上げる度に余の興味をそゝる。家の兩隣りは四人の爲めの辨當屋である。(その内の一軒の名は「無罪屋」！)家の右側のは食堂と臺所に用ひられてゐる。庭に向いた二つの部屋には森本家族がゐる。余の庵には、街の方(北側)に開いた窓があり、床の間と違ひ棚がある。今、違ひ棚は我々の本箱の役目をしてゐて、その上に、ミレーの「晩鐘」がかけてある。余の書机は窓の側にあり、中判の若いゲーテの寫眞、ローマのデラ・テルム博物館のフユリア、ポムペイの一レストラントの後庭で摘んだ花と一束にしたスイスの高山の花の一瓶などの寫眞で飾つてある。壁の上には、グス、ガムパー、壬生馬、ワッツの繪が掛つてゐる。裝飾は十分だ！　余はこれで心から滿足してゐる。余に取つて最もいゝ裝飾品は、余を過去に呼び戻し、差し迫る苦痛を忘れしめる物である。悲しい、甘い憶ひ出の力で。余の庵、否、余の天國を見よ。力は此處より生れるであらう。**此處**に一人の男住み、彼は人間の正しき評價にふさはしい者となるであらう。

夕方、原が訪ねて來た。彼は、自分のキリスト教に近づいたのは余の影響であることを告げて、余を喜ばさうとして**ゐる**やうだ。又、彼は、北方文學、特にイブセンに興味を持つてゐる樣に見える。然し、不幸にして、何としたわけか、余の**心**

持は彼の心境と一致しない樣に思はれる。彼とのこの交際の結果がどうなるか、考へて見よう。何ともいへぬ余の恐怖が、事實となつて現はれない樣に、衷心切望する。

夜、教會で親睦會、皆な余を喜んで迎へてくれた。だから余も出席しなければならなかつたのだ。時は貴い。失ふ勿れ！

今日、トルストイの「ギィ・ド・モウパッサン論」を興味深く讀んだ。余がトルストイを羨ましく思ふのは、彼の生活目的の單純、明白なことである。彼は自己の確固たる基礎を持ち、彼の意見は悉くそれから迸り出る。モウパッサン論は特にトルストイらしいものゝ一つで、つまらない摸倣、僞瞞を高く超越してゐる。この點が、彼の最も氣高い點なのである。彼の議論には、エマソンが巧みに言ひ表はした樣に、自己の周圍に世界を廻轉せしめる活力と潑剌たる目的とがある。凡ての強き人間は此の如くしなければならない。

一月三十一日。金曜。暖、大分暖か。學校で四時間授業。機械科で厭な惡戯をされて、學生を烈しく叱つた。夕方、社會主義研究の週會。キリスト教と社會問題との關係を論じ合つた。

二月一日。土曜。曇。小雪。再び烈しい寒さ。十一時半より十二時半までの、森本の倫理學の講義を聞く爲めに學校に行く。それから歸宅。ヘンリイ・ゼイムズの「ホーソン傳」を讀む。薪が乏しかつたので、小さい一室に集つてゐねばならなかつた。夜、遠友夜學校で話す。余は、オスカー・ワイルドの例へ話を話した。そこで、瀨川すゑに會ふ。彼女は今や三歳の兒の母にて、その兒の父は一水兵として、海軍軍務に服してゐるとのこと。現在の夫と結婚した如何はしい行爲を、私に向つて懺悔する溫順さを見つめて居たら憐れを催して來たので、少し勵ます言葉を言つてやつた。可哀さうなすゑ！　汝は人生の最も辛い運命に會はねばならぬ樣に生れついたものなのだ。汝は思ひに沈んではゐるが、情熱の溢れんばかりな顏がそれを明かに告げてゐる。余は汝を憐れむ。然し、人間の最大特權、即ち人生のどん底にわけ入り、最も深い悲しみ、さては高い喜びの水晶の樣な滴りを味ひ得るは、汝の特權なのである。余は汝が前者を飮むよう運命づけられてゐるために汝を憐れむ。されど、何も味はず、その生涯に不磨の跡を殘しもせずに、一生を過し去るよりは、せめて悲しみでも味ふ方が

どれ程良いか解らない。近く再會を約して此處を去つた。何と言ふ妙な余の性質だらう！　いかに強い印象が余を捕へたか、若し余が眞面目であるならば、生きてゐる限り、否、魂の存續する限り、この運命に惠まれない少女のことを忘れまい。

歸つて見ると、森本、靜子、高松が愉快に話をしてゐた。直に余もその仲間に入つた。話はあちこちに飛び、揚句は我々の洋行中の憶ひ出となつた。我々は心から笑つた。

二月二日。日曜。曇。暖。日曜學校に出席し、幼ない子供等と遊ぶ。竹崎氏の說敎は、特に感動させるものとは聞えなかつた。勤行が濟んでから、植物園の後方を散歩。彼處をその昔屢〻散歩した頃から、何と言ふ大きな變化があつたことだらう。午後、ホーソン傳を讀んで過す。

返事すべき文債が多い。特に、內村氏、シヤフハウゼンでの友人達、壬生馬など。先日宮部博士は手紙と、內田氏の令孃の寫眞を、私に渡した。午後その手紙を讀む。彼女の人格、性質を全く知らないのだが、何となく、大變彼女と結婚したい氣持になつてゐる。然し、彼女は明かに余には若か過ぎる。あゝ、誰も余の結婚問題に關心を持たず、その問題を余一人に任せておいてくれたらどんなに有難いだらう。さうすれば結婚など考へもせず、一生孤獨で暮すだらうに。どうしてかうも甚しく女性が嫌ひなのだらう。女性の內で最も優美從順なものを選び出しても、尙其處では、虛榮心と狹量のいやな臭ひがぷん〱する。女の眞心とはその利己主義を意味してゐるのだ。もし女に黃金と名譽を與へておいて、そして諸君自らが貧しく、人に知られずにあるとせよ。彼女は殆ど躊躇なく、諸君を踏みつけ、諸君を嘲弄するであらう。

二月三日。月曜。〔以下一六八頁二行まで邦文〕

今夕瀨川すゑ女訪ひ來りぬ。余は夕食を認むる迄そを知らざりし。

食物の惡かりし爲め今も小兒の如く小さき彼女は、身を屈めて我が室に入り來りぬ。余は彼女の姿を見て、我が室の餘りに贅澤なるを自ら恥ぢたり。彼女は裁判官の前に引き出されたる罪囚の如く室の一隅にうづくまりぬ。余の哀情は痛く動けり。されどもそれと同時に憤怒の心も亦動けり。何が故に公に結婚せざりしかを痛く責め其の囘答を求めたれども、彼女は

は單に首を垂れたるまゝ一言の答ふる處なかりき。重しと見ゆる許り束ねたる黑髮は、彼女が情の鋭く濃かなるを語り顔なり。一昨日の日記に余が書ける如く、彼女は生れ得て熱き情を稟けたり。冷かなる心もては、彼女の一擧一動は宛ら意義なき盲動の如く見らる可し。されども熱情もて此の世に生れたるものにとりては、彼女の悲しかりし半生涯は如何に美しく悲しく哀れなるものたるぞ。思へ、彼女は塵の中に生れたり。彼女の父は酒に亂れて、其の兒孩が儲け來る凡ての金錢を蕩盡し去るなり。彼女に些かなる慰藉をだに與へ得るものとては一つだになかりき。而して彼女の天性は情厚く生れたれば、彼女は常人以上に貧困と苦痛と悲哀とを感ずるなり。而して切實に彼女が生命の空虛を感ずるなり。余が與へし一襲の古衣が如何に彼女に深き印象を與へたるかを思へ。而して彼女はかゝる虛白摸索の餘地なき生活を續けて、最も物に感じ易き妙齡に達したるなり。彼女が殘虐なる戀の虜となりしは誠にその處ならずや。壓伏せられて外面氷の如くありし彼女の熱意は、嘗て知らざりし冲天の歡喜にて彼女の全身を燒くに至りしなり。彼女は其の父母に謀る事なく、其の師に告ぐる事なく、社會の擯斥朋輩の譏謗我が身の將來の運命をだに顧る事なく、其の愛したる人と直ちに肉の交りをなせり。嗚呼、何ぞ其の心の憐れにして其の事の美なるや。かくて彼女は自ら求めて悲慘なる境遇に陷りぬ。而して彼女は其の夢みし處の實現せるを以つて、之れを凡ての苦痛譏謗に更へて驚かざりき。憐れなる日蔭者は此の間に於いて一女子を生めり。其の女子は私生兒として母にも勝れる日蔭者なれども、彼女にとりてかゝる事は何かあらん。其の女子の誕生は、誕生せる女子の產聲は彼女にとりては、見よ、彼女の行爲を Justify する聲なり。世界の罵詈を罵りかへす勝利の叫びなり。余はかく思ひ來りて殆んど涙の瞼に溢れ來るを禁じ能はざりき。余が心は自ら讃美する許り寛大となりて、彼女の行末に就いて心より彼女の衷情に訴へたりしかば、彼女は急に涙に破れぬ。憐れむべき其の涙よ。其の涙の一粒々々に如何なる意味の含まれたるやは、神の外に知る人あらじ。彼女は心ゆく許り打ち泣きて歸り去れり。余は彼女をして、心ゆく許り泣き得るの機會を與へ得たるを、神に感謝せざる能はず。彼女の歸り去れる後、余は切實に彼女の半生を羨みぬ。愛する人を心より愛して、無情なる世を嘲り返したる彼女は、羨むに堪へたらずや。思へば我は甲斐なく生れ來れるかな。自ら思はざるに空しき世の繩目に縛せられ

て、自若として獨り行くの男らしさを失ひ去りぬ。

嗚呼、空しきかな、動かす可からざる「我」なき此の身！　尙ほ汝の心に鞭たざる可けんや。

二月六日。木曜。晴。曖。ベルタ・ガムパーが十月三日に死んだと云ふ通知を受けたので、頭痛を覺えた。彼女の兩親が私と壬生馬を招待してくれたあの宵に、ショパンを美しく彈いたのを私はまざ〳〵と覺えてゐる。それは薄暗い夕で、雪は戸外に降りしきり、我々はドレスデンを去る用意で忙しかつた。僅かの時間をさいて彼女はショパン獨自のあの思ひに沈む憂鬱な調子を迸り出す曲を奏した。曲に耳傾けながら、私はやつと涙を抑へ得たのだつた。彼女は日々の仕事に細かい心を使ふ、上品な少女であつた。物靜かな彼女の氣品は、人心を直ちに引きつけるであらう。その時以來、彼女は度々私に手紙をくれ、又私も屢〻便りをおくつた。彼女は最近の手紙では、去年の夏瑞西で一緒に夏を送つた兄の勸めで、再び繪筆を採る決心をしたと言ふ、その繪を二三枚送りませうと約束したのだつた。それなのに、彼女はその約を果さない前に、此の世を去つてしまつた。死は何と不思議な祕密を解けと、我々に提供するのだらう。彼女はこの塵の世を離れた時まだ二十九歲であつたのだ。

二月七日。金曜。午後雪。登校、四時間授業した。「人生と花」が今着いた。これを、就任二十五年を祝はうとしてゐられる宮部、南兩敎授に贈呈するつもりだ。余は同書をとび〳〵に讀んだが、恥かしい事には、著者の主張しようとしてゐることが余には理解出來なかつた。

余は最近何か特殊研究で身を立てたいと特に感じてゐる。余は既に特殊研究の基礎は積んで來たと思つてゐる。次に採るべき手段は、當然余に最も興味ある分野を、更に深く研究する仕事に身を捧ぐることである。よい機會が有り次第、ロシアに行つて、ロシアの思想及び文學の傾向を詳しく研究したいと云ふ妄想が、しげ〳〵起きる。出來たら、どんなに好いだらう。とにかく、日々の仕事を孜々と努めるものには、道は開けて來るであらう。余は出來る限り廣く讀まなければならない。時々、余の將來が、夢の中で何と燦然と輝き渡ることだらう！　健康もある、魂もある、獻心もある、根深い野心もある。

さうして余は何が出來る事であらう。萬望成就！　歡喜！　何故の喜び？　それは、それは汝の眞の才能を實證し得たし、そしていかなる程度まで、汝の個性の要求を、恐れなく確信して擴充し得るかの證據となるであらう。カーライルが巧みに云つた如く、「余は一個の男性に非ずとするも、少くも一人の人間ではある。」余も亦、自己のみのものであり、他人の侵入を一歩も許さない王國の王座に自己を確立する權利を獲るであらう。

二月八日。土曜。雪。登校、圖書館で、「シイザー傳」を讀む。學長の倫理學の講義に出席。彼は最近ヴントを研究してゐる樣に見える。彼の道德標準の觀念は進化論的である。歸宅後、森本と少々入用品を買ひに出た。岡博士の「思想史」、昇曙夢の「ロシア文學概說」を買つた。夜、前者を讀んだ。各時代の急進論者に親しみ深いところから見ると、著者は確かに興味のある人物に相違ない。熱海にゐる父上より葉書來る。夜、深川、大內及びその他にもう一人來客。深川は前途有望の靑年の樣に思つてゐる。彼のかゞやく眼は、始終夢みてゐる樣で、彼の言葉には深味がある。もし彼の研究が熱心と、正しい指導の下に續けられるならば、彼は過去に達し得なかつた何物かを成し得るであらう。

二月九日。日曜。朝、教會。日曜學校の幼い子供達と遊ぶ。竹崎の說教。午後は教會の控室で過した。そこは、甚だ靜かで人氣なく、余は近頃珍しく孤獨を樂しむを得た。時々、人の交はりを離れて、沈默と瞑想に浸る事は何とよいことであらう。余は長い事閉ぢこめておいた淚を、溢れるまゝに流した。「聖書之硏究」を讀む。沈思した。嚴肅な數時間であつた。夕、竹崎夫妻の夕飯に招かれた。彼等は二つの小さい室から成つてゐる牧師館に住んでゐる。我々が丁度、罪と云ふ問題について論じ合つてゐる時に、訪客があつた。ところがその客が原であつたのだ。竹崎氏の神學上の立場は非常に都合のいゝものである。原が夕の禮拜に說教をした。彼の說く所は明かに、十分に洗練されてはゐないものであつた。それ故に、胸中の思想を表現しようと彼が努力しても、彼の說教は、感銘と明白さを缺いてゐた。

さうだ、本當に一人で、好きなことを考へ、世俗の騷ぎに亂されずに居ることは、大きな慰安である。それは新しい生命力を與へ、人をして一歩理想に向つて步を進めしめるものである。風もなく靜かなる日に蒔かれたる種は幸ひなるかな。そ

れは、適はしき地に落ちる。それは安全である。さうなつたら、風でも、雨でも、他の何でも來るがいゝ。それはたゞ、種には惠みとなるばかりだ。

岩倉夫人に、大學に勉强してゐる子息のことに就いて、手紙を書く。家に葉書、他に一通やゐに。

二月十日。 月曜。登校、二時間教授。再び、マックス・ノルドーの「逆說（パラドックス）」を讀む。その「愛の博物學」は何時讀んでも面白い。直良から手紙、愛子から菓子、壬生馬とティルディから葉書。午後、ホーソンの「古い牧師館の苔」を讀む。この作者は私の趣味には餘り合はない。彼は物語作者としては餘りに現實に卽し、現實的の作をなすには餘りに幻想的である樣に思はれる。アーヴイングは、筆を執れば常に、終始幻想的夢幻的であるので、彼が、「失戀」、「ウエストミンスター・アベー」の樣な日常平凡の生活を書けば、凡て夢幻的になるのである。お伽噺やその種のものでは誰も獨逸の作者に及ばない樣に見える。

直良に手紙、ティルディと家に葉書を書く。いとはしいものは女性だ！

二月十一日。 火曜。紀元節。曇。寒。〔省略〕

二月十二日。 水曜。早朝より雪、夜まで續く。

學校に行き、「リテラリイ・ダイジェスト」の最近號を讀む。その中より次の如き詩を選び出す。

Dark, Dark, Seas and Lands.

(by Herbert Trench)

Dark, dark, the seas and lands
Between us lie!
And to taunt these banished hands
Hang mountain high;

Yet to-night your voice from home
Most strange, and clear,
Over the gulfs hath come
Glorious near!

Long since, desert's heat
I swooned, I fell,
To find your love at my feet
Like the desert's well,
Now loftier and more profound
In (?) the dawn at sea, 〔原文ニ？印アリ〕
Your spirit, like heavenly sound,
Delivers me!

「シイザー傳」を讀む。午後、丁酉倫理會雜誌。壬生馬より手紙。よく呉れた、お前は隨分長い間便りをしなかつたぢやないか。彼が倚やすに對して深い愛情を持つてゐることを知つて、大變に慰められた。彼がどんな境遇の下に苦しんでゐるかをよく知つてゐる自分に取つては、彼の言々句々は心に迫るものがある。特にその英夫への手紙は、まるで余自身書いた樣にひびく。ロシア文學の研究の樂しい希望、ロシア語によつて、ヨーロッパ文明を檢討する便法、私と彼とは、知らず／＼に同一の道を歩んでゐる樣に、我々の傾向は同じ方向に向つてゐる樣に思はれる。彼が、人間の獨自性、即ち自我そのものと

成るべき天職に、大なる價値を認めて居る事を知るのは、甚だ愉快な事である。彼は云つてゐる。「名聲ある人の眞似をするよりは、獨創性のある泥棒になつた方がいゝ」と。これこそ、私が先きに數頁を費して書いたことである。

夕方、教會で委員會。色々論じあつたが、私に關係のあることは、殆どなかつた。

二月十三日。木曜。殆ど終日中雪。學校に行く頃になつて、空は丁度晴れ初めてゐた。美しい太陽の光線が、大地、家、樹その他有りとあるものを被つて、降り積んだばかりの雪の上にかゞやいてゐた。それはおごそかな眺めで、私は、讃嘆の餘り立ちつくさずには居られなかつた。一時間授業。

我々の教會の牧師其他少數の人々に送るべき手紙の封筒を書く。のぶからの葉書と手紙、英夫から手紙が來てゐた。彼女は幾度も便りを寄越して、私を慰め樣と大變努めてゐる。彼女は子供らしい冗談で、自分の事を可笑しく書いてそれを讀む私を慰めようとしてゐる。私は彼女を可愛さうに思ふ。彼女はほんたうの子供であるに過ぎない。彼女が、私の立場を十分に理解し、私に對して適はしい同情を抱く事が出來るやうになるには、まだ大分時がかゝる。私の探してゐるもの――流れる樣なこだはりのない愛情を、彼女の中に見出せないのは殘念である。彼女は未だ女でもないし、否乙女ですらもない。彼女はもつと多く、苦い盃を干させられるにちがひない。この點で、私は彼女を憐れむ。

英夫の手紙は非常に氣がきいてゐる。

夜、社會主義研究會。私はアメリカ滯在中の手工業の經驗について語つた。彼等に大いに興味を與へた。

今日から又ゴールキイを讀み始めた。實生活を知り盡くしてゐるのには感心した。

平凡――人は平凡と考へられることを、輕視しがちである。人々は、それは睡氣を催させるもの、偉大さと何等相通ずるものがないと考へる。然し、實際は、偉大なる者を驅つて、成功に向はしめるのは、實に平凡そのものなのである。或者が何か異常なものを見出したから、その人が偉大なる仕事を成就するであらうと思ふならば、それは痛々しい誤謬である。異常

なものを動かさうと考へてゐる人の手で、異常なものゝ動かせるものではない。異常なものと思へる境遇よりも、身を高めて、異常なものと思はれるものを、平々凡々の事物に還元せねばならない。コロンバスに取つて大陸の發見は、後に彼が一撮みの鹽の上に卵を逆さにして立てゝ見せた樣に甚だ普通なことであり、ニユートンが引力の法則を發見したのも同樣、決して不意の成功ではなかつたのである。ニユートンが林檎の地上に落ちて來るのを見た時、非常に不思議を感じたと云ふことには、殆ど疑はなかつたらう。然し、刻苦精勵の研究によつて、引力の法則の發見に成功した時、この現象は、彼には極く普通な法則の自然な結果と成り果てたのだ。自らを先驗的普遍の範圍に迄高めるといふことは、換言すれば 自らを眞の偉大にする秘訣である。

二月十四日。金曜。甚だ寒し。今日はこの冬で一番寒い日だつたと云ふことである。温度は氷點下二十三度まで下つた。熱心に四組で教授す。歸宅後、ゴールキイの「オルロフとその妻」を讀み始めた。讀み終らなかつたが、大いに面白かつた。明朝の倫理學講義の爲め、トルストイの「例へ話」とカーライルの「開會の辭」を讀む。

二月十五日。土曜。曇。やゝ暖し。十一時登校。豫科に倫理學の講義をし、今後の講義の豫定を發表す。その豫定は次の通り――

「宗教と道德」、「友情」、「愛」、「ヨーロッパの基礎的二思潮」、「畫家、ミレーの生涯」、「平凡と非凡」、「主義と趣味」、「北方の謎――トルストイとイプセン」、「歷史」、「先驅者」、「人生探究の範圍」、「靑年の三時代――混亂たる奮鬪時代、盲目突進の時代、整理時代」。

午後、再びゴールキイの「オルロフ」を讀んで過す。無限の、そして有益な滿足を以て讀み終る。美事に書けてある。此くの如く余も書けるなら！　この文盲ではあるが、健康に惠まれた夫婦の描寫は、眼の當り見る樣である。心理描寫は、讀者をして、この夫婦が眞實生きて居つたのであり、誰か普通人以上の洞察力を持つてゐるものが、夫婦の心の奧底に隱れて居てあれ程緻密に觀察したのだと思はれる程深いものがある。又、著者の不偏の同情も驚くべきものである。彼は誰も害し

ない。主人公も女主人公も讀者も。讀者の爲に、彼等の缺點を、著者は臆面なく描き出す、と同時に彼等の長所美點に對する著者の無限の同情は、讀者をして彼等の生活を羨ましく思はせる程である。男は、その血の一滴まで自己に誠實であつて、而もその結果は救はれ得ぬ沒落なのである。女は、その人殺しの夫に、身も魂も捧げてゐて、倚けだかいのである。何と憐れな氣高さであらう。如何して、無慈悲な世間は、如何したら世間が渉れるかを知らない人々を噛みさいなむのであらう。

「人道」と「歷史地理」を受け取る。鷹田より手紙。美しい月。

二月十六日。日曜。朝晴れ、夕方恐しい吹雪。教會に行く。竹崎氏の說教は「安心立命」といふのだつた。上出來。聖書研究は、海老名の「キリストの奇蹟」と云ふ題の論文についてゞあつた。竹崎の論は會得出來ると云ふ點だけでは、大變よく出來て居る。山田夫人を訪問。家で寫眞をと撮る、その仕事夜に及ぶ。

余は、每日が早く過ぎて行く如く感じる。余が眞實自我を確立するまでには、凡て必要な知識を集め得られるか。汝の智力に鞭打て。それを少しの間も眠らしめるな。時は飛んで行くのだ。氣を付けよ。

二月十七日。月曜。晴。暖。二時間授業。レッキイの「ヨーロッパ道德史」を研究す。余は、哲學的推論を敏活に理解し得る樣に、自分の心を改造する必要を感じてゐる。換言すれば、余は鋭敏なる頭腦を得なければならない。明快な頭腦をも合せ持つて居なければ、正直であつても、少しの價値もない。木偶坊は破廉恥と同じく恥辱である。

夕方、同窓倶樂部にて、佐藤、野呂、及び琴似の聖人の歡迎のクラス會。彼等の內の幾人かは眞の田舍紳士に、あるものは似而非ハイカラになつてゐる。實際とつちがいゝのか、余にはわからない。努力せよ、努力せよ。努力を重ねるのだ！

一歩誤れば、汝は深淵に陷るであらう。

夜は雲なく、たゞ月が美しい。

二月十八日。火曜。曇。温和。直良と河野夫人より手紙。一日、レッキイを讀んで過す、餘り進まない。教會出版物の件につき宮部博士訪問。〔以下四行邦文〕

憐れなるすゞは、遂に何處にか失せ去りぬ。彼女は約二週間前より家に來れるなり。歳十五なりと云ふに時計を正確に讀む事すら能はず。その耳は特別に犬の如き形をなせり。彼女は殆んど野獸に近き本性を有したり。此の家の簡易なる勞働に飽きたりと見ゆる事二三日なりしが、突然家を去り其の母代りて家に來りしが、今日遂に彼女は其の母にも行方を告ぐる事なく家出したりしとぞ。殆んど一種厭惡の念を發せしむ。

二月二十日。木曜。曇れども暖。一時間授業。朝から夕方まで、研究室にて、宗教と社會主義の關係を研究して過す。フライの「社會主義と社會改革」は甚だ面白い。讀書中ある考が不意に浮んで來た。それを直ぐノートに書きとめたが、今度からこんな風に思ひついた時は何時も書きとめておかうと決心した。夜、社會主義研究會の週會。大西の「良心の本質」と「現代思想概觀」を購ふ。

街上の雪は溶け初めた。蕾が膨らみ初めた。

二月二十一日。金曜。好晴。暖くて、ストーブ殆ど不要。學校で三時間。オーガスト・サバティエの「宗教哲學概論」を讀む。彼はハルナックの後繼者と云はれてゐるが、併し余には稍ゝ理に合はぬものと思はれる。何となれば、彼の宗教に對する態度は、幾分神祕的で、彼の宗教、哲學、科學の區別の試みは、甚だ明瞭であるとは言へない。ジョルダンの「厭世主義哲學」を讀む。サバティエのより遙かに公平な意見と思はれる。ジョルダンが人性に對してこれ程の見識と同情を持つてゐようとは余の夢想しなかつたことである。彼の作品を更に讀みたい。ホルムズの「朝食卓物語集」とテウェインの「新天路歷程」を借りる。

森本夫人は非常によくなつて來て、前よりずつと顏色がいゝ。彼女の爲に神に感謝す。

余は自ら憂鬱な氣持でゐるのを感じてゐる。思はぬ時に、時々來つて、余をしつかりつかみ、殆ど身悚ひせざるを得ない程の、あの不思議な思ひは何であらう。余が智力競爭に敗れてゐるためなのか、それとも男らしく忍ぶ力がなくて、失戀のみじめな境地にあるためなのか。何と可哀さうな憐れな男ではないか、人々が余を粘液質の呑氣者と思つてゐる際に、余は

內心にあらゆる傷を深く受けて、外面では笑つてゐなければならない。凡ての苦痛を明るみにさらけ出して、隣人の涙を要求出來る者は羨ましい限りだ。否、その人を羨むまい。その人を輕蔑する。その人を憐れむ。自分が一個の人として生きて居るならば、余の道は間違つてはゐないのだ。凡ての傷の痛みを汝の心の底に受け忍べ。忍び得るだけそれだけ、汝は成長するのだ。汝は偉大に、完全にならなければならない。汝の小さな周圍の標準にまで、身を落すこと勿れ。世間は汝を見てゐる、汝も眼を大きく見開いて世間を見通さなくてはいけない。遂には余も偉大となるであらう。偉大になると云ふことは社會に盡くす最良の道である。

二月二十二日。土曜。日中、晴。夜、雪。午前、倫理學一時間。午後は、讀書數册、原、飯塚、二學生その他の訪客に接して過す。夕、同窓倶樂部に集會。それよりＹＭＣＡ宿舍の集會へ。後の方の集りは愉快だつた。余は、アメリカの學窓生活について語つた。豐かな洪笑と、陽氣な歡樂。

二月二十三日。日曜。午前、日曜學校と敎會。午後、足助我々を訪れて來る。足助が去るとすぐ宮部博士來訪。あの老寡婦の山田は怪しからぬ女で、あらゆる種類の破廉恥行爲に身を任してゐる。彼女は中江を誘惑し、彼と不倫な關係に陷り、それは、彼が現在の妻と結婚するまで續いた。それから彼女はある靑年に目をくれ、今日の日まで彼を罠に陷入れてゐた。考へて見るがいゝ。社會は、その裏面に一瞥をなげてみると、全く表裏相反してゐる。この世はまことに情ないものではないか。僅かな罪を爲すものは、その僅かな爲に罪人の典型として引證され、大きな罪を爲すものは、その大きい爲に一朝罪が明るみに出たら、死を選びたくなる程、好い取り拔ひを受ける。此くして、容易ならぬ僞善は道德世界の基礎を覆へし、結局人道そのものをさへ破壞する。余は、人の性質の弱さを考へて、心中何とも言へぬ悲しみを感じた。

　家へ手紙、信へも一通。信へのは、彼と私との交際を絕たうとする宣言である。余は、今書いてやつた手紙は彼女への最後のものとなるかもしれないと云ふこと、彼女が再び余をその兄弟と考へてくれるなと云ふことを書いた。これで彼女の未來の夫に對する余の義務を果した。これで全く彼女から手を引いてしまつた。今後彼女は私にとつて全然他人である。私に

この決心の出來たことを神に感謝す。余より凡てのものを取り去り、しかる後凡そ人の苦しむ最大の悲しみの内に余を試し給へ。父なる神よ、この試練を受くるを得しめ給へ。涙！ 涙！ 汝は余自身の偽りなき眼より迸り出る。而も尚、汝は余自身の肉體以外の他の源より出でたる如く見ゆ。天國からか、地獄からか、余知らず。神の最も賤しむ、而も最も愛する涙よ！

二月二十四日。 月曜。晴、暖。丸善よりゴンチヤロフの"Common story"を受け取る。兩親、アグネス、エディス・ホールより來信。エディスを思へば、心慰められるものがある。彼女は余の知れる限りに於ける、最も純潔な少女の一人である。彼女の無邪氣な晈い視線は今も余の心の上にある。今日は特に變つたこともなし。

二月二十五日。 火曜 好晴、暖。學校で四時間授業。午後教師會議。壬生馬より葉書來る。トルストイの「宗教と道德」を讀み初む。然し、今夜は眠くて、十時半と云ふに已に寢床に入つた。夢五つ六つ。のぶより手紙。

マキシム・ゴールキイの「宗教と社會主義論」(「社會民主主義」十一卷十號)——

宗教的感情とは、自分の解する所では、人と宇宙の間に介在する喜ばしい、誇るべき融合感である。それは萬人に共通な人間固有の綜合的傾向に依つて生ずるものである。それは經驗によつて發達し、先づ第一に、人が宇宙、人生間に於けるその位置、その役割を意識することによつて自ら現れ、次に人に、本來の自由と云ふ喜ばしい意識を呼び起しつゝ、物の哀れを思はしめるに至るのである。物の哀れとは、必ず宗教的な情緒なのである。人生現象の無限の變化、人生の神祕を了解し解決せんとする人間の努力の美しさ、自由、眞理、正義を求めんとする創造力、完成に向つての人間の遲々たる、されど確實な、常に速度を増しつゝある向上の步み、——かゝるものが、人間に物の哀れの情緒を誘ふのである。

人間の本質とは——怠惰な心を持つ人々には言ひたいことを云はしておくがよい——精神的完成に向つての前進である。その進步の意識が、凡ての健全なる精神の人に、宗教的な感情、自らの力を信仰し信頼する完全な創造的の感情、勝利を希求する感情、人生を愛する感情、彼の魂とこの人生との間に介在する不思議な明澄な調和の前に欣喜する感情を起さしめる。

余は思ふ。我々は、新しい心理的一典型が發達に向ひ始めて居る傾向を目擊してゐると。――余は將來に於て、凡ての才能が相互相干渉することなく、矛盾することなく調和して發達する人間の姿を豫想するのである。これをこそ、余は完全と呼ぶであらう。

然し乍ら、人間の發達の爲には、完全に同等な立場におかれた人々の間の、廣汎にして自由な交渉のある事が必要である――この狀態はたゞ社會主義によつてのみ保證せられ得るものである。かうした各人間の交渉は各自に與へられ、實際はさうでないにしても、經驗の平等が、理論上は平等に與へられるであらう。それは凡ての人を互ひに理解せしめる。それは彼等の間に嫌惡、嫉妬、貪慾の全くない新しい關係を作る。それは各人に他人の經驗を完全に利用せしめ、萬人をして各〻の經驗によつて利益を得さしめる。

余の所謂經驗とは、科學、藝術の部門、――卽ち我々の智的活動の最も高尙な部門に對する我々の創造的活動に依つて得た知識の總結果を意味するのである。

かゝる經驗を、若し大衆が所持して居たならば、人間性は一段と豐かになり、人間に威嚴と自尊の意識、創造的活動によつて過去の時代の人々と爭ひ、來るべき時代の人々の爲に、更に高き標準を設けんとする深い欲求を喚起するであらう。こゝに於て、人生とは創造の道程となり、人間は過去と己れとの關係を感ずるのみならず、未來に對する彼の精神の影響を明かに認知するであらう。此事實を忘るべきではない。我々の意識は無限に擴張し得るのである。

二月二十七日。木曜。早朝から烈しい吹雪、風は殆ど一日續いた。

朝、授業の下調べをして過す。午後、授業。それから、トルストイの「宗教と道德」を非常な興味と一點の疑惑もなしに讀む。ティルディの手紙を受け取る。彼女から便りのあつたのは隨分久しい前の事だ、だから彼女から何の便りにしろ、便りのあつたのは大變うれしかつた。彼女の余の心を惹くことの强さよ！　彼女は本當にやさしい娘だ！

西川から送つて來た數種の社會主義者新聞を、その內のどれかを豫約しようと思つて、色々に考へた。宗教に關するゴー

ルキイの小論文はこの内の一つから寫したものだ。これは余を引きつけること多大である。何と彼は强壯な樂天主義者であらう。彼のうち出す響は凡て明かに男性的なものである。直にホイットマンの一面を想起させる。現代何人と雖も、根據ある嚴肅な樂天主義の點に於て、この二者に並ぶべきものはない。

すゞの母は遂に姿を消し、その代りに靑森生れの二十歲の少女が雇はれた。此處の奥樣のお氣に召して、奥樣の荷を輕くしてあげる樣にのぞむ。

Nydia's Love-song

I

The wind and the Beam loved the Rose,
And the Rose Loved one;
For who seeks the wind where it blows?
Or love not the sun?

II

None knew whence the humble wind stole,
Poor sport of the skies—
None dreamt that the wind had a soul,
In its mournful sighs!

III

Oh! Happy Beam—how canst thou prove

That bright love of thine?
In thy light is the proof of thy love,
Thon hast but—to shine!

IV

How its love can the wind reveal?
Unwelcome its sigh;
Mute—mute to its Roselet is steal—
Its proof is—to die!（アメリカよりヨーロッパに向ふ途中、プリンセス・アイリーン號船上にて拔萃）

二月二十八日。金曜。曇。暖。〔省略〕

三月七日。土曜。曇。暖。大した理由もなしに、長いこと日記を書かずにしまつた。愚な私！ 私の沈滯した生活に、これと云つて何も特に告げることが起きなかつたのだ。嗚呼！ 何故私はかう鈍いのだらう。汝の全機關を活動せしめ、警笛をならし、馳せめぐり、渦巻き、そしてその他凡ての活動をなすのだ。

かうしてゐる間に、余の三十回目の誕生は來てしまつた。余は既に孔子が世に立つと言つた時に達したのだ。汝にその用意ありや。有り、有り。我に有り。精神的にも心靈的にもありと云ひ得る。如何なる友もよし、來れ。さうだ！ 我に獻身の覺悟あり。

朝、農科の實科で講義。午後、長い氣持のいゝ假睡。「スクリブナー」誌（一九〇八年二月）所載のジェイムズ・フユーネカーが、「感情教育」と云ふ題目の下に、バイル・スタンダールを論じた一文を讀む。彼は全身生れながらのフランス人の様に思はれる。僞善者と思はれる程眞面目であり、餘りに直情と思はれる程僞善家であつて、大氣の様な靈性と、ひたむきな肉

慾耽溺とを織りまぜてゐる。余は、これらの型を地球上の何物よりも嫌惡する、然も尙、如何したわけか、その內の何かは余を大いに蠱惑する。それは何なのであらう。

ティルディは、余にクリスマス・ツリーの小さな一枝を入れた愛らしい手紙を書いて寄越した。信は私が愛子と結婚するつもりかどうか、若しその意志があるなら、お母さんは、どれ程喜ぶであらうと書いてよこした。然し、まあ何とつまらないことを云つてゐるのだらう。よし〳〵、余は少々皮肉な氣持になつてる樣だ。こんな時は、これ以上つまらないことを書かない方がいゝ。〔以下八行邦文〕

雪降りつみたる川添の橋袖に、形ばかりなる屋臺店あり。煮たるは何ならん、異臭地を這ひて寒空に去りもやらず。眇たる黃なる齒の媼、紺色あせたる暖簾の蔭に坐してそを賣れり。

暖簾の中に包みたる顏さし入れたるものあり。酒氣を帶びたる若き勞働者なり。湯氣頻りなる鍋の中より一串拔きて、唇を燒かじと白き齒あらはに貪り食ひしが、やがて銅貨一つ投げて彼れは去れり。

夜は落ちて空は雪となりぬ。人の往來は絕え果てたり。

媼の覺束なげなる眸は、とろとろと風に搖ぐ燈の下に、鍋より立ち上る湯氣を見据ゑたれども、何を見据ゑたりとも自らは知らぬなるべし。

古き鍋の傍には先きに抛げられたる銅貨一つ橫はれり。（三月二日）

三月十一日。水曜。午後から烈しい吹雪。昨日と今朝だけ靜かな天候が續いたきりだつた。この數日、これ以外、この上もない恐しい吹雪の黑い幕で、おそろしく被はれてゐたのだ。地球の最後の日が近づいて來たのだと思へる程だつた。西南の空から風が何物をも容赦しない力で、地上、木、家、一切を掃つて吹いて來る時、凡てのものは、降り積む雪の物の怪の樣な經衣にすつぽり包まれ、世界は渾沌そのものゝ樣に見える。

久しく無沙汰してゐた壬生馬に、割合ひに長い手紙を書く。どうして、今まで便りが出せなかつたのだらう。出校して、

豫科の學生にホイットマンの功績を紹介しよう。彼が日本の教室で紹介されるのは、恐らくこれが初めてであらう。余は、「彼等に「開拓者、おゝ、開拓者」(Pioneer! O Pioneer!) を紹介するつもりだ。余は最近、特に彼に興味を持つてゐる。彼の强壯さは、余の心をひたすら驚かし、捕へる。あれほど健康に、しかもあれほど詩的にあり得るものがあらうか。彼こそ確かに來るべき時代の喜ばしき黎明である。我々は彼の內に新文明の非常に明かな意義を見出す。あの白髮の老詩人の上に幸福あれ!

余は堪へられないくらゐ倦怠してゐる。汝は他人に驅り立てられるのを待つてゐてはいけない、自分で自分を驅り立てねばならない。然るに汝は自分で自分を驅り立てない。此處に汝の世界が無意味且つ平板と思ふ所以があるのである。あゝ、今この瞬間に死ねたら! 私は、愛に見放されてゐる。

三月十二日。木曜。昨夕から恐しい吹雪が暴れ狂ひ、今朝は全世界を全く混亂と變じてしまつた。凡ての街路は通行出來ず、大部分の學生は登校出來なかつた。

ホーソンの「緋文字」を讀み初め、今約半分を讀み終へたのだ。藝術に對する新しい態度からこの作品を見れば、この作はその價値を減じて來さうに思はれる。加ふるにホーソンの藝術は、決して情熱を十分に表現し得て居ない樣に思はれる。彼はさうするには明かに餘りに理智的である。彼は所々で最も激しい人間の感情の橫溢の場面を描かうと試みてゐる。その描寫は順次に、讀者を相當に感動興奮せしめ、躍如たる面目を示すが、一度びクライマックスに達するや、纖弱となり、その時まで讀者の味つてゐた凡ての感情を奪ひ去つて仕舞ふ。彼は凡ての感情を、非常な緻密さを以て分析する事は出來るが、苦しむものと共にそれを感ずることをなし得ない。余は、未だ此の書を讀了はして居ないけれども、眞に價値ある不滅の書と比肩し得ないものと、思はれるのである。

內地との交通は全部途絕えた。

余は生きてゐる魂と更に密接に接觸したい。余は眞の世間を更に多く知りたい。その中に眞直ぐに飛び込まうか。他の一

切を無視して。これこそ決定するには、非常に大きな問題である。畢竟、人は紙とインキだけでは生きては行けない。人は己が魂と相觸るゝ魂を必要とするものだ。

三月十五日。晴。暖。ホーソンの「緋文字」讀了。結局、彼の名聲に比して、寧ろ失望した。余が十二日に書き記した印象は、今表現したいものである。

朝、日曜學校に行き、禮拜に出席。教會が終つてから、M君と「溫室」に行く。氣持がよかつた。夜、未知の人が建てゝくれて、高岡教授と一緒に借りる筈の家の設計をした。

三月十九日。木曜。曇。寒し。今朝、寄宿舍に引越し。あの友達の上に惠みあれ！ 彼と、その若い思ひやりの深い細君とは、この二ケ月の間、私の安らかな避難所だつた。余を東京から走らしめた余の內心の爭鬪の眞只中にたつた獨りで置かれてゐたとしたらどんなであつたらう。余の友達は余を扱ふに、壞れた花瓶の如くし、そして余の沈滯した魂に、あらゆる親切と同情を注いでくれた。かくて、やがて、余も蘇生し、遂に今は、大した苦しみもなく安らかに獨り住み得る樣になつた。森本の家にゐた間にも尙、人性に關してある暗い思ひが余に起ることがあつた。然しそれは、この數日特にひどかつた。緊張し過ぎた神經のせゐであつたに違ひない。然し、大丈夫、余は人間性の甚だ不可知な弱さに驚く程の年齡でもない。ともあれ、余の友人の屋根の下で此く長い間受けた歡待を、たゞ深い感謝と深甚の滿足を以て、想起し得るのみである。而も、余は森本とその心の健かな細君との調和した間柄を見て本當に喜ばしく思つてゐる。神よ、彼等が永久に、永久に榮えんことを！

扨て、余の寄宿舍生活について。余は、余が個人の下宿屋よりも、寄宿舍生活を好むに足る理由の有ることを見出し、大いに喜んでゐる。部屋は二階にあり、明るく、廣く、風通しよく、綺麗で、特にいゝことは靜かな事である。二つの橇一ぱいの荷物は、その大部分は本であるが、門番が上に上げてくれ、私は多少滿足する樣にそれらの凡てを、愉快に片付けた事であつた。部屋は南に二つ、西に一つの窓があり、楡の木の森を見下し、遙かに、藻岩と手稻の山脈が續いてゐる。

春が雲雀その他の歌鳥に喜び迎へられて、青葉や花を身に着け初めた時は、どんなにいゝだらうかと考へただけでも胸のときめきを覺える。寄宿舍の學生は約百五十人、その大抵はよく訓練されたもの達である。

壬生馬から葉書を受け取る。大分前に彼に送つてやつた日本の古い版畫が着いたと云つて來た。父上から、親切な深い思ひやりのこもつた御手紙。愛子に關する信の手紙を許してくれとの河野夫人の手紙。やすからも一通。

余は、何かしら非常に疲れてゐる。まるで、自失してゞも居る樣な氣持だ。余を、再びひと頃の單純な一學生にならしめよ。余は青春を望み、あこがれる。出來る限り、若やかでありたいものだ。あゝ、忌むべき老年よ。汝の顏さへ余を腹立たしめる。

三月二十日。金曜。雪。朝、圖書館で讀書して過す。午後、森本に會ひに行く。それから明夕Mの家族を招待する相談の爲め豐平館に。それから、カーネイションを取りに溫室へ。あゝ、カーネイション！　おまへは美しい奴だ。それは私の質素な部屋を飾る、たつた一つの氣のきいた裝飾となるだらう。踵を轉じて家に歸りかけると、可成り烈しく雪が降つて來た。

母から手紙。父、直良、岩波、二木に手紙を出す。メーテルリンクの「蜜蜂の生活」を讀み初める。

金子から便り。こんなに長い間、彼に手紙を出さなかつたとは、本當に惡い事をしたものだ。何としても返事を出さなくてはならない。

余は、つまらぬ英書の耽讀に貴重な時間を使ふ傾向のあるのは、非常に惡い癖だと思ふ。注意しなければいけない。

今夕は、座古愛子の「伏屋の曙」を讀んで、甚だ有益に尊く過した。時々、涙が眼に溢れて來た。彼女は、詩人の心情をもつてゐる。彼女の眼識は鋭く、眼の當り見るかの如く明かに、讀者にその場面を描き出さしめる。彼女のこの世ならぬ顏付も亦、余を魅する事多く、爲に余は彼女と交はりを結び、互に友人にならうと決心した。余は彼女の中に、理想の女性を見出した樣に思はれる。頑固に近い程の堅固な意志を持ち、而もそれが、憐愍、同情の感情によつて容易に而も美しく柔らげられ、なごやかになる女性――余はかうした類の女性が好きだ。

三月二十一日。土曜。昨夜から恐しい吹雪、殆ど一日續く。朝、二三の學生に面會し、二三册の雜誌を讀んで過す。床の上に積み重ねてあつた本を整理する。午後、寒かつたので、森本に會ひに行き、其處で子供の如き遊びをして、夕方まで過す。夜、豐平館にて、森本の家族と高松と晩餐。十一時歸宅。直ぐ就床。

三月二十二日。日曜。朝快晴。日曜學校に行く。ジン孃が幼稚組の教師の職を辭し、栃内夫人と和田が、その代りになる。二人とも若い人達だつたので、余は、日曜學校の教師は、それ〴〵自分の家を支へて行く人でなければいけないと眞劍に考へた。物のわかつた青年達が共通に考へて居る樣に、日曜日に子供を教へるなんて事は何か非常に老人じみてゐると云ふ感じを、余は曾つて感じたことはない。然し自分がかゝる汚れない、可愛いゝ生徒の師となるに全然適はしくないと考へるのは甚だ無考へな事である。

日曜學校で子供を教へるもう一つの困難は、我々は我々の持つてゐる信仰を彼等に強ひることは出來ないし、又強ひてはいけないことである。信仰は、それを持つてゐるものには神聖なものだが、それを疑ふものには神聖なものではないのだ。「疑ふ」と云ふのは、知識又は過去の經驗などで、試めしてしまつては信じ得られないと言ふ意味である。扨て、子供等は、知識と云ふ問題には全く無關心である。然し、最も簡單な物についてさへ、それを子供等の智力に訴へることは出來ない。然らば、子供等の心に信仰を無理強ひした結果はどうなるであらうか。どうにかして、子供等がその信仰を受ける唯一無二の方法は、それに智的承認を與へないで、そのまゝ嚥み込んでしまふことである。これは、余には亂暴だと思はれる。これこそキリスト教の迷信、偽善の始めである。余は、ワシントンでロバート(たしか、當時七つであつたと思ふ)の異常な質問に心を打たれたのをよく覺えてゐる。彼は私にかう云つて尋ねた。「キリストは墓に埋められてしまつたのに、三日たつたら生き返つて來たんですか。」それに對して余は肯定の答をなした。さうすると彼は、私の眼をぢつと見つめながら言つた。「そいつあ變だなあ」いかにも、死人が三日間埋められてから、甦り得るなんて教へられては、子供から見たら變であるにちがひない。現代の子供は、近代科學の精神の雰圍氣の中に育てられ、彼等の信念と相容れぬものを信じさせられてゐるのだ。

心弱いものは、信ずる樣なふりをして、僞善者となる。又心卑しいものは、それを信じて、迷信的になる。お追從も甚しい。
私は、今日、田中牧師と日曜學校の課程を決める相談をする樣に賴まれた。心中、上記の說を持してゐたので、彼と圓滑に話をすゝめられたとは思はない。而も私は、こんな仕事に從事してゐるのは、寧ろ時の浪費だと思ふ。然し他の見地から見れば、この仕事は私に多少の興味がある。私はそれを受けてなす可きだらうか。
竹崎の說教は甚だ要を得たものだつた。午後はひどく寒く、私は餘儀なく室の隅に引込んで、「蜜蜂の生活」とゴールキイの "Rolling Stone" を讀んだ。
夜、睡氣烈し。七時からひぢ掛け椅子の中でぐつすり寢込み、時々眼が醒めたが、殆ど立て續けに變な夢を見てゐた。私は烈しく壬生馬と議論し、森本と爭論し、誰だかと心から笑ひ、誰か部屋の戶を叩いてゐた時にも、目蓋を開けることが出來なかつたとか、色々その他の事を。かくして終夜、私は催眠術にかゝつたものゝ樣に過した。

三月二十三日。月曜。風が變つた。今、南風である。おかげで暖い。一樣に雪がとけはじめた。カーネイションは、今朝は今までになく幸福さうに見える。私は此花の爲めに可成り心を費してゐる。時々毛布で包んでやる、時々陽の當る處においてやる、又、暖房具の傍まで持つて行つてやることもある。此花に與へる愛の深さよ！
大學協會（Univ. Society）に手紙を書いて、「愛書家の沙翁」（Book-lover's Shakespeare）を一揃へ註文する。契約の仔細は次の通り――
「拜啓、牛革製のブックラバーズ・シエクスピア一揃へ、貴店の特價二十五弗にて、小生宛、下見の爲め、運賃先拂ひにて御送り被下度候、もし該書籍滿足のものなれば、當着五日以內に一弗、其後十二ヶ月間、毎月二弗づゝ支拂ひ申すべく候、もし完全ならざる時は、直ちに御通知申し、貴店の指圖通りいたすべく候」
ニューヨーク市　フイフス・アビニュ　七八　ユニバーシテイ・ソサイテイ
午後は五時まで、機械科の試驗に出る。余は生れて初めて、試驗を受けてゐる學生を監督した。彼等を注視してゐると、

今まで經驗した事のない妙な感じが起つて來た。余には、學生達は甚だ贅澤な、專制的な存在で、そして余自身は、彼等の怪しからぬ煽動者の樣に思はれて來た。妙な感じを起したのは、實際はその時でなく、それより以前の事である。暇らしい若い三人の學生、各がパイプを吹かしつゝ、流行の、小ざつぱりした樣子をして、早熟の苗床の草の樣に見える、何かの雜誌の口繪を見た時の事である。余には、彼等は、甚だ贅澤、非實際的、つまらない誇りを持つ、非生產的な、自惚の强いものに見える。實際さうぢやないだらうか。

實際生活の重要な眞面目な事柄、例へば、自己獨立、愛、犧牲などのことは言はぬとしても、飢ゑ、狂暴、非俗に慣れぬまでも知らぬならば、恥ぢるがよい。蠹魚(しみ)の樣な一生を過さない樣に注意せよ。

夜、佐山來宅。今から少し讀まう。十時半である。落寞たる夜である。風は暖い。空には星くづが打ちつけられてゐる。勇を鼓して、名を成す可きだ。——如何なる點で名を成すのか。あらゆるものにだ。自己を適當に有名にするものには、十分賞すべきものがある。名聲は怠惰なるものには笑みかけぬものである。怠惰なるもの又、名聲を迎へるに笑顏を以てしない。名聲は神のものである。〔以下十九行邦文〕

昔ある所に大府な饑饉がありまして、食物と云ふ食物は殘るくまなく喰ひ盡されました。人々は血眼になつて何處かに饑を凌ぐ食物はないかと尋ね廻ります中に、不圖其の祖先が建てゝ殘した大きな倉の事を思ひ起しました。其の倉には潤澤に食物がある筈です。偖て此の倉を開く可き鍵は三つありまして、三人の人が別々に持つて居りました。

第一の人は大層な金持ちで錢も米も澤山蓄へて居りましたから、此の倉の事は左程心にも留めませんで、鍵は雨垂れの落ちる所に投げ捨てゝ置きましたから、此の饑饉の時は半分は腐つて居りました。周圍の人が餘りせがむので、其の鍵を以て倉に參りましたが、其の鍵を錠前に入れて廻さうとしますと脆くも折れて仕舞ひました。其の人は格別それを氣にする樣子もなく「私の處には未だ食物が餘程殘つて居るから大丈夫だ」と、人の痛さは蚊の刺した程にも思はぬらしい顏付で歸つて仕舞ひました。

第二の人は中々の智慧者で、時々食物の蓄へのある人の處から、甘い事を云つて布施にありついて、此の酷たらしい饑饉にも兎も角一日々々は過して參りました。偖て其の人の持つて居りました鍵は金の鍵で立派なものでした。人々が倉を開けて呉れと頼みに參りましたから、「それなら開けてやらないでもない」と勿體をつけて倉の戸を開けにかゝりますと、鍵の形がしつくりと合つて居りませんで、錠前屋に頼んで削つて貰はなければなりませんかつた。其處で其の人は急に金を減らすのが惜しくなつて、人の辛さには思ひ遣りもなく行つて仕舞ひました。

第三の人は貧乏で、從つて饑ゑに饑ゑて居りました。自分が饑ゑて居る計りではなく、其の妻も兒も朋友も親戚も、其の人と同様に饑ゑて居りました。其の人の持つてゐる鍵は銅鐵の丈夫なものでありましたが、倉まで行く程の元氣もない程に饑ゑて居りました。然し今になつては、兎も角も倉まで行くのが食物を得る唯一の道ですから、其の人は奮發して出掛けまして色々辛苦した末に、漸く倉まで來て其の鍵を錠前に入れると、饑の爲めに倒れて死んで仕舞ひました。

しかし其のあとから他の人が來て、其の鍵を廻しましたから、倉は開きました。そして食物はすべての人に施されたさうです。

三月二十四日。火曜。曇。寒し。豫科一年、實科一年の試驗。午後センチュリイ誌所載のホイットマンの憶ひ出を拔萃して過す。甚だ面白く、暗示に富んでゐる。彼の健康な樂天論は、その晩年に美しくかゞやき出してゐる。人類に對する彼の好意と親切な態度は、讀む者をして、涙を催さしめる程である。かゝる健康な、何の見榮もない生涯を送るのは眞に美しいものだ。

夕、佐山を見送る。彼は東京に行つた。彼は近藤重藏が書いたものと認められてゐる北海道の地圖を私に貸してくれた。私の爲めに、札幌病院の一患者から借りてくれたのだつた。

三月二十五日。水曜。晴れて氣持のいゝ朝、身を切る寒さ。

余は、藻岩山登山をしたらさぞよからうと考へた。機械科一年の試驗。正午、藻岩山登山の計畫を發表した。北海道の地

圖を寫す爲めに、學生の原田、丸山の助力を求めた。答案を採點した。約四十名の學生がこの遠征に志願した。早目に寢床に入つた。殘念ながら、風が出て、曇つて來たので、我々の遠征の計畫を延ばさゞるを得ない。〔以下五行邦文〕

ある所に贅澤品と廉價な日用品とを共に賣つて居る大店がありましたが、思ふ樣に物が捌けませんので、他所の店はどう云ふ具合かと調べて歩きました。所が一つ十錢均一店と云ふのがありまして、それが大層繁昌して居りましたから、大店の主人は心の中にほくそ笑みながら歸つて來まして、早速自分の店を拾圓均一店と致しました。所が誰も廉價な日用品を拾圓出して買ふ人はありませんかつたが、其の代り百圓も千圓もする樣な贅澤品はどんどん買手がついて、二三日の間店は大繁昌でしたが、四日目には閉店して仕舞ひました。

三月二十六日。今年はまあ何ていやな天氣ばかりつゞく事だらう。午前、風、雪、霰等々。一日中試驗答案の採點に過した。二學生は一生懸命に地圖を寫してゐた。夕方、我々は各自その仕事を終へた。

夜、佐山夫人に地圖を返す爲め出かける。

三月二十七日。金曜。朝、曇。午後、雪。「伏屋の曙」の著者、座古さんに、一友人としていたゞきたいと言ふ手紙を出した。彼女が余の望みを、末永く續けて行くことを許してくれる返事をくれゝばいゝが。この數日、彼女に對する不思議な、留める事の出來ない魅力が次第々々に強くなつて來る。この常ならぬ心持を何と名付けて好いか余にはわからない。理想の樣に美しいものと、我々の夢想してゐた現實の醜くさを嫌つて、余の心の交りを病人の內に求めるのは、余としては全く自然の成行だと云ひ得るに違ひない。

河野夫人に手紙、家と愛子と志摩に葉書。

午後、第二學期試驗採點に過す。夜、獨立教會の歷史を書く。

三月二十八日。土曜。稍ゝ晴。〔省略〕

三月二十九日。日曜。曇。雪降らず。今朝藻岩山登山決行を學生達に告げたら、約三十二名の者が同行に贊した。三時起

床、四時出發。壯快な寒氣。風稍〻激し。學生達は喜びに溢れてゐた。我々が山に近づいた頃、東の方、雲の裂目に三日月を見出した。滿目凡て雪に被はれ、大洋の渺々たる中にある思ひがする。實に感激を覺える眺めである。我々は溫泉場の傍を登り初めた。以前余が札幌にゐた當時、此處ら邊りは樹々に隙間なく蔽はれ、奧深い森に特有の濕氣の香を放つてゐた。然し今は、その樹々は伐られ、一帶の耕地に變つてゐる。斯くして、自然は年々、人類に從へられ、遂には人類の手の觸れない處は無くなるであらう。然る後、この地上に生れたるものこそ禍なる哉！　原始の姿そのまゝの自然の見出し得ぬ環境に置かれたならば、如何なる變化が人間性に來るか。想像さへも出來ない。恐らくは、その時こそ、再び悲しむべき廢墟より救ひ出されることのない、人類の完全な墮落の時であらう。

頂上より橇で滑り下りたことは學生達を限りなく樂しませた。彼等はまるで文字通り狂喜してゐた。

それから敎會に行き、池田氏の代りに、女子高等科を敎へた。禮拜の時の竹崎氏の說敎は大變よかつた。論理整然たる上に、多分に燃ゆるが如き熱を加へたものであつた。それから、日曜學校敎師の月例會。久保田夫人にお別れを告げなければならなかつた。

歸宅後、大石來訪、文學談をなす。夜、西川の機關紙、「東京社會新聞」を讀む。先日、西川は社會新聞から片山を除名しようとして、社會主義者の間に分裂を生ぜしめた。片山は「社會新聞」の編輯を續け、西川は「東京社會新聞」と云ふ別なものを出したのである。社會主義者間のこの誤解は、彼等の間に有力な統率組織をなす者がなく、一面に彼等のうちに多くの、非常に多くの攪亂者がゐる爲めだと思はれる。日本の社會主義が堅實なるものとなる爲めには、爲すべき事は非常に多くある。

三月三十日。月曜。雨と風、風と雨。トルストイの「人生論」を讀む。大久保來訪。午後、「人生論」とルーソーの「告白錄」を甚だ興味深く讀む。夜、寄宿舍內の信者が集つた。余は一場の話をした。

又しても余は憂鬱である。限りなく寂しい。活力が全くなくなつた樣な氣がする。自ら弱さを感じる。どうしてかう變り

易いのだらう。雨滴が窓をはた〳〵とうち、窓外は一面の闇である。葉の落ちた橡の樹は、骨ばつた魔法使の樣に立ち、痩せこけた腕に似たその枝を幻の樣に搖つてゐる。汝、老いぼれ奴、余を愚弄し、呪ふが如くに、何の魔法を使つてゐるのか。雪が溶けて、あちこちに開く姿を見せてゐる黒地は、悉く何か恐しい怪物の不格好な口の樣に見え、余を愚弄しようとて、その口を出來るだけ大きく開いてゐるかの樣に見える。自然が余を愚弄するならば、余には堪へられない苦しみである。余はその時、凡ての抑制を失ふ。汝、惡戯な自然よ、余を愚弄する勿れ。汝の知る如く、余は人生の淋しき客である。余に味方し、余を賤しむる勿れ。汝の胸に余を抱け。

三月三十一日。火曜。雨と風。朝、無限の興味を持つてルーソーの「告白錄」を讀む。午後、農場の管理に就いて、多少知りたく思ひ、本田を訪れる。彼は特にこの方面の事務官だから、管理事務は知つて居るだらうし、通曉して居ると思つてゐたが、事實はさうでもなかつた。それから少し買物をして森本の家を訪問。一週間以上たつての訪問である。森本夫人は非常に健康さうに見えたので、大いに嬉しかつた。彼等は親切に私を引取めて、夕飯を食べて行く樣にすゝめてくれたから、喜んで受けた。それから一人で出かけ、鐵道局の技師大屋氏の家へと行く。取りとめのない話をして、夜更けて歸宅。それから再びルーソー。

四月一日。水曜。晴天。ほんたうに春の樣な氣がする。今日一日で、木の芽も美しく延びたに違ひない。余を自滅に驅り立てる異樣な性癖が、心に迫ること甚だしく、余はルーソーを讀みながら、絶えず心を集中することを妨げられてゐた。我知らず讀書の手を止め、余の想像は自殺と云ふ考のまはりを辿つてゐた。余は大氣が抑へつけるやうに、息づまる樣に、果ては息の根をとめる樣に感じられた。余はもつと、自由に呼吸がしたい。余には今日心の中で考へぬいてゐたことを、實行出來るかどうかはわからない。とにかく、こんな狀態が變らずに續くならば、こんな環境に堪へることは殆んど出來さうもない。もし、余が實現の手段を採るならば、それは少しは遲れて五、六月になること、これだけは確かである。年月の余を虐げることは、はげしい。余がもし、幸ひにも死神の恐ろしい手から拔け去ることが出來るなら、余はかゝる環境に堪へ得

る程、強くなり得るであらう。余にして、もし堪へ得ないならば、何等人生の意義を獲得する事を得ず、一個の幻影の如くに生きのびて居るよりは、命を斷つた方が如何にいゝか、解り切つた話である。

あゝ、余は何と冷靜に哲學的に、余の恐るべき意圖を論じてゐる事であらう。且つ、此の瞬間に於ても、何故余が自らの破滅を考へて怖れるのか、理由がない様に余には思へる。概して言へば、自殺を遂行するのは大して難しい事でもない。無意義な人生を送ることを考へると、あゝ、それの方こそ恐しい。

終日ルーソーの「告白錄」を讀んで過す。彼の率直さは、實に男らしい。然し、彼は病的の様に思はれる。彼は幾分、變態的で、それがこの本の價値を非常に下げてゐる。

あゝ、余は餘りに憂鬱である。誰も、何物も、余をなぐさめ得ない。余にして、更に眞實に、人間生活に潑剌と觸れ得ることさへ出來れば！　否、人間生活ではなく、「生命」、生命それ自身に。余は生命ある生涯を送つてゐるのではなく、死せる生涯を送つてゐるのだ。厭はしい、生半可な生存に呪あれ！

夜、同窓クラブで、高岡の送別會。

父から手紙。京都附近旅行中の志賀、木下、英夫より葉書。

夢多し。

四月二日。木曜。曇。故神田の葬式。式は涙をとゞめ得ぬほど感激強いものであつた。余は余の屍が彼處に持つて來られる場面を想像した――多分森本は司會してくれるだらう。宮部博士が聖書を讀んで下さるだらう。誰が余の爲に祈禱してくれるだらうか。學生達は、喜んで余の棺を運んでくれるだらう。誰が余の爲に泣いてくれるかしら。一番長い間余の事を覺えてゐてくれる者は誰であらう。かゝる恐しい幻が、全く余の想ひを捕へてゐた。余は豐平まで葬列に從つて行つた。歸途鈴子さんに會つた。

午後、ルーソーを讀む。夜、余の部屋で社會主義者の集り。柿崎が出席して、日本に於ける社會主義思想、社會主義に對

する彼の態度、社會主義の將來に對する豫想、その他に就いて長廣舌を振つた。誠實のこもつた集會であつた。
何か重いものに壓されてゐる樣な氣がして、余は胸に痛みさへを覺えた。詰らない！ 如何してからも憂鬱になるのだらう。

四月三日。 金曜。朝、雨。午後、晴。東京に發つ宮部博士を見送る。それから、朝早く起きたので、少し假睡。Fogazzaro の "Woman" の數節を讀む。如何したわけか解らないが、余は何かいらいらして、實際何事にも自分を打ち込み得ない。今これに手をつけたかと思ふと、すぐ他のものに手をつける。

余は森本の家族と輕川に行く約束がしてある。彼等に伴いて行くのが億劫になつて、どうするとも決めないで一時まで過した。それから、長い間考へて――余は憂鬱な氣分になると、厭になる位鈍重になる――彼等に伴いて行き、一時五十分の汽車で出發することに決心した。然し、輕川に着くと、彼等が丁度歸るところであるのが判つた。そこで余は彼等に別れを告げて、琴似村を通つて歩いて歸つた。余は一人になると忽ち苦い幻想に捕はれ、甚だ暗い氣持になつてしまつた。平凡な景色が如何してあゝ強く自分の心を動かしたのだらう。何か不思議な殘酷、悲慘なものと、思はれ、感じられた。

札幌に歸つて見ると、森本の家族は未だ歸つてゐなかつた。夜になつて歸つて來た。鈴子さんは琴を彈き、我々は色々な歌を歌つた。然し、余はずつと沈んだ氣持でゐた。余はそれが恥かしく、少なくとも表面だけでも愉快さうに見える樣に努めたが駄目であつた。心の底まで痛んで家に歸つた。烈しい雷雨の後の牛乳の樣になつて――

父が余の配偶者の候補者にするつもりで、二人の娘の寫眞を送つて來た。そのうちの一人（森）は御茶ノ水高等女學校の生徒で、彼女のことを鈴子さんはよく知つてゐた。鈴子さんは、その人は活潑ではないが、しとやかで、よい娘さんだと云つた。〔以下邦文〕

煖爐の薪稍ゝ燃え下り、飲みかけし茶は冷えて、其の表面には塵をさへ浮べたり。炳きランプの下に、友と余とは相向ひて胡坐し、何事にかありけん論じつゝありき。

夜は痛く更けて、彼と余との外に覺めたる人はなしと覺えぬ。

彼は冷かに、余は熱したり。

熱したる余を、彼は冷かに正視し、一語を發する每に、右の食指もて、左の掌を輕くおさへつゝ、論理を進むる其の聲漸く低く且つ重くなり行きて、やがては我が熱意をも壓して、灰となさんずるやと思ふに、余はいよいよいらだちたり。

細き事縷の如くなれども、超然として絕えやらぬ彼が辯難の、遂に終りに近づけりと見て、我が滿腔の熱意唇をもれんとせし時、其の瞬間に二人は默しぬ。

俄然として牕廂を搖り動かすが如き聲あり、前庭の樹梢をかすめて、枝を振ひ條をたわめ、鬖々として雪を蹴つてやがて遠ざかるよと思ふに、距りて聞く砲聲の如き響となりぬ。

俄然として其の聲の起れる時、彼も余も固より其の風なる事を知りたれども、彼の夢みる如き眼は忽ち輝きて、余は脊筋に寒さを覺えぬ。

彼は語を繼がず、余は聲を飮みて互に面を見合せたる儘、心は打ちふるひて風の行方を逐ひたり。

第十三卷

一九〇八年（明治四十一年）〔承前〕〔原文英文、編者譯〕

四月四日。土曜。この文を七日に書いてゐるので、土曜日はどんな天氣だつたか忘れた。風があつて、雨が降つてゐた樣な氣がする。ルーソーの「告白錄」研究に耽つた。余の心は尙痛んでゐた。父に長い手紙を書いた。

四月五日。日曜。晴。教會に行く。竹崎の說敎は大してよくなかつた。モリエル集(草野柴二氏譯)を買ひ求め、歸宅後讀む。初めて、この甚だ溫和な、人情味のある天才のことに就いて知つた。

四月六日。月曜。雨。余の憂鬱な氣持も去つて行く樣に思へる。余は新しい精力を得た。然し尙、この外面的な心の安らかさが、再び遙かに苦い感情と變りはすまいか、甚だ心もとない。それを思ふと甚だ不安である。

朝、モリエルを讀んで過す。午後、道廳の山田に會ひに行く。それから歸宅。後、森本の家に行く。夕食後、彼の弟のタカシ君と、社會主義及び宗教に就いて長い事議論をした。彼は非常な急進的な自我論者で、彼の信念はある論理を持つ相當よい根據をもつて居る。彼は又、嘗ては教會の牧師であつたから、キリスト教の致命的な弱點を知り拔いてゐる。自分の立場は、遠慮なく攻擊されるだけの事はあるのだ。余は、自我主義が終る時に、キリスト教が初まることを知るやうになつた。余の考へた問題は次の通りである。

(一)　もし自我主義に從ふとすれば、我々の生存には二つの有機體——卽ち、個人有機體と社會有機體——があると云ふことを否むことは出來ない。一方の利益及び便宜が他のものと一致しない場合が多くある。かゝる場合に、我々は何れの有機體につくべきか。もし我々が個人有機體の方につくならば、社會有機體は個人のそれより遙かに大きく強いものであるか

ら、個人有機體は、必然的に自己破滅を意味する正反對の、社會有機體の力に依つて、容易に壞滅されるであらう。もし又、かかる場合に、我々が社會有機體につくならば、その實行の爲に、如何なる程度まで我々が我々の個人有機體を抑ふべきかと云ふ問題が起つて來る。故に、蜜蜂の生活に於て見らるゝ如く、各個人は社會有機體の爲には、各個人の要求を拋棄する樣な狀態に至つて、初めて社會有機體が最も榮えると言ふ事は、過去の事實が物語つてゐる。もし一匹の蜜蜂が他の蜜蜂から別れるならば、如何に養分を與へても、如何なる注意を拂つても、それがたゞ有機生活を脫したと云ふそれだけの理由の爲に、一兩日の間に必ず死んでしまふ。もし我々の有機生活も此の如きものであるとすれば、我々は何處に自我主義の眞の利益を見出し得るのだ。キリスト敎とはこの有機生活の別名である。

（二）　自我主義生活の唯一の目的は便宜と言ふ點にある。もし社會の生活、存在に矛盾しないと云ふ條件の下に、各人の思考、行爲が、各人の生活、存在に便宜があるならば、自我主義生活の目的は完全に達せられる。それでよし。然し、どうして我々は便宜といふことを考へるのであらうか。我々は、我々の思想、行動の直接の結果が便宜を齎すのか、それ等の終局の結果が便宜をもたらすのであらうか。前者の場合には、社會に生存する事は決して苦しみではない。何となれば、直接結果のみ考慮に入れられるならば、大部分他人に損害となるものは、個人に最も便宜となるものである。直接結果を最後の目的と考へるならば、儲けるよりも盜むがよく、貯へるよりも使ふがよく、產み出すよりも殺す方がよく、造るよりも滅ぼすがよく、貯へ積むよりも使ひ盡すがよいことゝなる。自我論者でもかゝる生活狀態を是なりとはしないであらう。然らば、後者の場合になるべきである。もし然りとすれば、一個の思考又は行爲が終局に於てどうなるかを誰が豫見し得よう。又それが便宜的に終るかどうかも誰にわからう。こゝに來て、誰もが途方にくれざるを得ない。

故に、自我論者でさへも、理智――その前には、漠としたもの、不確かな何ものもない理智といふ確たる土臺の上に立つてゐるのだとは主張し得ない。

四月七日。火曜。雨、後曇。一日中部屋に閉ぢこもつて勉强。憂鬱な思ひしげし。座古孃から來信。言語に絕する喜び！

彼女を親しき友と思ふ事を許してくれたのだ。湧き立つ思ひが胸に逼り、どうしてよいかわからなかつた。汝、憐れなるものよ！　人の同情をあてにして、汝は傷ける獸の樣に、到る處に癒しの泉を求め步く。余は彼女の宗教上の態度が、甚だ消極的なことを知つてゐる。而も尙、彼女と宗敎問題を、調子よく論じ合へるならば、不思議である。それにも拘らず尙ほ、余の心は彼女に燃え、焦れ、思ひを寄せる。神よ！　我を憐れみ給へ。

四月八日。水曜。晴。朝、余が歐洲旅行中買ひ求めた土產の品を、家から送つて來た。部屋の片づけ。ルーソーを讀み續ける。

十一時、寄宿舍の記念祭があつた。舉長、橋本、時任（トキトウ）、森本出席。舉長は大へん巧みに話した。夜、餘興。喜劇と道化、雜鬧と混雜。

四月九日。木曜。風强し。學校が始まつた。第二學期同樣三組に出講。

敎室で學生に會ふ。武者小路より「荒野」を受ける。余は彼が本を出版する計畫を立てゝゐたことを、志賀から聞いてゐた。これがさうだ。裝幀が單純でさつぱりしてゐるのが、何より一番嬉しかつた。內容十二分滿足なものである。著者の生命と個性を、生々と表現してゐる。思想が若いと云ふことは否むことが出來ない。然し、それ〴〵の思想に信念の烙印がある。それは貴いことである。余は直ちにペンを取つて、大いに賞讃の手紙を書いた。然し、お世辭ではない。この小册子を受け取つたと云ふことで、今日は大いに記念すべき日である。

夜、社會主義者の集り。橋が敎會法取締令について話す。

四月十日。金曜。風强し。各組に敎授し、W・ウイットマンの生涯について語る。興味深く「荒野」を讀む。森本が靜子さんのこしらへた菓子を持つて來てくれた。夕方、森本訪問。靜子さんは二三日前から加減が惡く、今晚もよささうには見えない。處で、森本の家で變な爭ひがあつた。森本の弟は、余が前に述べた樣に自我論者で、高松も在來の信仰に疑ひを起さうとしてゐる。それに加へて、靜子さんの心はまだ若い。彼女は、無邪氣な好奇心を持つて、世の中の樂しみを求める。だ

から、この流れをせきとめ、自己の主義で一家を保つて行かねばならぬ者は森本だけだと言ふ有樣である。然し森本も心の奥底では、世俗的幸運へ自分の精力を向けたく思つてゐる樣に見える。それでも、古い習慣と、自ら信じ來たつた事を堅く持してゐる。外界の誘惑の何と强いことよ！

余の周圍を見渡し、余の味方となるべき友人のたゞ一人なる事を思ふ。その友は危險多い大洋の荒々しい航海に出て行つてゐる。余と彼の心は、この上もなく美しく調和しながら、鼓動してゐるが、彼は自らを余の友情にふさはしからぬものと考へてゐる樣に見える。どれ程余は、彼を憐れみ、敬ひ、慕つて居る事であらう！　けれど凡ては何の效もない。他の一人の友は余の傍に住み、毎日余と交際し、常に余に親切であり、常にその寬大な奉仕を余に盡してくれようとしてゐる。然し、余は、彼と余の間に、不思議な溝のあることを感じる。どんな溝か、自分自身では說明が出來ない。多分、彼と余は、今は全く同じ樣な生活をしてはゐるが、二人ともそれに滿足してゐず、そして我々が將來送らうとしてゐる生活は同一種類のものではない。彼は、余と全然異なる夢を築いてゐる。これこそ、余に對する彼の態度に對して、心から親しむ氣持になり得ない眞の原因ではなからうか。余は孤獨だ。

四月十一日。土曜。曇。時々雨。學長が豫科に倫理學の講義をする時間――十一時まで家で勉强。午後再び讀書に過す。夜、前田、板倉、小熊、來訪。

四月十二日。日曜。曇。風あり。教會に行く。竹崎の說教は、最近特に議論が多くなつたので、その力を一般聽衆の間に失ひはしないかしら。說教は心の體驗の表現でなければならないと思ふ。聽衆の理解といふ智的方面に訴へる說教でも、深い精神的體驗の結果でなくてはならない。さうでないと、その重要な意義を全部無くなすであらう。

日曜學校の組制度稍ゝ改良さる。

午後、杉村の「大英遊記」と、西川の「革命者の心情」を讀んで過す。前者は才氣が眼立つて居るが、それだけのもの。後者は、生な、冗漫な文章だが、信念と煽動の火に燃え、甚だ印象的である。西川氏は、確かに日本人にしては非常に面白い

不思議な型である。

夜中、烈しい雨が窓を打ち、眠るを得ず。

今月七日、東京の積雪一尺一寸なる記事を新聞で見て一驚。實際、地球が無茶苦茶の樣である。今年は非常に變な年だ。

飢饉でも來なければよいが。

壬生馬から葉書。

夜、眠くて十時半就床。〔以下次頁六行まで邦文〕

或る所に死ぬのを大層恐れた人がありまして、「死」とは醜い怖いものと思ひつめて、何か醜いものか氣味の惡いものが眼に入りますと、逸早く逃げ出すのが癖でした。

或る時此の人が山路を歩いて居ますと、前方に美しい花園が見えました。近づきますと其の美しさは眼もくらむ計りで、色のあざやかな香の高い形のさまざまな花が處擇ばず咲き滿ちて、それに囀のはでやかな鳥と、姿の可愛ゆい獸とがたはむれ遊んで居りました。其の人は現世にはありとも思へぬ此の景色に見とれて、暫くは得も進まずに居りましたが、やがて矢も楯もたまらず其處へ參らうとしました。所が不思議な事には、容易に行けさうであつた道が急になくなつて、其の代りに岩角けはしい岨道となつて仕舞ひました。斯うなると其の人は益々其の美しい花園に行き度くなります。倒れて膝に傷を得たり、躓づいてつまさきに血を出したり、あせり藻掻いた末にやがて花園の入口まで參りました。そして其の入口に這入らうとして、其の人は面色を變へてすくんだ樣に立ちどまつて仕舞ひました。見ると其の入口の正面には「此處は死の國なり此處まで來た人は死なねばならぬ」と書いてありましたとさ。………

惡魔と云ふものはよく惡戲をするものです。

或る時惡魔がこんがらがつた絲を人の子に與へて、それを解いて見ろと申しました。

人の子は一生懸命でそれを解き始めました。

先づ赤い絲を解かうとしますと、靑い方の絲が絲ゝこんがらがりました。

靑いのをと思ふと赤いのがこんがらがります。

黑も白も綠も黃も同じ樣にこんがらがつて解けません。

如何しても解けません。

解けませんから人の子は、鋏で以つてそれをブツブツに切つて仕舞ひました。

それを見た惡魔は、惡戲が思ふ圖に中つたと云はん許りにカラカラとあざ笑ひました。

登校。二時間授業。午後、圖書館で過す。夕方、下町の方へ少し散步。歸宅して見ると、父上からの御手紙が來てゐた。

四月十三日。月曜。今朝まで降りつゞいて、からりと晴れた。輝かしい日だ。

農場の問題。ウイング氏からの一通は、何時に變らず、親切な激勵の手紙であつた。

余は相變らず憂鬱である。余の內に、相互に斷然相容れず、敵對してゐる二つのものがあつて、余を苦しめてゐる。最近特に余は、時々我知らず椅子から飛び上つて、別にこれと言ふ目的もなく部屋を步き廻ることがある程いらいらしてゐる。

精神薄弱。汝は、誰もが汝の苦しんで居る樣な苦しみを持つてゐることを知らないのか。汝の知人を見よ。彼等は靜かで落着いて、明かになすべく運命づけられたことをしてゐる。而して、汝、汝のみが、氣狂ひじみて、心落着かず、他人が何でもないと思ふことに苦しめられてゐるのだ。否、否、否。彼等はそれを何でもないこととさへ思はないのだ。彼等は深くは考へてなどゐないのだ。彼等は、傳統に、卽ち彼等の先祖がしろと敎へたことに滿足してゐるのである。それなのに余には出來ないのだ。余は、自分自身の立つべき土臺を自分で見出すまで休らふことは出來ない。余の考は誤りであらうか。

然し、その祖先の意志について行くことの結果はどうなるか、一考してみるがいゝ。地上には進步がなくなつてしまふ！靑年は目醒めなければならぬ。靑年は、假令半步の進步であつても進步の爲には自己の生命を捧げなければならぬ。

停滯に滿足する勿れ。

四月十四日。火曜。曇。〔省略〕

四月十五日。水曜。非常な好晴。一つ〳〵の木の芽が地中の養分を吸つてゐる音が、誰にでも聞える様な氣がする。燕の聲を聞く。父上から御手紙を受取る。余がもつと農場管理に注意する様に御勸告、外に二三貴い御言葉あり。現狀の社會に邁進し得る樣に、余を訓育せんとし給ふ父上の意圖は十二分に了解して居る。然し、不幸にして余は、現代社會と相關係する何物をもつて居ない故に、父上の訓育は、余を舊套的なものと急進的なものとの中間物、微温的な狀態にある人間とするのである。余は凡ての嫌惡の念を以てこの狀態を忌む。余は父上がこのことを了解し給はんことを望む。さもなくば、悲しい不合理ではあるが、多年の隱忍の破れる日が何時かは來るだらう。

夕、森本を訪れる。森本の弟は明日歸京の豫定。靜子さんは我々に挽茶を御馳走した。今夜月は美しかつた。余は更に深く憂鬱になつた。如何したらよいか解らない。

四月十六日。木曜。晴。美し。今朝、信子とその母から來信。二人の間に通信を止めようと私の提議した手紙に對しての返事で、彼女の結婚式は今月二日に行はれたと云ふことを知らせて來た。（その日の余の日記を見よ。あれは余の豫感であつたのか。）ティルディから手紙。余の淋しい氣持が大變慰められた優しい言葉を送つて來た。

授業に出たが、然し、何とした事だらう、何に手をつけても、間誤ついて大變可笑しな事ばかりして居た。遂に森本に相談して、不眠と衰弱の恢復するまで二三日、札幌を去ることに決めた。

夜、社會主義者の會合。森本と靜子さんは、留守に余を訪れて、會に行つたと云ふので歸つたとのこと。親切な事だ。煮卵一打と菓子を呉れた。

今夜は近頃にない最も恐しい夜だつた。

四月十七日。金曜。曇。

余は赤岩温泉に行くことに決めた。六時五分札幌發の汽車に乘る。心の髓まで痛む。〔以下二〇六頁十行まで邦文〕

荷となしたるカバンには、Turgenievの"Dream Tales and Poems of Prose"と、此の日記と和服と二三の剰品あるのみ。汽車室内の乘客は皆余の顏をうち守りて不審なる樣なり。小樽停車場に下車したれども、如何にして赤岩に達し得可きかを知らず。輕からざる荷を携へつゝ中央停車場に到り、又手宮停車場に到りて、漸く馬車を雇ふ事を得たり。不可思議なる馬鹿なる事のみをなして自ら噴飯す。色内町にてハンケチほどけて、森本より贈られたる菓子を路上に落して、赤面地にも入り度く思ひたれども、如何なる故か自ら自若を裝ひて、かの往來繁き中に荷を卸し、泥に塗れたる菓子を一つ一つ拾ひて、そを平然と再びハンケチに包み終り、悠々として再び歩き始めし如きは、今そを回想しても顏に汗せんとす。

道を辿りて溫泉に下る可き懸崕の頂上に到れる時は、我れながら快哉を叫ばざる能はざりき。溫泉宿は懸崕の直下にありて、前には渺茫たる海原を控へたり。懸崕は容易に攀ぢ難く、海原は何時波瀾を起す可きやも知らず。今の我が身に似たるsituation かなと哭れ〴〵も思ふ。

中食後磊岩の上を歩して溫泉に到り、其處なる老媼と語らんとせしも、雨降り出でたれば其の儘に歸りて T. の"Clara Militch"を讀む。事思はずも我が頃來の瞑想に觸れたるもの多かりければ、貪り食ふが如くにして忽ち全篇を通讀し終る。

今日殊に激烈なる頭痛を感ず。我れはよく自ら縱令居を轉ずるも滿足なる心意の變化を得可しとは、初めより思ひ設けざりき。唯余は傷負ひたる猪の如く、兎にも角にも現在己れがある所の位置を脫逸して、他に到らんと欲せしのみ。他に到る事の果して現在の位置より善きか惡きかは固より關する所にあらず。我が玆に數日の滯在は、或は我が神經を一層直線的に一層銳敏になすやも知る可からず。されども我れは兎にも角にも札幌に在るには堪へざりしなり。我れは今相當の同情を受けん事を心より惡む、己れの良心を滿足せしめんがためになし與るゝ同情は、我れ之れを受けて却へて益〻不快となるのみ。我れは永く此の如き同情を與へ、此の如き同情を受けて、其の最も價値なきのみならず、そは雄々しき惡德なる事を適切に實感せり。我れは一度死せざる可からざるが如し、一度死以上に強く愛せざる可からず。我れは未だ此の如く愛したる事なく、此の如く愛されたる事なし。言を換へて之れを云へば、余は未だ正當なる意味に於て全く此の世に誕生し來らざるなり。

是れ余が凡ての悲哀の根源なり。又余が世に serviceable ならざる所以の根源なり。

讀書の間は或は海岸に出で、或は廊下を徘徊して、努めて心を紛らはさんとすれども詮なし。余は岸近くを漕ぎ行く漁船中の壯丁を見て心より羨ましく思ひぬ。彼等は櫓を手元に引きたる瞬間に、一方の手を放ちて一種の調子を取るなるが、其の放ちたる手を高く擧げて我等を呼び越しつゝ聲高々と笑ひたるなど、余はうち守りつゝ彼等の心の如何に空明なる可きかを思ひて羨ましく、そを見たり。

○空想の甘さ

○愛せざる可からず

○實有の世

四月十八日。土曜。

今五時半なり。昨夜十時半床に就き、床上に輾轉せる我れの眼は五時に開きたり。余は猶ほ書き續け書き續く可し。昨夜の月は曇りて見えざりき。今朝は晴れたれども、戸障に當る風は最も強し。表戶を閉ぢ切りたればうるさし。

何故に我が神經は然かく刺激せられて、味へども其の味を知らず、眠れども夢安からざるか。余は初めそを信子の他に嫁がんとするを豫想せる事、並に信子が嫁ぎたるの報に一層強く驚かされし事に歸せんとせり。されども怪しむ可し、今は余は殆んど彼女の事を思ひ居らず。余が心にも云ふ可からざる苦痛を覺えしむるものは、余が傾けたる强烈なる感情は、脆く敢きものに衝りて憐れにも碎け散り去りたるを、冷笑し且つ憤恚するの苦痛なり。余は其の中心に於いて一の coward に過ぎたるにあらずやとの危惧は、余をして失望と苦痛との淵に沈ましむ。余若し一個の coward に過ぎざるならば、余が生存の意義は何處にありや。

余思ふに或る者は余が確かに一の coward に過ぎざるを信ぜるものあるが如し。然かも彼等は余に生存を强ひ、余に努力を促がすなり。何の爲めぞ。一は彼等堅く此の事を信ぜるにも拘らず、卑怯にもそは大膽に表白するの勇氣なきと、一には

彼等は彼等自身の自信を欺きて、余が coward ならざる事を云ひ、余をかく信ぜしむるを勉めて、愛人の念てふ美はしき感情を裝はんとはするなり。今は他人の判斷を賴みて己れの眞性を批判す可き時にあらず。余は如何にかして余自身を誤謬なく判斷し得可き基準を求めざる可からず。信仰か自覺か之れをなすは何物なる可き。斯く思ひ續くる間にも、余の心は容易に他事に紛れ去る事を得るなり。愈〻己れの心を矛盾なりと云はざる能はず。昨日余の隣室に二人の商人らしき人來りて、女中を相手に最も肉的なる戲談を弄し夕刻に歸り行きけり。他の室には三人の壯士俳優らしきもの來りしが、金を携へずとて一人は夕刻月出づる頃より祝津志に船を艤して金を取りに行き、夜九時歸り來り飮み且つ騷ぎたる儘十一時頃歸り去れり。離れたる室に來れるは、二人の男と二人の女なりしが、余が廊下を散步せる際不圖眼を留むれば、一人の男は一人の女が便所より歸り來れるを擁して之を抱きすくめつゝありき。彼等は今朝何處に行きしかを知らず。今朝早く一人中年の人、二人の雛妓を携へたるが投宿せり。朝入浴しつゝありしに、其の人來りて今朝三時小樽を出でて來れりと云ふ。やがて彼の二人は來りしが、年老けたる方は恥かしげもなく入り來りたれども、若き方は、はにか

みて入らず。余は之を可憐なりとうち眺めたり。

午前は岩鼻に到りて瞑想す。余は生れてより今に至るまで、嘗て中心の要求の爲めに動きたる事なかりき。余は世間體の爲めに動きたり。若しくは人によく思はれんが爲めに動きたり。余は或る點に於て人に譽められ、人に尊敬せられたり。されども彼等は余を譽め余を尊敬する間に、余を輕蔑せり。此の如き尊敬と榮譽とを贏ち得たる人は呪はる可きにあらずやなど。午後 "Dream Tales" を讀み、又遠く辨慶岩まで散策す。歸宿すれば浴客は皆去りて余のみ獨りとなりぬ。今夜は月よかる可しと待ち設けたれども、雲ありて出でず。

床に就きて長く眠りに入る事能はず。眠りに入りて又屢ゝ惡夢に犯さる。曉に至りてきな臭しとて人々その原因を求むる聲に眼ざめて、又眠る事能はず。

四月十九日。日曜。

うらうらと晴れ渡りぬ。實に美しき安息日なりき。余は今日よく嘗てなしたることなき實驗をなしぬ。

昨日の海岸を反對の方向に散歩す。午後より「米國に於ける田園生活」を書き始む。來客多し。Turgeniev の "Dream", "Prose Poems" を讀む。余の健康は聊かも囘復せず。されども余は最早此地を去らん事を欲す。

四月二十日。月曜。晴天。

「米國に於ける田園生活」を書き續け、Turgeniev の "Clara" を讀む。來客多し。余は堪へ得ぬ程なる物憂さを感ず。

四月二十一日。火曜。晴天。

早天より海上に啞軋の聲あり。戸を排して見れば、鰊群の此の海岸近く來れるなり。小船右往左往、漁人は混亂の街にある勇士の如く働きつゝあり。余の鬱屈せる精神は殆んど反動的に昂奮し、直ちに船を艤して海上に漕ぎ出でたり。大なるかな海。

鰊の出せる精液、岸近き海面を被ひて水色は殆んど草色をなし、四圍より集り來れる海鷗の羽裏に反映して、余が未だ嘗

て見る事あらざる delicate なる眞珠色に輝けり。

須臾にして艀は續々網に上り、旅館の電話の鈴は鳴り續けに鳴り、魚臭漸く鼻を襲ひ來る。

晝食後余は此の旅館を去りぬ。再び札幌に入りて余の爲し得る限りを盡さんとするなり。何事をなし得可きやは余之れを知らず。小樽に入れば既に頭腦の甚だ重きを覺ゆ。札幌に着せしは七時半頃なりしにや。直ちに森本を訪ひて夜食の馳走となる。彼とその若き妻とは、同情に滿てる面持ちもて余を種々に勞ひ呉れぬ。余は感謝して其の家を去り寄宿舍に着せしに、室は余が出でたる時の儘に甚だしく混亂しつゝありき。堅くなれるパン二三斤は机上に、殘し行きたる蜜柑一つ其の儘に、其の他余が苦憂の名殘まざ〳〵と見やられて、余はつく〴〵と余自身を憐れみぬ。

家より手紙、武者小路、山本、其の他よりも。河野氏よりは菓子の小包及び書狀一通。余は此の夜又留め度なき涙に暮れぬ。されども暫時の旅より歸り來りて、余は我が家に歸り着きしを思ひて、心は和らげられ安くせられぬ。此の夜睡眠稍ゝ甘かりき。

四月二十二日。水曜。天候晴し。今日は授業なし。買物の爲め、町をぶら〳〵する。兆殿司の木彫の佛像甚だ妙なり。カーライル譯の「ウイルヘルム・マイステル」とマチニイの「隨筆集」到着。

四月二十三日。木曜。晴。四迷の「平凡」を求め來たり、相當面白く讀む。到る處、諷刺と皮肉。諷刺、批評的の態度の多く漂つてゐるのは、近代文學作品の著しい特徵である。一考に値する事である。

夜、「社會主義例會」。

四月二十四日。金曜。晴。ブランデスの「十九世紀文學の主流」到着。これでよし。寄宿舍の食物供給問題が起つた。どうしてもそれを解決すべきところに至つてゐる。委員が選ばれた。恐らく自治が一番いゝ方法だらう。

四月二十五日。土曜。曇。朝、「倫理(宗教と道德)」。午後、ブランデスを讀む。委員會に出席。宮部博士が御親切にも余

を訪れて下さつた。御親切にも、余の結婚問題について新渡戸博士の意見を尋ね、余の父に會つて下さつた。宮部博士の仰しやるには、新渡戸博士は余の爲にある娘を見つけたが、その娘の家庭の樣子が餘りよくないとのこと。

夜、遠友夜學校でのリンカーン會に出席。そこで足助と末光に會へるつもりであつた。末光はその妻の父が死んだ爲めに數日前北海道に來たのだ。會が殆ど終る頃、末光來り、我々はお互ひに涙を流して握手した。彼は相變らず敏感な男だ。余の沈んだ心は大いに甦らされて、心からほがらかに話した。

四月二十六日。日曜。雨。〔省略〕

四月二十七日。月曜。晴。〔省略〕

四月二十八日。火曜。曇。四時間授業。可成り疲れた。午後、寄宿舍で庭作り。夜、教會で委員會。末光來り、自宅教授をしようかと言ふ相談があつた。北辰教會にフイッシャーの演說を聞きに行く。愚說。失望限りなし。

余は、人類の進步に實際貢獻し得る何か仕事が出來るのであらうか。

森木が退步しはすまいか大變心配してゐる。神よ、余に勇氣を與へ給へ。

四月二十九日。水曜。曇。北西の風。甚だ寒し。今朝、文武會がフイッシャー氏に學生に挨拶をしてくれと賴み、余は司會者として、十一時半から會に出席した。彼の演題は「ある金持ちの王子達とその社會使命」と云ふものであつた。何とつまらないことを、聽衆に述べたてたものだらう。あんな空つぽの頭で、日本のY・M・C・Aの幹事になるなんて恥かしいことである。日本人の學生の頭は、少なくとも彼より一段と進んでゐる。キリスト教はどん底まで腐敗してゐる。我々がたゞ傳統的な理由から、彼を現在の役員として居ねばならぬとは厭はしい限りである。余は、今日のこの結果を見ては、氣も狂はざるを得ない。

午後、セリグマンの「歷史の經濟學的解釋」を讀む。それを社會主義者の會で說明したいと思つてゐる。吹田來訪。文學について話す。彼は現代文學に熟通してゐて、その志望は小說を書くことださうだ。然し、彼は根本的なもの——卽ち個性

の力に缺けてゐる樣に思はれる。

夜、森本の家で祈禱會。余は甚だ激しいことを話した。キリスト敎の復活精神が長い間衰へてゐる。不正の世の中！

四月三十日。 木曜。晴。格別變つたこともなし。夜、社會主義の會。余は歷史の經濟學的解釋について論じた。吹田と原がゐた。

五月一日。 金曜。强風。寒烈。學校で三時間授業。歷史の經濟學的硏究を續ける。

五月二日。 土曜。朝、晴れて暖か、春の如し。

余が顏を洗つてゐると、二學生が鷄の籠を持つて來るのが、窓越しに見えた。彼等は余の眼の前にそれを置いた。——中には、白と黃色の雛鳥の一群れがあつた。まるで絹の樣な下毛の塊りの樣で、柔い絲草の上を妖精の樣にころげ廻り、よろよろしながら土から餌をあさつてゐる。牝鷄は母らしい優しさと熱心さで、一心に氣を配つて番をして居る。余は長い事見つめて居た。我を忘れてしまつた。不意に、夢から醒めた樣に我に返ると、すぐある考へが浮んで來た。余は云つた。「人にはその生活を續け得られる天地が十分にあるのだ。」淚が流れ初めた。余にはその譯がわからない。雛鳥と何の關係があるのか。あゝ、然し、幸福に滿ちた瞬間であつた。

朝食後、農場の後ろへ散步に行つた。春はもう忍びやかに地中に身をひそめてゐる。草が萠え初めた。樅はその綠の若芽の房を枝一面につけてゐる。見よ！　あの碧色の空の中に雲雀が囀つてゐる。余は立ち止まつて、嚴肅な感にうたれて、彼等の歌に聞き入つた。余の心を動かしてゐるものは、確かに希望でもなく、幸福でもなく、喜びでもない。何か、もつと悲しく、更に甘い〱ものである。恐らくは死の囁きであらう。

倫理學の講義。

午後、西村夫人に會ひに行く。それから溫室へ、それから原、それから森本の家に滯在して居る、末光に別れを告げに森本の家へ。がつかりさせられた。この頃森本と私は、氣持が離れてゐるやうに思へる。森本は深入りした話をしたくない樣

に見える。二つの心の間には相觸れるものが何もない。靜子さんの性質にも、厭はしいものがあるのに氣付いた。環境が彼女をそんなにしたのだ。彼女の本來の性質は陽氣なのだ。それで結構なのだ。だが然し彼女には全然、崇高な向上心が缺けてゐる。彼女の視野は世間並みの樂しみに限られてゐる。余は彼女を憐れむ。

結婚！　非常に恐しい籤引だ。

五月三日。日曜。曇。稍〻霞む。朝、教會。竹崎の說教は明かに平凡なものになつてしまつた。彼は餘りに理窟つぽい研究に耽り過ぎたのではあるまいか、と思ふ。

午後大石來訪。彼はこの頃の余の精神狀態に同情をもつてくれてゐるらしい。彼は、余が、ともすると、あらはにではないが、非常に憂鬱な顏付をするのを見受けると言つた。彼は何かと忠告して、余を慰め勵まさうとしてくれた。余はその親切はわかつたが、受けることは出來なかつた。彼が余の所にゐる間に、森本は靜子さんや高松と共に、學校のぐるりを散步にやつて來た。森本だけが先に來、他の人達は後になつて農科の建物にやつて來た。森本と余は草の上に橫になりながら、他の人達の來るのを待つ暫くの間、人生問題を論じて過した。森本は余の憐れな狀態を笑ふのみで、餘り考へ過ぎないが一番藥だと勸めるだけだつた。

暫くしたら、他の人達が橋本教授の令孃、縫子さんと秀子さんを伴れてやつて來た。秀子さんは八つで、元氣で、無邪氣な、頰の赤い愉快な子である。その罪のない態度と話し振りにはどんなに慰められた事であらう。余は彼女に余の妹になつてくれと賴んだ。その瞬間、余は、實際そのつもりだつた。

長い間ぶら〳〵してから、森本の家に寄つた（余は家の內に入らなかつた）。それからレストランに行つて、家に歸つて見ると、足助が入口で待つてゐるのを見つけた。氣の毒な男だ。又職を失つてしまつた。我々は、彼が獨立して生活する何か方法はないかと相談した。十一時まで話した。

今朝、ピストルを買つた。余の魂は余から離れて行く。余の魂は余の最も嫌ふことをする。怖ろしい事だ。

「心の苦しみは心みづから知る、そのよろこびには他人あづからず。」　（箴言第十四章第十節）

五月四日。月曜。雨。朝、學校。足助は余の許に一宿、今朝小樽に歸つた。午後、教科書を讀んで過す。非常に難しくて理解し難く、夕食の頃までかゝつた。夜、「太陽」を讀む。河野夫人に發信。

五月五日。火曜。曇。時々雨。登校、四時間授業。午後、職員會。夕食後、佐山を訪問。彼は理想のない男である。憐れむべき人間だと思つてゐた。今日は、幸福で元氣さうに見えた。實際社會と實際生活の煩雜さから常に尻込みをしてゐる卑怯者にとつて、屢々理想が避難所となることがある。然し、佐山は人生を十分樂しんでゐる樣に見える。彼は爲しても大した便宜も得られないから、惡い事をしないのだ。自らよい氣持がするから善を爲す。それだけの事なので、何の理想も持つてゐないのだ。今では、余は寧ろ彼が羨ましい。

夜、ラスキンの「此の後至る者に」と、相馬の邦譯の「その前夜」を讀む。非常に下手な手際。

朝日新聞所載の藤村の「春」を讀んでゐる。青木が自殺しようとしてゐる。自分には、讀むに堪へぬ程切實に、その心持がわかつた。

五月六日。水曜。雨。影。陽の光り。――雨、やさしい滋養分を持つて、木の芽をはぐくみ育てる雨だ。今日は授業がないので、家で、「歷史の經濟學的解釋」を大いに勉强する。余は漸く僅かながら、何かをなし得ると云ふ信念を取り戻して來た樣な氣がする。メーベルがくれた、彼女の寫眞の裏に書いてある數行の言句が、大變に勵ましてくれる。夕食後、森本訪問。今夜彼等は、余に非常に優しくしてくれた、と思つた。それからモルガン氏の家へ。可哀想な人達！　時には、一週間も訪問客なしに、坐り續けてゐることがあると言つてゐた。余は、彼等にもつと愉快にしてやらなければいけない。余がアメリカ滯在中の人々の親切を思ひ出すと、モルガン家に何の注意もしなかつたのが恥かしい。そこで、我々は水曜日の夕方、一緒に會つて英詩を研究する約束をした。歸宅後、再び經濟の勉强をする。セリグマンは理論の批判となると平凡になつて

しまふ樣に見える。余は多くの人に手紙を出さなければならないのだが、何やかやで怠つてゐる。

五月七日。木曜。曇。風あり。時々雨。朝、學校。夜、社會主義者の集會。余は歴史の經濟學的解釋の批判を論じた。會が濟んでから吹田はしばらく殘つてゐて、余と文學について話し合つた。今夜、余は、毎日曜日の夜、會を開いて、何かの論題について講義をすることを提議した。そこで吹田は「悲劇を樂しむ動機」と云ふ題で話す約束をした。余はゴチック建築について話さう。

五月八日。金曜。曇。雨。朝、學校。豫科に「花」と云ふ題で小論を初める。午後、「アンナ・カレニナ」を非常な興味と眞實な賞嘆とをもつて讀み出した。

父上から手紙。少し調子が荒い。父上は又、余の父上に對する態度に疑惑を持ち初めたのではないかしら。余が、新渡戸、宮部兩博士に、結婚問題について助力を求めたと云ふ事が、御心を惱ましたのだと思ふ。余が父上の御心や主義に對して、謀叛を企んだとお思ひになつたに違ひない。余が家から離れて、父上の事など念頭に置かずに、獨立しやすまいかと御心配なさつて居られる樣だ。又、露骨なクリスチヤンとなり、父上の支配を避けようとして居るのではないかと御心痛の樣である。あゝ、最愛の親切な父上よ！　もしあなたが、余を信頼し、裏面からではなく、適當な方面で余を解剖して下さるならば、かたくなゝ惡者ではなく、どうにかして父上と妥協しよう。如何にしたら、つまらない者ではあるが好かれと祈る息子の意志を、一番よく父上に理解して頂かうと内心努め苦しんで居る心貧しい息子である事がお解りになるであらうか。父として、何といゝ方であらう。この上なく純な御心で、たゞその息子達の成功と安樂とを望んで居られる。それを十分に理解しないなどと言ふ事は決してあり得ない。然し、困るのは、自分には父上の生活態度に全然同意出來ない事である。あゝ、余は何とすべきであらう。もし父上が余を叱責し鞭打ち給ふともその責めに堪へることは出來る。然し、涙と苦悶の鞭に對しては！　忍び得ない。從ひたくさへもある。神よ、援け給へ。

余は、出來得る限り父上を慰め、父上の疑惑を晴らすつもりで返事を書いた。それが父上をお慰めする役目を果してくれ

ればいゝが。

五月九日。 土曜。曇。暖。演習で休日。リリィ・エンマ、ティルディ、行郎に手紙を書く。

夜、學生が四人會ひに來た。皆可愛いゝ。眞面目に話した。

五月十日。 日曜。朝、教會。午後、在宅。烈風の上に寒氣。夕方、湯池と西田を訪問。

母上から來信。本當に優しい愛に滿ちた御便りだ。父上が再び例の病氣になられたので、旅行して環境をお變へにならなければならないとの事。お氣の毒な父上！　母上は、父上に頑强に抗うてくれるなと懇願なさらんばかりである。余は深い悲しみを覺える。自分は稍ゝ荒々しく抗つたのではなからうか。余の爲に父を殺すなんて！　余は左樣して祖母を殺した。

五月十一日。 月曜。晴。風あり。演習の爲め、授業なし。父上の御病氣のことを考へては、家にぢつとして居ることが出來なかつた。豐平堤に行く。とう〳〵春が來た。樅は若芽を出し、鮮かな綠色を帶びてゐた。櫻が咲いた。蒲公英が現れ出した。遠くには霞。河のさゞめき。女は愛に滿ち、男は希望に滿ちて。

その昔、瞑想に時を過した所は、殆ど變つてゐなかつた。柳も小石も今も尙ある。

歸宅後ラスキンを讀み、それから佐藤學長を見送りに停車場へ行く。

夕食後宮部博士にお會ひしに行く。植物園に居られた。余は初めて植物園を見、その美しさと靜けさには驚いた。博士は偉大な王國を持つたものだ。唯一の主人公なのである。其處の凡ての者は彼を知つて居り、彼も亦、凡てのものを知つてゐる。

それから星野の處へ。其處では赤坊が生れてゐた。

相變らずの暗い思ひ。

五月十二日。 火曜。曇。甚だ寒し。學校で四時間。午後、ヨーロッパ建築史の研究に耽る。夜、水産科の一級。父上と母上とに手紙を書く。母上がその母性愛を以て余の心を溶かす樣な優しい手紙を書いてお寄越しになつたものだから、余は自ら、弱いとは思ひつゝも、眞の內心の感情を母に云ひ現はさゞるを得なかつた。

五月十三日。水曜。曇。寒し。今日授業なし。終日、ヨーロッパ建築史の研究に耽る。夕食後、モルガン氏の許に行き、バーンズの"Cotter's Saturday Night"の研究。興味深し。

神川師團は朝鮮の暴徒鎭壓の爲め同地に赴いた。朝鮮人の命懸けの奮鬪は憐れにも氣の毒である。誰も何の注意も同情も拂はない。各國が榮えて、互ひにその榮華を爭ふ一方に、小國朝鮮は斯く無視されて、忘却の淵に沈んで行くのだ。

五月十四日。木曜。慈雨。綠草を培ふ蜜の樣に降つて來る。楡の花が咲き出した。楡の愼しみ深い小さい花を知るものは殆どない。

午後、ヨーロッパ建築史の研究。夜、社會主義者の集會。柿崎は大いに話した。面白し。

五月十五日。金曜。曇。風。三時間授業。午後、入學試驗委員會。夕方原の宅で晩餐。彼は函館へ行くのだ。竹崎、佐山も招待されてゐた。原夫人が琴を美しく彈いた。大變面白かつた。

クローエルと父から手紙。ファンニイは少しも手紙をくれない。彼女は私にとつて常にいとしい者である。

五月十六日。土曜。晴。森本の倫理學。午後、建築史研究。寄宿舍で、夜講。吹田の「何故悲劇は樂しまるゝや」。余の「ゴチック建築」。聽衆多し。

五月十七日。日曜。强風。朝、教會。竹崎はキリストが神の子なることについて話した。彼は、キリストが神自らなることを信ずるのは誤りであり、キリストは最も高き人格ある一個人間に過ぎないと主張するのが正しいと主張した。彼はイエスは神の子キリストだと信じてゐる。余は彼の論理がよく理解出來ない。余には、キリスト卽神の子なりとの彼の思想は絶對的なものでなく、相對的のものゝ樣に思へる。午後、學藝會の委員會。夜、前田、河上訪ね來る。

ティルディと逢阪より葉書。可哀想な人だ。脚氣を癒す爲に、轉地しなければならないのだ。先夜彼はその失戀を告白した。ルーソーを讀む。吉田の「寫生旅行」興味少なし。

余は前にティルディにあんな手紙を出したことを後悔してゐる。恥かしい。何故、余は感情を抑へることが出來なかつただ

らう。實際、甚だ烈しい調子で、愛情を彼女に告白したのだ。實際さう感じたのか。さうだ、あの手紙を書いた時にはさうであつた。然し、この數日餘りに衝動的であつた。もう一度、彼女に手紙を書いて、前便に書いた凡てを取り消さう。

五月二十七日。水曜。こんなに長い間何も書かなかつた。怠けた上に、書くべき事が餘りなかつたから。父上と母上は、父上の病氣の爲めに修善寺に行かれた。母上はその地から、非常に優しい手紙を下さつた。手紙さし上げたが、父上の疑惑を心配して、母の宛名にしなかつた。志摩に母上にお渡しゝてくれる樣にたのんだ。志摩は話をおだやかにすます樣にと大變思ひやりのある手紙をくれた。志摩は、少なくとも、他人と異る性格を持つてゐる。

再び信子から手紙を貰つた。神經衰弱で今尙、病床にゐると言つてよこした。彼女に直接返事を書かないで母親を通して出した。

トルストイの「家庭の幸福」を非常な興味を持つて讀んだ。此の話はイブセンの「小さきアイヨルフ」と一味通ずる所がある。而もこの現代の二大作家の、結婚、姙娠の問題の取扱ひ方が如何に異つてゐる事であらう。イブセンの取扱ひ方には深い悲劇的の鼓動があり、トルストイのには強い倫理的の熱がある。どちらを選ぶ可きか、余にはわからない。然し、前者により多く惹かれる樣な氣がする。

日本に來て新渡戶さんの所にゐるリピンコット孃から來信。

ずつといやな天氣續きだつた。今日も曇つて、暗く、寒い。何だか物憂い。何が――自分でも判らない。然し何か余をはげしく壓しつけるものがある。汝は此くして生涯苦しみ、そして、遂に、恐らく何も爲し得ない者に過ぎない事を知るだらう。憐れなるものよ！

否！　余は立ち上らねばならない。余には尙力がある。余に力のある限り、余は如何なる誘惑にも從はない。神よ、余の祈りを聞き入れ給へ。余は新時代と共に苦しまねばならない。新時代は何に賴るべきかを知らない。その爲に苦しんでゐるのだ。だから自分もさうなのだ。それを感じつゝ尙、余は冷膽に、滿足して行けるだらうか。否、余は新しき生存へと進む

出口を見つけ出さなくてはならない。その時まで、停るなー

學校に授業なし。ラスキンの「この後至る者に」と、ブランデスの「第十九世紀文學」を讀む。後者殊に興味多く、余の今まで知らなかつた新しい知識を得た。

五月二十八日。木曜。晴。授業二時間。大井から電報が來たので、停車場に迎へに行く。大井は相變らず、快活な人の好い男である。然し、彼の性質には、何か大變卑しい點がある。中島公園その他に連れて行つた。岡田公園の花は滿開であつた。美しい。彼の歸つた後、熱心に、「社會主義・革命・國際主義」の研究に耽る。然し、會の初まる前までに終へることが出來なかつた。大變恥かしい次第だ。

夜、「社會主義例會」。

河野夫人から來信。雜誌を發行する計畫を告げて來た。

「クロイツエル・ソナタ」の攻擊に對するトルストイの辯解を讀み初める。彼のペンから流れ出る論は、常に、懷疑時代の現代には珍しい强い信念を持つてひゞいて來る。相變らず微温で、何の決然たる事も出來ない余に恥あれ。〔以下三行邦文〕

螢のともす光を、露にぬれた黑い草葉が、一寸遮つたら螢は火の樣に怒りました。

翌日太陽が其の草葉を照して居ましたが、戸惑ひした螢が飛んで來て影になりました。けれども太陽は眉をもひそめませんでした。

五月二十九日。金曜。晴。三時間授業。午後、トルストイの「暗の力」を讀んで過す。甚だ力强い劇――。梁川の「寸光錄」を購ふ。少し讀む。彼の眞理に對する眞面目な態度は著しいものであり、自分の長忠ひに對する態度も賞むべきものである。兆民、子規、そして彼は良きトリオとなるであらう。

五月三十日。土曜。晴。朝、倫理の授業。「愛」について話す。余は特に「自慰」に就いて力を入れて述べた。彼等が出來るだけ早く、その惡德なるを知つて、止める事を望む。午後、文武會。洋行歸りの藤村氏を招待した。彼はトロール漁業の

話をした。非常に爲になつた。

今夜余は、「北方の聲」と題し、イプセンとトルストイに關する講義を初めた。今日は一日忙しい日であつた。忙しいのはいゝ。人は忙しい間は、憂鬱な物思ひに沈むことがない。忙しければ、隣人に對して和いだ心持になる。自己耽溺は弱さの象徴である。

五月三十一日。日曜。好天氣。朝、教會に行く。午後、「暗の力」を讀んで過す。夕方、森本家の招待に行く。愉快な一夕であつた。

五月は行く。

午後、西村來訪。

古本を購ふ。「ノートルダム」、「ロモラ」、グリムとアンダーセンの物語、「ゲーテのエッケルマンとの對話」、モウパッサンの短篇、「パスカルの思想」等々。價約十三圓。

六月一日。月曜。晴。學校で二時間。變な話だが、「繪が書きたくて仕方がない。余はスケッチ帖を取り上げて、時の過ぎて行くのも氣にせずに、手なぐさんだ。實際、余は紫の他色に及ぼす不思議な影響に大いに興味を持つてをり、紫と他色との上品な調和を見出さうと努力した。或程度までは成功したと思つてゐる。紫と不透明な靑の混合は、死を思ひ出させる樣な、非常に神祕的な印象を與へる。紫と不透明な靑が混じると、何とも云へない不思議な深みが出て來て、太陽が明るい空から照つてゐる時に、霧に包まれた或る對象物の深い影でも見る樣である。とにかく、紫色といふのは、非常に面白い研究材料であると思ふ。何日か、もつと深く調べて見よう。

余が繪をなぐさみにやつてゐたら、牛澤が細君、諫早孃、高等女學校の生徒三人をつれて來た。彼等は臺所と食堂を見たいのだつた。寄宿を一覽させ、納屋を見せた。諫早孃は甚だ氣取らない、よく氣のつく婦人である。彼女はきつといゝ先生になるであらう。

兩親と河野から來信。母上の優しい手紙には泣かされた。

夜、トルストイ。

六月二日。火曜。雨。四時間授業。午後、各科會。部屋に歸つて、「暗の力」を讀むのにすつかり時間をつふす。夕食後、水産科の英語會。それから又、「暗の力」。讀了。

この田園劇は疑ひもなく、トルストイ晩年の有力な代表作の一つである。彼の倫理、宗教觀はこの一篇の到る所に漲り、而も甚だ人の心に逼るものがある。然し乍ら、最も驚くべきは、農民生活に對する彼の鋭い識見である。地方色も完璧に達してゐる。特に主人公の性格は素晴らしい。彼は、無智な若い農夫の裏面を現すのみでなく、人間の眞の心理——外見は惡黨に見えるが、その心の中は臆病で良心的な、例へばニキタの樣な——を現してゐる。一方女主人公の性格は女の奧底の最も恐しい性質を見せてゐる。——眞の無智が、上つ面の皮一重の智力と混合してゐて、慰樂を得、男を手玉にとりたいと言ふ最も卑しい野心に煽られて動いてゐる。男と云ふものは、甘やかされた子供の樣に、あちこちで惡戯をするが、深い惡戯とまでは行かず、過ぎたらすぐ忘れようとする。然し、時々自分の氣がつかなかつた罠に自ら捕へられて、少し惡戯の度が過ぎ、それを忘れることが出來なくなり、泣きもがく。そして、自分のしたことを凡て償はない限り、拔け道を見つけ出し得ない。女と云ふものは甘やかされた子供ではないが、然し、非常に快樂的な早熟な子である。女の欲望は、不思議な魅力で、何をおいてもひた向きに突き進む事にあるのである。然し、女は實際は、どうしたら男を自分の意志に從はしめ得るか知らないし、又目的が到達されたら、どんな事になるのか知らないのだ。其處で女はその目的に達する爲に、あらゆる種類の計略を用ひる。それが活動力を増さないで、大いに狹い範圍に限つてしまふのである。更に惡いことには、心から熱心に欲してゐたその目的に達してみても、その目的物は彼女が常に期待してゐたその望ましいものでもないのが常である。かゝる結果に失望して、更に別な仕事を成し遂げようとして前進する。然し悲しいことにはそれは以前の試みの繰り返しに過ぎない。女がかく努力してゐる間に、女の精神上の行爲の前進力は全く阻害され、その爲めに最も厭はしい狀態に追ひやられる。——

媚を賣る者、道樂者、誘惑者、魔女、そして殺人！

六月三日。水曜。雨。寒し。余の授業はないので、朝中、「この後至る者に」の研究に耽り、讀み終へる。畢竟、此書は當時流行の經濟理論に對する、甚だ眞面目にして熱心な爭論であり、而も多くの核心に觸れてゐるので、人に訴へる所がある。然し、彼は、論理を冷たい方法論を以て運ぶには餘り熱があり過ぎる。時々、彼は滅法な飛躍をするので、讀者をしてその論の跡を辿ることを不可能にする。この點に於て、彼は現代の科學精神からかけ離れて居り、彼の同情者にすら彼を理解することを難からしめる。

午後、各科會。足助來訪。“Tolstoy's School Experiments” と「ゲーテのエッケルマンとの對話」數章讀む。後者の終りのあたり面白く、敎へられる處多い。夜、モルガン宅でバーンズ研究。“Highland Mary” と “To Mary in Heaven”。

諫早から感謝の手紙。

六月四日。木曜。曇。授業二時間。今日は雜閙、混雜から離れて、心和ぐ氣持がする。武者小路に手紙を書き、札幌に、農場の事について、父上に手紙を書く。

夏中過しては如何かとすゝめる。

六月五日。金曜。好天氣。授業三時間。午後、部屋の中にぢつとして居られず、圓山の方面に散步。烈しい午後の日光が、春の呼聲に目醒めた萬物を照らしてゐる。人々は幸福さうに見える。そして馬も牛も、猫までが犬とふざけたい樣に見える。余も亦幸福だつた。——否幸福ではない——然し、心の中に何の感じもない。實際は余の全身が全く春に溶かされた樣に思へる。あゝ圓山よ！　余の愛する所よ！　あゝ、幾度余は、余の心、頭、魂に多くの思ひを抱いて、こゝをさ迷ひ步いたことだらう！　入口に來て立ちどまつてしまつた、そして生命を呼吸してゐる樣な、人に迫る眺めにぢつと見入つた！何と素晴らしい景色であらう！　余は餘りに多くの感嘆符を使ひ過ぎてゐる。然し何とも出來ないのである。余は、幾度も腰を下してそゞろなる思ひに耽つたあの池畔に行かうと、流れに沿つて步いて行つた。道は何とも言へぬ程美しい。綠の

草葉は新鮮そのものである。鳥は歌ひ、蟲は飛び、蟬はその夏の調べを初めた。到る所に親しい氣分が漂つてゐる。遂に余は、曾ては柔い綠草の中へヴィナスが投げた鏡の樣な池のあつた處へ來た。然し、見よ。池は旣に何處かへ行つてしまつてゐる。その跡に、柳、やはずゑんどう、蒲公英、野生の鳶尾、艾が茂り、生ひ繁つた草の間に小徑がついてゐた。余はその前に驚き果てゝ立つてゐた。あの穩かな靜かな水が乾上つたとは！ 不思議な悲しみの情に襲はれ、余は長い間、思ひ亂れて立つてゐた。それから、草の上に坐り、夢を見ようと思つた。然し、夢見るには興奮し過ぎてゐた。家に歸つた時は殆ど五時。靑年寄宿舍で「忘れな草」の一房を貰ふ。

足助來訪。夜、"Book News Monthly" 誌所載のアーチャーの「イプセンの思ひ出」を讀む。

六月六日。土曜。曇。朝、倫理學の授業。午後、寄宿舍の同僚達の寫眞を撮る。午後、モウパッサンを讀む。「借金」は大變よいものだ。夕方、自炊制度の祝賀會。まだ書かなかつた樣な氣がする。然しこの運動は長いこと續いて來たもので、遂にこの制度が確立され、非常な成功を示してゐる。夜、十一時まで「スケッチ・クラブ」の會。

六月七日。日曜。曇。朝、教會。そこで原に會ひ、共に竹崎の家に行き、大いに歡待された。まだ書かなかつたが、原は函館、小樽間の線を監督する爲めに、函館に轉任させられ、昨日、妻子を伴れに歸つて來たのだ。彼は、鐵道從業員が義務を怠つて居るから、いつ何時乘客に危險をもたらすかも知れないと述べた。余は眞面目に、傾聽してゐた。もし、此くの如きが、一般日本人通有の行爲であるならば、此國の將來は悲しむべきものとなるに違ひない。

歸宅後、少し讀書。夕方、森本訪問、それから夜學校。森本の家の人々は皆達者だつた。休暇中東京に行くのだと話してゐた。

余は久しい前からリンカーン協會の集會を學校主催で開きたいものだと思つてゐたのだ。女學生達は菓子を入れる紙袋をこしらへてゐた。余も亦、他の教師と共にそれに加はり、心中に感謝の念を起した。我々が學校を出た時は、雨がはげしかつた。稲光りも亦。

午後、余は椅子に腰をかけ、うと〳〵としてゐて、不意に夢から醒めた。驚いて、あたりを見渡した。實際、夢か現かは自分で判らないが、非常に變な考へが頭にこびりついた。「何故此處で余は生存してゐるのか」と余は考へてゐた。いや余はその考への中に生きてゐた。人生の假定目的は一切余の考へから消え去り、自分自身が余と何の關り（かかは）もない無數のもの丶間に居るのを見出した。確かに、これは未だ經驗したこともない感じである。

六月八日。月曜。曇。授業二時間。午後より雨、いよ〳〵はげし。原は午後會ひに來、我々はよもやまの話を夕方までした。それから二人で夕食を食べに出かけた。彼に余と調和しないものが何かある。何であらうか。彼と別れて、町に行き、內村の「よろづ小言」と「太陽」を購ふ。それから佐山の家に。

父上から手紙來り、農場に關する問題を宇野と共に取り決める樣に命じて來た。杉田と飯田から來信。杉田は結婚した。

六月九日。火曜。雨。寒氣激し。授業四時間。午後、「よろづ小言」とブランデスを讀んで過す。

秀子さん（橋本）が大變可愛い「鈴蘭」を一束持つて來てくれた。本當に、香り高いものである。夜、水產科學生に英語の講義、それからブランデスを讀んで過す。

六月十日。水曜。午前、快晴。午後、及び夜曇。

今日は余の授業なし。朝、熱心にブランデスを勉强する。午後も同じ。夕方、森本來訪。余は彼にピストルを買つたことを告白した。彼は云つた。「其處まで行けばい丶。」それから彼はピストルの値段を聞いた。我々はこの問題を笑ひ去つた。彼に告げた事を自ら恥ぢる。

愛する父上は、余が棄鉢な行爲に陷るのを救つて下さつた。もし父上が余の爲に病氣におなりにならなかつたら、余は今はたゞ數人の人の憶ひ出に殘つてゐるものとなつて仕舞つてゐたであらう。余は心から、か丶る考へが二度と余の心の中に起らない樣に、望んで止まないのである。

原を見送りに停車場へ行く。夜、モルガン宅でバーンズの硏究。（"Tam O'Shanter"）。ブリントンから來信。此前便りが

あつてから隨分久しい事である。彼は相變らずの隱栖の聖者らしい。君の隱栖を續け通し給へ。現代は何をするにも忙がしすぎる。現代はその行くべき處さへ知らない。案内なき盲人よ！　地球はよろ〳〵歩いてゐる。

六月十一日。木曜。晴。二時間授業。農場問題相談に、亞麻製造會社の宇野氏を訪問。彼は偉大なる體格の持主で、甚だ敏活、放膽に見える。余は談話中、彼の生活目的について考へてゐた。彼の唯一の野心は、大實業家に出世し、出來得る限り多くの黄金を得ることに違ひない。然らば何の目的の爲にさうするのだ、一個の野心の最後の目的は何であるかと考へて來る時、そこに非常に妙な感じが起るのである。人々は子供の樣に盲目的に、又は單なる衝動によつて動いてゐる樣に見えて來る。それを、更に考へつゞけるのである。

歸宅すると、足助が國木田の「運命」を置いて行つたのに氣がついた。余はそれを讀み初め、著者の與へる深い調子に心打たれた。これは明治時代の産んだ珍しい作品である。

ブランデスを讀む。

六月十二日。金曜。晴。三時間授業。午後、我々が亞麻製造會社に貸した水道のことに關し、會社との契約に署名する爲、會社の人と出かける。長い時間かゝつた。ブランデス。原へ告白の手紙。國木田の「運命」。夜、豫科へ生徒の質問に答へる爲め出席。母上から來信。

六月十三日。土曜。曇。夜は晴れ、月は甚だ莊嚴。

朝、語學教授會、次の學期に於ける英語、獨語の教授法に就いて相談する。實科一年の最後の試驗。ゴンチヤロフの“Common Story”を讀み初める。彼の寫實力は確かにツルゲネフやトルストイに比すべきものがある。

夕方、夜學校へ同校の數名の教師の送別會に出席。少年達と大變愉快に野球をする。此數日の余には珍しいことである。

六月十四日。日曜。強風。晴。朝、教會。午後、モルガン、森本、余は琴似に鈴蘭を摘みに行く。我々は二時間ばかり笑つたり、冗談を云つたりして、藪の中を歩き廻つた。我々と同じ目的で來た人が隨分多い。

遠足からの歸途の汽車の中で、信子に甚だよく似た婦人に會つた。彼女は三十歳位、淺黑い顏付、鋭い眼付、房々とした漆黑の髮をしてゐた。余は彼女の後姿を見た時、その美しい髮が非常に短かく切つてあるのに驚いた。彼女は明かに、日露戰爭で歿くなつた軍人の寡婦に違ひない。余は不思議な悲しみに胸を打たれた。

歸つたのは約七時。リンカーン會で演説をする爲め、夕食も取らないで、急いで夜學校へ赴く。余は獨歩の「非凡なる凡人」を暗誦した。聽衆は甚だ傾聽してくれた。

月は美しい。今札幌ではお祭最中だ。創成川に沿つて見世物が澤山出てゐる。大變な群衆。

父上からの手紙は飯田の失敗のことを知らして來られたのだ。父上は又、不時の災難を避ける爲、有島の保證人になることを拒んだことも書いて來て居られる。これだから、父上に友達がなくなるのだ。

六月十五日。 月曜。曇。朝、足助と森本來訪。午後、つまらないものを書いて過す。それから森本の招待で、彼の家へ行く。夕食後、お祭を見に下町へ行く。〔以下次頁十四行まで邦文〕

森本夫婦、下女さき、高松、及び高松の同級生なる岡本、余と六人の同勢が、一列の横隊をなして、だゞつぴろい暗い札幌の往來を南に向つた。天が晴れて居たら丁度滿月程のよい月で、祭禮にはふさはしい光景を見せるであつたらうが雲で見えぬ。神社に近づくと漸く雜沓して來て、一列横隊が一列縱隊となる。神社の入口まで來たが到底入れさうにもない。提灯が其處此處に黄色い光を放つて、唯眞黑く人の群集が押し合ふ間に、香袋や香水や汗や肉桂水や薄荷水やの香が綾をなして鼻に逼る。僕が發起し遙拜で濟まして、見世物小屋のある方にと向つた。僕は靜子さんと並んで語りながら歩く。靜子さんが東京に行く樣になつたと云ふ事、高松君は十日位までは殘つて居るだらうと云ふ事、僕の結婚の事は如何なつたと云ふ事、そんな事を友の樣な稍ゝ姉の樣な態度で、僕に問うたり話したりする。僕も今日は心隔てが取れた樣で、本統に身肉に話ししながら、不圖角を曲ると、かつと明るくなつて、太鼓や銅鑼や柝木やコロネットや三味線や、短銃や喝采や其の他群集のある所には伴つて起る一種のおめきが氣をいら／＼させる樣に響く。創成川の水は暗く流れて居るのであらう。其の上にはみ出

して掛の小屋が架けてある。一番規模の大きいのが輕業、其の次が猿芝居、其の次が劍舞と云ふ樣に連つて居る。橋を渡ると其の角にあるのが輕業だ。森本は「面白さうだな」と云つたが、「小兒が見たいと云ふから見よう」と云つて入つて見る事になる。札を買つたが丁度入り替りの處であるので外で待つてゐる。今は藝當が樂な處なので內と外とを隔てる幕が開いて居る。樂隊の人が四人たゞ無意義に曲をやる。「我れは官軍」の次に、「いそしみ播け」が出る。西洋の婦人が二人通譯の女學生を從へて立つて見て居る。幕に書いた英語には驚かされたらう。此間 lily を摘みに行つた時、停車場で遇つた髯をはやした奧園に似た人の顏も群集の中に居る。興行者と見ゆる四十四五の醜い、然し何處かに力を貯へた男が——輕業師の着る肉襦袢の汗に汚れてしつくり身につかないのを着て居る——いとほしい程かすれた聲の鐘を振りながら、外方を一寸向く。舞臺の左方のベンチに列んで坐つて居た四五人の小さい女の子が、足に唾をつけたり髮をなほしたり猿股をゆすり上げたりして立ち上ると、內と外とを隔てた幕が下りて仕舞ふ。僕等は漸く中に入る事が出來た。

「何處で見ても同じだよ、さあ孃ちやん坊ちやん、もつとずつと前にいらつしやい。向うの棧敷が明いて居ます。さあ遠慮しないでずつとつめて入つてお呉れ。代は取りやしないんだから」と、例の興行師の樣な男が怒鳴る聲は、ヒタとかすれて居る。戰つて戰つて戰ひ拔いたと云ふ聲だ。寧ろ勝ち得た處をあらん限りの沈溺に費し終つたと云ふ聲だ。僕等も舞臺の正面に行つた。晴れがましいと云ふのもをこだが、往來の人から正面になる。「板の間からすう〳〵河の風が來る」と高松君が云へば、「僕は暑くてたまらん」と洋服を着た森本が云ふ——

六月十六日。火曜。曇。今日授業なし。ゴンチヤロフの "Common Story" を痛烈な興味を以つて讀む。何と無殘にも、彼は人世の裏面を露はすことだらう。然し余は、これは今日の讀者に取つて偉大なる强壯劑であると思つた。それは所謂自然主義と云ふ、少々狂的な熱を冷ますであらう。

文武會報發行さる。

六月十七日。水曜。曇。今日から試驗初まる。武者から來信。二人が思つてゐたよりも、早く札幌に來たい、と告げて來

た。來る樣に返事を出した。壬生馬より葉書。サロンの寫眞を送つてくれた由。

六月十八日。木曜。曇。暴風。今日は何の試驗もない。興農園に行き、輕井澤に送るバタの相談をする。「從軍三年」「煙霞療法」共に大して余の心を惹かない。然し、後者はその非常に洗練された文體に魅力がある。然し一體、紅葉その他硯友社の人々には、その思想文體に、氣取つた洒落氣があつて、それが大嫌ひなのである。

川上眉山の自殺を新聞で讀む。よし〳〵、戰ひは段々烈しくなつて來る。各人が戰線から放り出されない樣に、强大に武裝しなければならない。

刈りこまねばならぬ程、もう草が繁つてしまつた。

母上から來信。

六月十九日。金曜。曇。暴風。最も厭な一日。今日は授業がない。朝、試驗問題を刷つて過す。午後はブランデスの「第十九世紀文學」を讀み、最後の卷を無限の滿足を以て讀み終へる。彼は、何と明快な精密な頭を持つてゐる事だらう。彼のペンによつて現されるものは、悉くその眞相を讀者の前に示す。同書はルーソーやマダム・ド・スタールの條に魅力がある。

夜、佐山を訪問する。九時まで話す。父上と山本に手紙を書く。

第十四卷

一九〇八年（明治四十一年）〔承前〕〔原文英文、編者譯〕

六月二十日。土曜。强風。いやなことだ。

朝、豫科一年の試驗。八時半から十二時半まで敎室に出てゐたので、その間中、ゴンチヤロフの“Common Story”を讀む。甚だ面白い。彼の厭世的、厭人的の調子は刺す樣に鋭い。讀者を殺さんばかりである。それを飜譯して、だらしのない感傷主義に捕へられてゐる今日の讀書階級――ピエトロ・イヴァニッチならば恐らく「滝な士涙」とでも云ふであらう彼等――に投げ與へたいと思ふ。實際彼等は或種の鎭靜劑を必要としてゐるのだ。彼等は道德や宗敎の云ふことを聞かないし、又今日一般の習慣にも從はない。彼等をして現實に目醒ましむる唯一の方法は、彼等に、彼等が世界に於て最上唯一の貴重なるものと思つてゐるものゝ裏面を見せしめることである。實際この書を、今日の讀書階級の爲に、飜譯して見たく思ふ。

午後、ブランデスの「第十九世紀文學」の第二卷、獨逸ローマン主義を讀んで過す。相變らず面白く、敎へらるゝところが多い。

夕方、綠の草木の生ひ繁る植物園の中を散步する。美しく靜かである。此處の多くの場所は、自分の過去の思ひ出と涵なつてゐる。到る所に親しみを覺える程である。

夜、再びブランデスと“English Review and Reviews”。

ブランデスの考へによれば、第十九世紀の獨逸ローマン主義の最も顯著なる特性は、當時の政治狀態に對して全然無關心であつたこと、（この特性は同運動の最もすぐれた先驅者であつたゲーテの生活及び作品に著しく見られることであり、獨逸

に於ける最も歴史的、哲學的な詩人と見做されてゐるかのシルレルさへ、(決して當時の政治運動に關心を持つてゐなかつた)もう一つの特性は、フィヒテの哲學にその源を發してゐる、自我の無限の擴張と云ふことである。故に、獨逸のローマン主義は幻想文學の別名であると云ふことを、誰も容易に想像し得る。その內に於ては、智力と想像力とは相混ずる故に、想像力とは決して創造するものでなく、制作品の改造、變形力であると云ふことを、人々は殆ど氣づかない。

風は夜になつてやんだ。靜かだ、本當に靜かだ。余の故知らぬ憧れは何を求めての事だらう。不斷に不安である。如何にすべきかわからない。今も尙、砂上に家を築きつゝある。岩の如き礎は何處にあるのだ。人生に不拔の目的を持つて、暮すことが出來さへしたならば！　その時、人生は何と力強くなるであらう。その時まで、幸福よ、さやうなら。

六月二十一日。日曜。非常にはげしい南風。晴。

雨を伴はない風は實に厭だ。それは、がさつな氣質と、無慈悲な天罰、刺す樣な諷刺、嘲笑的な皮肉、自暴自棄な嫉妬、涙のない毆り泣き、媚の笑を思ひ起す樣である。何よりもかによりも、それは余の眼に大いに惡い。

朝、敎會に行く。日曜學校生徒の寫眞を撮る。あの頑健な、男らしい黑岩氏に會ふ。森本、田中と共に植物園に行く。風があつたので面白くなかつた。

明かに風邪を引いてしまつた。頭と喉が痛い。午後ツルゲネフの "House of Gentle Folks" を讀む。彼の作品としては、少し冴えないものゝ樣な氣がした。然し、我々は音樂家レムの不思議な性格に心を惹かれる。彼は素晴らしい。又 "Common Story" を讀む。

夜、眠かつたので、十時半就床。あゝ、何て暢氣な奴だらう。汝は、急ぎの用事のない時はいつも、倦怠にかゝる。元氣を出して、力の限り邁進するのだ。

六月二十二日。月曜。昨日と同じく南風烈し。空は晴れてゐる。

大學の記念日。朝、圖書館で祝賀會。それから、職員、事務員全部は中島の近くの西ノ宮で園遊會を爲しに行く。平凡。

歸宅後、ゴンチヤロフの"Common Story"を讀了。偉大だ。余は嘗て此くの如き小說を讀んだことはない。彼の冷たい公平さは、時としては讀者をして、その作に退屈に感ぜしめる。皮肉に響きもする。然し、余はそれを讀み終つてから、彼は默人家ではなく、實際は、藝術家に普通な一種の情熱に缺けてゐると云ふことを信ずるに至つた。その爲に、彼は必然的に、その明快な識見と、事件の論理的發展によつて讀者に訴へねばならなくなる。トルストイ、ツルゲネフ、ドストエフスキイの樣な作家は情熱を持つて居り、彼等の作品を好まない人々をも、彼等の思想で引きずつて行く。例へば、トルストイの「復活」を、その小說形式に於ては、鬼婆が型にはまつたクリスト敎を說敎する樣なものだと非難し、ドストエフスキイの「罪と罰」を、變態者の心理の無趣味な表示だと非難し、ツルゲネフの"Clara"を正統ロマン主義の粉色した芽生えに過ぎぬと非難する者は多い。然し、一度人々がそれらを讀み初めるや、彼等の嫌惡の念にも拘らず、作中の事件の誘ふまゝに、嘆息し、微笑し、讀み終らざるを得ない。然し、ゴンチヤロフの場合はさうではない。彼の溫い意志、藝術的熱心があるにも拘らず、彼は讀者を熱によつて引き入れることに失敗する。故に、彼に殘された唯一の道は、讀者をその作品に對しては冷靜な態度を採らせておいて、批評的見地から彼の思想を理解せしめようとすることである。

これはゴンチヤロフの大きな缺點である。何となれば彼は、讀者を微妙な思索に誘ひ込まうとして、その文學的魅力を失くする傾きがある。他の點では、彼の人間及び自然の描寫は、ツルゲネフやトルストイの如く寫實的で、手に入つたものであるし、その心理的の描寫にはドストエフスキイの樣に深味がある。この點に於ては、彼は一流である。とにかく、余は、彼のものを讀んで、大いに得るところがあつた。

夜、ツルゲネフの"House of Gentle Folks."

余は、"Fathers and Sons."の飜譯を出版しようかしらと思つてゐる。何の恐怖する事があるものか。

六月二十三日。火曜。終日風。夕方から曇り出し、風が止むと雨が降り出した。驟雨の樣に降つてゐる。嗚呼、嬉しい事だ。赤ん坊の額の上に、母が接吻する樣に、雨は地上のあらゆるものゝ上に降り注いでゐる。萬物は顏を上げ、微笑んだ。

余も亦然り。雨後、手稻山の後の夕映えは素晴らしかつた。余は長い間、こんな感じを經驗しなかつた。空氣も全く淸められたに違ひない。

一日を試驗答案を讀んで訂正するのに費した。非常に倦き〳〵する仕事だ。合間にツルゲネフの“House of Gentle Folks”を讀む。

伊藤から來信。アーサー・クロウエルと壬生馬より葉書。壬生馬の筆は何と巧みなことだらう。彼の一語々々は、十分な意味を以て響く。神よ彼に幸福を與へ給へ。

六月二十四日。水曜。風。然し昨日よりはいゝ。

一日中、外に出ないで部屋に閉ぢこもつてゐた。余は變な男になつて行く。試驗の答案を少し調べ、そしてツルゲネフの“House of Gentle Folks.”を讀む。彼の魅力は段々失くなつて行く樣である。余は前の樣にはげしい興味を感じなくなつて來た。彼の書き方には多くのわざとらしさがある。それは實に巧く書かれてあつて、普通の讀者は、それを正しく天才の作品である印だと間違へる程である。然し、綿密に調べて見ると、讀者はその粉黛彩色に氣がつくであらう。然し、余は彼の天賦の才、そして甚だ巧みなフランス氣質の作爲――それあるが爲に惡くもあるのだ――を否定するのではない。此の點に氣がつくと彼の興味は減少する。

夕方、大竹が岩倉の問題で話しに來る。岩倉は專門學校に入る資格を無くしたのらしい。貴族生活の憐れなる犧牲者よ！

それから集會室で水產科の會。彼等はいゝ靑年である。

窓を通して綠の葉を見るのは美しい。何と新鮮で、氣持のいゝことだらう。

六月二十五日。木曜。晴。風少し。然し大して吹かず。有難い。

朝、機械科の試驗。午後、ツルゲネフを讀んで過す。夕方、吹田君來訪。七時まで大いに話し、二人でアリアイ・レストランに夕食をしに行く。それから再び吹田の家に行き、藝術、人生、道德などを論じ續けて十時半までゐた。かゝる話題を、

余が眞實と熱心を以て論じ得るものは、たゞ彼あるのみ。彼は見かけによらず、精密な性質があり、物事に對する識見も相當にある。余は彼と共にあると、非常な興味を感じる。

宗教と藝術の相反馳。如何にしてこの二つを和解せしめ得るか。可能性のある解決法は宗教上の信仰を藝術の點まで進めるか、藝術上の信念を信仰の標準にまで高めるかである。

自殺はそれ自身罪惡であるか。否、自殺の罪惡であるのはその附隨的の事情如何に依る。義務を怠つて自殺を行ふと云ふこと——然る時は、卑怯者と非難されても致し方はない。

戀愛と友情。友情には戀愛に於ける以上の忍苦の要素がある。戀愛とは自己犠牲の利己主義。友情とは利己主義的の自己犠牲。此く定義するのは、餘りに物事を整然とし過ぎると非難されるかも知れないが、一面の眞理があると信じる。さうではなからうか。

智力の進歩によつて、影響せられ、時々その形を變ずる樣な信仰を諸君は何と云ふか。一體これを信仰と云はれ得るか否か。もし信仰が智力の變化によつて變化しないとすれば、信仰自身は智力と何の關係もないことゝなる。そんな事があり得ようか。

初めから仕舞ひまで夢を見てゐられたら、甚だ好い。徹頭徹尾、夢を見ないと云ふことも堪へ得ることである。然し乍ら、堪へ得ないことは、時としては夢を見、時としては醒めること。更に惡いのは、夢が年と共に少なくなり、遂には夢が全く消え去り、夢の屍か或は又悲しい思ひ出のみ殘ると云ふことである。

余は、大いに、大いに活力のある何かに觸れたく思ふ。

人の經驗から考へてみると、その妻又はその夫に絕對の信用をおくには餘りに懷疑的であるに相違ない。彼等の云ふ貞節と云ふのば、確かに稍ゝ廣い意味に於ける僞善である。人は自らの不貞を無視して、他人に貞節を主張する。その他人は、又他の人にその返報をする。此くして、人生は平和に美しく進んで行く。神はほむべきかな。

Aが Bを祝ふ時、AはBを愚弄してゐる。

六月二十六日。金曜。風あり。朝、家で勉强。吹田の書いた論文を讀む。非常に巧く書けてゐるのもある。

午後逢阪と松本の送別會。余は彼等に、ゴンチヤロフの“Common Story”のことを話した。感銘を與へた事と信じる。

家に歸ると、大隈、前川、岩倉が訪ねて來てゐた。岩倉は我々の申し出に同意した。然し、彼の決心が全く決められたかどうかは、余にはわからない。

夜、寄宿舍の最後の集會。余は、余のアメリカ滯在中の夏の仕事について、話した。

武者小路より葉書來り、二十八日當地着を知らせて來た。

六月二十七日。土曜。晴。涼し。朝、ツルゲネフを讀んで過す。その前後の部分(リザ)は、非常に精妙なものである。午後、豐平館に於て、農政經濟科の卒業生の送別會。

夕方、敎會で日曜學校制度に就いての講義。鵜飼と田村が講師。前者はくだらなかつたが後者は甚だよかつた。

余の頭に不思議な考へが浮んで來た。余はそれを具體的な思考形式に造ることが出來ない。星月夜は美しく、神祕的である。余は、默つて余の後からついて來る二人の女性がゐなかつたら、も少しぶらつきたいと思つてゐた。

國木田獨歩が死んだ。

六月二十八日。日曜。晴。風あり。敎會に行く。三時から、組合敎會で、日曜學校敎師會があつた。出席した。河合夫人と田村が話した。田村の話は例によつて面白い。夜、再びメソジスト敎會に於いて會。

余の憂鬱な日が來たらしい。可哀想な奴! 汝が汝の凡ての疑惑を除き得て、太陽の進むが如く穩かに生活し得る日は何日來るのか。

六月二十九日。月曜。晴。風あり。採點の日。八時半に事務所に行き、殆ど終日そこで仕事をした。武者小路は正午に來た。彼の來たことを神に謝す。來なければ、余は恐しく暗い一日を過したであらう。

靜子さんが花と蒲團を送つてくれた。嗳い心は常に我々を甦らせる！

六月三十日。火曜。微風の晴れた日。一日採點で過す。いやな仕事！　夕方、武者と圓山公園の方へ散歩をする。今、深綠が四邊に滿ち〲てゐる。夕暮の風、飛び交ふ蟲等、寂寥、溫情。

七月一日。晴。河野夫人より來信。信子がその後ずつと患つてゐて、入院か轉地をしなければならないと告げてゐる。この知らせは、余を心底から驚かせる。我々の運命を天に任せよう。余は自ら如何にすべきかを知らない。

八時半より敎授會。一時まで續く。家に歸り、武者と話してゐると、不意に學長から各科會に出席する樣にと呼ばれた。余はそれが今日の午後あるのを忘れてゐたのだつた。學長は卒業生に與へる訓辭を、余に書いてくれと賴んだ。

夕方、博物館公園に散歩す。それから、モルガンの家に行き、共にバーンズの "For a'that and a'that" と "To the Mouse" を讀む。

家に歸ると納富と平野が寺本の問題を話してゐた。可哀想に、彼は遂に「生存競爭」に失敗した。生存競爭とは何か。社會は嚴重にその趣味に據つて出來上つてゐて、もしその趣味に從ふことの出來ないものが現はれるや、直ちにその者は生存競爭に敗れる。この問題を、も少し考へて見るがいゝ。その對應策は何か。

余は何と孤獨な生活をしてゐるのであらう。實際自分を憐れむ。

七月二日。木曜。晴。變つた事なし。

七月三日。金曜。晴。夕方、豐平館に於いて田所(文部省參事官)の歡迎會。余は皮肉な興味を持つて、あの日の出の勢の人が、寛大になつて、客を持てなしてゐる樣子を見てゐた。家に歸つたのは殆ど十一時。

七月四日。土曜。晴。風あり。卒業式の日。武者は豐平川を溯ると云つて出かけて行つた。式は簡單に行はれた。停車場に森本夫婦を見送りに行く。それから豐平館で卒業生の歡迎會。非常に厄介な事をおこしてゐる寺本の事に就いて、納富、平野と遲くまで話す。

壬生馬より葉書二通。彼はルアンを旅行してゐる。彼を羨む。一緒に行けたらなあ！

七月六日。晴。武者と神川へ小旅行。旭川に一泊。

七月七日。晴、朝、內田氏をその農場に訪問。終日、彼と奧樣にもてなされた。愉快な日だつた。夕方、旭川に歸り、ワガノ訪問。女の子は、美しく大きくなつてゐた。夜遲く札幌に歸る。

七月八日。晴。終日在宅。（余は森本の留守中、彼の家に引越した。）武者を豐平學校に連れて行く。

七月九日。晴。本日より、余は入學試驗事務で、宮部博士の手助けをしなければならない。〔以下三行邦文〕

神を知らざるが故に信ぜざるは瀆神にあらず。

神を知りて信ぜざる、神を知らずして信ずる、之れ瀆神なり。

信ずる迄に疑ふものは少し。疑ふ迄に信ずるものは更に少し。

九月十一日。朝、武者札幌を去る。空は曇つて來て、時々雨を降らせた。久し振りの、全く久し振りの雨である。余は非常に嬉しかつた。空氣は淸められた。何よりのことだ。

思つてゐた通りに、武者を歡待出來なかつたのが殘念である。武者の性格は自分の思つてゐたものとはやゝ異つてゐる。結局、彼は苗床の植物であるが、洞察力と、感情、理性の調和した力とに人並以上に惠まれてゐる。

七月十二日。日曜。雨。朝、敎會。午後、余の家で、日曜學校敎師會。竹崎、池田、早川、諫早が出席した。諫早孃は非常に氣のきく、思慮の深い娘である。

ファンニイより手紙。心をのぞきながら讀み終へた。何と私の心を強く捕へる乙女であらう。可愛いゝ少女よ！

ユーゴーの「レ・ミゼラブル」を讀み初める。

信仰と智力の關係に就いて、竹崎と議論。余には何としてもわからない。〔以下三行邦文〕

失望したければ何時でも出來る。

嘗て此より鮮血迸りて痛み堪へ難かりき。而して今は癒えて一痕の疵となれり。之れに觸るれども痛みをだにも覺えず。
悲しきかな此の痛みなき一痕の疵。

七月十三日。月曜。雨。朝、入學試驗の準備。そして二人の訪問者を大學に案内した。午後、下町に行く。夜、寄宿舍の親しい人達が會ひに來た。全部で十二人。非常に愉快。

あの美しい白い兎が遂に死んだ。彼は昨日黑兎に嚙まれ、さき子の親切な手當の甲斐もなく、今朝息を引取つた。彼は柔いむく毛と可愛い眼をしてゐた。彼を見る程のものは皆彼に馴染んだ。余に取つて悲しい知らせだつた。余の考へは亂れ、生存の意義と云ふ問題の圍りをさ迷つてゐる。こんなに早く、死ぬだけの爲の樣に生れて來たあの兎の生存に何の意義があるのか。

七月十四日。火曜。曇。今日から入學試驗が初まつた。余は試驗に出るのが嫌ひである。若い人達か、不安と、長い間の努力に疲れ果てゝ、瘦せて蒼い顏をしてゐるのを見るのは無慈悲な事だ。

夜、桝本〔?〕、原、足助來訪。足助は十二時まで話して行つた。二人ともさめ〴〵と泣いた。二人に取つては、實に眞面目な嚴肅な時間で、余には久し振りのことだつた。あゝ！　青春よ！　汝は正直な魂に何と烈しく鞭打つのか！

汝の口を閉ぢよ。正直な魂には、悉く口には表し得ない悲しみがあるものだ。我々はその悲しみの本質を知らない。我々の祖先の悲しみと罪が、我々の心に結晶した樣に思へる。凡ての悲哀はこの根本原因から發する。これは殘酷な事實ではあるが、否むことの出來ない事實である。我々はこのことを認めて、生きて行かなければならない。こゝに人生の意義がある。一見、余の云ふことは論理に悖つてゐる樣であるかも知れない。形式論者の云ふ論理なんかに缺けてゝもいゝ。余は經驗の深い魂は、この事實を、我々の生存が事實であると同樣に、眞實であると認めると信じる。我々は心中にかゝる悲しみ――我々が我々の最も親しい、最も近いものにさへ傳へることの出來ないこの悲しみを持つて、生きて行かなければならない。こゝに人生がある。勝てる者をも負けた者をも、天は受け納れ給ふであらう。然し、それに屈從するのは卑怯である。決し

て、決して從ふな。

今夜、余の心はいと朗らかである。全く祈りたい程の氣持である。

七月十五日。水曜。曇。朝、國漢の試驗。午後、讀書に耽る。「レ・ミゼラブル」。愛子、兩親、大石、やす、飯田等に手紙を書く。座古の「伏屋の曙」續編を讀む。

七月十六日。木曜。晴。朝、英語の試驗。午後、答案を調べる。彼等の英語の力は恐しく貧弱である。中學校敎育に何等かの缺陷があるに相違ない。

夕方、精を出して、草の生えた庭を掃除する。この運動の結果で、氣持がよくなつた。夜、「レ・ミゼラブル」。やすと山本より來信。

憂鬱！　遂にやつて來た。物悲しい氣分だ。

內閣が代つた。桂が再び首相である。後藤が大臣になつた。

七月十七日。金曜。朝、雨。日中は晴れて、風吹く。

物理、化學の試驗。東京の試驗答案が今日着いた。東京では缺席八十三人あつた。午後と夜は「レ・ミゼラブル」を讀んで過す。不思議なことだが、時代は全く美的趣味を改造する。非常に人の心を打つ、大いに眞を描いた文句が多いのにも拘らず、我々はその話が我々の內部經驗から響き出させるものとは、似もつかぬものゝ樣に感じる。

來信、發信共になし。

七月十八日。土曜。曇。試驗の最終日。動植物の試驗。午後、「レ・ミゼラブル」を讀む。足助と橘が會ひに來た。足助は、淺場〔?〕果樹園の苺を持つて來てくれた。夜、「花袋集」を幾分興味深く讀む。彼の題材の取扱ひ方には確かに眞面目さがある。然し一個の作品は必ずしも眞面目のみを以て創られ得るものではない。味ひ得べき文學作品を作るのには遙かに多くの要素を要するものである。彼の情熱描寫は、生々としてゐて信ずるに足るが、余の印象では威嚴に缺けてゐる。彼は題

材を記述するに當つて、陽の光りの如き、玲瓏たる良心をもつて、描いてゐるとは思はれない。彼はその必要を感じてゐる、然しある主義の人がその主義に對する時の樣に、彼の題材を威嚴を持つて取り扱ひかねて居る樣である。又彼が、漠然と自然主義作家と云ふ名で呼ばれて居るヨーロッパ作家の影響を、深く受けてゐる事は明かである。彼の調子には何處か、外國的のものがある。

七月十九日。日曜。朝、曇り、後晴れ、風吹く。午前、日曜學校。それから試驗の用事で大學に行く。諫早孃は缺席だつた。それは彼女の學校の校長が、他校に榮轉したのが餘りに悲しくて、日曜學校に出席出來なかつたのださうだ。午後宮部博士訪問。それから、子供が手に花を持つてゐる、余の大好きな繪を諫早孃に上げに行く。余が、それを彼女に持つて行く動機が自分ではつきりわからない。だから、彼女に會つた時、どんなにどぎまぎしたかは直ぐに想像し得るだらう。余も殆ど何も彼女と話さず、威かされた兎の樣に飛んで歸つた。通りで、愛嬌のよいそのお母さんに會つた。西村を訪問。夜、後悔と羞恥の中に過す。余は何故あんなものを彼女に持つて行つたのであらう。終夜、答案採點に過す。

七月二十日。月曜。晴。風あり。〔省略〕

七月二十一日。火曜。晴。正午、森本一家を停車場に迎へる。試驗の用事。獨歩の「病床錄」と「國木田獨歩」を求める。我々は、彼を得て、世界人として立つた最初の文學者を得たのである。

余が彼を賞嘆するのは、彼がその生涯を全く彼の信ずる所に從つて送つた、その堂々たる態度である。彼は人生の凡ての傳統的、習慣的の訓誡を無視して、自己獨特の主義を創造しようと努めた。勿論彼は自らの主義建設に際して、多くの誤謬を犯したが、時の流れにつれて、半ば腐れかゝつてしまつた舊い習慣に、卑怯にもくつゝいてゐる人々よりもどんなに氣高いであらう。現代の如き渾沌たる時代に於いては、我々も亦彼の如き人生觀を持たねばならない。併し更に成功の可能性と、合理性を持つたものでありたい。先づ我々は勇敢でなければならない。我々は他人の風評や、批評に負けてはならない。

森本の家族と愉快な一夕を過した。靜子さんが森本のおつ母さんの所から來たといふ卵を持つて來てくれた。――彼女の

心からの贈物――余は何物よりも嬉しく味つた。

七月二十二日。水曜。晴。心好い一日。朝早く學校に行き、終日採點をし、夕刻終了。

謙早孃から來信。

七月二十八日。火曜。晴。朝、學校。それから、札幌驛發十一時四十五分の汽車で狩太に行く。農場を訪ねて、一年中たまつた用事を片づけようとしてゐるのだ。余は此の仕事を半信半疑を以て見てゐる。一方に於いては、澄んだ良心を持つて所有主であり得るのだが、他方には余の主義がそれを否む樣な氣がする。心中に不安を感じてゐるので、此の仕事にかゝることは、余にとつては常に恐しく不愉快である。停車場で吉川の父に會ひ、事務所に行く。この奉建築にかゝつた建物は出來上つてゐた。二室(六疊と八疊)より成り、我々の住む爲につくつたのである。どちらかと云へば貧弱な農場の中に、こんな綺麗な家が見えるのは、余には恥かしい。然し實際のことを云へば、我々は東京でも札幌でもこれ位の程度の生活を樂しんでゐるのであるから、こゝにゐる時だけ、貧乏暮しをするのは却つて氣まぐれなことになるのだ。この建物の贅澤さをかれこれ言ふ前に、自分の生活を全然變へなくてはならない。己が主義に從つて生活して行くと云ふことは、かう言つた風に難しいことなのだ。

此處の耕作事業を如何に處理して行かうかと深く考へ乍ら、事務所の方へ歩いて行つた。自然にトルストイの「若い地主の朝」を思ひ出した。淋しい心持に捕へられた。

吉川家の人と十一時まで話して、熟睡。

七月二十九日。水曜。曇。甚だ蒸暑い。朝、農場を視察に行く。昨年の夏に比すると非常な進歩。それから、不意に中日名にゐる田島に會ひに行きたくなつた。十時四十分の汽車に乘つた。彼は農場にゐなかつたので、余はその細君に會つた。元氣のいゝ、勤勉な、陽氣な細君である。彼女は余の爲に部屋を掃いて、茶菓を勸めてから、余がまるでそこにゐないかの樣に、自分の仕事を初めた。田島は何と似合の妻を持つてゐることだらう。田島は風變りな男である。人生に對する彼の平凡

な、堅實な、勤勉な態度は現代の青年には珍らしい。夕方、其處を去り、磯谷に通ずる道を歩いた。余は再び、深い思ひに沈んだ。余は一々具體的に書下すことは出來ないが、様々のことを思ひそして考へた。時々、小川の邊りに立ち停つて、自然の深い靜寂の中に聞える時鳥の鳴聲を眞似したりした。遂に余は道に迷つて、五時二十五分の狩太行きの汽車に乘り遲れ、停車場の傍の宿屋で十二時まで待たなくてはならなかつた。その宿屋には十五歳位の少女がゐた。余はその少女を大變に可愛いゝと思ひ、遂に彼女を捕へて、接吻した。彼女は余に抗ふ所か、明かに余にすがつて來た。自由な自然兒となつて、彼女にしたいだけのことが出來たらどんなにいゝだらう。あゝ！　余は何と云ふ變な譯のわからぬ者であらう！　時には、余は死ぬ程までも嚴肅であるかと思ふと、時には非常に惡戯氣が多く、元氣一ぱいで、余の上に重荷となつてゐる凡ての評判、習慣をかなぐり捨てる事などは何でもない様な氣がする。

十二時の黒松内行きの汽車に乘る。若い婦人の傍に腰を下す。彼女も亦美しいと思ひ、出來るだけ彼女に身體を寄せようとした程、自分は好色なのである。然し、今度は非常な羞恥と墮落の氣持が伴つた。遂に余は、怖れと嫌惡を持つて、彼女から身を退けた。實際、自分自身を怖れ、腹立たしく思つた。黒松內の宿屋で、ちよつと眠つた。

七月三十日。木曜。昨夜遲くから恐しい暴風雨。暗澹たる風と、時々降る雨を伴つて夜が明けた。四時に起き、五時二十五分の狩太行きの汽車に乘る。石澤夫人に會ふ。停車場で吉川に會ひ、ホテル滯在中の室蘭局の大谷、野村に會ひに行く。彼等は余の農場が私有財産として許され得るものなりや否やを視察に來たのである。それから農場に行く。然し、雨がひどく降つて、農場を視察することが出來なかつたので、用事を明日まで延ばした。

午後、吉川と農場の仕事に就いて話し、少し午睡。夜、吉川老の無益なお喋り。余はすつかり疲れ切つてしまつた。

七月三十一日。金曜。昨夜より雨。實に靜寂。

吉川の妻は昨夜加減が惡かつた。彼女は二三度卒倒した。〔以下四行邦文〕

自殺をなすものあれば、直ちに意志の薄弱を以つて之れを責む。情事をなすものあれば、直ちに肉性の墮落を以つて之れ

を責む。不敬と稱するものあれば、直ちに狂暴を以つて之れを責む。責むるもの思へらく、此の如くせずんば自殺者、溺惑者、不敬漢の續出するを如何せんと。憐れむ可し、此の腐敗せる老婆親切。彼等は實に最低度の腐敗を釀さんとするものなり。我は此の如き僞善をなさゞる可し。此の如き僞善をなすを死より惡む可し。

八月一日。日曜。晴。甚だ暑し。(華氏八十六度)。視察官が十時半頃農場に來て、視察し初めた。小林農場の支配人と、我々が同伴した。ひどい暑さ。仕事は六時半迄かゝつた。夕方、太陽が二つの山の頂に沈み、涼しい微風が吹き初めた頃になると、邊りは幸福に滿ちた景色と變つた。マカリヌプリ山の頂きは、雪の樣に白い美しい雲の帽を戴き、他の連山は靑味を帶びた帶の影――いろ／＼な穀物のみのる豐かな野を蔽うてゐるその影の中に消え去つた。余は麥畑の眞中に立つて、恍惚としてあたりを見渡した。彼方、南の空高く、三日月の樣な白く光る輪がかゞやき、あちこちに時鳥が鳴いてゐる。甲蟲がおごそかな大氣の中を飛び廻つてゐる。(甲蟲の飛ぶのをこれ程面白いと思つたのは、初めてのことだ。他の空飛ぶ蟲には見られない感じを與へる。)蝶、蜜蜂が相變らず、花から花へと忙しく戲れてゐる。遙か彼方には、あちこちで、燃える樣な牧草の草原から出る薄紫の煙が、人の住んでゐることを物語つてゐる。あゝ、雄大な自然よ！　如何に汝は、その仲間に捨てられた、汝の息子を慰めてくれる事だらう！

歸つて來たら、疲れ切つてしまつた。吉川の妻が又惡い。その一番下の子供はまるで無邪氣で、病氣がどう云ふものかを知らず、母の懷ろに入つて、乳を吸ひたがつて仕樣がない。いけないと云はれて、一夜中聞く人の心をさく程、泣きつゞけてゐた。

今私の心はあらゆる田舍の人の樣に單純である。眠りには夢がなく、仕事に何の野心もない。然し、余がこの狀態をどれ位續けて行くことが出來るかは疑問である。大多數の友人と比較すれば、余にはかゝる生活を續け得る可能性があるとは思ふけれど。

余に、これまでの余の生活を全然放擲して、新しい道に余自身にもまだはつきりしてゐないが、全身を捧げる時が近づき

給ひし最大の貴重なる惠みと思つてゐる。神よ、御心のまゝに余を導き給へ、余の望みは、たゞ自我を生かし得れば足る。

八月二日。日曜。美しく夜が明けた。野村が九時半頃來た。一時、小林と我々との間の境界線の測量を終へる。野村は我我所で晝食をした。彼は、獨立教會に屬してゐたことがあると云つた。彼は道廳の新規則を示した。それを夕方までかゝつて寫した。それから農場を見に吉川と出かけた。今日から七夕である。どの家の前にも飾りがある。色のついた短册と花の下つてゐる柳が、今は亡き魂を迎へる爲に立つてゐる。こんなお祭には、何か非常に心そゝる詩的なものがある。こまやかな尊敬と興味をもつてながめた。

風に吹かれて、枝が動き、樹が頭を垂れるのに何と心を惹かれたことであらう！　そこに優しい愛撫がある。ほんとに美しいものだ。

八月三日。月曜。少し曇り。蒸暑し。朝と午後、小作人の家を一軒々々訪れる。興味深し。新しい規則を寫す。

八月四日。火曜。曇。七時二十五分の汽車で、農場を去り札幌に向ふ。一時頃札幌着。直ぐ森本の家を訪れ、もてなされる。寄宿舍に歸り、それから佐山の所に行く。一緒に農場に行つて、吉川の妻を見舞つてくれないかと頼んだ。喜んで引受けてくれた。

八月五日。水曜。昨夜より美しい雨。朝、學校と道廳に行く。森本の家で晝食。それから竹崎の家。子供が產れてゐた。眞劍な話をした。彼は現在の地位に非常に滿足してゐる樣である。それに反して余は、相變らず自分でそれとはつきり判らない何物かを焦り求めてゐる。

夜、部屋で過す。今晩は蚊がひどい。殆ど眠れない。

この二三日の内に恐しい運命が余を待つてゐる。余はこの日記に、烈しい生死の奮鬪の記錄をつけようとしてゐる。もし何の助けもなかつたならば、人よ、汝の信念と勇氣を以て邁進し、人生に於いて最も慰みあるものと信ずる事を敢行せよ。

男にせよ、女にせよ、悲憤、悲慘の故に死せしむるも可なり。余は石の樣に冷膽になるべきである。主義を持ち、其の情熱を持つものは、時としては、その邪魔になるものは何でも犧牲にする位の、暴君とならなければならない。
女の樣な同情と憐愍を捨て去れ。汝は無慈悲にならなければいけない。さめ〴〵と泣くものを、屠牛者の冷かさを以つて眺めよ。あゝ。あゝ！

八月六日。木曜。曇。朝、農場問題で宇野に會ひに行つた。彼は柳に風と余をあしらつた。こんな男に抗ふのは余の力では出來ないと思つた。彼等は異國に住む人だ。
森本の家で晝食。夜、足助の所へ行く。我々は停車場へ高知〔？〕を迎へに行つたが、無駄だつた。それから逢阪の所へ、それからアリアイ・レストランに行く。そこを出たのは遲かつた。余は蚊帳を持つてゐないので、蚊帳で一夜を過すべく、逢阪の下宿に宿つた。風がひどかつた。余は全く眠れず、四時半同家を出た。

八月七日。金曜。曇。八時頃雨が降り出した。佐山と共に、十一時四十五分の汽車で狩太に行く。六時頃同地着。

八月八日。土曜。荒れ模樣。終日家にゐて、何もしなかつた。佐山は病人を診た。彼女の病狀は我々の心配してゐた程ではなかつた。夜、眞面目な話。

八月九日。日曜。晴。暑し。（華氏八十七度）。今朝、佐山は家に歸つた。終日規則を寫して過す。夜、吉川と農場の仕事に就いて話す。

〔此處に農場の經營に關する覺え書あり、略す。〕

八月十日。月曜。晴。今朝、東京に向つて農場を出發する。夕方、函館着。末光に會ひたかつたが、彼はゐなかつた。

八月十一日。火曜。好晴。田村丸に乘つて海峽を越えた。卒業生の鈴木に會つて、色々話をした。靑森發一時四十分の汽車に乘つた。夜、美しい月。
深更、夜汽車の中で記す。

八月十二日。水曜。烈しい雨。雨中、上野に十時半着。御両親及び英夫に會ふ。夕方隆三が會ひに來た。七ケ月振りに家に歸つての感じを、詳しく書留め得る氣分になつてゐない。

八月十二日から日記を捨てゝゐた。その時から、書くべきことがなかつたのではなく、結婚問題で心身共に忙しかつたからである。事毎に起つた感じと思ひを一々忠實に書留めて置かなかつたことを甚だ後悔してゐる。

歸宅するや否や、稍々不安をもつて余を待つてゐる家の中の空氣を感じた。くらめく程、鋭く感じた。父上は余に飯田の事件の詳細を語り、敵に對する父上の計畫、及びその事件に處する態度をお述べになつた。余は農場問題をお話し、更に如何にしてその能率を增進するかに就いての余の計畫を説明した。然しかゝる問題以上に、我々二人の間には、より切迫した問題があつたのである。

遂に核心が現れた。余は結婚と言ふ恐る可き問題に直面した。父上は、單に西洋風のみによつて嫁を選んではいけない、籤を引く樣なものだと思つて滿足しなければいけないと、繰り返し說敎なさつた。父上が結婚させようとの親身の懸念を持つて居られるのを見ながら、しかも強く昔風の信念を固執してゐられるのを見る時、余はこの二つの態度に挾まれて、如何に身を處すべきか大きなディレンマに陷つたのである。父上の身邊には多くの困難な問題が群つてゐて、それらは皆、その內の一つでもが失敗に終れば、父上を全然打ちくだき去る事の出來る程のものであつた。事情が最惡でさへなければ、喜んで出來得る限りに自らを犧牲にしようと思ふ程、父上の御心を憐れみ同情した。然し、事情が非常に惡ければ、結果としてどんな不幸が起らうとも、如何なる壓迫にも從ふことが出來まい。

候補者の申出が二口ある。兩方とも申分ない樣である。多くの人々が仲に立つて、候補者自身やその家族の實相を探らうと努めてゐる。一人は三浦(海軍士官)の娘である。然し、彼女はその人の本當の娘ではなく、ある下宿屋の娘で、そこに彼の息子が住んでゐて、戀仲になつた少女である。三浦は、自分の息子の妻としては他の少女を選び、問題の少女を高等師範

學校に入れて教育したと云ふことがわかつた。それでこの方は駄目になつた。他の方は神戸在住のある富豪(某衆議院議員)の妹である。彼女の姉は、土方教授の妻である。土方は、余が彼女の夫として適はしくないと思つたに違ひない。それに來た返事は餘り香しくなかつた。此くして、多くの人が最上と思つて選んだ二口は駄目になつた。兩親もいらくしてゐられた。然し、余の方は、假令少しの間にせよ、氣が樂だつた。

御兩親は、お選びになつたのが皆香しくないので、來年の夏までこの問題を延ばさうとして居られた所へ、不意に父の古い同僚の一人である石川氏から、今一つの問題が起つた。石川氏の話によれば、彼の碁仲間に一陸軍士官がゐる。その人に娘が二人あり、姉はもう婚約濟であるが、妹の方はまだである。が、石川氏はどんな娘か知らないと云ふのである。然し、も少し話をすゝめて見ようと云ふことになつた。話をすゝめてみると、その娘の父の申分が、余がその娘と知り合になつて、お互ひが全部知り合ふまで親しくし、それでもし兩方とも氣に入つたら、婚約すればいゝと云ふのであつた。これは余に願つてもない事だつた。余はそれを聞いて喜んだし、父上も喜ばれた。これこそ、余が頑强に主張してゐたことなのである。

此くして、見合ひの日取は九月一日と決められた。それは二百十日であつた。夕方、雨が非常にはげしく降つて來た。兩親と余は、日比谷公園の松本樓に行つた。直ぐに、石川、神尾兩夫妻とその娘が來た。我々は階下で會つた。余は、その晩は、自分でも驚いた位、氣が落着いてゐて大膽であつた。少女は非常に羞しがつてゐる樣に見えた。余は時々、彼女に視線を向けて、その時々に彼女がどんな考へを持つてゐるかを讀まうとした。然し、彼女は非常に愼しみ深く臆病で、一度たりともその視線を余と合せることがなかつた。然し、何となく彼女が余に好感を持つたに違ひないと信じた。余は羞しがりやで內氣であるにも拘らず、あんなにうまく振舞つたのは、全く不思議であり、今でもわからない。皆と寧ろ雄辯に話し、極く自然に笑つた。余は、その夕は、どちらかと云ふと批評的であつた。穴の明くほど見て、その短い一夕の間に彼女の性格をすつかり知り盡くさうとした。そして、その企てにある程度まで成功した。それ以來、彼女に就いての自分の考へは殆ど變らない。彼女は年の割に子供つぽく、極めて嚴格な家庭に育てられた娘だと思つた。彼女は氣早やすぎるとしても、どん

なことでも、行動、感知し得るほど鋭敏である。彼女は汚れのない、澄み切つた、愛らしい心の持主で、それが彼女の一番貴いものである。彼女は確かに禁慾的ではないらしい。然し、彼女の優しさがそれを補つてゐる。彼女は決して、強い意志主張をもつてゐる女ではない。巧みな暗示で夫を助け、思ひ設けぬ樣な勇氣を以つて夫を慰め得る女ではない。然し、彼女は夫が困苦に陷つた場合には、心を投げ出し、同情の涙を注ぎ得る女である。彼女はコーデリアではないが、デスデモナであり、オフエリアである。彼女は、人を説服し得る樣な人格で以つて、男を勵まして仕事をさせる女ではなく、その優しさと服從とによつて、夫に事を爲さしむる女である。女は女らしくしてゐるがいゝ。余は女の勵ましを必要とする程弱くない。寧ろ余は、賴りなき女性を翼の下に被つて、彼女をあらゆる攻擊から守つてやりたいのだ。安子――彼女の名を安子と云ふ――はこの望みにかなふであらう。

食卓の話も終つて、別れる際に、安子は初めて、素早く余に沁み込む樣な視線を送つた。それは余が容易にわかる樣な、深い〱意味を含んだものだつた。然し、余の心は彼女を得ようと決心する程強く動かされはしなかつた。

その翌日、二日に神尾家の人々は鹽原に發つた。我々は三日にその後を追つた。余は荷物の中に、メレジコフスキイの「ヘンリック・イブセンの生涯と作品」と、ダヌンチョの「パウロとフランチエスカ」を入れた。秋雨が降り續いてゐた。御兩親は時折り眠つて居られた。余は讀書に夢中であつた。讀書してゐたら、心中に異樣な感情が湧いて來た。余は胸のあたりに戰慄を覺えた。どんな感情の爲に、かうなつたのか自分でも説明が出來ない。

その日の薄暮、福渡の和泉ホテルに着いた。あの人達も同じ所にゐるものと思つてゐたら、後になつて枡屋に宿つてゐることがわかつた。それで、その夜は我々はお互ひに會ふことが出來なかつた。

この宿屋で我々の給仕をしてくれた若い少女に、余は心を留めて見た。彼女は非常に人を惹きつけるところがあつた。顏が綺麗な爲ではなく、態度が洗練されてゐるからである。彼女の顏つきには、すぐに眼についた素朴で正直さうな所がある。この事を余は兩親に話した。お二人も亦、彼女を注意して御覽になつて、心からお氣に入り、東京に連れて歸りたいとお望

みになつた程だつた。けれど、その少女はこの宿屋の娘だと云ふことが判つて、さうすることも出來なかつた。

四日の朝は晴れてゐた。我々は桝屋旅館に行つて、彼女の父（五十五六の頑健さうで、質朴な、世間離れのした、開けつぱなしの、陽氣な人）と彼女の姉の愛子に會つた。安子があどけない方とすれば、愛子は沈み勝ちの方である。愛子は考へ深く、安子は快活である。面白い對照だ。我々は皆で古町まで行き、フセン樓で少憩した。

余はこの散歩中は寧ろ控へ目の方で、彼女に少ししか話しかけなかつた。だから彼女の方は尙の事余以上に默りがちであつた。然し、この間中に、我々はお互ひに心を惹かれてゐると云ふことを知つた。歸り途、ひどい雨に遭つた。午後、彼等が我々の方に來て、話した。

夜、余は彼等に會ひに行つた。彼女の父は非常に丁寧に余を迎へてくれ、夕方一ぱい話をして來た。彼女に話す機會は殆どなかつた。今度は、彼女とその姉が余を仔細に注意深く觀察する番だつた。確かに、彼女はさうしたに違ひない。然し、余はそれが爲にと云つて特に羞かしく感じはしなかつた。

五日、我々はウオトメに行つた。今日は今までよりもずつと皆親しくなつた。途中、余は高い崖の下にある不動湯に下りて行つた。余がそこに少々長くゐたので、父上は何事かとお思ひになつて――父上は何時も余の奇癖を心配し、余が不意の衝動で、何か無謀な事をしさうだと思つて居られるのだ――余を探しに男をおよこしになつた。然し、余は皆の休んでゐる所に行く途中でその男に會つた。余がその家に近づくと、彼女は二階から見てゐた。余も同時に彼女を見た。我々はお互ひにその視線を合はせた。彼女の眼にはたしかに優しい懸念の情があつた。彼女は余の視線に遭つて、たじろがなかつただけでなく、實際、どうしたのか知らうとしてゐる樣子であつた。その時の彼女の表情は、確かに余の心の髓までしみ入つた。彼女を見た余の視線には感謝の情があつたに違ひない。

家に歸る途中、愛子、安子と余は龍華瀧を見に行つた。我々は崖道を上り、危い獨木橋を渡らねばならなかつた。安子はいつも余の助けに縋つて、上手にやつてのけた。然し乍ら、我々はお互ひにその愼しみを破ることなしに別れた。

六日、東京に歸るべき日である。余は彼等の先に立つて歩いて行き、獨り樣々の物思ひに耽つてゐた。山の麓の小さな寺の所まで來て、彼等の乘つて來る馬車を待つた。約一時間程して馬車は來た。余は安子の眞向ひに腰かけた。余は彼女をぢつと見てゐたら、强い愛情の念にとらへられた。見よ！ 遂に余は彼女の魅力に捕へられた。余は胸に不思議な不安を感じ、彼女の姿に眼が眩んだ。輕い、淸い、物悲しい思ひに時折り捕へられた。余は、彼女と二人きりでをられたらと、どんなに望んだであらう。——此處まで書いて來たら、余は急に彼女をいとほしむ心におそはれて來た。實際、この數日、冷やかに彼女を思つてゐた。余は彼女の寫眞を取り出して、それを抱いて、烈しく接吻した。神よ！ 惠みを與へ給へ。彼女を愛して居ります！

汽車の中では、余は彼女の傍に坐り、彼女と寧ろ雄辯に話した。然し、余の深い思ひを彼女に打ち明けるのは易しいことだと思ふ程、急にごく打ち解けて來る樣になつたのは、上野に着く少し前のことだつた。

余の人力車が停車場を出る時、安子は入口に立つて、余は彼女の全身の王であるのだと信じ得られる程、非常に打とけた挨拶をしてくれた。

その夜から余は、長い間捨てゝゐた祈りを再び初めた。彼女は余を實に眞面目にしてくれた。

その夕から十三日の夕まで、余は彼女に會はなかつた。

結納の取り交しが十一日？に行はれた。斯くして安子は形式上余の半身となつた。

十二日の夜、我々は彼女の家で御馳走になつた。我々は盃と指輪を取り交した。余はこんな嚴肅な時を經驗したことがなかつた。

十三日の夕は神尾家の人々の接待に當てられた。その夜から安子は我々の家にゐた。

十四日の朝、安子と余は庭を散歩した。正午、余は彼女を余の書齋に伴ひ、余の社會的、個人的、宗教的狀態を悉く說明し、名聲と財産を以つては彼女を滿足さすことが出來ないことを力說した。安子は余の云つたことを理解し、余の申出に同

意した。余は――初めて――彼女の手を握つた。一生忘れることの出來ない感じを持つて――

夕方、我々は新渡戶博士に會ひに行き、氣持よく話した。

十五日、余は荷造りをした。安子は主婦の樣に、余の手傳ひに來た。我々はトランクの傍に坐つた。我々の話は、二人の間には何のへだたりをも忘れ去る程、心好い親しいものだつた。余は彼女をしつかり抱いて、接吻した――接吻した。彼女は泣いた。

夜、余は札幌に向つて、東京を去つた。十七日、札幌着。

彼女の最初の手紙は二十日に着いた。第二のは二十四日に。

九月二十六日、土曜。曇。今日授業なし。朝中、近代史を讀む。カーライルの「フランス革命」を讀み初めようと思つてゐる。晝食の時、吉川が農場問題のことで會ひに來た。彼の考へによれば、小作人の大部分が何處か公有地を買つて其處に移らうとしてゐるらしく、農場の監理上大打擊となるかもしれない。

森本が、二十三日付けの安子の手紙を渡すだけの爲にわざ〳〵やつて來てくれた。思ひやりと同情に、心からの感謝をした。今度の彼女の手紙は大變心のこもつたもので、余の愛情を再び湧き起さしめた。

それから足助が來て、彼の家庭問題の解決を余に求めた。彼が、異常な力で身邊に逼つて來る困難に耐へるに足るだけの力も、十分に强固な意見もないのを、憐れまざるを得ない。彼は全くその境遇に打ち挫がれてゐる。その結婚問題にも非常に悲觀的で、彼の健康と富とを持つてしては妻を娶り、子供を養ふことが出來ないと考へてゐる。

夕食後、龍川と大西が話しに來た。大西は殆ど九時過ぎ迄ゐて、文學、國語改良問題、その他種々話した。彼は確固たる個性を缺いてゐる。彼の全存在は全く感傷主義に支配されてゐて、美しい蜃氣樓を見る以外には、何事も成就し得ない白中夢を貪るものである。余も曾つては正しく此の如きものであり、今も尙屢〻さうである。他人のかゝる態度を見ると、余の心は烈しい嫌惡を以て反撥する。而も、余も亦、詩的感興が高潮を示す時はかゝる時であると思つて、かゝる感情に執着する。余は、過去の感傷主義を抹殺し、再び淺薄な耽美主義には、決して戾りたくないものである。

可哀想なものよ！　余は彼女の寫眞を懷ろに入れて眠つた。

九月二十七日。日曜。天氣晴朗。秋らしき好晴。朝、安子に手紙を書く。それから日曜學校に行つた。あそこにも何等かの改革を施さなければならない。學校經營上何かの進歩をせしめる爲に、余は出來るだけのことをしようと決心した。

靜子さんの病氣を見舞ひに森本を訪問。彼女は昨日から惡かつた。余は彼女及び森本を氣の毒に思ふ。神よ！　彼女に健康を與へ給へ。そして、彼女が、彼女の人生に對する明るい態度によつて、夫を元氣づけ、勵ますことが出來ますように！

安子の愛が余をして、余に接觸する凡ての人に對して同情深くせしめた。

森本の家を出で、東區で二三軒貸家探しをした。一軒は相當に氣に入つたが、余は、長山との約束を破ることが出來ないと思つた。

夕方、リンカーン協會の秋季例會に出席する爲め、豐平學校に行く。荒川と逢阪が話をした。逢阪の演說には熱があつた。彼が社會主義宣傳の仕事に携はるなら、すぐれた煽動家として有名になるであらう。

父上より來信。

九月二十八日。月曜。風あり。晴。學校に行き、三時間教授。余は、獨逸語及び佛蘭西語に熟達することの必要を強く感じた。少くもその內一つを早く初めなければならない。ゴスの「イプセンの生涯」を興味深く讀み初める。

農場問題について父上へ手紙を書く。安子に葉書。夕方、借家のことの相談で野村を訪れたが、留守だつた。そこで森本の所へ行く。靜子さんは何時もの樣に、話をすることは出來たが、餘り良いとは思へなかつた。其處で、八時過まで話す。

安子からの歌二つ書いた葉書を受取る。

家に歸つて、再び「イプセンの生涯」を讀み初める。河野夫人と田島に手紙を出す。隆三と神尾毅一より葉書來る。

鈍重、怠惰な生活より踏み出でよ。靑年に向つて開かれてゐる、かゞやく門があるではないか。我々の內の誰かゞ、その鍵を握る可きである。この絕好の機會に乘じ損ねしむるものは、臆病と怠惰である。

余は、實際上の知識の範圍を擴げて、出來得る限り廣い領域の上に余の城を築かねばならない。この條件こそ、我々靑年に要求されてゐるものである。

九月二十九日。火曜。雨。夕方より荒れ氣味。朝、氣のむくまゝに二枚手當り放題に繪を書いて見る。全く失敗。「諸所の印象」と云ふ題で畫かうと云ふ考が浮んだ。筆を大ざつぱに使つて、余の訪れた場所の「情緒」(Stimmung)を現はして見ようと思つてゐる。

學校に行き、ぶつ續けに四時間授業したので、少し疲勞した。午後、足助來り、二時近くまで話して行つた。それから「マグダ」を讀んだ。數頁進むまで、この劇の上演をアメリカで見たのをすつかり忘れてゐたのは不思議なことである。ズーデルマンが、イブセンは扨ておき、ハープトマンとも同じレベルに立ち得ないと言ふ論は正當である。確かに彼は、人生に對する眞の藝術的態度に缺けてゐる。彼の作品には、「フラウ・ゾルゲ」はその不思議な例外であるが、否むべからざる皮相な作爲がある。「聖ジョンの火」をよく知つてゐるものに取つては、今云ふこの劇は前の繰り返しである。二つの劇に於いて、中心思想や出場人物は全く同一の型である。

ユーゴーの作少しと、モリエルの日本譯を讀む。一つとして特に余の心を惹くものはなかつた。

風が彼女の住んでゐる南方から吹いて來る。神よ、彼女を護り給へ！　神よ、余を淸めて、全く新しきものとなし給へ。

今日の樣な日には、悲しく憂鬱な思ひが余に襲つて來る。自然の諸々の原素が調和してゐない。嵐が革命を孕んでゐる。嵐を見ると云ふことは何と恐しくも壯大なことであらう。

九月三十日。水曜。終日、雨。朝、ゴールキイの「――」を少し讀む。(今、丁度此處に本を持つてゐないので、その小說の題が思ひ出せない。) 興味多し。彼の作品は何時も獨特で、我々が日常接して居る作物とは趣を異にしてゐる。彼の率直にして大膽なる同情心よ！

三時間授業。溝淵教授と學生との間に、英語の學級編制の問題について、面倒なことが起つた。吹田氏と語る。我々がお

互ひに話す時は何時も、我々二人の間に親しい共鳴を感じる。

午後、病氣で學年試驗を中止した四學生に試驗をする。その間ゴールキイを讀み續ける。湯に入る。官命で洋行する坂岡の爲の送別會に出席。歸宅後、非常に詩が讀みたくなつたので――最近珍しいことなのだが――ハイネ、ポー及び二三の小詩人の詩を涙と深い思ひをこめて讀んだ。あゝ、安子よ！　お前は何と強く私の心を捕へてゐる事だらう。お前の名前を思ふだけでも、涙にひたるのである。時々、お前の淺慮故に、私を牽きつけなくなる程、私は冷かに懐疑的になる事がある。恐らくお前は、餘りに子供過ぎ、餘りに單純なので、私の眞摯に男らしく捧げる、烈しい戀を理解出來ないであらう。恐らく、私は餘りにも強い思ひを抱いてゐるので、何人も私の熱情にふさはしく報いることが出來ないであらう。安子よ！　お前の爲に、私は私の冷たい心を凡て捨て去り、たゞお前を愛し、お前を抱く爲に、私の信頼と感情を凡て注いだのである。お前がもし私を理解しない時にこそ、記憶せよ、悲しみはお前の上にあらう。お前は自身を取り返しのつかぬ悔恨に追ひやり、私を何人も、如何なる力も沮み難い絶望に追ひやるであらう。さらば、私を愛せよ、汝の全心を捧げて。

あゝ！　愚痴つぽい者よ。沙漠の中に眞珠を求めようとする人間だ。地上の最も憐れなものは理想主義者である。理想主義者は、人々が暗黒の惡魔しか見ない所で、天使のみ見るものである。この矛盾！　余は生れなかつたらよかつたのだ！

十月一日。木曜。朝、日本晴。秋の氣が人の心に沁みる。朽葉が澱める水の底まで靜かに沈んで行く樣に、萬物が何かの底まで落ちて行く樣な氣がする。凡てのものをして、深く沈めしめよ。そこに又、何か人生の別種の泉があるであらう。

朝、授業に出る。午後、水産科に出るのを忘れて、限りなき悔恨と自責を覺える。心ない事をしたものだ。死ぬまで恥ぢるべきである。

夕方、長山の所に行く。余と一緒に住む筈の松尾が今夕、移る筈になつてゐた。然し、彼に會へなかつた。今日外遊の途に上る坂岡教授を見送つた。

河野夫人の容態がこの數日非常に惡いとのことを手塚から聞いた。尙詳細が知りたかつたので、電報を打つた。

プリンス・クロポトキンから葉書。非常に貴重な彼の時間を余に割いてくれるとは何と親切な人だらう。余は、彼の心の單純さと、善い性格が、本當に好きだ。人は彼の樣にあるべきである。

安子の父より來信。安子はこの三四日何の便りもくれない。彼女は余が出さない限りは、決してくれない。この點、彼女が甚だ惡い。

神よ！　彼女（河野夫人を指すものと思ふ、編者）の生命を延ばし給へ。彼女はその人生を悲しみと乏しさの中に送つたのです。彼女に惠みを垂れ給へ。彼女に今一度だけその健康を取り戾さしめ給へ。そして、彼女が、靈の健全と共に身體の健康の眞の喜びを、今一度だけ味はしめ給へ。あゝ！　何と彼女は勇敢であつたらう。もう一度、少しの間でいゝから、彼女に會ふことが出來れば！

結局、余の爲すべき最良のものは死ぬことである。余は飛躍することが出來ない。余は跳躍することが出來ない。匍つて行くのみである。恥多き人生よ！

十月二日。金曜。午前晴、午後曇。朝、學校に行く前に、自ら「諸所の印象」と稱する、ナポリ、ソレント、ポンペイの繪を二三枚書きかけた。皆な駄目。豫科二年で「レ・ミゼラブル」の譯を初めた。

午後、ニイチエに關する評論を少し讀む。彼の思想の中には非常に暗示的のものがある。彼は凡ての現存の組織について肯綮に當ることを述べてゐる。

夕食後、川島が訪問する。（彼は留守）。佐山にその家で會ふ。行旅病者についての、悲しい話を聞いた。歸宅後、再びニイチエの思想を讀み續ける。

安子から何の手紙もなし。

手塚から電報來り、河野夫人の病氣が快方に向ひし由。有難し。

毅一に葉書を出す。

十月三日。土曜。朝、晴れ。午後風あり。朝、森本が來て、九月二十八日、二十九日附の安子の手紙を持つて來た。冷たい氣持で讀みはよんだが、讀み終つてから泣いた。余は何て意地惡なのであらう。余はこの數日本當に狂氣じみてゐた。余の心は、一陣の風に吹きまくられる塵の様に、不意の衝動によつてあちこちに吹きまくられるのである。憐れな武郎よ！汝はそれ程淺薄な人間なのか。自ら恥ぢるがいゝ。

あゝ、可哀想にも優しい魂よ！ 余は何と汝を威したことであらう。免して呉れ。

洴淵の倫理學の講義に出席し、新知識を得た。宮部、南の二十五周年祝賀が一時半より圖書館であつた。會が終つてから、渡邊と戸津が會ひに來た。彼等と豐平館に行つた。夕食が濟むと、學生の提灯行列が玄關の所に來て、二教授の萬歳をした。胸の迫る場景であつた。よい事だ。實際祝ふ價値がある。

安子は毎日手紙を出すと約束した。余は今夜、彼女の手紙を受取るつもりで、我知らず森本の家の前に立つてゐた。然し、時既に遲く、余は入るのが恥かしかつたので、明日の事にした。

十月四日。日曜。雨。陰鬱な天氣。朝、森本の所に行き、彼女の三十日附の手紙を貰つた。森本はこの數日健康がすぐれず、靜子さんも餘りよくない。余は實際彼女を氣の毒に思ふ。

安子は先月の二十九日から身體がよくないと手紙に書いてゐる。彼女は憂鬱になつてゐるらしい。愚かな少女よ！

大元氣で、日曜學校で教へた。午後、安子に告白の手紙を書いた。夕、學藝部の委員會。

十月五日。月曜。寒さきびし。晴。十月一日附の安子の手紙を森本が持つて來てくれた。いつもながらの優しい手紙。彼女の憂鬱な氣分も無くなつて來てゐる。返事を書いた。

出校、三時間授業。

午後、足助が來て、露伴の「頼朝」と四迷の「浮草」をおいて行つた。それから原來り、相變らず大きなことを話した。

彼と實驗所の方に散歩した。木の葉は既に鮮紅に染められてゐる。家に歸り、「太陽」その他を讀む。

夕食後、高岡教授訪問。余は、官立學校で教へるのが厭になつた。それは或る種の研究を閉鎖し、研究の眞精神を暴君の如く壓迫する。嘗つて、ブルウノーがオックスホオドを、「知識の古き窓」(an old window of intellect) と呼んだ。日本の大學が、すぐれた頭を持つた人々から、此くの如き稱號をつけられない樣に切望する。

今日は幸福な日であつた。手紙が澤山來た。ティルディ、リリイ、エムマから葉書。母上、信子、綿谷から手紙。信子は非常に憐れな手紙を寄越した。彼女は尙身體が惡く、ある事情の爲に夫と當分別居して、近來健康のすぐれない實母と暮してゐる。彼女は自分の事を、「友達のない女」と呼んでゐる。彼女が涯しなくあはれまれてならない。安子に手紙を書いて、信子に手紙を出してやる樣に賴まうかしら。可哀想な少女よ！

十月六日。火曜。朝、晴。正午から曇。彼女から便りなし。學校に行く。午後、各科會、四時半まで續く。夜、學課の下調べと、安子への手紙に過す。

溫度が段々下つて行く。

余は、自己の批判の力を失つた事は事實だ。安子は今や余には、凡ての德と、凡ての美を具へた女の樣に思へる。彼女の爲なら何時でも自分の命を捨て得る程いとしい者となつた。然し、「白狀するが、同時に、彼女が余に要求する以上の愛を、余は彼女に要求する。戀と云ふのはこんな利己的な性質を持つものかしら。それとも、余一人がかゝる利己的なものであるのかしら。

變な奴だ！　余は、これ程興奮してゐる時にも、これほど冷靜である。もし余が天才であるならば、自分自身の感情をさへも、冷たい公平な眼で見つめて、すぐれた作品を創ることが出來る。

蟋蟀さへも鳴かない。冬が近づいて來る。夏よ、さやうなら！　神は、人々がわびしさ故に死ぬことがない樣に、凡ての苦しみに十分な慰めを與へ給ふ。

ともあれ、余は幸福である。否、余は幸福ではない。余の將來には何か暗いものがある。死ぬことが最上の道である樣な氣がする。死ねたならば、その時こそ、余は至幸、至福の極點にあるのだ。余は甚だ憂鬱である。自滅である。余の人生は中途半端である。一時的の安定は余の奧深い動搖を慰めるものではない。あゝ、可愛いゝ安子よ！　汝は又、余に苦しみの時を忘れしめる玩具として、人形の役目をも爲し得るのだ。

十月七日。水曜。陽の光り、雨。荒れ。何んてはげしく變る天候だらう。秋の天候がこんなにも屢〻變るのに氣のついた事は、今までにない事だ。天地の樣子に何となく非常に不穩なものがある。まるで自然が多の近づくのを恐れて、喘いでゐる樣である。

登校。午後、森本から手紙を受取る。余の引越しに使ふ荷車を手に入れる爲、森本と納屋に行く。安子は非常に優しい手紙をくれた。彼女は何と可愛く、心細やかな女であらう！　彼女の獻心は余を强くする。然り、余は彼女が望むならば、余の命をも喜んで捧げるであらう。早く、彼女を眼の當りに見たいものだ。

午後、文武會雜誌の表紙の意匠考案に過す。夕方、表紙意匠の審査。小熊が勝つた。

今夜夢多し。どうしたわけか眼が幾度も醒めた。安子か河野の身の上に變事があつたのではないかしら。

十月八日。木曜。時々雨風が混つたが、うらゝかな秋日和。

登校。「マグダ」を讀む。午後、森本の家へ行つたが、靜子さんの他に誰もゐなかつた。少し語る。彼女は余に安子からの手紙を手渡しゝた。それから下町へ、簞笥その他の道具を求めに行く。歸宅後、安子の手紙を開き、殆ど死ぬ程威かされた。彼女は四日附の余の手紙を誤解して、余が彼女を捨てたと思つてゐる。手紙は涙と悲しみに滿ちてゐる。息も殆ど詰る思ひがした。如何にすべきか解らない。可哀想な子供よ！　余は幾度もおまへをおびやかしてゐる。彼女の惱みを思ふと、ぢつと坐つてゐることが出來ず、直ぐ手紙を書いて、出しに出掛けた。靜かな夕方で、一片の雲の彼方に月が現れ、その物悲しい光を放つて、人の世の隅々までも照してゐた。原を訪れて、余の不安を忘れようとした。然し、少し行つて急に氣を變へ

て、物思ひに耽り、考へに沈みつゝ、農場を彷ひ歩いた。余は自然の裡にたゞ獨りだつた。月が唯一人の道づれだつた。死の思ひが一瞬間も忘れ去り得ない程、しつかりと余を捕へた。悲しさの餘りに死んだ安子の、天使の樣な屍の傍に立つてゐる自分の幻を見た。あゝ、安子に取つても、今死ぬ方が幸福であらう。そして、余に取つては、地獄の底までも彼女に從つて行く方が幸福である。あゝ、安子よ、おまへの身も心も捧げた愛情のおかげを、自分がどれ程受けて居るか解らない。お前がありとあらゆるものを報いてくれたのに、私がお前を捨てるなんて！　おいで、おいで、可愛いゝ雲雀よ！　ぢきに治るよ。けれど、その時まで、お前の悲しみにつれて、私の心もどれほど痛むことであらう。

絶えず夢を見る。惡い癖だ。泣いた、泣いた。幾度も泣いた。憐れなるものよ、お前は本當にどうかして居るのだ。

十月九日。金曜。雨。風。それから好い日和。五日夜附の安子の手紙を受取る。彼女が身體を惡くしなければよいがと、眞劍に心配した程、悲哀、悲痛の思ひに充ち〳〵たものであつた。然し、この豫期しない事件によつて、少女の心と言ふものが、どれほど優しく、憐れなものであるかを眞實に知る事が出來た。かうした我を忘れての柔順さには、何とも言へない美しさがあるものだ。それなのに、自分の身をふり返つてみると、自分の現實生活に對する利己的な態度を悲しまざるを得ない。余は、彼女を眞の女らしさに導き行き、その眞の天職を成就せしむべきである。

午後、下町へ。安子に返事。

十月十日。土曜。概して晴天。時々雨。北三條東三丁目九番地に移轉。守屋、板倉、前田、米田、足助（足助の義理の弟が七日に死んだ）が手傳つてくれた。十二時に片づく。安子から便りなし。寄宿舍で余の送別會。

十月十一日。日曜。概して晴。朝、日曜學校に出る爲、教會に行く。途中、森本を訪れ、安子からの手紙二通受取る。一通は、前便の樣に悲しみに滿ちたものであり、他のは、やさしいお詫びの言葉で溢れるほどである。偉大なる神よ！　彼女は再び余の胸に歸つて來た。余は再び汝を威かすまい。

午後、原、逢阪、佐山の使、その他大勢余のまはりに集り、夜になつて湯池も來た。森本が夕食の直前に來て、安子から

の手紙を渡してくれた。非常に眞實の籠つた、同時に夢の多い手紙であつた。

十月十二日。月曜。天氣は數日來同樣、晴れたかと思ふと雨、雨かと思ふと風と言つた調子だ。文武會の運動部主催で、各教授及び學生の眞駒內へ遠足する計畫があつたのだ。八時出校。九時眞駒內へ出發。眞駒內は秋の木の葉で、色派手やかに彩どられてゐた。本當に美しい。この頃余は、段々と引込み思案になり、鮮紅の木の下に坐つて、何の邪魔もなく、彼女の上を思ひつゞけてゐた。余が、男性に與へられてゐる限りのあらゆる眞面目さと愛情を以つて、愛するもの丶ことを考へるのは、ほんとに快く、そしてわびしいものである。

あ丶安子よ！ どうして、お前は、私をしてお前を愛せしめる樣にしたのか。お前の單純な眞直な性質が、お前の人となりの奧底までも私を惹きつけたのだ。安子よ、お前を愛することを恥としない。お前は私の誇りなのだ。幻なのだ。天の賜物なのだ。神よ、かくも氣高き賜物を與へ給ひしことを謝す。彼女は私を、正しく、立派な、思ひやり深い人間にする。彼女を凡ての惡と不幸より護り給へ。これは、私自身の爲ではなく、眞理を世にあまねく知らせる爲である。何となれば、彼女が生存し、私を愛してゐると云ふ事實こそ、この世界に眞理が存在してゐると云ふ最も確かな證據である。

三時歸宅。途中、森本の家を訪れ、八日夜と九日朝附の二通の手紙を受け取る。特に後者は人心に觸れるこまやかなものである。彼女は信子の運命に同情を表はし、彼女自ら、信子の姉妹となつて彼女をはげまし、過ぎし日の事共を拭ひ去り、もつと明るい人生の半面に顏を向けさせる爲には、自分が最良と考へる事を爲さうと計畫を言つてよこした。彼女が信子の境遇に誰よりも思ひやりが深からうとは、容易に豫期出來ることだ。けれども、彼女を幸福にする爲の計畫を言つてよこした事で、初めて、彼女の心の機轉と理解力のある事を覺つた。表面は單純の樣であるが、確かにその心魂の中には、それが一朝花咲けば、人間のつくり出し得る最も氣高いものとなる善い種子を持つてゐる。あ丶、安子よ！ 心中あれ程までにはげしく懷疑的な態度をとつたことを許してくれ。今からは、全心をうちこんで、お前を信じ、愛しよう。神よ、彼女の愛に値する樣な心を余に與へ給へ。彼女が余の心の奧底に達することが出來て、其處からこの長い年月、熱心に護つて來た甘い泉

を汲み得さしめ給へ。あゝ、愛よ。何と美しいものなのであらう！

學長、今夕臺灣に出發。家が少しばかり家らしくなつて來た。余の書齋もすつかり片づいた。

愛子より手紙。彼女の結婚のお祝ひに送つた品物のお禮。

十月十三日。火曜。厭な天氣。登校。缺席者多し。森本が病氣なので、その事務がとれないのだ。放課後、彼を訪問したら、靜子さんが臥つてゐるその同じ部屋で、床についてゐた。道具は部屋中に一面に散らばつてをり、二人とも憐れに見えた。余は心から、彼とその妻を氣の毒に思つた。靜子さんはこの春受けた病苦がまだすつかり癒つてゐないとの事である。彼女は、森本が彼の所謂一段と信仰深くなる爲の苦い盃を味ひはすまいかと、いらぬ懸念をもたさせる程蒼白な顏をしてゐる。否！　こんなことがあつてはならない。

同家で安子からの手紙一通受け取る。何と優しく書いてあることだらう。〔餘白に次の二行が認めてある、編者〕

（原田は健康がすぐれない爲に、札幌を去つた。彼は余に御禮の手紙を寄越して、尙將來の友誼を望んでゐる。可哀さうな人だ！）

十月十四日。好晴。天氣は、靜かな樣だ。秋の木の葉に色どられた、淡靑の大空の天蓋、萬物の凋落を思ふ靜かな物悲しさ、暖い陽なた、冷たい日影、凡てが過ぎ行く年の思ひ出を物語つて居る。此の季節が、安子が一番好きな季節であるに違ひない。さうだ、彼女の物靜かな、貞淑な性質には、何處か秋を思はせる所がある。

登校。"Turgeniev and His French Circle" を讀みはじめた。寄宿舍で入浴。森本の所で夕食。十一日附の安子の手紙を受け取つた。數日前に見た夢のうちあけ話。本當に奇妙なめぐり合せだ。

十月十五日。木曜。晴。登校、四時間授業。途中、森本から彼女の手紙を受け取る。たゞ愉快ななんでもない事が書いてあるだけだが、彼女の手紙を讀む每に、嬉しさに我を忘れる。余は何と愚物になつたのであらう。

夜、我家で社會主義例會。柿崎は社會主義に就て新しい見解を述べた。甚だ興味深く、敎へらるゝ所多い。彼は實際すぐ

れた思索家である。その實際經驗から滲み出た彼の言葉には、生命が溢れ、人の心を打つものがある。會が終つてから、一時まで、社會現象の各種の問題を色々と話し合つた。

十月十六日。金曜。晴。登校、二時間授業。學生鈴木の病氣を見舞ふため、病院に行く。歸宅して、少し假睡してゐると、森本が十三日附の安子の手紙を持つて來てくれた。

Grant Allen の "The Woman Who did" の邦譯を讀む。作者は現代の女性の心中の爭ひを描き、女性解放に賛意を表する者に違ひない。此作は全くこの目的のために捧げられたもので、その爲に正確に小說とは云ひ得ない。話の仕組や、人物を見る眼が淺薄である。此書は人間の憧憬を眞に研究したものではなくて、作者の主張の貧弱な具體化である。余は全く失望した。

十月十七日。土曜。晴。午後風あり。寄宿舍生の定山溪行の遠足に加はる爲め、七時出發。山鼻で溝淵、コーラー、内海に會ひ、同行して、あの忘れ難い溫泉宿佐藤に行く。途中の景色は美そのものである。到る處に、華やかな秋の木の葉。

十月十八日。日曜。今日も好晴。十時、單身定山溪出發。一つには、少しも休まずに全道程を步き續けて、余の脚力を試めす爲と、一つには、余の甘い愛情の中に懷かれてゐる人の上を思ひ耽る爲にである。余は非常に早く步いて、約七里を四時間半かゝつて、二時半、森本の家に着いた。森本の家へ着いた時は、殆ど疲れ果てゝゐた。靜子さんと森本は、余を招き入れて、牛乳と新鮮な果物を出してもてなしてくれた。靜子さんは、今日は幾分、氣持がよささうだ。——本當によかつた——けれど彼女は見るからにふさいで居る。あゝ、氣の毒な人だ。本當に可哀想だ。森本が、これ以上死ぬ程な苦しみを續けるのを見るのは酷である。彼はこれまでに十分に苦しんで來てゐる。神は必ず靜子さんと共に彼をも護り給ふであらう。

歸宅すると、母上から一通、安子から二通、吉川から一通、手紙が來てゐた。母上は大變に優しい御言葉を下さつた。封中に家の道具を買ふ爲に送つていたゞきたいと申し送つた百圓が入つてゐた。父上は臺灣總督府の招待で、十五日に臺灣に御出發、御留守中母上は湯河原でお暮しのおつもりの由。心身を使ひ過ぎになる位使つて居られるのだから、大層結構の事

と思ふ。安子は、何時もの樣に優しく書いて來た。彼女と別れてから、實際は一と月と少しである。然し、非常に長く、事件が澤山あつた樣な氣がする。若し今、彼女に會へたら！　定山溪から札幌への歸途、彼女の名を呼んでは聞き入つたことは、何と氣持がよく、心を慰めるものであつたらう。余は馬鹿者だ。けれど、余をして、一生に恐らくは一度しかないであらう戀愛の甘い夢を見さしてくれ。

今夜、父上の御手紙落手。御心深い御手紙だ。それによれば、壬生馬は元氣で食も進むらしい。

この數日來、余は何と幸福な憩ひを得たことであらう。神は讃むべきかな。余の胸の愛の奥所に於いて彼女を抱いたからには、前よりも更に優しく彼女を愛することを、神によつて學ばねばならない。〔以下六行邦文〕

十月十九日。月曜。今日からの日記は再び日本文で書く事にする。下手な英語は上達しない。思つた事は十分に書けない。是れが理由だ。

今日は朝から曇つて雨と思はれたが一日降らずに仕舞つた。風は一時すさまじかつた。鼻端も赤らむ計り。例の如く學校に出て、四時間敎へたが興味を感じない。是れは僕の敎育に對する興味が薄弱となつた結果である。飽きたのなら早く止めるがいゝが、意志薄弱で早く飽きたのなら、斷じて己れを鞭撻せねばならぬ。まだ〳〵浮いて居るぞ。もつとしんみりしなくてはいかん。明快な輪廓と强固な內容のある人格を造り上げなければならん。

一九〇九年（明治四十二年、於札幌）

一月三十一日。日曜。長い間日記を書く事を怠つてゐた。余の心中に皮肉なものが在つて、それが、余自身の生活を嘲笑し、余をして、くだらない日常生活を記錄することを恥かしく思はせる。確かに、假令余の日常生活がつまらないものであ

つても、それは虚無であり得る筈がない。余はその事件が人類生活の巨大な流れに影響するか否かは別として、何等かの事件を以つて、時・空を滿たして行かねばならない。再び日記を初めよう。

今日午後、吹田が余の家に引越して來た。彼は、余が安子を連れて歸つて來るまで、余と一緒に居る筈である。彼が余と一緒に住んでくれると云ふのを、幸福な事だと思ふ。人生及び藝術に對する彼の眞面目な態度は余の心を惹く。現代文化の何等かの進歩に關心を持つ程の者は、この札幌に於いて彼の他にはなからう。

朝教會に行く。夜も亦。この實利的な時代人に福音を説くと云ふ竹崎牧師の困難な仕事に、最近余は同情する樣になつた。森本の家で晝食。彼は相變らず親切で思ひやりが深い。然し二人の性格の相違から來るへだたりが、時の經つと共に段々廣くなつて來る樣に思へる。彼の關心を湧き動かす力の余にないことを殘念に思ふ。然し、結局は、今彼のゐる處にそのまゝ彼を置いておくのがいゝのであらう。あらゆる幻を無くすのは恐しいことである。夢見ることの出來る人には、夢を見させておくがいゝ。而して余は如何と云へば、余はかゝる狀態で滿足することは出來ない。余は只管爭ひ憧れる。而もそれなのにその眞の目的、結果をも知つてはゐないのである。憐れなものだ！

余の心は憐れにも、最近安子に對して冷めて來た。余が氣も狂はんばかりに彼女に投げかけたあの劇しい愛は、何處に行つたのであらう。今の瞬間に於いては、凡ての女性は厭はしく、獸の樣で、虚榮心と依賴心の結晶の樣に思へる。蔦が木の幹にすがる樣に、人生に縋りつく力の他に女に何の美德があらうか。余が余の心の奧底に於いて、女性の本質的な美と獻身を更に深く味はない限り、女性に對する一時的な向う見ずな熱があつても、余は依然として女性の德と長所とに懷疑的なものであるであらう。

今夜は美しい。月は滿月に近く、空には一片の雲もない。然し、月の光は余に熱を與へない。月は、人の見て居る前で、唇をねぢまげて居る。

第十五卷

一九〇九年（明治四十二年、於札幌）〔承前〕〔原文英文、編者譯〕

二月七日。 日曜。風あり、寒し。日曜學校の管理ぶりを見に、北辰敎會に行く。特別に心を惹くものもなかつた。それから敎會に行く。安子より二通、母上より一通、來信。午後、隨分便りをしなかつた壬生馬に手紙を書き、トルストイの「セバストポル」を讀んで過す。余は、壬生馬が既に余と同じ水準に達して居るのを知つてゐる。彼の將來に、大きな期待をかけてゐる。彼はそれに背かないであらう。夕、ファストの研究。興味深く聞く。〔譯者曰、Listend とあれば講讀會の如きものか〕

余は安子を憐れむ。彼女は自分の意見と云ふものを全然持つてゐない。彼女はそれ程子供つぽく從順なのである。彼女が更に心を磨き、自分自身の意見で萬事判斷する樣に、彼女を訓練しなければならない。

余は不幸である。余は相變らず、依然たる地點に滯停してゐる樣な氣がする。もつと澤山本を讀み、もつと深く考へねばならない。既に腐つて仕舞ふなんて！　みじめな事だ。〔以下七行邦文〕

○ Abruzzo と云ふ國の昔の市なる Atrii の五の John の治世の時、鐘をつるして、誰でも訴訟をしようと云ふ人は、其の鐘を引く事になつてゐましたが、誰も用がないので其の緒は腐り果てたので、葡萄蔓でつないで置きました。或る時一人の騎士の乘馬が老いて役に立たなくなつたので、飼ふのをやめて放してやりましたら、馬が腹が空いたものだからそこら中、食物を探した後、例の葡萄蔓を喰はうとしますと鐘がなりました。裁判官は集つて此の馬を詮議し、王は此の騎士に重い罰金を課しました。

○ Macedon の Philip の處に老女が來て何か訴へるのであつたが、王は之れに耳を傾けずして曰つた、「朕は汝に耳を傾ける程の暇がない。」老女曰く、「そんならあなたは王になつてゐる程の暇もない筈だ。」

三月四日。木曜。晴。今日は余の誕生日である。余は三十一歳になつた。その間に何をしたであらう。全く何もして居ない。かゝる生涯に値打があらうか。死ぬか生きるかの渦巻きの中に飛びこむ方がより賢明である。何故余は、一つの目的をしかとつかみ、その目的に執着し得ないのだらう。

勇敢にならうと思つては居ながらも、實際は卑怯者である。眞の意味の平凡人になりたいものと思ふ。それなのに余は、自分の天賦の賜物と思ひこんでゐるものに賴つて居て、眞の平凡に到達することが出來ない。汝自らを僞る勿れ！ 汝の「自己」を直視して、汝が笑ふべきものであるか否かを見よ。

五月十五日。土曜。强風と雨。

朝、詩をつくる。結婚以來初めての文學的作品である。〔以下十一行邦文〕

　魍魎ぞ驅ける家の中を
　北向の障子に春雨空の光映りて
　裏小路に豆腐賣る聲
　此の詩かく机の上に
　銀と金との時計二つカチカチと鳴り
　若き妻の疊はく音
　襖一重のかなたに聞ゆる
　尙書き續けんと
　暫く案ずる暇とめて

おそろしむごし
魍魎ぞかける家の中を

學校に行き、圖書館で勉强。午後、原來り、夕方まで語る。彼はその家庭問題に不平があるらしい。氣の毒な男だ。彼は强い樣な振りをしてゐるが、然しその心の奧底は臆病な男で、つまらない事をとや角心配して、いらいらして落着かないでゐる。

夜、編輯委員會。十時まで話す。恥ぢろ！

安子は何時もに似ず、元氣になりさうもない。たしかに心中何か考へてゐるにちがひないのだが、うちあけて話してくれない。

何でもいゝ。余は自らの道を步まう。迷ひから醒めて、天賦の仕事につかねばならない。長い間それを怠つてゐた。余はヨーロッパの友人達に多くの文債がある。それを思ふ度に身慄ひがする。恩知らず！　汝は今汝の耽る快樂に醉つて凡てを忘れてゐるのだ。

幸福は長く續くものではない。注意すべきだ！　〔以下二六六頁七行まで邦文〕

〔此處二頁破棄しあるため日附不明。尙欄外に鉛筆片假名にて次のやうな走り書きがある。――タマニ日記ヲオツケニナルト人ノ惡イコトバカリオカキニナツテ。ドウセワルイトコロバカリノ人ナノデスカラ。〕

吹田が「妻」と云ふものを書いて見たい。妻が天才を引ずりおろさうとする所を書いて見度いと云うて居た。〔欄外に鉛筆女文字にて「御氣の毒樣」とあり〕十時頃に吹田の所を辭して、豐平の左岸を通つて家に歸つた。ではないかと思うたが、さうではなく他の用事であつた。

考がついたかと聞くと、「僕を愛して僕の心を疑はないが、自分が居ては皆さんに御迷惑をかける計りだから、何處かに行つて仕舞つた方がいゝ」と云ふ。「未だ考が足りない。もう一遍考へるがいゝ」と言うたけれども、安子が二十二だと思うて

それつきりにした。

何時でも後では弱い器をひどく取扱つた氣がして delicacy を害ひはしまいかと可哀想で堪らなくなる。

是れは昨日迄の事を書いたのだ。

今朝菅原すゑから手紙をよこした。中々面白い事が書いてある。

「あゝ如何に苦しくいらつしやいましたか、其の事を思ひ切り遊ばすまでの御苦痛、あゝ如何程で御座いましたらう。又方方よりはとやかうと御心苦しき事を仰せ給ふ事も御座いましたでせう。あゝ私も其の一人で御座いましたからどうぞ御許し下さい。

ほんとに愛なき私、御苦しみをも察する事が出來ずに唯悲しみのあまり禮無き事を致しました。

あゝほんとに日々の御苦痛如何程でいらつしやいませう。最も親しく御慰め申す者は我等信徒でなければなりません。ああ基督ならば如何にし給ふか。あゝほんとに愛なき我等、先生御許し下さいませ。

何卒信徒を以つて神を見る事なく、主の光なる十字架を以つて神に近づきたきものです――。」

僕はうれしく思つた。

伊藤證信と云ふ人の「我が生活」と云ふ本を原から借りて來て讀んで見た。作爲と云ふ事がまざまざと見られる。此の人も未だ自己の生活がありのまゝで、同時に一筋道に行き得ると、迷信して居るとしか思へない。一筋道に行かうとすれば、人爲的に强ひてこぢ屈げるより仕方がない。ありのまゝに行かうとすれば、凡ての矛盾に滿ちると云ふ事を條件としなければならぬ。論理的人生には筋道があるが、徹底的人生は矛盾である。

論理法は我等が數理的の axiom を許す以上、正確なものとし缺點なしとせざるを得ないかも知れないが、それを用ひて人生の眞諦と云ふものに對し、一種 close した結論を引き出さうとするのは不可能の事である。若しそんな所に closed logic がありとすれば、それは accident か又は artifice である。

一九一〇年（明治四十三年）

六月二十三日。　木曜。

東海道に見附と云ふ處があつて、其處に、やなひめ神社と云ふ荒神がある。毎年舊八月の十一日に御輿の渡御がある相だが、それが中々奇拔だ。

先づ其の祭禮に加はらうと云ふ人は、一ヶ月前から齋戒沐浴をして殊に海濱まで身を淨めに行く。行くには河舟で河を下るのだが其の河舟が他の村に這入ると、其の村の人が藁を束にしたのを橋の上まで持つて來て居て「見附の馬鹿やろやーい、藁買はねーか」と怒鳴るのだ相だ。見附の村民は豫め用意してある里芋の煮ころがしの一串を出して、藁一束づゝと交換して歸つて來る。

軈て祭禮の當日になつて、夜の明方月が隱れるや否や一番鐘と云ふのが鳴ると、村内一同が灯と云ふ灯を一度に消して仕舞つて、それこそ眞の闇となる。第二番鐘で御輿が靜々と渡御になるのだが、眞先には純白な幔幕を道幅一杯に擴げて行くと、其の跡から赤裸々な男が例の交換で得た藁の腰卷一枚をしめて、輿を擔いで行列して來るのである相な。本社まで十町もある所だ相で、軈て本社に着くと第三番鐘が鳴つて村内の灯が一時につくと云ふ事だ。近鄉近村から見物の人は堵を築く計りで、其の日に例の裸男は見世物でも何でも金なしで見る事が出來ると云ふ事だ。之れは靑葉君の話。

七月十六日。　土曜。

午後安子と東橋の方まで散歩をして後、獨りマルを從へて河原に出た。初夏の午後の空は一面に灰色がかつた塗りつぶした樣な雲に蔽はれて、藻岩山の半腹以上も削いで取つた樣に隱れて居る。河原のころた石は流石にほてりは持つて居るものゝ、

さびた空の色にふさはしい寒い陰氣な色になつて、見渡す限り連つてゐる。河原の中程と思ふ程に、施餓鬼の杭とも思ふ樣な新しい杭が立てられて、それに「石礫採收許可地向ふ二百四十日間北海道廳」と書いてある。自分は立ち止つてずつと見渡した。其の死灰の色をなした河原の彼處此處に、藍色の塊が蠢いて居る。之れが砂利拾ひであるのだ。多くの窮民は夏の間此の仕事をやつて生計を立てるものが多い。地表にある大形の石礫を片付けて地面を少し掘り下げると、小砂利が出だして凡そ四五尺に及ぶのである。自分は勞働者の群の一つに近づいた。老いたる夫婦と、小學生の制帽を被つた少年が一團をなして働いてゐる。地面が掘り低められて蜒の樣になつた其の上から窺いて見ると、妻なる五十近い女は莚の上に草鞋の儘端坐して煙管を燻らして居た。六十近い夫なる大男は、鼠色になつた手拭を頰被りして腰から下は眞裸に脚絆ばきで、大きながさつな手で上層の大石を掘り起して、けつたる相に四五尺彼方に抛つて居る。石が石とぶつかり合ふ鈍い音が其の度毎に響いて來る。古い絣がすりを裾短かに白帶でたくし擧げた少年は、大目の砂利篩で頻りに砂利を振つて居る。其の頭には何處かの小學校の正帽が乘つて居た。やがて煙草を吸ひ終つた內儀さんが、丁寧に煙管を煙管筒に收めて立ち上ると、細目の砂利篩で少年が篩ひ出した砂利を篩ひ始めた。どたりと親爺が抛げる石の石にぶつかる音の間に、齒を浮かす樣な小石の摩れる音が交つて聞えるだけで、三人の勞働者は眼も働かせずに機械の樣に動いて居る。而して此の樣な集團が此處にも彼處にも見渡す砂利原に點綴して、其の上にどんよりした雨もよひの雲が懸つて居るのである。自分は疲れ果てた勞働者の樣を眺め入つて、不思議に久し振りでしみじみした哀感を覺えた。

自分は佇立した儘で永く此の光景に見とれてゐた。物の三十分もかうやつて居ると、不圖活潑に動く刺戟の強い色が自分の右の眼の視角外にある事を感じて、其の方に眼をやると、赤い帶をしめた十三歲位の少女であつた。左の腕を伸して水平に支へた木箱の中には、豆入りの大福餅が竝べて這入つて居る。少女は身輕さうに圓石の上を飛び飛び近づいて來たが、ふと內儀さんの傍に立ち停つて、先づ物賣りらしい愛嬌笑をして優しい聲で、「餅買ひませんか」とかう云つた。內儀さんは一寸手を留めてやさしく「まあ買ふまいよ。姉さん餅を賣るにやもつと早く來ねーぢや賣れめーに」と、自分の子にでも云ふや

うに云つた。少女は更にほゝゑみ返して、健氣にも復た圓石の上を飛び始めた。豆々しい姿が灰色の自然の中に躍動する樣は、苅入れした荒畑の中を野鼠が行くやうである。親爺は始めから振り向きもせぬ。內儀さんは笑ましげに跡見送つて再びせつせと篩を動かし始めた。小學校の帽子を被つた少年は、母と少女との問答を佇立して聞いて居たが、少女が遠く去つた後も時々働く手をやめて振返つた。

少女は又他の一群に近づいて同じ素振りを見せて居る。

夏の日も遂に蒼然として暮れ初めた。對岸の例の二階家に裸燈が一つ見え出した。

自分は堤防を登つて靑く塗つた門を潛つて家に這入つた。

一九一三年（大正二年）

九月十八日。何んと長い間生活の記錄を怠つて居た事だらう。この間中、特に云ふべきことがなかつたからの樣に見える。されど否！　余は何か云ふべき價値ある仕事を自らなし能はざる結果、自己の價値に絕望したことを告白せざるを得ない。然し乍ら、余は將來の生活に假令微かなりとも光明を得んと、全力を盡して努力して來たのである。余は、不動の確心を以つて前進し得る地點には尙殆ど達し得ない。而も余は生活を續けてゐる以上、日記を書き初めるのは當然の事と思ふ。

佐久間と語る。彼は每土曜日、彼の家で、個人的に「建築と人生、造型藝術」の講義をしようと云つた。出席するつもりである。

余は、今學年は豫科三年、豫科一年、水產科三年、水產科二年に敎へる筈である。この內二つの敎科書が未だ當地に着かない。——恥かしいこつた。三學年には Thomson の “the Bible of Nature” 一學年には Cooper の “Last of Mohicans” を

選んだ。

九月二十三日。大西氏訪問の爲、汽車で札幌驛を發つ。沼田に着いた時は既に眞黒だつた。そこで一夜を過すため一旅館(丸松)に憩ふ。うら淋しい夜だ。階下で客と女中がしきりに大聲を擧げて、余の眠を妨げた。蟋蟀が鳴いてゐた。寢床に入ると冷たかつた。たしかにもう秋だ。

九月二十四日。曉に宿を出て、息詰る樣な深い霧の中を行く。二時間歩いて大石の農場に着く。彼の農場は東西に向つて併行する二列の高地にかこまれた低い谷間にあり、所有者自身が管理してゐる約五町の農場と三人の小作人がゐる。余がついたので、大石と、偶然大石の家に泊り合せてゐた彼の友逢阪とは、たしかに驚き喜んでゐた。大石が手紙で、本年の收穫(特に米)僅少なる爲、その經濟狀態が窮乏を來してゐることを告げたので、訪ねて來たのである。彼は相當の利潤を擧げながら農場經營をすることが不可能であり、何か思ひ設けぬ事情が起らない限り、その事業を拋棄しなければならないと考へてゐる。

我々は農場を視察した。特に幸福に惠まれた場所柄だとは、言ひ切れない。地面は濕氣過ぎ、四邊と隔絕し過ぎてゐる。農場も現在の所ではたいして淸潔だとは言へない。けれど、やつとその計畫を初めたばかりの彼が、早くもそれを止めなければならないと云ふのは氣の毒なことだ。余は彼に、失望せずに、低利で、も少し金を借りて仕事をすゝめる樣に勸めた。

その午後、二時半頃、我々(三人)は馬車に乘つて停車場に向つた。けれど、馬車が餘り搖れるので、余は歩いて行つた。天氣はよいし、歩いて行くのは愉快な運動だつた。

夜、札幌着。大石も余の所に宿つた。

九月二十六日。武者より來信。彼は、假令創作が余の職業との衝突を招來することがあつても構はず、どん〳〵書く樣にと勸めに來た。又彼は、余が創作と云ふ仕事を續けて行くに十分な頭腦と筆を持つてゐることを認めてゐると書いて來た。彼は「白樺」の仕事に無限の野心を持つてゐる。余は、彼の此の單純さと勇氣が好きだ。彼はこの點に於いて、一運動の統率

者たる資格がある。余は又、「白樺」が日本思想界の北極星、權威者として、高く立つのを見たく思ふ。これは恐らく、無駄な望みではなからう。我々は一生懸命に努力しなければならない。「白樺」の樣に可愛いゝものはない。それは、余の眞の共鳴を引起す。

夜、Y・M・C・A寄宿舍の三周年祝賀會。

余は、近來勉强を怠る習慣をつけてしまつた。一生懸命に勉强しなければいけない。余は余の背に環境の拍車を感じる。急がねばならない。今、"Ecce Homo" と「エレン・ケイの生涯」を讀んでゐるところ。

十月二十八日。大野敎授本月十九日死去す。余は額を痛擊された樣な氣がする。此の凶報を聞いた瞬間に、余は何もこれと言ふ理由もなしに、自殺されたのだと言ふ氣がした。確かにそれは間違つた考へだつた。それでもどうしたわけか、此の不思議な直感を誤りとして捨て去り得ない。彼と余とはお互に殆ど會はなかつたし、一度も訪問し合つたこともないのだから、我々の友情は普通の見地からみれば決して親密であつたとは云へない。けれど我々の間には、眼には見えない和合があつて、それが偶々何かの集會に二人が出會つた時、屢々形を取つて現はれて來てゐたのを知つてゐる。かゝる時いつも、彼か余かどちらかゞ、親しい微笑みと好意を見せて近づき寄り、極く平凡な話をしながら、內心では更に深くつき進んでお互に語り合ふことを望んでゐた。然し、二人とも控へ目勝ちで、一見相當と思へる點以上には、突き進まうとはしなかつた。今、彼を永遠に見失つてしまつたのだ。敢へて彼自身の內部に沒入し、深い理解と相互の同感を得なかつたことを衷心から悔いてゐる。彼は大いなる尊敬、敬慕に價するものであり、確かに余は彼の慰安となり得たに違ひない。眞に殘念だ。

十一月三日　夕方、學生を停車場に送つて歸宅すると、足助がストーヴの傍で暖つてゐた。彼は、昨日カルルス溫泉から歸つて來たのださうだ。彼の顏に、特に烈しいが嬉しさうな眼光の異樣なかゞやきがあつた。余はその瞬間何かあるのだと思つたが、この八ケ月間續いてゐて、極く最近に高頂に達した或るロマンティックな事件のせゐだとは、少しも想像しなかつた。

この春以來、彼の店の常客に二十二歲になる若い少女がゐた。女性に殆ど魅力を感じない樣な足助は、初めは彼女に何等

特別の注意を拂はなかつた。かうしてしばらく經つてから、繁々と來出したばかりではなく、時々は彼と話をして行くその少女に、彼は一種の親しさを感じ初めた。彼女の話し振りから、彼女が人生に對する進んだ態度、人間の微妙な感情に對する感受性の點に於いて、普通一般の婦人より遙かに高い水準にあるのが分つたので、足助は二人の關係をも少し深く進める方がいゝと考へた。彼が彼女に同情を起した他の點は、彼女がその繼母の爲、自分の悲觀的な性質の爲に、孤獨な物わびしい生活を送らねばならなかつたと言ふ點で、これまでのその生活は氣の毒なものであつたにもかゝはらず、彼女と接するものは、朗かな印象を彼女から受けると云ふ點である。彼女は、自分の短いが憐れ多い生涯を足助に凡て告白し、彼は強くそれに心を惹かれた。然し彼は、一つにはその將來の細心と激しい良心のために、一つには彼の健康がすぐれないから結婚が不可能だと云ふこと、及び彼女が富有で子に甘い父親の一人娘だと云ふ事實などの爲、彼女に對して何ら親しみの樣子を示すことを差控へてゐた。彼の內心の爭鬪は強烈なものであつた。彼は默つて苦しんだ揚句、この苦しみの拔口が幸ひに見つけ得られなかつたら、自殺しようとカルルス溫泉に逃れたのだ。それから彼は余に人生觀を述べて欲しいと云つて來たので、余は直ぐ返事を書いた。これが幾分彼の慰めとはなつたが、彼はそれで滿足せず、彼女に手紙を書いて、その內心の爭鬪について少しばかり感傷的なことを洩した。彼女は彼に返事をよこして、彼に對する強い感情の迸りを示し、彼を彼女の父、兄、友達、否、彼女の凡てのものと呼んだ。

　そこで彼は恍惚感と人生の喜びを味つたのだ。余はそれをたゞ喜ぶ。彼の告白を聞いた夜、余は大いに笑ひ、舞ひ躍る外何にも手がつかなかつた。余の心は擴大して、最も優しい、最も強い、最も悲痛な情緒を以つて全人類を被うたのであつた。

　足助は、彼女との結婚は不可能であることを、容易に確信してゐる。そして、晩かれ早かれその事件の悲劇的な終局に當面する用意をしてゐる。余も亦さう思はざるを得ない。

　しかも余は、この終局を完全に幸福に結ばせたく、切に望んでゐる。希望のあるところ必ず道がある。余にさう信じさせよ！　〔次のものは月日の記錄なし〕

足助が最後の一錢まで投機に費消して、又我々の所に歸つて來た。彼はその無茶な行ひの理由を余に告げて、彼の父が彼の爲に殘してくれ、親類中の羨望、爭論の的となつてゐる遺產を嫌惡するからであると云つた。遺產をもとにして、好きな樣に自由に使用出來る自分自身の金をつくらうとしたのだ。尙、岡山の病院で產婆の仕事の勉强をしてゐる氣の毒な妹に非常に少しゝか金を與へまいとする親類の決意を不當なものとして、抗つたのであつた。足助は彼女に全額の金を與へようと思つてゐたのだ。然し彼の冒險は凡て顚蹶した。現在彼はまるで犬の樣に叩きのめされてしまつたのだ。彼にはその前途に何の光明もなく、彼の胸中深く祕められてゐる力を立て直す方法もないのだ。こゝに歸着した人生に對して抱いてゐる無茶な彼の思想には、何か恐ろしいものがある。彼は全然暗中摸索の有樣で、自ら如何に動く可きかさへも知らない。

一九一六年（大正五年、於東京）

三月二十六日。 晴。隨分久し振りに、今日から又日記を書く決心をした。余が書き止めた時、余の生涯のつまらない出來事を、單に書留める以外に何の動機もなしに、書留めたところで無益だと考へたのだ。此くして、何日も何年もが余の記憶から、再び戾ることなく消え去つて行つてしまつたのだ。余はそれを失つて何か惜しい氣がし、こゝに再び日記を書き初め、余の眼、心の前に起つた主な出來事を書き記す決心をした。

壬生馬は昨日から我々と一緒にゐる。彼は近來、彼の家族と共に大磯に住んでゐる。彼を伴つて上野に（昨日）行き、水彩畫の展覽會を見た。その展覽會は、古い大家（日本人以外に當時日本にゐた外人のも加へて）の作品を集め、それを年代順に並べて見せたと云ふ點に於いて興味あるものである。Wagman、五世田、小山、淺井、高橋、河村、渡邊、伊藤等は（極く僅かだが）その初期の作品によつて示されてゐた。その作品中には、自然に對する藝術家の峻嚴さ、忠實さが見え、その

點に於いて凡ての現代藝術家の努力の域を摩してゐる。凡ての因襲から解放され、自然の神祕を追求してやまぬ者であると稱する現代藝術家は、知らず〳〵各國、各時代の藝術研究の蓄積によつて發達した技巧のわなに陷入つてゐるのだ。彼等が自らの立場の上にしつかりと立たなければならないと自覺した際に、罠が狐を待ち伏せる樣に、彼等を待つてゐる因襲に否應なしに染み込まれてしまつたのだ。最早や我々は我々の內から五感を除き出さない限りは、眞の原始狀態には到達し得ないのだ。我々が全然新しい世界を見得るのはたゞ天才を通してのみである。我々が藝術やその他の硏究に於いて進步すればするほど、因襲の泥濘から出ることは愈〻困難になるものだ。

風を引いて、咽と鼻が痛み、錢屋醫師の治療を受ける。今朝、安子の手紙が着いた。病苦に、いつになくいら〳〵させられてゐる樣だ。彼女は死の忍びやかな足音に氣づき、興奮してゐるらしい。子供の時代の思ひ出が絕えず起つて來て、凡てのことが近い內に無に歸する樣に感じると書いて來てゐる。短い、事件のない生涯であるにもせよ、その閱歷の持主と共に消え去るかと思ふと、思ひもよらぬ恐怖が湧いて來ると云つてゐる。可哀想な女だ！ 彼女を死より救ひたいと思ふ余の望みは、彼女が――の淵に近づくにつれて強くなつて來る。運命よ、今一度彼女の上に慈悲の笑みを笑みかけ給へ。そして、我等、彼女の夫と子供達を昔の如く、幸福な結合に導き給へ。

石黑の訪問を受ける。彼は今尙、適當な職業なしでゐる。

風が止んだ（今、正午に）。そして暖い日光が屋根や庭園を照らしてゐる。行光が戶外で太郎と遊んでゐる。

余は、余の生活を全然變へなければならない。近來、特に強くそれを感じつゞけてゐる。然し、余と老いた兩親を結んでゐる環境を打ち破ることは不可能である。不可能でなくても、堪へられない位、氣の毒なことである。もう二三年このまゝでゐなければならないだらう。

三月二十七日。月曜。晴　風少しあり。

父上より一通、「北方思潮社」の渡邊（ヨシオ）より一通來信。（父上は熱海の暖い氣候が非常にお氣に入つたらしい。渡邊は

再び彼の雜誌に、何か書いて欲しいと言つて來た。書いてやらう。朝、よしと、まさ來訪。行郎と教へ合つてゐた。

第十五銀行に若干預金されてゐるのがわかつたので、その金の許す限り本を買ひたく思つた。買つた本が讀めるか、讀めないかなんて考へもしないで。そこで、午後中、本屋廻りをして、すつかり疲れ切つてしまつた。幸ひに、とてつもない氣まぐれを滿足させる本は極く少なかつたので非常に多くの金が剩つた。無益な望みを滿たす爲だけに使はないですんだ。然し、余は余の書棚に並べて、誇り得る本を數册買つた。

Greenfields, E. B.—"The Landscape Painting and Modern Dutch Artists"

Way, T. R. & Dennes, G. R.—"The Art of James Mcneil Whisler"

Ibsen, Henrik—"Love's Comedy"

Verhaeren, Émile—"The Cloister"

Bergson, Henri—"Laughter"

Merejikowski—"Forerunners"

Ellis, Haverock—"Studies in Psychology of Sex."

Maupassant—"Jean et Pierre"

その他（受取つた時に書かう）。

何故、多少元氣がないのか解らない。少々神經衰弱のせゐもあるかも知れない。夜、眠りについても、殆ど眼がさめて居る方が多いのだ。もつと自分の健康に注意しなければ、何時かは全然健康を失くしてしまふにちがひない。

今夜、大島（豊）と、橋浦（末雄）が來る筈。毎土曜日にホイットマンの研究をしてゐるのだ。

毅一が訪ねて來た。行光がみよと神尾に行つた。今、彼が歸つて來て、庭の中で乳母車で遊んでゐる聲が聞える。

昨日、婦人同志會の規則改正の爲に中島と言ふ人が訪ねて來た。

Flammarion—"Mysterious Psychic Forces"

Ross, Janet—"Lives of the Early Medicis"

Gibbon—「ローマ史」

Henry James—"A Small Boy and Others"

Goethe—"Faust"

James—「宗教的經驗の諸相」

Nietzsche—「善惡の彼岸」

夕方、微熱あり、頭痛を覺ゆ。然し、曉くまで讀書に耽つた。讀書の疲れと、身體の具合が惡いのとで、寢床に入つてから、眠れない夜を過した。

三月二十八日。晴。風あり。熱、三十七度八分に上り、幾分心持惡し。床にゐることに決めた。野田醫師の診察をうけたが、たいした事なし。「ピエルとジアン」を讀み初め、晝近くに讀了。この本の讀後感は、甚だ良く、心を動かすものがある。熱がなくなつてしまつたかの樣に感じた程である。「女の一生」を讀んだ時以上に、モウパッサンの天才と識見を理解し得た。彼は淺薄な感傷主義や、つまらない人生觀に根ざして居るが如きものではない。彼は凡ての人間に、否、植物や器具に至るまでに、同樣の同情心を持つてゐる樣に思へる。否、彼は彼の廣く鋭き眼界の中に入る凡ての物に對して、何の同情をも示した樣には思へないと云ふ方が更に奧深い見方であらう。神が自ら創り給へるものに何の注意も與へられない樣に、彼も又彼の取扱つてゐるものが如何ならうとかまはない。例へば彼がある事件を取上げる、その事件は正確に運命の流れに從つて發展し、作者はその事件の結果がどうならうとかまはない。彼の自然に通ずることは此くの如くに完全である。或人は云ふであらう――人生を描くに當つて、運命と並んで行き得る程の洞察力のある時には、同情心の必要はないと。この小說の結末に近づくと、人生の眞相に觸るゝ時には常に直面する、あの悲喜こもごもたる深い思ひに耽らざるを得ない。こゝに創り

出されたのは、人生の一斷片そのものである。小說についてゐるその前書も面白い讀物である。正午から、夜晩くまで「ローマ史」少しと、エリスの“Studies in Psychology of sex”を讀了。特に後者は、非常に多くの知識と暗示を與へてくれた。性的生活に就いての女性心理、ヒステリイと性的本能との關係等の諸事實を知つた。後者をうまく取扱へば、珍しい文學作品になるであらう。余は「ある女のグリンプス」の改作に有用な諸點を獲た。

壬生馬は、その兩親を訪ねて熱海に行く山內夫婦と一緒に大磯に歸つた。

午後、愛子來訪。彼女は、前の「田中お勝さん」現在の倉知夫人の死んだのを大變なげいてゐた。余もよく彼女を憶えてゐる。憶えてゐるどころではない！　我々が橫濱に住んでゐる頃、彼女がよく妹を訪ねて來た。その頃は十歲前後の子供であつたが、心祕かに彼女を懷かしんだものだ。今でもある場面をあり〳〵と思ひ出す。それは、雨がしと〳〵と降つてゐた日で、我々男の子は玄關前の庭で遊んでゐた。その時、やせぎすの、年にしては(彼女は余と同じ年だつた)背の高い少女が、美しいパラソルを持つて近づいて來た。余は見ない振をした。その時、他の子供達が、美しい少女が入つて來たと囁き初めた。余は彼等が異性に注意をするのを輕蔑するかの樣に、馬鹿にして彼等を見た。彼女は彼女で、物珍しさうな多勢の少年達の視線に合つて眞赤になつて、雨のしと〳〵と落ちる中を、子供達の方に向けてパラソルを斜めに玄關に駈け込んだ。妹が、彼女を迎へに玄關に飛んで出て來た。彼女は妹を見て彼女の樣な少女の持つにふさはしいその美しい派手なパラソルを紙屑の樣に投げすてゝ、その年下の友達を優しく親しげに抱いた。余はこの有樣をぢつと見てゐた。この情景を、年月の拭き消す力にもかゝはらず、却つてより鮮明になつて來る樣に思へる程、ぢつとみつめて居たのだ。あの情景はそれ以來、ずつと余の好ましいものであつた。あゝ、今は亡し、何處に居る事やら。

夜、獨り眠る。行光は美代と眠つた。夢多し。

三月二十九日。曇。寒し。よし子が來て、熱海見物に行つた。安子、宮原、佐藤孃より來信。余の「首途」に就いての宮原の批評は非常に敎へられる所があつた。滿足した。余の作品は余の生活記錄として、讀者の心を打たず、余の智的徑路の

記錄として心を打つと指摘し、作者と病人達の關係が冗漫で漠然としてゐると主張してゐる。作者は憐れな病人の生活に沒入することを避けて、彼等から遠く離れて居り、自分の置かれてゐる環境を無視して好きな事を云つてゐる。その通りだ！これこそ余の弱點を見事打つたものである。余は周圍の憐れな事情を無視してゐるのではなく、自分の內心の救ひに餘りに熱中してゐるのである。もつと突きこんで書かる可きものである。

しげ子は以前の信仰から次第々々に離れて行きさうに思へる。彼女の精神狀態は明かに、戀愛逆上のヒステリイに似通ふものがある。彼女は實生活の凡てのものに興味を失ひ、全く達し得ない範圍に慰安を求め、キリストに眼の當り會つて、彼女の唯一の天職をキリストから敎へられたいと云つてゐる。

信子が電話で、彼女の母校の卒業式に出て、今夕祝賀會に行くのだと云つて來た。余は、好ければ午後來ないかと云つた。さう致しませうと云ふ返事。かう口を滑らした後で、余は自ら苦々しく思つた。結局、余は彼女をどうしようと云ふのだ。彼女の趣味は全然余と異つてゐる。我々は全く異なる世界に住んでゐるのだ。我々、少なくとも余は、彼女が賴りのない不幸に落ちた際に、お互に慰めあつたと云ふおぼろげな記憶以外に、何らお互に魅力を感じてゐない。むしろ來てほしくないのだ。（十二時）ところで、輕くお晝でも食べよう。

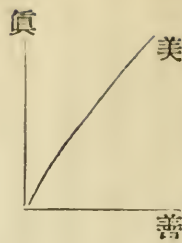
午後、ギボンを讀み、少し假睡して過したが、絕えず彼女が訪ねて來はしまいかと氣になつてならなかつた。夜、大島來る。ホイットマンの研究の代りに、十時まで話す。彼は、普通の學生と毛色の變つた事をすると言ふので、神學校の宣敎師連から非常に壓迫されてゐると言ふ話だ。彼は、學校で決めてある規則通りの生活に身を置くことが出來なかつたのだと述べた。彼は會堂に於ける每日の集りには出ず、友人達で別の祈禱會を起した。ある女宣敎師が、あらゆる手段を用ひて洗禮を勸め、ある時は授業中、洗禮を受けたものと受けないものとに依怙贔屓までする人に、もつと子供達を世話するように忠告した。此くして、彼女は年々三四十人の改心者を得、本部に對するその報告に重みを加へはしたが、一方ではキリスト敎普及の功績を高める爲にこれら少年を利用した後では、彼等に何ら特別の注意を拂ふことをしなかつた。大島は彼女のこの無

情な態度を恐しく思つた。彼はその考を飾らずに彼女に云つた。これらの問題が合したので、一般の宣教師は大いに考へた結果、傳道をつゞける爲に、長野に派遣すると云ふ、尤もらしい口實で大島を追ひやつた。彼はこの體裁のいゝ迫害には、最早堪へることが出來ず、同志社に行く決心をした。(勿論余は彼が規則通りの學課試驗には及第しないことを知つてゐる。彼は、自分では十分な答へをしたのに、教師が落第させたとは云つてゐるが、試驗に失敗したのに違ひない)余はある程度までは彼に同情することが出來た。そこで、彼が勉强を續けるのに金が入要なので、河野夫人に紹介狀を書いた。我々は話してゐる間に、善と美の關係を論じ合ふに至つた。余は云つた。善は民主的な性質のものである。精神的に缺陷のない限り、誰でも努力によつて善に達する事が出來る。然し、美に於いてはさうではない。美は貴族的な根據に立つてゐる。美の觀念のあるものは生れながらにして持つてゐるのである。それは訓練、教育によつては增すことが出來ないところの生れながらの感情である。これら二つの人間活動の强い點も弱い點もそこにあるのである。善は、望むもの誰にでも得られる點に於いて、人類一般の最高の所有物であり、それを完全に得る樣に、ベストを盡すことを强く要求し得るものである。然し、善は極く普通なものであるから、米やパンを見る樣に思つてもいゝ譯である。それは生活に必要缺くべからざる一の道具である。然し、必然的にそれは人間生存の豐かさ、喜ばしさを示すものではない。

我々の日常、現在の生活に超越する、あるより高きものを、內心憧憬して生きてゐるものには、人間社會の混沌たる中を誤りなく嚴格に導いて行つてはくれるが、超越的なもの、卽ち千偏一律の生活に墮する事なしに達し得る高き能力を見出さんと努力する人間の本能と云ふ問題になると、全然無能力であるところの善に滿足することは出來ない。こゝに於いて、その救ひの力として美なるものが有るのである。美の十分な觀念を授けられてゐるものは、天上の片影、換言すればこれまで隱されてゐたものを人に示すことが出來る。他の者はそれを眺め、彼等の遠く及ばざる處にある者の中に隱されてゐる性質を見て驚く。此く、美の領域に於いては、無條件に與へる支配者と、受ける乞食のみが存在する。藝術家は王者にして同時に乞食であると云ふ言は、この點に於いて眞理である。それ故に、眞の藝術家は人類に對して天が特別に與へたものとして、崇

めらるべきであり、人間の文化の尊い完成品と見らるべきである。此處に藝術家の强味があると同時に、天賦の才をもたぬ人々をとらへられぬ、人望を得られぬと言ふ點にその弱身があるのだ。

善と美の相剋か、多くの場合に我々に面倒を起さしめ、遂に我々に二元的な人生觀を强ひる。然し、余の意見では、この事實は、善の標準が屢々既成の觀念に依つて思考されるのに、現實の意識が我々自身の生來の魂の中に根强く存すと云ふ事實によるのであると思ふ。それ故に、これまでに造られた余の善の觀念を除き、自分自身の魂の中で再度清めることによつて、これら一見反對の二要素はお互ひに、同じ根基より生じたる葉と花の如く一對のものとして調和し、我々の二元的な無能な力に活動と統一を與へるのである。

美は、換言すれば善と眞の幸福なる結婚の結果として、人類の爲に生まれた愛子である。

彼女は遂に來なかつた。余は救はれたと云ふ氣もしたが、一面には、心の奧底では、微かな淋しさを感じた。

岳父神尾の訪問を受けた。

夜、温く氣持よし。

三月三十日。快晴。熱全く去り離床。母上、信子より來信。信子は余の「盲途」と「フランセスの顏」の批評を書いてよこした。ひどく淺薄な觀察である。午前、行郎に英語を敎へる。

晝食後、志賀に會ひに行く。然し、家人皆外出。そこで、電車に乘つて、日本橋クラブへ soun の作品展覽會を見に行く。然し、門番の話では、二十六日で終つたのださうだ。天氣が非常にいゝので、ぶら〳〵散歩するのに氣持が良かつた。そこ

で濱町から永代橋に向つた。そこは余の全く未知の場所だつた。河沿ひに、「鹿子屋」と云ふ看板のかゝつてゐる家を見つけた。屋號が面白かつたので、一寸覗いて見ると、若い娘が年輩の女と話してゐるのが見えた。小さい薄暗い部屋の壁には派手な鹿子が下つてゐた。美しい場面であつた。

余は何方に曲がるかも考へないで、道や路次を進んで行つた。余の住んでゐる邊りに比べては、こゝいらは全く違つた感じがする。堀や溝にかゝつてゐる橋の上から見た景色は特に面白い。可成り疲れたし、倦いたので、銀座の臺灣カフエに入り、强い香のするお茶を飲んで元氣をとり戻した。然し靜かに休むどころかいら〳〵させられた程お客に不愛想であつた。

夕食後、隆三が余を訪ねて來て、つまらない話をして夜を過す。

三月三十一日。曇。少し寒し。厭な氣分におそはれて、眠りから醒めた。――昨日ぶらついた爲に熱が出たしるしであらう。然し余は昨日立てたプラン通り、安子を訪ねに行つた。昨日、彼女から葉書が來て、余が長い間往來を怠つてゐたことをなじり、如何なさつたか心配でたまらないと言つてよこした。すまなく思ひ、どうしても行く事にした。安子は非常に加減が惡かつた。然し彼女はこの數日間每朝汗が出て、びつしよりになる、これが熱の高いしるしだと云つた。六時頃歸宅。

夜、大島とその叔父（山内彌一郎）來訪。山内氏は、自分の肺患の暗示にとんだ話をした。十五年間恐しい病苦と戰つたのであつた。そして親類達に早死するだらうと心配させたものださうだ。然し、彼は幾度も危期を切り拔けた。彼は自ら造つた方法を出來得る限り注意深く守り、病氣を除かうと決心した。彼はたゞ醫者の治療のみによらず、適度の運動と、適度の榮養を採り、咳を抑へるのに彼獨特の方法を講じた。その結果はよかつた。彼は今や全快したのも同樣で、その仕事を心ゆくばいなし得るに至つた。大島は、昨日、河野夫人を訪ねたら床に臥してゐたと余に告げた。

四月一日。終日雨。午前十時十七分發の汽車で鎌倉に行く。先づ、長谷に角田氏を訪ねる。可成り以前に氏の夫人が、高熱と腸捻轉で、彼の容態が段々惡くなつて行くとの便りをくれた。去年の夏、海岸で彼に會つた時は、彼は丈夫であつたのだ。今、見違へる程健康を害してゐた。偶然にも夫人が、杉野氏の姪であることがわかつた。この人は非常にいゝ、思慮深

い婦人らしい。家の中の全體の樣子が貧乏らしかつた。彼等の氣の毒な境遇に眼のうるむのを覺えた。

次に河野夫人を訪れた。彼女は非常に苦しんでゐる樣に見うけた。然し我々は長話をした。而も、彼女が余の考へと折り合はない舊い習慣で偏見に捕へられてゐることが、次第々々に余にわかつて來た。悲しいことだ。結局、人間は孤獨だ。人が思想、智力の點で進むにつれて、孤獨の生活を送るもの丶世界に近づいて行く。雪子さんは美しい、利巧な少女になつてゐた。

それから千代田に行きちよ子に會つた。淋しい夜だ。「宣言」を書く爲めに、其處にゐた頃の思ひ出が、相も變らず激しい情緒となつて余に歸つて來る。夜遲く歸宅。車中、「新小說」を讀む。壬生馬の「其の後」は素晴らしい出來だ。華やかな色彩の話で、絕えざる興味を以つて、讀者の心を惹く。彼の作品はモウパッサンの作に似た印象を與へる。

四月二日。晴。安子に手紙を書く。何事もなし。

四月三日。晴。風少しあり。朝、フランス語の勉强と、少しばかりの讀書に過す。晝食後、山本を訪れ、愛子とその母に會ふ。大和同志會の代表者として愛子の名前を出す同意を得る。それから神尾。夕食後、父上が平塚からお歸りになつて、安子の容態が少し惡く、彼女が自分の重體に心を惱ましてゐる由を知らして下さつた。

夜、フランス語を勉强し、佐藤學長、佐山、佐藤夫人、河野夫人に手紙を書いて過す。

本野夏子より手紙來る。〔番地略〕彼女が余の「首途」を、全心の情熱を以つて讀んだ事、そして自分が語足らずして表現し得なかつた事を、自分が代つて表現してくれたと言つて來た。彼女がどんな種類の女かしらない。とにかく、何處かで、余と同じ樣な心の鼓動をなす人々によつて讀まれてゐると云ふことは、全く勇氣づけられることである。余は直ぐに彼女に返事を書いた。千代にも手紙を出した。

四月四日。曇。風强し。森本がバルチモアから手紙をくれた。その中に、全く大きく利巧さうに成長した彼の子供達の寫

壬生馬が大磯から歸つて來たけれども、中村の宴會に行つたので會へなかつた。

員が三枚入つてゐた。正午までフランス語の勉强。宮原より小說の原稿來る。讀了。彼には事件の要領を掴む能力はあるが、大した才能があるとは思へない。

四月五日。今日から行光が幼稚園に行き初めた(双葉幼稚園)。余が連れて行つてやつた。行くのを大して羞しがつてゐなかつた。それから壬生馬と一緒に平塚へ行つた。安子はこの數日少し惡い樣だ。熱が上るし、殆ど每朝汗が出る。可哀想な女！　四時迄其處にをり、それから大磯に行つた。壬生馬と撞球をする。信子さんはずつとよくなつた樣に見える。英夫が我孫子に建てる家の設計をして夜を過す。

四月六日。晴。八時大磯を去り、再び安子を訪れた。彼女の卓子の上に余に宛てた手紙があつた。その中で、彼女は、子供が學校から歸つて來るのを迎へてやらないと云ふ樣な、親としての大切な義務を怠る余を責めてゐた。それは余の心の髓を刺した。行光が學校での員の最初の經驗を父に話したいと、澤山の話を持つて家に歸つて來た時其處にゐないとは、余は何て心ないものであらう。愛し過ぎるか又は間違つた愛し方をしても、余は大して後悔の念を感じない。然し、愛してやるべき時に愛を示してやらなかつたこの場合に、自分の中に下劣な無情な惡魔の居ることに氣付き、さう氣付いてみると自ら一個の男子として立つて行くに足らない樣な氣がする程苦しめられた。安子の許を去つてから、余は心中恐ろしく苦しみ惱まされ、ぢつと坐つてゐることが殆ど出來なかつた。余はあたかも最後の審判に遭つてゐる樣に感じた。そこで、東京に着くや否や、幼稚園の方に道を取り、余の子供は決して其處に居ない樣な豫感を持ちながら、――と云ふのは、子供がその大事件に、父が餘り冷淡な態度を採るのに失望した揚句、今日は學校に出てゐないと云ふ樣な氣がしながら門を入つた。けれど事實はさうではなかつた。余は彼が一つのベンチに腰を下して、繪本を見てゐるのを見出した。どれ程あの燃える樣な不安から救はれたことであらう。彼の頭を撫でてやつた。振り向いて、余を見、大いに喜んで、につこりと笑つた。あゝ、これで助かつた。

家に歸つて、直ぐペンを取上げて、安子が少しでも氣を休めてくれるやうにありのまゝの事實を書き送つた。あゝ、自分

の子にこれ程氣をつけてやらないとは、何て不親切ないやしむべきことであらう。今後は、此上ない親切な親とならう。學校で行光に會ふまでの余の心の緊張は、誰かの巧みな同情ある筆によつて取扱はれたならば、それは素晴らしい物語となるだらうと思ふ程人心をおびやかすものがあつた。

英夫と隆三が會ひに來た。隆三は三日、自轉車と衝突する災難に遭つた。その夜以來、彼の具合がよくない。熱海に行つて、其處でしばらく靜かに暮したらいゝだらうと思つてゐる。

原、信子、その他より來信。父上は十五日頃までお歸りになるまい。

父上の御手紙によれば、原の一番上の息子が又驅落をした。原の苦悶をまざ／＼と感じることが出來る。息子が二三日歩き廻つた後で、後悔して歸つて來ればよいが。

鐵道線路に沿つて、桃の花か美しく咲き出した。麥が五六寸も伸びた。桑の枝が、やはらかに赤く、晴れ／＼と伸びた。紛ふ方ない春のしるしだ！

旅行の途中、ヴェルハーレンの "Cloister" を讀む。彼の取扱つてゐる場景が我々の生活から少し離れてゐるので、我々に直ちに迫る魅力がない。然し、彼の趣旨と、その詩的情熱を、よく理解することが出來る。余は直きにそれを讀み終るであらう。

夜、仕事もせず、讀書もせず、無駄に過す。

第十六卷

一九一六年（大正五年）（承前）（原文英文、編者譯）

○安子病んで平塚なる杏雲堂病院にあり、後同病院の近くに借家して療養。
○行と行三は私と共に暮し、敏は千駄ケ谷の神尾兩親の御面倒になる。
○信子が壬生と離婚する樣な事件起る。
○フランス語の勉强。
○「白樺」に何も書かず、そしてストリンドベルヒの“There are Crimes”と「赤い室」、ハバロック・エリスの「性の心理學的研究」、シエクスピアの「冬の夜ばなし」、トルストイの「シエクスピア論」等の外何も特に讀まぬ。
○金のことで增田苦境に立つ。
○足助又も投機を始める。
○大石より便りなし。
○內村氏からお招きもあり、氏に同感を持つてゐるにも拘らず訪問を怠つてゐる。
○人生觀に何等格別の進步なし。
○慶應大學に地位を得んとして失敗し、此の數月無爲に過す。
○歐洲に於ける兩交戰國はヴェルダンの要塞で鎬を削り、北海に於ける兩艦隊の海戰を以てその極に達した。一方支那では國事の解決が未だ渾沌たる有樣。

○「島人」スミス日本を訪れる。
○タゴール日本を訪れる。
○宮川コーザン死去。
○健助の母死去。

四月七日。 晴。本當の春らしい。

午前、フランス語を大いに勉强、"Cloister" を非常に面白く讀了。信より葉書、叔父のN博士を停車場に見送つたが年を取られたのを見て大變淋しく感じたと書いてある。春になつたので女は皆自分自身には判らぬ變な衝動に動かされて、氣狂ひじみるらしい。

昨日森本からバルティモア・サン紙を送つて來た。說教者 Billy Sundy の事が書いてあるが、彼は多くの人を惹きつけ、その會合には何時も一萬五千人も集るとの事。大變人氣のある演說家らしい。だが會合が終ると、彼はバルティモア市の祝福されん事を神に祈ると云ふ記事を見て心をうたれた。彼は「神よチエサピーク河畔の町を祝福し給へ」と祈りを捧げ、それから祈りを暫くやめて新聞記者席の方に向き「わたしがチエサピークと言つたが、差支なかつたか」と尋ねた。祈禱中に人と話をしてはならぬといふ譯は毛頭ない、併しこの子供らしい、邪氣のない行爲は私の好みには合はず、この人氣のある神の下僕に對して嫌惡の情さへ起させる。私は内心では狂信的なピューリタンなのであらうか。

大島より葉書、京都に甚だ氣持よく落着いた由。

午後思ひがけなく橋夫人來訪。彼女は若々しく幸福さうに見える。あの人持前の――うぶな所が彼女の魅力である。二人は大して話もなく、はずまなかつた。彼女の訪問に對し相當の親切が拂へなかつたのは心苦しい。

ヘンリー・ジェームス作 "International Episode" の邦譯を讀む。彼の畫く處は巧妙である。人性をしつかり捉へてゐる。

併し彼は人性より高く身を持し、人間性をもてあそんで居る。彼と天賦を同じうするモウパッサンの場合には、その天賦を自己の持つてゐる何物よりも高く評價し、熱心にそして己の作品は皆藝術家の烈しい熱情によつて躍動してゐるといふ確信を以てその天賦を用ひてゐる。然るにジェームスの場合には、彼は單なる藝術家である事を多少恥ぢて、へりくだつて小說家になつて居るが、紳士であり學者であると云ふ生れながらの地位は捨てゝ居ない。だから夏目氏の所謂「低徊趣味」と稱するものが彼の中には多分にあつて、眞實にして波動せる人生の斷面にふれる事なく、無遠慮な氣持のよい皮肉ばかりなので倦き〳〵する。これは英國小說通有の缺點であるらしい。

夜は札幌農科大學の校歌集に序文をかいて過す。

暇をみて、古い日記を讀む。大學時代に於ける私のセンティメンタリズムと無學が恥かしくなる、落淚しさうになり、日記を火に投じた。あゝ、若し過去をすべて抹殺し、より激しくより強く生きる事ができたなら！　私は立ち止つて考へねばならぬ。

四月八日。天氣よく溫かし。神尾に電話をかけて敏行をアート・スミスの飛行を見につれてゆく樣に話したら、敏行は昨夕から非常な高熱で病氣だとの事。で急いで神尾を訪れる。醫者にみせてから大變よくなつた樣だ。だが義母は看病でひどくつかれてゐられた。何とか方法を講じて、とても耐へ切れさうもないこの澤山の心配を、母上におかけしない樣にしなければならない。父上にもおめにかゝる。父上も安子の容體を大へん案じてゐられた。例年の醫會で行はれた大學派と北里派との大論戰のことを話す。新聞紙の報ずるところによれば、傳染病硏究所の新所長芳賀イシオ博士は古賀博士の注射液について痛烈に攻擊して、古賀博士の液に酷似した液をモルモットに注射したが、良結果を齎らさなかつたと述べた。古賀博士は立つてこの攻擊に答へ、實驗に使用されたモルモットの數が三つの場合に於いて違つて居たと云ふ事實は、實驗者の不正確さを明示し、その上尙芳賀博士が使用したと云はれた液が自分の發明したものに酷似してゐるとは認められないと云つた。古賀博士は附言して實驗の失敗を示すもの多々あること、卽ち注射液の量は體質と病氣によつて異るものであると答へた。

古賀博士は相手の急所を突いたらしく、反對論者を沈默せしめてしまつたさうだ。我々は一緒に古賀博士を訪れ、安子の病狀を報告し、注射を暫く延ばすことを辯解して置かうと約束した。

晝食後、行光と太郎を伴れてスミスの放れ業を見に青山練兵場にゆく。西北の微風のある極めて美しい春の日和だつた。練兵場には人が何百何千と集つてゐた。埃がひどかつた。ぐるつと廻つてスタンドに行つたが、そこからは可成りよく見える。正二時、格納庫から複式飛行機が引出された。翼の上側にはアート・スミスと赤い字でかいてあり、舵にはアメリカの國旗がかいてある。せいの低い非常に若いスミスはひらりと席にとびのり、大きな急角度で空に昇つた。高く〳〵昇り、遂に下からは彼の姿が殆ど見付からぬ様になつた。それから彼は美事に宙返りをやり、二度三度と續けた。人々は唯もう驚き入る許り。鳥にも優る超人的技倆を示した後、はつと心臟の鼓動を止める様な勢でまつしぐらに下降し、美事にやす〳〵と無事着陸した。

埃がひどくて堪らないので早々に歸宅。洋服屋が註文を取りに來た。夜はジェームスの小說と「白樺」をよんで過す。

「著作家協會」と云ふ團體が出來、余の處へも案内狀がきた。現在余とは何の關係もないのだから、返事もすまいと思ふ。

ヴェルダンの要塞危機に瀕す。獨逸軍は精鋭をこの一點に集合して、これを陷落させようと全力を盡してゐる樣にみえる。他方聯合軍は此の要塞が陷落するか否かは勝敗の分れ目となると言ふ事を知つて、頑强に防禦してゐる。

結核病の性質をもつとよく知りたいので、「最近結核病論」と云ふ本を買ふ。

足助はどうしたんだらうか。今、東京にゐるには違ひない。誰からも便りなし。夜に入つてから風ひどし。安子の安眠を祈りつゝ。

四月九日。快晴。微風。今日は日曜日だ。午前、親切に行郎の世話をしてくれた原田瓊生氏に會ひに澁谷へゆく。余は餘程前からお訪ねしようと思つてゐたのであるが、今日まで、延びてしまつたのだ。氏は在宅で、子供等と庭で仕事をしてゐられた。氏は五分刈り頭のすらりとした人で、度の強い近視の眼鏡をかけて居られる。話しぶりは打解けてはゐるが女性的

だ。然し意志の强い人で、外見には表はして居ないが自我的であり、鋼の樣な鋭さを有つて居る。夫人も歡迎してくれた。少しばかり話してから、鍋島侯の庭園(秋濤園)を散歩しに一緒に出かける。配置は美しい、場所は廣い。代々木練兵場まで見渡される。其處此處に多少の高低はあるが、平坦で高臺になつて居る。廣い域内は多くの小區劃に分れ芝が植ゑてある。現在三四十ばかりの建物ができてをり、建築中のものも澤山ある。氏自身もそれを一軒借りて居られるのだ。歸りに隆三の家を訪ねたが鍵がおりて居た。そこで歸路についた。偶然昔馴染みの學生に二人會つた。一人は竹田で一人は淺田だつたと思ふ。スミスを見に澤山青山へ出かけて行く。隨分な人込みだ。

宅で少しばかり用を濟ましてから、熱海と大磯から歸る母上と壬生の家族を迎へに行光を伴れて新橋驛へ行く。母上は少し疲れて居られる樣だ。驛の二階で母上達に複葉機をお見せし乍ら茶を啜つた。そこへ水兵が數名酒を飲みに上つて來た。水兵達の行儀の惡いこと夥しい。暴風の時みたいな呶鳴り方をしたり、水兵らしいおどけたやり方で女給をからかつたりして居る。お客は皆びつくりして居たが、余は愉快に感じた。彼等は海上の烈風の樣に部屋の中を走り廻つた。(以下九行邦文)

輕蔑するない。これでも俺等の中には判任官も居るんだぞ。區役所に行けば俺だつて一人前だい。

おや時計がないね。(だがそこには大きな時計が掛かつて居るのだが)けちな所だな。えゝと俺の時計か。無いさ。ロンドンで落しちやつたんだ。

おゝ姉さん馬鹿に金歯が光るね。春めいた顏をして居るね。何んだいふくれるのかい。賞めてやるのにふくれたりするとぶんなぐるぞ。

だがスミスはうまいな。追濱のフアルマン式もフアルマン、フアルマンと威張れないぜ。

姉さんさよなら。失敬　グドバイ！(丁寧にお辭儀して)大きにお世話とそつちが云ひたさうな顏をしてゐやがるな。

不平はあるさ。不平はあるがまあいゝや。年が明ければこれでも一人前の人間になるんだ。水兵が生涯ついて廻るんぢやないから。(小歌を歌ひ乍ら)「金鵄なんぞがね——」か。

といつた拍子であつた。

家に歸ると愛子が子供を三人伴れてやつてきた。一緒に夕食する。實に親しい集りである。行光と䳽子は大變喜んだ。

佐藤學長から手紙が來て、慶應の鎌田總長に紹介狀を書いたとのこと。禮狀を出した。

安子にも手紙を出した。早く床に就いた。

四月十日。稍〻曇。强風。午前、フランス語の强勉。神尾の母上御來訪。敏行は大變よくなつた由。トルストイの「モウパッサン論」をよむ。「ピエルとジャン」をむしろ苛酷に批評して、此の小説は作者が有名になつた時に書かれたもので、出版者の需めに應ずるが爲に書かざるを得なかつたものであるに過ぎず、善惡の批判を無視する作者の傾向が充滿してゐると云つてゐる。ピエルの母の敗德的な態度は許し難いと云ふ。トルストイの立場から考へるならこの意見はよく了解できる。だが同時に作者はこの出來事をあり來たりのブルジョアの家庭の平凡な生活に起つたものとして描いてゐる。母は感動的で世俗的な女で、眞實の爭鬪生活に對しては極めて意志の弱い女と想像される。モウパッサンは彼女を非難してもゐないが、是認してもゐない。唯、彼は彼女の中に人間生活の奥底に深く根ざしてゐる自然の皮肉を見たに過ぎない。此處に現實の人生をそのまゝに安逸をむさぼる心の人間らしい弱さがある、がそれは賤しむべきものであると同時に憐れむべきものである。加ふるに、私の感じた處では、ピエルの母は此の小説の中心人物ではない。ピエルを物語の中心に取つてこそ、作者の意圖が眞に了解できるのである。ピエルの運命は本當に悲劇的であり、ある意味では壯烈でさへもあるではないか。小説に書かれてゐるよりも當然もつと尊敬されもつと成功すべきであつた此の若者に對して、作者が深い同情を有つてゐる事を讀者は容易く感ず可き筈である。勿論作者は何時もの用心深さからして己の感情を深く祕してはゐるが。彼が戀に敗れた事もその上品な性質を示してゐる。彼は弟のジャンヌよりも品格があり、深みがある。唯彼のねぢけた性質は、遭遇した不幸な境遇と相俟つて、彼のすることなすことをすべてくひちがはしめた。かゝる見方でこの小說を見ると作者の意圖に對して一種莊嚴な感じを持たざるを得ない。

今日は妙技を示す爲め、スミスが滯京する最後の日である。このひどい風ではどんなにしたつて飛べないだらうと思つてゐた。處が、驚いた事には前日と同樣、空高く昇り宙返りまでやつた。自分の技倆をこれほど確信してゐるとは！　荒れ狂ふ風と戰つてゐる飛行機を見守つてゐた私の眼には涙がにじみ出た。

吉川に手紙を書かねばならぬのは大分前からの事である。だが格別の理由もないのに、うつちやつておいた。どれ程氣になつたか知れないのだ。何んて妙な男だらう。何處からも便りなし。

此處に凡ての人との交渉から離れた孤獨の魂が一つゐる。それが暖い人心を喜んで迎へるのだ。だが何んとした事かそれが出來ないのだ。で恐らくそれは死にひた向きに直進する魂なのであらう。其の魂にとつては世界が何と冷たく、活氣なく感ぜられることであらう。

四月十一日。朝曇り。後晴る。何處からも手紙が來ない。

夕方は原田と吉川秀子孃との結婚披露の午餐に招待された。母と愛子と信子達と一緒に自動車で行つた。櫻は咲き初め上野公園は人で埋まつて居る。精養軒に二百四十人ばかりの客が出席して居る。相變らず話相手もないので一人で廊下を歩いて時を過した。餘興として能狂言があつた。二人の殿樣が旅をして居ると代つて刀を持つて行つてくれる人が欲しくなつたのだ。そこへ一人出て來る。二人はその人にやつてくれる樣に賴む。その男が固く斷つたにも拘らずとう〳〵拔身で脅迫して從はせる。彼等は我事なれりと意氣揚々としてその男を臣扱ひにし笑草にする。然し冗談は長く續かず、今度はその男が二人の刀を拔いて挑みかゝつた。地位は顚倒してその男のいふことには何でも從ふことになる。彼は殿樣に色々可笑しなことをさせるが、二人はこれに從はなければならない。殿樣のものを皆奪ひ去つて、腹の癒るまで二人をからかつた後で、件の男は取つたものを持つて逃去るのである。唯刀のあるなしといふだけで、兩者の地が顚倒するといふのが筋である。

四月十二日。快晴。午前、フランス語の勉强。神尾の父上と熊雄さん來訪。母上は十時の汽車で熱海に歸られた。兄弟全部とその妻が驛まで御見送りする。余は國府津までお伴する。櫻桃の花盛り、小麥はすばらしく生長し、新綠は雪白色の粗

野な花と入り交つて眼を樂しませる。今年は花時がひどく遲れてゐるとの事（少くとも十日は）。
歸りがけに平塚に寄る。安子は心持が幾分よくなつた樣だが熱はまだ高い（三十八度）。ほんの少し話しただけで、眠つて了ふ前に行光の顏を見ようと大急ぎで歸宅。まだ床の中にゐて、喜んでくれた。

四月十三日。稍〻曇。風あり。昨夜床についた時は、吉川からきた手紙をみんな讀んで整理して了はうと決心した。だが朝になると仕事をするのがひどく太儀になつて了つた。餘程前からやらう〳〵とは思つてゐたのである。一月の手紙にもまだ何の返事もしてゐないのだ。私はその時以來絶えずそれを思ひ出しては、大變恥かしく思つてゐた。それでもまだやらぬ怠けものなのだ。本當に私は妙な人間だ。損得問題になると、すぐ關心が持てなくなつて、決して一時でも氣が向けて居られなくなるのだ。だがもう延ばす譯にはゆかない。午後にはそれをやらなければならぬ。
壬生馬と一緒に吉川と原田の處に答禮に行く。原田の處で少し話す。若い原田夫人は大變人好きのする小柄な人だ。「アッシジの聖フランシスの小さき花」を中西屋で買ふ。
足助、昨日來訪。

四月十四日　曇。午前、フランス語の勉强。まだ吉川へ返事を出してゐない。何と云ふ馬鹿なんだらう。午後行光をつれて麹町へ散歩に出かける。途中菓子屋で、菓子を少し註文。行光はその爲め遠廻りをせねばならなくなつたと云つて機嫌が惡い。私は、誰だつて時折は人の依頼に應じる樣なことはする可きものだと云つて聞かせた。さう言つてもなだめきれなかつた。それでも氣紛れに私に冗談を云つてゐた。こんな場合には怒りが胸の中に、燒き盡す火の樣に急にわき立つ。私が怒るのは彼がいふことを聞かないからではなくて、ちやんと躾けられてないからである。私の怒りは怒りから發するのではなくて、私の心を苦しめさいなむ、彼に對する深い悲しみから發するのである。
原に、彼の長男が出奔したのに同情する手紙を書く。
この數日暗い考へが屢〻起つてくる。すべてが暗く陰氣に見える。世の中のいざこざは涯しがない樣に思はれ、その中に

ある私の道は雜草や藪の爲、まるでとざされてゐる樣だ。道を切り拓かうと、どれ程私は無駄骨を折つてゐる事だらう。

四月十五日。多少の風を伴つた烈しい雨。冷たい。

午前、思ひ立つて報告を調べる。午後から太平洋畫會と巽畫會の展覽會が急に見たくなつたので出かける。前者にはごく僅かの作品しか並べてない。だがそこには本當に注意を喚起する畫が少しあつた。巽畫會は十六日から開催されるのださうだ。それから私は又急に氣が向いたので、壬生馬と一緒に淺草に活動寫眞を見にゆく。だがこれは最近長らくした事のない全く珍しい經驗であつた。この區域にはもう餘程來た事がなかつた。私の觀察の範圍外にあつたこの世界は、暗示的なヒントを澤山與へた。雨がそぼ降る中をものともせずに、見物は唯もう雜沓する許り。露店で壽司とおでんを喰べる、全く、うまいなと思つた。

四月十六日。曇。篠突く樣に降つてゐた雨も、朝にはやんで居た。約束通り行光を伴れて稻毛の飛行機製造を見せに行く。朝敏行が來た。我々は行郎と一緒に兩國から汽車に乘つた。汽車の窓からの眺めは、美しい。我々は十二分に樂しんだ。稻毛では、子供達二人は、飛行機を間近に見て大喜びだつた。其處で作つてゐる機は型が違つて居て、既に二十八臺も作つて居た。一臺の價格は約二千五百圓乃至三千圓であるが、政府で作るものは一萬五千圓乃至二萬かゝる。子供達は砂の丘で鹿の樣に遊び廻つた。敏行に附添つて居る女中の秀が、見るからに生れの賤しからぬ、學校友達に會つた。秀の父は蠣殼町の株屋で、秀もお屋敷育ちなので、女學館で學んだ事もあるのだ。然し秀の卒業頃に家産俄かに傾き、彼女も父の借財の手助けをする爲め働かなければならなくなつた。淑女然と着込んで居る舊友と、彼が一緒に居るのを見ると可哀想だ。

夕食後少しばかりフランス語を勉强。

父上から御手紙。(お歸りは二十日頃とのこと。)吉川から電報。佐山から手紙。安子に手紙を出す。

四月十七日。稍ゝ曇。平塚に安子を訪れる。一重櫻はもう散り初めたが、八重櫻が咲き出した。麥の穗はもう伸び出てゐる。春は殆ど過ぎたも同じだ。何てあわたゞしく時節が移り變つて行く事だらう。安子は體の方は良好だが、氣分がひどく

憂鬱だ、私に對し特別な嫌惡の情を懷いてゐる樣にみえる。何か言へば素氣ない返事をするし、あの冷笑的な態度――私の氣を常に狂はせるあの態度で見つめる。どうしてそんなに彼女がいら〳〵するのか判らない。多分先日壬生馬と淺草へ行つた事を怒つてゐるのだらう。とにかく、つまらぬ出來事でも神經にさはる樣な病人の前ではおだやかにすべきである。だが私はあさはかにも自分の不快な感情をおさへる事が出來なかつた。すぐに歸つてしまはうかと思つた程だつた。ほんとにひどい事をしたものだ。小さな邪魔が入ると、愛情をそのまゝ示す事ができぬとは、私は何と言ふ人間であらう。

歸途、イプセンの"Love's Comedy"を非常に面白く讀む。イプセンには、彼が人生を描く度に何時でもくつきりと表はれて來る彼一流の男女の主人公數人がある。彼は或る點ではトルストイよりも、ずつと說敎師である。トルストイの作品中に見出される客觀性は、イプセンには多少缺けてゐる。私はまだそれを讀み終へてゐない。直きに讀み了へてしまはう。

四月十八日。天氣好し。稍ゝ肌寒し。午前、行郎に英語を敎へる。午後、神尾を訪問。敏は秀と大層おとなしく遊んでゐた。來月になつたら病院から出たいと云つて居る安子の事で、ちよつと相談してから、神尾の父上と御一緒に、北里研究所に古賀博士を訪問。博士に病人の今日迄の經過、注射を十七回試み、三月十七日で中止するに至つた理由を話す。博士も中止する方がいゝと思ふと云はれた。何故なら、注射は屢ゝ數週間の後になつて、始めて效力を表すものだからと云はれた。病院を出る事については博士も同意された。經過からみると彼女が恢復する事は保證されたも同樣だと云はれた時、父上は大變安心された樣に見えた。病院で父上とお別れして、本村町に增田の家を訪ふ。彼は足の指の瘭疽を患つてゐた。今月二日に結婚した彼の妻に會ふ。どこか愛子に似てゐる。彼がとう〳〵結婚したのを見ると氣の毒だ。だが失戀して心を深く傷けられた男と一緒になつた女を見るのは、尙更氣の毒に堪へない。

それから東京驛へ行つて山本一家と夕飯を共にし、京都、九州に行く直良を見送る。乘客で大混雜。房子は大變美しくなつた。此の春に遭つて、すつかり娘盛りになつた樣に見える。

私は行光に、五時までに山本のところへ行つて、皆と一緒に驛に來るやうに云つておいたのだが、行かうか行くまいかと

ためらつて居たものだから、山本のところへ行つた時にはもう皆出かけた後だつたので、烈しく泣きながら歸つて來た。私は此のことを驛で行郎から聞いた。もう機嫌もなほつてゐるだらうと思ひながら、できるだけ急い　歸つてみたら、私に向つて、ひどく御機嫌が惡い。私はいゝ機會だと思つて、時間は正確に守るべきものだと敎へた。その晩彼は、大へん興奮してゐて、何度も目を覺ますので、私もろく〳〵眠れなかつた。可哀さうな子供だ！　彼の神經は、子供にしては緊張しすぎてゐる。

車中で增田の妹と甥に會ふ。井上を訪問。安子に手紙をかく。(古賀博士との話の顚末を知らせる)。佐山、原、足助、森本と道廳の人に手紙をかく。道廳の人には第二農場地を公道に用ひる爲に讓與する事を承認する。

四月十九日。快晴。午前、フランス語を習ふ。藤井氏が、父上の二十日のお歸りは、占(うらなひ)によれば思はしくないと言ひに來られた。その白髮と瘦軀が豫言に一段の重みをつける。私は迷信深くなつて、はるをミキ堂へ見て貰ひにやる。二十一日と二十二日が一番好い日だとの事。電話でその事を母上にお知らせする。どうも氣が變だ！

四月二十日。曇。兩親は歸京を二十一日に御延期なさつたので、平塚に安子を見舞ふ。彼女はむしろ沈んでゐた。死に直面してゐる樣に見える。其の爲か、非常に不安氣で、大變いら〳〵してゐる。一年以上に涉る淋しい病院生活！　耐へきれぬ重荷が彼女のか弱い魂をめちや〳〵にして了つたに違ひないのだ！　何としても憐れな事だ。

四月二十一日。曇。兩親と行三、今日熱海より歸京。我々兄弟は、新橋へお迎へに行く。父上はまださつぱりなさつて居られない樣だ。父上の健康はずつと衰へた。かうなつてみると、今更に父上に對して優しい愛情と尊敬の念を強く感ずる。何と云つても、子孫の幸福を增す爲に全力をあげて御奮鬪なさつた貴い父上である。我々兄弟が各自、好む仕事に一身を獻げ得る事を父上に感謝する。

今日まで放りぱなしにして置いた農場の事務を、何時父上が、どうなつて居るかお尋ねになるかも知れないとびく〳〵してゐたので、父上に對して落着かぬ態度を取らざるを得なかつた。それのみならず、驚いた事には事業の收支を調べるため

に整理して置くべきであつた重要書類を紛失して了つた。私は本當にどうしていゝか判らない。

四月二十二日。雨。絶えず農場の事で良心を惱まし乍ら父上の事務をして一日くらす。昨日、神尾の父が來られて、慶應大學ノ鎌田總長が私を講師として迎へる事になつたと知らせて下さつた。神尾の父は、昨日御親切にも總長を私の事でわざわざ訪ねて下さつたのであつた。私は嬉しいのだか嬉しくないのだか自分にも分らない。だが私は命ぜられたのだから、この恩惠に恥かしからぬ樣、全力を盡さう。一學年の間、ホイットマンを教へようと思つて居る。

四月二十三日。風雨。突然の暖さで、寒暖計が一躍七十八度に昇つた。誰も皆、眠氣で弱つて居る。お晝まで父上の仕事をした。

午後からは父母と行郎と一緒に高木家の園遊會に招待された。澤山の人が居たが大抵知つた人だつた。雨に妨げられて午後は屋内で過す。子供達は大はしやぎだ。

四月二十四日。美しい春の日。朝、敏行が來る。父上の事務を終る。夕刻、山内(畫家で大島の叔父)來り、二人で畫に就いて雜談する。彼は新しい運動についいては少しも理解がない樣だ。それで容赦して居られなくなつたのでひどく攻擊した。併し彼は、私の攻擊に屈する色もなく、彼自身の意見を主張しようとした。我々は十一時まで話した。

四月二十五日。小雨。白百合と名の分らぬ花一瓶を土産にして、安子の處へ行く。有難いことには、安子は前に會つた時より、ずつとよくなつた樣だ。ベランダの椅子に腰かける事さへできる。安子が來月から引移る家を探しに出かけ、彼女にふさはしいのを見付けた。三時まで話す。

ストリンドベルクの“There are Crimes and Crimes” を新たな興味を以て再讀する。ストリンドベルクに於けるが如く、一人の人物の中に、「ドン・キホーテ」と「ハムレット」が巧妙に混合してゐるのは、殆ど他に見られない事である。彼の果敢さは非常に公平、誠實で、中世の物語を思ひ起させ、一方人生(觸れ得る實人生)の知識に於いては、彼は現存大家乃至最近まで生存してゐた大家に對して優らずとも劣らぬ樣に思はれる。

佐藤孃が丸山の福壽草を送つてきた。親切な人だ！

四月二十六日。曇。貸家を見て來た結果を話しに神尾を訪問。神尾の父は今日安子を見舞に行つて下さつた。母は御病氣だが大したことはない。

　午後は何のこともなく有耶無耶に終る。恥づ可きだ！　けれど母上が愛國婦人會に出席する爲め、外出したので、父上を一人お殘しして置くに忍びなかつたのだ。四五日振りで、夜に暇を得た。早速二十日以來の主なる出來事を書きしるす。

　高松博士から葉書。吉川の次男（札幌に居る）が病氣で入院しなければならぬ程の由。吉川は札幌へ行つた。快癒を祈る。

五月三日。晴。安子が、借りておいた小さな家に病院から引越す日である。彼女は長い間の病院生活の單調さをこぼしてゐたので、天氣が定まつたら病院から移る事にしたのだ。私は家を探した。二十九日に、車屋のおかみに案内させて、病院の庭のすぐ近くに、一つ見付けた。神尾の父も其處を見て、丁度手頃だと言はれた。二日は荒天で、强風を伴つた小雨だつた。安子の手紙には暴れ模樣だから引越はまづ不可能だと書いてあつた。だが幸ひな事に、今日はすつかり天氣がよくなつて了つた。私は大變喜んだ。行郎と一緒に臺所のものを持つて平塚に行く。安子は全く愉快さうだつた。看護婦長、看護婦（石川）と料理番（渡邊）が手傳ひに來た。安子は人力車で病院を出た。彼女は一年以上もわびしくくらした場所をよくみたいからと、車屋に病院の周（まは）りを一廻りして貰つた。荷物を滿載した四臺の車が往復して、我々は新しい住居に落着いた。安子には大變いゝ結果をもたらした樣だ。

　一日に、神尾では親切にもはるを安子の附添によこしてくれた。彼女は氣の利く、よく働く女だ。安子は彼女が來たので唯もう滿足してゐる。彼女と看護婦（瀬川と云ふ）が安子の用をする。〔此處に病室と新しい室との間取り圖あり、略す〕

　昨夜、私は八代氏（白鳥博士の寄宿舍の仲間の一人）を訪れ、私の家の系統について、二三相談する。偶然、オキシヘーラーの使用を宣傳してゐる前島と云ふ人の名を口にした。私は、神尾の父がオキシヘーラーについて調べてゐる事を知つてゐる。八代氏は、とに角彼に會へと主張した。とう〳〵その氣になつた。時刻は大變おそかつた。それでも前島氏は私を應接

間に導き、夫人と子息のユタカ君に紹介して下さつた。因みにユタカ君はもとの私の生徒で、彼が札幌の病院にゐた時、多少補助をした事がある。非常に親切にして下さつて、出來ることなら何でも便宜を圖らうとまで言はれた。器具を一揃ひ借りて來た。今日それを平塚に持つて來て、安子に試みた。その外、衰弱してゐるものに大變效果があると云はれる「大蒜」も試みてみた。

今晩は泊つて行くことにした。本當に隨分長い事、宿つてやらなかつたものだ。兩親は、私が彼女の所に泊ることを好まれない。感染するのを恐れてゐられるらしい。だが、私が安子の部屋近くに眠る時、彼女の夢に齎らされる喜びと慰めがお解りにならぬらしい。

五月四日。晴。十時に安子と別れて、東京に歸る。椿は凋んだ。月草が咲き始めた。小麥は三尺程の高さになり、下葉は黄ばみだして居る。新綠は日光に當つて、エメラルドの玉を積んだ樣に輝いてゐる。微風は氣持のよい鎭痛劑の樣に感ぜられる。不思議な胸に迫る悲しみがひし〳〵と感じられる。喜ばしい知らせを傳へに眞直に千駄ヶ谷に行く。だが具合惡く誰もゐない。少し經つて敏が歸つてきた。敏行と歸宅。行光にお母樣は退院なさつたと話した。平生は母の事は餘り聞かうともしないが、今日は私に「お母樣がおうちに歸つていらつしやる迄には、何遍くらゐお引越をしなければならないの？」と尋ねた。此の言葉には心が張り裂けさうだつた。

先夜彼は夢（たしかに夢だ）から覺めた事があつた。私が蒲團をもつとよくかけてやらうとしたら、ひどく抗つた。我慢しきれなくなつて、するがまゝに任せて寢た振をして居た。暫くの間（約四十分）彼はひどく亂暴になつて、獸の樣に寢床の上をころげ廻り、心に浮んだ物をすべて罵つてゐた。だが遂に怒りも次第に靜まつてきた。低い聲で兒守りのみよの名を呼びながら（彼の母ではなく！）すゝり泣き始めた。だが彼女を呼んでも駄目なので、暫く彼は默つてゐた。死の樣な沈默が暫くの間、部屋に漲つてゐた。そして沈默の底から彼は實に憐れな聲で私の名を呼んだ。それは私の心の奧底に訴へた。私は彼の方へ手を延ばしてやつた。その手をとつて、泣きだした。私も泣かないではゐられなかつた。父と子は一緒になつて泣い

た。かくて子供が寢付かぬ中に、非常に悲しい、非常に神聖な瞬間は過ぎ、父は涯しなく泣き續けて居た。

五月五日。絶好の天氣。夜は子供の會で來客。行は昨日から病氣。山本の子供來る。龍岡健助、壬生、英夫も來る。神尾の父は今日安子を見舞つて下さつた。安子は元氣で庭等を散歩して居たさうだ。未だ農場のことをやつて居ない。やくざな自分だな！

五月六日。午前晴。午後曇。午前、東郷青兒の繪畫展覽會を見に行く。彼は未來派の繪をかく唯一の藝術家である。私は去年日比谷で彼の作品を見て、その獨特の才能に心打たれた。今度見ると以前よりも、彼の藝術は精神に於いて、技巧に於いて深められてゐる事を知つた。彼の作品の或る物は、色の混合が實に美麗で、見る者を恍惚とさせる。今日彼自身に會つた。

彼は若くて、丈夫で、未來ある樣に見える。彼の聲は亦非常に男性的なバリトンだ。私が部屋に入つた時には、高らかに歌つてゐた。

五月七日。早朝から激しい風雨。風雨を物ともせずに、外出したくなつたが、自制して、勉强と手紙書きに耽る。午後から農場の事に手をつけ殆んど終る。

安子の手紙では一昨日は熱が高かつたとのこと（三十八度）、自由になつたのを喜びすぎて、したい放題をしたのに違ひない。だが手紙の調子から見て、昨日今日はよくなつたらしい。

夜フランス語を勉强する。大島に十四圓（四月、五月分）送付。札幌大學に三圓、橋本博士の二十五年祝祭への寄付として送る。

怠けるな！　一生懸命働け、さもないと何時か泣かねばなるまいぞ。

五月八日。絶好の天氣。稍〻冷たい。朝、神尾の父が來られる。一緒に晝飯。午後、天氣がいゝので、行、行三とベビちやんを連れて隅田川に行き、一錢蒸氣に乘つ

て樂しむ。
歸宅後、熊雄から電話がかゝる。彼の家に立寄つた信子さんが、ひどい胃病を起し、二三日は家に歸れないとの事。私は壬生馬が留守だから、この知らせに對し責任を持てないと答へた。熊雄は私が責任を持つ必要はない、たゞ壬生馬に知らせてくれゝばいゝと云ふ。だが夕食が濟んでもまだ壬生馬は歸つて來ず、ベビちやんはぶつ〳〵云ひ出した。間もなく、父上が此の事にお氣づきになつて、私に熊雄に電話をかけるようお命じになつた。私はかけた。彼はベビちやんを神田に寄越してくれと云つたが、ベビちやんをやるには、壬生馬の承諾がなくてはならぬと言つて斷つた。壬生馬が九時半頃に歸つて來て、父上にひどく叱られた。だが彼は落着いてゐた、そして自分で信子さんに電話をかけた。信子さんは泣いて許りゐて、ほんの少ししか話をせず、その爲、壬生馬には彼女の宿つて居る譯がわからなかつた。すると熊雄がやつて來た。だが彼の話も亦解らない。唯、壬生馬が明日その詳細を聞きに來るがよからうと云ふ事だけ解つた。
不安な空氣が我々を蔽ひ始めた。
五月九日。快晴。平塚に行く。安子は氣分も身體も好い調子だ。唯熱がまだすつかり取れない。病院への支拂もすつかり濟んだ。ベランダにガラス窓を作る樣にたのんだ。
歸宅してみると、信子の事に就いて一向何の知らせも來てゐない。夜の八時頃、志摩から電話で來てくれと云ふ。賴みに應じて、急いで行く。晴れ渡つた星の多い夜で、頭上には三日月がかゝつてゐる。途中で、その事件を色々に思案し、青山で乘換へるのを忘れ、三丁目まで行つて了つた。そこで反對の電車に乘つたが、その中で召使を連れた若い夫人に會つた。美しい、綺麗な、魅力ある顏は私を憐れむかの如く見てゐた。私は全く變に見えたに違ひない。
志摩に聞けば、熊雄が今日晝過ぎ、志摩の義父母を訪ねて來て、信子は壬生馬の處へ歸つて行くのが厭なのだと云つたとのこと。信子はベビちやんが母の手が要らない程大きくなつたら、離婚しようと、唯その時の來るのを待つて、できるだけ努力し、我慢して壬生馬と一緒に生活する樣に努めてきたのである。彼女は兩親の限りない御親切は知りぬいては居るが、

併しこの上壬生馬と同棲する事は全く不可能である。この知らせには驚いた。その瞬間までは、想像もしなかつた事であつた。長時間話した後、(喜寛さんも居た。)事件を如何に處理したらよいかと云ふ事につき、次の樣な話になつた。
から紛糾する樣になつたのには三つの原因が想像される。それは
A、壬生馬の態度が本當に許し難い。
B、兩者の間に何か誤解がある。
C、でなければ、掛け引きの多い彼女の母が、深くめぐらした謀によつて起つたのである。
そして解決を圖る爲には、第一に壬生馬の本心をよく尋ねる事が肝心である。根本的の事實を知るには二人の姉妹の方が、男よりは柔しく急所に觸れられるから、適當である。
十時頃、辭する。車中で龍岡夫人に會ふ。母上だけが起きて待つてゐて下さつた。母上に信子の事に關する眞相を全部お話ししたら、非常に驚いて居られた。

五月十日。快晴。暖かし。朝、愛子と志摩が來て壬生馬と親しく話した。壬生馬は自分には非はないと強く主張した。我我はその事を父上に告げた。父上は高木家へ會ひに行かれ、原田夫人の策略に關する疑ひを述べられた。
高木の人達が齎す知らせを聞きに、夜九時頃高木の處へ行つた。(丁度昨夜の樣な晴れた夜だつた)。十時頃、高木の人々が歸つて來た。私は喜寛と志摩と一緒に、彼等に會つた。その話では、信子が家を去つた唯一の理由は、兩家の關係が現在の樣である以上は、壬生馬と一つ屋根の下に住む事は、不可能だと考へたからなのである。お互ひの憎しみは日一日と激しくなつて行く樣である。信子も丈夫な方ではない。若し身體が惡くなつたら、夫に對する母の感情は益〻惡くなるだらう。のみならず、彼女はこの事の爲に夫が何時も仕事の邪魔をされてゐるのを、大變氣の毒に思つてゐる。又、ベビちやんも段段大きくなつて、兩家の關係に捲き込まれる樣になるだらうが、それは子供の爲に非常によくないだらう。信子は普通の子供が惠まれてゐる父親の心遣ひといふものも知らないで、母親に二十四年と云ふ長い間育てられたのであるから、母を見棄

てる事は出來ない。家と母との二つを比べ乍ら、彼女は何度も離婚を考へたが、今迄決心できなかつた。併しこの上面倒にならない中に、離婚する事が肝要だと考へて、遂に兩家と可愛い一人の子供の爲に、その地位を捨てる決心をした。高木の人達の話では、信子の決心を促したある事件があつたとの事。併しそれは關係がない、全然考慮に入れないでくれと彼女が頼んだとの事である。

これだけの話をしてから、彼等はその意見を述べて、解決の唯一つの方法は全力を盡して仲直りさせる事、そして信子の母が壬生馬に盡したがつてゐる親切――今迄は受けてくれないので怒つてゐたが――を、これからは凡て受けさせる事であると云つた。

十二時、家に歸る。行郎とフランス語を勉强する。宮原から電話がかゝつてきた。併し今事件が持上つてゐるので、會ひに來る樣に招く事が出來なかつた。橋浦が訪ねてきた。今後、橋浦はホイットマンに關する質問を送つてよこす事にきめた。

ベビちやんの熱は少し下つた。

五月十一日 晴。午後から壬生馬の考を述べさせる爲め一緒に高木の處へ行く。併し彼等は丁度外出する處だつたので、我々の話は聽いて貰へなかつた。我々は志摩と事件について少し話して、其處を出た。私は佐々木病院へ行き、それから神尾の處へ行つた。父上にはお會ひ出來なかつた。行は敏と非常に仲よく遊んでゐた。母上のお話では、秀は間もなく敏に別れる筈で、その代りにきくが來たとの事である。彼女は十六ださうだ。だが柄が大きくて、そして素直らしい。

夕食後、高木の人達が壬生馬の家を訪ねた。我々は信子に歸つて貰ひたいと希望した。そして若しそれが許されぬなら、高木と壬生馬夫婦との間で話合ひをしたいと述べた。彼等は我々の希望に應じた。

五月十二日。稍ゝ曇。風。行が此の數日少し氣むづかしくなつた。多分、胃の弱い爲か、癇癪持ちだからであらう。

晝過ぎ、志摩から電話で高木の兩人が今日の午後信子に會ひに行つたが、我々の要求を容れるにしても、はつきりと心が決まるまで、二三日待つて貰ひたいといふ希望だつたと知らせてきた。私は壬生馬に勸めて自分で高木の處へ行つて、高木の

母から、今日の午後、原田の處での話を聞いてくる樣にすゝめた。併し、高木の父が外出してゐたし、喜寛もまだ歸つてきてゐなかつたから、果さなかつた。農場の事務もとう〳〵終つたので、全くほつとした。私は踊りたい位だ。

夜、愛子を訪ね、此の三日間に起つた事をすつかり話した。

安子から葉書がきた。

私の好きな本(Leaves of Grass)の歴史を題材にして、小說を書き始めた。若しその本の眞髓をつかみ、今日までのその本の盛衰を書き盡す事ができたならば、非常に興味ある作品ができるだらうと思ふ。

孫逸仙は支那へ去り、アメリカで軍費を作つてゐた黃興が一昨日、日本に立ち寄つた。

五月十三日。土曜。晴。少し風がある。十時から行と行三を伴れて神尾の處へ行き、それから神尾の父と敏と一緖に戸山學校へ行つてそこの生徒達及び近衞軍樂隊の演奏を聽いた。席は木蔭に取つてあつた。頭の上にはエメラルド色の木の葉が美しい天蓋となつて居る。風に吹かれて、あたりの木から小さな花が散つて行く。音樂を聽くにはこの上もない場所だ。演奏者は七十人を超えて居る。和洋の曲が奏せられたがなか〳〵巧い。然し演奏が機械的でうるほひがなかつた。

夜は築地の精養軒で例年の通り學習院卒業生の同窓會があつた。昔の同級生に會へるだらうと思つて出席したが、みじめにもその期待は外れた。唯佐藤氏と東久世氏と四條氏に會へたに過ぎない。その外、山口(十八)、大河内その他二三のものと少しばかり話した。

銀座を少し散歩。外氣は爽かなり。

五月十四日。日曜。晴。宮原(札幌から永住の目的で母と共に出京)が訪ねて來た。彼はロシア文の手紙の飜譯者として、野澤組に入つた。彼は長い間成就しようと考へてゐた抱負の數々を述べた。彼は文筆で立つのが希望である。又、私が去つてから後に、札幌に起つた色々の話を聞かせてくれた。松島の結婚〔括弧内は邦文〕(私は不肖なものですが、妻は尙ほ不肖ですから何分宜敷、結納は後でもいゝのではないですか)、シモトマイが田中館孃と結婚して大學の專用研究室で共同研究を

してゐる事、――學生の羨望が彼に集つてゐる事、山内が小說の形で某敎授の無能を嘲笑したこと。
宮原と一緒に高田に足助を訪ふ。目白の次の驛で下りた。彼の下宿は鬼子母神のすぐ傍にある、美しい場所だ。夕方、三人で鬼子母神を拔けて散歩に出かける、途中で橘浦の家や護國寺やその外の美しい場所を通り、牛肉屋（淡路町）で夕食をした。それから足助と飯田橋まで歩いた。

五月十五日。月曜。稍ゝ曇。ひどく暖かい。風あり。
朝、壬生馬と信子の事について話す。高木の話では信子から確答がある迄、二三日待たねばならぬといふのであつたから、我々は四日も待つた。そこで私は志摩に電話をかけて、信子から何か返答があつたかどうかと尋ねた。志摩はないと言つた。そこで私は志摩に姑と相談して出來るだけ早く返答を得るように賴んだ。
佐藤學長に會ひに行く。だが留守だつた。そこで白木へ森田と長谷川の展覽會を見に行つた。特に惹きつけられたものはなかつた。其處で內田夫人と橘氏の先夫人に會つた。
昨日、壬生馬は彼の机の中に指環を二つと（その一つは婚約の指環）、彼が與へた時計の鎖を見付けた。彼の話では、出納簿は几帳面に計算して決算してあつたとの事。彼女は又、夫の紙入に十圓入れておいた。本當に可哀想な女だ！　私は彼女を憐れみ、その落着き方には驚いた。
母上が昨日平塚へ行つて下さつた。安子の具合はいゝ方だつたとの事。神尾の母が今日行かれたら、少し熱があつた由。安子の處へ新しい女中が來た。

五月十六日。火曜。午後、大橋圖書館へ奉天の戰について少し調べに行く。朝、志賀直方とその妻が來た。彼は自ら經驗したその戰の一出來事を聞かしてくれた。私はそれが小說の形にしたら、實にいゝものになるだらうと思つた。それで材料を集めようと思つたのだが、駄目だつた。息苦しい樣な暑さだ。

五月十七日。水曜。大變肌寒い。曇り後風雨。佐藤學長を龍名館に訪ひ、鎌田總長に紹介狀を書いて下さつた御禮を述べ

た。其處で洋行する八田博士に會つた。(宮原に聞いた所では、外交上の使命を帶びて洋行する由)。それから鎌倉へ安子の爲に薔薇の花を少し買ひに行く。新橋驛で高木夫人に會つた。熊雄が今朝、夫の處へ來る筈だと云つてゐた。彼女は大磯へ行つた。鎌倉で美しい花束を一つ買ひ、千代田の處に少し置いて來た。

鎌倉驛で箕田に會ふ。安子は少し熱があつた。可哀想だ！　だが氣分は晴れやかで、愉快に話した。神尾からよこした女中が居た。安子はヒステリーになつた樣だと自分で云つてゐた。本當にさうらしい樣だ。

六時半少し前に家に歸つた。高木と熊雄の會見について、高木から何とも云つて來ないと聞いて、可成り驚いた。

五月十八日。木曜。雨ふり大變冷たい。なんといふ陽氣の變り方だらう。一昨日は袷でさへも暑く感じたのに、今日は誰も綿入を着て震へてゐる。中には羽織を着てゐるものさへもある。

志摩に電話であの事を尋ねた。熊雄の口上は少々曖昧で、高木夫人はそれでは納得できないので、原田を訪ねに行つたといふことだつた。壬生馬は陽氣が變つたから要るだらうと思つて、信子の着物を少し原田へ送つた。

父上は今朝、こんなに雨がふつて天氣が惡いのに安子を見舞ひに行つて下さつた。夕方御歸宅。安子はちよつとみた所では、少し疲れてゐる樣に見えたが、いくらかよくなつた樣だとの事。文武會雜誌に論文を書き始めた。

井上氏が來て云ふには、神の使になつたと云はれ、奇蹟を行ひ、病を治す事の出來る靈的な女を見つけたさうだ。その話によると、彼女は商人の妻で、十二年間ひどいヒステリーだつたが、その後突然、神が乘りうつり、神がその仕事をさせる爲に自分を選ばれたのだと夫に告げたとのこと。夫は此の宣言に服し、その後は僕として彼女に仕へた。彼女は日一日と超人的力を得、死んだ者を蘇へらしたり天候を變へる事さへ出來る樣になつた。井上氏の眼前で、盲目や不具の足を治した。福來博士が嘗て彼女を訪ねた時、暇乞をすると、天氣が變つて雨が降つてきた。丁度傘を持つて來て居られなかつたが、氏が歩いてゐられる間には雨はやむだらうと確言した。本當に彼女の云つた通りだつた。又ある時、祈禱家がやつて來て、彼女と業比べをやつた。一山の炭が燃えたまゝ持出された。まづ祈禱家が少しの火傷もしないで其の上に乘つた。併し長い間

祈禱した後にやつたのであつた。それから門弟（岩本氏も含まれてゐる）が何等儀式ばつたこともせずに、それを渡つて、祈禱家をひどく驚かせた。岩本氏の姪はその高弟である。或時、井上が彼女をハンケチでかたく目隱しした處が、暫く精神を集中させてから、突然、まるでハンケチを通して見る事ができるかの樣に、井上を追ひかけ始め、とう〳〵捕へること三度に及んだ。井上はその外澤山の事を話した。結局、彼は安子を治してくれる樣に賴めと、勸めたのであつた。私は第一に岩本氏に會つて、彼の意見を聞かうと申し出た。

五月十九日。金曜。降雨。寒し。朝、志摩から電話がかゝつて、高木の母が信子の處へ行つた結果は、何の役にも立たなかつたと云つてきた。信子は最初の決心を斷じて變へないらしい。それだけに尙のこと、激しく泣いてゐる、その樣は憐れだつたとの事。此の事を父上及び壬生馬に話す。

午後、父上は神尾の處へ行かれ、私は前島氏を訪ねて行つて、御馳走になつた。氣持は非常に爽快だが、少し疲れた。夜、執筆を續ける。

五月二十日。土曜。雨天。寒冷なり。壬生馬と朝早く、高木の處へ行く。高木は私等に會つて、次の樣な事を云つた――昨日、彼は高田氏に會つて、此の事について相談した。高田の考へでは、最後の決着は三ヶ月乃至半年經つまで延ばす方が望ましい、その間には信子の考も好い方に向ふだらうからと云ふのであつた。壬生馬は、信子に會つてお互に意見を交換したいと云つたが、高木は、會へば喧嘩になるだらうからといふので反對した。私は私が信子と會ふ事を希望した。高木は氣輕にそれを承諾して、信子にさう話さうと約束した。

私達は赤坂で別れ、私は岩本の家に連れて行つてくれる約束の井上氏に會ふ爲に大塚に行つた。曇つた天氣だつた。電車の中で病氣の事や、今にあの女に會ふ事等を、深く考へ續けた。豫定の場所に着いたら、井上に會ふ時間迄に、まだ隨分時間があつた。そこでもつと乘り續け、瀧ノ川をぶらついた。思へば、紅葉の頃に家族連で此處へ來たのも隨分前のことになる！　數知れぬ楓の植つて居る急な土手に沿つて、乳色の水は遠くうねつて、今も尙流れてゐる。だがあれから三十年以上

も經つたのだ。十時に井上に大塚の終點で會ひ、直に岩本氏の家に行つた。二十年程前に始めて彼に會つた茶室は、今も、棟の一部を形作つてゐた。主人はその時と餘り變つてはゐなかつた。美しく溫情味のある顏をした、人を魅する力が十分ある人だ。彼の考では、その女の業は決して驚嘆すべきものではない。十分に信仰を持つた人なら誰でも同じ事が出來る。唯、大部分の人はそんな絕大な信仰を持つてゐない、その爲奇蹟を行つたり、治療をしたりすることが出來ないのである。彼は彼女を宗教的天才の最も顯著な型の一つと見做してゐるが、精神的方面に於ける彼女の發展は研究に價すると考へてゐる。彼は私達に晝飯を出し、彼女の禮拜所と、面會所のある處へ連れて行つた。廣い、古い、飾りのない建物だつた。私等が入ると、女(山田と呼ばれる)が障子をあけて出てきた。みるからに非常に瘦せた、神經質な、蒼白な顏をしてゐた。最初彼女は言葉少なにおづおづと話した。超自然力及びそれと人の關係に關する彼女の考は稍々深遠なものであつた。私は非常に興味深く聽いた。だが私は靈的な物はすつかり失つて了つて、自然的でない物は如何なる物も信賴できぬと、何時も主張してゐるのだ。遂に私は井上に、彼の傍に坐つて、門弟の咒文を受ける樣、說き伏せられてしまつた。夕方、井上の家で食事して、今日の出來事を何だかひどくきまり惡く感じ乍ら、豪雨の中を家に歸つた。

五月二十一日。日曜。曇。さして變つたこともなかつた。午後から行光と太郎を伴れて山王公園に散歩した。

五月二十二日。月曜。曇。蒸し暑い。昨朝、健助の母が死んだといふ知らせがきた。そこで父上は私に千代子を慰めに鎌倉へ行く樣に云はれた。汽車に乘る前に、慶應に行き、鎌田總長に會つたが、氏は親切に迎へて下さつた。これと言つて印象はうけなかつた。彼は正直らしく見えるが、卑屈さうにも見える。

鎌倉に着いてから、花屋へ行き、薔薇と罌粟を少し買つた――非常に美しいものだ。それから千代子の處へ。前に會つた時よりもずつと丈夫さうになつてゐた。自分が病氣だつたので、薩摩へ行つて姑の病氣を見舞ふ事が出來なかつたのを、大變悲しんでゐた。西洋菓子と丁度市場に出始めた苺を少し贈つた。

大船で平塚へ行く汽車を待つてゐる間に、恐るべきことが起り、私を非常に驚かせ、悲しませた。汽車が着いた瞬間、私

は機關の音とは違つた叫び聲が聞えた樣に思つた。然し唯ならぬ出來事とも思はず、待合室から歩き出した。その時、驛員が「誰かプラットフォームの下に飛び込んだ！」と烈しく叫んだ。鋭い針の樣に私の耳を貫いた。聞いたと思つた叫び聲らしいものは、驛員か、自殺者自身かどちらかの發した本當の叫び聲だつたのである。私が汽車の下を覗いたら、線路の上に下駄の片方と小さな風呂敷があつた。程なく乘客が汽車から降りてきて、驛員の周りにたかつた。驛員は興奮して、出來事のあつた場所を指さし、大聲で何か云つてゐた。彼は最初に見たと云ふ事を誇つてゐる樣にさへ見えた。私は落着いて、眼前に起つた事を凡て觀察しようとした。併し私の心臟は鼓動が非常に高く、私の心はまるで水上にゐる樣に動搖して、其處にぢつと立つてゐる事もできなかつた。私は未だ嘗てこんな不安を感じた事はなかつた。次の汽車まで出發を延ばした方がいいと思つた。でも、勇氣を振り起して、とう〳〵その汽車に乘つたが、腰かけの下に妙な衝撃を感じた。私がプラットフォームにゐる間には、死體は發見されなかつた。萬望、その人が死ななかつたやうに！　夕方、平塚に着く。安子は胸に、鎭痛劑を塗つてゐた。風呂場の煙が部屋中にこもつてゐて、涙が出る。煙と藥品の妙な臭ひ！

　安子に、一昨日の四時頃の感じを尋ねた。彼女は格別變つたこともなかつたが、唯、咳が著るしく減じ、それからは苦しみがずつとよくなつたと云ふ。私はあの女の事を詳しく話した。安子は大變興味を持ち、「その女にかゝらせてくれと望んだ。夜を平塚で過す。大變靜かな夜で、側に子供もゐないので、ぐつすり靜かに寢られた。

五月二十三日。火曜。晴。暖い。夜は美しく明けた。海岸を散歩し、馬入川の河口にある小村スガまでも行つた。近頃雇つた女中の態度は可成り奇妙だ。名を二つ持つてゐる、そして書畫が大變うまい樣に見せかけてゐるし、非常に迷信深い。二時の汽車で立つた。東京に着いたら、信子が私に會ひたいとの事。そこで夕食後、神田へ行く。熊雄が私をもてなしてくれ、今持ち上つてゐる不幸な事件を詫びた。熊雄と一寸話してから、離れに通され、そこで單身信子に會つた。始め彼女は非常に落着いてゐた。私は確執を除き、彼女を私達の心持に同じくさせようとして全力を盡した。私は熱情を迸しらせて話した。彼女はそれを感じて泣いた。最後の返事をきくのは又の事として、彼女と別れた。會つたのは無駄でなかつたと思

ふ。そして今迄非常に確固たるものと聞いてゐた彼女の態度は、ぐらついてゐると云ふ事を確信した。

平塚では麥の刈入れが始まり、なすやきうりが食べられる樣になつた。それを少し、東京に持つてきた。

五月二十四日。水曜。曇。風。朝、高木へ行つて、信子に會つた事を話し、多分彼女から高木によい返事があるだらうと述べた。高木はそれはうまく行つたと云つた。私は又、壬生馬が彼に高慢な手紙を書いたお詫びを述べた。高木はその手紙を私に返して、無分別な思ひあがつた事が書いてあるから、その手紙を披見しなかつたものとして取り扱つた方がよからうと言はれた。

歸宅後、曉子と行三を連れて神尾へ行く。敏は殆んどよくなつて、私達を大喜びで迎へた。程なく、神尾の母が歸つて來られた。母は私に不思議な術で澤山の人を治療した祈禱家の事を話された。母がお訪ねの時、安子の病氣の起りは鐵の爲だと云つたとの事。彼女の病氣は決して肺病でもなく、又重くもない。彼の手にかけたら、三四ヶ月で癒るだらうと云つたさうだ。私は母にあの女の事を話した。母はすぐその氣になられ、その女に癒させて見たいとお言ひになつた。午後はフランス語を勉强。夕食前、行光を連れて下町に行き、子供等の靴を買つた。

豫告通り、八時半頃高木が訪ねてきた。その話では、原田、有島兩家から十分苦情を聞いた後、自分達夫婦は事件が落着したものと考へたので、彼は今日の午後原田を訪ねて、信子に、彼女に取つて最善の方法は、彼れこれ云はずに壬生馬の處へ歸る事で、さうするより外に仕方はないと傳へた。若しそれが出來ぬならば、彼等夫婦で會つて、どうとでも二人の間で決める可きだ。それ以外には方法がない。で、後で信子が高木の處へ電話をかけて自分の考を熊雄に話し、熊雄がそれを武郎に傳へ、そして最後に武郎が壬生馬に話したらよくはないかとのこと。一旦家に歸つてから、私等の處へ來て、事の經過をすつかり話して私等の希望を聞くのが、適宜の方法だと彼は考へたのである。私等は答へた。殘る方法は唯一つだ。それは壬生馬と信子が最後の會見をすることにあるのだと。

五月二十五日。木曜。颱風の樣な天氣。何もかもじと〳〵して、不愉快だ。

壬生馬が父上の處にきて、いよ〳〵信子と會ふ前に、中村と江木の處へ行きたいと云つた。彼が考へるには、此の會見は最後のものとなる樣に思はれるから、兩家に事件の詳細を話して置くのは彼として賢明な事である。彼等は多分、我々の間に立つて仲裁を申し込んで、最後の破裂を免れしめてくれるだらうと云ふのである。父母は壬生馬の意見に反對して、とうとう彼はその計畫を諦めた。

愛子に會ひに行つて、事件を話し、それから町へ行つた。午後、馬場氏に會ひに行き、慶應大學就任の御禮を述べた。夜はさしたることもなかつた。

五月二十六日。金曜。曇。約二千年前、キリストが愛する弟子と共に最後の晩餐を喫し、爾來多くの人が不吉な日として忌んで居るその金曜日である。この日壬生馬と信子は最後の會見をする手筈である。

私は朝早く、淸水谷公園に散歩に行つた。外に出た時、石橋のはしにつまづいて、足の指をひどく傷けた。ハンカチを裂いて、怪我した所をいはへ、(心中に事件の結末を非常に危惧し懸念しながら)山王山の上へと散歩を續けた。妙な不安が何度となく心に浮ぶ。新聞に壬生馬と信子と、父上と私の運星は大變よくなつて來たと出てゐるのを見出した。そんな小さな幸運の前兆すら、私には大變元氣をつけてくれる樣に思へる。

父上と壬生馬と三人で今日の會見の運び方について長い間話した後、私は部長の石田氏(新太郎)に會ひに慶應大學へ行つた。併し彼は見當らず、文科の首席教授の川合氏に會つた。氏は心から迎へてくれた。私は氏に次の學年には、ワルト・ホイットマンの詳しい講義をする計畫だと云つた。氏はそれに贊成して、私の爲に準備しようと約束した。

それから例の會見のある前に志摩に會ひたいと思つて、急いで高木の處へ行つた。彼女の話では、原田瓊生が電話で、會見の前に私と密かに話したいと云つて來た由。私は非常に不審に思つた。丁度私等が高木の兩親と晝飯を終つたところへ、瓊生と熊雄が自動車で到着した。高木は私を自分の部屋に呼んで、瓊生が私に會つて、會合の事に就いてあらかじめ話して置きたい事があると云つて居ると傳へた。私はそれを承諾し、壬生馬も列席して、可成り長い間話した。

長時間かゝつた瓊生の話の要旨は、第一に、信子の今度の決心は甚だ堅く、かつ終結的のもので、如何に說得しても動かせないといふ事。第二に、若し此の事が事實とするならば、壬生馬と信子の最後の會見は無駄であるのみならず、有害である。何故ならば、それは雙方に不必要な惡感情を與へ、その爲、永遠に憎しみが續くやうになるだらうから、との事。

私は彼に次の樣に返事をした。

壬生馬が會見を要求する理由は實に單純である。信子が申出た理由の中主なものはなくなつてゐるのだ。信子の母と兄弟が信子の壬生馬の處へ歸るのに贊成してゐるのなら、もう何の意味もない事になつてゐるのだ。高木と熊雄の話によると、壬生馬が信子に會ふまでは說明できない何か他の內密の理由があるらしいのに、結婚生活と云ふ重要事をそんな無意味な、下らない理由で決める事は出來ない。加之、一般の風評が事實だとすると、その內密の理由は何か壬生馬の不名譽な所業に關係してゐるらしい。壬生馬に取つては、說明も辯明もせずに、默つてゐる事は耐へきれない。彼は此の點から信子に會ふ事を望んでゐるのだ。尙、我々は壬生馬の兩親及び兄弟だから、事實を明白にする事を要求する權利があると思ふ。それは壬生馬の不利益ではあらう。でも說明されずに置くよりも、說明された方が遙かにいゝ。壬生馬は未來のある靑年である。(たゞその點から云つても)善かれ、惡かれ、我々はその事實を知らねばならぬ。我々が會見を望む理由は、此處にあるのである。最後の決裂は避けられない樣だから、雙方理解できるだけ親しく話し合つて、事件をできるだけよい方に向ける事が雙方に必要であると云ふ點から云つても、會見することは必要事である、と。

瓊生は我々の言ひ分を了解して、信子を連れて來ることに同意した。

四時頃、熊雄と信子と瓊生が來て、高木の父母と壬生馬と私と一緖に會見を開いた。壬生馬が出て來たのを見るや否や、信子は泣き出した　本當にみるのも憐れだつた。彼等はお互に少し言葉を交した。高木は、直接關係のない他の人達は隣りの部屋に退いて、出てもよい時が來るまで待たうと、提議した。我々はそれに贊成した。

一時間ばかり話し合つた後に、我々は再び部屋に通された。壬生馬夫婦の云ふには、雙方、心ゆくまで話し合つて、お互

ひにすつぱりと了解し合つた。此の破局を導いたのは、互ひの心が變つたのでもなく、又壬生馬の方に誤ちがあつた譯でもない。唯他の事情(それは彼と信子の母との間の爭ひである)が、此の悲しむべき結末を導いたのである。そして彼は、喜んで信子の決心を尊重する。離婚は、信子の今後の生活をより立派に打ち建てるのに、たとへ最善の方法ではないにしても、結局避け難いものと考へるから、彼は此の目的の爲に喜んであらゆる不便を忍ぶと言ふ事だつた。

それから我々は最後の挨拶を交はした。誰も皆、心から遺憾に思つて涕泣し、此の不運な夫婦に同情した。

壬生馬と私は高木の若夫婦から夕食の饗應を受けて、家を辭した。もう殆んど暗かつた。ヴィーナスは私等が歩いてゐる正面に、大空高く、物凄く光つてゐた。私達は俥に乘つた。二人は不幸にもつれた運命の深い打擊を受けたのだ。私は道すがら咽び泣いた。可哀想に、感情的な弟がどんな氣持になつて居るか、私には計り得ることも出來ない。

家に歸つてから、私は壬生馬に代つて、父母に一切の事をお話しした。壬生馬は淋しい家に獨り歸つて行つたのである。

五月二十七日。土曜。朝、曇。雨。御兩親は禮を述べに高木へお出でになる。私は石田氏に會ひに慶應大學へ行く。氏の話では、佐藤學長の紹介狀も見、鎌田總長からもそのことを聞いてゐた。併し、昨日までは、私の地位は豫科の方だと思つてゐた。所が、文科の本科には缺員がないので、私を入れる事は出來ない、と。そこで鎌田總長に會つて、事情を説明し、私は總長の人格に不快な感じを抱いて、歸つた。

安子から葉書來る。熱はまだ高い。否、段々と高くなる樣だ。どうしたらいゝのだらう。本當に可哀想だ！

五月二十八日。日曜。晴。暖。行光との約束で、母上と行郎と三人の子供と曉子とで鎌倉、江の島へ旅行した。子供達は大喜び。

五月二十九日。月曜。曇。朝、平塚へ行く。安子は餘程惡くなつてゐた。此の頃、夜分殊に熱が高くて、中々眠れないので、機嫌は餘りよくないらしい。暗い考へが屢〻起る樣だ。

四時頃家に歸り、行郎と帝劇へ、橫濱アマチュアクラブ公演の「冬の夜がたり」を見に行く。演出は可成りよかつた。シェ

クスピヤの演劇的技倆は、この劇に於いても素晴らしいものがある。上演してみるとよく解る。上流の人が澤山來てゐたが、その中に大變人目を惹く若い夫人が澤山眼に入つた。だが外國の女に比べると、まるで造花の樣に見える。

喜寛が私等を公演に招いたのである。彼の云ふには、壬生馬と信子の最後の會見があつてからは、壬生馬に對しての高木の兩親の態度がよくなつたさうである。

五月三十日。火曜。曇。朝、廣瀨看護婦會に看護婦を一人、平塚へやるやうに電話をかけた。足助が葉書で、昨夕私を訪ねたが留守だつたと云つて來た。

午後から神尾へ行き、慶應大學の事を話し、又祈禱で療治する女の事を話す。父は、それはよいと云はれ、母に其處へ連れて行かせたがつて居られた。

家に歸ると、增田が壬生馬の處で、私を待つてゐた。我々は事の手筈を相談した。これより前に（午前中）瓊生が電話をかけて、明日の壬生馬と信子との會見を少し延す樣に賴んで來た。私はそれは瓊生の言ふべき事で當方の知らぬ事だと答へた。增田の意見は、信子を壬生馬の處に引留め、一方壬生馬に對しては原田夫人と出來るだけ折合ふよう、盡力しようと云ふのである。さもないと、この冒險は失敗に歸して了ふだらう。夕食を共にした。

安子から手紙が來て、病氣は段々に惡くなつてゆき、一方神經は鋭くなつて行くばかりだと。勿論彼女は壬生馬と信子の事件が最後、所まで來て、どうともならぬ樣になつてしまつた事を知つてゐるのだ。涙すらも何の役に立たない。それなの

に、泣くまいとしても涙が流れる。彼女は哀れな夫婦と唯一人の可愛いゝ子供を憐れんでゐる。本當にさうだらう。可哀想な女だ！　お前はその言葉の中で自分自身の苦惱を物語つてゐるのだ。

「三田への公開狀」と云ふ文を少し書く。

五月三十一日。水曜。晴。朝の中、神尾へ行き、母上を奇蹟を行ふ女の山田の處へお連れする。私達が行つた時、脊骨にひどい病氣のある男の治療を終つた處だつた。病人の妻の云ふ所では、彼はギブスの助けを借りても殆ど立ち上れなかつたのださうである。治療を受けたら、もうそんな支への必要もなく、思ふまゝに立つたり、坐つたり出來だした。私等はそれを見て驚嘆した。母上はこれから此處へお通ひ始めになる筈である。

十時頃家に歸る。神尾から電話がかゝつて、春が安子の夏物を取りに歸京したと言つて來た。安子は少しよいとの事。

壬生馬は三時に高木の處へ信子と二度目の、そして恐らく最後の面會をしに行く。彼は夕方可成り遲く歸つて來た。その報告によると、雙方の不和を除く樣な方法を考へようと提議した增田と瓊生の盡力の結果を待たうといふ壬生馬の申し出に對して、信子は贊成したとの事である。信子は若し十分不和を除く樣な方法があるなら、喜んで壬生馬の處に歸るが、自身にはそれが不可能に見えると云つて居るさうだ。

六月一日。木曜。晴。瓊生から壬生馬に電話がかゝつてきて、彼は職務上會社に居なければならないから、私に彼の事務所に會ひに來てくれるよう、壬生馬に賴んだ。私は行きたくなかつた。併し此の會見が或はいゝ結果を齎らすかも知れぬと思つて、行つて見た(高田商會へ)。

私は增田を相談に呼ぶ事を要求した。瓊生はそれに從つて、電話をかけたら、丁度まだ家に居た。まづ、我々は二人の間で話を進めた。瓊生の云ふには、壬生馬が信子に與へた印象は、第一回の時とは大變違つてゐた。始めて會つた時は、壬生馬の言葉は非利己的で同情ある樣に響き、深い感謝の念と悲痛な涙で夜を過さゞるを得なかつた。併し、此の度は壬生馬の態度が橫柄で、ずつと一人でしやべり通し、信子には僅かしか話させなかつた。彼女は非常に壓迫を感じ、彼に對して恐れ

をさへ感じた。事情はかくの如く壬生馬に不利になつて來たのであるから、殘された和解への唯一つの道は、最後の決定を二三ヶ月間延期して、その間に壬生馬が心底から過去の誤りを後悔して、二度と不注意な行爲を繰り返すまいと決心をするまで、新しい境遇のつらさと不便さを十分に味ふべきである。その時にこそ和解の機會が來たと云へる。同じ事が、此の事件については大いに非難さるべき原田夫人についても云へる。だから彼は現在に於ける最善の策は最後の決定を或る時期まで延ばす事だと考へてゐる。私は此の話に對して諾否を與ふべき地位でないので、何れとも云はなかつた。かくして我々の話は終つた。

それから「イーグル」に行き、增田を待つ。一時半になつて、やつと來た。我々は事件について話し、私は差し當つて最も大事な事は信子が壬生馬に對して抱いてゐる愛情の度合をよく知る事だと云つた。若し彼女の愛情がさめてゐるなら、我々の努力は結局何にもならないだらう。增田はそれに贊成して、此の事を私の弟妹、殊に妹達と相談してくれと云つた。その間に增田の方から瓊生に、期日の延期は二日か三日あつたら十分だらうと云ひおくる手筈にした。

家に歸ると、母上の處に神尾の母が來て居られた。神尾の母は壬生馬に大變同情して、自分の夫に出來る事があるなら、壬生馬の爲に何でもして貰つてやらうと云はれた。壬生馬は私が增田と瓊生の仲間から退くやうに望んだ。若し私が退いたならば、話が卽刻破れるといふことは私には解つてゐる。私自身の都合から云へば、身を退けることが何より氣樂だ。

有島健助氏が鹿兒島から訪ねて來た。彼は彼の老母の安らかな終焉を物語つた。

母上は夕食前にモリへ九條武子夫人に會ひに行かれた。夕方可成り遲く御歸宅。

春は夕方五時頃、平塚へ歸つた。

六月二日。金曜。晴。午前中、增田から知らせが來て、彼は昨日瓊生に會つたが、その話では、熊雄が大磯に行つて、主なる親類と事件の相談をし、一方再び信子と面會して壬生馬に對する愛情の程合を尋ねたとの事。そこで我々は明朝再び增田の處で會ふ筈である。

終日讀書と執筆に過す。

父上は瀧本と云ふ者に勸められて、上田と松本の間に近い處で明礬石の採收事業に投資しようと計畫してゐられる。私はその事業に疑ひを有つて居るので、父上に飯田を呼んで其處へ實地調査におやりになる樣にお勸めした。飯田は夜分來た。

六月三日 土曜。晴。少し風。早朝、鎌倉に行つて薔薇を少し買ひ、直ちに平塚に行く。安子はまだ熱があつたが、氣分は前よりも少しよかつた。終日向うで過す。歸る途中、大船で驛員に、線路に飛込んで自殺を企てた男はどうなつたかと尋ねた。男は死んだ、併し何者だか不明。

英夫が私の歸りを待つてゐた。壬生馬と少し話してから、私の部屋に來て、信子に關する愛子の考へを傳へた。彼女は信子と壬生馬との愛情は普通に仲がいゝと云ふ位のものではないと考へてゐる。彼等は繪畫や文學の事までも、相互に理解し合へると云ふ多大の利益を持つてゐるのだから。英夫は十時まで話した。

床についてから戲曲の筋を考へた。――蒸汽機關の力を借りて自殺しようと決心した男が一人の友人に會ふ。友人は鐵道自殺を遂げた男を目擊した恐ろしい經驗を話す。二人とも別々に死の觀念に戰慄する。

昨日、英獨艦隊の衝突があつた。兩軍はデンマーク附近の北海で遭遇した。英艦隊の損害の方が大きくて、超弩級艦二艘、巡洋艦一艘と、尙若干の艦艇を失つたのに反し、獨逸艦隊は三艘程失つただけであつた。

六月四日。 日曜。晴。暖かい。壬生馬のアトリエでは八十六度に上つた。

朝、原田瓊生に會ひに增田の處へ行く。彼は私より先に來てゐた。主なる親類と相談の結果、彼等は離婚する樣に最後の手段を取ることに一致してゐる由。そして事件を未解決の儘にして置ける見込も、又何とかよくする見込もないらしいと。信子の態度固く離婚を望んで居る樣である。そこで事を進める道が全くなくなつて了つた。我々三人は事件を終結さすことに意見が一致した。至極殘念で悲しい事だが、遂に行く處まで行つて了つた。

午後から行光の熱心な願ひにほだされて、靑山へスミスを見に連れて行く。彼は實に見事な技倆を示した。

夜、足助と宮原の訪問を受けた。足助は今日の午後安子を訪ねたさうだ。安子は昨年の一月の半ばに會つた時よりずつとよささうに見え、前に會つた時に比べると殆ど恢復してゐる樣にさへ見える。彼は、時々は子供に會ふ方が彼女の爲にいゝに違ひないと云ふ意見を述べたさうだ。彼女は、それに答へて、自分は多分全快出來ずに死ぬ事だらう、さうなつたら子供によくはあるまいと言つたさうだ。

本當に可哀想に！

武者の「靑年の夢」と、長與の「畫家とその弟子」を讀む。前者は彼の洞察力の益々生長したことを示してゐる。彼は又、複雜なテーマを力強く、かつ眞實に描寫する巧みな技倆を示してゐる。

六月五日。月曜。朝、曇。午後、晴。恥かしい事だ！　一日中格別何もせずに過してしまつた。此の數日なまけて來た樣だ。我慢強く喰ひ付いて居る力がなくなつてきた。重々恥かしい次第だ！

雜誌「新潮」の記者中村武羅夫が來て、私がロンドンにゐた時、クロポトキン公を訪問した訪問記を書いてくれと云ふ。承諾した。

安子から葉書が來て、熱が下つた事が分つた。嬉しい事だ。

クロポトキンの無政府主義の理論について少し讀書する。夜八時頃、スミスが送別飛行を靑山の上で行つた。空についてゐる燈火が、大空に宙返りを重ねる度に美しい環を描く。――殆ど超人的な眺めだ。足助と私はそれを窓から眺めて、唯驚嘆する許りだつた。子供等は熱狂し切つてゐた。

足助は一月から又しても米の相場を始めた事を告白した、私の非難を恐れてゐる樣だつた。併し私はそれについて何も云ふ事はない。少々苦しい經驗をしたら、錢の値打を覺えたと言つて居た。そして八千圓程儲けてから、出版業を始めると云ふ。私は無一文になりはしないかと心配してゐる。併し彼は自身の經驗で悟るまでは、決して人の意見に從はない人間である。そしてさうした方が彼にはいゝのだ。

第十七卷

一九一六年（大正五年、東京及び輕井澤）〔承前〕〔原文英文、編者譯〕

○麹町の父の家に住みながら、平塚に居る安子の看病をした。
○安子の健康は日一日と惡くなりはじめた。
○壬生馬が「南歐の日」を出版した。
○帝劇でスミルノワ夫人及びビー・ロマノフ氏のバレーを見て、その立派な藝術に感心した。
○札幌農科大學の入學試驗委員を命ぜられた。
○安子の死。
○輕井澤に行き、家族及び子供等と共に一夏を過す。
○行郎が米國へ行つた。
○歐洲大戰は尙烈しく行はれてゐる。
○大隈内閣瓦解。
○工場法が制定された。
○佐藤繁井が私に近づいて來て、何とか穩かに事を運んで、松本と結婚出來る樣に賴んで來た。

六月六日。火曜。昨夜霧雨で、午前は曇り、午後から晴れ、風が出た。

午前、母上と敏と曉子を伴れて、夏着やその他入用のものを買ひに三越へ行つた。外で晝食をして、敏を伴れて歸宅。三越でノートブックを買つた。エルツバッヘルの“Anarchism”を非常に面白く讀んだ。

神尾の父が敏を迎へに來て下さつた。

英とまさが來た。私等と夕食をたべる。夕食後、甚だ打ち解けて議論する。

朝、瓊生から電話でまだ何も埓田から聞かない、ついでの時に埓田に其の事を云つてくれと賴んで來た。夕方、隆三が電話をかけて來て、埓田は電話で瓊生に前の日曜の壬生馬との面會の結果を報告したと告げた。そして又、埓田は瓊生に私と一緒に高木の處へ行くのは不必要だと注意したさうだ。後刻、瓊生が再び電話をかけて來て、埓田の助言に從つて明朝別に高木を訪ねると私に告げた。

夜、フランス語の勉强をして過す。

六月七日。水曜。晴。暑い。原田から壬生馬につけてくれた女中を返す。夕方、江木が壬生馬に電話で、會ひたいと云つてよこした。

六月八日。木曜。晴。暑し。約八十度。壬生馬は、江木から面會の要求をくりかへした手紙を受け取つた。壬生馬はもう過ぎた事だと答へた。原田からの要求で壬生馬に會ひたいと云ふのならばそれは別の問題だ。

父上の御希望なので、お伴をして有樂座に山口楠雄が演じてゐる連鎖劇と云ふものを見物に行つた。演技は下らなかつた。だが幾多暗示される處があつた。悲壯な場面を見たので澤山の藝者が劇しく泣いてゐるのを見て、私はもつといゝ、そしてもつと深い悲哀によつて彼等を動かす事が非常に肝要だと思つた。

夜、柴田と云ふ時事新報の記者が壬生馬の事件について訪ねて來た。私は事件に關した事は何も云はなかつた。併し、婚姻關係は經濟狀態の變化に伴つて變らざるを得ないものだと云つた。我々は過渡期にゐる。我々の義務は、かくも進步した社會的發達の眞の姿を把握し、我々の子孫に、この重大事を出來得る限り何者にもとらはれずに完成する機會を與へる事に

ある。
安子から手紙で、非常に澤山喀血したと云つてきた。非常に不安でならない。
夜、無政府主義の諸相を研究する。又、ゴリキーの「太陽の子」を讀む。
本橋(?)及び上田の母から受信。

六月九日。 金曜。暑い、曇。行光が左の股が痛いと云ふ。大變心配になつて、喜寛に診察して貰ひに、東京病院へ連れて行く。彼の見た所では病氣は餘りひどくはないさうだ。それから平塚へ行く。第一に長野博士に會ふ。彼の考へでは、左肺が此の數日少し悪い、割に熱が高いのはその爲だとのこと。
安子は可成り氣持が落着いてゐた。一昨日の眞夜中、血をコップに一杯程吐いた。それから後引續き唾に少し血がまじつて出ると云つてゐた。
歸りがけに、神尾に立ちより委細を報告する。父上は大變御心痛の樣子だ。オキシヘーラーの使用は數日止める方がいゝといふことになつた。

六月十日。 土曜。曇。蒸し暑い。海老澤すゑから手紙と鈴蘭を受け取る。親切な人だ！
原田瓊生が來て、事件を新聞に公表することは愼重にしてくれと頼んで行つた。
午後一時頃、原田を代表する男が來て、信子の持物をすつかり神田へ持ち歸つた。私等は信子の香のする物を一切やつて了つた。志摩が來て、持ち運びを見てゐた。かくて事件は段々と最後の結末に來たのだ。
朝の中、橋浦と國友(大島の友人)が來て、暫く雜談。

六月十一日。 日曜。晴。大變暑い。朝、クロポトキンの本を熟讀して過す。午から子供達をつれて、交詢社の子供の會に行く。映畫と手品。曉子は、母が子供の爲に苦しむ寫眞を見て泣き出した。私の心ははりさける。行三とせきを伴れて家に歸らす。夕方、歸宅。

壬生馬は今朝、江木の處で熊雄に會つた。何も決定したことはなかつたと聞く。夜、「新潮」への論文及び "The Eagle" の表紙の意匠を書いて過す。

六月十二日。月曜。暑い。快い風。朝、安子から手紙が來た。腹立たしくもあり、悲痛な思ひで、一どきに胸にせまる手紙だ。折返し返事を出す。

安子の手紙は後々の爲に此處に取つて置く。〔次の手紙は邦文〕

やつぱり私の申した事がたしかで御座いました。今迄あんなに毎々私は私の病氣のよくない事を申上げましたにもかゝはらず皆樣はそれを信じて下さらなかつたので御座います。そうして私は一人で進んで行く病氣を感じながら淋しく過しました。そうしてどうかして早く手あてをしたいとあせりました。あのお灸の事などずいぶん前からしてほしい〳〵と思つてゐましたが、きたいにあなたはあれにあまり賛成をなさらずにお灸はいつでも頼めるからと、いつもたゞ御仰有るばかりでしたけれども、私は藥といふものにうたがひを持ち出してからどうしてもお灸がきつときくやうな心地がして、しじゆふあなたに御願申したのでした。だん〳〵よくなると思つてゐらした皆樣は私が一人でこうしてあせつてゐるのを、おかしくも、おゝげさにも御思ひになつたかもしれません。私はなほ〳〵早くどうかしなければとりかへしがつかなくなるといけないと心配して居ましたが、丁度信子さんの大事件であなたは此上なく御心配をしてゐらつしやる處へ、是非こうしてほしいあゝして下さいと御願申上るのが御氣の毒で、お灸の事も是非とは申上げかねて居ましたが神尾の方へ手紙を出して、問合せて下さるやうにと願つて見ましたが返事も下さらず、どうしてもこんな事ではいけないと思ひ、うそを申上げて神尾父上からお金を百圓拜借致しそれでお灸の人を頼んで頂こうと思つたのです。そうしてあなたの處へは、自分で百圓だけかねてから貯へておいたからそれでお灸の人をよんで下さいと申上げたのです。何もあなたがお灸にお金を拂ふのをいやに御思ひになる爲にそんな事をしたわけでは御座いません。大事件で御忙しい中へしかも私の病氣をよく見てゐ

らつしやる處へ、そんな事を申上げて、「この忙しい時に自分の事ばかり考へて」などゝ御思ひになられるのがいやだつたからで御座います。一番私がたのみに思つたそのお灸の人も今は北海道に行つて仕舞つたときいては私はほんとに殘念で御座いました。あなたが恨めしい心地がしました。こう進んだ今になつては何もきく事は御座いますまい。巢鴨の祈りも母上がほんとうに信仰してゐられないやうな風に思はれますから、こんな事ではとてもだめ、今は其人の凡ても藥の凡ても私には何のやくにも立ちません。たゞ自分一人の一心熱心な信仰をたよりにするより外御座いません、これをたよりに戰ひます、こゝしばらくで勝負もつきませう。ほんとに〳〵何もたよりにならない世の中、たゞ神を信仰するばかり、けれどまあ凡て運命のまゝに……今日母上が御出になりました。

六月十日夕　　　　　　　　　　　　　　　　　　安　子

武　郎　樣

御許に

母上はお耳の腫物を至成殿で加持してもらつて御出になるそうですのに少しもよくならないとの事、これだけでも信仰して御出にならない事がわかります。

彼女のいらだゝしい心持はよく解つて居るのだ。本當に氣の毒だ。私はまだ〳〵彼女に手を盡し切つて居るわけではない。けれど彼女からこんな無考へな手紙を受取るとは！

ピー・クロポトキンとの會見記を完成。「新潮」に送る。その外は何もしなかつた。

六月十三日。 火曜。晴。暑い。朝はマキシム・ゴリキーの「太陽の子」を讀んで過す。午後から前島氏に會ひに行く。氏は非常に親切に迎へ、私に水治法（pack-bath）をやつてくれ、又機械を一つくれた。ベルモントと足助を訪ねたが、留守だつ

た。女子大學の近くに居る秋元を訪ねたが、同じ日に會ふ。次に石川夫人の處に行つたが、やはり留守。寶亭で夕食してから阪本の所へ行つたが、これも留守。けれど彼の夫人と令息に會つて愉快だつた。七時半頃歸宅。

　壬生馬の「南歐の日」が十二日に出版され、一部くれた。

　江木氏は壬生馬に手紙で、色々に考へぬいてみたが自分の骨を折る餘地は絶對にない、といふ結論に達した。それで甚だ遺憾なことであるが、彼の義務を捨てたいと云つて來た。

六月十四日。水曜。稍〻曇。微風。だが非常に蒸し暑い。

　父上の命で樋口博士の結婚の御祝品を買ひに下町へ行つた、博士は前駐米大使高平氏の令嬢と結婚の筈。午後からフランス語の勉强。

　明朝前島氏を平塚へ伴れて行かうと約束した。

六月十五日。木曜。曇、時々雨。待ちあぐねてゐた雨が昨夕、夕立の樣にやつて來て、水氣のない爲めに乾き切つてゐた草木をすべてうるほし、今朝まで降り續いた。

　朝、新橋停車場に行き、前島氏を平塚に伴ひ、安子の療治をして貰つた。彼女は療治をしてからいゝ樣に感じると云つた。その時まで心中彼女の手紙の文意を怨んでゐたので、別れる時に、彼女にちよつと無慈悲な事を言つた。家に歸つてみたら、昨日書いた彼女の手紙を見付けた。彼女は後悔して、色々とやさしいことが書いてあつた。私の心は解けて、涙さへ流した。可哀想だ！　どれほど私は責め苦しめたことだらう！　即座に私は彼女に慰めの手紙を書いた。

　夕食後、父上と床に就くまでお話する。

　私の留守の間に西川氏が訪ねて來た。平塚への鐵道沿線には、雨のあつたのを利用して農夫が、すつかり用意の出來てゐた田に忙しく稻を植ゑて居た。

六月十六日。金曜。降りみ降らずみ。風あり。午前は女子大の麻布氏、靑葉氏、奧村氏等に手紙を書き、ホイットマンのも

のを讀んで過した。朝、神尾の母上御來訪。一緒に晝食。
午後、フランス語を勉強。夕方敏を伴れて四谷驛まで散歩。夜、足助が來た。

六月十七日。土曜。時々、雨。今日から「ワルト・ホイットマン傳」の材料を蒐集し始める。Perry著「傳記」を通讀する。

六月十八日。日曜。雨と日光。朝、二兒と曉子を芝公園に連れて行く。皆此の遠足を大變喜んでゐた。美しい設計の公園だ。年老いた樹木と莊嚴な寺院。煙、塵等にかこまれた中にこんな場所を發見するとは！

其處で彼等と別れて、湯地一家を訪問。今晩北海道に立つ由。彼等兩人は同じやうな苦い經驗を味つたので、非常な同情をもつて壬生馬の事件を話した。

それから帝國劇場にイー・スミルノワ夫人及びピー・ロマノフ氏のラシアン・バレーを見に行く。すつかり驚嘆した。私は外國に居た時には、こんな種類の演技を見たことがなかつた。だから別に、これと言つて公平に比較することは出來なかつた。私の云ふ一切のことは、そは唯、私を壓倒したと云ふことである。殊に「ダイアナとパン」と云はれる舞踊、その演技の中でも特にパンの狂的な踊り（ロマノフが演じた）は、私を啞然たらしめた。それは藝術の美しい結晶のやうだつた。美その物のやうに見えた。「流浪の人」「白鳥の死」及びショパンの「ノクターン」は美その物であつた。本當に見てよかつた。

家に歸つたら、壬生馬の「南歐の日」が官憲から禁止になつたと言ふ事を聞く。馬鹿々々しいこつた。夕方から母上病床に就かる。十二時まで看病。

六月十九日。月曜。午前快晴。午後から曇。午前は母上の看病と英夫婦の饗應で過した。午後から山内と山本へ行つた。愛子の病氣は未だ癒つて居なかつた。オキシヘーラーを買つてやつた。

札幌農科大學の大岡から電話がかゝつて來た。私は同大學の入學試驗委員にならなければならない由。二十一日から出なければならぬ。

六月二十日。火曜。晴。平塚に行く。安子は可成りよかつた。オキシヘーラーを使つてから苦痛が少し輕くなつたと信じてゐる。これはいゝ知らせだ。此の治療法が彼女を死の手から救ひ出す魔法の杖になつてくれゝばよいが。カーネーションを持つて行つたら、大變喜んでくれた。

歸宅後、前島氏來訪。氏は今夕、丁度私が歸つた後で安子に會つたとのこと。

六月二十一日。水曜。雨。蒸し暑い。朝、佐藤ノブヨリから二千圓借りた增田の借金のことで、陸三を訪ねる。增田の來るのを待つたが、無駄だつた。それから大岡書記官に會ひに(第一高等學校へ)行く。札幌農科大學の入學試驗に關しての打合せ。午後遲く、すつかり疲れて歸宅。

六月二十二日。木曜。雨。體格檢査。七時半頃檢査場へ行つた。荒木は既に來てゐた。三百人ばかり檢査され、その中八人肺患の爲に及第できなかつた。

思ひがけなく松本タカシが訪ねて來た。昔通りの敏感な靑年だ。甚だ愉快に話し合つた。

六月二十三日。金曜。快晴。暑し。體格檢査の續き。八人程不合格。五時半頃歸宅。母上は父上が此の數日計畫してゐられる輕井澤への旅の準備で忙しい。兩親は九時の汽車で輕井澤にお立ちの筈。行三は祖父母と同伴。

足助が葉書をよこし、三日前から脇腹がひどく痛くて苦しんだが、今はよくなつて來たと知らせて來た。

陛下には神尾の父上を宮中に召された。大將に任ぜられるであらうとの御推察で、大變お喜ばしさうだつたといふ母上のお話。

六月二十四日。土曜。午前中は大變涼しかつたが、午後は又暑くなつた。

安子から手紙が來た。又しても、氣のめいること、病苦の重ること、皆が自分の病氣をないがしろにしてゐると、こぼし

てゐる。両親と子供二人は今朝九時の列車で輕井澤に出發。私は、高等學校へ入學試驗の事務で行つた。代數と幾何。十二時半頃濟んだ。それから田中ヨシヲ博士の葬式に列席の爲め谷中に行く。式は神式だつた。參列者は菊池、穂積、佐藤と云つた樣な學者及び日焼けした顔、四角ばつた格好の田舍の紳士だつた。著るしいコントラストだ。

それから關博士の處へ行き、四時頃まで話した。

それから神尾へ。今日、父は陛下から大將に任ぜられた。廣間に入ると、父はお疲れの樣子で、肱かけ椅子にかけて居られた。宮城を退出してから、諸所の訪問を終へてお歸りになつた處だつた。此の世に於ける最後の大望がやつと達せられ、今や希望も滿足できるまでかなへられたから、明日死んでも殘念とは思はないと云つて居られた。もう間もなく現職を辭し、獻身的に娘の世話をする爲に、實際的な仕事から退くつもりだと言はれた。お氣の毒な!

壬生馬と曉子と三人で淋しい夕食をする。

自分の身邊を思へば、しみ〲孤獨を感ずる。私の耳は子供等の聲を捕へようとするが、無駄である。併し子供の世話を母上やその他の人にまかしたので、大變のんびりと休養できることゝ思ふ。

六月二十五日。日曜。まだらな雨。看護婦を連れて平塚に行く。時々雨が降つてはやむ。安子は前よりずつと惡い。宮寺博士を訪ねた。博士の話では、安子の健康は此の頃歩一歩衰へ、左肺も可成りひどく侵されて居るさうだ。そして氏は、近親の者が一人ついて看病した方がよいと思ふと、言つて居られた。私は大變不安になつて、氏に明朝佐々木博士を呼んでくれる樣に頼んだ。

安子は病氣を大變悲觀してゐる樣だ。世間や、そして何よりも大事な子供達から全く交渉を絶たれてしまつて、丸二年。病氣で苦しんできたのだから、無理もない。尙惡いことには近頃、病氣は第三期に入つたらしい。一體に身體がすつかり破壞されてしまつたやうで、加ふるに、左肺を侵してゐる。どうしてやつたら好いのだらう。今迄、あらゆる種類の面白からぬ事情に面しながらも持ちつゞけて來た希望は、此の頃、影が少し薄くなつた樣だ。私は惡運の恐ろしい容貌をちらと見た

いてある死者の越える暗い壁に、今私は直面してゐるのだ。死の意味は私に取つて何よりも大きな意味を持つてゐる。其處にはホイットマンが歌つてゐる以上の何物かゞある。絶望と希望、恐怖と歡喜、必滅と永遠、憎みと愛、神性と惡魔性、浮薄と深遠、いやしくも妻を犠牲とするのなら、たとへどんな恐ろしいことがその前に待つてゐようとも、死を見通してやらうと決心した。私は彼女と死を超えて進む。それが天國であらうと地獄であらうと、私は敢へて行く！

夕食後、東京に歸る、家には誰も居ないで、唯哀れな父親と可哀想な娘が居るだけである。

汽車の中でNoyeの“An Approach to Walt Whitman”を讀む。彼の解釋は偏頗だと云はれるかもしれない。併し事の本質に突き入つた何物かゞある。

六月二十六日。月曜。夜明けから夜中まで豪雨。入學試驗の事務で高等學校に行く。化學と三角。午後、隆三が來て、增田は佐藤へ返す金がどうしても出來ないと云つた。私は農場の收入で、貸してやることにした。

輕井澤に居られる御兩親から來信。それは行郎が持つて歸つたのであつて、父上の御頭痛も輕くなり、子供達も元氣に暮して居ると書いてあつた。

夕方、荒木が來た。私は彼を三河屋に連れて行き、それから須田町停車場前の白梅に行つた。落語(長い間聞かなかつた)は面白かつた。然し客の少ないのを見て、一般民衆の道德觀念を擴める大切な機關が衰退するのを、寧ろ悲しく感じた。その夜の天氣の樣な、暗い陰鬱な氣持で家に歸つた。

夢多し。

六月二十八日。火曜。終日雨降り。又寒い。英語の入學試驗。書取りで、同じ文章を三十九度讀み、すつかり疲れた。

午後增田が來て、出來るだけ早く返すと云ふ條件で、二千圓貸した。

みよを輕井澤にやる。

夕方、山本へ愛子の病氣を見舞に行く。餘り重くはないが、寢てゐた。昨日、思ひがけなくも有島千代が歸京した。今日彼女を訪ねた。彼女はもうとても鎌倉に居きれないで、自分の家が見たくて堪らず、冒險だが女中を連れて汽車に乘つたのだと。私は餘りせつかちなのを叱つた。それから山内へ。

神尾の父が安子を訪ねて下さつたさうだが、安子の病狀はそれ程危險とも見えない。唯、熱が昨朝は三十五度しかなかつたが、夕方には三十八度に昇つたとのこと。こんなひどい熱の差！ 氣になつてならない！

六月二十九日。水曜。晴。涼し。朝、家事を濟ましてから、泊りがけで平塚へ行く。安子はずつと弱つてゐた。少しも食慾がなく、胸や腹が一帶に痛いとこぼして居た。ひどく氣が立つていら〳〵してゐる。出來るだけ慰めながら、時を過す。熱の具合は少しよくなつた。

六月三十日。金曜。晴。暑し。夢ばかり見て居て朝早く目が覺め、海岸を少し散歩する。安子の住んで居る小さな家を見返ると、私の眼には、故知らぬ涙が涯しなく溢れ出て來る。恐らくあの家は彼女の可哀想な生涯の最後の住家、或は彼女の魂の墓となることだらう。死を恐れないと云ふ。けれど彼女が息を引取る瞬間を想像すると、私の恐怖は高まる。多分、此の世の多くの物が彼女を捕へ、彼女を永久に苦しめる事であらう。あの家、あの粗末な住家が、悲劇の舞臺にならうとしつつある。私は見るに忍びない！

漁夫は此の美しい晴れた朝空の下では、何も起らないかの樣に、網の手入をしてゐた。人間の生活はなんとお互にかけ離れてゐるのだらう！

午後、宮寺博士が訪ねて來た。兩肺のカタルは幾分よくなつたといふことだ。

夕方歸京。平塚驛で佐々木博士に會ふ。博士は、安子の病狀は甚だ危險で、是非家族の者が一人始終看病するが好いと、望みなげに云はれた。西川で蒲團、その他少々買物。丸花で夕食。

夕方「新潮」を讀んだ。壬生馬の「信子へ」と、私の「クロポトキンとの會見記」が出てゐた。壬生馬のは非常に悲愴な物で、

非常に力強い表現だ。併し小說としてみると、構想を急ぎ過ぎて、感情の調和を缺いてゐる。

かくて六月の月は永久に去り行く。

七月一日。土曜。雨。陰鬱。家事をする。甚だ無味乾燥で、退屈だ。長くすてゝおいた吉川への手紙を書く。

暗い考へが今日は絕え間なく起る。私は、以前に二三度自殺する心持に誘はれた事がある。人世に於ける生存に何の價値と意義があるのだらう。人は單にお互の愛憎によつて結ばれ、墓まで運ばれるに過ぎない。自殺は殺人とのみ比較し得る樣な罪惡だと責めらるべき確固たる理由はない。

朝、神尾が訪ね來る。十日に親類全部を晚餐に招待する由。

「新小說」を讀む。得る所なし。こんな下らぬ物を讀むのは、やめなければならぬ。足助、佐藤孃、菊野、高松等に手紙を出す。

まだ八時半だ。"An Approach to Walt Whitman" を讀みはじめよう。

はるが今日安子を見舞に行つた。はるは、札幌から歸つて來たのを見た時よりも、ずつとよくなつてゐる樣だと言ふ。

行郞も平塚へ行つた。だがまだ歸らない。

七月十一日。火曜。私は長らく日記を怠つてゐた。怠つてゐた間に、安子の身體は歩一歩と衰へて行つた。悲痛の極を味はしめる。頻繁に、烈しい咳を止める爲の藥を取るので、胃をひどくやられて食慾を全く失つて了つた。その結果衰弱して來た。彼女は何も云はず、仰向けに寢て屍の樣に眼を閉ぢてゐる。私はそのやせて、悲しげな死人の樣な顏をいつも何とも云へぬ憐れみと恐ろしさとを以て眺めてゐる。神尾の父は全く望みを捨てゝしまはれた。そして我々に殘された唯一つの必要な心懸けは、來るべき災難に對してしつかり備へること、傳染しない樣に用心することであると云つて居られた。併し私自身としては、何とかしてやらうと云ふ望みを捨てることが出來ない。私は彼女が最後の息を引き取るまで、あらゆる方法を盡して彼女を癒してやらうと云ふ望みを持ちつゞけよう。

も一つのことは、小說を書かうと、切實に考へてゐることだ。ハーバート滯在中の內的經驗を表はすよう、ゆる〱構想を練つてゐる。私はその精神的革命の時代に、幾多の試練を經た。

神尾の晩餐會が昨夕紅葉館で行はれた。三十人以上の客が來た、その中には福島大將や中村彌六氏が居た。始まる一寸前にひどい夕立があつた。階上の廣間からの眺めは、爽快とも何とも言へぬ程よい。

今朝、神尾へ昨夕の招待の御禮に行つた。

これから執筆にかゝる。(丁度十一時だ)。

七月十二日。水曜。雨。終日在宅。愛子及びその他の來客があつたので、仕事の妨げになつた。

夕方、私は面會で大變疲れ、又お腹が一杯でとても家に居られなかつた。そこで大雨の中を出かけ、電車で淺草橋へ行き、それから市村座へ一寸芝居を見に行く。幸ひなことに菊五郎と吉右衛門がそれ〴〵「斑女の前」と「渡鳥」を踊つてゐた。舞踊は完成洗煉されたもので、繪の樣なうつとりする幻想を與へた。此の二人の前途ある役者を始めて見た。

七月十三日。木曜。豪雨。愛子と一緒に平塚に行く。安子は大變喜んで迎へた。愛子の病人へのやさしい心やりで慰められたらしい。愛子が歸つてからも、愉快氣に見えた。本當に稍〻良いやうだ。唯胃が惡いので、胃の痛むのを心配して食事を控へてゐる。

東京に歸る途中、鎌倉の千代田の處へ行つて、暗い陰氣な家で一夕過したくてならなかつた。その誘惑と戰つたあげく、遂に私の良心が打ち勝つて、誘惑されずに歸宅。實に嬉しいことだ！

夜、原稿に手をつけたが、感興が湧かないので、暫くしてやめた。

七月十四日。金曜。朝曇り、午後晴。中元の品を買ひに下町へ行く。三越で晝食をたべてから、神尾へ男爵を授與されたお祝ひに行く。父上にはお會ひ出來なかつた。父上は郷里の村の人達に招かれて明朝御出發の筈。

歸宅後、少し執筆。夕食後、山內へ母上のお伴をして行く。夜、足助が來て、十一時まで居た。Kが來て金澤の藝者と深

い仲になつてゐることを告白した。其の爲め金の必要に迫られて、私に何とかしてほしいと云ふ。彼が早晩關係を斷つ決心をしてゐるのを確かめ得たので、私の力の及ぶ範圍で何とかしようと云つた。彼の話では、彼が愛し、愛されてゐる藝者は、金澤の藝者の中でも、最も位置の高いもので、有名な人が澤山(その中には横山、片岡、及び金澤師團の參謀長が居る)彼女と親しくならうと、あせつてゐる。だが彼女はKに對する愛に忠實で、それらの申し出を堅く斷つてゐる。今まで彼女は決してKに精神的な苦勞を訴へなかつたと。

數日前島崎藤村氏が歸朝した。壬生は寶亭で氏と夕食を共にした、小山内や山内も出席した。私も招かれたが出なかつた。

七月十五日。土曜。晴。眼もくらむ程の日の光、大變暑い。

とう／＼眞夏にはいつた。兩親と青山墓地に行つた。

格別變つたこともしない。重ね／＼恥かしい。

七月十六日。日曜。快晴。室内で八十三度。行郎の送別の園遊會が、花月花壇である日。丁度今日は小僧や女中の藪入りだ。天氣はよし、おまけに日曜である。その爲め電車の混雜したこと、少々恐ろしい程だつた。そこに集つたのは、番町、紀尾井町、高木、佐藤及び山内の人達全部と、召使ひも入れて三十二人に上つた。どの家も、主だつた人達が皆出てゐた。我々は十一時先方に着いた。場所は美しく、便利に出來てゐた。お内儀の娘が接待してくれた。大變魅力のある娘だ。子供等と思ふ存分遊んだ。八時頃、歸宅。安子が此の會の樂しみに與る事が出來なかつたのは可哀さうだ。

昨日高木に手紙を書いて、高木の方に何か誤解がある樣なので、御兩親が先月二十七日に訪問した趣意を率直に述べた。高木は夕方電話をかけて來て、私が彼に云つた全部の事は承認できないと言つた。がまた、彼は決して父上の言葉を誤解した覺えはないと確言し、近い中にも一度會つて、もつと詳しい說明をしようと云つた。何だ馬鹿らしい！

七月十七日。月曜。晴。暑し。九十度。終日、安子の許で、お互に深く理解し同情し合ひつゝ暮した。若し彼女とこの上なく親しく出來、そして緊密な理解に入り得たならば、それは私に取つてこの上なく心慰むことである。彼女は何も云はず

に、まるで穩かに眠つてゐるかの樣に眼を閉ぢて仰向けに寢てゐた。しかし、ぢつと私の手を握つて、移り變る運命を絕えず共にした、彼女の友であり防衞者である愛する夫が側に居るのを十分意識してゐた。

かくて平和な靜けさの中に、日は夕暮に近づいた。四時五十八分の汽車に乘つて、家に歸る。御兩親は彼女の健康を案じて、私の歸りを待つて居られた。歸途、山本に立ち寄る。

七月十八日。 火曜。晴。暑い。夕方雷鳴、夕立。

朝は讀書及び神尾の父の訪問を受けて過す。父は鄕里御訪問の樣子を元氣に話された。村の人々は、その日がまるで休日か何かの樣に父を歡迎したさうだ。

午後日盛りに、行光と曉子を日比谷公園に連れて行つた。子供等はすつかり元氣がなくなつた。そこでスケートを見に、ローラー・スケーティング・クラブに行く。其處にはスケーティング・リンクや球轉がし場や玉突等々があつて、子供等は大變面白がつた。それから小川寫眞館へ行く。森川が、主人から獨立して開業しようと云ふ計畫を話した。誰もみな自分の計畫と夢を抱いて、その目的地に達せんが爲に暫し働いてゐるのだ。

その中、神尾の父、父上及び二兒が來て、一緒に寫した。父とお別れして、我々は夕方歸宅した。

阪本しげ(今は土屋)が電話で、父が十二日に死んだので北海道に歸るところだと知らせて來た。夜、壬生が話しに來た。彼は、先日五來夫人(島村孃)を訪問し、彼女から信子がひどい神經衰弱で、食事も困難だし、眼をあいてゐることも殆ど出來ぬ程だと聞いたと言ふ。そこで彼は、與謝野夫人に信子を訪ねて、本當にどんな樣子なのかを見、結婚問題に對する與謝野夫人の道德上の態度を彼女に話してくれる樣に賴まうと考へた。若し與謝野夫人が、信子の病がひどく、そしてその決心が、彼女の母や、その他の習慣に依つて强ひられた執着を犧牲にしてゞも、壬生馬と再び一緒になる方に傾いてゐる事を發見したならば、彼は烈しい手段を用ひてゞも、彼女を迎へる事にしようと言ふ。私は五來夫人の此の知らせを喜んだ。若しそれが本當なら、こちらの勝利は大丈夫確實だ。

七月十九日。水曜。朝、稍〻曇り、午後から晴。

兩親と三兒は輕井澤へ、上野を九時の汽車で立つた。驛に見送る。皆、歡聲をあげて出發した。歸途、山内を訪ふ。偶〻話は五來夫人の報告に及ぶ。英夫の言によると、中村寬治が、信子は此の頃むしろ元氣な樣に見えると何時も云つてるさうだ。此の正反對の報告は、私の思考に暗い影を投げる。何と厄介な迷路だらう！

午後から壬生の「孤鸞鏡中影」を讀み通す。主人公は私がモデルになつてゐる。私は、餘りに高尙な人間に描かれすぎてゐる。顏の赤くなる個所が澤山ある。併し或る個所では我知らず眼に淚が浮んで來る。特に曉子には、哀れを覺える。だが、あゝ、彼女の顏！　彼女は時とすると老婆に見える事がある。何としても避け得られぬ運命の重みが、深く彼女の顏に跡を止めてゐる樣だ。私はそれを彼女の眞顏によりも寫眞(其の燒付けが今朝屆いた)に、尙一層はつきり認められる。母からは全く見棄てられ、父からはなほざりに扱はれて居る、寄る邊のない心細さ。さう思ふと心が痛む。

七月二十日。木曜。晴。なまあたゝかい微風。

松尾から手紙とさくらんぼうを受け取る。一子誕生の由。

父上に命ぜられた用事をしに、十五銀行に行く。原田氏に會つた。氏が代つてすつかりやつてくれた。

それから九時四十分の汽車で平塚へ行く。安子は前より少しよかつた。一日中別に何もしないで過した。漱石の「三四郎」を多少興味を感じて讀んだ。高級な人間は世間の男女を見下さずには居られないかの樣に、不自然な冷笑的な態度を採つて居る。彼は非常にねじけた性格を持つてゐる樣だ。事物を上下にひねくり廻し、遂に事物それ自身が本來の形や精神を失つて了ふ程にひねくり廻さなければ、滿足することができないのだ。內心に於いては、決して彼は極めて敏感な人間ではないのだ。全然然らず。彼は全くの、底の底まで感情家なのである。かくして彼は作品を唯に幾分淺薄にする許りでなく、悲劇的な意義のある場合にも喜劇的に、ユーモラスなものをも滑稽化して了ふ。彼を救ふ力は唯、彼の比較的廣い知識と、東洋主義の確固たる把握にある。

十時頃、歸宅。春が訪ねて來た。夜が遲いのにかこつけて、泊つて行つた。私は彼女について變な疑ひを抱いてゐるが、この推察は確かな樣だ。馬鹿々々しい。

七月二十一日。金曜。晴。風あれど暑し。朝、神尾の父が見えて、病氣を癒す奇蹟的な力があると人の噂する占ひを賴む事について相談があつた。神尾の母も見えて同じ事を仰しやる。私は反對はしない、併しそれを安子に云ふのは、母上が一番適任だと述べた。奧野山氏の葬式に列なつたが、其處で高木の老人に會つた。彼は私に先月二十七日の父上の言葉に對する彼の態度を說明した。彼の述べた事は腹藏のないことだつたので、私は滿足した。

晝食後、鎌倉へ、時事新報が提供した課題、「霧」に關する一文を書き終へに行く。汽車の中で、園田氏に會つた。彼は薩摩の人の中ではたしかに最も知識ある人間である。彼の話は深くはないにしても、十分に譯が判つてゐる。鎌倉に着いてから、有島夫人の新宅を訪ねた。千代子さんは私を大變歡迎した。此の冬以來、一貫ほど減つたと云つてゐたが、そんなに目立ちはしない。それから千代田に行き、七時まで一生懸命に書いた。千代は胃が惡くて、出て來なかつた。

歸りの汽車の中で椎名に會つた。大島が大變感じの鋭い手紙をよこした。宮原と原へ發信。

七月二十二日。土曜。晴。時事新報への「霧」を書き終へた。

今朝、壬生は輕井澤へ曉子を連れて出發。

七月二十三日。日曜。晴。暑い。輕井澤から手紙で、四兒は皆大變元氣で樂しく遊んでゐる、父上も母上も亦健康でゐられると知らせて來た。今朝、山本の家族が輕井澤に立つた。英、行郎及び私が驛に見送りに行つたが、見つからなかつた。少し散歩してから「笹の雪」に豆腐料理をたべに行く。散髮。

午後から平塚へ、サラダを少し安子の爲に持つて行つた。母が本海堂(?)を連れて今朝、見舞ひに行つて下さつた。私は安子の處で母に會へると思つたが、先方に着いたら、もう歸られた後だつた。本海堂が云ふには、安子の病氣は肺でなく腸がもとだと云ひ、彼女にもつと鹽と野菜をたべる樣に勸めたとの事。彼は又私の寫眞を見て、私の運命は甚だ有望で、私の

性格には缺點がない。そして事業で成功するまでには、西南に移る樣な運命にあるだらうと豫言したさうだ。
安子はずつとよくなつてゐた。唯、彼女は脇腹に痛みを感じ、咳をする時は、特にそれが痛くなる。
彼女の咳と女中の騷がしさの爲、暫くたつて一度目を覺ましたが、大變靜かな夜を過した。
安子は臺所で働いてゐる女を嫌ひ出した。彼女は、その哀れな境遇については大變憐れむべきであるが、無責任なおしやべり女である。
與謝野晶子の紫式部と和泉式部の日記の新譯を、非常な興味を以て讀む。
大隈內閣は今にも瓦解しさうである。各方面の黨人達が次の組閣の運命について心配してゐる。彼等の間には祕密の爭ひが一杯ある樣だ。聯合軍は此の頃非常に優勢の樣に見える。彼等は失つた地方を恢復しつゝある。
七月二十四日。月曜。大變暑い。朝の中、時々、雨。海岸へ風景を畫きに出かけたが、雨に妨げられた。古い繪に少し修正をしてみたら、幾分よくなつた。
午後二時頃、佐々木博士が安子を見に來た。彼の考へでは、安子の病氣は、外見程には惡くない。併し彼女の憔悴は可成り恐ろしい、で我々の義務は滋養物をもつと澤山喰べる樣に說得する事であると。彼は夏休みを輕井澤で過す由。
神尾の父は接心に出る爲、鎌倉(圓覺寺)にお出かけ。宗演師の庵にお宿りの筈。安子に先頃お會ひの際、生死について眞の悟りに達するよう、全力を盡すつもりだと仰しやつたさうだ。安子はからかつて答へて、「お父樣は、人生のその境地に達するのに今迄おかゝりになつたのですか、私なんどは、そんな問題はとつくの昔に通つて來ました。」と言つたさうだ。安子は私にもさう言つた。
夕方、家に歸る。しづが訪ねて來てゐた。
七月二十五日。火曜。晴。風涼し。午前中は、毅一の爲に拓殖貯蓄銀行で六百圓ばかり借りてやるのに、その書類をマヲに送る事に費す。

午後、前島に會ひに行き、後神尾へ。神尾の母は平塚へ行つた男を疑ひ初めてゐられる。五時半まで話して歸宅。英夫婦が來てゐた。夕食の頃毅一來る。夕食後ピアノを彈きトランプをして遊ぶ。

昨日、札幌夜學校の一女生徒から手紙と櫻桃を一箱受け取つた。彼女は結婚して子供が生れたと言つて來た。櫻桃やその他の果物を持つて、朝八時二十分の汽車で平塚に行く。驛で高木博士に會つたが、先方は氣が付かなかつた。安子は少し好い。

七月二十七日。木曜。小笠原諸島から嵐がやつて來て、間歇的に雨と風。急に涼しくなつた。

彼女は少し食慾が出たので本宿堂の處方による食物では十分でない。天氣は大變陰鬱だ。まるで初秋の日が來た樣に感ずる。窓から見ると、風雨にいためられた木の葉と、花に被はれた草花の鉢の物淋しい眺めに心を打たれる。蜘蛛は巣を取り込むのに忙しい。他方、雀は巣の材料を集めに、絶え間なく飛び廻つてゐる。こほろぎの聲が竈の到る所で聞える。空の變化は夏季には見られない程、あわたゞしい。秋の先驅が遂にやつて來た。

漱石の「門」を讀む。

夜は安子の咳が大變ひどく、時々目を覺まされた。彼女の身體には最小限の氣力が殘つてゐるだけになつた。彼女が眠り込むと、呼吸が甚だ險惡になるので、いつ何時その呼吸が止るかも知れぬと云ふ懸念で、ぢつと落着いて見てゐる事が出來ない程だ。彼女の鼻孔は空氣を澤山吸ひ入れようと努力して擴がつてをり、眼は筋肉の緊張力を失つて、半ば閉ぢられてゐる。底深い憐れみ、悲しさが、大水の樣に胸にこみあげて來る。私は默々と、長い事ぢつと彼女を凝視してゐた。

彼女の熱は通常、夜の八時に最高點に達したものだ。併し彼女は、それが夜から午後遲くに變つて來たと云ふ。だがともかく、熱は夜の中に可成り下り、三十七度七分から三十七度九分あたりを上下してゐる。十二日に寫した寫眞を持つて行つた。彼女はそれを熱心に眺めて、皆が非常に大きくなつた、殊に行三は大きく丈夫さうだと云つた。

七月二十八日。金曜。雨。風。雨と烈しい風の中に夜は明けた。安子も殆んど口をきかず、朝は靜かに過ぎた。藥のせゐに違ひない。

宮寺博士が來診。注射をした。

二時六分の汽車で東京に歸る。美裝した大變美しい女が私の傍に席を占めた。その容貌と身體の均勢は、殆ど完全な樣に思はれた。彼女は私に多少興味を持つてゐる樣子で、私をぢつと見、私の方に身をよせて腰かけてゐた。併し奇妙にも、私の興味は少しも彼女の方に向かない。それは私の年齡や身體が誘惑にはだめだと堅く確信してゐるからだらうか。或は私は何か外の事に興味を持ち始めたのだらうか。とにかく私の美に對する判斷は、此の頃非常に狹くなつた。それについては疑ひがない。或る女、月並の目には美しい女でさへ、吐きたくなる程厭な氣持を私に與へる。これは生理的なのか知ら。汽車の中で、ヴェルハーレンの「曉」を讀む。それには何か微妙な、深遠な物がある樣だ。併し何となく彼の作品は強く訴へない。退屈した。

家に歸ると、壬生の葉書が來てゐて、「ミレー」に關する文を「新小說」に書く樣に勸めて來た。承諾する積りだ。私が堅實になりつゝある事、そして心の中であつても誘惑に容易には負けぬ事を喜んでゐる。之が靑春のエネルギーの缺乏から來てゐるのでなければよいが。

七月二十九日。土曜。強い風と雨。原田が電話で、一緒に勝見を訪ねに行くかどうかと、尋ねて來た。雨の中を外出したかつたので、彼を說きつけて行く事にした。彼が來たので、一緒に八幡まで電車に乘つた。この間、雨は烈しく降り注いでゐた。勝見の處は停車場からは遠くないが、人里離れた場所であつた。門を叩いた時は彼はまだ寢てゐた。昨夜電車が、何か故障を起して止つて了つたので、彼は車中で夜を過したのだつた。彼は思つたよりよかつた。殆んど變つてはゐない。花は家の周りに出鱈目に咲いてゐた。その爲に寧ろ淋しげに見えた。三時まで話し、風雨の中を歸宅。墨田の土手の眺めは一寸珍しかつた。直ちに廣重を思ひ出させた。

ミレーの解說を書く事を引受けたと壬生馬に確答。夜、ミレーに關するものを少し讀む。

七月三十日。日曜。朝、雨。午後から晴れ始める。凉しい。

嵐は過ぎた。千住その他二三ヶ所に出水したが、餘りひどい事もないと云ふ話。

ミレーを少し勉强しようと思つた。だが恥かしいことに！　朝の中は繪を描いてすつかりつぶして了つた（平塚の海岸）。繪はつまらぬ、弱々しい物になつて了つた。午後からミレーを勉强し始めた。そこへ札幌の高杉博士が思ひがけなく來訪。博士は御殿場で開かれた基督教靑年會の會議に出席したのである。氏の妻はまだ病氣である――氣の毒だ。又末光信三について大變不思議な話をした。四月以來、彼は北九條小學校の敎師をしてゐる渡邊と云ふ娘と、關係はないとしても、兎に角深い友人關係になつた。彼女と二時、三時まで戶外にゐるのは珍しい事ではなく、親しい手紙のやりとりをしてゐるとは、胸の惡くなる話だ。遂に末光の處に住んでゐる賀茂が、高杉を訪れて、すつかり話した。そして末光は今、彼の許婚と結婚する爲、彼の鄕里に居るさうだ。何て不思議な事だらう！

高杉博士と三河屋で夕食。深い印象を與へる憂鬱な顏をした娘が給仕をした。通りで赤木に會つた。

夜は孜々とミレーに關する參考書を讀んだ。まだ決つた構想が展開しない。

七月三十一日。月曜。時々雨、夕方殊に暑い。終日ミレーの勉强で過す。夕方、上野驛に高杉博士を見送りに行く。それから高田の足助の處へ行く。先方へ着くと爽快な夕立が來て、美しく晴れ渉つた鬼子母神の近邊を散步する。彼は事業が餘りよくならないと打ち明けた。それから一緒に四谷に來て、少しビールを飮み、家に歸り、十一時半まで話した。

市岡が訪ねて來た。彼は今年大學を出て、朝鮮の自分の家に歸らうとしてゐる。ジヤック・ロンドンの「野性の呼び聲」の飜譯を終へ、それを出版したい希望をもつてゐる。彼を激勵してやつた。

八月一日。火曜。快晴にして心地よい風。朝、家計の一ヶ月の勘定をする。收支約二千圓。母上は歸京なさらずに、ずつと輕井澤に御滯在と決定の由。乳母を變へた。今度のは餘り適當ではなさゝうだ。でも仕方がない。彼女は眼鏡をかけてゐる。それが非常に損である。原田が朝の中に來た。トルストイの「闇に輝く光」を貸す。

八月二日。水曜。今朝、正八時、二年近くの苦しい試練を經て、我がこよなくいとしき最愛の妻逝く。臨終に居合せた

のは私だけだつた。彼女は嚴肅な靜けさと見事な諦らめとを以て、最後の息を引き取つた。
その夜八時半頃、納棺。花を顏のまはりに飾り、花嫁として自分で化粧した時よりも美しくしてやつた。志摩が彼女の爲に化粧をしてやつてくれた。
陰鬱な夜は、神尾の父母、兩親、志摩、隆三、よし、及び行に守られて過した。
八月三日。 木曜。夜、安子を火葬場へ連れて行く。家を出る頃は、曇り月だつた。野天で、何處かの誰かゞ茶毘に附せられて居た焔が、遠くから見える。しみ〴〵と悲しさを覺えしめる。
八月四日。 金曜。火葬場に九時半頃行き、安子の最後の灰を集め、それを胸に抱いて、我々は十一時の汽車に乘り、一時頃家に着いた――安子が長い間心に懷いてゐた家に。骨壺を床の間に置いたら、涙が溢れて來て堪らない。とう〳〵彼女は灰になつて家に歸つて來たのだ！
大勢の客。通夜等々。
八月七日。 月曜。葬式の日。式は七時から青山齋場で行ふ。宮部博士司祭。田島牧師の說敎。柳夫人が「アベ・マリア」及び讃美歌を歌つた。八時から順次一般の來會者が骨壺の前に進んで、告別した。埋葬その他一切を終つたのは十時頃だつた。家に歸れば、わびしさ悲しさ極りなし。機會さへあれば何時も安子の名をつぶやくのが、私のくせになつた。これによつて私は慰められ、そして彼女は私の呼ぶのに答へる樣な氣がする。葬式前は、安子の寫眞はほゝゑみ、心安らかな樣に見えたけれどその後は、悲しげに、葬つた私を咎めてゐる樣だ、と思へば悲しさが迫る。
八月八日。 火曜。晴天の最中に、夕立の樣な雨を伴つた妙な天氣。
葬式に關した一切を處理するので忙しい。直良と飯田が大變働いてくれた。今日は安子の初七日に當るので、我々は直良と飯田を招いて資亭で夕食を共にした。彼等は何とかして私を快活にしようとしてくれた。彼等の親切は有難かつたが、どれ程たゞ獨りになつて、悲しい、樂しい追憶に、ひたすら浸りきつて居たく思つた事であらう。八日の月は雲間に輝き、眠

れる町に憂鬱な光りを投げてゐた。

八月九日。水曜。昨日と同様な天氣。

終日、事務をとる。私は昨日も今日も早朝墓に行つた。昨日は一人で、今日は母上及び毅一と一緒に。日が經つにつれて、彼女の在りし日の思ひ出は私の心の神聖な祕めた一隅に具體的な形をとつて結晶する。併し身體が殊に疲勞してゐて、眠つても、私がこがれてゐる夢は少しも見ない。一切は空虛である。

八月十日。木曜。雨、時々烈風を伴つてひどく吹きつける。

九時の汽車で輕井澤へ、父上及び直良と行く。父上は九日から少しお具合がよくない。年寄つてから烈しい打擊を受けられて、實にお氣の毒に耐へない。二時輕井澤着。子供等は大喜びで迎へた。可哀さうに、彼等は母の身に起つた事も知らないのだ。行光は私が何故彼に會ひに來たのかと尋ねた。彼は取り返しのつかぬ喪失を漠然と感づいたらしい。淨月庵は高臺に立つてゐて、輕井澤の平原の廣々とした景色を見晴らす、氣持のよい小屋である。秋の野草が四邊を悲しげな色と姿で飾つてゐる。それは孤獨な魂の住家にふさはしい場所である。私は安子が遺して行つた書き物を一生懸命集めてみよう。

彼女の死に就いての感慨は、「白樺」に書くつもりである。

夜、大嵐の襲來。併し私は大變疲勞してゐたので、九時半以後は起きてゐられなかつたから、すぐ就寢。

八月十一日。金曜。降雨。暗い空。まるで天が私に泣き續けるやうにと說く如く、雨は陰鬱に降り續ける。もう十分だ、十分だ！　神尾へ手紙。或る事務上の手紙を農學校及び毅一に書く。

午後から行と敏を連れて下の町へ、愛子と生馬の來るのを迎へに行く。二時半頃、彼等は自動車で來た。私達は人力車で歸宅。三兒は生馬と曉子が訪ねて來たのを非常に喜んだ。

夕方、愛子が訪ねて來た。

安子の日記の一部分を筆寫する。

夜、父上とお話しして過す。お氣の毒に、此の頃は、何とお年を召された事だらう。

風雨は夜まで荒れ續けた。今九時である、風の吹きすさむ音や屋根を打つ雨の音がはつきりと聞える。壬生馬の話では東京は昨日も今日も晴天ださうな。

先月の末に測つた子供等の體重は次の如くである。

行　光……………四・六〇〇貫

曉　子……………四・一〇〇

敏　行……………三・八〇〇

行　三……………三・五三〇

八月十二日。土曜。輕井澤では雨、山田では晴、風あり。

雨が絶え間なしに降り續けるので、父上に、も少し低い處へ小旅行を致しませうと申し上げたら、父上はそれに贊成された。そこで輕井澤を午後の汽車で立つた。追分に着くまで雨は強く降つてゐた。けれど小諸に着くまでには晴れ出し、小諸では雨のけはひは、少しもなかつた。往來は乾いてゐた。人々は傘を持たずに歩いてゐた。勿論空には雲が少し殘つてゐて、何時一緒に集まるかもしれない樣子ではあつた。一時間四十分程乘つて、戶倉に着いた時は天氣は段々晴れ渉つて、非常に烈しい風があるだけだつた。上山田まで人力車を雇つた。道は筑摩川を橫切つてゐた。此處は實に貧弱な土地で、殊に車屋に案內された宿屋は全く哀れだつた。夜の二時まで眠れなかつた。

樣々の事が、追憶に浮ぶ。

安子の思ひ出が私をしつかり捕へる。彼女の多くの德を思ひ出すと、自分が恥かしくなる。あゝ、彼女なき淋しさよ！

彼女は亡くなつてからも尚、生前より以上に、はつきりと私の中に生きてゐる樣に思はれる。安子、私を一切の誘惑から守り、永遠の運命から課せられた私の仕事を完成する樣に導いてくれ！

月は此の夜、美しかつた。眠れなかつたのはこの月のためであるらしい、本當に。

八月十三日。日曜。大變晴れた好天氣。車中九十度の暑さ。

今朝、此のみじめな宿を立つて、別所に行く事に決めた。十時の汽車に乘つた。上田に着いたら、馬車が出るまで三十分程間があつた。私はそれを利用して、大急ぎで早川を訪ねた。彼は私の思ひがけない訪問に驚いてゐた。彼の妻は足が激しく痛むので寢てゐた。二人は私の訪問を大變喜んで、早川は馬車の發着所まで送つてくれた。

馬車は所謂「圓太郎馬車」である。道は平坦で鋪裝してあるが、馬車のスプリングが惡くて、乘つてゐる者は全く加減が惡くなる位だ。途中の村落は養蠶業の地方的中心地なので、四邊は美しく綺麗で、豐かに見える。農家の建築は殊 私の注意を惹き、甚だ氣に入つた。

別所は見事な處だつた。云ふまでもなくこの溫泉の起原は古い。逢初川と云ふ小川（川は男神山と女神山の間にその源を發してゐる。故に此の名あり）に沿つて、立つてゐる僅かばかりの宿屋は、大變古く、雅趣がある。宿は板屋別館。その設備は全く當世風で、風呂場は綺麗だつた。私等は樂しく此處に滯在した。熟睡。

八月十四日。月曜。快晴。暑し。五時前に床から出て、獨りで常樂寺（曹洞宗）及び安樂寺（天台宗）に散歩に行つた。大變古い塔（千年以上）は訪ねる値打がある。構造は非常に特色がある（八角形で四階からなつてゐる）。寺を去る時に、僧が讀經を始めた。――大變愉快になる。山門に達すると、太陽がきら〳〵と輝き始めた。立ち止つて我知らず日光に禮拜した。此の太陽こそ、死生の鬪ひで苦しんだ安子の、病んだ心に大きな慰藉を與へた太陽なのだ。（此處に挿繪あり、略す）

それから安樂寺へ。格別珍しいものなし。
九時頃馬車で別所を立ち、上田から汽車で輕井澤へ。驛で緒方に會ふ。彼は今、長野縣廳に居る。大變肥つた。
私達が家に着いたら、子供等は限りなく喜んで迎へた。
汽車の中で、私は安子がいろんなものが食べたいと言つた事を思ひ出した。その中には燻鮭や、林檎や、梅干の入つた昆布茶があつた。私は彼女が生きてゐる間に望みをかなへてやらなかつた。重大な義務を怠つたと云ふ事が、今日、私を苦しめる。餘りにも多くの後悔が私を襲ふ。何故私はもつとやさしく彼女を看病してやらなかつた事だらう。
午後から一生懸命に彼女の日記を寫す。夕方、子供等とプールに散歩に行く。
山本の人々は神尾の住居をきめるのに忙しかつた。
夜、月が美しい。あはれを催さしめる。ヴェランダから長く〳〵見つめてゐた。
神尾から電報で、明日の午後着くと知らせて來た。
足助が又も相場で失敗したので、金を少し送つてくれと書いて來た。
御園から死去の知らせを受け取つた。
佐藤孃が東京に來て、私に會ひたがつてゐる。
八月十五日。火曜。日中は晴、夜になつて靜かな雨。
朝の中、壬生馬とテニスをする。腕が非常に堅くなつて、ペンが持てなくなつた。そこで朝は結婚直後に書いた安子の日記を讀んで過す。可哀さうに！　彼女は彼女の餘りに強い愛の爲にあんなに苦しんだ。そしてその頃でさへ、彼女は私と宿命によつて結び付き、決して別れ〳〵にされぬ爲に、死にたいとさへ云つてゐる。彼女の愛情をしみ〴〵感じる。此の凡俗な世界に於いて、非利己的な愛を見出すにまさる、仕合せな幸福な事はない。私はお前に感謝する、安子！
私は絶望的な淋しさの慰安者を誰か或る婦人に見出す時が來るかもしれない。誰にそれがわからう！　併し此の瞬間に於

いては、お前は私の心の中に大變强く、懷かしく生きてゐて、私が他の女の同情や愛に惹き付けられる事は到底考へられない。私は結局弱い人間である。私は今後獨身を續けるつもりだとお前に保證するのは避けたがいゝ。併し私が結婚しないで、心のごく神聖な一隅にお前の思ひ出を大事にしまつておく事は、私に取つてこよなく心のどかな事であり、又慰めでもあると云ふ事だけはお前に云ひ得られる。さうある樣にお前は、私を何時までも何時までも守護し、激勵してほしいものだ。可哀さうな子供等を考へても、結婚しないでゐる方が、手當り次第に彼等の爲に新しい母を選び出さうとするよりも、遙かに望ましい樣に思はれる。

神尾の父と敬子が東京から來たのを驛に出迎へた。どれ程、私達はお互に思ひやり合つた事だらう。

彼等は山本の附近の家に落着いた。夕方、弟と古川と又テニスをやる。夕食後、山本に行つて神尾の父にお會ひする。子供の遊戯を大變面白がつて居られた。

柳及び田島から受信。兩方とも甚だ熱烈な同情を表はしてゐた。十分に感謝の意を表する道を知らず。

行郎は十四日附で返事をよこして、現在の日本の社會狀態では、彼はどの娘も愛する事ができない。若し愛し得る者があつたなら、彼の祖國と彼の愛する家庭を去るに當つて、もつと幸福に、又もつと强い感慨を催したであらうと。可愛い奴！お前の言ふ事はなんと鋭く私の心に訴へるのだらう！　これは現今の日本の敏感な靑年の誰もが發する叫びである。私はこれに酬いる爲に働かねばならぬ。此の事は實に差迫つた仕事である。

神尾の父が、兩方の母は限りない悲しみと暑さにも拘はらず、元氣にくらしてゐると知らして下さつた。

八月十六日。水曜。行郎が丹波丸で米國に向けて日本を出發する日。

電報爲替で行郎と足助へ送金。

八月十七日。木曜。晴。涼し。神尾の父と子供達と一緒に古瀨溫泉に行く。輕便鐵道はぐる〳〵廻つて山脈を上り、頂上に至るには長時間を要する。溫泉は谷間の人里離れた片隅に在る。別に人の目を惹く所もない。辨當をたべてから步いて輕

井澤に歸る。頂上の眺めはかなり壯大。私はあのあたりの景色が大好きだ。

夜は山本で花火。子供達大喜び。

八月十八日。金曜。晴。涼し。夕方曇。早朝に散歩。甚だ佳し。終日安子の遺稿編輯に費し、結了するを得。父上はそれに「松蟲」と御命名、題字を書いて下さつた。自分の義務を果して嬉しい。私はこれを明日東京に持つて歸り、印刷に廻さう。

夜、父上及び生馬と打ち解けて話す。

八月十九日。土曜。輕井澤では晴、東京では雨。父上、生馬及び子供達と散歩し、それから神尾の父や私達の爲めに開かれた午餐に行く。豐川夫人の家族も招ばれてゐた。

三時五十五分の汽車で東京へ行く。太郎同行。高等商業學校の英人敎師と赤羽まで話した。戸川が驛に出迎へた。東京は雨。忽ち憂鬱な思ひにとざされた。家には母上お獨りだつた。疲れた、ひどく疲れた。

八月二十日。日曜。快晴。早朝、母上と一緒に安子の墓に詣ず。田村の名刺があつた。家に歸つてから、悔み狀をすつかり讀む。泣かされたのが澤山ある。

午後、安子がそこはかとなく書き止めたものを集めて過す。夕方、山内から晩餐に呼ばれた。母上と一緒に行く。ひどく暑い。歸宅後直ちに就寢。併し中々、眠れなかつた。悲痛な思ひ。

八月二十一日。月曜。晴。大變暑い。夕方曇る。三秀舍が來た。「松蟲」の印刷を命じた。英が手傳つてくれた。勝見が籠に一杯葡萄を持つて來た。大變いゝ香り。佐藤繁井孃が來て、二時まで居た。彼女はその錯雜した戀愛事件をすつかり告げた。私は寧ろ彼女を憐れむ。

高木夫人が、信子が送つて來た曉子への着物を持つて來訪。私達は、それを嬉しく受け取つた。

夜、下町へ子供達に玩具を買ひに行く。熟睡。

八月二十二日。火曜。雨。神尾の父は一昨日御歸京、今日又輕井澤へ御出發の筈（神尾の父は辭任の申出が許可になつた

ので、御歸京になつた〕。處が今朝、陸軍大臣から招かれたので、今日の御出發はお見合せの由、御通知があつた。そこで母上は一人で上野を十一時二十五分の汽車で立たれた。お見送りする。
鎌倉の河野に、佐藤孃の紹介狀を書く。「松蟲」の仕事を一生懸命にやる。夕方、三秀舍が來た。英夫が來て、仕事を手傳つた。一日中、雨が降り通した。勝見が松蟲草を送つてよこした。
八月二十三日。水曜。終日、雨。神尾の父は今朝輕井澤に御出發。睡蓮とカーネーションを持つて安子の墓に詣る。私はまるで安子が現に生きてゐるかの樣に感じた。彼女の名を呼んだ。安子は私に返事をしてくれた。墓畔に寂寥の思ひ漂ふ。可哀さうに安子！　墓に詣つたセキタケキ氏の名刺があつた。
午後、忌明け御禮に山本、西、有島、中村、高木、園田、八十島兩家、高橋及び松方に行く。それから下町へ子供等への玩具を買ひに行く。今日は彼女が亡くなつてから二十一日になるので、神尾の母、佐藤夫婦、及び山內夫婦を夕食に招いた。
八月二十四日。木曜。朝、雨。十時頃から晴れる。旅行の準備をし、上野を十一時二十分發の汽車で輕井澤に向ふ。佐藤孃が驛に見送りに來た。彼女は昨日河野夫人に會ひに鎌倉に行つた由。河野夫人は彼女に瀧の川學園に行く樣に勸めた。彼女は私に北海道の林檎を一籠くれた。汽車は可成りこんで、大變暑苦しく、九十度に昇つた。廣小路の通りを通つた時に、柳の葉が老人の髮の樣に、枝を離れ始めたのに氣が付いた。もう秋に入つたのだ。
神尾の父と二兒と曉子が驛に私を出迎へた。行光だけは居なかつた。彼等の云ふ處では、行光は今朝から熱があるとの事。皆私を迎へて大悅び。
八月二十五日。金曜。曇、時々雷と通り雨。大變不愉快である。
朝、神尾の父と一緒に佐々木博士のところへ、安子の病中の親切な御配慮を謝しに行く。それから父は福島大將のところへ、私は新渡戶博士のところへ。近頃歸朝したヨシヲに會つて、新渡戶夫人が出てくるまで色々な事を話してゐた。彼女は自ら淚を誘ひはせぬかと氣遣つて、何も云はなかつた。やさしい人だ！　博士は盛岡に旅行中で會へなかつた。

行光の病氣は大變によくなつた。が生馬が喉を痛めて、臥床した。
午後から母上は濱尾夫人に會ひにお出かけ。一日中不愉快な天氣だつた。
御園から手紙が來た。彼女は子供達に同情して、歌數首を送つて來た。その中に

初秋の夜半をかたみのをさなごは
　　母なきねやに何夢むらん

の一首あり。
此の夜、兩親と談笑。格別興味ある事なし。ソファーに一人で腰かけてゐた敏行が、しのびやかに啜り泣き始めた！　どれ程私の胸を痛めた事だらう！　私はも少しで一緒に泣き出すところだつた。安子の死んだ日は、また〻く間に過去に消えて行く。あの悲劇の日はまるで大變遠い過去の樣でもあり、又たつた今起つた事の樣でもある。大きな出來事は時を抹殺して了ふ、そして私は常に生きて居る——現在に。
八月二十六日。土曜。稍〻雲あり。終日なす事もなく過す。
神尾の父と一緒に、山本の歸つて來るのを迎へに行つた。
聯合國の外人は、收入を聯合軍の兵卒に寄贈する爲に何か催物をした。
壬生と房子の病氣はよくなつてゐる。河野孃から佐藤孃の事で來信。あの婆さんの態度には腹が立つ。あの女などもう現代の若い者の立場の理解出來る人間ではない。佐藤をあの女に紹介した事が恥かしい。
安子！　安子！
八月二十七日。日曜。晴。輕井澤としてはかなり暑い。
二人の父と子供等と一寸した遠足をする爲、朝の中に家を出かける。鶴溜（つるだまり）で汽車を降りた。其處は高原で野生の草が澤山あり、美しい景色だつた。子供等は喜んであばれ廻つた。それから父上、敬子、直武と一緒に小瀬に行つた。六時頃、歸宅。

夕食がうまかつた。氣持よく疲れた。

小川氏が臺灣で死んだとの知らせが來た。足助が手紙をよこし、相場をやる事ができる間は、やめやうとは決心がつかないと云つて來た。彼をどうしたらいゝのか判らぬ。

安子！　私に力を與へてくれ！

八月二十八日。月曜。晴。暑い。朝、母と一緒に下町へ福島大將を訪問。歡迎された。福島大將は嚴格な武士道タイプの人である。夫人も亦、非常に敎養ある人の樣である。お孃さん達も人目を惹く娘である。

午後は子供等と遊んで過す。

夜、森本に可成り長い手紙を書いた。

Miss Daughday が悔み狀をよこし、その中で、安子は彼女の家族の爲に祈りつゝ死んだと書いてゐたので、素氣なく事實を否定した返事を書いた。眞價以下に評價される事もそれ以上に評價される事も、何人に取つても最も不愉快な事である。私はそれが嫌ひだ、彼女も又嫌ふに違ひない。

八月二十九日。火曜。晴。暑い。朝は戶外で壬生が繪を描くのを見て過す。油繪を描く方法を始めから終りまで見るのは、これが始めてだ。敎へられる所が多かつた。

午後から、明日此處を立つ山本の年上の子供達の爲に園遊會があつた。子供等と腹一杯遊んだ。德川公爵と同夫人が思ひがけなく、山本に訪ねて來て、仲間に加つた。公爵夫人が丁度公爵と婚約した時に、輕井澤で彼女に會つた事がある。その時は綺麗な若い娘だつた。今は堂々たる夫人になつて居る。

プールのスケッチを終へた。「草の葉」が今日屆いた。

八月三十日。水曜。朝曇り、午後より晴。夜は氣持よい雨。

野は何處も秋の色を呈し初めた。どんな草にも皆、一枚か二枚黄色く凋みかゝつた葉がある。日中は此處でも暑さが烈し

い。併し朝と夜とは大變涼しく物淋しく感じさせるので、人はまたゝく間に近づいてくる休息の時期を思ひ耽らざるを得ない。此の秋は自分には悲しい秋だらう。祖母に會ひに酒匂に行く直正、直光、ヒデザネを停車場に見送る。園田タダヲ來訪。

午後直良來訪。夕方山に散歩して、一文字山を水彩で寫生した。夜はホイットマンを讀んで過す。

急に雨が降つて來たが、暫くすると何處へか行つて了つた。そしてすつかり靜まり返つて、只物寂しい蟲の聲があるばかり。そこへまた降つて來る、そして今度やんだら、夜中ずつと降らなかつた。秋の訪れを認めざるを得ない。

八月三十一日。木曜。夜が明けるにつれて、雲は掃ひ去られた。輕井澤としては可成り暑い。

朝、"Calamus" の或る部分を讀む。園田タダヲが來て、晝食を共にした。神尾の父及び山本夫婦も來た。一緒に二時半まで話した。

佐山から葉書が來た。松原から手紙が來て、石田と云ふ醫者が、私の家を二十圓負けてさへくれゝば買ひたいと希望してゐると知らせて來た。承知した旨の返事を出す。

安子を私及び子供等から奪ひ去つた八月は過ぎた！

九月一日。金曜。朝、快晴。午後晩くから雨。今朝、私等は峠に登ることに決めた。神尾の父、愛子、房子、直武及び徳川のお孃さんが一緒に來た。子供等は勇敢だつた。私は田島の宿に立ち寄り、同行を誘つた。彼は勸めに應じた。山の頂上からの眺めは可成り驚くべきものだつた。私は妙義山をスケッチした。家に歸つたら、丁度雨が降り出した。

夜、直良が訪ねて來た。壬生の離婚事件に對する平塚夫人の批評を讀んだ。彼女は結婚問題に對して強固な論理的根據を持つてゐるらしい。すべて他の人の意見は問題が與へられてから形作られたらしいが、平塚夫人の意見は問題にぶつかる前に、しつかりと把握してゐた確信に基づいて述べられてゐる。此處に彼女の強みがあり、これが彼女の文章を他の批評からずつと強く區別する所以である。私は大體として彼女の意見に殆ど贊成してゐる事を認める。

あれは先月の今夜だつた。私は床の中で眠りもしないで、安子の恐しい苦しみを見守つてゐた、長い病苦に疲勞しきつた

彼女に、僅かに殘された力一杯で、あの病氣、襲ひかゝる惡運と鬪つてゐた。可哀さうだ、ほんとに可哀さうだ！　お前の悲しみは二重になつて私を襲つて來る。私はお前の苦惱を今自ら苦しんでゐる。たとへ心から望んだとしても、お前をどうしてやる事も出來なかつた、これも運命だ！　安子！　お前は何處かで私を見守つてゐてくれるのか。生死の境に在つたお前の悲しい心を想つてゐるみじめなこの私を、お前はどんなに感じるか。それともお前は私が啜り泣くのを笑つてゐるのか。

だがそれはともあれ、日が經つにつれ、お前は私自身の、部分になつて行く。何處まで私がお前であり、又お前が私であるのか、私には判らない。どうか私の中にもつとしつかりと生きて、進むべき最善の道を敎へてくれ。

九月二日。土曜。晴。夜、雨。早朝の空は美しく晴れ渡つてゐた。見渡す限り、一片の雲もなかつた。大層早く目がさめた。空漠たる悲哀は暗い陰鬱な姿をして、心の中に忍び入つた。外に出て、安子の名を時々呼びながら、小瀬に行く山道の方へ足を向けた。

山上で、淺間山が非常にはつきり煙を吐いてゐるのを見た。その裸かな褐色の斜面は朝日の輝かしい光りを吸收し、畏敬の念を起させる光彩を放つてゐた。紺碧の空に銀河のやうに流れる煙も又、人の心を戰慄せしめた。私は長い間、ぢつと眺めてゐた。悲哀と勇氣とが奇妙に混合した物が、私の中に湧き起つた。私は思ひ切つて泣く事すら出來なかつた。かうして私は道を進んで行き、露つぽい森の奥深くに入つた。日光は其處には屆かなかつた。草は露に濡れてゐた。蟲は靜かに鳴いてゐた。小鳥は足音に驚いて、突然飛び上つた。私は一人で、全く一人で歩いた。何と言ふ孤獨だらう！　數多の思ひ出に捕へられて、私の心は次第に熱い涙と共に解けて行つた。彼女は私及び彼女の子供達の爲に犧牲となつて死んだのだ。彼女の短い生涯は文字通り、彼女の家庭の範圍内に局限されてゐた。そして彼女はそれを後悔しない許りではなく、却つてそれを愉快としてゐた。あゝ、如何に私はお前を有難く思つてゐる事だらう。安子！　お前の中で私は、その愛を全く私にのみ注いだ一つの魂を發見した。私は何のこだはりもなく信頼し得る人を、少くとも一人持つてゐる事を自覺した。私は全く價値なく生きてはゐない。彼女を追想する事は力を得る事である。彼女の死によつて彼女は愛から力に變つたのだ。

深い悲しみが、屢〻わいてくる中にも、力を取り返しつゝ、私は愉快に且つ力づいて家に戻つて來た。母上は向日葵その他の小さな野の花の鉢でテーブルを飾り、その上に米を供へられた。母上は悲しい思ひ出に打ち負かされまいとして働いてゐられる。愉快さうな風をしてはゐるが、自分たちが深い悲しみの中にあると云ふことを、皆が知つてゐるのは明かであつた。

朝飯が濟むとすぐ、私は下の町に行き、少し買物をした。其處で新渡戶博士とゆき子に會つた。新渡戶博士は實にみすぼらしい服裝だつた。見るからに厭な心持がした。氣取るのは厭だ。

晝食後、家族皆で、テニスコートの方に散歩に出かける。歸りがけに生馬と撞球をする。ほんとに疲れて歸宅した。

神尾の父が夕方お出になつて夕食を一緒にした。重苦しい、妙な眠り。父上は今朝佐久鐵道の沿線の小旅行に御出發、今日お歸りにならなかつた。神尾の母と毅一が明日到着の筈。

九月三日。日曜。晴。實に暑い。午後、神尾の母と毅一到着。別に何もせず。「白樺」を入手。母のお話では、東京の今日の暑さは、かなり堪へがたいものだつた樣だ。

九月四日。月曜。晴。暑い。朝、高島屋に電話をかけに、下の町に行く。福島大將を訪問。午後は壬生馬が直良の胸像を粘土で作るのを見て過した。

昨夜は壬生馬と一緒に精出して粘土で彫像を作つた。私は壬生馬の胸像と女の裸體の小さいのを一つ作つた。

父上は佐久の小旅行からお歸りになつた。松原湖の美しさを熱心に賞めて居られる。

足助、淺田及び阪井から受信。足助は彼の淋しさを書いてよこした。阪井は彼の上官が公金を祕密に費消した爲に、留置場に入れられた、併し彼の無實な事が證明されたので、後で放免された。だが彼はその地位を失つて了つた。氣の毒だ。

淺田の手紙は大變詳しくて、彼の高い道德的信念と後暗い處のない誠實とにも拘らず、爲さざるを得なかつた彼の所業を一切告白して來た。そは興味ある許りでなく、甚だ敎へられる處が多い。彼は他のすべての人とは異つた强い性質を持つて

みる樣である。私は彼が好きだつた、そして今も尚、好きだ。彼の歌を少し揭げる。（以下十二行邦文）

漆黑の机に一つ水晶の文鎭のあり初秋の朝

いつはらぬ心もて世をいつはればいつはる事のよろしとも云ふ

海底に光徹りて小さき魚つゝと泳げり八月の朝

よし原をおはぐろとんぼそと飛びぬ思ふ事なき初秋の朝

海靑く野末に見えて粟畑に白き綿はる村に秋來ぬ

靑々と枝もたわゝになれる柿いと澁さげの靑色もよし

細き竹高くみどりの空をつくそのまはり飛ぶ赤蜻蛉よし

經木あむ小娘の髮めでたきが悲しき事を思はするかな

手の甲にふと落ちたりし傘のしづくつめたし秋をおどろく

桐山にばら／＼銀の雨ふれば廣葉のゆれを山鳥鳴くも

小松山赤土山の山間の紺靑の池まるく默せり

かく云へばかく答ふべしなど思ひしか云ふ事のさびし女に

九月五日。火曜。晴。甚だ暑い。靜かな雨が昨夜から今朝まで降り續いた、そして輝かしい日光と乾燥した風を伴つた美しい晩夏が來た。

愛子とその子供等は直良一人を殘して、正午に此處を去つて東京に向つた。晝間は「白樺」と「新小說」を讀んで過す。後者の谷崎の小說は發禁だ。

「松蟲」の初校を終へた。原稿を讀んでゐて、時々涕泣する。

夏繪の一周忌が來たと、英夫が知らせて來た。可哀さうな兩親。忍びやかな悲歎が彼等の心深くにあることだらう。

原、福士及び柳から手紙。柳は思ひ遣りのある葉書を寄越した。親切な心！

佐藤孃も長い〳〵手紙をよこし、若し事情さへ許すならば、敢然と一歩を踏み出すつもりであると書いてゐた。彼女は周圍の非難するのにもかまはず、松本と結婚したがつてゐる。そして此の難儀を私にかけたく思つてゐる。よろしい、私は出來るだけやつてみよう。

信濃なる淺間が嶽に立つ煙
　見守り居れば涙滲み來

ルーマニヤが獨墺に宣戰布告した、他方イタリーもオーストリアと國交を斷絕する事を公表した。ドイツは遂に窮地に陷つたらしい。

夜は靜かだ、餘りに靜かだ。月は段々大きくなつて來た。

九月六日。水曜。曇。暑い。午後から通り雨、そして雷。

東京はまた恐ろしく暑い。神尾が云ふには此處を立つた或る人々は暑さが我慢できず、大宮から歸つて來たとの事。

朝、壬生の繪のモデルに坐る。

午後から山本と神尾の父が來た。夕方、神尾の一家及び行と一緖に下の町の方へ散步に行く。鈴木大拙の「禪の立場から」を少し拾ひ讀みする。

私は仕事を始めねばならぬ。長い間、餘りに怠けてゐる。私は明日から嚴しくそれをやらう。

受信皆無。

手紙と葉書を隆三、英夫、足助等に書く。

九月七日。木曜。快晴。朝、壬生馬のモデルに坐る。午後磁器を製造する順序を子供等に見せてくれと藤井氏に賴んだ。

彼は私達にも不思議な物を澤山見せた。

夕方、山本及び藤井の爲に、「御馳走」の支度をした。壬生馬の支度は見事だつた。
夜、壬生馬と生死の甚だ眞面目な問題を論じた。私は「現世安立」を主張した。
田島、隆三及び奥村から葉書。田島は柏井そのの要求によつて安子に就いて文を書かうとしてゐると云つて來た。彼がどれだけ安子を知つてゐるか知ら。

第十八卷

一九一六年（大正五年、輕井澤及び東京）〔承前〕〔原文英文、編者譯〕

九月八日。金曜。天氣よし、時々曇り。朝　家族の者皆で行郎に手紙を書く。壬生馬のモデルになる。壬生馬は、直良から「熊野」を習ひ始めた。私も始めた。

午から「禪の立場から」を讀み、少し晝寢した。そこへ高島屋が來て、ふくさの數の間違ひをわびた。何とも仕方がない。それから子供達を連れ、小瀬街道の方に散歩する。子供達は、大變散歩を喜んだ。

夜、謠。足助、吉川等から來信。

コレラの患者が下の町に二三日來、非常に澤山發生した。人々は大恐慌を來してゐる。恐怖の爲に第一番に逃出したのは江木博士夫妻だつた。

豐川氏の家族も明日去る。

父上の腸疾患はまだ癒らない。本當に氣になる事だ。

月は一夜毎に滿ちて行く。だが殆ど毎晩の樣に邪魔をする雲がある。殘念だ！

九月九日。土曜。晴、涼し。當地のコレラは急速に蔓延しつゝある樣だ。今日迄に二十名近くの患者が避病院に送られた。患者が一人、小瀨にも出たとの噂である。

午前、山本の別莊から眺めた連山の繪をかく。「禪の立場から」を讀む。

神尾の兩親が午後、輕井澤に來着。兩親は東京の暑さは耐へられないと云つて居られる。又も患者が一人、前に發生した

處の隣りに出た。午後、山本來り閑談に時を送る。彼は我々に「熊野」を教へた。

夜、空は幾分雲があつたが、月は美しかつた。私は島の方までも散歩し、それからホテルに、シヨルツ教授がピアノを演奏するのを聞きに行つた。月光を浴びて、大廣間の戸外に立つてゐた。

熟睡する。森本から手紙を受取る、誰へも手紙を書かぬ。

九月十日。日曜。晴。甚だ暖い。駒村が云ふには、下の町から少しはなれて、我々の方に近い瀬上の家に、疑はしい患者が出たとの事である。我々はどうしたらいゝか途方にくれた。間もなく、毅一が汗みどろでやつてきて、輕井澤から來たと言ふので沓掛で晝食を採る事を斷られたとの事。彼はそれから小瀬に行つたが、巡査に嚴重に調べられて、やつと喰べる物を手に入れる事が出來たさうだ。

朝、モデルになる。磁器を二三描く。午から「禪の立場から」を讀み、雲の繪を描く。

直良は此の夜一時の汽車で此處を立つた。〔以下九月十一日まで邦文〕

淺間岳

白雲の焦る匂や淺間山　　幹雄
夏霞む碓氷の山は山の上　　玉蓮
吹き飛ばす石も淺間の野分かな　　芭蕉
淺間山煙の中の若葉かな　　蕪村
晴れにけり中に淺間の夕霞　　戸外
名月や淺間の嶽も靜かなり　　許六
長閑さや淺間の煙晝の月　　一茶
しらすべき煙も雲に埋もれて淺間のたけの夕暮の空　　家隆

信濃路や見つゝわがこし淺間山雲は煙のよそめなりけり　宗良親王
不二の根は絕えぬと聞くを淺間山こゝろ高くも立つ煙かな　蘆庵
忘るなよ淺間の嶽の煙にもとしへて消えぬ思ありとは　有敦
萬丈煙光挿碧天　一峰晴雪白皚然
振衣欲御長風去　笑殺先生骨未仙　青萍

碓氷

岩根ふみ岨のかけ道ふみわくと人には告げよ峰の白雲　幽齋
ひなくもり碓氷の御坂ふみさくみこえなん日には日向よくせよ　春海
一つぬいで後ろにおひぬ衣かへ　芭蕉
信濃路山が荷になる暑さかな　一茶
見上ぐれば信濃につゞく若葉かな　子規

麓野

夏さむき淺間の山の麓原雲低くおりてとふ鳥もなし　信綱
晝顏やほつほと燃ゆる石ころへ　一茶
輕尻の鞍返したる枯野かな　葛古

皓月の輪も眞丸く小田井の水を前田原鑑騎(わのり)の草は守竹、峯(みね)を反りとや笑ひ阪、北と南へ岐路に、神引逢ふて賑はしと、こころとめぬは世の中の、一夜泊りの思ひ寢も、裾野の風の夜嵐に、石吹き飛ばす野分して、遠近人も借宿と、見やはとがめぬ沓掛の、湯川の橋を鎖綱、左に高き淺間山、嶺の煙も絕えず昔より、雲場が原の旋風や、池の蓴菜(ぬなわ)を繰り寄せて、離山とも子持山、噂昔(きのふ)は過ぎつ今日は又、見晴し給ひ雨の神、旅のやつれも輕井澤、二手の橋にとつおいつ、見送る影も川音の、

紛にひょく山かつら、濡る水を貞光の、宮祠の寂やひょくなる。碓日とは誰が云ひ初めし濃き紅葉、秋を問はゞ事ふりし、實に吾妻の戀しやと、古き言葉も尊さに、熊野の宮の神籬を賽して傍爾杭、御薙刈りとる信濃路を、後に見なして上野の、猛き仁王や曾根太郎。　　岐蘇路迺道艸　　鹿鳴。

　小田井驛に入れば一重の桃花さかりなり。驛中に用水あり。當國名酒松本諸白とかける招牌あり。又須阪松本上諸白とかけるもあり。左の方に八ヶ岳、飯盛山など云ふ山々見ゆ。ませロ村の人家を過ぎて左右とも芝原なり。畑など作れるあり。一里塚を越えて道廣く平なり。大久保と云ふ所を過ぎて左は淺間の麓なり。ふもとに林あり。牧野虎之亟の林なりと云ふ。山の頂まで一里ばかりのぼると云ふ。四月八日に登るとぞ。山は至つて高けれども麓の地高きが故にさのみ高からぬやうに見ゆ。山上常に煙立ち登りて草木なし。赤き水流れ出づる所あり。血の池と云ふ。燒石の色黑く見ゆ。麓に寺あり。眞樂寺と云ふ。追分驛に入れば中仙道追分宿。自是東榊原小兵衞支配所と云へる榜示あり。左に此國善光寺道あり。これより追分とは云ふとぞ。淺間の山より右のかたにからほりと云ふ山あり。此山の右にあたりて石のたちたる圓き山あり。も澤と云ふ。驛舍のさま賑し。名物そば、うんどん、銘酒須阪松本諸白また松瀨川と云へるものあり。左に禪寺あり。右に諏訪大明神あり。

　左に淺間あり。芭蕉の句塚あり（上の方は見過しつ下は野分かなとありしやうなり）道のほとりに馬頭觀音とゑりたる碑三ヶ所ばかりあり。又二十三夜塔とゑりしも見ゆ。左右共に芝原なり。淺間の燒石多し。一里塚を經て右に自是左上州大さく、くさつあかつま道とゑれる碑あり。かりやと村の人家をへて左に社あり。遠近宮といへる額かけたる鳥居あり。これはかの遠近人のみやはとがめぬと云へる歌を聞きあやまりて淺間山のほとりにたてたるなるべし。和歌の浦の片男波、伊吹山のかくと谷と同日の論談なるべし。

　野原を過ぎて人家あり古宿と云ふ。阪を少し下りて行けば左の岡に堂あり。沓懸の驛に人家まれなり。驛の中に用水流る事前の如し。驛舍の樣わびし。神風丸と云へる藥賣る家あり。疊望み次第とかける障子もことやうなり。左に社あり。又

寺あり、長倉山と云ふ。又八幡あり。小流の土橋を渡る。右に水車あり。又一里塚右のかたなる古道にあり。左にまるく離れたる山あり。はなれ山と云ふ。道のほとりに近し。左右ともに畑ある處を過ぎてすこしばかりの岨道をのぼれば左右ともに草原なり。前澤と云ふ村に人家あり。左の岨に社あり。右はまた芝原なり。鹽澤村の人家を過ぐ。昔源賴朝卿このあたりなる藍澤に狩し給ひし時、御膳を焚く料に此の村の水を用ひしが鹹き味ありし故に鹽澤とは云ふとぞ。右の方佛岩と云ふ岩山に竈岩と云ふ岩ありて、その御膳を炊きたる處なりと云ふ。小流あり。石橋を渡りて輕井澤の驛に入る。こゝはあやしのうかれ女のふしどときけば、さしのぞきて見るに、いかにもひなびたれどさすがに前の驛より賑はしく見ゆ。障子に國の名物二八そばとかける多し。碓氷峠に上らんとして輿より下り徒より行く。

ひざり澤よりから驛など云へる長き阪を上るに此頃の寒さ衣を重ねたるが、やゝあつき心地すれば立場の茶屋にいこひて衣ぬがんとするに、道のほとりに麻上下きて出てひざまづくものあり。誰ぞと問へば此山の上なる熊野神社の神主なり。おのがやどりに案內して晝の休をとらせんと云へど、今日は熊野權現のまつりとて、太々講とかや社を結べるものよりつどひて神樂をすゝめ、酒のみ物くふ樣見ゆれば人だち多きところに交らんもうるさく、やうやうにすかしこしらへて權現の社に詣でず峠の立場にもいこはずして行き過ぎぬ。左の山寺に王堂あり、金剛力士の像古く見ゆ。此處信濃と上毛野との境なりと云ふ。はつ阪長阪を越えて笹澤と云ふ所に至る。淸水ながれ出づ。丸き山あり、子持山と云ふ。　壬戌紀行　太田南畝。

わが家は丸めた雪のうしろかな　一　茶
これがまあ終の栖家か雪五尺　同
繩つけて子に引かせけり丸氷　同
霞む日も雪の上なる住居かな　同
下々も下々下々の下國の凉しさよ　同
有明や淺間の霧が膳を這ふ　同

山々は萠黄緑やほとゝぎす　子規

俗謠

人の悪いのは鍋島薩摩暮六つ泊りの七つ立ち
加賀の大聖寺は寺ぢやと思つた寺ぢやないもの城ぢやもの
御國は大和の郡山お高は十と五萬石茶代がたつた二百文
錢は内藤豐後守袖からぼろが下り藤
松本丹波の甕丹波甕と云はれても錢出さぬ
一に追分二に輕井澤三に阪本まゝならぬ
碓氷峠から阪本見れば女郎が化粧して客まねく

高山植物

(一) 菊科

(一) あきのきりんさう　Solidogo virgaurea　八——十月　到る處
(二) うすゆきさう　八月　碓氷峠
(三) たうひれん　Saussurea tanakae　八——九月　碓氷、愛宕
(四) かうぞりな　Picris hieracioides　六——八月　到る處
(五) おたからさう　Ligularia sbirica　八月　碓氷、小瀬
○ ふじばかま（秋の七草）　八月　到る處
(六) やまはゝこ　Anapholis margaritacea　八月　碓氷三度山近傍
(七) のこぎり草　Achillea sibirica　八月　到る處

（八）　みやまあづま菊　Frigeron dubius　八月　碓氷峠
（九）　かせんさう　Inula salicina　八月　到る處
（一〇）　みづぎく　Inula ciliaris　八月　同
（一一）　深山からぞりな　Hieracium japonicum　八月　淺間山

（二）　桔　梗　科

○　ききやう（秋の七草）　八月　到る處
（一二）　姫しやじん　Adenophora nikoensis　八月　碓氷、小瀬、淺間
（一三）　深山しやじん　Adenophora holymorpha　八月　碓氷、小瀬
（一四）　そばな　Adenophora remotiflora　八月　雲場が原
（一五）　岩ききやう　Campanula laciocarpa　八月　小瀬山

（三）　山　蘿　蔔　科

（一六）　まつむし草　Scabiosa japonica　八――九月　到る處

（四）　敗　醬　科

○　女郎花（秋の七草）　八月　到る處
（一七）　白山女郎花　Patrinia palmata　七――八月　小瀬、淺間

（五）　忍　冬　科

（一八）　うこんうつぎ　Deirvilla middendorffiana　七――八月　碓氷、小瀬、淺間

（六）　茜　草　科

（一九）　みやまむぐら　Galium paradoxum　八月　到る處

九月十一日。月曜。曇り。大變蒸し暑い。八十三度。朝、神尾に行き、「輕井澤」と云ふ輕井澤の案内記を持ち歸る。當地の概況が忠實に書いてある。前の數頁はその書き拔きである。

胃を少し害した。大變不快だ。朝、伊太利大使の住む處までも行く。甚だ美麗な場所である。福島大將を訪ね、輕井澤の大通りを通る。住民は一般に生活の方便を、突然、傳染病の爲に塞がれて、疲勞困憊しきつてゐる樣に見える。大通りすら荒れはてゝ見えた。此處彼處に立つて居る巡査も威嚇する樣に見えるし、患者の發見された家は閉鎖されて、貼り札がしてある。多くの人は豫防注射をされて、肩が痛いとこぼしてゐる。

午後から少し讀書、それから父上と、玉突をしに行く。壬生馬も同行。夜、兩親及び壬生馬と大變愉快に話した。

母上は中井篤介の非常に感心な弟子である故平田氏の思ひ出をお話しになつた。彼は中井の塾の塾頭だつた。彼はルーソー及びガンベッタの非常な崇拜者であつて、始終、我國民に此の二偉人の話と近き將來に開催される議會について話した。彼は肺病で死んだ。そしてそれから園田氏の兄弟の故宮內氏の話。警察署に呼び出された時、當局者の面前で、それは〳〵亂暴を働いたものだ。彼は叱責されて居るその最中に放屁した。巡査は極度に激怒してもうこの侮辱を我慢できぬと云つた。宮內は「出物はれもの處きらはず」と答へた。巡査は、彼が此の侮辱をした時に、「彼は腿をあげた、是、明かに彼が當局をないがしろにする意向あるのを示してゐる實證だ」と言つた。すると答へて曰く、「否、俺は唯だ樂にぶつ放さうとしただけだ。それだけだ！」

それから太田トキトシについて。私の父が長男の誕生を祝ふ爲めに、友人を數人招待した時、彼は私の誕生を喜んでそれは〳〵踊りぬいたものだ。彼が妙な顏付をするので皆がよく彼の身邊をみてみると、自分の劍が偶〻ふれた爲に足から血が出てゐるのだつた。それは私の誕生後、僅か一週間後の事であつて、母上は客が大勢の爲に少しも食事ができなかつたさうだ。彼等が酩酊してからは、唯どなり、跳ね廻つてゐた。藝者の三味線は目茶々々に壞れ、母上は遂に膽をつぶして了はれたものださうだ。

平田——學者肌の學生。餘り氣品ある顏ではないが、機智とユーモアに富んでゐる。年が若いにも拘らず、彼は仲間の首領と仰がれてゐた。

吉井——哲學者。政治や社會問題には超然たる態度を取つてゐた。寡言であるが、併し一度口を切れば、滿座の注意を惹かずに置かなかつた。

田中直哉——才氣縱橫且つ野心に燃えてゐた若い美しい青年。

小山——寧ろ遲鈍な、柔和な人間。

某——遲鈍な頭と誰にでも善意を持つてゐるまるで天使の樣な人間。稍〻年を取つてゐた。雙方の議論が可成り激烈になると、彼はよく涕泣して、彼等が國民及び國家の重大な死活問題に獻身する熱心と誠實を賞讚したものだ。

田中夫人から葉書を受取る。子供等の爲に菓子を少し送つてくれたとの事だ。親切な心！（以下九月十二日まで邦文）

（二〇）きはなのかはらまつ　Galium verum　八月　到る處
（二一）ほばのよつばむぐら　〃　kamtschaticum　五月　到る處
（二二）くるまむぐら　〃　japonicum　五月　到る處
（二三）おほばのやへむぐら　〃　pseudo-osprellum　八月　到る處

（七）玄參科

（二四）みやまこゞめぐさ　Euphrasia insignis　七——八月　碓氷峠
（二五）くかいさう　Leptandra virginica　七——八月　雲場が原
（二六）しほがまぎく　Pedicularis respireata　八月　到る處
（二七）ぐんばいづる　Veronica onoei　同　淺間山
（二八）ひめくわがた　〃　stelleri　同　碓氷峠

(二九) ひめとらのを　〃 spuria　七——八月　到る處

(八) 唇形科

(三〇) いぶきじやかうさう　Thymnes serpyllum　七月　小瀬、淺間

(九) 龍膽科

(三一) おやまりんだう　Gentiana makinoi　八——九月　到る處

(三二) つるりんだう　Gr.wfurdia trinervis　八——九月　碓氷峠

(三三) ほそばつるりんだう　〃 ptory gocalyx　八——九月　同

(三四) はないかり　Halenia corniculata　七——八月　到る處

(三五) みつかしは　Menianthe trifoliata　六——七月　雲場が原

(一〇) 櫻草科

(三六) ゆきわりさう　Primula farinosa　六月　碓氷、淺間

(三七) つまどりさう　Trientalis europæa　八月　小瀬、淺間

(一一) 岩梅科

(三八) いはかゞみ　Shortia soldanelloides　六——七月　小瀬、碓氷

(三九) こいはかゞみ　〃 ilicifloria　六——七月　同　同

(四〇) いはうちは　〃 uniflora　同　同

(一二) 石南科

(四一) しやくなげ　Rhododendron hymenanthes　五——六月　淺間山

(四二) いはしげ　Cossiopea lycopo lioides　七月　淺間山

（四三）つがざくら　Phyllodoce nipponica　六——七月　同

（四四）あをのつがざくら　〃　aleutica　八月　同

（四五）こけもゝ　Vaccinium Vitis Idoca　七月　同

（四六）くろまめのき　Vaccinium uliginosum　同　同

（四七）こめばつがざくら　Arctirica nana　七月　淺間山

（四八）あかもの　Gaultheria adenothrix　同　同

（四九）ぢむかで　Cassiepe stelleriana　八月　同

（一三）鹿蹄草科

（五〇）ゆうれいたけ　Monotropa uniflora　八月　小瀬、淺間

（五一）いちやくさう　Pyrola rotundifolia　七月　淺間山

（五二）べにいちやくさう　〃　〃　六——七月　碓氷、小瀬

（一四）繖形科

（五三）はくさんさんご　Pupleurum multinerve　七月　碓氷山

（一五）柳葉菜科

（五四）ひめあかばな　Epilobum dahuricum　七——八月　碓氷山

（五五）こあかばな　〃　sp.　同　同

（五六）やなぎさう　〃　augustifolium　八月　小瀬山

（一六）菫菜科

○　しはいすみれ　Viola violaceae　四月　雲場が原

(五七) ひめみやますみれ　〃 boissieriana　四―六月　碓氷、淺間
(五八) こみやますみれ　〃 maximowicziana　五月　同　同
(五九) みやますみれ　〃 selkirkii　五―七月　同　同
(六〇) きばなのこまのつめ　〃 biflora　七月　淺間山
(六一) えぞすみれ　〃 chaerophylloides　四―五月　城尾根山
(六二) げんしすみれ　〃 variegata　四―五月　碓氷、淺間
○ すみれ　〃 patrinii　同　到る處
○ こすみれ　〃 japonica　四―五月　到る處
○ あかねすみれ　〃 pholacrocarpa　同　同
○ しめしはいすみれ　〃 violaceae　同　碓氷山
○ すみれさいしん　〃 vaginata　同　小瀬
○ えぞのたちつぼすみれ　〃 ccuminata　五―六月　長尾
○ たちつぼすみれ　〃 sylnestris　四月　到る處
○ つぼすみれ　〃 verecunda　五月　同
○ はいつぼすみれ　〃 〃 四―五月　同

九月十二日。火曜。曇り。急に寒くなつた。朝の中は六十三度。
早朝、散歩。神尾を訪問。依頼の揮毫執筆で御多忙。
午後から壬生馬及び毅一とテニス。
夕方から雨が降り出した。神尾の母が夜分見えた。また眠れなくなつた。夢みる事夥し。〔以下九月十三日まで邦文〕

（一七）金絲桃科

（六三）しなのおときり　Hypericum sinanense　八月　到る處

（六四）いはおとぎりさう　" kantschaticum　七――八月　碓氷山

（一八）槭樹科

（六五）みねかへで　六月　碓氷山

（一九）岩高蘭科

（六六）がんかうらん　Empetrum nigrum　五――六月　淺間山

（二〇）牻牛兒科

（六七）ぐんないふうろ　Geranium eriostemon　七月　到る處

（六八）きつりふね　Impatiens nolitagere　八月　小瀨山

（二一）荳科

（六九）いはわうぎ　Hedysarum elongatum　八月　淺間、小瀨、碓氷

○　はぎ（秋の七草）　Lespedeza bicolor　同　到る處

○　くず（同　）　同　同

（二二）酸漿草科

（七〇）みやまかたばみ　Oxalis acetesella　四――五月　碓氷山

（二三）狸藻科

（七一）むしとりすみれ　Pinguicula vulgaris　七――八月　碓氷、淺間

（二四）薔薇科

(七二)	なゝかまど	Pyrus aucupava	六——七月	小瀬、淺間
(七三)	たかねなゝかまど	〃 sambasifolia	七月	碓氷山
(七四)	きんろばい	Potenlilla fruticosa	八月	入山峠
(七五)	ぎんろばい	〃 〃	同	碓氷峠
(七六)	みやまきんばい	〃 gelida	七月	雲場が原
(七七)	みやまだいこんさう	Geum calthaefolium	八月	一の字山
(七八)	こがねいちご	Rabus pedatus	七月	同

(二五) 虎耳草科

(七九)	だいもんぢさう	Saxifraga cortussaefolia	八月	碓氷、小瀬
(八〇)	ふゆゆきのした	〃 japonica	七——八月	碓氷山
(八一)	うめばちさう	Parnassia palustris	八——十月	到る處
(八二)	ひめうめばちさう	〃 alpicola	八——九月	碓氷・一の字山

(二六) 景天科

(八三)	ほそばのきりんさう	Se'um esizoon	六——七月	淺間 到る處
(八四)	ひめきりんさう	Sedum sikokianum	六月	淺間山
(八五)	いはきりんさう	〃 rhodioca	七月	同
(八六)	むらさきべんけいさう	〃 telephum	八月	碓氷峠
(八七)	ほそばいはべんけいさう	〃 rhodiola	七月	淺間山
(八八)	みやままんねんぐさ	〃 japonicum	六——七月	小瀬山

(二七)　茅膏菜科

(八九)　もうせんごけ　Drosera rotundifolia　六——八月　碓氷、一の字山

(二八)　十　字　科

(九〇)　みやまはたざほ　Arabis lyrata　七月　山離

(九一)　はくさんはたざほ　〃 halleri　六月　碓氷山

(二九)　毛　茛　科

(九二)　はくさんいちげ　Anemone narcissiflora　六——七月　碓氷山

(九三)　あづまいちげ　〃 radeleana　四——五月　城尾根山

(九四)　ひめいちげさう　〃 debilis　七月　碓氷山

(九五)　からまつさう　Thalictrum aquilegifolium　七月　到る處

(九六)　みやまからまつ　〃 tuberiferum　七——八月　同

(九七)　みやまあきからまつ　〃 akamense　八月　碓氷山

(九八)　さらしなしようま　Cimicifuga foteida　八——九月　同

(九九)　みやまはんしやうづる　Clematis alpina　七月　淺間山

(一〇〇)　やまおだまき　Aquilegia buergerlana　七月　到る處

(一〇一)　やまとりかぶと　Acontum japonicum　八——十月　同

(一〇二)　れいじんさう　〃 lycoctonum　八月　同

(三〇)　石　竹　科

(一〇三)　おほやまふすま　Mo chringia lateriflora　七月　到る處

(一〇四) みつまめくさ　Alsine macrocarpa　八月　淺間山
(一〇五) みやまみゝなぐさ　Cerastium schizopetalum　七月　同
(一〇六) かたそでさう　Cerastium oxalideflorum　六月　小瀬山
(一〇七) しなのなでしこ　Bianthus sinanesis　七月　到る處
　○　なでしこ(秋の七草)　七一八月　同

(三一) 蓼　　科

(一〇八) いぶきとらのを　Polygonum bistorta　八月　碓氷、淺間山
(一〇九) むかでとらのを　„　viviparum　同　同

(三二) 樺　木　科

(一一〇) しらかんば　到る處
(一一一) きかんば　同
(一一二) たてかんば　同

(三三) 蘭　　科

(一一三) ちどりさう　Gymnadenia conopsea　八月　淺間、小瀬
(一一四) はくさんちどり　Orchis aristata　七月　同
(一一五) あをちどり　Peristylis vir'dis　八月　小瀬
(一一六) ほていらん　Calypso bullbosa　七月　小瀬山
(一一七) あつもりさう　Cypripedium macratolm　七月　碓氷、小瀬
(一一八) くまがいさう　„　japonicum　七月　同

（三四）　百　合　科

（一一九）　くるまゆり　Lilium avenaceum　八月　碓氷、小瀨
（一二〇）　ちごゆり　Disporum smilacinum　四――五月　同
（一二一）　なるこゆり　Polygonotum giganteum　六月　碓氷、愛宕
（一二二）　まひづるさう　Maianthenum convallaria　七月　到る處
（一二三）　つばめおもと　Clintonia　七―八月　小瀨山
（一二四）　ねばりのぎらん　Aletris foliata　八月　小瀨、愛宕
（一二五）　のぎらん　Metanarthecum lutea-viride　同　到る處
（一二六）　つくばねさう　Paris tetraphylla　五――六月　小瀨、碓氷
（一二七）　ちやぼせきしやう　Tofieldia gracillis　六――八月　同
（一二八）　しろうめあさつき　Allium schoenoprasum　八月　到る處
（一二九）　すゞらん　Convallaria majoris　六月　小瀨、愛宕

（三五）　燈　心　草　科

（一三〇）　みやまぬ　八月　淺間山
（一三一）　えぞほそゐ　七――八月　同

（三六）　莎　草　科

（一三二）　みのぼろすげ　八月　淺間山
（一三三）　さぎすげ　七月　同

（三七）　禾　本　科

(一三四)　こめすぎ　　八月　淺間山
(一三五)　うしのけぐさ　　五—八月　到る處
○　すゝき、尾花、刈萱(秋の七草)　　八—九月　同

(三八)　松　柏　科

(一三六)　はひまつ　　六月　淺間山

(三九)　一　位　科

(一三七)　あらゝぎ　　四月　小瀬山

(四〇)　石　松　科

(一三八)　ひかげのかつら　　碓氷、小瀬、淺間
(一三九)　まんねんすぎ　　同
(一四〇)　こすぎらん　　同

(四一)　水　龍　骨　科

(一四一)　よろひらん　Polypodium lineare　小瀬、碓氷
(一四二)　うさぎしだ　Nephrodium dryopteris　同
(一四三)　をしだ　"　filix-mas　同
(一四四)　みやまわらび　"　phogopteris　同
(一四五)　おほばしよりま　"　montanum　同

(四二)　土馬蹤門科

(一四六)　はなごけ　Gladonia ranquiferina　小瀬、淺間

(四三) 地　衣

(一四七) さるおがせ　Usnea longissima　小瀨、碓氷

高山蝶目錄

(一) 鳳蝶科

あげは。まあげは。からすあげは。みやまあげは。くろあげは。ひめぎこてふ。おながあげは。やまじようろう。

をんひらひら蝶も金比羅參りかな　一茶
むつましや生れ替らば野邊の蝶　同
葎からあんな胡蝶の生れけり　同

(二) 粉蝶科

もんしろてふ。すぢくろてふ。つまきてふ。ひめひろてふ。やまもゝてふ。やまきてふ。すぢぼそやまきてふ。きてふ。つまくろきてふ。

ひらひらと杉並ぬける胡蝶かな　一澄

(三) 蛺蝶科

すみながし。むらさきてふ。ごまだらてふ。こむらさき。いちもんぢてふ。ほんみすぢ。ふたみすぢ。こみすぢ。おほみすぢ。みすぢてふ。あかたては。くじやくてふ。くろたては。ひおどしてふ。ひめたては。きべりたては。むらさきたては。しいたては。さかふちてふ。ひようもんもどき。こひようもどき。こひようもんてふ。ぎんぼしひようもん。うらぎんひようもん。おほうらぎんひようもん。うらぎんすぢひようもん。くさべりうらぎんひようもん。おほうらぎんすぢひようもん。ちどりひようもん。くもがたひようもん。

(四) 斑蝶科

あさぎまだら。

蝶飛ぶやこの世に望ないやうに　一茶

（五）蛇目科

べにひかげ。じやのめてふ。きまだらてふ。うらじやのめ。ひめうらなみじやのめ。つまぐろうらじやのめ。きまだらもどき。おほひかげ。きまだらひかげ。ひめきまだらひかげ。ひかげてふ。くろひかげ。くろひかげもどき。ひめひかげ。こじやのめ。ひめじやのめ。

（六）天狗蝶科

てんぐてふ。

蝶の來て蝶の眠りをさましけり　梅上

（七）小灰蝶科

とらしゞみ。こつばめ。みやまからすしゞみ。めすあかみどりしゞみ。みどりしゞみ。みづいろをながしゞみ。おほみどりしゞみ。うすいろみどりしゞみ。あかしゞみ。うらなみあかしゞみ。むもんあかしゞみ。うらむらさきしゞみ。べにしゞみ。つばめしゞみ。しゞみてふ。をながしゞみ。おほるりしゞみ。いぶりしゞみ。うらごまだらしゞみ。るりしゞみ。やまとしゞみ。ごいしうらば。

蝶寢るや草ひきむしろ尻の先　一茶

氣の毒やおれをしたふて來る小蝶　同

（八）挵蝶科

ぎんいちもんじせゝり。すぢじろちやはねせゝり。へりぐろちやはねせゝり。あかせゝり。ゆきまだらせゝり。きまだらせせり。いちもんぢせゝり。ちやはねせゝり。あをばせゝり。たいめうせゝり。ちやまだらせゝり。ほんちやはねせゝり。み

やませゝり。

輕井澤（舊幕時代の）

今舊幕の宿場の跡を探つて見ると、現在の東西五六丁の町並が、辛うじてその當時の面影を止めてゐる許りであるが、天明三卯年、當宿場傳馬屋敷八十六軒半に、御傳馬併に諸夫錢を間口割にしたる規定書に依ると

覺

一、御傳馬本屋敷は間口八間を一軒役に相極め馬一疋、間口四間を歩行役に相極め、人足一人宛の積に相勤め可申候筈。

一、新町屋敷分は間口十三間を一軒役に相極め、馬一疋、間口六間半を歩行役に相極め、人足一人宛の積にて相勤候筈。

本陣、問屋、名主屋敷の儀は、居屋敷間口八間宛御役相除、寺屋敷の儀は表間口有丈御役除可申筈。

天明三卯年

同年

御傳馬役勤方定書

一、本宿の分は馬役間口八間、歩行役間口四間に相定め不申候而は五十人五十疋御定の人馬不揃に付相定候得共、勤方の儀は宿中相談の上、馬屋敷歩行屋敷間口併せて十二間を一組に相定め、馬一疋歩行一人相勤宿定の馬五十疋人足五十人都合仕組無差支相勤可申事。

一、新屋敷の儀は、馬役間口十二間歩行間口六間合せて十八間を一組に馬一疋人足一人差出、諸事本宿に准じて相勤可申事

一、往還御用は差支無之見計ひ相勤むる事。

一、人足勤方の儀は、御武家樣方に荷物問屋年寄馬背帳附等見計候へば、長持一棹八人掛申付承知の上二人にて持通し、六人相殘の分は勝手次第に候若し八人共申附候を十人或は十五人なくては難參旨申立候はば、其通り人足相掛其人數一人も不殘先宿迄持通し可申候。途中より仲間申合せて歸る者有之候はば、是亦同條に准じ御定一倍の過錢爲差出宿夫錢

へ差加可申事。

右の通相定申候爲後日證書如件

天明三卯年四月　　惣宿内連中

惣役人連中

即ち本宿七十八軒とは現今の町並を云ひ、新宿屋敷六軒半とは町の西端より物書橋に至る間の別荘地を云ひ、本陣屋敷とは輕井澤ホテルの家並、寺屋敷とは神宮寺門前の長屋を云つたものである。なほ町の兩端の木戸根には石疊の枡形がありて、そこには數軒の茶屋が並んで居た。

送りましよかい送られましよかせめて枡形の茶屋までも　追分節

而して七十八軒の本宿には、二十四軒の旅籠屋が軒を連ね、紅粉を裝うた飯盛女が爭うて旅客を招いて居た。

九月十三日。水曜。雨。大變凉しい。奥村から葉書を受取る。直良に葉書を出す。朝は讀書に過す。Dr. Monsen が今日の午後、思ひがけなくも父上を訪問。壬生と私は下の町へ、撞球に行く。コレラ患者が復た一人町に出た。

雨が終日降りつゞく。まだ何もしない。私は「白樺」への文章をかく爲に、一寸旅に出かけよう。あゝ、駄作、駄作ばかりぢやないか!

九月十四日。木曜。烈しい雨。溫度著るしく低下。

今朝何處かへ小旅行に出かけ、「白樺」への文を書かうと決心した。

警察署に出かけて健康證明書を貰ふ。神尾を訪問。二時三十一分の汽車で、上田に向ふ。子供等はハンケチなどを振つて見送つた。私も振り返つた。不思議な涙が滲み出て來た。行光は何んておとなしい子になつたんだらう。樂しげな顏付をして立派に「さよなら」と云つた。可哀さうな、可哀さうな子供達!

ともあれ、私は一人になつた。如何にこの境遇を憧れてゐた事か。此處に滯在する間に、私は安子と、もつと親しく接す

る様になるだらう。彼女は、生と死の問題に關して、強く且つ深い思想を筆にする力を與へてくれるだらう。

上田からの馬車は滿員だつた。傍に腰かけてゐた若い娘の髮の惡臭で、殆ど吐きさうになつた。雨の降り注ぐ中を、馬車が靑木に着いた時は、眞闇だつた。此處で馬車を下りねばならない。これは全く豫期しなかつた事なのである。坂路はぬかつて、嶮しいので、人力車を雇つた。登るに從つて、四邊は益〻淋しくなり、氣分は次第に憂鬱になつて行く。「ますや」に着いたのは七時半だつた。建物はこんな人里遠くはなれた處としては大規模である。

途中で氣付いたのだが、家は皆、穀物は栽培できぬやうな高い丘の上に建つてゐる。車夫が説明するには、德川時代にはお上は稻の植付地域を狹めるからと言ふわけで、平地に家を作るのを禁じたものです。近年この規則は無視される樣になり、今では平地の靑田の中にさへ家ができるやうになつたものです、と。

頽廢した空氣か、身邊に漂つてゐる。三味線と琴の音が、雨と早瀨の音と入りまじつて聞える。だが幸ひに、私の部屋は靜かだ。此處に閉ぢこもつて、出來るだけをやらう。

安子よ、私を助けてくれ、どうか助けてくれ！

九月十五日。金曜。快晴。昨夜は何時もの樣に、大變に眠れなかつた。部屋の妙な惡臭と、不潔な待遇が一緒になつて、私を眠らせず、不愉快にした。

今朝起きたら、頭は重く、眼が痛かつた。一向何もできさうにない。今日の午後、此處を立ち、別所まで登らうかと今考へてゐる。

眺望も別所より惡い。谿谷はずつと狹く、あの繪の樣な美しさもない。すつかり退屈した。

晝食後、鞄を運ぶ子供を雇ひ、別所へ向つて男神山の可成り嶮しい道を登る。頂上からの眺めは美しかつた。柏屋本館に入る。先づ第一、部屋が綺麗だつた。すつかり滿足した。これで仕事が出來るだらう。疲れたので、夕方少し休む。母上に當地到着の通知を出す。夜、村芝居が近所で演ぜられた。見物した。こんな種類の演劇を見るのは、始めてだ。非常に面白い

ものだ。

今夜は熟睡できた。有難い。

九月十六日。土曜。曇り。柏屋に逗留。朝、少し原稿を書く。だが長く續けられなかつた。頭痛を覺える。

九月十七日。日曜。日中は快晴、夕方烈しい雨。朝、少々原稿を書き、又畫を一枚描く。午後から、上田に下りて、見物する。町は特に繁華ではない様だ。壬生馬、毅一、藤井、行光、敏行、及び曉子が輕井澤から出かけて來た。皆が停車場から出ると、雨が降つてきた つゞいて、恐しい雷雨。我々は雷と稲光りの中を馬車を驅つた。壬生馬は大いに風景を賞讃した。皆は柏屋の別莊に宿を取つた。私もそこへ泊つた。

九月十八日。月曜。温度甚だ高く、蒸し暑い。朝は近所の見物をして過す。我我は暑さの爲、外出するのを躊躇してゐた。だが遂に、三時過ぎ、國分寺の有名な塔を訪れる事に決めた。一昨日私が通つた山道を、我々及び三兒は登つた。子供等は健氣にもずつと歩き通した。道は約一里半、おまけに峻しい坂だつた。そこへ着いたのは、六時頃だつた。寺そのものは調べる價値はない。だがその三重塔！ 驚くべき技工と、古雅な趣致は、見る者を嘆賞させる。

丁度その時、沈みゆく太陽の反射に染められた美しい夏の雲が、塔の背景となつて、塔の印象を一段とつよめた。

歸り途、ずつと子供等を負ぶつて、七時頃可成り疲れて別所に着いた。夕飯甚だうまし。

九月十九日。火曜。晴。暖かし。朝の中に別所を立ち、小諸に下り、そこで汽車を降り、藤村の舊居を訪ね、晝飯をたべ、そして布引觀音に登つた。我々は千曲

川に沿つて歩いた。風景美し。觀音の堂は上手な出來ではないが、十分繪畫的だ。
それから懷古園（城の遺跡）へ行つた。佐久平野と千曲川の美しい風景を擅まにする頗るいゝ處である。
六時頃輕井澤に歸る。馬車を持つて駒村が驛に出迎へた。今日、コレラの疑ひのある患者が又一人發生したさうだ。
此の夜父上と直良が東京から來た。家は賑かになつた。

九月二十日。水曜。雨。〔省略〕

九月二十一日。木曜。晴。今朝、神尾の一家が輕井澤をすつかり引き上げて行つた。驛に見送る。
磁器で牧神（パン）の像を作る。
原稿が未だ出來ぬとは恥かしい事だ。何て私は無精な人間なのだらう。
夕方、毅一が草津から歸つてきた。彼は我々と上田で別れ、澁から草津へ小旅行をしたのだ。
英が、「松蕈」はどうやら思ふ通りに出來たと云つて寄越した。

九月二十二日。金曜。晴。父上は我々の住居の傍に新しい家をお建てになるので忙しい。私は怠けて日中を過す。「太陽」所載の武者の「燃えざる火」を讀み通す。極めて氣の利いた書き振りである。だが讀んだ後で、後味として不思議な不安を感ずる――バランスが妙にとれて居ない。
夕方、壬生と撞球をする。
其處にゐた娘は、さう云つた娘としては、可成り可愛く綺麗である。藤井氏が次の樣な話をしてくれた。三笠ホテルの支配人の益田は、娘を手に入れる爲にその家族を拾ひ上げて、今住んでゐる家を貸した。益田の妻君は手に負へぬ女で、家庭の事については實權を握り獨特の遣り繰りをやつてゐる。彼女は內藤の姉妹である。父が死んだ時、彼女は何とかして兄弟には何も殘さず、父の所有物を全部取り上げようとした。益田が下の町へ出かけると、彼女は彼の紙入を調べ、ほんの少ししか持つてゐないのを確かめ、五圓札をその中に入れる。だから自分一人で伸び〳〵する爲に、益田は玉突屋の娘を連れて

來て、樂しんでゐるのである。彼は又よく小諸に行き、したい三昧をしてゐると言ふ話だ。
玉突屋の主人は益田が娘の爲に彼に支給する手當が少ないと不平を云つてゐる。甚だ興味がある。
父上は新築しまるで氣狂ひだ。

九月二十三日。 土曜。眞夜中から雨、甚だ涼しい。
朝、大工が來て、新築について父上と話し込む。午後から玉突屋へ父上と同行。
歸つたら「松蟲」が屆いてゐた。特に表紙の裝幀が美しい。之が安子の內面生活の最後の遺物である。抱きしめてやりたい。
夜、野上夫人の小說を讀む。感動させられる。彼女は女流作家中の白眉である樣だ。
深い眠りに入る。

九月二十四日。 日曜。〔省略〕

九月二十五日。 月曜。〔省略〕

九月二十六日。 火曜。快晴。大變暑い。八十度。朝、壬生馬の爲にモデルになる。繪はまとまつた形を爲してきた。どうやら成功の樣だ。
與謝野夫人へ手紙。足助、高松、佐藤嬢、吉川、松原、宮原、奧村等へ葉書を書く。
兩親は星野溫泉に駒村をつれてお出かけ。雷雨がやんだ夕方、御歸宅。彼處は行つてみるだけの事はあると云はれた。
私は此の數日、一向何もしないとは、何て怠け者なのだらう。東京に歸宅してからは、生れ更らねばならぬ。
東京では壬生馬の事件が又も尺、神尾間で始まつた。原田の側から話を持ち出したらしい。尺はそれを重大に考へ、高木に又訴へてくれるよう神尾に頼めと、壬生馬を說いた。壬生馬はそんな事を、又もや高木に頼むのは恥でもあり、突飛でもあると考へた。そこで神尾は自分自身の考へで、進んで原田の處へ行き、原田夫人の本當の意向を確かめた。彼女が信子を有島に歸らさうと考へてゐるのは確かだと、壬生馬は考へてゐる。だが、どれ位長く彼女の決心が續くかと云ふ事について

は、彼には全く見當がつかない。

九月二十七日。水曜。〔省略〕

九月二十八日。木曜。昨夜から雨。大變涼しい。朝、家に歸る準備の爲、荷造りする。これが悲嘆と寂寥の滿二ヶ月の私の住居だつた。一族の者がどれ程全力を盡して私を慰めてくれたことだらう。私は如何に感謝したらいゝか判らない。

九月二十九日。金曜。朝、快晴。午後から曇り。今朝、我々は輕井澤を去る筈である。

昨日、午後から私は東京の人々へ贈物にする野生の花を摘むのにかこつけ、一人で鶴溜に出かけた。秋風が烈しく吹く。鶴溜から坂を下つて沓掛に向つた。そして沓掛から星野溫泉に行つた。私は途中ずつと安子の事を靜思冥想した。彼女に對する新たなる親密さを感じた。彼女が逝つてもう二ヶ月近くなる。そして彼女の美しい所が、日が立つに從つて益々强く感じられて來る。彼女は私にとつて、何と親切で、立派な妻であつたらう。私は彼女を、正當に評價しなかつたのを遺憾に思ふ。彼女は殆ど私について歩いてゞも來る樣な氣がした。私は繰り返し繰り返し、ほゝゑみながら彼女の名を呼んだ。彼女は私に答へるかと思はれた。

沓掛は氣持のいゝ處だつた。星野旅館は決してよくない。家を二時半頃出かけ、其處に五時少し前に着いた。急いで風呂に入り、停車場に急ぎ歸つた。そして輕井澤まで汽車に乘つた。すつかり疲れて、家に着いた時は眞闇だつたが、心は慰められてゐた。私は午蒡、千本檜や、みやまうすゆきさうを澤山取つてきた。

子供達はできるだけ早く東京へ歸りたがつてゐた。可哀さうな者達。

そして今朝、我々は十時四十五分の汽車に乘つた。駒村、三吉巡査、相馬その他の人々が驛に見送つてくれた。大變愉快な旅だつた。天候の御蔭だ。驛員が云ふには、眞夜中の溫度は四十二度だつたさうだ。神尾の父、毅一、よし江、及び英が驛に出迎へた。涙が私の眼に溢れた。今夜の食事は大變うまかつた。

九月三十日。土曜。晴。だが大變涼しい。殆ど輕井澤と同じだ。

早朝、安子の墓に參る。墓標は大變黑ずんだ。輕井澤で摘んできた野の花を少し供へた。
歸宅後、壬生を同伴して上野に美術院の展覽會を見に行く。何も特に注意を惹く作品はなかつた。そこで登張孤雁氏に會つた。彼はよく話した。彫刻の事に關して少し敎へられる物があつた。輕井澤に比べると、空氣の不潔さがすぐに感じられる。展覽會を見終つたら、壬生も私も可成りひどい頭痛を感じた。
午後は輕井澤の新築の相談で過した。夜、兩親とお話する。野の花を少しと「松蟲」を與謝野夫人に送る。「松蟲」を一部、時事新報の柴田に與へた。
「新潮」にのつた英夫の「お菊按摩」を讀む。
敏行が云つたのださうだが、彼は二三日の中に神尾に歸る豫定なので、彼は淋しくなる、だから曉子に度々訪ねてくれと頼んだとの事である。可哀さうな、可哀さうな、小さき者よ！
田中夫人、秋野及び足助に手紙を書く。
十月四日。水曜。雨。肌寒し。安子の爲に御供物を下さつた方々への、御返しの品物を送る仕事で、午前を費す。壬生馬の家へ、愛子と一緒に彼の繪を見に行く。そこで「新小說」の田中氏に遭ふ。同誌正月號に、ミレーに關する一文を草する約束をした。夜、足助、宮原來訪。十一時迄語る。足助は少し窶れた樣に見える。可哀想に！ 疲れ切つて居た。
十月五日。木曜。雨。今朝からドストエフスキーの「惡靈」を讀み始める。午後、母上と高島屋に行く。それから靴屋へ、そして青山へ。山王山を散策してから歸宅。
夜、私に好意を寄せて居る八木澤善次と云ふ人が會ひにやつてきた。彼は極めて率直な人間らしい。だが彼の中には幾分頑固な處がある。九時まで話して行つた。
中條孃の「貧しき人々の群」をかなり興味を持つて、少し讀む。年は十八だとの事である、農夫の社會の取扱ひ方には、多分の聰明さと洞察力が見える。

十月十五日。日曜。雨。非常に長い事雨が降り續けてゐる。人を氣狂ひにする程の雨だ。

今朝、私は北海道に孤獨の旅をする事を決心した。行光は、パパは今日北海道に立つて、明日向うに着いて、明後日歸つてくると云つた。行三は少し風邪を引き、烈しく咳をしてゐる。可哀さうだ。彼に別れを告げた時、父の眼には涙の玉が少し浮んだ。毅一及び戸川が上野驛に見送つてくれた。

我孫子で下車し、柳を訪れた。家は大變賑かだつた、そして子供達の外に志賀と武者小路の家族が集つてゐたのには驚いた。彼等は皆歡んで迎へてくれた。柳は支那旅行の話をして、美術骨董品を澤山見せてくれたが、中には美しいものがあつた。志賀は先頃、彼の始めて生れた兒を亡くした。私は彼及びその妻に非常に同情した。

二時頃、其處を去り、二時三十八分の汽車で水戸に向ひ、五時少し過ぎに着いた。南町の芝田屋本館。

私はメーテルリンクの "Our Eternity" を借りた。私はルナンの "Life of Jesus" 及びメーテルリンクの "Burried Temple" を持つてきた。

此處へきた目的は Miss Sharpless を訪ねる事であつた。併し今日は日曜なのに氣がついたので、面會を明日に延ばした。厭な事には、雨がまだ降り續いてゐる。

十月十六日。月曜。雨は明方にやんで、夕方の七時まで天氣。

朝、人力車を雇つて、偕樂園に行つた。この園は櫻山、谷間の稻田（黄金色に實つてゐる）、東京への舊街道、及び手賀沼を見下ろす丘の端にある。杉や樫の年經た木立が、美しい。庭に弘文亭がある。それは賢君と我々が呼ぶ人々によつて建てられたので、印象に殘るものだ。門番が私をつれて廻つた。三階には下から食物を運ぶリフトがあつた。彼は之は昇降機であつて、現今、英語でエレヴェーターと呼ばれるものだと言つた。茶屋は最も優雅にできてゐる。

それからシャープレス孃の處へ。彼女は極めて下手なオルガンを彈いてゐた。續けさまに呼んでも、氣がつかなかつた。不思議な訪問者が私だと氣付いた時、彼女は大喜びであつた。暫く愉快な談話。それから又、宿屋へ。

古城（唯一つの櫓が殘つてゐる、その銅の屋根は見事に錆びてゐた）、及び他の建物（弘道館、孔子廟、陳列所、圖書館、學校）を見物してから、十一時五十八分の汽車で青森に向つた。

メーテルリンクの "Our Eternity" を面白く讀んだ。仙臺に七時頃着いたが、又雨が降り始めた。其處で一時間程待つて、汽車を乘り換へた。出ると突然、農大豫科の第二回の卒業生の一人にあつた（名は失念した）。彼は今、家庭で農業に精出してゐる。彼が五年前に始めた時は畠を僅か五町しか持つてゐなかつた。今や彼は二十町の地主で、純收入が二百八十圓程に達してゐる。〔此處に農業經營の實況談あり、略す〕

翌朝の五時少し過ぎ、淺蟲に着いた。

十月十七日。火曜。東の空が晴れ渡つてゐる。誘惑する如くに私をぢつと見つめてゐるかと思はれる、一きは光り輝く星を見守つた。それは安子を思ひ出させた。こらへてゐた熱い涙が流れ出た。すると西の空から、强風を伴つた眞黒な雲が出てきて、頭上を蔽つた。東奥館に入つた頃は、風雨がひどかつた。汽車に乘つて旅を續ければ、いやでも狩太に着かねばならぬので、わざと中途で下車した。

東奥館は氣持よかつた。浴場は素敵だ。窓から見た海の眺めは可成り壯大だつた。工藤兼彦？（札幌女學校々長）氏に偶然會つた。〔此處に挿繪あり略す〕

二時の列車で青森に向つた、青森の驛で、住友夫婦に會つた。五時半、比羅夫丸に乘船。舟路は稍〻荒れた。函館の埠頭は大變よくなつた。隨分寒くなつた。低くかゝつた半月は恐ろしい血の樣な色をしてゐた。十一時頃、汽車に乘つた。

十月十八日。水曜。稍〻風、半ば晴。狩太に八時頃着く。吉川が驛に出迎へた。四邊の秋の葉、こよなく美し。花ちやんが家に歸つてゐて、私の世話をしてくれた。昨年の四月生れた兒は大變丈夫で大きくなつてゐた。午後曾我來訪。夕食後、晩くまでゐた。ぐつすり晝寢をし、夜も安眠した。

十月十九日。木曜。快晴。暖かい。吉川も一緒に、第二農場に行く。小作人は十二人ゐる。可成りにやつてゐる。宮田農

場を訪ふ。宮田は土地をすつかり札幌の金貸に賣つて了つた。もつと詳しく云へば、彼の所有物は金貸に抵當として沒收されたのである。一般の狀況は憐れにも無氣力に見える。二百五十町步の野は秋の日光の下に、あらはに横はつてゐる。家は貧弱な外觀をしてゐて、何時なんどき崩潰するかもわからない樣な氣がする。

すつかり疲れて、夕方家に歸る。泡鳴の「古神道大意」を、大變面白く讀んだ。彼は彼の主義に强い確信を持ち、それを明瞭、的確に表現し、自己の思想を十分咀嚼してゐる事を示してゐる。彼が云はうとするところを、もつと詳細に硏究してみたくなつた。

十月二十日。金曜。今日も晴れ、氣持よい天氣。終日、第一農場の小作人五十八名を訪ねるのに費す。山森仁太郞を訪ねた時、彼の十四歲くらゐの少女に會つた。彼女の眼が私の眼と出會つた時、彼女は顏を赤らめた。處女のつゝましさは、見るからにうつとりさせられた。その上全く申し分のない容貌と、可愛いゝ表情をしてゐた。私は深く惹きつけられた。そして彼女のその後の生涯を靜思した。多分、若い亂暴者が彼女に目をつけ、我が物にしようとしてどんな事でもするだらう。いやいや、兩親は彼女を此處の製麻工場に女工として送るだらう。其處では粗野な勞働者達が彼女をものにする爲にはどんな事だつてするだらう。さう考へると、ぞつと身震ひがした。必ず待ち構へてゐる此の恐ろしい罠から、彼女を救ふ端緒はないものだらうか。

農場の一般の狀況は、第二農場よりもずつと惡い樣である。

夜、「古神道大意」を讀む。

十月二十一日。土曜。〔省略〕

十月二十二日。日曜。〔省略〕

十月二十三日。月曜。曇り。風あり。〔發信者名、受信者名列擧しあり、略す〕

二時四十三分の汽車で札幌に行く。正八時札幌着。佐山は親切に歡迎してくれた。旭館に投宿。彼は十時半迄話して行つ

た。隣りの部屋の騒がしさの爲、安眠できず。

十月二十四日。火曜。朝から雨。朝、佐藤學長、木村、鈴木、及び池田を訪れる。それから竹崎、二人で「人生、如何に生くべきか」との重大問題に關して、十二時まで話した。彼は私を說得して、彼の信仰を奉じさせやうとした。併し、彼の熱心は別として、彼の議論は私の心底には觸れなかつた。

それから豫科に行き、渡邊、青葉、池田、高杉、ゲンチ、竹原等々に會つた。不思議な涙が浮んできた。それから、橋本、新島、田中、宮部、半澤、星野及び庄司に會ふ。

佐山の處で晝食してから、宮部博士の處へ行く。そこで私は松本の祕密のロマンスを告げた。

旭館に歸ると、渡邊と橋本の來訪を受けた。

父上が御手紙で、信子の復歸を可成り詳細に書いて來られた。父上が此の事件について感ぜられた喜びと安心が、この手紙の中に、感動的な程現はれてゐる。

十月二十五日。水曜。天氣は非常に晴れて、少し風はあるが暖くなつた。

早朝、旅館の周りを散歩し、安藤が自轉車で牛乳を配達してゐるのに會つた。彼は今、北海中學に學んでゐて、來春卒業する筈である。

朝、丸井に黑百合會の展覽會を見に行く。可成りよく描いてゐたものもある。晝近くまで其處に居た。

晝食後、岡田教授來訪。それから私の家に行く。入口で末光教授に會つた。本橋は其處で私を迎へる準備をしてゐた。家はその頃のまゝだ、唯、少し汚ない。生れてからこんなに深い悲しみを經驗した事はなかつた。凡ての過去は眼前に、確乎たる、恐ろしい現實として立つてゐる。それは然し、決して取り戾す事はできないのだ。あゝ、過去！　凡ての物は過ぎてゆく！　凡ての物は深い、悲しい神祕で被はれて、必然的に眼前に表はれて來るのだ。私は遂に、夥しい過去を後にし、眼前には些かの未來の光もなく、この現實に立脚しなければならなくなつたのだ。

しかも私は私の現在に一切の過去と一切の未來を包括し得る。現在は此處にあり、今日は此處にある。其の中には結果がある、そして其の中には希望がある。現在の私の中に、具體的な過去と、あらはな未來とが、しつかりと把握できる樣、私の現在の生活がもつと緊張し、もつと集中されますように！

宿に歸ると、井上及び牧內きくのが訪ねてきた。それから有合亭の同窓會に出席する爲、行く。星野、石澤、井口、半澤、莊司が出席した。八時半まで話した。佐藤孃が歸りを待つてゐた。

松本に面會した結果を彼女に話す。私が明かした結果を、彼女は豫期してゐたかの樣だつた。彼女は隨分感じの鋭い娘である。併し、どう云ふ譯か、彼女は私に餘り訴へる處がない。彼女の中には技巧的と見える或る物がある。

確乎たる、滿足した生活。それを、私の目的とせねばならぬものである。この目的を以てひた向きに前進せよ。然らばその結果はどうあらうと恐るゝ所ではない。

雨は降りみふらずみ、人をして素直に落葉期の來た事を思はせる。

十月二十六日。木曜。殆ど晴。朝、大島來る。それから五番館に行く。あの娘がまだ其處で働いてゐるのに會つた。今では大變肥つてゐる。それから私の家に行つたら、松原と本橋が來てゐて、晝まで居た。それから、渡邊、武者、及び大熊を丸井に連れて行く。次に宮部博士の處へ行く、私の外に、竹崎、末光も招かれた。私は寧ろあからさまに佐藤孃の事件を話し、竹崎を非難した。旭館に歸つたら、その婆さんと堀元ちよがゐた。彼等は泣きに泣いた。〔此の次に受信者の氏名あり、略す〕

十月二十七日。金曜。晴。朝、私の家に行く。其處へきくのが會ひに來た。夕方一正亭へ、英語の教授等と夕食を共にしに行く。高杉博士、木村及び末光が集つた。それから夜學校へ行き、子供等に話をした。彼等は熱心に私の話を聽いた。すつかり疲勞して宿に歸る。吉川が此の夜、狩太から出てきた。

十月二十八日。土曜。又も晴。家に行き、今夕やらねばならぬ講演の準備を一生懸命にやる。コラーの處で晝食。病弱の

男の子は大きく可愛くなつた。それから宿に歸り、大熊の家へ夕食を共にしに行く。彼の新妻に會つた。また、文武會倶樂部に行き、生死に對する私の見解について講演した。それから本科一年級の會合。

宿に着くと、佐藤孃が私の歸りを待つてゐて、十一時まで話した。彼女は、どんな邪魔が入らうとも、結婚する心構へをしてゐると云ふ事を松本に知らせたがつてゐた。併し松本が、たとへ外の者と結婚はしても、彼女とは結婚する意志がないのを知つてゐるので、私は一切の希望を抛つよう、斷乎として彼女に勸めた。

十月二十九日。日曜。夕方札幌を去る、豫期しなかつた澤山の人々が驛に見送つてくれた。

十月三十一日。火曜。朝、七時頃東京に歸り、父上がまだ腸がお惡くて困つてゐられる外は、皆元氣で丈夫だ。

十一月八日。水曜。雨。可成り健康に惡い天氣。父上は昨夕御歸宅後、お吐きになつた。それで醫者に診て貰ふ事におきめになつた。今朝、父上を長與胃腸病院にお連れした。院長の平山博士は、診察後、父上の御病氣は癌が幽門を侵してゐる爲に起つた樣だと告げた。私は極度に驚いて了つた。此の事實を父上にも母上にもお話する事ができなかつた。

本當を云ふと、自分の仕事を心ゆくまでする爲に(良心にかけて、他の目的あつてゞはないが)、ひそかに父上の死を希望してゐた。併し此の由々しい知らせを聞くと、父上の生命に對する私の態度は、すつかり變つて了つた。私は唯父上の恢復を願ひ望む許りだ。神よ！　其は餘り殘酷すぎます。殘酷すぎます。

第十九卷

一九一七年（大正六年）

懷中日記（懷中日記としての性質上、單に記憶の爲にのみ記された文字あれど、内容と重複する際はこれを省く。主として英文なれども間々邦文あり、編者。）

一九一六年の覺え書。――主に東京に住む。安子及び父上死去。歐洲大戰。

一月二日。（火）――父上三十日祭。

一月四日。（木）酒匂の山本の處に、母上及び子供等に會ひに行く。蔦屋宿泊。

一月五日。（金）河野、志賀及び有島を訪れる。有島の處で山田及び木下に會つた。河野の處で、愛子の夫及び新渡戸こと子に會つた。十一時半歸宅。

一月六日。（土）〔省略〕

一月七日。（日）――父上三十五日、片桐禪戒師の來る日。

湯池來訪。原來り、足助と共に一泊。談盡きず。瀨脇夫人及び本庄孃に手紙。

一月八日。（月）〔省略〕

一月九日。（火）快晴。「受難者」を通讀。原、夕方來り、彼及び英夫と自笑軒に行く。入山にボーナスを現金で渡す。

一月十日。(水) 母上に御手紙。英の處に一子誕生。安藤の處に、二日に死去した好子の悔みに行く。それから佐藤夫婦と共に父上の墓に詣る。午後神尾の父を訪ねて、毅一と八十島孃との婚約の承諾を得た。

一月十一日。(木) 晴。寒し。熱海に少し品物を發送。十時頃、國分夫人が來た。夕方、隆三夫婦が夕食を共にしに來る。毅一が夜來る。カヲルに手紙を書かせよう。柳浪の「今戸心中」を讀む。

一月十二日。(金) 尺氏に返事の事。雪曇り、だが晝頃から晴れ渡る。新渡戸孃から手紙。瀧の川學園を訪ねたが、園長に會へなかつた。父上の墓に參る。それから山内へ。ミレーの生涯について少し書く。

一月十三日。(土) 横濱火災保險拂込(四〇、〇〇〇)。朝の中　ミレーに就いて執筆。午後から夜へかけて、原田、宮原及び福田鼎の訪問を受けた。壬生は晩く歸宅。

一月十四日。(日) [省略]

一月十五日。(月) 快晴。風あり。朝のうちに神尾來り、安藤の嫁の話をしようと言ふ。午後、一緒に彼の新居に行つた。それから安藤及び森田へ。夜、救世軍へ行き、宮崎氏の話に傾聽した。それから森田へ行つたが、會へなかつた。

一月十六日。(火) 寒風。午後七時より銀座小隊にて講演。
昨日から又少し寒くなつた。花月旅館へ講演の準備に行く。夜、救世軍でトルストイの「神父セルギウス」について講演した。
茶話會。大變晩く歸宅。阪井が雨を侵してやつて來た。宮原の爲に、佐藤氏に何か職を賴んだ由。

一月十七日。(水) 寒い。片桐禪海來る。
森田氏來り、片桐について話す。角田夫人から手紙來り、彼女は子供達の世話ができると思ふと云つてきた。午前、山本がきた。そして日本倶樂部に於ける僧侶の秋野の講演に出席した。

一月十八日 (木) 午前雨、寒し。午後から快晴、暖く風あり。

逗子にきて、角田夫人の事を永山に尋ねた。それから湯池へ、また、御園孃へ。八時に歸宅。これで氣が濟んだ。非常に疲れた。

一月十九日。(金)　晴。熱海へ來た。皆元氣で丈夫だつた。夕方、子供達を散歩につれてゆく。熱があつて、夜よく寢られぬ。

一月二十日。(土)　晴。熱海。松方、高橋、野村、伊地知、伊勢池〔?〕及び原を訪ねる。子供達をつれ、梅園へ長い散歩。

一月二十一日。(日)　晴。今日、行及び敏と歸る。信子、曉子、及び行三が私達を驛に見送つてくれた。夕方歸宅。修道僧の片桐が今朝來たさうだが、壬生はその無作法を譴責してゐる。

一月二十二日。(月)　晴。父上五十日祭。朝、墓へ壬生と共に行く。四時に神尾の兩親、山本夫婦、壬生、高木、佐藤夫婦、英、健助及び飯田が祭典に來た。三河屋で夕食。今朝、行郎から手紙。

一月二十三日。

一月二十四日。　〔兩日共省略〕

一月二十五日。(木)　晴れては居るが寒い。

瀧の川學園で石井に會ふ。彼の考へでは、佐藤は此の保護院には適してゐないとの事である。それから石川、坂本、尺、神尾及び國分へ行く。夜、宮原來訪。佐藤へ手紙。

一月二十六日。(金)　行光と敏行が風邪をひいた。

一月二十七日。(土)　晴。近藤、島津、命尾、飯島、飯田、新渡戸、及び松平を訪ね、それから伊地知大將の葬式へ。足助來り、夕食後迄ゐた。行光が風邪にかゝり、一日中閉ぢこもつてゐた。新渡戸夫人とこと子孃に關して不愉快な話。

一月二十八日。(日)　風あり。行光は少しよくなつた。河野夫人、吹田、原及び三澤へ手紙。父上の藏書と着物を近藤氏に送る。父上死去に際し、お悔みして貰つた人々へ御禮を述べに廻つた。

一月二十九日。（月） 快晴。寒し。御禮を述べに廻る。佐藤から手紙を受取つた、彼女はどうしたらよいか判らぬ難境に、又も陥つたと知らせてきた。可哀想に！

一月三十日。（火） 晴天。寒氣きびし。諸方訪問に忙し。今日神尾大久保に轉居。

一月三十一日。（水） 快晴、寒し。明日日英水電の拂込み、夕六時より新渡戶氏晩餐。

毅一來り、暫く話して行つた。諸所訪問。箱根の小さな噴火。河野夫人から新渡戶孃と私の結婚を勸めた手紙來る。馬鹿な！ 新渡戶家の晩餐を斷つた。

一月の思ひ出。

○佐藤孃の事。

○父上の五十日祭。

○財產の分配。

○神尾の移轉。河野夫人から結婚の提議。

○トルストイ（レオの三男）の來朝。

○ヴェルハーレンの死。シェンキウィッチの死。

二月一日。（木） 晴。日英に拂込む。二兒の健康は餘りよくならない。安井氏を訪ひ、畫を二點買つた。隆三夫婦及び英夫來る。敍行の熱は今夜大變昇つたが、朝方になつて下つた。

二月二日。（金） 甚だ快晴、氣持よし。藤井氏の訪問を受ける、それから墓へ、次に長谷川へ。山本の家で生馬と食事した。私はNを輕蔑した。私を煽てること甚し。それから神尾へ行く。子供達は可成りよくなつた。佐藤、河野、及びきくの

へ發信。きくの、千代等から來信。

二月三日。（土）晴。少し暖い。森、志賀及び田中の訪問を受けた。志賀は私に河合嬢の事件を話した。甚だ興味があつた。午後神尾の父上御來訪。壬生は熱海へ行つた。

二月五日。（月）〔邦文〕午後零時半學習院に行光を伴ひ行く事。

二月六日。（火）母上と子供達は熱海から酒匂に行つた。行光の乳齒が拔けた。

二月七日。（水）晴。行光と敏行は床上げをした。朝、神尾へ、毅一の事で行く。佐藤博士、宮原博士、永山及び松原に手紙。札幌の家は大學の學生達が入つた。新小說の原稿を書くのに忙しい。母上へ手紙。

二月八日。（木）晴。朝、飯田來り、遺言の事務處理。行光は學習院に入り損ねた。飯田は夜までゐた。

二月九日。（金）少し曇り。朝、下町に行き、電氣のバルヴを熱海に送つた。それから山內へ行く。勉强の爲に、平河町に部屋を借りた。午後から其處へ行く。飯田が午後來た。

二月十日。（土）ミレー評傳を「新小說」に送る事。

二月十一日。（日）晴。事務所に行き、四時まで居る。山內へ行き其處で愛子に會つた。ロダンに關する一論文が讀賣に出た。

事務所に行き、四時まで仕事する。夕方、山本及び兄弟の親睦の集り。大騷ぎ。

二月十二日（月）曇。夕方より雨。午前、飯田來る。神田橋稅務署に遺產相續屆を出す。事務所に行つて四時半まで一心に仕事。母上及び高村から來信、直ちに高村に返信。

出た。足助が夜來た。元氣がなかつた。

二月十三日。（火）午前十時區役所に出頭の事。

「新小說」への文章「ミレーの生涯」を書き終へた。朝、事務所へ行く。午後、春陽堂に行く。夕方、休息した。敏行は又病氣になつた。

二月十四日。(水) 晴。事務所に行つて夕方まで働く。夜、山内夫婦來る。
母上及び河野、佐藤兩孃に發信。
二月十五日。(木) 大變上天氣。散髪する。敏行をつれ、下條博士の處へ行く。氏の考へでは、彼の健康はひどく衰へてゐるとの事。午後から神尾へ行く。彼等も此の知らせに驚いた。大學へ、壬生の描いた山極教授の繪を見に行く。山本を東京驛に見送る。
二月十六日。(金) 午後一時田中純氏を待つこと。朝、晴。午後から曇る。
事務所に行き、「イエスの生涯」を讀みつゞける。晝食後、田中氏に會ふ爲に歸つた。だが彼は來ない。Jefferson Jone の "The Fall of Tsingtao" を讀む。田中は夕方來た。
二月十七日。(土) 曇り、寒し。行光と敏行を下條博士の處へつれてゆく。氏の診察では、行光の方が敏行よりいゝ。三越に少し買物にゆく。夜、神尾の兩親來訪。
二月十八日。(日) 曇り、寒し。別に何もせぬ。"The Fall of Tsingtao" を讀む。夜、文藝座で長與の「畫家とその弟子」を見る。實に、實にいゝ。壬生は熱海へ行つた。隆三へ手紙をかく。
二月十九日。(月) 晴。風あり。十時十七分の汽車で熱海へ、行光と敏行を連れて行く。五時熱海着。皆元氣だつた。
二月二十日。(火) (省略)
二月二十一日。(水) 晴。風止む。午前、梅園に散歩。附近に鐵道敷設中。午後、海岸散歩。樂焼を試む。
二月二十三日。(金) 十時四十五分の汽車で熱海を去り、東京に四時半着。手紙が數通來てゐた、その中には本庄孃から一人の娘を私に推薦してきたもの、及び原から一通、行郎から一通。
二月二十四日。(土) 風なく、晴。少し暖くなつた。
事務所に行き、一日中ミレーの文章を校正して過す。夜、春陽堂へ原稿の事で行く。神尾の父上夕方御來訪。母上及び本

庄孃に手紙。

二月二十五日。（日）快晴。朝、增田を訪ねる。それから飯田へ行く、晝食のもてなしをうけた。午後、ラスキンの "Lectures on Art" を讀む。夕方から佐藤夫婦が訪ねてきた。

二月二十六日。（月）晴。事務所に行く。熱心にルナンの「イエスの生涯」を讀む。夕方、山內へ行き、高木に會つた。足助が訪ねてきて、一晩暮す。

二月二十七日。（火）とう〴〵こんな氣持のいゝ雨！　久し振りだ。吹田より手紙。山本を訪ふ。それから千葉へ、本庄孃と佐久間孃に會ひに行く。前者は江南文藏と婚約した。

二月二十八日。（水）雨。千葉から晝頃歸る。本庄孃、八木澤及び平澤より手紙來る。夜、帝國劇場へトリーのマクベスを見に行く。見事だ！

二月の思ひ出。

○ロダンが死んだとの噂があつたが、それは彼がペーアーズ孃と結婚した知らせの間違ひだと判明した。
○本庄孃が江南氏と婚約した。
○敏行の體質は肺病の疑ひが强いと診斷された。驚かされた。彼と行光を熱海に連れて行く。
○佐藤孃は家庭の或る事件に煩らはされて、保護院に入る希望を捨てざるを得なくなつた。
○ミレーに關する文章を「新小說」に送つた。
○歐洲では戰爭が尙も荒れ狂つてゐる。
○米國は獨逸に國交斷絕を宣言した。

三月一日。（木）快晴。横濱電氣拂込の事。午前、よし子と共に山本訪問。愛子と隆三の件に就いて相談。そこで陶器製造家と遭ふ。面白い男なり。それから事務所、土屋夫妻來訪。

三月二日。（金）晴。飯田が朝の中來る。彼と晝飯をたべる。「新小説」が出た。壬生の家族が熱海から歸つてきた。夜、宮原が來た。英が來た。「新公論」への戲曲を今日から書き始めるつもりだ。

三月三日。（土）晴。事務所に行き、「新公論」への戲曲「死」を書き始めた。非常に働いた。十七頁許り書いた。

三月四日。（日）朝、雨。午後から快晴。志賀に會ひに鎌倉に行く。共に散歩。英及び壬生の家族が二人を夕食に招待した。十時半まで話す。

三月五日。（月）晴。事務所に行く。午頃飯田が來たので邪魔された。上野の水彩畫展に行く。夜食は壬生馬の所で御馳走になつた。八木澤、澤田、市河來る。

三月六日。（火）〔省略〕

三月七日。（水）晴。午後二時帝國ホテル郵船臨時總會。

朝、父上の墓へ參る。俳優、藤澤の葬式を目擊した。晝まで仕事する。ひどく疲れて了つて、働けない。そこで山本へ行く。直忠が少し病氣だつた。飯田が熱海へ行つた。

三月八日。（木）晴。十五銀行を訪ねてから、事務所へ行く。午後から小池來り、夕方まで話す。夜、足助が來た。芳川伯爵の娘がその自動車の運轉手と心中。

三月九日。（金）事務所に行く。仕事進捗。

三月十日。（土）亞鉛電解株式會社拂込。

事務所へ行く。朝は大變暖かい。驟雨と雷が晝にやつてきた。母上が熱海からお歸りになるのを新橋へ迎へに行く。母上と子供達は大變元氣だつた。飯田が熱海で土地を大變安く買ふ樣に取りはからつたと報告してきた。

三月十一日。（日）曇り。少し風あり。一日中、香奠返しの仕事をしてつぶす。無駄な事だ！

三月十二日。（月）曇り。朝、香奠返しの仕事をする。母上は園田及び高木を御訪問。宮原から手紙で、喀血したと云つてきた。氣の毒な事だ！　夜、ホイットマン。

三月十三日。（火）快晴。菊池來る。

父上百日祭。神尾、山本、高木、有島、園田、飯田等が來た。朝、阪本、尺、及び神尾へ行く。式は莊嚴に執行された。夕食を共にした。

三月十四日。（水）雨。午後三時寶生九郎葬儀、青山齋場。事務所に行き、夕方まで仕事。夜、再び十一時まで仕事。

三月十五日。（木）雨。朝、大森へ數日來病床に居る宮原に會ひに行く。幾分よくなつてゐた。午後から、事務所で仕事。

三月十六日。（金）晴。朝、山本へ行き、それから事務所へ行く。木村から彼の學校の卒業式に講演してくれとの賴みを受ける。承知したと書いてやる。夜、二時半まで一生懸命に仕事した。

三月十七日。（土）大變寒く、風あり。事務所で仕事する。夜、二時まで床に就かなかつた。ロシアに革命起る。皇帝は退位した。太公が獨裁者の稱を得た。

三月十八日。（日）大きな地震が朝の中にあつた。併し天氣はすつかりよくなつた。

足助と一緒に子供達を根岸及び花月園へ連れて行く。馬場を照らす日の光は、可成り壯麗だつた。手紙を行郎、竹崎、木村及び原に出す。

三月十九日。（月）雨。朝、奧園來る。午後から神尾、飯島及び田島訪問。夜、學生等にホイットマンの講義。

三月二十日。（火）菊池來る。

三月二十二日。（木）雨。終日、家に居る。午後、丸善に行く。ロシアに關する本を二册買ふ。

三月二十三日。（金）雨。事務所に行く。ロシア革命について、朝日新聞の記者に話す。

三月二十四日。(土) 雨。朝、下町に買物をしに行く。午後、喜寛來訪。夜、「その妹」を見に行つたが、公演は延期だつた。それから堺枯川氏に會つた。いゝ印象。

三月二十五日。(日) 神尾へ子供達を連れて行く。それから足助の處へ行つたが、留守。夕方から、小倉孃の獨奏を基督教青年會の寄宿舍に聞きに行く。ショパンの曲が恍惚とさせた。歡喜に醉つて了つた。

三月二十六日。(月) 大體晴、風あり。朝、父上の墓に參る。それから中西屋へホイットマンに關する本を買ひに行く。午後から留岡氏を訪ひ、會ふ。夜、足助及び澤田が訪ねてきた。

三月二十七日。(火) 晴。風あり。旅行の爲、荷物をつくる。菊池が朝の中から來て、三時まで居た。馬鹿々々しい!

三月二十八日。(水) 晴。風あり。熱海に納税の事。

終日、旅行の準備をして過す。森氏に日程表(三十一日までは木村の處、そして三日まではあかまんや)を書いた手紙を出す。夜、七時の列車で神戸に行く。

三月二十九日。(木) 稍ゝ曇り。昨夜はよく眠れた。五時に起きたが、その時汽車は米原を通つてゐた。木村及び原が九時に驛に出迎へた。川崎ドック、新開地、神戸女學院を見物。それから明石に行き、人丸神社、古い城、岩屋神社、薦王山、長林寺及び丸松を見物した。

三月三十日。(金) 快晴。神戸市下山手通六丁目庭一田。女學院で講演。聽衆約五百名。可成り滿足を與へた。午後から原の家に行き、山腹を散歩した。蕾はふくらんでゐる。それから木村の處へ、次に料理屋へ。其處で私等(原、杉田及び木村)は十時まで話した。

三月三十一日。(土) 晴。午後小雨。東洋製糖拂込。

木村と再度山に登る。信仰について大いに論じた。午後、神戸を去り、大阪へ杉田と同行。常盤旅館(堂島裏二丁目)。天王寺、住吉神社、千日前及び心齋橋筋を見物する。大變よく寢た。

三月の思ひ出。

○ロシアの革命。ロマノフ家の沒落。

○父上の百日祭。

○母上と三兒は熱海より歸宅。

○米國歐洲大戰に參加、獨逸に宣戰を布告した。

○神戸女學院で講演の爲に、神戸に旅行。

四月一日。（日）快晴。朝、江崎を訪れる。それから少し畫を描く。すると杉田來り、一緒に文樂座に毛谷村六助及び心中天の網島を見に行く。後者は殊によかつた。宿に七時半頃歸る。都會から遠ざかりたいとの衝動が非常に強くしきりなしに襲つて來る。

四月二日。（月）晴。稍〻靄あり。大阪城及び造幣局の見物。江崎叔父のお蔭である。瓜花亭で晝食。三越を見る。箕面に行く。夜は江崎から夕食にみどり（南地法善寺內）へ呼ばれた。それから樂天地へ行く。宿に晩く歸る。熟睡を得ず。

四月三日。（火）曇り。午後、小雨。朝、大阪を去り京都へ。それから丸山へ行く。午後、先帝の御陵、黃檗山及び宇治へ。宇治に着いた時、雨が降り始めた。風景は可成り恍惚せしめるものがあつた。晩く宿に歸る。夜、散步。京都四條繩手あかまんや井上ちが。

四月四日。（水）快晴。稻荷を振り出しに、我々は東山の名所を澤山見物した。瓢亭で晝食。午後、電車で大津へ行き、石山及び三井寺を見る。兩者とも私を大いに喜ばせた。此の夜、杉田は御影へ歸つた。植村で夕食。

四月五日。（木）晴。ひどく暖かい。大島が會ひにきた。一緒に出かけ、大學、相國寺、同志社等を見る。それから嵐山

へ行き、千鳥で晝食。午後は御所及び二條城を訪れる。此の夜八時二十分の列車で東京に向つた。汽車は大變混んだ。よく眠れなかつた。

四月六日。（金） 八時三十分東京着。家では皆元氣で丈夫だつた。明日の謠會の準備。英夫夫婦が來た。夜、下町へ子供達に玩具を買ひに行く。大變暖かくむし〳〵する。手紙が澤山。

四月七日。（土） 暖かし。曇り、風あり。午後一時から父上追悼の謠の會。師匠の命尾氏及びその弟子が集つた。約二十二人。夜まで續いた。すつかり疲れた。行郎その他から手紙。

四月八日。（日）〔省略〕

四月九日。（月） 快晴。神尾から食事に呼ばれた。宮原及び吹田から原稿來る。宮原のは大變よかつた。吹田のは全く失敗の樣だ。

四月十日。（火） 朝、末光及び足助來る。三河屋に夕食を喰べに行く。十一時まで話した。

四月十一日。〔省略〕

四月十二日。〔省略〕

四月十三日。（金） 雨、涼しくなる。「新公論」への文章を書く。山本が來た。手紙を本橋に書く。

四月十四日。（土） 曇り。朝は家具の備へ付や寫眞の調べで過す。午後、鳴雪祝賀會に出席した。花筐は美しかつた。「新公論」の森氏來訪。

四月十六日。（月） 朝は雨。柄内夫人が死んだ。午後、出雲大社へ他の人の靈と共に父上の御靈を合祀する儀式に參列した。野村を訪ねる。山本の事について近藤に招かれた。

四月十七日。（火） 曇り。朝早く山本を訪ねる。朝、神尾へ行き、郵船會社の社員として小樽に出發する毅一を送つて上野停車場に行く。午後、青山へ行く。行光が今朝から病氣でねてゐる。熱がある。

四月十八日。（水）天氣よし。午前は家事や壬生及び英夫の作品を讀んで過す。午後、農商務省に行く。それから築地の方へ散歩。まさが洋一を連れてやつてきた。彼女は彼を山王神社へつれて行つた。英夫がきた。夜、原田が會ひにきた。

四月十九日。（木）いゝ天氣。朝、直良が來た。彼は郵船會社の監査役になつた。行光の病氣は大變によくなつた。午後、築地の方へ散歩する。夜、足助と原田來り、十時半まで居た。宮原から原稿が屆いた。

四月二十日。（金）晴。野津、野村に視物をする事。大阪城の攻圍を終日研究する。夜、原田夫妻が訪ねてきた。大阪城の事を話す。原田夫人は甚だ內氣な女である。我々が訪ねて行く時、持參しようと思つたので、野津へは贈物を送らなかつた。

四月二十一日。（土）晴、風が烈しい。朝、父上の墓へ參り、それから安藤及び佐藤を訪ねる。午後は大阪の役の研究。

四月二十二日。（日）朝、天氣がいゝので、四兒を井の頭公園に連れて行く。三河屋で食事した（私の好きな娘が給仕した）。家に歸つてから、ホイットマンを讀む。それから宮原來り、八時まで居た。

四月二十三日。（月）晴。風あり。朝、園田氏の處へ行き、私の今後の生活について話す。それから八十島へ行き、毅一とマツ子の事について色々相談した。午後、帝國劇場へ坪內氏の「桐一葉」を見に行く。足助と原田に其處で會つた。馬鹿馬鹿しいものだ。夜、ホイットマンの講義。

四月二十四日。（火）雨。寒くなつた。朝、新渡戶博士を訪ねたが、留守だつた。それから神尾に行き、毅一の事についてゆつくりと談じた。甚だ有望な返事を得た。それからロバートソン・スコット氏夫妻に會ひに行く。二人とも賢い人だが、餘り私には訴へて來ない。

四月二十五日。（水）晴、風あり。行光は午後から又も熱を出し始めた。スミスが東京の空を飛んだ。夕方、宮部博士來訪。一緒に茶寮に行く。靜かに話した。歸宅したら小日山が待つてゐた。胃の痛みはまだよくならない。

四月二十六日。（木）〔省略〕

四月二十七日。（金）博多灣配當を受け取る。

行光が學校から歸つてきたら、身體の具合が惡いとぶつ〳〵云つた。醫者は痲疹だと診斷した、熱は可成り高い。他の二兒は百日咳にかゝつてゐる。そこで私は彼等を逗子の蓑神亭へ、午後から連れて行つた。曉子も水痘を患つてゐる。夕方から雨が降り始めた。

四月二十八日。（土）烈しい雨と風。スコット氏の論文を飜譯。千代田女學校の生徒等が雨の中をやつて來た。級長の泉と保坂に會つた。行三は午後、少しぢれてゐた。夜、雨はやんだ。併し、風は一晩中烈しく吹き續けた。

四月二十九日。（日）快晴。併し風あり。寶生謠會。

逗子から七時二十八分の汽車で歸る。スコット氏を訪ねたが、會へなかつた。行光は痲疹でひどく苦しんでゐた。「ニュー・イースト」の論文の飜譯を一生懸命にやつた。

四月三十日。（月）入山炭鑛會社株代金請取の事。

朝早く小久保を訪ひ、毅一の事について語る。飜譯をやらうと努めたが、斉生、できなかつた！ 全く厄介なのは家事だ。夜、一時すぎに起き、明方までやる。今日、神尾の父上が二兒を見舞に逗子へ行つて下さつた。

四月の思ひ出。

○月の始めは大阪及び京都に滯在してゐた。

○毅一は郵船會社の社員として小樽へ行つた。

○「死と其の前後」が「新公論」の五月號に發表された。

○「ザ・ニュー・イースト」の J. W. Robertson Scott と交際し始めた。

○內閣(寺內首班)は衆議院の總選擧に勝利を得た。

○直良が郵船會社に入つた。

○行光が痲疹をわづらつた。
○敏行と行三は百日咳のため數日逗子に行つた。

行光體格		同年者平均
身長	三・六八	三・六八
體重	四・九〇	四・二九
胸圍	一・七九	一・七八
强		

五月一日。（火）晴。事務所に行き、終日働く。仕事終了した。私の戲曲が「新公論」に出た。行光の病氣は頂上に達し、ひどく苦しんでゐる。

五月二日。（水）晴。風あり。朝、土屋氏が新しく設立された會社の株を少し買つてくれと頼みに來た。午後から下町に行郎の爲に買物に行く。夜、Yへ食事をしに行く。毅一の事は遂に破談になつて了つた。彼女の父は素氣なく申し出をはねつけた。行光は大變よくなつた。

五月三日。（木）曇り。朝、神尾へ行き、母上に八十島の家であつた事を殘らず話す。母上は驚いて居られた。毅一に手紙をかく。夜、宮原が來て、行光の熱が又高くなり、ひどく苦しんでゐるのを知りながら長い事話して行つた。

五月四日。（金）一日中雨。朝、宮原さきと云ふ女から手紙が來て、私を愛すると斷言し、面會を要求してきた。返事の手紙をかく。エヌ・オヤイブ〔?〕來訪。隆三が來て、花の種を少し植ゑてくれた。武者から私の戲曲を賞めた葉書を受取つた。父上の墓へ參る。東京病院へ行く。

五月五日。（土）晴。美しい天氣。英が京都から歸つてきた。神尾の父上は逗子から。夕方、代々木練兵場の方へ散步し

た。實に美しかつた！　毅一からりん子からの手紙を封入した手紙を受取る。行郎へ手紙。憂鬱だ。

五月六日。（日）　松方公爵へ內大臣就任のお祝ひに行く。それから山本へ。三時頃歸宅。行光は熱がなくなつた。夜、藝術試演場へ武者の戲曲「惡夢」を見に行く。失望した。

五月七日。（月）　降りみ、ふらずみ。午後からスコット氏の處へ行く。其處で柳に會ひ、それから鐵道協會へ狩野芳崖の展覽會を見に行く。夜、ホイットマンの會。十時半まで話す。佐藤學長、原その他へ手紙。

五月八日。（火）　晴。風あり。午前は怠けて過す。午後、三越へ岩手の物産を買ひに行く。菊池が謠をしに來た。夜、始めて神近市子に會つた。私の印象は大して惡くもなく、大して良くもなかつた。

五月九日。（水）　〔省略〕

五月十日。（木）　朝、新橋停車場へ壬生馬と共に、八十島を見送りに行く。それから春陽堂の人が、私と生馬と英と三人一緒の寫眞を取りに來た。神近孃から手紙。

五月十一日。（金）　敏行と行三は逗子から母上と共に歸京。私の作品、「お末の死」及び「死と其の前後」の出版を洛陽堂と契約した。神近孃から手紙。

五月十二日。（土）　朝、原稿の修正をする。午後、母上と島津家へ、屋敷と蒐集品とを見に行く。下らない。それから山本へ。

五月十三日。（日）　朝、「新潮」への文章の腹案を考へて過す。スコット氏の宅で晝食。其處でケイス孃に會ふ。四時半頃まで居た。

五月の思ひ出。

○「新潮」に「惜みなく愛は奪ふ」を寄稿した。

○ザ・ニュー・イーストに "Love, the Plunderer" を寄稿した。

○神近孃との交際が始まつた。

六月十六日。（土）　晴。新潮への寄稿終る。本橋が夕方來た。夜、生馬の家へ。英夫が四谷に地所を買はうと提議した。

六月十七日。（日）　九段能樂堂、能樂會。〔以下省略〕

六月十八日。（月）　朝から夜まで曇り。朝、有島氏に會ひに本橋と共に行く。平野屋で晝食。それから高木へ。次に尺夫人訪問。山本で夕食。宮原が夜訪ねてくる。彼と佐藤孃の事を話す。夜、飯田が來る。

六月十九日。（火）　一日中雨。文部省に行く。大臣が遲く來た。相談をする。午後、一高へ行く。其處で後藤に會つた。それから神近孃に會ひに行く。會へなかつた。夜、雨が烈しく降つてきた。神近その他へ手紙。

六月二十日。（水）　朝の中、曇り。朝、墓へ參る。それから又神近孃に會ひに行つたが、彼女の歸りを三時間程待たねばならなかつた。漸く歸つてきた。我々はかなり無味乾燥な話をした。それから文部省へ行く。夜は讀書して過す。妙に性的興奮を覺える。

六月二十一日。（木）　朝から雨。朝、佐藤孃の贈物、鈴蘭が屆いた。母上はそれを靑山に持つて行かれた。文部省へ七時半頃行く。體格檢査。「思潮」第二號を讀む。ケーベル氏の論文に非常に興味を覺えた。田邊の「最近科學の進步」を買ひ、少し讀む。

六月二十二日。（金）　雨。入學試驗。夜、八木澤來る。體格檢査終了。スコット、足助、佐藤孃、神近へ發信。午後から一高に行つて事務をとる。スコット夫人及び春陽堂の田中氏より來信。

六月二十三日。（土）　曇。朝、高等學校へ行く。原及び神近から手紙。一高の生徒等が夕方來て、十一時まで話した。我我は二十九日に玉川に遠足に行く事にした。シャープレス博士から手紙。

六月二十四日。（日）　夕四時より舜三招待。〔以下省略〕

六月二十五日。(月) 蒸し暑い。雨及び風。神近から手紙を受け取る。明夕彼女の處へ來るよう誘つて來た。英語の試驗。午後、林病院に毅一に會ひに行く。夕方から足助が來た。

六月二十六日。(火) 曇り。三角と物理學の試驗。佐藤博士から精養軒へ晝食に招待された。夜、スコット氏の處へ、晩食を共にしに行く。ウイングフイールド夫妻及び新渡戸夫妻が其處に居た。大變晩く歸宅。菊池が來た。

六月二十七日。(水) 曇り。アルツイバーシエフの "Slave Soul" を讀む。大變興味がある。夕方、神近嬢に會ひに行く。彼女は今夜は大變氣が利き、澤山の事を話した。夜更けて歸宅。

六月二十八日。(木) ひどく暑い。ぎらぎら輝やく夏が急にやつてきた。日中讀書。夜、壬生馬の處へ行き、十時半まで話す。帝國大學及び春陽堂から金を受け取つた。

六月二十九日。(金) 晴。足助、澤田、鶴見及び蠟山と玉川へ一緒に行き、まる一日を愉快に無邪氣に過した。

六月三十日。(土) 神近から手紙。彼女は「新潮」の私の文を正しく評價した。夕方、奥村氏が私を招待した。彼は大變美しい子供である。話して非常に愉快である。

六月の思ひ出。

○「新潮」へ「平凡人の手紙」を寄稿。

○「新小説」へ「カインの末裔」。

七月一日。(日) 晴々としたいゝ天氣。子供達を鎌倉につれて行く。大喜びだつた。夕方、德丸友熊(？)來る。それから川浪道三來る。神近から手紙。

七月二日。(月) 曇。山内へ行く。それから墓へ。安子の墓に百合が供へてあつた。中村星湖の私に對する批評が時事に

現はれた。それから下町に行き、文部省から貰つた金で丸善で本を少し買ふ、スコットの處に立寄つた。留守。

七月三日。（火）蒸し暑く風あり。終日家で過す。夕方、子供等を上野に連れて行き、其處で壬生馬と信子に會ひ、精養軒で夕食。大變涼しい。「白樺」所載の志賀の文を讀む。

七月四日。（水）風あり、蒸し暑い。夕方、市村座へ「名人長次」を見に行く。吉右衞門は素晴らしくよかつた。

七月五日。（木）〔省略〕

七月六日。（金）〔省略〕

七月七日。（土）風あり。蒸し暑し。十五銀行と正金銀行に、佛國國債に對し現金支拂に行く。午後、神近へ行く。夜、宮原が來た。

七月八日。（日）晴れて輝かしい天氣。山本へ行く。それから墓參り。山内の墓へも行く。夕方、毅一を見舞ひに病院に行く。歌舞伎座で一幕見た。

七月九日。（月）快晴。朝、ソログーブの作及びブランデスの「ニイチエ」を讀んで暮す。午後、馬場來る。夕方、足助來り、夜遲くまで話した。

七月十日。（火）朝、「太陽」の記者が來た。小說寄稿を承諾した。新潮が來て、本を出版させてくれと云つた。生馬は夜更けて熱海から歸つて來た。

七月十一日。（水）大變暑い。晴。朝、新潮（中根）來り、出版について相談した。夕方、山本から白人會の會合へ招かれた。馬鹿々々しいものだ！

七月十二日。（木）晴。ひどく暑い。八十八度。安子一周年。

五時に彼女の墓に參る。戸川が一緒に來た。既に植木屋がきてゐる。家の修繕。三時に、田島、園田、山本、高木、尺、神尾、國分その他の人々が式に列なる爲に來た。夜、富士見軒で晚餐。

七月十四日。（土）うつたうしく、暑い。午後、Kに會ひにその新居へ行く。一緒に散策する。二人の間に設けた垣をのりこえて了つた。恐ろしい自責の念が起る。事實、彼女に接吻せずにゐられなかつたのだ。恥かしい事だ！

七月十五日。（日）ひどく暑い。子供等を目黒に連れてゆく。夜足助及び宮原が來た。依然として自責の念。神近へ手紙。

七月十六日。（月）暑苦しい。夕方、雨。生き生きする。

午前、輕井澤へ引移る爲に、荷物の準備に暮す。午後、二科會の連中が生馬の處へきた。私も出て、彼等が描くのを見た。神近から手紙。

七月十七日。（火）十五銀行配當受取、擔保預け書換。

一日中、旅行の支度をして過す。富貴亭で家族、生馬及び山内夫婦と夕食。大變遲く歸宅。直良が私を待つてゐた。陽氣はめつきり涼しくなつた。行と敏は輕井澤へ行つた。

七月十八日。（水）曇り。涼しい。八時半上野發の汽車で輕井澤に行く。二時頃輕井澤につく。大勢の人が出迎へた。その中に行光と敏行がゐた。夜、下の町へ散歩に行く。餘り變つてゐない。快い眠り。

七月十九日。（木）晴れた暑い日。下の町へ福島大將に會ひに行つたが、留守だつた。それから町をぶらぶら歩く。鶴見に會ふ。時事新報への論文を書き始める。

七月二十一日。（土）朝の中晴、午後は霧。午前は執筆して過す。午後から子供等を新渡戸博士の處へ連れて行く。夫人だけしか居なかつた。朝、下の町へ母上と子供とで行つた。

七月二十二日。（日）天氣よし。夕立が時々やつてくる。

ソログーブの「小惡魔」を讀む。神近孃に最後の返事を書く。三光が來た。三島に發信。夕方、下の町へ行く。著作の事ばかり夢みる。

七月二十三日。（月）いゝ天氣。子供達を汽車で吾妻へつれてゆく。大變不愉快な遠足。家に歸ると、山内夫婦が來てゐ

た。彼等と三笠ホテルで夕食。

七月二十四日。（火）〔省略〕

七月二十五日。（水）朝、晴れ、午後少し雷。朝、時事新報への原稿を少し書く。神近の最後の手紙が屆いた、寂寥の感あり。

七月二十七日。（金）むし暑い。十時四十五分の列車に乘つて東京に歸る。皆、丈夫だ。

七月の思ひ出。

○神近孃との交友は此の月に破れた。

八月一日。（水）暑い。朝、大學病院に行き、市川厚一氏に會つた。氏は彼の實驗室及び解剖を見せてくれた。死體は肺病でなくなつた十八の娘だつた。午後は、ひつそりした部屋で安子の事を考へつゝ過す。

八月二日。（木）曇り。花を杏雲堂分院に送る事。

朝、壬生馬夫婦と靑山へ行く。其處で神尾の兩親及び佐藤夫婦に會つた。午後から平塚へ行き、旭館に宿泊。今晩は滿月だ。海岸に沿つて散歩する。

八月三日。（金）蒸し暑い。風がある。朝、病院を訪づれ、長野博士に會つた。晝過ぎに東京に歸着。

八月五日。（日）快晴。暑氣九十六度。十一時十五分發の汽車で輕井澤に行く。佐藤學長が一緒だつた。敬子と同行。母上も子供達も皆大變丈夫だつた。輕井澤は心地よく涼しい。

八月二十七日。（月）輕井澤から歸る。

八月の思ひ出。
○“Love the Plunderer”が the New East”に發表された。
○輕井澤から歸る。

九月二日。(日)激しく仕事した爲めに、身體をこはした生馬と一緒に、函根の塔の澤、一の湯に行く。
九月五日。(水)函根から歸る。途中鎌倉の千代子さんの處に寄る。彼女は重體だ。
九月九日。(日)朝の中、雨。午後は曇。大變蒸し暑い。上野の二科會へ英夫と共に行く。梅原の繪に見惚れた。輕井澤から佐藤夫婦に伴はれて歸つて來た行光と敏行を、上野驛に出迎へる。非常に元氣だつた。「凱旋」の原稿を文章世界に送る。
九月十日。(月)雨。母上行三と共に輕井澤より御歸京。午後より院展を見て母上を上野停車場に迎ふ。
九月十一日。(火)雨。寒濕。午前讀書。夜、生馬に招かれ帝劇にステリック孃の舞踊を見る。愛子及び房子亦招かる。面白からず。吹田君より「實驗室」の評をなし來る。
九月十二日。(水)雨。朝、家にありて讀書、午後、神尾を訪ふ。夕刻よりよし江來る。家出せんと云ふ、然かもその意見甚だ不徹底不愉快なり、生馬より隆三に警告を與ふる事となる。佐藤遂に誰とでも結婚せんと申し來る。
九月十三日。(木)雨。夕方晴れる、午後から神尾へ行き、母上に會ふ。新潮への論文「藝術の胎」を書く。夜、銀座に一人で散歩に行く。佐藤孃が手紙をよこし、結婚するつもりだと云つてきた。
九月十四日。(金)稍々晴。母上は二科會へ神尾の母上愛子及び信子と御同行。私は論文を書き續ける。夕方、終了。夕食後、九段へ一寸散步。寂寥! 自己の道をひた向きに突き進まねばならぬ。
九月十五日。(土)夕方、救世軍で講演。大勢の聽衆。其處で畫家中川氏に會つた。
九月十六日。(日)豪雨。夕方、橋浦の處で遠友夜學校の懇親會。歸宅したのは大變晩かつた。

九月十七日。（月）　豪雨。朝、スコット夫人を二科及び院展に連れて行く。夕方、彼女を茶寮へ招待する。招待を大變に喜んでゐた。

九月十八日。（火）　夕方、草の葉會。七人集まる。政治について十一時まで激論した。

九月十九日。（水）　晴。朝、沖野牧師が來られて、統一敎會で講演する樣に、賴まれた。夕方、大島豐が京都に行く途すがら來て、十一時まで居た。彼は大變よくなつた。一時半まで仕事を勵む。

九月二十日。（木）　快晴。朝、「奇蹟の詛ひ」の原稿を東方時論社に送る。墓に行き、それから三越に漫畫展覽會を見に行く。午後、少し晝寢。

九月二十一日。（金）　大變いゝ天氣。散髮する。成田來る。朝、少し本を讀む。午後、下町へ行き Sismondi の "Literature of the South Europe" を買ふ。夜、大變早く床に入る。

九月二十五日。（火）　（省略）。

九月二十六日。（水）　午後、母上と共に園田と高木へ行く。壬生はロシアの彫刻家、チエルニコフ孃を晩餐に招待した。私も會つた。力强さと美しい顏が印象に殘つた。

九月二十七日。（木）　雨。朝、三井を訪ねて、行郞へ品物を持つて行つて貰ふ樣に賴む。それから二科會と院展へ。午後足助來り、宮原も來る。

九月二十八日。（金）　神近孃入獄。

九月二十九日。（土）　神近孃から手紙來る。大變感じの鋭い手紙。彼女は來月の三日に入獄の由。

九月の思ひ出。

○「實驗室」が**中央公論**に**發表された。**

○「クララの出家」が太陽に發表された。
○函根に短かい旅をした。
○二科會と院展が此の月に開かれた。（生馬の蚊帳、釣、カナリヤ、金魚が此の展覽會に出品された。）
○阪本俊健氏が二十五日に死んだ。胃穿孔。
○雨多し。
○山內の墓が善草寺から靑山に移された。
○熱海の家の計畫がきまつた。
○神近嬢入獄。

十月一日。（月）恐ろしい嵐が襲來した。東京では今朝一時頃、甚だしい被害が、殊に下町にあつた。我々の家も少し破損した。神尾へ行く。

十月二日。〔省略〕

十月三日。〔省略〕

十月五日。（金）雨。鎌倉へ原稿を書きに行く。千代に打ち明け話。

十月九日。（火）いゝ天氣。千代子さんは朝四時半に死んだ。母上は鎌倉へ行かれた。悲しい思ひ。肺病。恐ろしい苦悶と戰つてから、彼女は靜かに死んで行つた。母上は先方で夜お過しになつた。私は東京の家に行つた。

十月十日。〔省略〕

十月十一日。〔省略〕

十月十二日。〔省略〕

十月十三日。（土）曇　二時、青山齋場に於いて千代子の葬儀。骨は壽光寺に埋る。

十月十四日。（日）いゝ天氣。神尾へ行き、輕井澤から昨夕お歸りになつた父上にお會ひする。自宅で施行した阪本の二十日祭に列なる。山内夫婦と共に夕食。それから稻毛の海氣館へ、中央公論への原稿を書きに、夜九時半の汽車で行く。

十月十七日。（水）雨。「死」が本屋に出た。

十月十九日。（金）雨。稻毛から歸京。母上少々御加減惡し。

十月二十日。（土）雨。新潮社の中根來り「死」第二版代六十六圓を受取る。今朝四時半までかゝり「中公」への創作「迷路」九十九枚を仕上ぐ。午後より山本に到り少女の舞を見る。夜足助、宮原來る。

十月の思ひ出。

○「凱旋」を文章世界に發表。

○「藝術の胎」を新潮に。

○「奇蹟の詛ひ」を東方時論に。

○有島千代子が九日に肺病で死んだ。

○有島武郎著作集第一輯「死」新潮社より發行せらる。

十一月一日。（木）（省略）

十一月三日。（土）（省略）

十一月四日。（日）豪雨。午後、壬生馬と帝劇へ海軍軍樂隊のコンダクター瀨戸口の告別演奏會を聽きに行く。演奏は皆美事だつた。それから團十郎記念の芝居（茶臼山、大森彥七、勸進帳、お夏淸十郎）。大森彥七は大變よかつた。勸進帳も

まんざら悪くはなかつた。

十一月五日。(月) 晴。朝、十五銀行と正金へ行き、金を行郎と(三千圓)、森本へ(三百圓)送る。午後は荷造りをして過す。夜雙子が來て、愉快に話した。十時三十分上野發の汽車で北海道に立つ。行光は大變悲しんでゐた。家を出る時、大きな流れ星。

十一月六日。(火) 仙臺で夜があけた。眺めは非常にすばらしかつた。三時頃、石鳥居谷で雪を見た。三時半頃青森着。雪が降つてゐた。比羅夫丸に乘る。海はひどく荒れた。九時半函館着。十時二十五分の汽車で小樽に向ふ。汽車は混んだ。二兒を連れた佐々木夫人に會つた。

十一月七日。(水) 曇。六時半小樽着。旅館に毅一を訪ふ。丈夫だつた。葉書を神尾、家、足助、御園その他へ出す。晝頃札幌旭館に行く。午後は原稿をかいて過す。夜、佐藤繁非來訪。彼女の家庭の事情は甚だ急迫してゐる。可哀想な娘。

十一月八日。(木) 朝は晴、後曇。早朝、宮部博士及び佐山を訪ふ。夫人が病氣で寢てゐた。それから大學及び松原へ。午後、松原、本橋、高松、佐山及び毅一の訪問を受けた。十二時まで話した。牧内も亦來る。

十一月九日。(金) 陰鬱な曇つた天氣。高松と早川が來る。それから竹崎夫人を訪ひ、少々買物をする。葉書を數ヶ所へ書く。夕方、モルガン氏の處へ行き、夕飯に招かれた。宿に歸ると、佐藤孃が私を待つてゐた。十時まで話す。

十一月十日。(土) 曇。朝、松原及び大島(北海タイムス)の訪問を受けた。菊野がきて荷造りを手傳ふ。午後文武會辯論部で「愛」について話す。豫科の人達と晝飯を共にする。夜、札幌を去り小樽に行き、白夜の人々と會合し、ホイットマンについて話した。夜は×旅館に泊る。

十一月十一日。(日) 曇。十時小樽出發。吉川と曾我が狩太に出迎へた。農場では、皆元氣だつた。曾我は夕食後まで居た。早く床に就く。すつかり疲れた。夜、吹雪襲來。

十一月十二日。(月) 嵐。文武會に於ける講演の材料を書いて、一日過す。夕方、木田金次郎が來た。本當に愉快な男だ。

一泊。

十一月十三日。(火)　嵐。農場經營の結果を見る。夕方、木田と話す(大變面白かつた)。彼は夕食後、歸宅。戸川、足助及び千代から便りを受けた。大變寒くなつた。

十一月十四日。(水)　何處も雪。一時半の列車で狩太を去る。吉川が驛に見送つてくれた。九時函館。勝田に泊る。寒い寒い。

十一月十五日。(木)　風あり、寒し。朝、下町へ行き、マフを母上と山本の母の爲に買ふ。それから公園に行き、水産館を見る。宿に歸つたら、すつかり疲れた。按摩を賴む。五時に乘船。大變凪いでゐる。十一時の汽車で東京に向ふ。

十一月十六日。(金)　いゝ天氣。少ししか眠らぬ。六時上野着。敏行、行三及び生馬が驛に出迎へた。行光は少し熱があつた。母上は御元氣だ。愛子と神尾の母上が私を待つてゐた。熟睡。

十一月十七日。(土)　今日から、父上の墓を建てる事及び記念祭を擧行する事にとりかゝる。佐藤勝郎がきて、彼の姉は私と喜んで結婚すると云つた。馬鹿な！

十一月十八日。(日)　夕方、足助と宮原が來る。夕食を共にし、色々な事を話す。「迷路」を賞めてくれた。ロダンが死んだとの知らせがある。

十一月十九日。(月)　夕方、市河彦太郎來り、十一時まで話す。御園千代子から手紙來る。直ちに、二度と會はぬと云ふ返事を出す。

十一月二十日。(火)　敏行と行光の風邪が段々惡くなつて行くので、母上が大磯に連れて行つて下さつた。天氣は良し。そして母上から二兒は甚だよくなつたとのお便りあり。

十一月二十一日。(水)　快晴。午前、生馬と木場へ熱海の別莊の材木を見に行く。工事監督の成田が言ふには、數日中に船で運ぶ由。その附近夥しき材木。

十一月二十二日。（木） 母上大磯より御歸京。

十一月二十三日。（金） 命尾壽六先生の八十七の誕生日を祝ふ謠會が神樂坂の料理屋で行はれた。私は船辨慶の判官を謠つた。

十一月二十四日。（土） 朝、神尾へ行き、父上が遺された短刀を神尾の父に贈つた。午後、スコット氏に會ひに行く。

十一月二十五日。（日） いゝ天氣。母上は晝、大磯へお出かけ。歸に、毅一と一緒に見送る。彼は神戸支店に轉任になつたので小樽から歸つてきたのである。今夕出發の筈。

十一月二十六日。（月） いゝ天氣。朝、園田へ行き、遺産の事を相談する。それから石屋（千秋堂）へ行き、父上の墓の製作の進み具合を見る。夕方、草の葉會。新會員が加はつた。瀧田來訪。

十一月二十七日。（火） 晴。併しひどい風。朝、高木に行き、遺産の事を相談する。午後、和田（春陽堂の主人）及び田中が來る。それから新渡戸博士のお茶の會に出席。澤山の人に會つた。足助が少し加減が惡いと、書いてきた。生馬の處で夕食。暁子が病氣だ。

十一月二十八日。（水） いゝ天氣。朝の中、足助を訪ふ。少し痩せた。晝食後、新渡戸家へ立ち寄つて、歸宅。行光が大磯から歸つてきた。大變元氣だ。兄弟が集まつた。隆三と眞面目な話をする。

十一月二十九日。（木） 稍ゝ風あり。高木に行つて父君に會ひ、遺産相續の件に就いて相談。

十一月三十日。（金） 風強く寒し。母上、三兒を伴つて大磯より御歸京。

十一月の思ひ出。

○「迷路」が中央公論に二弟の小說と共に、發表された。

○五日に北海道へ行き、十六日に東京に歸つた。

○「云ひたき事二つ」が「中外」に發表された。
○「自己主義の考察」が「北海タイムス」に發表された。
○「死」再版及び三版現はる。
○ロダンが死んだ。
○「ロダンに就いての考察」を中央美術に送る。
○新愛知の懸賞小說の選者に選ばれた。仲間は正宗白鳥と島崎藤村である。
○ロシアに革命、ケレンスキーは驅逐されて、その地位はレーニンの黨派に占められた。

十二月一日。（土）新ロシアは獨逸に休戰を提議した。國技館が燒け落ちた。原稿を少し書く。記念祭の準備に時を費やす。夜、寒い雨がやつてきた。

十二月二日。（日）快晴になつた。生馬と隆三は靑山へ行き、安子の壺を墓へ移した。「死」を壺の下に入れた。漱石全集の第一卷が現はれた。池田蕉園が死んだ。終日、つまらぬ事でつぶす。

十二月三日。（月）父上の記念祭の準備。壬生と遺產相續の事について話す。彼は全財產の一割乃至二割を欲してゐる。

十二月四日。（火）晴れた、いゝ天氣。父上の一年祭が靑山の墓地で行はれた。墓は綺麗に出來上つた。三十人ほど集まつた。それから家で夕飯。食前に、私は遺產を母と兄弟姉妹に分配した。生馬が反對を唱へたが、私は笑ひにまぎらしてしまつた。

十二月五日。（水）いゝ天氣。園田、高木及び神尾を訪ひ、記念祭に參列してくれた御禮を云ふ。それから足助に會ひに行く。或る醫者は彼の病氣を重い肺病だと診斷した。處が二木博士はむしろ輕く見た。夜まで其處に居た。

十二月六日。（木）いゝ天氣。高田病院で足助に會ふ。醫者が云ふには、足助は肺病の第三期に入つた。入院せねばなら

ぬとの事。驚いた。午後から一生懸命仕事する。夜、山本に招かれた。彼等は結婚二十年記念を祝つた。

十二月七日。(金) 激しく風あり、寒い。足助を茅ヶ崎の南湖院に同伴する。夕方、歸宅。足助の事を原及び河內に知らせる。隆三夫婦が夜來る。生馬から手紙。ロシアはドイツと休戰條約を結んだ樣だ。

十二月八日。(土) 朝、晴。午後、風。愛子が朝の中に會ひたいと云ふ。生馬の事について話した。午後から新潮への原稿を執筆する。夜の二時に終る。

十二月九日。(水)「宣言」が現はれた(千部)。

十二月十三日。(木) 晴。熱海へ行く。

十二月十四日。(金) 郵船拂込(第三回)株十二圓五十錢。

熱海。建上式に列なる。新小說への原稿を書き終る。

十二月十五日。(土) 熱海から歸京。足助を茅ヶ崎に訪ふ。鎌倉に家を借りた。

十二月十六日。(日) 晴。併し鎌倉では風あり。三兒及び曉子を鎌倉に連れて行く。要山で思ふ存分遊ぶ。夕方、家に歸る。新愛知から原稿料〔M. S. 3〕とあれば」を受取る。三十。宮部憲次が公主嶺で死んだ由。

十二月十七日。(月) 晴。宮部博士に電報でお悔みを述べる。末光、吹田、佐山等へ發信。午後、中根來る。「宣言」の再版が現はれる筈。夜、洵鳴に對して、國民新聞へ返答を書く。

十二月十八日。(火) 晴。新愛知の懸賞小說の原稿を讀む。

十二月十九日。(水) 晴。懸賞小說を讀む。「宣言」を友人に發送する。帝大の學生、川田茂信が訪ねてくる。隆三と英夫が來た。

十二月二十一日。(金) 野村、橋浦及び彼の兄が夕方、來る。中村白葉と宮原も來る。十一時まで話す。大變面白かつた。

十二月二十三日。(日) 晴。今日、父上の遺產を兄弟に分配した。彼等は皆、私の處置を喜んだ。涙を流して、互に話し

た。神田税務署へ行き、遺産相續の屆書を出す。

十二月二十五日。(火) 晴。子供等のクリスマスの支度をする。夕方、山本、高木及び子供達が來た。彼等は此の催しを大變喜んだ。

十二月二十六日。(水) 晴。午前中に、山本、國分、神尾を訪問。午後、江副氏の許を訪ね、生馬の書いた肖像を見る。それから高橋氏へ太平の不慮の死を悔みに行く。夜、新橋のレストランで小熊、原田、赤木と晩餐を共にする。

十二月二十七日。(木) 晴。朝、阪本を訪ふ。午後、旅行の仕度をする。夕方、太平を記念して高橋で行はれた晩餐會に出る。ひどく寒い。「岩野泡鳴に答ふ」が國民新聞に發表された。

十二月二十八日。(金) 晴。三兒を連れ、東京驛を十二時四十一分に立ち、冬休みの爲に、扇谷和泉谷に借りた家に落着く。要山に散歩する。行光が手と足をひどく怪我した。晝、野呂と本橋が會ひに來た。足助は土肥に居る。

十二月二十九日。(土) 晴。併し寒い。朝、行光を武久醫師のところへ連れて行く。傷は餘り重くはなかつた。それから晝食を鰻屋で子供等と喰べ、海岸に沿つてぶら〳〵歩く。皆大變行儀がよかつた。生馬から電報で曉子が病氣なので來られないと云つてきた。

十二月三十一日。(月) 晴。東京で新年を迎へる爲に、子供等と歸京した。

十二月の思ひ出。

○「四つの事」が新潮に發表された。

○「ロダン翁藝術の背景」を中央美術に發表。

○「死とその前後」に對する和辻哲郎の思慮深い批評が「思潮」に發表された。

○岩野泡鳴の攻擊に對する返答が國民新聞に發表された。

○冬休みを過しに、鎌倉へ子供達を連れて行く。
○宮部憲次が十四日に死んだ。「我れ死するにあらず、生くるなり」とは彼の絶筆。
○父上の遺產の處分を二十四日に完了す。

第二十巻

一九一八年（大正七年）

懷中日記（卷頭に、「音塵寂爾、消息宛然、一味蕭條、無可趣向」とあり、編者。）

一九一七年の覺え書。
○神戸と北海道へ小旅行をした以外、一年中ずつと東京に居た。
○雜誌にごく僅か發表したのみ。そして作家としての名が、確立された。併し其を恥ぢる。今年は「白樺」だけに發表する事に決心した。
○著作集「死」と「宣言」とが發刊。
○足助が肺病にかゝつた。
○神近の事件起り、決裂に終る。
○漱石死す。
○オウギュスト・ロダン死す。
○父上の遺產を弟妹等に分配す。
○歐洲大戰依然として闌なり。

○ロシア帝國は恐るべき試練を受く。レーニン及びトロツキー等、政府の再建を圖る。
○米國大戰の渦中に入る。
○母上は熱海に御新築。
○夏は輕井澤で、冬は鎌倉(千代田)で過す。
○阪本氏死す。
○高橋太平と宮部憲次死す。
○高木の所に一兒(美代子)生る。

一月一日。(火) 晴。――三兒を連れ、鎌倉より昨日歸京。松井精二死去の報、その叔父よりあり。お雜煮を祝つてから神尾を訪問。留守中に三弟來る。

一月二日。(水) 雨。朝、命尾、島津、尺、石川、近藤に挨拶に出かける。午後、高木來る。書初め。夜、牛馬と共に山內を訪ふ。

午後から數軒へ挨拶に出かける、松方、園田、高木、八十島、有島等へ。年賀狀澤山。

一月三日。(木) 甚だ寒く、風あり。――朝、家族揃つて寫眞を撮りに行く。笹屋で晝食。岩倉が笹屋の女將に棄てられた。女將の姿を瞥見した。彼女は小說の材料になる。

一月四日。(金) 晴。――足助の金を麴町銀行に預金する。野呂と渡邊來る。一時三十分の汽車で、三兒をつれ鎌倉に行く。家を探したが徒勞だつた。足助、松井の叔父及び宮部夫人に手紙。

子供と散步。それから山本へ謠會に行く。夜半、歸宅。

一月五日。(土) ――朝、園田を訪ひ、濱邊で子供達と遊ぶ。夜、森澤と鷹野來る。十時半まで話す。大變愉快だつた。

一月六日。（日）晴。――「讀賣」の加藤來る。要山で晝食を共にする。午後讀書。

一月七日。（月）――晝頃、リーチ、武者、園池及び柳來る。一緒に晝食を喰べ、長谷に神田を訪ふ。千代田を訪ひ、愉快に語る。大變元氣づけられた。夜、寒さきびし。

一月八日。（火）晴。風。嚴寒。――子供達を江の島に連れて行く。佐藤學長と綠葉堂主人が留守に來訪。子供達は遠足を大變喜んだ。

一月九日。（水）晴。――朝、河野夫人を訪れたが、病氣で寢てゐた。それから志賀及び菅へ。志賀は家に來て夕食を共にした。

一月十日。（木）晴。――朝、建長寺へ行き、活花にする爲に、竹を少し貰つた。三時八分の列車で、子供達と東京へ。此の滯留中、彼等は不思議な程、健康を回復した。

一月十一日。（金）晴。――朝、小此木の處で。宮部教授に會ふ。お氣の毒な老人！　氏は全く悲歎にくれてゐられる樣だ。宮部憲次はたしかに立派な生涯を終へたのだ。山內夫婦來る。河內來る。夕方、愛子に會ふ。

一月十二日。（土）〔省略〕

一月十三日。（日）快晴。――朝、モークレールの「ロダン」を讀む。非常に激勵される。それから命尾先生の謠會へ行く。午後、少し晝寢する。石川夫人來る。佐藤孃から、靑梅に到着したとの知らせの葉書。夜、三河屋で漁業懇親會。

一月の思ひ出。

○「曉闇」新小說に。

○「動かぬ時計」中央公論に。

三月の思ひ出。
○「武郎年表」新潮に。
○「死を恐れぬ男」新時代に。

四月十日。(水)――健康が著るしく衰へた。醫者の診察をうける。肺を大分侵されてゐるらしいと云ふ話。驚駭。
四月十一日。(木)――杏雲堂で佐々木博士の診察をうけた。右の肺が左のよりも小さいと云ふ。心配なき由。疾患を除きに鎌倉に行く事に決める。
四月十二日。(金)雨。――夕方、これも病氣の行三を連れて、鎌倉に行く。
四月十四日。(日)朝、晴。――午後原來る。海岸へ散歩に行き、雨に遭ふ。夕方、生馬來る。原は夜、出立した。
四月十五日。(月)晴。――「生れ出づる悩み」を少し書く。生馬と小町園で夕食。妙な陰鬱な思ひ。
四月十六日。(火)曇り。――行三を連れて河野夫人を訪問、幸子さんの結婚の事について話す。武久氏の母堂に會ふ。
四月十七日。(水)――遂に、熱の爲に臥床する。武久氏が私の具合を見に來て、幾分腸チブスの恐れがあると思ふと。體の具合がひどく悪くなつた。
夜、看護婦が來る。三十七度――三十七度五分。
四月十八日。(木)――足助と本荘が非常に親切に看護してくれる。生馬も。高熱を推して、「生れ出づる悩み」を書く。
四月十九日。(金)――苦しい仕事の結果は覿面に熱にあらはれる。三十九度まで昇つた。三十八度二分――三分。
三十八度二分――三十八度三分。
四月二十日。(土)――三十八度三分――三十九度。
四月二十一日。(日)――三十七度――三十九度六分。

四月二十二日。(月)　晴。——愛子と高木喜寬來り、東京に歸る樣に勸める。夜、東京に着き、東京病院に入院。三十八度二分——三十八度五分。

四月二十　日　(火)　——熱は續く。滋養物、流動物。鶴見、信子、直良、生馬、谷川、市川、相良が見舞に來る。三十七度一分——三十八度五分。

四月二十四日。(水)　——愛子、神尾の父、直良、生馬來る。蛔蟲一條。三十七度三分——三十八度零。

四月二十五日。(木)　——信子、德田、志摩子、隆三、よし江、英夫、中戶川、母上、毅一來る。三十七度一分——三十八度一分。看護婦來る。名は佐藤いさ。

四月二十六日。(金)　雨。——神尾兩親のお見舞を受ける。三十六度八分——三十七度八分。

四月二十七日。(土)　晴。——足助、よし江、飯田、行光、敏行、行三、川浪來る。三十七度零——三十七度八分。

四月二十八日。(日)　——中戶川、生馬、信子、曉子、遠藤來る。三十六度八分——三十七度四分。

四月二十九日。(月)　朝曇り、午後晴れる。神尾の母、英夫、飯田、足助及び生馬來る。三十六度六分——三十七度七分。

四月三十日。(火)　晴。——愛子、逢阪、生馬、神尾の父來る。三十六度七分——三十七度零。

四月の思ひ出、

〇「想片」新潮に。

〇「石にひしがれた雜草」太陽に。

〇「生れ出づる惱み」大阪每日に連載。

五月一日。(水)　曇り。——信子、足助、增田來る。見知らぬ婦人が美しいばらの花束と、新鮮な果物を持つて來た。名

はわからない。三十六度四分——三十七度六分。蛔蟲一條。

五月二日。(木) 稍〻曇り——母上、直良、愛子、橘禮次及び秀寛來る。三十六度四分——三十六度九分。

五月三日。(金) 晴。——足助、原田三夫、原夫人、佐久間、英夫、信子及び曉子來る。平熱に復す。パン食。

五月四日。(土) 風あり、曇り。——神尾の父及び飯田來訪。粥食。體重十三貫三百五十。

五月五日。(日) 曇り。——足助、健助及び西居來る。

五月六日。(月) 晴、風あり。——德田、信子、よし江、母上、愛子、高木庄太郎(同志社大學講師)、色田周次、行方熏雄(同志社學生)來る。常食。體量十三貫四百八十。

五月七日。(火) 晴。——平澤太疇、横山登志丸、横川、有島鐵之輔及び足助來る。〔この頁の欄外に一首、「しみじみと伏し拜みけり病室の窓より見ゆる七尺の春」とあり〕

五月八日。(水) 晴。——佐藤孃來る。彼女は少し良い樣だ。午後、家に歸る。幾分疲れた。熱は三十七度三分に昇る。

五月九日。(木) 晴。——朝、山本、母上及び愛子來る。病中、私に同情してくれた人々に、感謝の手紙を出す。午後、森本、吉川及び福士より手紙。吉川は痔の治療の爲に入院。母上は生馬と共に鎌倉に行かれる。英夫夫婦とよし子來る。夜、足助來る。

五月十日。(金) 雨。——「叛逆者」を友人達に發送する。坪内の「義時の最期」を讀了。餘り感銘を受けず。長與が「生活の花」をくれた。母上、鎌倉から夕方御歸京。まだ疲勞を感ずる。勝見が綺麗なカーネーションを一束、送つてくれた。

五月十一日。(土) 晴。——朝、與謝野夫人と御園孃に手紙を書く。午前中、頭痛がしてならなかつた。午後、熱が三十六度九分に昇る。前島が會ひに來た。稍〻陰鬱な氣分だ。

五月十二日。(日) 晴。——母上は行三を連れて、熱海へ行かれた。朝、初めてためしに戸外を歩いてみる。四谷見附まで行つた。朝の中神尾の母御來訪。午後、佐藤孃が來る。それから夜は足助と宮原が來る。ふく、薄田等から手紙。始めて

入浴。大いに囘復。

五月十三日。(月)　曇り。――朝、散歩。新公論の記者來る。「新春」を少し讀む。午後、喜寛と直良來る。直良は夕食後まで殘る。夕方から雨になつた。蛙が鳴く。大變靜かだ。餘りよく眠れぬ。

五月十四日。(火)　晴。――朝、散髮及び鬚剃り。午後、入浴。晝寢してゐる間に好子が來た。夜、谷川及び文學に興味を持つてゐる巡査來り、十時十分まで話す。熟睡し得ず。

五月十五日。(水)　曇り。――午前、前田(珍男子)眼科院に行く。博士は私の眼は潛在遠視であつて、眼鏡をかける必要があると診斷した。看護婦の佐藤は慈惠院に歸つた。彼女は私を注意と尊敬を以て看護してくれた。午後、讀賣の加藤、及び英が來る。きさ子は第二兒分娩の爲、榊原病院に入院した。夜、足助來り、九時まで居た。熟睡。

五月十六日。(木)　晴、風。――朝早く、前田病院に行き、眼の度をはかつて貰ふ。午前をすつかりその爲に費やす。近くを見るには十四度、遠くを見るには三十度。午後は部屋の中をぶら〳〵歩き廻つて過す。夕食は生馬の處でする。隆三夫婦も一緒に。

五月十七日。(金)　豪雨。――朝、神尾へ病中の親切の御禮に行く。それから五來を訪ふ。夫人だけだつた。午後、生馬の處へ行き、「新春」を讀む。森本、佐藤等から手紙。夕方、母上と行三歸宅。生馬、英夫と共に夕食。

五月十八日。(土)　晴。――午前、山本に御禮に行く。それから東京病院へ。午後、新愛知の懸賞小說に二等となつた浦上后三郎來る。稍々失望する。夜、足助と宮原來る。鎌倉から手紙。子供達は神尾へ行く。

五月十九日。(日)　朝、曇り、夜は雨。――朝、野村愛正、涌島及び松田が會ひに來る。午後母上と山本の三年忌に列なる爲、海晏寺に行く。夜は初心會に出席。

五月二十日。(月)　曇り。――大掃除。午後、丸善に行き、Israel Abraham の "Jewish Life in the Middle Ages" 及び Oswald Siren の「レオナルド・ダ・ヴィンチ」を買ふ。夜、草の葉會、谷川と市川來る。九時まで話す。

五月二十一日。（火）晴。――朝、佐藤孃來り、石井氏の孤兒院から荷物を持つて市立孤兒院へ行く樣に命ぜられたと云ふ。彼女の求めてゐる物が、そこで見出せるよう、望む。午後、上野へ國民美術協會展覽會を見に行く。牧野虎雄が一番いい樣に思はれた。

五月二十二日。（水）快晴。――朝、墓へ。それから生馬と英と一緒に、隆三の處へ行く。次に玉川に、彼等及び恩地と行く。恩地は彼の會社の處置に不平を云つてゐた。川浪夫人から手紙、「叛逆者」について大變激勵的な事を書いてきた。彼女がなんとなく好きになつて來た。小栁津夫人、赤木からも手紙。後者は彼の戀愛がうまく行つたと知らしてきた。

五月二十三日。（木）曇り。――朝、佐藤孃來り、彼女が市立孤兒院に行く事について相談した。私はそれに反對して、石井の一家と生活する樣に勸告した。平澤が來た。午後、飯田及び命尾先生來る。十時頃床に就く。來信なし。

五月二十四日。（金）曇り。――朝、新渡戸博士の處へ行く。琴子及び二人の若い婦人に會ふ。その一人は私の子供達の保姆になる豫定である。それから石井の處へ行き、佐藤の事情について說明した。佐藤に會ふ。大變顏色が惡かつた。午後は熱海の母上の家の家具を買ふのに費やした。

五月二十五日。（土）〔省略〕

五月二十六日。（日）曇り。――朝、敏行と行三を能を見せに猿樂町に連れて行く。私自身も生馬が大變象徵的な作だとして、甚だ高く評價した甘鄲（賓生重英）を見る爲に行つた。多少感銘をうけた。三時四十五分の列車で熱海に行く。松濤園に一泊。海邊の夜、憂愁あり。

五月二十七日。（月）晴。――早朝、松濤園を立ち十時半頃、伊豆山に着き、晝食を採る。此の地を訪ねてから何年もたつた。その時は父上と御一緒だつた！　三時半頃熱海の大黑屋に着く。池田及び水谷にそこで會つた。大黑屋で夕食。熟睡。

五月二十八日。（火）曇り。――四時頃目が覺め、濱邊を散步する。竹と云ふ女中が來た。午後雨が降つて來た。著作集の仕事を大いにやる。櫻井鈴子と云ふ人が手紙と贈物を、鈴木別莊からよこして私に會ひたいと云つてきた。明朝、會はう

と返事した。私は惡い人間だ。私は竹に劣情を懷いてゐる、實行はしないけれども。あゝ、恐るべき心！

五月二十九日。（水）曇り。――朝、「迷路」の原稿を書く。すると櫻井鈴子來る。彼女は少々弱さうだが大變怜悧で、魅力のあるぱつちりした眼をしてゐる。三時までゐた。夜、たけと長い事話す。彼女には非常に興味がある――あの野卑な、恐ろしい災難。

五月三十日。（木）快晴。――朝、梅園の方へ散歩。午前、仕事をする。午後、櫻井夫人に會ひに行く。彼女は私の小說を愛讀する今一人の夫人を見附けたと云つてゐた。その女は陸軍の療養所内に住んでゐる軍醫の妻である。又しても恐るべき災難。

五月三十一日。（金）晴。――櫻井夫人は私及び軍醫の妻と餘り話し過ぎたので病氣になつた。だが併し、彼女は夕方訪ねて來た。三度恐るべき災難。

五月の思ひ出。

○病にかゝり、先月の二十一日から東京病院に入つた。

○二十六日に病氣全治の爲に熱海に行つた。

○病中に名を告げないで、花と果物を持つて來た櫻井鈴子夫人と近づきになつた。

○竹の事件。

六月一日。（土）曇り。――日中は「迷路」執筆。夕方、櫻井夫人を熱海ホテルに招待。大變靜かな夜を過す。

六月二日。（日）朝の中雨、後晴れる。――朝、櫻井夫人が熱海を立つので、見送つた。「迷路」執筆。竹は私に戀を感じ始めたらしい。可哀さうに！

六月三日。(月) 雨。――東京に向け、熱海を去る。S夫人に國府津で會ひ、大船まで同行。それから志賀に會ひに、鎌倉に行く。甚だ不思議な質の女だ。一體私から何を求めたいのだらう。夜晩くに歸宅。家族は皆元氣で丈夫だつた。

六月四日。(火) (省略)

六月五日。(水) 曇り。――足助來り、出版事務の問題で口論した。竹崎牧師アメリカから歸朝し、來訪。相變らずの好漢だ。

六月六日。(木) 曇り。――朝、高木の父に會ひ、生馬の事件について話した。志滿に會ふ。それから三越と白木の展覽會を見に、下町に行く。午後、新潮社の佐藤氏來り、出版の用件について話した。

六月七日。(金) 快晴。終日在宅。

六月十二日。(水) 曇り。――新潮社の佐藤氏に、最後の條件を言つてやる。「迷路」の原稿を全部送り込む。たけから手紙を受け取る。

六月十三日。(木) 曇り。――朝、母上と家具屋に行き、熱海の別莊で用ひる家具を註文した。それから青山墓地へ。午後、三會堂へ白樺社の展覽會の手傳ひに行く。それからチエレミシノフ孃に會ふ。櫻井夫人と有樂座で會つて、一緒に散歩する。

六月十四日。(金) 朝、曇り。――母上の御病氣は幾分いゝ。上山草人の「煉獄」を讀み、心うたれた。アナトール・フランスの "Lys" を讀み始める。志滿來訪。栃内禮次が來たので一緒に三河屋で夕食。

六月十五日。(土) 曇り。――午前勉强。三會堂に午後から行く。志賀、柳その他に會ふ。午後、下町に恩地におくる物を買ひに行く。夜、子供達を山王さんにつれて行く。男の兒がお正さんの處に生れた。一貫三十目の體重。藍野、山内及び原田來る。

六月十六日。(土) 朝、曇り、後晴れる。――午前、勉强を徹底的にまとめる。午後、生馬の家族と一緒に山下を訪問に

行く。それから一人で八十島を訪ふ。夜、足助來る。自分の文學的生涯について憂鬱な疑惑。夜は大變冷える。

六月十七日。（月）朝、雨。――午前、執筆を勵む。午後から歌舞伎座へ母上と生馬と、一葉の「濁り江」を見物に行く。河井がお力を、喜多村が源七を演じた。三幕の中、最初の二幕が見事に演ぜられた。一葉の天才は正しく理解されてゐた。十一時半頃、歸宅。

六月十八日。（火）曇り。――朝、佐藤繁井來る。彼女は白痴保護院での不安な境遇をこぼしてゐた。午後三越に行き、私の病中、同情して下さつた人々に送る贈物を註文した。コンノート殿下が、陛下に元帥號贈呈の爲、東京に到着された。

六月十九日。（水）曇り。――「迷路」の校正。一葉の「濁り江」を讀み、泣く事激し。午後、森本が會ひに來る。三河屋に連れて行く。例の娘が給仕する。森本と少し話す。それから足助が私の處へ訪ねて來た。十時半まで居た。彼はその店を命尾先生御來訪。雨月、竹生島。凡人社と命名した由。

六月二十日。（木）雨。――朝、少し仕事をした、愛子が訪ねて來る。午後、鶴見の花月園へ原稿を書き終へに行く。夜、東京ステーション・ホテルにカリンスカヤ夫人（マリヤ）の歌ふ民謠を聞きに集まつた。餘り感心しない。夏沼の娘に會ふ。

六月二十一日。（金）雨。――午前、執筆。午後、白樺展覽會に行き、櫻井夫人と安成二郎に會つた。それから彼等と末廣に行き、夕食。櫻井夫人は自分で作つた紙入を私にくれた。夜通し一生懸命に執筆に努め、雀が囀り始めてから、眠りについた。「迷路」の校正終る。

六月二十二日。（土）（省略）

六月二十三日。（日）――朝、神尾に子供を連れて行く。足助來り、姓名判斷によると、私の名前は甚だ不幸な名前であつて、その爲、運勢は各方面で明かに下り坂に向いてゐると私に警告し、改名する樣に勸めた。從はなかつた。夜、家で初心會。生活態度について大議論。晴天。午後能樂を見に猿樂町に行つた。

六月二十四日。（月）雨。――朝、新潮社の佐藤氏來り、私の著作の出版に關する事務を取きめた。彼は足助に讓つた。彼が眞の紳士であることを知つて非常な喜び。夕方、母上と子供を、上野へ自動車で連れて行く。月蝕。

六月二十五日。（火）晴、だが時々雨。――"Countess Julia" を非常な興味で讀んだ。午後、英夫を九段の能樂堂に連れて行く。家で命尾さんに會ふ爲、早く歸宅する。夜、宮原と澤田謙來る。水野仙子の病氣がよくない。氣の毒な事だ！「石にひしがれた雜草」を書き直す。

六月二十六日。（水）豪雨。――朝、鎌倉に「石にひしがれた雜草」を直しに行く。千代に一葉の作を讀んでやる。大いに仕事をした。七時半に歸宅。八木澤が京都から來て、一夜逗留。二時半まで話す。十一時半に、かなり烈しい地震があつた。櫻井夫人から手紙を受取る、その中にエストハープ氏から彼女への手紙二通が入つてゐた。大變興味あり。高木に生馬の事件について折り返し書く。

六月二十七日。（木）晴。――朝、東京病院に飯田を訪ねて行く。それから石屋へ熱海の家の爲に石を少し買ひに行く。夜、宮原と澤田謙、來訪。八木澤泊る。足助來る。「迷路」發刊。

六月二十八日。（金）〔省略〕

六月二十九日。（土）晴。――「新小說」の野村來る。午後、好子さん及び來客數名。夕食後、子供達を散歩につれて行つた。すつかり疲れた。千代より來信。

六月三十日。（日）晴。――草の葉會で隅田川へ遠足。澤田謙、澤田輝武、鶴見憲、谷川及び八木澤が行を共にす。大變蒸し暑い。尾久の渡しまでも上る。九時過ぎ歸宅。櫻井夫人がエストハープの畫像と香水を送つてきた。私は大變怠り勝ちだ。行郎とティルディへ手紙。

七月一日。（月）快晴。溫度が非常に昇つた（華氏九十度）。――朝、變な隱者が來て、小說の材料を提供してくれた。八木澤が去つた。長與の「陸奥直次郎」を讀み通す。素晴らしいものだ。夕方、上野の精養軒へ皆揃つて行き、母上の御馳走に

なつた。夜、更けて歸宅。

七月二日（火）快晴。酷暑(九十度)。――朝、足助來る。中外新論、太陽の記者等も來る。午後、命尾先生。夜、大學青年會寄宿舍の工藤と佐藤來る。こんなに澤山の訪問者が私を苦しめては、何も仕事ができない。吉川に農場の中に立つてゐる事務所の移轉を許す手紙をやる。

七月三日。(水) 快晴。――部屋を再び整頓する。朝、新潮社の中根來る。一新人の「山」及び吹田のヘッベルの宗教觀に關する論文を讀む。吹田のは大變いゝ。夕方、日本橋の電氣器具屋へ行く。夜、富澤美穗子孃來り、十時半まで話す。彼女は賢い女性らしい。

七月四日。(木) 晴、併しひどい風。――「生れ出づる惱み」を書く。朝、堺枯川來る。靑山墓地へ行く。生馬に夕食に招待される。愛子と上阪がお相伴。頭痛を覺えた。幾日も雨がないから、それが私の健康に徽へる樣に思はれる。仕事に精進せねばならぬ。

七月五日。(金) 雨。――花月園に「生れ出づる惱み」を書きに行く。大いに仕事した。私の用を足してくれた若い娘は、悧巧だ。大變氣に入つた。夜、山內彌一郎來り、十一時まで話した。

七月六日。(土) 午前、凉し。午後、晴。――山內の處へ行き、彼の繪を見た。それから一緒に、三越と白木に展覽會を見に行つた。その中に私の自筆があつた。中元を母上及び子供達に贈る。夜、行三を連れて神尾へ行つたら、飯尾利幸が四日に死んだのを聞いた。

七月七日。(日) 朝は大變凉しいが、後暑くなる。――母上と、命尾へ十八番謠會に行く。私は紅葉狩のシテをつとめた。まる一日かゝつた。夜、國分及び飯尾を訪ねる。飯尾でお悔みを述べる。飯尾氏は三男と二女を遺して逝つた。森本が手紙をよこした。

七月八日。(月) 快晴。――朝、「感想文」を書く。山川と云ふ人が與謝野夫人の紹介で來て、彼の雜誌「小兒研究」を援

助してくれと云ふ。宮澤讓から手紙を受取る。

七月九日　（火）晴。暑し、風あり。――實に厭な日だ。「青年文壇」に一文をおくる。午後、足助來る。大してなす事もなく過す。原、宮原等より來信。吉崎より詩集到着、餘り感心せず。太陽の「世界の改造」を讀了。命尾先生來らず。

七月十日。（水）晴、風。――初心會の人々と鴻の臺及び柴又に行く。眞間手古奈の寺、弘法寺及び里見公園を訪ねる。八時半頃、歸來。敏行が少し具合が悪い。北の方の遠い雲の中で稻妻の閃めくのが見える。

七月十一日。（木）晴、風。――「文章世界」の爲に一文を草す。出淵その他の來訪を受けた。夜、宮原來る。

七月十二日。（金）午後、暴風。――「文章世界」に一文を送る。颱風が西部地方を見舞ふ。影響は東京でも感じる。久し振の風なので大變心持よし。敏はずつとよくなつた。夜、生馬來る。佐藤と鎌倉から來信。

七月十三日。（土）晴。稍〻涼し。――午後、母上の御用で熱海へ小旅行に出かける。小田原へ夕方着いたが、熱海行の汽車はもう出ない。入木に泊る。夜、箱根の方に散歩する。街が大變騒々しかつたので、よく眠れなかつた。

七月十四日。（日）午頃熱海に着く。直に別荘に行く。晝飯を成田と喰べる。大黒屋を訪れる。夜、石渡來る。彼等は來の宮神社の祭りの支度をしてゐた。たけが來た。

七月十五日。（月）夜、夕立。――新小説への原稿を書く。晝頃、別莊へ石渡と行き、別荘の火災保險を契約した。保險率は千圓に對し、七圓五十錢だつた。原稿を書き終へる。夜、來の宮へ參拜した、床に入つてから、たけが來た。熱海はどうも夏場の不道徳の盛り場だ。祭りのひどい騒ぎ。

七月十六日。（火）雨、併し午後から晴れる。――木田その他から手紙が來た。木田のは、甚だ鋭い手紙で、大變感動した。九時三十分の汽車で歸途につく。三時頃、歸宅。皆大變元氣で盂蘭盆の御茶を飲んでゐる所だつた。命尾來る、だが私は稽古しなかつた。有島が來た。

七月十七日。（水）晴。――朝は安子の三周忌の用事でつぶれた。足助を訪ねたが、盲腸炎を患らつてゐた。午後、足助

の爲に家を探す。高島屋に美術院の展覽會を見に行く。可成りいゝ。そこで偶然櫻井夫人に會ふ。夜、二兒を緣日に連れて行く。すつかり疲れて了つた。

七月十八日。（木）曇り。――早朝、家族全部及び生馬の家族と青山に行く、そこで神尾に會つた。午後は晩の準備をして過す。六時から上野の精養軒で三周忌の晩餐會を行つた。神尾、山本、高木、有島、江崎安子、石川緑子及び弟妹が集つた。九時頃歸宅。夜はひどく蒸し暑い。

七月十九日。（金）晴。――朝、みよが私に言ふには、行光は五時に目を覺まし、すゝり泣き始めたので、彼女が尋ねても何故泣くのか答へなかつたさうだ。可哀想に！　足助に會つたら、大變よくなつてゐた。著作集の仕事をする。夕方、櫻井夫人から鹽原（料理店）に招かれた。彼女の話は實に忘屈だ。

七月二十日。（土）晴。――朝、大橋圖書館に行き、著作集の仕事をする。夜、富澤孃が會ひにきた。櫻井と富澤を比較するのは、大層興味深い。前者は生れたまゝの性質であり、後者は後天的に作られてゐる。兩國の川開き。

七月二十一日。（日）晴。――太陽の鈴木が石山太柏氏の繪を持つてきてくれた。午後、足助に會ひに行く。大變よくなつた。與謝野夫人來る、安子の他の寫眞を少し見せる。それから佐藤孃來る。餘り面白くもない話。

七月二十二日。（月）曇り。――夜、月が大變美しかつた。午前、中央公論に出た里見の小說を讀む。「生れ出づる惱み」を少し書く。午後、足助に會ひ、千圓貸した。夕方、原田が來た。神尾の母上も御來訪。夜、分家で話す。

七月二十三日。（火）――八時三十五分の列車で、輕井澤へ三兒及び女中三人を連れて行く。途中は稍〻暑かつたが、着いたら全く淸々した。山本の子供達が驛に出迎へに來てゐた。皆大變早く床についた。昨夜、櫻井夫人から手紙を受取つたが、大變嬉しがらせを書いてゐた。だがそれは私を少しも動かさない。

七月二十四日。（水）晴。風あり。――六時に起き、畠の方に散歩した。大變爽快だ。朝、子供達を下町へ連れて行く。それから谷崎の「二人の藝術家の話」を讀む。西歐藝術の水準には達してゐない。午後、仕事をする。佐藤春夫の「指紋」も

讀む。大變洗煉された文體だ。だがそれだけだ。夜は滿月で、美しかつた。散歩して冥想に耽る。

七月二十五日。（木）晴。――朝の中、自分の仕事を一生懸命やる。午後、メレジュコフスキーの「先驅者」の始まりを多少の興味を持つて讀む。通俗小說の形を取つてゐる。少くともさう感ぜられる。夜また仕事する。富澤孃と足助から來信。五時富澤孃に返事を出す。宮部教授及び赤木に發信。

七月　十六日。（金）晴。――此處ですら大變暑い。朝、三兒を小瀨溫泉に連れて行く。皆、向うまでずつと歩いた。シモンズの "Italian Sketches" を讀む。たいして感銘なし。「石にひしがれた雜草」を書く。小瀨で神田男爵の家族に會つた。五時頃歸つて來た。直光と房子が今夜此處に着く筈である。母上と足助から手紙。

七月二十七日。（土）晴、甚だしく暑い。――一生懸命に仕事する。朝、直光と房子が會ひにやつてきた。東京は非常な暑さで、寒暖計はいつも百度以上に昇ると云つてゐた。夕方、子供を連れ、輕井澤に下つた。

七月二十八日。（日）晴、暑い。――一生懸命に仕事する。特別に記す事なし。夕方、東京から、愛子が東伏見宮殿下をお迎へする別莊の準備をしに來た。聯合軍は獨軍より少し優勢の樣である。獨軍は部分的な敗北を喫してゐる樣だ。

七月二十九日。（月）晴。――愛子と朝の中、長い事散歩する。それから彼女の新居の家具を整頓するのを手傳ふ。一日中、書いたり、讀んだりして暮す。何處からもこれといふ便りなし。

七月三十日。（火）晴。――夕方、大變爽快な夕立あり。夜は快く涼しい。少し書き、多く讀む。「石にひしがれた雜草」を書き終へる。執筆中、餘り感興を覺えず。母上より來信。母上及びその外皆、頑健の由。

七月三十一日。（水）稍ゝ曇り。――今日は僅かしか仕事をしなかつた。心熱〔此の語は原文のまゝ〕が餘り燃えない。山本が來た。「先驅者」を大いに讀んだ。メレジュコフスキーに關する見解が變りさうだ。彼は思つてゐたよりも、遙かに明敏である。足助、原、富澤、沼田、奈良等から手紙。

七月の思ひ出。
○「六月の日記」が新潮に發表された。
○「武者小路兄に」が中央公論に發表された。
○二十三日に三兒を伴つて輕井澤に行き、月末まで其處で過す。
○安子の三周忌の會を上野の精養軒で催した。
○「迷路」(著作集第五輯)が新潮社から出た。
○今後、足助が私の著作集を出版する筈である。
○富澤孃との交友が始まつた。

八月一日。(木)　晴、大變暖い。――「先驅者」を讀んだのみで、終日少々怠けて暮す。陶器製造の窯を見に行く。大變興味のあるものだ。夜、山本で謠。夜の十一時に再度窯を見に行く。

八月二日。(金)　朝甚だ涼しく、その後は甚だ暑し。――愛子は本當に思ひやりがある。今日は安子の三周忌なので、悲しみをまぎらさうと私を市場の方へ散歩に誘つてくれた。夕方、淑女畫報の記者が來て、三兒と一緒に私の寫眞を撮つた。夜、獨りで町の方へ散歩する。二三の雜誌を受け取る。

八月三日。(土)　快晴。――朝の中、下の町へ行く。母上は、勝見が安子に供へる爲め野生の花(松蟲草もその中にある)を少し私の處へ送つて來たと手紙に書いて下さつた。何て親切なのだらう！　櫻井夫人も安子の墓に參り、墓に咲いてゐた花の花瓣を送つてくれた。何と思ひやりの深い事だらう。夜、山本と直正が謠を歌ひに來た。

八月四日。(日)　快晴。雲もなし。――午前中散歩。それから專念仕事をした。鳥尾夫人、母上、菊野、鎌倉、その他より來信。櫻井夫人と勝見に發信。午後から謠をしに山本に行く。十一時迄談笑。目立つて涼しくなつた。

八月五日。（月）　晴。　――末光行三から手紙で、彼の妻の通衛が一日に死んだと知らせてくる。彼は實に氣の毒だ。澤田と鶴見氏の處へ行く。だが彼は丁度今朝、東京へ歸つた處だつた。それからテニス・コートに行く。家で、澤田及び若い方の鶴見と食事した。早く床につく。大變凉しい。信子さんその他から手紙。

八月六日。（火）　今朝豪雨があつた。氣温はひどく凉しくなつた。母上の御手紙では今朝は東京も凉しいとの事。終日家で暮す。向井は午後歸つて來て、夜の九時で東京に行つた。「生れ出づる惱み」を書き終へた。

八月七日。（水）　豪雨。　――終日家で暮す。午後、向井が東京から來た。雜誌を澤山讀む。何れも非常に面白くなかつた。白樺に、中央公論の私の文章に對する武者の書いた耳障りな言葉があつた。彼に手紙を出す。粘土で像を少し作る。

八月八日。（木）　晴。快晴。　――少し仕事する。藤澤及び黑田の訪問を受ける。午後、下の町へ行き、岡崎の家に命尾先生を訪ふ。それから新渡戸博士を訪ふ。併し東京に歸られた後だつた。

八月九日。（金）　晴。　――午後から山本の一家と子供達と一緒に峠に行く。藤澤も同行。疲れ切つた。

八月十日。（土）　晴。　――山本が夕方來る。朝、東伏見宮兩殿下が家にお見えになつた。それから私は榮へお供した。午後は山本の家で過した。

八月十一日。（日）　晴。　――晝食に山本のもてなしを受けた。午後、水泳場に行つた。夜、輕井澤を出發する準備。子供達、殊に行光は私が此處を離れるのを大變悲しんでゐる。深き憂愁に閉される。夜の一時三分に、山本と共に輕井澤出發。

八月十二日。（月）　――ひどい霧の中を六時に東京に着く。後に空は晴れ渡つた。母上は御元氣だつた。牛馬夫婦及び英夫に會ふ。夜、隆三も來る。午後、下町に輕井澤へおくる品物を買ひに行く。東京は隨分暑い。だが耐へられぬ事はない。氣持よく眠る。京都、大阪、名古屋、神戸等で暴動が突發した。

八月十三日。（火）　晴。　――母上を上野ステーションにお見送りする。母上は輕井澤へますと共に行かれたのだ。朝食後、足助を訪ねる。彼は大變よくなつた。新潮社の佐藤氏に會ふ。それから野村愛正に會ひ、雜談する。福田が圖らずもそこに

居た。夜、執筆に勵む。神尾の母が留守にお出でになつた。

八月十四日。(水)　晴――昨夜東京に暴動が勃發した。午前は神尾を訪問して過す。午後足助が來た。夜、夏目氏の本を讀む。或る處は興味あり、或る處はひどく無味單調だ。我々は我々の生活の途を平坦にする樣、何事かをせねばならぬ。

八月十五日。(木)　晴。――朝、出版の事で河合氏に會ふ。足助が午後から來る。政府は暴動に關する記事を一切掲載禁止した。馬鹿げた考へだ！　夜、加藤來り美術院の作品を批評してくれと云つた。私は斷つた。「旅の心」を書き初めた。

八月十六日。(金)　晴。――「旅の心」を書いて過す。午後、足助來る。夜、家で初心會。會員の外に沖野が一人加はつた。秋田が、「死とその前後」の試演を藝術座にやらせる事を、承諾するかどうかと尋ねた。夜は大變暑苦しい。

八月十七日。(土)　晴。――朝、「旅の心」を書く。午後、足助來る。頭痛を覺ゆ。按摩。夜、山内を訪ふ。二番目の子供が立派に大きくなつた。櫻井夫人が手紙を寄越し、明夕私を訪問したいと云つてきた。

八月十八日。(日)　――「旅の心」を一生懸命に書き、讀賣新聞に送る部分を終へた。夕方、櫻井夫人來り、信子と一緒に夕食。沖野から彼自身の作品に跋文を書いてくれと頼まれたが、斷つた。

八月十九日。(月)　晴。――朝、足助の處へ行く。午後は大變涼しい。生馬の夕食に招ばれた。與謝野夫人が手紙を寄越し、內的煩悶になやんでゐる一既婚婦人が、その憂鬱を治す爲に私に會ひたがつてゐると云つてきた。私は素氣なく斷つた。

八月二十日。(火)　晴、風。――晝は大變暑い。「旅の心」及び武者小路へ公開狀を書く。生馬と曉子が輕井澤へ行く。よし江さんが午後來た。

八月二十一日。(水)　曇り、甚だ涼し。午前、「旅の心」を書く。午後、代々木の方へ散步する。此の數日、頭痛がぶりかへして閉口してゐる。夜、長田秀雄來り、藝術座の私の「死」の上演について話す。讀賣の加藤も來る。橫山登志麿が來た。

八月二十二日。(木)　朝、曇り、涼し。午後、蒸し暑し。朝、「旅の心」を書く。午後、銀座に散步す。讀賣に寄り、上司氏及び加藤に會ふ。夜、第六輯の校正、足助が來て一緒に働く。

八月二十三日。(金)　晴。――午前「旅の心」執筆。命尾先生御來訪、晝食を共にす。午後大島流人來訪。それから校正。夜、足助來る。生馬と曉子輕井澤より歸京。行光が團扇に書いた繪には驚かされた。夜、氣候がめつきり涼しくなつた。

八月二十四日。(土)　晴。朝の中は涼しい。――朝、少し書く。午後は別に何もしない。生馬から曉子の誕生日のしるしに夕食に招かれた。又櫻井夫人からも招かれた。併し兩方とも斷つた。夜足助が來たが、原稿は來なかつた。

八月二十五日。(日)　晴。稍々暑い。――朝、足助の處へ原稿を持つて行き、初校を終へた。午後、婦人週報の記者、吉田清子孃が訪ねてきた。夕方、生馬と英夫と共に、藝術倶樂部に行き、私の「死と其の前後」の上演の事で島村抱月と須磨子に會つた。

八月二十六日。(月)　晴。――終日讀書して過す。ドストエフスキー及び歐洲旅行に關する本。生馬とその家族は日光へ行つた。

八月二十七日。(火)　晴。――午前、讀書。神尾の母來る。藝術倶樂部へ英夫と行く。午後、鎌倉へ行く。河野夫人に會ふ。夜は志賀の家で過す。十二時まで話す。

八月二十八日。(水)　暑苦しい。午後から小雨。――武久、小山、有田及び建長寺を訪ねる。建長寺で志賀に會ふ。それから志賀の處で晝食を食べ、夕方東京へ歸る。平澤來り、一緒に銀座に散歩に行く。銀座で行郎に送る品を買つた。津田の四女が死んだと知らせがあつた。

八月二十九日。(木)　終日嵐模樣。――朝の中、藝術倶樂部に行つただけで、ぢつと家の中で過す。藝術座との約束の爲め輕井澤へは行けなかつた。

八月三十日。(金)　晴。〔省略〕

八月三十一日。(土)　晴。――夜、末日會。

八月の思ひ出。
○「藝術制作の解放」が新公論に發表された。
○「自己と世界」が新小說に載る。
○「我が幼年の友及び朋友觀」文章倶樂部に。
○「大なる健全性へ」が文章世界へ載る。
○「若き友へ」を秀才文壇に發表。
○北信麿が死んだ。
○輕井澤から十二日に歸つて來た。
○私の「死と其の前後」が藝術座によつて二十日より二十五日迄、藝術倶樂部で上演される筈だつた。そして須磨子及び抱月氏と知り合になつた。

九月一日。(日) 晴。――朝、藝術座へ私の劇の本讀みを見に行く。それから神尾を訪れる。夜、宮原、原田及び彼のパトロンが來た。
九月二日。(月) 晴。――朝の中、少し仕事する。「先驅者」を讀了。甚だ感銘深し。夜、平澤來訪。
九月三日。(火) 朝、涼しく曇り。後、晴。――午前中少し仕事する。アメリカに行く舜三君を見送りに中央停車場に行く。輕井澤から歸つて來られた母上と子供達に上野停車場で會ふ。彼等は皆、非常に元氣だ。夜、足助が來た。
九月五日。(木) 晴。――夕方、歌舞伎座へ藝術座の「沈鐘」を見に行つた。それは全然失敗だつた。終らぬうちに歸つて來た。
九月六日 (金) 晴。――夕方、櫻井夫人から、有樂座に招待を受けたが、斷つた。そして彼女に日比谷公園で會つて散

歩した。

九月七日。（土） 晴。稍々蒸し暑し。――終日「讀賣」へ寄稿の文を專念に書いて過す。別に記す事なし。

九月十二日。（木） ――「生れ出づる惱み」が叢文閣の手で出た。

九月十三日。（金） 曇。鎌倉に行く。

九月二十日。（金） 大變暑 なり、風あり。――足助が二科と美術院 展覽會に行つてゐる間に、彼の家族に會ふ爲に、彼の家に行つた。第七輯の原稿の大部分を終へた。夜、鳴海要吉が來た。ローマ字について、大變面白い雜談。赤木夫婦が來た。

十月三日。（木） ――夕方から七日まで、私の「死と其の前後」が藝術座によつて、藝術倶樂部に於いて上演された。四日目と五日目は滿員だつた。多方面から批評された。

十月四日。（金） ――鎌倉が來て、調布に短かい氣持のよい遠足をした。彼は祕めてゐた過去を洩らしたが、それは非常に悲しいものだつた。

十月十七日。（木） 雨天。――鎌倉に行く。

十月十八日。（金） ――此の夕方、同志社大學文科の連續講演をしに、京都に立つた。あかまんやに滯在した。此の旅行の爲に用意された他の記錄を見よ。〔以下四四四頁九行までは別のノートに邦文にて記されしもの〕

十月十八日。（金） 此の夕方東京を出發して京都に向ふ。

早朝、青山墓所に到る。辨慶橋を渡りて淸水谷に入る。柳の枝芽をふき、櫻の青葉は殆んど落ち盡し、プラタナス僅かに殘葉を留む。日僅かに雲間を現はれし時庭に蟬の聲を聞く。暫時にして復鳴かず。

三河屋にて夕食を共にするもの母上、三兒、信子、あき子、隆三夫婦、英夫夫婦。隆三は余の保管上の事にて我れに不快を有するに似たり。京都より手紙にて話す事にして別る。四谷見附より電車に乘る、東京驛より乘車。空は未だ曇りたれど

も幸に雨なし。九時出發。寢臺に物をかける餘地なし。大船あたり迄起きてあらんとせしも望み空しからんと思ひて就寢。夢みる事頗る多し。河内完治前車にあり。

十月十九日。（土）　車中市河彥太郎よりの藝術座試演に關する手紙を見る。平凡他の奇なし。

朝五時離床。夜は明け離れんとしつゝあり。名古屋邊を通過。食堂に行き食事。Toast bread と omlette。歸時河内を誘ひて自席に歸り色々と話す。石龍子に人相を見て貰へりなど云ふ。窓外の山容極めてなだらかとなり、花崗岩質の山々所々白く赤く禿げたり。河内の云ふには、花崗岩質の山は極めて崩壞し易いから一度伐採して草木がなくなると、表土がどんどん雨水に流されて直ぐ眞土となり、到底樹木が生ひたち難い。中國邊はかゝる狀態が益〻甚しい。此の邊の水田は未だ苅り入れが餘りしてない（東京近傍は大方濟ましてゐるのにも拘らず）。而して雨害に遇つた樣も餘り目立たず槪して豐作の趣がある。此の邊は一帶に晩稻を栽培するのださうだ。（晩稻は收量は多いが品質は下るとの事だ。）

彥根の城は中々いゝ城だ。この邊から琵琶湖の湖尻が見える。家の二棟造りなのが非常に目立つ。思ひの外紅葉してゐない。柿の葉も所々赤いだけだ。〔此處に城を望めるスケッチあり〕

十時十八分に汽車は京都に這入つた。大島豐　早川三代治、八木澤善次、あかまん屋內儀が迎へに來てゐて吳れた。大島早川、八木澤と直ぐ同志社に向つた。荷物は其の儘宿の內儀に賴む。社長原田助氏の寓を訪れたが不在だつた。非常な好い天氣になつた。步いて居ると日の光が强過ぎる位だ。早川は學生寄宿舍で休息し、殘る二人と余と同志社校舍內を步いた。廢屋の樣な空虛な感じだ。

それから又三人で宿に歸り、河に面した部屋で中食を濟ます。生馬は稻荷の寫生から歸つて來て、之れも同座した。午後四時頃大島が迎へに來て行方、佐野、早川と共に電車で大津に行つた。それから汽船で石山に行かうとしたが駄目で、又電車の便を借りた。一ぱいの人。

栗津あたりでもう滿月が向うの山の上に出た。例の花崗岩の禿山が、まるで雪が處まだらに積つたやうに美しい。空の色

も何んとも云へない。石山寺に着いた時は寫眞も撮れない程暗くなつてゐた。紫式部の部屋の窓の所に立つて月を見ると、丁度杉の木立の間に眞正面に鏡をかけたやうに見える。御寺の內陣が眞暗で二つの燈籠に灯が這入つてゐる。その燈籠の唐草模樣の間を漏れる火の光が何とも云へずなまめいて居る。前の方には參詣人の灯(とも)した蠟燭が三四十。長いのや短いの。足探りをして步く位。晝間なら繪葉書を賣つてゐる所に行つてつくづくと月を見た。其處でパンを食ふ。(此處に月夜のスケッチあり)

歸る時には山門が締つてゐるので、事務所の庫裡に廻つたらとがめられた。門番が人好ささうに出て來て山門を開いて吳れた。門から山までの道の美しさ。大きな躑躅の木立。饂飩屋で松茸入の饂飩を三杯食ひ自動車に乘つた。大津の町では兵隊が夜間演習をしてゐた。山科と云ふ處を通る。宿まで送つて貰つて別れたのは九時位。十時頃就寢。幸に直ぐ就寢。原より來書。鎌倉と足助への手紙を京都から大津に持ち越して投函。

宿の前の疏水に水草あり、波のまにまにうねうねとどよめく樣は、盲目で物凄くてなまめかしい(しなを作るやうなそのしなひ方)曳船が時々通る。

十月二十日。(日)朝五時近くに電車の音で眼が覺める。六時近くに起きて直ぐ寫眞器を持つて散步に出る。膳所裏で遊廓の寫眞を撮る。智恩院の大門を見て感心し、この門一つで東京の建築を壓する事が出來ると驚く。丸山公園を拔けて大谷に出て歸る。一力を寫眞す。

朝食後大島來る。朝、"Civilization"を讀む。十一時散步。寢衣を大丸 Department Store にて買ひ來る。京都の department store は變なり。沐猴の冠するものなり。歸途人形を買ひ鎌倉に送る。生馬は稲荷に寫生に行く。生馬歸宿せる頃、長島氏來る。共に南座に行く筈なりしが、長島氏風邪の爲めにやめ。

午後一人にて博物館に行く。やゝ眞面目に見たるも準備なければ云ふ可き事なし。寫眞版三十一枚を購ひて歸る。歸途秀吉の墓に詣づ。石階五百十六(?)。市の眺望を得可し。一帶の構造は惡しからず。明治人の仕事としては規模の稍大なるを

賞す可し。唯豐富に於て秀吉を表徴せず。疲れて五時頃家に歸る。原久米太郎あり。事の意外に驚く。

夕食後大島に携へられて佐野氏宅に Ellan Vital の試演の稽古を見に行く。秋田氏の「三つの魂」と「少年の死」なり。未成品なる事夥し。第三高等學校の成瀨氏と同志社の宮氏に遇ふ。歸宅十二時。晝食前この宿の池大雅の畫を見る。大黑天、觀世音、大雅の要の山水、看板等。

十月二十一日。（月）　朝は花曇りのやうに曇つた。全く櫻の花でもぽつぽつ咲き出しさうだ。疏水の向うの一丈位の櫻の木と柳の葉は一つは稍紅らみ、一つは來芽をふいてゐるのまでが、春めいた感じを與へる。

朝十時から同志社に行つて、文科一年に Carpenter の "Civilization, Its Cause and Cure" を敎へた。十三四人の生徒で非常に心地よく敎へる事が出來た。

講義が終つてから原田社長の室で中食の御馳走になつた。原田と云ふ人は決して惡い人とは思はれない。tolerant な考も持つた立派な人らしく思へる。それにも係らず今日の新聞で見ると、東京の同志社支部では小崎弘道など云ふ人が先がけになつて社長排斥の運動が始まつたらしい。

中食後一人で相國寺に詣で、其の裏の竹藪の邊を通つて上加茂まで出ようとして、阿彌陀、西國寺などある通りを獨りでぶらついた。雲がなく日の光は歩くものゝ顏を燒き、背に汗を催させる程だ。野萩の花が紫に咲いてゐた。美しい蕪が車に積まれて市場に運ばれてゐた。

午後二時 chapel に於て開講した。社長が僕を紹介して呉れた。會衆は存外多く約五百五十人内外に達したと思ふ。Introductory speech をやつた。約一時間五十分。聽衆は喜んで聞いて呉れたやうだつた。

それから生馬と共に大島に伴れられて下加茂の方に遊びに行つた。堤上をぶらぶら行くと何とも云へずいゝ。其處に行く途中に立派な鞍馬の庭石を幾つも見た。葵橋は斷橋になつてゐた。加茂神社内の木立は美しかつた。殊に美しいと思つたのは地面だつた。社前などは重い砂を萬遍なく撒いた樣に淸々しかつた。

夜は生馬と共に同志社職員の晩餐會に列なつた。牛肉のすき燒、松茸。社長が東京にて反對運動の起りつゝある顚末を報じ、濵田氏が大にその不法なる所以を說いた。家に歸つたのは九時過ぎだつたらうか。今日は早く就寢した。

十月二十二日。（火）　多少の雲はあつたが晴れて暖かつた。メリヤスの shirt が屢ゝ汗ばむ。

朝九時から十時まで Carpenter の講義。今日は平安神社の祭日で、時代行列と云ふものが市中を練り歩くとの事で、一年級の學生に伴はれて烏丸通りに出で、二條通りから曲つて出て來る行列を見た。初め人道に群集して居た人々は、行列が來たと云ふと一度に車道に出て人垣を作つた。家々の窓からは盛裝した家族が顏を出してゐて鳳輦が來るとぱちぱちと手を叩いて一同拜をした。行列の順序は

弓箭組　隊長（桂吉之丞、田中吾內、小峰治三郎）

德川上使上洛式　小納戶（杉浦宇一郎、平野官治）小姓（吉川彌三郎、千藤幹三）城使（米山秋濤）簾番（廣瀨雄太郞）用人（田中繁次郞）近習（辻井佐一郞、山崎鶴一）御坊主（小泉秀太郞）番頭（佐々木重三郞）

織田公上洛式　宗入宗繼（西田惣太郞）羽柴秀吉（船越繁三）丹羽長秀（藤田作藏）織田信長（前田義次）瀧川一益（山本吉次郞）柴田勝家（永原辰之助）

城南流鏑馬式　藤原文官參列　公卿（田中善太郞）殿上人（戶田新兵衞）

延曆武官出陣式　將佐（奧村米次郞、片山喜一郞、辻太三郞）大將（西浦庄兵衞）將佐（濵田金吉、橫山源之助、內藤廣吉）

延曆武官參列式　三位（牧山信吉）四位（德岡忠三）五位（尾花榮治）六位（安井巳之助）

行列を見て居ると、可憐な赤坊が母の手から乘り出して私に戲れかゝる。母と云ふ人は內村氏の奧さんに似た人だつた。頻りに恐縮してゐた。

宿に歸つて晝食をすますと直ぐ岡崎公園の二科會展覽會場に行つて、生馬と宿の內儀とに遇うた。二科の會場は光線の具

合が甚だ面白くない。

二時から講堂で第二講演を開いた。聽衆前の通り。今日は少し慣れてゆつくりやつたんで大分論題が徹底したやうだつた。

それから野村愛正、谷川、八木澤等と御所の外苑を歩いて、二條の檜と云ふ本屋で謡本を買ひ、野村と分れ歩いて宿に行つた。檜の角に菓子のホールがある。谷川君が常に出入する所だと云うて八木澤君がからかつてゐた。谷川、八木澤と宿に歸つて話をしてゐると、夕方亦大島がやつて來た。而して我々をシコラの音樂會に誘つた。三人と宿の內儀とを連れて行つた。會場は青年會。九分通りの入り。シコラのセロには全く感心して仕舞つた。花島氏が歌つた。高々 lyrical なものしか出來ない。日本人は憐れだと思つた。

歸りがけに日吉屋の前を通つたから一寸富澤氏を誘うて遇つた。就寢稍十二時。この頃どんなに晩く寢ても眼の覺めるのが早いには閉口する。夜の空は大分曇つてゐた。夕方の西の空は何とも云へなかつた。

十月二十四日。(木)　やゝ曇り。多少涼しい。――朝、大阪へ生馬と共に行く。江崎に銀行で會ふ。三越に行く。文樂座で人形芝居を見物する。そこで薄田に會ふ。梅田から電車に乘る。御影に木村を訪れたが、留守だつた。花隈の吉野館に泊る。よく眠れず。

十月二十五日。(金)　晴、稍ゝ風あり。――河添を訪ねる。だが彼等は東京へ引越した。旅館で晝食。木村來る。午後、垂水に四本に會ひに行く。だが皆留守だつた。原の家に行く。夫妻共に風邪。須磨寺公園を見てから、神戸に歸つてきて、湊川を見、神戸青年會館にシコラの音樂を聞く。そこで美しい、若い支那夫人を見た。二人共呆然とした。

十月二十六日。(土)　晴。――晝に毅一が來た。一緒に料理店で食事をした。三時二十分の列車に乘つて、眞直に京都に歸つて來た。

十月二十七日。(日)　早朝、ひどい霧。――夜、大學のキリスト教青年會館のホールに、野村愛正及び弟と、講演をしに行く。野村は彼の文學生活の一年間の經驗を話した。生馬は美術について。私は「ブラント」について。滿員。

十月二十八日。（月）晴。――朝、同志社に行き、川田繁次郎氏の家で晝飯。講演の聽衆はぐつと減つた。だがその方が好ましい。

弟と私は新村出、藤代禎輔、平田元吉、成瀬清、林久男、瀧川柴、皆川行人等に招待された。

十月二十九日。（火）曇り。――同志社に行く。宿で晝飯。午後の講演が終つてから、學生が數人一緒に宿に來て、十一時過まで時間を費す。へと／＼に疲れた。

十月三十日。（水）終日雨。――鎌倉から神經質な手紙。暗い／＼思ひ。

十月三十一日。（木）風、晴。――午前は宿で暮す。晝食の直前、清水寺へ、生馬と行く。そこで彼に別れ、稚兒淵及び將軍塚に行く。それから高臺寺に行き、次に竹久を訪ねる。そして宿に歸つて來る。平賀、三浦及び志賀が關西學院から來た。南禪寺及び永觀堂に散歩。甚だ氣持よし。

十月の思ひ出。

○「運命と人」が中外に發表された。

○「有島武郎論」及び著者のそれに對する答が新潮に發表された。

十一月一日。（金）晴。――朝、生馬と大學へ行き、深田教授及び植田壽藏氏に會ふ。博物館を瞥見する。晝食後、宿に歸る。晝寢をする。夜、安成貞雄の訪問を受けた。行光、行三及び分家の家族殘らず、スペイン風にやられた。

十一月二日。（土）豪雨。――朝、大島來り、晝まで過す。午後、Telix clay の "The Origin of the Seuse of Beauty," を讀む。夜、二人が長島兄弟の中村屋（麩屋町）に招待された。藝妓を眺めてゐるのは面白いものだ。

十一月三日。（日）朝、霰あり。――生馬は東京に向け京都を去る。十一時に、私、大島、早川、野村、谷川及び八木澤

京都に着く。

は二條から汽車で龜岡に行き、そこから船を雇つて、保津の急流を下つた。天氣はよくなつた。紅葉した櫻の葉は美しかつた。嵯峨に着いてから、常寂光寺、二尊院、祇王寺、淸凉寺、大覺寺及び落柿を訪れ、嵯峨野から電車に乘る。可成り遲く京都に着く。

十一月四日。（月）天氣は少し怪しかつたが、小山氏と共に比叡山へ登らうと決める。我々は出橋から歩いた。八瀨及び大原に着く、大原では寂光院及び三千院を訪れる。寂光院の池の畔で默想する、三千院にある古い建物（九百八十年前の）を嘆美した。比叡の宿院に六時一寸前に着く。既に眞闇だつた。夜、雨ふる。

十一月五日。（火）ひどい曇り。時々雨。――今朝二時、島村抱月氏が東京で死んだ（これは六日に京都で知つた）。朝、根本中堂、大講堂及び戒壇院を見る。坂本に下り、そこから三井へ船にのる。それから疏水を通つて京都に歸る。大變神祕的だ。夜、小山氏と內儀とで、島原の角屋へ行き、花魁のかしを見た。小山氏の家に寄る。

十一月六日。（水）朝、晴、後小雨。稍〻涼しい。――朝、野村、大島、早川外一人來り、ホイットマンを讀む。それから一時五十分の汽車で、奈良に向ひ、三時半着く。天氣は非常に暗くなつてきた。奈良ホテルに泊る。大變靜かで淸楚だ。夜、鹿の聲を聞いた。鳶に似てゐるが、もつと悲しげである。

十一月七日。（木）朝の中、少し曇り、後晴れる。少し讀書してから、興福寺、東大寺及び博物館を訪づれに出かける。博物館で推古の觀音の一つを非常に歎賞する。ホテルに歸つてから、非常に讀み、少々知識を得た。夜は大變靜かに過ぎて行つた。坂田欽造氏を訪問した。

十一月八日。（金）晴れ氣味。――正倉院に行き、そこで水木要太郎、新納宮之介及び森鷗外に會ふ。遺物はすべて私には極めて興味があつた。今日、ホテルから魚屋に移る。宿に歸つてから讀書。夜、坂田氏が訪ねてきた。

十一月九日。（土）風、時々雨。――今朝、法隆寺へ行かうと決心したが、宿の不注意で汽車に乘りそこなふ。そこで嫩草山及び春日神社に行く。宿に歸ると工藤がきた。講義の準備を一生懸命やる。

十一月十日。（日）曇り、寒し。――大島と谷川、京都より、澤田、神戸より來る。一緒に散歩する。大島の話では、同志社は惡性感冒の爲に來週も休校するさうだ。京都へ夕方歸る。

十一月十一日。（月）曇り、嚴しく寒い。――水が凍つた。原が手紙で、俊子が又風邪にやられ肺炎と脚氣を併發との診斷を受けた由言つてよこした。甚だ氣懸りなり。終日、在宿。客が十三人訪ねてきた。大層疲れる。「小さき者へ」が私の處に屆く。

十一月十二日。（火）晴、幾分暖かし。――午前、ホイットマン。一自稱作家が丹波の栗田村からやつて來た。彼の作品を讀んで、全くがつかりした。聯合國と獨逸間に休戰成立す。實に快い。櫻井鈴子が京都にきて、あかまんやに逗留してゐる。夜、秋田の戲曲の本讀み。夜非常に晩く宿に歸る。原から手紙で、俊子の生命が危いと知らせてくる。大變心配だ。異樣な淋しさを感ずる。

十一月十三日。（火）快晴。――朝、大學病院に行き、俊子の病狀を飯塚氏に尋ねる、危篤だと彼は考へてゐる。宿に歸ると、彼女の死の知らせが原から來てゐた。一時十五分の列車で七條を立ち、原の家に四時頃着く。氣の毒な事だ。どう慰めたらいゝか判らぬ。ずつと彼の處に留まる。十二時頃寢入る。俊子は今朝八時に死んだ。最も痛烈な不幸は豫期せざる不幸である。俊子は大きくなつて、美しい愛を知るべきだつた。

十一月十四日。（木）朝から烈しい雨。――これぞと云ふ事もせずに終日過す。晝頃、入棺式。夜、祈禱會。その時、木村に會ふ。俊子は本當に賢こかつた。原の母が今朝來た（入棺式の頃）。夜、通夜。原の母は大變面白い事を話す。朝、三時頃床に入る。

十一月十五日。（金）晴、暖かし。――今朝、花園に行き、花環を註文する。出棺式は十二時に始まつた。須田と云ふ人と一紳士が私に會ひに來た。俊子の葬式は十時に須磨敎會で行はれた。それから火葬場へ。そして原の處へ歸つて來た。夕食後、七時三十四分の汽車で京都に歸る。木村、三の宮まで同行。原は私を驛に見送つてくれた。

十一月十六日。（土）快晴だ。――午後から櫻井夫人及び大島と北山へ散步に行く。永觀堂、松蟲鈴蟲の墓を訪ねる。銀閣寺及び上加茂。月は非常に美しく登つた。綺麗な日沒。夜、エラン・ヴイタル劇場に行く。

十一月十七日。（日）曇り。原神戶より來る。夜一緖に大丸に芝居を見に行く。

十一月十八日。（月）曇り。時々、雨。――原が今朝ゐるので一緖にわらじ屋で晝食。同志社に於ける最後の講義。私は非常に感情に動かされて、涕泣せざるを得なかつた。

十一月十九日。（火）雨。朝は色々片附けに過す。午後、大學に行き、植田氏から借りた本を返却した。夜、京極に行き、土產物を少し買つた。

十一月二十日。（水）快い天氣。――櫻井夫人と共に、九時二十五分の列車で京都を立ち、東京に八時半到着。家では皆、丈夫で元氣だつた。月が甚だ美しい。

十一月二十一日。（木）曇り。――朝、早川が辻嬢と共に來る。それから原田助及び山本を訪れる。直良はまだ臥床してゐた。午後、子供等を自動車にのせ、日比谷及び宮城前の廣場で行はれた休戰祝賀會の有樣を見せに連れて行く。伊東春治が死んだ。

十一月二十二日。（金）〔省略〕

十一月の思ひ出。――「小さき者へ」が叢文閣から出た。

〔卷末に次の文字あり。

「余は憎むと共に愛する。余は汝と共に生き得ざると共に、又汝を離れて生くる事能はず」

又同意義のラテン文もある〕

第二十一卷

一九一九年（大正八年）〔原文英文、編者譯〕

一九一八年の覺え書。——東京の家で一年過す。母と三兒は酒匂に滯在。

一月三日。（金）——午後、山本へ謠會に行く。發熱す。夜十時には約三十九度二分。臥床。

一月四日。（土）——まだ臥床。

一月五日。（日）——まだ臥床。朝五時、松井須磨子が縊死して島村の後を追ふ。命尾先生も、九時に逝去。何と言ふ事だ！

一月六日。（月）風ひどく寒し——午前十一時頃、松井に告別の爲め藝術座に行く。それから命尾先生の處へ、次に安藤の處へ。此等三人の死には、三つの明かな相違がある。私は此等の出來事に對して、冷靜な觀察者とならざるを得なかつた。夕方、櫻井夫人來訪。

一月七日。（火）——青山齋場で三時から松井須磨子の葬式。大變寒い日だつた。曇つた空。午後、山內へ行く。彼の家はまだみじめに混雜してゐる。行光、白井が酒匂から歸つて來た。

一月八日。（水）晴。やゝ寒し。——午前中通信に過す。

一月九日。（木）曇。夕方から雨。——朝、按摩。今日床上げ。木田の展覽會の爲、額緣を磯貝に註文した。第一回の校

正を叢文閣に返送。午後、安樂寺（谷中三崎町）の命尾先生の葬式に參列。次に安藤の母の處へ（青山）。墓地にお供した。

一月十日。（金）――行光が夜から病氣になる。熱が隨分高い。

一月十一日。（土）――行光の病は耳下腺炎。

一月十二日。（日）――午後から足助の店を訪ねる。坂田と一寸會談。それから三河屋へ行き、漁業懇親會に出る。横山のシベリア旅行談は面白かつた。

一月十三日。（月）曇、幾分霧あり。――行光の病はずん〳〵快方に向つた。朝、下町に行き、"Giotto and his Followers" を丸善で買ふ。酒匂の女中が皆風邪をひいたので、ますを向うに遣る。久滿俊泰が來訪。彼は私が渡米の際の同船の一人である。これ程歲月を經てからかうした人に會ふのは甚だ樂しいものである。今日はパリで平和會議の準備會が開かれる豫定。

一月十四日。（火）晴、風ひどし。――朝は早稻田文學への一文を書いて過す。午後、山本を訪ふ。それから民衆花壇小賣部に行き、原田に會ふ。「野性の呼び聲」の出版について話す。樋口病院入院中の櫻井夫人に、花を送る。夜、早稻田への一文を書き終へる。七頁。西園寺がフランスに向け神戶を出發。

一月十五日。（水）晴、寒し。――「リヴィングストン傳」の序として論文を書き始める。藤村の「新生」を買ふ。午後、遠武金橋來り二時間程、雜談する。彼は時間の價値を知らない。それから徒步、市村座に行き、一幕見る。入浴。櫻井夫人、生馬、母、ティルディに手紙を書く。行光はずつとよくなつた。英國の內閣が變つた。ニイチェの「善惡の彼岸」を讀む。母上、龍田秀吉等へ發信。

一月十六日。（木）晴、暖かし。――今朝、生馬熱海より歸來。夕方から哥子發熱。午前、原稿執筆に熱中。午後、宮原に會ひに行く。彼の健康、著しく囘復せり。行光稍〻加減熙し。

一月十七日。（金）晴、暖かし。――朝、大塚つま（讀賣記者）と云ふ未婚の婦人が訪ねて來て、入門を望んだ。斷る。午後、行光の玩具を買ひに、下町に行く。夜、生馬と隆三來り、十二時まで話す。

一月十八日。（土）晴、暖かし。――朝、足助來訪。彼は大變よくなつた。一時に母上酒匂から御歸京。母上の御風邪氣

はまだとれない。無爲。警醒社が來る。加藤一夫來訪。

三月三十一日。――後備役滿期。今日から「或る女」の原稿執筆の爲に、圓覺寺の松嶺院に閉居する。千代が一緒に來て、私の部屋を綺麗に掃除してくれる。天氣はよし、梅の花はもう散り、一重櫻が咲き始めた。桃も咲き始めた。桝屋で食事する――兩眼に白つぽい膜がかぶさつてゐる少女。夜は風邪の爲、十時に寢る。森本、警醒社等へ發信。夕食後、千代田に一寸寄つた。

三月の覺え書。――「或る女」前編脫稿。「完全の鏡」へ序。「野性の呼び聲」に書後。新小說に「春」。白樺に「ブラント」。我等に「雜信一束」。東方時論に「リビングストン傳の後に」。「或る女」、二十五日に發賣。

四月一日。（火）晴、風。――午前、一生懸命に仕事する。一日に十八頁書く。足助より葉書。母上と足助へ發信。陽氣は可成り寒く、丹前を重ね着する程である。山本正一（若い僧）が今日から此の寺に泊る。謠を詠つて、咎められた。新聞を少しも讀まないので、まるで、此の世から天國に昇天した樣な氣がする。頭腦はすつかり明晰になつた。ゴーティエの “Malle de Maupin” を少し讀む。昨夜、玉井が、鎌倉海岸の心中の話をしてくれた。

四月二日。（水）又も靜かな夜と美はしい朝。鐘聲と讀經の聲で、五時半頃起される。專念に仕事をする。今日は鎌倉自治制成立二十周年の祝典の第一日なので、群集が寺の庭に參集し、仕事を少なからず妨害する。東京から澤山手紙來る。その中に三井のがある。和田うめ子が會ひに來た。彼女は「女性」の記者になる筈。夕食を千代田で食べる。寺に十時頃歸る。往來で醉拂ひが斯う歌つて行つた。

切れて別れりや他人と他人
他人に用はないけれど、赤の他人た他人が違ふ。

四月三日。（木）朝、快晴、八時半頃から曇る。――一生懸命に仕事。三時五十八分で東京に行く。生馬の處でもてなされる。外に來客多勢。行光が少し加減が惡く、臥床。

四月四日。（金）晴。――朝、足助來る。共に美術學校に兒島の展覽會を見に行く。だが既に濟んでゐた。彼と「世界」で晝飯をたべる。それから圖書館に行つたが、滿員で、入館できなかつた。夕方、鎌倉に歸る。夕食後、すぐ床に入る。熟睡。

四月五日。（土）曇り。時々靜かな陰氣な雨が音もなく降る。朝、千代來る。一緒に丘の上をそぞろ歩く。途中で雨に遭ふ。午後、足助と高松が會ひに來る。一緒に小町園に行く。八幡神社境内の眺め、實に美事。櫻花ほころび、木々の新芽が萠え出した！　九時歸宅、十一時半まで仕事。熟睡、一夜中雨降る。

四月六日。（日）朝、慈雨、それから晴れる。太陽はすべての物を、惠み深い溫さに浴させてゐる。巡禮が多くて仕事を妨害する。境内を少し散歩する。佛日庵にある八重櫻は見事な蕾をつけてゐる。啄木鳥が杉の茂みで鋭い聲で鳴いてゐる。山田鐵が前觸れもなく來る。彼は不相變、ペシミスティックだ。晝、三兒が戶川と太郎と共に來る。一緒に要山に散步。停車場に見送る。可成り疲れて歸宿。稍ゝ早く就床。原と福永から手紙。春陽堂から十五圓三十錢受け取る。

四月七日。（月）朝、雨もよひの空だつたが、九時頃から、からりと晴れた。少々仕事。それから「野性の呼び聲」の表裝をしに千代田に行く。ちよと少し話す。彼女には少々厭になつて來はじめた樣だ。夕方歸る。淺井と原から來信。今夜、此處に泊つて居た林と言ふ男が東京から歸つて來て、或る僧の無禮をなじつて大騷ぎをしでかした。彼の居た場所をその僧が占めて居るのだ。この時ならぬ騷ぎに、目を覺まされてしまつた。夜中强風吹きすさむ。〔欄外に邦文にて〕蜜蜂の飛ぶを見る。蚊出づ。刺しはせず。螢を見たりと言ふ人あり。

四月八日。（火）――からりと晴れ渡つた朝だ。風のお蔭だらうと思ふ。春と云ふよりも寧ろ秋の氣分だ。佛陀の生誕を祝ふ儀式が擧げられた。私は寺院の外からその有樣を視た。非常に莊嚴なそして趣きのあるものである。佛陀の立像の收められた小さな厨子は澤山の花で（椿・山吹、櫻、こゞめ櫻等の花）で飾つてあつた。仕事に專念する。夜、空は晴れて穩かだ。

月は美しい。蛙が鳴いてゐる。すべての物が、人を戸外へ誘ひ、ほゝゑみを心に浮べずには居られなくする。部屋の中にちつと坐つてゐるにしのびぬ。そこで八時半頃出かけて、上の寺まで散歩する。千代が一緒に來る。

〔欄外に邦文にて〕ぶよが出て來る、蝿が活潑に飛び廻る。子供がやまかゞしが出たと云ひ居たり。

四月九日。（水）晴。――此の年の春正に酣。八重櫻が滿開。一重は散りはてた。椿の花が盛んに散る。激烈に仕事をする。仕事は大いに進んだ。夕方、千代田に行き、壽司を喰べる。我々の關係は絶たれつゝある。多分良結果だらう。十時に歸つて來て、すぐ寢る。目覺めがちな夜を三晩程過す。山本は昨日、四五日の豫定で東京に行つた。で、我々は明日の小旅行の計畫を取り止めた。先年、鎌倉に滯在してゐた時、知合ひになつた婦人が、晝、會ひに來た。馬鹿な女だ。

四月十日。（木）――まだほの暗い中に起き出たら、靜かな雨が降つてゐた。終日、稍々強い雨が降りつゞける。十二時半に千代が東京から衣類をもつて來て、一時半に歸京。それから熟睡。十一時まで專念仕事。昨日山田の父から、息子の行方が不明になつて、心痛して居る旨の手紙を受け取つた。

四月十一日。（金）――早朝空は晴れ渡つたが、霽れたかと思つたら、また雨が降つてきた。温度は急激に下つた。鎌倉に山田の行方を尋ねに行つたが、徒勞だつた。それから由井ヶ濱小學校に行き、若しや私の作に役立つ本がないかと探して見たが、之も徒勞に終る。圓覺寺への歸り道に雹と雷に會ふ。山門の處で、美しい女に會つた。女優らしかつた。山内の父に手紙を書く。今日はありとあらゆる天氣を經驗した。〔欄外に邦文にて〕菜の花散らんとし大根の花今が盛り。

四月十二日。（土）朝の中、大變寒し。――五時半に起きる。空は終日晴れてゐた。千代がさぞ寒いだらうと考へて、綿入を塗り返してくれる。有難い。一生懸命に仕事。二十六頁書く。夕方、葛原神社の方に散歩する。非常に淋しい處だ。麥畠ではあちこちに穗が出始めた。桃の花はあらかた散つて了つた。梨も同樣だ。原稿に使ふ爲に、「太陽」の舊號を探したが徒勞だつた。茅野夫人、與謝野夫人から手紙來る。柳がホイットマンについて「白樺」に論文を書く樣に、頻んでくる。だができるかどうか判らない。月麗し。

四月十三日。（日）快晴。午前甚だ寒し。――何の妨げもなく一生懸命仕事。ある讀者、綾部倫行、沖野氏から來信。丘教授の論文を讀む、多少の興味あり。夜、蚊を殺して、ひどく後悔する。毎晩梟の聲を聞く、悲劇的でもあり喜劇的でもある。井戸の底からはひあがつて來た小さな蛙が、手桶の上に坐り込む。私には素晴らしい珍客だ。夜、空は曇る、薄雲の蔭の月は殆ど滿月に近い。今日は寺に巡禮多し。

（欄外に邦文にて）雀が啼く。何の故のよろこび。そと開いて見度い位。楓の葉が稍〻堅き感じを持ち出したり。來た時には芽なりしが。

四月十四日。（月）曇。――午前少し書く。それから一時四十九分の汽車で東京へ行く。博文館に行き、太陽の舊號を讀む。次に沖野が祕密に話す幸德秋水に就いての話を聞きに學士院に行く。實に言語道斷だが、又津々たる興味もある。しかし沖野が無意識に附け加へた作り事が、どうも混つてゐる樣に思はれる。十時四十五分の汽車に乘る。大船に着いたのは、十一時四十五分だつた。歩いて寺に歸る。雲の蔭の月が美しい。四邊靜寂。十二時四十分就床。

四月十五日。（火）快晴。又曇天、時々雨。夜になつては、まるで夕立の樣に激しく降り注ぐ。午前中、氣分がよくなかつたので休息。森本の論文を通讀。森本に手紙をかく。よし江からライラックの花が來た。淺井蠖から手紙、甚だ面白い。十七頁書いて、夕食後千代田に行く。篠つく雨の中を院に歸る。大變に氣分がさつぱりした。

四月十六日。（水）晴。――晝前、部屋に閉ぢこもり、一生懸命に仕事。晝から富田碎花と百田宗治來る。彼等に寺の境内を見せる。富田の「草の葉」の飜譯に、一文を寄せる事を承諾する。彼等が訪ねてきた爲、私の頭は混亂して了つた。そこで千代田へ行つて宵を過す。午後は曇つた。

（欄外に邦文にて）八重櫻殆ど散り盡す。

四月十七日。（木）曇。――大いに仕事。三十頁近く書く。それ位書くと、私のエネルギーは殆ど盡きて了ふ事がわかつた。野村がやつて來て、その妹のいそ子の戀愛事件について相談した。この事件については、當惑の外なし。夕方、弓をひ

きに、鎌倉に行く。十一時まで仕事。

〔邦文にて〕柳屋の時ちやんと云ふ兒可愛ゆし。年五歳、人形を買つて持つて行つてやる。格別喜んだ樣子もなく、見た許りで急に駈け出す。友達に吹聽したい爲だとわかる。

四月十八日。(金) ――千代と共に金澤に行き、終日その地で過す。夕闇の中を朝日奈街道を通つて鎌倉に歸る。寺に歸つた時は、可成り疲れて居た。留守に英夫來訪。彼の近刊の「我」の題字を書いてくれとたのんで行つた。「泥龜」の芍藥が滿開だ。貝殼を少しひろつて歸つた。

四月十九日。(土) 曇り。――午前一生懸命やつたが餘り澤山ははかどらない。午後、畫家の有田が會ひに來て、夕方まで居た。彼の訪問で仕事の熱がそがれた。夕食後、インクを買ひに千代田に行く。夜、原稿の精讀。餘り滿足できぬ。十時半頃床に就く。蛾がランプの處へやつてくる。袷が丁度いゝ時候だ。夜豪雨。〔此處に蛾の畫あり、略す〕

〔欄外に邦文にて〕牡丹稍ゝ咲き始める。木苺の花七分は散つて小さい實が見える。梅の實の大きさ大豆の大きなるもの程。

四月二十日。(日) 快晴。けれど袷では寒い。外套を着て、柳屋に行く。澤山の人がそこを見に來て居た。水間氏から明朝會つてくれと言ふ電報が來た。斷りの電報をうちに、停車場に行く。十時半まで、仕事。甚だ進捗する。誰からも手紙なし。〔以下二行邦文〕

「地獄のつりかぎ」――根の長き雜草、それにて地獄が吊られてゐると云ふなりとぞ。今日、見物に歩き居る百姓の人達の話。あゝ云ふ人の歩いてゐるのを見ると御禮がしたい。威嚴のある顏を持つて居る人が澤山居る。

四月二十一日。(月) 晴、甚だ暖し。――朝、戸川と關が鎌倉に來り、昨年我々が滯在中使用してゐた物品を荷造りする。彼等は小山夫人の宅に滯在。晝前に仕事は終つた。手傳ひの者は東京に歸つた。それから志賀及び河野夫人の處へ行く。志賀と小町園で夕食をする。十一時半頃、宿に歸る。降り出しさうだつたので、傘を借りに千代田に寄る。今晩は鎌倉圓覺寺逗留の最後の夜である。一日に平均、十八頁程書いた。成績はさう惡くはない。だが稿了には至らなかつた。

四月二十二日。（火）　晴。――出發の日。千代が荷造りを手傳ひに來る。十時に寺を出る。晝食は千代田で取る。三時頃、家に歸る。それから學士會館に沖野の話を聞きに行く。

四月二十三日。（水）　晴。――朝、足助の處へ行く。吹田が今、東京にゐる事を知る。夕方、吹田、宮原、足助と私が牛込の常盤に會する。そして十一時半頃までも、話す。足助と吹田はすつかり醉ふ。大變樂しい夜。お濱と云ふ女中が給仕した。今日、十五銀行に行き、松方氏に會ふ。氏は、朝日新聞ではボーナスは別で年俸三千三百圓の條件で、私に同紙にばかり書いて欲しいとの意向だと告げらる。私は束縛されるのを好まないから、斷る積りだ。

四月二十四日。（木）　晴、風あり。――來客多し。無爲！　恥ぢよ！

四月二十五日。（金）　晴、風。――昨日同様の天氣だ。夜、櫻井夫人が（床に入つてから）やつて來て、護符と綺麗な着物をくれた。母上と、高木（兼二君病篤し、チブス）、園田、富永、瀨脇を訪問。瀨脇醫師の病、益々惡し。君子はすつかり大きくなつて、大變綺麗な、魅力のある娘になつた。

四月二十六日。（土）　晴、ひどい風。生馬が山本の母、山本の若夫婦、尺夫婦を接待した。母と私もその席に列なる。餘り面白くなし。明日、京都に出發する爲に、その準備を一生懸命とゝのへる。

四月二十七日。（日）　晴、風あり。――東京驛を八時半の列車で京都に立つ。市ケ谷から省線で、驛に行く。（萬世橋から驛までの間をそれに乘るのは初めてだ。）足助が同行する。旅の詳細は私の手帳に綿密に書いてある。それを參照の事。京都驛では、八木澤、谷村、お初さん、他に二人の學生に迎へられた。宿の人は皆元氣だつた。三浦直介氏も同宿。京都は何時も美しい。

四月二十八日。（月）　晴、少し風あり。――足助と宇治へ行く。麥藁製の被ひが茶の木にかゝつてゐる。茶摘みはまだ始まつてゐない。燕が飛んでゐるのを見た。高田の鐵工場で、谷村に會つた。それから花屋で晝食。鳳凰堂と興聖寺を訪ふ。兩方の庭の若葉が見事だつた。鳳凰堂の鐘の美事な技術を嘆賞する。京都へ四時頃歸る。吹田と原が既に我々を待つてゐた。

それから成瀬來る。十一時まで大宴會。吹田は此の夜二時、鹿兒島に出發した。千代より手紙。熟睡出來ず。

四月二十九日。（火）　天氣よし。――多少の準備をする。午後から同志社で第一回の講義。聽衆約百名。歸り途に中川の告白を聽く。涌島が我々を訪ねてきた。足助、原、涌島、大島と共に平野屋で夕食。それから、前記の二人は原の家に行つた。夜、祇園踊を見る。生馬と信子から手紙來る。非常に熟睡した。

四月三十日。（水）　雨。――燕は澤山になつた。朝、少々準備。午後講義。藝術に關する講義を終へた。夕方から、八木澤、日高、大島及びその他の學生（七人）來り、十時までゐる。

五月一日。（木）　雨。――九時半の汽車で、法隆寺驛に行き、安堵村に富本の一家を訪ねる。大いに歡待さる。夜、夫人から三井について氣の毒な話を聽く。富本の家に泊つた。この邊りの建物は非常に特色があり、美しい。大變氣に入つた。

五月二日。（金）　――十時に富本家を辭す。奈良に赴き、藥師寺と唐招提寺を訪ふ。三尊と觀音は美麗で莊嚴である。唐招提寺の建物も亦注目に價する。境内も印象深いものだ。京都に夕方歸る。大阪朝日の上野精一氏來訪、私の朝日入社の件について話す。夜、大島來る。

五月三日。（土）　ひどい風。時々雨。――朝、弓を引きに丸山に行く。それから三十三間堂へ行く。だが弓を引くのにいい場所が見付からなかつた。朝は宿で一生懸命に仕事する。夕方久保正夫、八木澤、谷川來る。金水で後の二人と夕食を喰べる。市川が手紙をよこし、矢田との悶着のことを述べて寄越した。

五月四日。（日）　晴、少し風あり。――朝二時頃、家より電報で、兼二君昨夕四時死去の知らせ。それを聞いてから、夢に妨げられて、どうしても寢られなかつた。朝、一生懸命に仕事する。午後から嵐山大悲閣の方へ散歩。其處から太秦太子堂と妙心寺へ行く。美濃庄で夕食を喰べる。十時頃床に就く。〔邦文にて〕藤の花盛り。躑躅も盛り。

五月五日。（月）　午前仕事に專心。午後大島と一緒に壬生狂言と光悅寺を見に行く。夜、平塚（學生）來訪。

五月六日。（火）　快晴。――朝、講義の準備の爲め、烈しく勉强する。午後ホイットマンの生活について講義。二時半迄

續く。終つたら、可成り疲れた。夕方、お初さんと大島と丸山の八友に行つて、夕食。丸山の高臺からの眺めは美しい。十時頃、歸來。直ちに就床。月は次第に滿ちて來る。

五月七日。(水) 晴、曖かし。——皇太子殿下立太子式を擧げ給ふ。學校は休日。朝、手紙を少し書く。すると久保と山内(高工の講師)が私を醍醐に誘ひに來る。電車を藁地藏で捨て、三寶院と法界寺を訪ねる。それから電車で黄蘗山へ行く。京都へ夕方歸着。神田川支店で夕食。神田川に張出しが造られかけてゐた。夏の來るのを思はせる。可成り疲れた。

五月八日。(木) 晴、曖かし。朝、少し書き、成瀨の「東山の麓より」を讀む。午後、擊劍の試合を見に武德殿に行く。夕方、成瀨を訪問。二人の娘(七つと四つ)は可愛く、悧巧だ。彼と共に都ホテルに行き、大津(第一高等學校の獨逸語の教授)に會つた。それから漱石や虚子と知合ひだつた高子に會ひに大友に行つた。併し留守だつた。十二時半ホテルに歸來。

五月九日。(金) 又も快晴 ——お初さんの取りはからひに感謝する。私は安樂壽院の境内で、近衞、鳥羽、白河諸帝の御陵の傍で、左京油小路の北向不動堂に宿所を得た。食物は粗末だが、氣にはならぬ。一人の僧と老いた下婢が一人ゐる許り。部屋は北向(六疊)、全く靜かだ。午後、一生懸命に仕事し、三十頁書き上げる。夜晩く大島が會ひに來た。手紙を少し持つて來た、その中に信子からのがあつた。母親と和解するのに、私に力を貸してくれと、懇願してゐる。

〔欄外に邦文にて〕菜種の實凡そ實る。椎の古葉が風の爲にちらちらと散る。夜蚊多く出だしたため蚊帳を吊る。」

五月十日。(土) 晴、大變蒸し暑い。——一生懸命にやつたが、仕事は餘り捗らなかつた。どう云ふ譯か、大變疲勞した。朝十時頃、大島がパンやその他の食料品を持つて來る。晝飯後、彼と城南寺を訪ねる。午後、又一生懸命にやつたが、仕事が捗らぬ。で夜は仕事を拋棄した。その代りに、「或る女」の卷末に附ける筈の一文を草す。

五月十一日。(日) 曇、後、雨。——仕事は餘り捗らない。晝、大島來る。晝食後、京都に歸つて來た。夜、仕事に熱中する。殆ど不眠。雨の中に夜が明けた。燕が眞先に囀り始めた。

五月十二日。(月) 豪雨。八時五十分の汽車で神戸に行く。郵船の事務所で穀一に會ふ。コンティネンタル・ホテルで晝飯

を喰べる。それから廣間で講演をする。聽衆約百二十名。木村の家を訪問、原も同行。牛肉屋で夕飯。十一時頃、京都に歸來。可成り疲れた。絶えず電報で催促して來る足助に、「或る女」の原稿を送る。

五月二十四日。(土) 東京女子大學講堂(午後一時)。

五月二十八日。(水) 女子青年會館講演(午後二時より)。

五月三十一日。東京女子大學(午後一時より)。

六月四日 女子青年會館(午後二時より)。

六月十一日。女子青年會館(午後二時より)。

七月二十一日。(月) 晴。——大變暑い。三兒、大島、みよを連れて北海道の旅に出る。車中で夜を過す。甚だ暑苦し。九十二度。

七月二十二日。(火) 晴。——朝七時頃、青森に到着。直ちに船に乘る。三時、函館に着く。夜は大沼公園に宿泊。早川三治が同宿。

七月二十三日。(水) 小雨。——五時札幌に着く。森本の所へ行く。樂しい再會。

七月二十三日。
八月一日。 }札幌。

八月二日。(土) 晴。——朝八時頃札幌を立つ。狩太に三時頃着く。

八月三日。
八月四日 }狩太。

八月五日。(火) 豪雨。——十時頃狩太を立つ。雨でづぶぬれ。函館に着いた時は、全くの嵐だつた。勝田旅館に宿泊する。偶然勝見に會つた。

八月六日。（水）　烈風。併し我々は思ひきつて船に乘る。此の冒險は併し、成功した。航海は素敵だつた。青森から一時の汽車に乘る。

八月七日。（木）　快晴。――七時東京着。家に歸り、入浴。それから輕井澤に出發。

八月十五日。（金）　――在輕井澤。夏期大學の課外講演會で講演。題目は「ホイットマンについて」。

八月十六日。（土）　――再び講演。聽衆に多少滿足を與へた。

八月十七日。（日）　弟等を見送る爲に歸京。

八月二十一日。（木）　――此の日、行郎と隆三夫婦諏訪丸で米國に渡つた。

八月二十三日。（土）　――再び輕井澤へ行く。

八月二十九日。（金）　――輕井澤より歸京。

九月五日。（金）　――ロシアの歌劇を見る。

九月十三日。（土）　――大島豐、洋行。

九月二十日。（土）　――女子大學講演（午後二時より）。

九月二十七日。（土）　――東京女子大學講演（午後二時より）。

十一月十二日。（水）　午後一時半。東區淸水谷女學校（上本町二丁目）。

十一月二十七日。（木）　――大學青年會館。六時半。

十二月五日。（金）　――大學青年會館。

十二月十一日。（木）　――大學青年會館。

附録

最後の日記

一九二一年（大正十年）

十一月九日。――長く打捨てゝ置いた日記を今日から又つけ始める。これは全く私の備忘の爲めだ。

朝から天氣は晴れた。袷に綿入羽織では少し寒い程だ。

行光が風邪の氣味で一昨日から學校を休んで居る。敏と行三とは學校の遠足に八時に出かけた。

大演習の飛行機が五六臺宙返りなどを打つて東京の空を飛んだ。行光と二階の窓からそれを見る。少し操縦法を心得て來たやうだ。

朝、三好孝三氏と灰谷やす氏との原稿を見、小評を書いて送り返す。ロマン・ローランの「トルストイ傳」を讀む。母の所に生花の師匠來る。

讀賣の淸水來り、原首相暗殺についての感想を述べろといふ。あの出來事は市井にやたらに起る出來事の一つに過ぎないとしか感ずる事が出來ない。もう原氏のやうな政治家の必要は日本には無くなつたから、政治家としての彼を惜むべき謂れを發見しない。暗殺などの起らぬやうにする爲めには、心と心との距離を短くする外には方法はないやうだと答へた。

午後、日本橋槇町の東野氏を訪ひ貸家の件が片付いたについての禮を言ひに行く。東野氏不在、妻君と面會、少時談話。

歸途文房堂にて原稿紙五百枚と此手帳を買ふ。

夜、福永より使來り、「文化生活研究」を×××殿下に獻上する事になつたから名を列せよといつて來る。「×××殿下と

私とに何のかゝはりあらんや」といひ送る。

新潮社から本年發表した創作に就て感想を聞きに來る。「白官舍」と「御柱」との外にはなし。非常に恥かしく思ふ。その旨を答へる。何をして一年を過してしまつたのだらう。今年は講演も絕對に斷つて居たのに、こんなことでは仕方なし。

夜になつて創作に從事しようとしたが持つて居る題材が凡て役に立たなくなつて居るのを發見して悲しくなる。如何しても徹底的に生活を改めなければ筆の動きやうがない。こんな生活にふさはしい作品を出して平氣でゐる事は如何に私にも斷じて出來ない。

淺井三井、鎌倉の信子來る。淺井の性格は中々難物なり。彼女が畫家として立つには大きな努力と練磨とを其性格の上に加へなければ駄目な樣なり。

高村光太郞氏がヹルハアランの「明るい時」を送り越さる。井上康文氏が「夜の翼」を。

夜、机の下に火鉢を置く。

性慾力近來又著しく衰ふ。母と父上の五年祭の相談をする。子供に「赤い鳥」を讀んで聞かす。よき童話一つもなし。

十一月十日。(木曜日)　晴れ、朝、弓。朝、山本彥之進氏來り正巳の結婚破約の件を來春位まで延ばしておいてくれと、蟲のいゝ依賴をしに來る。少し腹が立つ。十一時半、家を出て神田流逸莊に岸田氏の個展を見る。一つ麗子の肖像畫(八百圓と稱せられるもの)は大したものなり。あれは後世まで殘る天晴れな作品といつていゝ。日本畫などもあつたが、あの人の temperament とはどうも一緖にならない氣がする。「我等」社に行つたら長谷川氏(如是閑)不在。淺草に行き、電氣館で「カラマゾフ兄弟」を見る。極劣な映畫。そこに行く途中電車內にて鈴木德太郞氏に遇ふ。「新文學」をやめて「新趣味」といふ雜誌を出す由。あの人も人間はよいのかも知れないが雜誌經營の出來る人ではない樣なり。活動を見て神田に秋谷家を訪ねた。主人留守、細君と話す。東京の田舍者といふ感じ、話してゐて此上なく心持ちよし。それから須田町で果物を買ひ、それを持つてタクシーに乘る(車中から一人の若い女が他人の子供を抱いて步いて居るのを見る。女と子供とが一つの物

になつて居る。不思議な感じがする程）。麻布霞町の××氏に至る。主人不在。Tea の御馳走になる。石本氏の夫人も來る。あんなふやけた家はなし。

三河屋にて夕飯。おぬいさんと思つてゐた人が來て少し話す。おぬいさんとはあなたかといつたらちがふといふ。おきんさんといふ名なる由。櫻井夫人が遇ひに行つた人のちがつた人なるを發見してをかしく恥かしく。おきんさんとはいやな名ならずや。俺はあの女の前に出ると全く赤くなつて物がいへなくなつてしまふ。生れる前からあの人と私とは結び付けられて居るものとの氣がする。私は然しぢつとしてゐなければならない。それから山本に行く。とりとめのない話をして十時までゐる。留守中に英夫來りし由、壬生も出京して電話ありし由。

十一月十一日。（金曜日）朝久しぶりで雲がういて居た。弓。今日は面會日。改造社の人。山田といふ本を賣りつける人（一冊浮世繪の複製を賣りつけられる）。「種蒔く人」社の小牧氏。足助。伊上。福永。國民圖書出版會社主來り藤村五十年記念出版の講演會に是非出席しろとの事、遂に承諾させられる。足助は「ホヰットマン詩集」を持つて來る。中々よく出來た。上紙と扉と奥付が氣に喰はねど我慢する外なし。

朝、東京驛に岡田三郎氏の獨逸行きを見送る。母上はそれより愛子と高島屋へ。

家具屋來る。二階の敷物の相談をする。

「文化生活」の爲に「自己を歌ふ」を譯了。

「白官舍」の續きに筆をとり始める。駄目なり、生活をかへねば駄目なり。思ひ切つたことが書けない。

十一月十二日。（土曜日）晴れ。ホヰットマンの詩を譯了して警醒社に送る。

朝、石山太柏、原嘉憲來る。一緒に三河屋にて晝食す。午後は何をしたか忘れてしまつた。

十一月十三日。（日曜日）晴れ、少し曇。子供は山本のものと一緒に中野に行く。余は母上と石山太柏氏を荻窪に訪ふ。氏の庭が大分荒れていゝ心地になつてゐる。太柏氏は細君の留守に畫室の掃除をして居た。今度の展覽會がおもしろく行か

ぬので何だか彼を見ると淋しさうな顏をしてゐた。それでも中々氣焰を吐く。天どんの馳走になる。午後三時彼の家を辭す。歸家して暫くすると子供が歸つて來る。夜、櫻井夫人に長い手紙をしたゝむ。

「カイン」を譯して見ようかとも思ふ。

十一月十四日。(月曜日)　しぐれた氣色になつたが雨は來なかつた。昨日より植木屋が冬の支度に來る。朝九時、文化學院に行き「生れ出る惱み」の講義をする。美濃部、深尾、荻野三女傍聽。「ホ詩集」を與謝野、深尾兩女史に贈る。「ホ詩集」といへば昨夜三十部足助から來る。諸方に發送す。思つたより裝釘がうまく行かぬ。もう少し金をかけるといゝのにと思ふ。自分の裝釘の下手な所もある。再版の時には訂正すべし。

文化學院にて與謝野女史、「隈畔氏が死にました。何だか私羨ましくも、いやな樣にも思ひます」

神田にてレンブラントインキと鷺ペンとを買つて歸る。

午後、佐々木、奈島、二人來訪。話がつまらぬ。ウ・モリス評傳を讀む。

夜、長谷川如是閑氏來談。(草の葉會)會集十七八人。十一時に至る。支那の話。支那には生活本意の生活があつて政治的生活とは全く風馬牛なりとの說、氏の虛無主義を語つて中々面白し。而かも氏も亦〔この間二字不明〕によつて事をいふ人なるが如し。

十一月十五日。(火曜日)

十一月十六日。(水曜日)　晴れ。母上、朝、愛子と町に出かけられた。「奇蹟の呪」を少し書く。午後足助を訪ふ。「ホ詩集」あまり賣れぬ由にて困つてゐる。私も可なり困る。足助、橋浦等と共に常磐俱樂部に東都畫家の畫を見る。何とかいふ太柏氏の友人の畫中々よろし。資質に於てはたしかに太柏以上なるが如し。太柏氏に一人の戀人ありとの話を聞かされる。

四時、報恩講に行かれた母を本願寺九條邸に訪ねる。大きな門、荒れた玄關前。三四人の老女(寺の妻君達)。九條武子姬が驚くばかり瘦せたといふ事。それが白蓮女史事件に深き關係を有するらしとの事。

電車にのる。母上と共に錦水に行き、夕食をしたゝむ。二十七日の父上五年祭の晩餐の用意のためなり。

十一月十七日。（木曜日） 晴天。朝、愛子が來る。房子の爲めに聖心女學院の先生に英文の手紙を書く。十一時家を出で、十五銀行に至り、吉川に水田造成の費用七千二百圓を送り、勸業銀行に於る借金利息二九九を支拂ふ。かうして時間をつぶし、餘事な雜事をするのが惜しくてたまらない。歸宅後直ちに「奇蹟の呪」を書きはじめる。七枚書いたけれど、破棄せねばなるまいとおもふ。夜、飯田に來て貰つて二十七日にする馳走の招待狀を書いて貰ふ相談をする。戸川の失策から「ホ詩集」の贈本はあちこち間違つて屆けられてゐるのを發見し、腹が立つ事夥し。

貸家新築についての警視廳の許可が來る。

大演習で飛行機が飛び、九段では其襲來に對して大砲を發つ。五臺の機が飛ぶと滿都の人心がわき立つ。

軍備縮小會議の日本の修正回答が發表される。新聞にはあつたけれども內容は讀まず。和辻氏が「思想」に發表した「原始基督教の文化史的價値」といふものは立派な研究だとおもふ。

垣內豐子より電話で紅葉が美しいから遊びに來いといひ來る。承諾す。十九日には行くべし。

此頃一帶に來信著しく減少す。よき徵候だ。今までの樣におだて上げられてゐては本當の仕事は出來まい。もう一度世の中から忘れられてしまつたら、少しはしんみなものが書けるかも知れない。

十一月十八日。（金曜日） 晴天。夜風。午後より曇。今日は面會日。朝から河崎夏子、田中、柳谷、婦人畫報、時事新報記者、岩倉具幸、茂木由子、櫻井、鈴木、神尾母上、しま子、其の他三四人來る。夜全くつかれ果てゝしまふ。

I家は貧窮のどん底に陷りたりとて、家から支給を受けたいが如何いふものだらうといつて來る。I家の內情實にひどし。平民の中には到底見るべからざる贅澤からの惡德が行はれてゐるのを知ることが出來る。

S夫人は舞踏を斷念したりとの事、而して恐るべき深淵に足をふみこみたるが如し。而かもそれから救ひ出されてゐるや否やは疑問なり。眞面目に彼女に忠告を與へる時が來たのかも知れない。

神尾母上の言によれば毅一はロンドンにて入院したりといふ。電報にて、委細は不明なり。

今日東京病院の中曾根氏が歐洲旅行の爲め暇乞ひに來りたる故、毅一君に「ホ氏詩集」を託送したる直後に此話を聞く。驚かされたり。

二十日から兵隊が泊りに來るので母上は朝から一日襷がけで働き通されたり。働くことにかけては實にえらい人なり。

机に向つて居るけれども中々筆が動かない。どうもクライシスが來てゐるのだ。自分の性格をもう一層深く掘つて見るべき必要に迫られて居るのだ。これが成就しなければ進境は來ないだらう。進境が來なければ制作に從事する意義は沒せられる。衣食の必要ある人はこんな時でも不得已書かねばならないのだらう。それを考へると涙が出る。

井上みなさんから手紙。井上君はパラティフスで入院、みな子さんは姙娠中あまり働いたので多少健康を害したとの事、實に氣の毒の至りだ。今日は全く悲しい苦しい噂ばかりを聞く日だつた。凡ての苦しんで居る人達が、それから濟はれるように。

一九二二年（大正十一年）

六月十五日。（木曜日）晴れ。又永く日記を怠つてしまつた。これからまたどこまで續くか書いて見る事にする。

十二日から梅雨期に入つたが、雨の降つた日といつては一日もなく、毎日風を持つた晴天で中々暑い。

南天の花が咲き出したのを見て、母上がもう梅雨が來るだらう。その花が開くと梅雨が來、それが散り盡す頃には梅雨が晴れると昔からいひならはしてゐる、と云はる。美しい時計だと思ふ。この頃はあぢさゐも美しく咲いてゐる。三越からS夫人がとどけてよこしたあぢさゐ、それを去年薔薇棚の下におろしたのが今年は大きくなつて美しい花をつけた。もうこれで三年間その花を見るわけだ。この頃は夫人もさつぱり來なくなつた。又何かに引かれて其生活の空虚を滿たさうとして居

るのだらう。それとも又病氣でもしてゐるのかしらん。兎に角あはれな女の一人だ。
　私はこの頃二人の女から引き分かれた。一人はおきんさんで一人はとよ子さんだ。おきんさんは私の夢の中の女だつた。殆んど言葉といふ言葉も取りかはさないのに、私は彼女を、彼女は私を、親しいものに思ひ合つた。然し突進すべき私の方からは少しも突進しなかつた。
　その人がゐなくなつた。S夫人に尋ねてもらつたら、いよいよ他に嫁づくとのことだつた。私は竊かにその家の前をうろついた。固よりその人を見かけもしなかつた。私は帶留と一本の手紙とを無名で其の人に贈つた。彼女は永遠にそれが誰から送られたかを知らずに仕舞ふのだ。それが私の夢をこの上なく滿足させる。若し運命が如何かして彼女を私の處に連れて來たら、私は今度こそはそれを私のものとして受入れるつもりだ。然しそれは多分永遠に來ないだらう。
　とよ子さんには結婚の口があつた。彼女は一度それを承認しておきながら、直ちに退けてしまつた。とよ子さんの姉達は、私が彼女の胸にあるからだと考へてゐる。私も或はそれがあるのではないかと思つて、手紙の往復も面會もしない事にきめてしまつた。とよ子さんは先日電話で病氣がなほつたので、弟妹等と靜浦に行くからその前に遇ひたいといつて來た。然し私は體よくそれを拒んだ。同時に、私はその姉とも以後交際をしないことにした。
　何といつてもこの二つの離別は私を淋しくさせる。素直な氣持ちで男女が親しく交はる事がむづかしいのが腹立たしくさへある。女性からのやさしい電流なしには、私の心の流れは荒れがちだ。同じ男でありながら、どうも男性的分子の殊に勝つた私は、殊に女性を要求するらしい。
　變なことを長いこと書いた。
　昨日、畑耕一といふ大毎と日々との學藝部の記者が來て、私を芥川、菊池二人と同様の資格で雇ひ入れたいと申出て來た。財産放棄をする以上は、何かして生活の道を立てねばなるまいといふ豫測から生じた運動だ。思召しはありがたいが、これからもどうかかうか食べて行けさうだから、食べられなくなるまで、おことわりするといつておいた。弓が大分上達した。

一尺的（まと）では一日で使へなくなる程孔が明く。明日から六寸的にして見よう。お蔭で胸と肩との筋肉も大分發達した。發達して見るとそれに一種のよろこびを感ずるやうな氣持ちになる。そんなことは嘗てなかつた所だ。

讀賣が「童話傑作選集」といふものを出して、その中に無斷で「碁石を呑んだ八つちやん」を收錄する豫告が出たので、安成二郎にあて一寸抗議を申立てゝおく。

唐澤秀子からの紹介で來た「泥棒」といふ喜劇を讀む。それを新潮社水守氏に紹介しておく。

朝、母上、行郎夫婦と共に目黑附近に Imberton の建ちかけたのを見に行く。思つたよりも廣く堅固らしい建物なり。頻りとそれをいふと、母上は何か不平さうなり。それから一緒に新らしく買つた土地を見に行く。

而して取急ぐ必要がある爲め、連れて行つた技師に萬事を依賴す。行郎は中々解つて居るやうなれども、相當呑氣なれば、今度の建築には二萬五千圓はすぐにかゝると思ふ。あれで住つて行くにも中々かゝることならむ。而して結局かゝる生活が何を將來するかを考へては見ないのかなあ。

今夜は夕食後、子供達を連れて神田の靑年會館に童謠を聞きに行かうと思つて居る。子供達が成城小學校の教育のお蔭で、大分音樂に對する興味を持つやうになつて來た。この勢を助長してやりたいと思ふ。

國際聯盟協會が夏期に鎌倉で學校を開くから出席講演しろといつて來た。斷つた。まだあんな所から講演を依賴されるやうでは、私の立場も思ひやられる。もつともつと自分を世の中に對して明確にしなければならない。

去年からしまつてあつた麻の肌襦袢の少しかび臭いやうな匂ひが、湯上りの膚にほのかに香ふ。

六月十七日（土曜日）　朝、雨。後晴れ。今日は榎町の土地を買入れたその支拂をする日だ。朝十五（銀行）に人力車で乘りつけて、公債を擔保に金を借り出し得た時は十時半で、約束の時間より半時間おくれてしまつた。自動車をかつて金杉橋にかけつけたら、登記所は赤羽橋だといふこと。あわてゝ又そつちに行くと行郎が往來でまご／＼してゐる。關口といふ代書所に行く。佐藤氏以下が待ちあぐねて來た風で、直ちに登記所に行く。然るに役人は時間が切迫してゐるといふので如何

しても取りあつてくれないので、無據明後日取引といふ事になる。こつちが遲かつた爲めに一同に迷惑をかけ何とも面目がなくてこまつた。變に蒸し〳〵する。往來で嚔を發しながら電車に乘る。金杉橋で乘りかへるのを、途中でおりてしまつたりする。それから又十五に行つて銀行發行の小切手を切り出してもらひ、カフエー・パリスで晝食をしたゝむ。實に人相の野卑な男が、又變な女――極く凡くらな女事務員といつたやうな――を連れて食事に來てゐる。あとから聞くと、それが中中の手腕家で、對米借款はその人の手を經なければ成立たぬ位の財政家なる由。英語だけは中々達者だといふ事をメヌーを見ての物いひに察しはしたが。少しTのおやぢじみてゐて、一層團子鼻の色黑男。年五十二三恰好。

丸善でこゝに使つてゐる萬年筆を買ふ。この頃、毅一から貰つたのと先から使つてゐたのと二本紛失した。Waterman の繰出しで價十圓。

それから白木屋に行き、文壇名家書畫展覽會といふものを見る。武者がズバ拔けてゐる。雨雀のも中々乘つてゐる。自分のは「無別事」の三大字。代價は二十七圓とついてゐた。一枚だけどうか書いて下さい、表裝して自家に保存するのだからと、あの氣障極る男がいつて居たのだつたが、矢張り表裝もされずに賣出されてゐる。中元用の安反物を買ふ。一反一圓七八十錢のもので柄は中々よし。顧客、さう澤山はゐない。何か調子がだれて見える。「江戸土產」五つを買つて、原、佐山、中山、あかまん、などに送る。

歸家したら「一房の葡萄」十五册が來てゐた。表裝中々よく出來てゐる。子供三人が大變靜かだと思つたら、熱心に讀んでゐてくれるので、大變うれしく思ふ。

三時から來いといつておいたのに、五時近くになつてM女史が來る。どうも話が面白くない。高橋の達磨が偉いの、早川の千吉が面白いのといつてゐる。島崎氏の噂も出る。車夫を家に使ひにやつた。それが中々歸つて來ない。其爲め六時半まで話しこんでゐる。子供は平和博に臺灣の彰化花火を見に行くとの約束を守つて、待つてゐるのに氣が氣でない。この頃は積極策をしかけられぬだけ助かる。

夕食後、行郎夫婦と三子と共に平和博に行く。臺灣喫茶店に行く。大層な人なり。花火は實に美しいもの、實に〳〵花火らしいもの。花火の傘をさした男が駈け廻るは如何にも支那人風なり。花火の名が中々面白し。宮樣方が高樓で見物してゐる。灯がかん〳〵ついてゐるので見物人如山。それを意識しながら、知らんやうな顏をしてゐる男女の×樣は成程よい見物なり。音樂のビラを配つてゐる男にG・Iあり。しやあしやあとしたものなり。

歸路、切通しをぬけ本鄕三丁目より電車で歸宅。十時半。飛驒路に旅をしてゐる淺井孃より淋しさうな葉書が來る。

原と藤森とから「星座」に對する感想。

佛蘭西の望月百合子から故國なつかしげな手紙が來る。ふとその誘惑的な微笑を思ひ出す。

此夜は晴れた。道は砂塵を起さず、星は洗はれたやうなり。梅雨期の女の美しく見えること不思議なり。

六月十八日。（日曜日）雨、さして降らず。この日は子供を九段の能樂堂に連れて行く日なり。母上も逗子行をやめられたれば行かれる。番組は、「小鍛冶」、「滿仲」、「羽衣」、「碪」、「船辨慶」なりしが、觀世元滋の「碪」には感心せり。シテの出で幕のすぐそばに佇んだ時から涙のにじむやうな出來だつた。演じ進んでからは、謠ひ方の氣取り過ぎるのが氣になつたが、型は申分なしといつてよからう。梅雨なのに、もう寒いこと秋が來たやうな感じがして、心が淋しくなるばかりだつた。薄い單衣を着て居て衆人の中で羽織が脫ぎたき位、その癖、氣がしづまると冷え〳〵とした感じもする樣な日だつた。池内信嘉氏と隣り合ふ。角力場の跡には苜蓿の白い花が敷くやうに咲いてゐた。

今朝早く吉田一來る。家主が彼等の居る事に苦情を申立てたから、手紙で注意した事でやつて來たのなり。話せば話す程面白き男なり。又露國の內情をいふ。聞いてゐるといつでも涙を催させられる。T・Hのぐうたら振りも聞く。早く生活をかへて思ふまゝの事がいひたし。腹ふくるゝ業なり。

三井から高山に着いて直ぐ出した手紙が來る。高山といふ所のさびしさうな光景が思ひやらる。釣ランプで用を達し、小屛風には美しい國麿か何かの畫が張つてあるとの事。行きがけの自動車には未醒氏を知るといふ水電の技師が乘り合せてゐ

て、山の冒險の話や、山中の人々の荒んだ生活の話やをして聞かせたとの事。その男も偶然かゝる田舍で乘り合せた言葉つきのやさしい女畫家に、不思議な興味を牽かれたことであらう。その外には高山の老人が獨り乘つてゐたとの事。

六月十九日。(月曜日) 快き晴れ、ひや〳〵した風が來る。朝、曇りたれども雨は降つてゐないので弓を持ち出す。此頃は六寸なり。一立に大抵一本ははいる。三立目は半分で弦が快く切れる。それから昨日の分の日記を認む。

朝、原町の家に行く。物置と湯殿とが略ぼ竣工し得たり。岩佐君の話によれば昨夜十二時近く盜人が戶外を徘徊したのを階下の吉田一が發見し大騷ぎとなりしに、其中姿をくらましたとの事。建築費中に金二百圓を入れて來る。

歸ると中食。母上、あき子は鎌倉逗子に出かけるにつき、二時十分の汽車にて英夫同伴する由。

午後より三十分、世界パンフレットのガンデイの傳記、意見なるものを見る。それだけで彼を考へれば決して大した人のやうではなし。退嬰的精神主義者のやうに考へらる。彼自身の著書を見たいと思ふ。Intelligenzia に取つて一番警戒せねばならぬ事は、途中からの後もどりだ。ラッセルでもローランでも皆其轍をふんでゐるのは恐ろしい。生命力が燃えかすれるとあゝなるのか。片燒刄がはがれるとさうなるのか。其處に行くと何といつてもトルストイはえらい。假令彼は信仰の殼中にはいり込んだにしても、決して傳統的なものには滿足しなかつた。彼は其處にも彼獨特の住み心地を見出さうとした。事實を愛護しようとする心が餘程深くなければ、途中で退却をはじめる結果になるに違ひない。あれはみじめなことだ。どんな恐ろしいものに出會はしても回避しない丈けの力を衷に感ずる事が必要だ。藝術の領土に於いて殊にさうだ。それでなければ永久の若さを持つたものは生きて來ない。

大館則貞氏の創作を讀み始めた。いゝ經驗を色々持つてゐるし、十分の眞摯も認められないではないが、靑年に餘りに普通な大望が、素直な見方をくらましてゐるやうに見える。夕方、弓をひく。少しやつてゐる中に氣力がまけて來る。これが俺の缺點。夜、福永來訪、緣談まとまりし由。

六月二十日。(火曜日) 朝から快晴。朝から大館氏の原稿を讀みつゞける。吉田一來り、借家が見當つたとの事で、敷金

と一ヶ月分の家賃を渡す。

加藤一夫氏來る。藝術なら藝術、實際運動なら實際運動ときめて、どちらかに全力を注がなければ駄目だといふ事を強くいふ。加藤氏多少の抗議。然し自說を枉げず。池沼氏來り、御嶽で講演せよといふ。斷る。

午後二時、大館氏の原稿を讀み終る。意見をかき原稿を送り返す。まだ若い故もあらう。中々傑れた見方や表現もあるけれども、全體として缺點が著しい。他人のことでこんなことをしてゐると、何やら全く無駄なことをしてゐるやうな氣がする。そんな事をするのが、作者にとつても何の役にも立たないやうな氣がするからだ。作者は存分に自分の長所にも弱點にも氣づいてゐる筈だ。それに氣付かない位なら、いつてもわかる筈がない。結局作者が他人に作を見せるのは、自分の立場を他人によつて確めて貰ひたい爲めだけのことだ。本當の價値は遠に自分で知つてゐるか形造つてゐて、中々他人の言葉位で動くものではない。其手傳ひを二日もかゝつてするといふ事は少し無駄過ぎる事のやうだ。

隨分かゞやかしく陽が照つてゐる。戶外は暑からうと察せられる。不思議な性慾の惱みを感ずる。近頃絕無のことだ。

昨夜章子が鎌倉を立つておそく歸宅。信子胃腸依然よろしからず、臥床中の由。生馬は少しよろしき由。

それから少しあちこちに手紙を書き James の "The Varieties of Religious Experiences" を讀む。"Once born optimist" と "Twice born optimist" とを區別せるが面白し。今まで讀むことをせずに居たが極めて興味深き講演である。讀み續くべし。

夕方、弓を引く。夕食後、子供の角力を見、庭遊びを見る。此頃は雨戶を開けて寢る故、書齋から蓄音機をかけてやる。これはよき思ひつきらし。

松本羊三郞といふ人が、大島から使をよこして金を五十圓出して畫を買へといつて來る。多少腹が立つ。畫をみずに金若干を送る。

夜、涼味如水。

今十時半、これから又 James を讀む可し。

六月二十一日。（水曜日） 朝曇り後晴れ。涼。朝から「自己を歌ふ」の譯にとりかゝる。

十時頃足助來る。一時頃まで話す。其間に隆三も久し振りで來て話をする。「一房の葡萄」はまだ千餘出たばかりだとの事。感想集を早く出せといふ。創作よりも感想の方が讀み答へがあるといふ。少し寂しい氣がする。龍田秀吉氏より來信。「星座」に就いての委細の批評をいひ送り來る。うれしく思ふ。朝、散髪し、花を買ふ。薊あり、美し。午後愛子來る。安子の爲に記念の石碑を墓地に建てゝくれる由。チエレミシノフ女史の製作する所なりといふ。愛子、鎌倉に行く。

お千代さんから手紙來る。引越す地面が見つからないのに困つてゐる。頼んだ人も中々來てはくれず、人の頼みにならぬを思ふと腹が立つといつて來る。母子二人の淋しい境涯が思ひやられて哀れだ。

「良婦の友」の若い記者が來て談話を筆記し去る。其人は不良性を有する人妻と、姦通して同棲してゐる由。盜癖と共に貞操に對して不感性を有する人らし。今はそれがすつかり治つたのを唯一の誇りとしてゐると語る。極端な社會主義者であつたが、今は衣食の爲めにそれを捨てゝゐるとの事。信仰を捨てるのと比べると、同じ捨てるにしても此方が深刻だといふ可し。

夜、子供が寢てから山本から借りたレコードを聞かせてやる。此頃は毎夜それをしてやる。子供の爲めにいゝだらうと思つて。Bohemian Fantasy と云ふものと、Bethoven の Spring といふもの美し。聽き入つてゐて不思涙ぐむ。

夜、又少しホヰットマン。

あぢさゐの花よき色に出づ。

六月二十二日。（木曜日） 曇。冷。夕方少雨。朝、弓中らず。ホ氏詩を譯す。やがて報知新聞記者來る。「繰返しを憎め」といふ事に就いてはなす。晝になる。

食後、又ホ氏勉强。暫くして茂木氏あぢさゐを持ちて來り一時間餘を話す。義弟のMといふ、でも社會主義者のためにあたふたしてゐる。

談再び戀愛の事になる。彼女の心は依然として余より離れず。その心は悲しくあれども、余は如何しても彼女に聊かの愛

をも感ずる事が出來ない。實に困却する。
伊上凡骨來る。飄々然としてゐる所おもしろし。とう〳〵夕食時間まで話しこむ。
夕食後、散步に出て、おきんさんの家の前を通る。何事もなし。不思議なる執着、家の前を二度通りて淚す。梅若六郞と松本長とのレコードを買ふ。歸後、子供等の爲めにそれら及び西洋のものをやる。子供等寢後又ホ氏を譯す。可なり捗取る。
九月からの生活の變化について最も期待が多い。此頃また筆が進みさうな氣がしてならぬ。此機を外さず邁往したきものなり。十一時就寢。

六月二十三日。（金曜日）半晴。一日客來。あまり樂しき客なし。夕方から足助、藤森の二人來る。藤森氏は最近に北海道を旅行するとの事。吉川と蠣崎とに紹介を書く。それから朝北海道に移住して農業を營まうと目論んでゐる靑年五人來る。夢想家らし。
夜、茂木氏より又「がく」といふ花をたわわに送り來る。
足助、藤森と丸梅に夕食を喰ひに行く。夜の來るのがおそい事とて、屋臺が出てゐなかつた。それ故、岩亀で喰ふ。休日の日を開けたのだとかで客來少し。五六人の女中、食卓の上で銘々に手紙を書いてゐる。たど〳〵しさうなのが見えるのでおもしろし。創作氣分だといつて笑ふ。

六月二十四日。（土曜日）降りみ、降らずみ。朝、小柳津氏の所に悔みに行く。須田町にて花束を買ひ持つて行く。マーガレット、あぢさゐ、白い小菊、除蟲菊、蘭の葉、何とかいふ西洋の小さな白い花が、見えない程な小さな莖に咲いてゐる花等。信子さんは見えなかつた。小柳津の小照がいゝ顏をして花香の間に見えてゐた。歸路、電車の中で花束を持つて行つた自分が少し恥しく、顧みられる。段々人が草よりも木を好むやうになつて行く心理がほの見えたやうな氣がする。午後、早稻田から人力車が迎ひに來てくれたので、それに乘つて高等學院に行き、そこの文藝部の會員五十名ばかりに、「描かれた花」の話をする。あとで質問。高等師範よりも質問の質が生き〳〵してゐるのを感ずる。中桐確太郞氏が主催をする。どうも

あの人やI・Sといふやうな質の人は私にはそりが合はない。

教員室を覗いたら、浦上后三郎氏が若い Professor となつて大部な書物に眼を通してゐるのを見て、挨拶したら喜んで出て來て一寸話をした。大變なつかしく思つた。

歸途、神尾に行つたが一同留守。

夜、有樂座に、「三浦製絲工場主」と武者君の「張男の最後」とを見に行く。演者によつては後者は中々いゝものだと思つた。しぶとさ、しかも僞りのない愛から湧いて出たしぶとさといふものが珍らしい。大變珍らしい。佐々木氏が張男をやつてゐた。そこで唐澤秀子氏に遇つたら、歸りに自動車で連れて歸つてくれるとの事で同車。橘かをる、他一人の女優同乘。秀子氏が張男の氣持ちがよくわかるといふ。歸宅、十一時半。

「がく」といふ花の美しさを今年はじめて知る事が出來た。殊に其の葉の淋しい淨さは無類といへるだらう。

六月二十五日。（土曜日）　朝晴れ、後曇。母上を迎へかた〴〵、里見に男子誕生の祝をしかた〴〵、子供を海に入れかたがた、行郎と三子と一緒に朝の汽車で逗子に行く。湘三、丈夫さうな子なり。里見の家の前の庭の苅り込んだ松の緑の美しさ。

直ちに支度をして海岸に行く。行郎がシンガポールから齎し歸つたカヌーを浮べる。海の水、岸に近く湯の如く暖かく、やゝ沖、非常に冷たし。

一足先きに鎌倉に行く。ベーちやん窓より顔出して、「をぢさま」といふ。「ハイ」と小さく答へる。老犬は門のすぐそばにびつこの足を上げてゐ、小さな方は疲れ果てたやうに門番人の家の側に寢そべつてゐる。猫の姿見えず。あぢさゐ、梅雨がそのまゝ凝つたやうにみづ／＼しく咲いてゐる。信子さん瘦せ細つたり。六月一日より粥ばかりなる由。押して／＼遂に輕い胃潰瘍を起したのだ。本當に可哀さうな人だ。看護婦が來て居る。やがて母上、生馬晝寢よりさめて來る。もとの鈴木孃今のY夫人も來る。女といふものは人の妻となるといやに氣の強くなるものかな。別人の觀あり。

夕食後、とう／＼歸京する事となる。自動車で停車場に行き、七時十八分の汽車に乘り、新橋から又、タキシー。一時間

と四十五分で生馬の家から歸宅。

往來に橘氏の作品を少々見る。夜、靜かな雨の音。少し蒸して來る。

加藤(友三郎)内閣、シベリヤ撤兵を斷行す。昨夜、新橋についたら、寫眞班が活動してゐる。何んでも加藤總理大臣が着京するとかの話なり。

獨逸の外務大臣、暗殺さる。

六月二十六日。(月曜日)　何をしたか、覺え更になし。

(三十日誌す)。思ひ出した。晩に芝三緣亭で福永重勝氏の結婚披露があり、出席した。よき花嫁さんなり。テーブル・スピーチを命ぜらる。

六月二十七日。(火曜日)　同前。この間にホ氏詩を譯し、橘氏の校正刷を見、愛子を訪ねたる事などあり。武者小路君來る。

六月二十八日。(水曜日)　朝、夥しき雨、午後より晴曇不定。

朝、野村未亡人來訪。山本家と斷ち、お孃さんの結婚に他の口をどん／＼進めて然るべしと申送る。柏田盛豐氏來る。益々窮迫し、愈々進退極まれる事故、妻子を殘したる鹿兒島に歸らんにも旅費なき故、三十圓を貸せといふ。貸す。彼、藤井、木ノ上の諸人は鹿兒島人の一つの範型にて、金には異常の興味を有し、而かもそれを得るの幸運と力量とを持たない人間で、而かも何時迄も思ひ切りがつかず、死ぬ迄引きずられて行く人間だ。靜かに見てゐると氣の毒にもをかしい人間達だ。昨夜、武者君と語つたが、彼は金錢の事には全く無頓着に見えて居る。全く反對の極を示すものだ。武者君といへば、昨夜は社會問題について大分論議をした。武者君の立場は、自分は小さい時から金といふものを全く輕蔑する樣に育てられて來た。自分の仕事をまともにさへして行けば、金は自然にはいつて來るもの、生活は必ず出來るものとの確實な自信を持つてゐる。それ故、社會主義の人達が金といふものを第一に考へて仕事をしようとしてゐるのが更らに理解出來ない。假令、生活改革が成就されても、單にそれが憎惡とか生活の安樂を得ん爲の革命であつたならば、其先きに出來上る社會の狀態は心細いもの

だゝかゝる社會が實現された時、其生活の規範となるべき人間を作つておく事が出來れば非常によい事だ。自分はそれをやらうとするのだ。是が大體武者君の態度である。話を聞いてゐると中々力がある。それは彼の議論が自分の生活の中から湧き出て來るからの事だ。然し君の心持は、武者といふ特殊な、恰好な環境に育ち上つた、才能の著しい人間の考へる範圍を突抜けてゐない。あの人の同情がもつと押擴がつたなら、いひかへればあの人の愛がもつと廣く四圍に働く樣になつたなら、その考へはもう少し違つた形になつて現はれて來るやうにはならないだらうか。僕はあすこからは武者君と別れなければならない。僕は出來る丈凡ての人間と一緒に歩かうと思ふ。現在、現在に立脚しての最上の道を切開いて行くのだ。

母上は今日其親友なる鄭氏夫人を訪問に出かけらる。私は千代さんの家に行く。垣内豐子の立場に同情し、泣く事甚し。私も淋しい心になる。憐れなる豐子、而して憐れなる千代。千代の父上の百ヶ日は一昨日なりしといふ。早きものなり。九時四十一分の汽車までその家にある。

橘氏の原稿をそこで讀み終る。兎に角其作品の素朴に素直なるが美しい。大人が書いて大人に讀ませるセンチメンタルな童話のやうな氣分がする。千代、停車場まで送つて來る。母子唯二人の淋しい夜が思ひやられる。

唐澤秀子氏から手紙。其中に歌若干あり。才人なりと思はせる。

六月二十九日。(木曜日)　晴曇不定。朝、何かなしに時を過してしまふ。

午後、愛子來訪。一日夜の打合せをなす。新潟から人が來て、是非其市の講演會に出席するやうといつて來る。秋田雨雀及び江口渙が行く由。菊池寛も行く筈だつたのだけれども急に斷つて來たので、私に是非行けといふのだ。私は辭退したが、辭退がし切れなくなつて遂に行く事を承諾する。橘氏の爲めに、序文の原稿を作り急送する。今夜は十時に就寢する。

Tieldi から又手紙あり。瑞西の音樂家を日本に來てもらふ事に就いて、帝劇事務に相談がしてもらひ度しとの事なり。多分出來まいと思ふが　Tieldi がいつまでも僕を覺えてゐて、時折り手紙をよこす度毎に、私は人間の生活といふものを不思議なものとして眺めかへす。

七月の五、六日には、北海道に立ちたいと思ふ。木村來る。矢張り北海道に行き、一ヶ月ばかりの間に遍く道內を跋渉するつもりだとの事だ。

十人程の人に、「一房の葡萄」を送る。仕事が出來ないと空しい虛無を感ずる。

六月三十日。（金曜日）朝、霧深し。今日、澤柳校長が外遊から歸るといふので、行光は五時半に起きて橫濱まで迎へに行くのだといひ、出かけて行く。私は彼と共に起きて二十六日以來の日記をつけたのだ。東京府下療養所にゐる齋藤氏から手紙で、氏ははじめ重症患者のゐる所から、輕症患者のゐる處に移されたが、氏と入れ代りに重症患者のゐる方に連れられて行つた人は、病氣が甚しく進んでゐるのが傍人の眼にも著しかつたさうだが、而かも「かうぢつとして雪のやうな白布にくるまつた所は、木一本ない冬の山のやうだけれども、これでもセキタンも出ればキンもあります」と冗談をいふのを聞いて、其の心中を思ひやると淚がにじみ出ると書いてある。

今日は面會日だ。疲れ果てる事だらう。

朝から果して多くの人がやつて來た。其中に二人の朝鮮人、何れも金の欲しい連中。石坂琢三郎と云ふ、もと學習院の同窓。これは子供專門の百貨店を開かうといふ人。佐藤公商——民族共存協會を起さうといふ人。小作組合の渡邊氏、其他二三。橋浦泰雄。林政雄。林君には貸家に岩瀨君と同宿を承諾す。橋浦は明日から展覽會を開く由。二點ばかり豫約す。新潟には明夜九時四十分、岩越まはりで發つことになる。午後勝見及び足助來る。足助は自分でもいつてゐるやうに、商賣の爲めに屢〻武郎といふものを忘れようとする傾向を見せるやうになつて來た。それを感ずると、何となく悲しい感じがする。

R來る。千圓貸す。

母上の處に、T氏來る。母上晚餐を供したしとの事に、私が伴つて赤坂紅葉に、支那料理を馳走す。非常に暑し。二人の話は實に平凡。日本のあの時代の女の生活が如何に無內容であるかを、十二分に暴露してゐる。若し私が居なかつたら、彼等二人の語る所は恐らく他人の惡口であつたであらう。

歸宅して見ると、吳さんが來てゐて蚊帳の中で子供を煽いでゐてくれる。私の子供達は何といふ幸福な奴等だらう。私は彼に對して涙のにじむやうな感謝の意を感ずる。

寢後、暑苦し。

生馬より來信。「描かれた花」の感想を述べ來る。

千代さんから來信。悲しげな消息。憐れなる女。

昨日、野邨温子來り、女學生の寄宿舍の件に付き相談し來る。下手に出ながら、中々蟲のよい女なり。

七月一日。（土曜日） 朝美しく晴れ、後曇りて風あり。

朝、五時半に起き、弓。黑的に命中多し。彼方此方に手紙を書き、床屋に行く。主人電車にて、頭及び前部を怪我せりといふ。床屋の娘さん洋服姿で小學校から歸つて來る。床屋は代人、肥つた爺さん、神經の鈍さ驚くべし。手慣れてはゐるけれども急所には少しもあたらず。

母上は明後日の活花の客の爲め、酒掃に忙殺さる。茶室の掃除が出來上る。一年に一度か二度使ふ爲めに、あれ丈けの設備をしておく生活、あれは確かによくない生活なり。夕方より、母上、章子と同乘、自動車にて赤坂錦水に行く。直良、直忠の送別會を開くについてなり。集るもの二十人。大廣間にて。晴れて風爽やか。江崎政忠、生馬など遠來。信子の病氣は矢張り餘りはか〳〵しからざる由。

八時半、早く辭して上野に向ふ。秋田、江口の二君既にあり。博覽會の最中とて廣小路、停車場共中々の混雜。やがて會を周旋する田中惣三郎氏來る。今度は去年の大阪の時と違つて二等に乘り寢臺に寢る事になる。十一時過ぎまで、四人にて語る。格別香ばしき話もなし。夜、割合によく寢る。

七月二日。（日曜日） 朝、眼をさまして、上寢臺の小窓より外を見れば、靑く煙れる靑葉の連なりを見る。落葉松などあり。五時なり。衣服を整へて、窓外を見る。猪苗代湖、窓の左側に遠く眺めらる。磐梯山と思はしき山、富士の半側を切り

さいたるやうな山も見ゆ。

最初に着いた停車場は大寺。其邊には大規模の工場と見ゆるもの多し。鐵鑛山もあるらしく、ズク鐵の積まれたる所もあり。雪解トンネル。廣田といふ所には空也上人の墓あり。

六時半、會津若松着。降りる客多し。乘る客も多少あり。藝者とも言ふべき連中、四、五人三等に乘る。それが矢張り市松模様を着て居る。警鈴なくして發車。若松といふ町は、見るから貧弱なる町なり。大名町の一つなるべし。

喜多方といふ所には男女のもつぺい姿を見る。田植の人、田に在るあり。家の前に出陣の準備せるあり。眼を擧げて汽車の通るを見送る。

阿賀野川を見る。迂餘曲折して中々の好風光なり。船は丸木舟の發達した如きものなり。

德澤は新潟縣の堺なり。古い淋しい感じの古驛なり。

やがて、風光頓に展け、廣漠たる水田のかなたに、山形境の山脈を見る。

十時一寸過ぎ、新潟に着く。萬代橋を通つて、信濃川の水量を望む。路傍の柳、古風なる梁河、低い今風の家並み。西堀四番町の菊池屋に投宿。七、八人の人に迎へらる。よき心持ちの人なり。午食後、公園に至り信濃川を望む。雨降り來る。

白山神社に休憩す。後、歸宿す。

五時頃、イタリヤ軒に於て、創生會員の歡迎會を受ける。集つた人々は皆氣持ちのよい人々なり。一寸歸宿したる後、古町の大鶴座に車にて行く。風雨。

化粧部屋にて少憩。そのはめ板に、「旅役者よ、貴樣は河原乞食だ」と書いてある。下端廻りの旅役者が自己皮肉の意味で書いたものか。

はじめ江口渙氏が語る。熱烈の語氣が現はれて痛切なものがあつた。聽衆は極めて感動す。社會主義運動の今日に至急なる所以を極力說破したものだつた。

次に秋田雨雀氏が「新演劇と我等の生活との交渉點」といふ題で語る。これは又極めておだやかなもので、氏獨特の可憐このしみ〴〵出たものであつた。私のは「獨り行くもの」といふ題、別にさして苦しむこともなく談了。十時十分前。雨中を車で歸宿す。

雨の夜のしめやかさ。電車、自動車、自動自轉車の音なきが此上もなく靜かな感じを與へる。

〔七月三日。（月曜日）今日は幸に雨降らず。朝五時半起床、直ちに入浴し市中に出る。古町には石敷きの歩道あり。新潟風景の繪葉書を買ひ、本町に出で、市場を見物する。田舍から青物を持つて出て來てゐる男女の相貌はさしてよくはない。却而千葉などによい姿や顔付きの人が見られるやうだ。そこでは今だに盛に物々交換が行はれてゐる。堀割の柳の間に生々しい野菜の香の漂つてゐるのが快い。胡瓜、茄子、葱、馬鈴薯、荳類、草花の類。そこから又、大鶴座の前まで行つて見る。きんかんを五十錢だけ買ふ。歸路イタリヤ軒で珈琲一杯を啜らうとしたが、まだ掃除中故其まゝ歸る。昨夜、相馬氏の下宿に泊つた江口君が歸つて來る。松平操子女史（關氏夫人）が子供を連れて來訪。村林莊平（水產科卒業生、今醫科大學にあり）が來訪。この人がこんな所に來てゐようとは知らず。その人の世話にて醫大を見る事になる。同人と出かける。木村博士の病理の部屋で、恙蟲の研究の結果を見せて貰ふ。非常に興味あり。又岩木氏の生理の方の研究を見るのも面白い。小家畜を材料にして疲勞の研究やら、內分泌物の研究やらを盛んにやつてゐる。二時頃、大學病院の倶樂部で病院の御馳走を食べる。關氏が來り會す。大變氣持ちのよい人なり。師範學校の傍を通る時、東京高師のテニスの名手田中氏といふのがグラウンドに來てゐて、勝負をやつてゐる。二ゲームを見る。呑氣なる事なり。それから、高等學校の側をぬけ、美しいグラウンドを見て海岸に出る。裏日本の海を見るのはこれが始めてだ。實によい港だ。ポプラの低いのとグミの木とが雜草のやうに生えひろがつてゐる。暗い色の海の彼方には佐渡ヶ島が、恰も大陸の一片のやうな大きな感じを以て連つてゐる。舞子から淡路島を望むよりも更らに大きな感じのする島だ。港には、南洋のバンガルーを見るやうな藁とアンペラで作つた茶屋が澤山出てゐる。〔此處に茶屋の挿繪あり、略す〕

ひより山といふ所に茶屋がある。そこの先きに憩つてゐると廣々とした氣色が眺められる。郵便屋が港まで配達に行つた歸りがけに、砂丘のとつさきに來て面白い恰好に坐りこんで風を入れてゐる。それを見て、皆んなで笑ふ。前の茶屋には連れ込みだといはれる男女の客がある。餘り皆んなでのぞくものだから、戸をたてゝ仕舞ふ。その戸の中央所に硝子のはめてあるのが、北海道を思はしめる。その砂山を越えるとすぐ遊廓地になつてゐる。しんかんとした眞晝の遊廓地を拔け、古町を通り、イタリヤ軒に立ち寄つて、サイダーを飮む。そこに渡邊與三郎氏が來て私に面會を求める。遇つて見てはじめて、下六番町十番地頃、二三度家に出入りした鹿兒島出の法科出身者だといふことがわかる。黑顏の大兵で、今は市の商業取引所の副頭取をつとめてゐるといふ事が知れる。忽ちビールが現はれ、西洋料理の皿があらはれ、お酌と一人の藝者とがあらはれる騷ぎ。是非今夜は此地名物のをどりが見せたいし、明日は新潟の諸所を見物させたいから、泊つて行けとすゝめられたけれども、强ひて辭退して大急ぎで宿に歸り、荷づくりもそこ〳〵車で停車場に飛ばし、七時五分の汽車で、雨雀、田中の二氏と歸路に就く。見送人、十四五名、其中には渡邊氏もあり。夕暮れの萬代橋（西方に美しい虹の一片が眺められる）。汽車の中からの信濃川沿岸の風光は忘れがたし。

夜半より又雨になる。

江口君は、關氏宅に泊りこむ。

七月四日。（　曜日）朝、眼をさまして見ると、ひどい雨なり。七時二十分、停車場に着く。田中氏と同じ電車で神田に來り、別れて院線で家に歸りつく。びしよ濡れになる程の雨。母上は朝飯を終へて新聞を讀んで居られた。手紙と雜誌類がしこたま屆いてゐる。晝頃、子供達三人學校から歸つて來る。一同至極元氣。

新潟へ禮狀を出す。
みち惠に按摩を頼む。足助から電話、橋浦君の展覧會が今夜の十時まであるから是非見てやれとの事なるも、雨の爲めに少し辟易して居る。（午後二時半）

砂に居て佐渡を見ゐれば涙しぬ
　かろけくなげく我にやは似る

佐渡が島暗き波路の末にしも
　顔うちそむけひとりあるかな

佐渡が島二重に煙り細々と
　大梅雨空の下にあるかな

さみだれの淡き晴れ間の夕空を
　さながらひたす信濃川の水

砂に生ふるぐみにかくれてさみだれの
　越後の海を飽かず見しかな

大空は今さみだれて信濃川
　靜かに水のふくらみ流る

七月五日。（水曜日）雨。朝、新着の雜誌類を亂讀する。里見の「白醉亭漫記」は中々面白い。
李英室來り、また金を貸せと言ふ。ほと／＼いやになる彼の依頼心。
午後、神尾母上來訪。一昨日とか熱海から歸られし由、大分氣分よささうなり。
午後二時、芝青松寺の岡師民嘉氏の告別式に行く。薩摩上布に紗の羽織を着て行く。それ程の暑さなり。

そこで羽織を普段着にかへ茂木塾へと行く。美しき人取次ぎに現はれ、奥に招ぜらる。くちなし、萼の花盛りなり。會がはじまるまで茂木氏の私室にて語る。質素なる生活なり、案外。古土器など見せらる。白き牝鷄を金色の牡鷄が鋭き勢ひで追ひかけて來る。後、用意が出來たりとて會場に行く。三、四十人の少女連。後、島崎藤村氏來る。雜誌をパンフレットの形にしては如何などいはる。柳ちやんといふ末子も來る。藤村氏に似ぬ×しからぬ少女なり。足助との先約あれば、四時四十分頃辭す。藤村氏と一緒に寫眞を撮られる。

足助の所に行きつけば五時半頃なり。橋浦、角田、楠本、及び店員一名と、神樂坂上の「川鐵」にて足助の馳走になる。橋浦君の個展の終れる祝と、角田君の歸省の送別とを兼ねてであつた。

又、足助の所に歸り、九月からの雜誌の題を考へる。「こゝろ」、「草」、「行雲」、「ひとりしづか」、「ながれ」、其の他の題が提言せられた後「泉」と決定する。非常によい名を得たものと喜悅この上なし。

十時半、辭し歸る。雲晴れて、七、八日と思はしい月が洗はれてかゝつて居る。夜風涼し。

成田信子より來信。可憐なる少女よ。

垣内豐子より靜浦からの來信。あるよい方法を取り、それが許されたら結婚する事としたから安心してくれといつて來る。則ち直ちにその手紙を同封して千重子さんの所に知らせてやる。胸に沁むやうなエゴイストの淋しさ。

七月六日。(木曜日)　朝、格別のことなし。

午後から、辻氏來る。音樂の話、格別のことなし。田中豐氏來る。

七月七日。(金曜日)　辛うじて雨なし。今日は訪問日だ。これといふ人も訪ねて來なかつた。但し、人數は相當に多かつた。午後から、岩瀨、林の二君が來、又橋浦君が來た。橋浦君は畫が見て貰ひたしとの事で、其人達と一緒に出かけて牛込の矢來倶樂部に行つた。途中、足助を誘つたが食事中。橋浦君の畫は確かに進境を示してゐた。三枚を求める。中に十二社の畫は崇嚴といふことが出來ようか。粗筆だけれども研究と微視の跡とが著しい。暑苦しい中で仕舞つてあつた畫を開き、そ

れを又大急ぎで仕舞つて有樂座へと急ぐ。
研究座のチエホフ試演があるからだ。「鷗」といふものと、もう一つ若い時の作品といふのが演ぜられた。私はチエホフのものを見るのは今日がはじめてである。中々澁い味のあるものと思ふけれども、それを出すのは老練な俳優に待たねばならず、假令それが出た所が矢張り前世紀に屬する作だとの感じはまぬかれ難いと思ふ。宮部といふ女優が現はれた。――それは大正四年であつた。藝術座が私の「死と其前後」を試演した時、そこに來てゐた女優で、役不足か何かで途中から姿を見せなくなつた、幽鬱な感じのする女だつたが今夜それが「鷗」で一役を持つてゐた。不思議に今昔の感に打たれた。三島君、久米君、山田隆彌、岡田よし子などに逢ふ。
佐田夫人も來てゐた。此夜十一時半頃歸宅。

七月八日。(土曜日) 降りみ、降らずみ。朝、隆三と小田君來る。家の圖を見せてくれる。中々よく出來てゐる。
朝、成城小學校に行き、行光の成東に水泳に行くことを小田先生に託す。それから子供達三人と神尾に行く。母上買物に外出中、後歸宅せらる。暫らく話をしてから又、三子と共に歸宅。
夕方、蒔田信子來訪。靜かに話す。結婚をしないといふ決心が Sentimentalism から來て居る樣だと危險千萬だから、そこをよく理性に訴へ考へて、十分の覺悟が出來た上の事にしたらよからうといつてやる。食事頃歸る。今日は大層顏の短かい人のやうに見えた。

七月九日。(日曜日) 激風。時々雨。森鷗外氏が萎縮腎の爲めに死んだ。この人が明治以降の文界に貢獻した所は決して少しの事ではなかつた。彼は然しどこまでも情熱のない人だつた。批評家だつた。彼の創作といへども結局は或一種の形式の批評であるといへる。
朝の汽車でお千代さんの所に行き、靜かに半日を過す。新小説の西田天香氏の說を讀む。如何しても腑に落ちない所がある。咒があ 。すまないとかすむとかいつてゐるやうな所がある。聖德太子の三種分立的な佛法の見方と自分のそれとが一

致してゐるのを見出したといつて隨喜してゐる。旅順に肉彈になりに行く友に死ねといひ、自分は平和の爲めに死ぬからと宣言する。如何もその邊の心理狀態が更らに私には分らない。

お千代さんが私の事を得體のわからない人だといふ。其言葉は痛く私の心に沁む。實際私はさうだ。如何しても其矛盾から脫しなければ私の生活は純一に歸する事が出來ない。夕方、歸家して暫らくしてゐると新築家屋の技師が來る。行郎の部屋で面會する。結局家屋は中々高價なものになりさうなり。今夜、恐ろしい夢を見る。誰かゞひどく私を侮辱したので、我慢してゐたがそれに忍べなくなり、大聲を發して母と行光とを起してしまふ。

稻が三四寸に延びた。

七月十日。（月曜日）むし暑い日、夜には雨。朝の半日を中元のことに忙殺される。こんな馬鹿げたことはない。

十一時頃、獨逸から歸つた高松が訪ねて來る。歐洲の話を色々聞き、彼所の世界が瀕死の狀態にあるのを聞かされる。成程と思ふ。傳統の如何に拔き難きかをつく〴〵と感じさせられる。晝食後、同氏歸る。

小田氏來訪。プリュ・プリント成る。新聞への廣告文案も出來る。

足助と橋浦と來る。足助は頭が惡いので訪ねて來たとの事だつたが、こちらも頭が惡いので十分の話も出來ず、不本意なまゝ別れる。

橋外男氏の「太陽の沈む時」が二册來る。序文を書いたものなり。橋氏の序に、私が北國の冬の空のやうだと書いてある。聊か意外の感じがする。此頃氣持ちがそんなに淋しく冷たくなつたのかと思ふ。

足助が歸つてから夜にかけて、手紙の整理をする。京都の勢田のおたまさんから手紙と共に寫眞を送つて來る。束髮にして犬を抱いた處だ。

八木澤君の所で四日に女子が生れたといふ事を知る。隨分悲觀した手紙をよこしたが私は大によろこんでやつた。何だか知らないが、恐ろしく淋しい日だつた。

ヘーグ會議では、露西亞が大に氣焰を擧げてゐる樣子だ。露西亞は他國の感情如何にかまはず、獨逸と結んでやつて行つたら、大に力を得る事が出來さうに思はれるが。レーニン危篤の報が傳へられたが、虚報であつたらしい。

七月十一日。（火曜日） 朝はすつかり曇つて、雪でも降りさうな雲の色だつたが、晝頃から段々晴れて日の目が見えるやうになつた。

朝、散髮。

母上は、今日は私には惡い日で八方ふさがりだから、發足を延ばしたらと言はれたが、私はそれに頓着せず、北海道出發の準備をした。

朝は、中元の事を全く濟ませる。午後から隆三來る。彼の外遊中の借金一萬四千圓を返却してくれる。德用のカラーとシヤミ皮の專賣的輸入を企てゝゐるとの事だが、うまく行けばよいが。荷支度を全く濟ませ、久し振りにて弓を引く。もう弓を引いてもよい樣な空氣の乾燥のしかたになつた。母上は一寸山本に行かる。直良、直忠の外遊に就いて母堂が悲しんでゐられるとの事。夕食には母上が鷄飯を作つてくれられる。行郎も早く歸つて來て一同でそれを喰ふ。行郎に送られ、自動車で上野に行き八時の汽車に乘る。上野邊は博覽會の客にて中々賑やか。Platform から見ると、博覽會内の花火が見える。それに Search-light が、かゞやきかゝる。昨日の新聞によれば、日本に一つよりない航空船(軟式)が、火を發して燒けてしまつたとの事。

汽車も客多し。上の寢臺に九時頃から這入り込む。九時半頃向ひの寢臺に美しい大柄な姙婦が來る。その赤坊が夜通し泣くので中々寢つかれない。

坊やはいゝこだ、ねんねしなつてさ
坊やのお守りは何處にいたつてさ

といふやうに、「つてさ」をつけて子守歌を歌ふ。それがいやだつたけれども其歌には哀しみを催した。日本の女が持ち得た

唯一の歌らしい歌はこれだ。

七月十二日。（水曜日）朝、四時半にうつら〳〵と結ばれてゐた夢がさめてしまふ。窓から外を見ると、米澤附近を汽車が走つてゐる。曇つた空に合歡木の花が咲いてゐるのが見える。水田は一般に出來がよいやうなり。

六時近く山形に着き Platform で顏を洗ふ。

食堂に行くと外人がゐて話しかける。Plumbing and heating の expert で Fred. Dortzbach といふ人なり。Slcora が千五百圓くらゐで一切据ゑ附けられるやうなことをいつて居た。近江の Wallace 氏の Corporation の中にゐる人の由。日本に來てから、まだ二ヶ月の由なるも、日本飯も喰ふし、話も注意するし、中々よささうな人なり。賴むならこの人に賴むといゝと思ふ。

Dostoievesky の「白痴」を讀む。此度は、はじめて彼の肺腑に入り得たやうな心地がする。一見無技巧に見える彼の筆路には矢張り手慣れた技巧も見えるけれども、その中心には容赦なき realist の血が流れてゐて、彼の欲せざるにもかゝはらず、彼を現實の方へと導き、美醜の方面を明らかに示すものの如し。

途中、さして記錄すべき事なし。

八郎潟の遠望は中々よし。其邊の水田の宏濶なるは越後を凌がんとするものあり。豐作らし。百姓の朝がけの働きぶりも勇まし。彼等の動いてゐるのを見ると、此邊に農民としての社會問題が最近に起るか如何かゞ疑はれる。彼等が本當に自覺して自主の生活を始めるのは何時の事ならんと疑はれる。時々すつと淋しい氣分が胸の中を氷のやうに流れる。此十年程考へぬいてゐた事が、いよ〳〵實現されるのかと思ふと淋しくなるのだ。望が達せられるといふ事は淋しいものだ。おゝそれは眞に淋しいものだ。如何いふ意味なのだらう。

陣屋からこっちに來ると急に靑森らしい磽确の地になつてしまふ。七、八年前あの邊を通つた時には杉森の神々しい程のものがあつたと記憶するが、今は全く坊主山ばかりになつてゐるのには驚く。

三時二十分頃、青森に着く。青森の停車場待合には此三年程も行かなかつたのに、矢張り昔のまゝのボーイ四五名がゐるのに驚く。

入道雲が地平線近くに現はれ出るのを見る。梅雨晴れの證か。夏近し。

四時半の田村丸によつて發航。船中にて Swathmore College の President だつたといはれる人の家族と面會、Swathmore は Haverford の foot-ball の rival だといふので大いに喜び合ふ。波左程高からず。九時十五分函館に着く。車を走らして町に行き、傘、萬年筆、及び Sweater を買ふ。全く寒い程なり。七月も半ばだといふのに袷羽織を着てゐる人に遇ふ。巡査などは白服の上にマントを羽織つて寒さうなり。

十一時の汽車に乘る。割合によく寢たが夜中に大地震の夢に犯され眼を覺まして見ると汽車の動搖と音響なりしに苦笑した。

七月十三日 (木曜日) 黒松内で眼が覺める。四時頃。空は曇つてゐた。

名目あたりには夥しい水田が出來てゐる。此邊一帶が存外開けたのには驚かされる。

六時二十五分汽車が徐行のやうな進行の後狩太に着く。吉川、春雄其他小作の人々數人出迎へてくれる。容易ならぬ冷氣だ。

家に電報を打ち、事務所に着く。いたどりが延びて丈餘になり、苳も久しぶりで珍らしく大きくなつてゐるのを見た。

農場には春雄の配偶として、若い女性が一人加へられてゐた。おひでさんといふのだ。牛舍も出來、米穀小屋も造られて居た。牛舍は後年私が小さな住居でも造らうかと夢想したその所に造られてゐる。事務所の周圍に茂つてゐた、いたやが米穀小屋の前に四本植ゑかへられてゐた。庭には薔薇と芍藥と小葵と蝙蝠撫子の類が咲きはころびてゐる。北海道の花の色はこの上なく美しい。

餘り寒いので春雄の袷羽織を借着してゐる中に、天候がすつかり恢復して何ともいへぬよい晴天になつた。西南方から涼しい風が吹きしきる。朝食後疲勞出で、九時頃から十一時半まで安眠。後入浴。全く元氣を恢復する。

午後、吉川、まさ公と共に場內を巡覽する。麥尺餘、小豆芽生えたばかり、亞麻は花をつけ、大豆は四五寸になり、玉蜀黍は二尺ばかり、稻は丈け二寸程より五六寸程に及ぶ。かぼちやは十分に葉を擴げ花はまだ咲かず。葱には丸き花つき、苜蓿は花ざかり、チモシーもライグラスも穗を抽きたり。

用水路は殆んど完全に出來上つてゐる。吉川の大なる苦心を察する事が出來る。水田も約三十町歩がた出來上つた。高臺と三角地とを見て廻つて、一旦事務所に歸る。立派に熟した苺と、氷の如く冷えた牛乳との馳走になる。美味。それから又三人でタップの方に行く。こゝには盛んに水田が出來てゐる。山森爺さん、七十五なりといふが矢張り元氣に働いてゐる。歸場の上入浴。

螺髻梵王言く、仁者心に高下あり、佛慧に依らざるが故に、此の土を見て不淨となすのみ。舍利弗よ、菩薩は一切衆生に於て悉く皆平等なり。深心淸淨にして佛の智慧によれば卽ち能く此の佛土の淸淨を見る。……譬へば諸天寶器を共にして食ふも其の福德に隨つて飯食異あるが如し。是の如く舍利弗、若し人心淨ければ便ち此の土の功德莊嚴を見る。

是の身は聚沫の如し、撮摩すべからず。是の身は泡の如し、久しく立つを得ず。是の身は焰の如し、渴愛より生ず。是の身は芭蕉の如し、中に堅あること無し。是の身は幻の如し、顚倒より起る。是の身は夢の如し、虛妄の見たり。是の身は影の如し、業緣より生ず。是の身は響の如し、諸の因緣に屬す。是の身は浮雲の如し、須臾に變滅す。是の身は電の如し、念々に住せず。是の身は主なし、地の如しと爲す。是の身は我無し、火の如きとなす。是の身は壽なし、風の如きと爲す。是の身は人なし、水の如きと爲す。是の身は實ならず、四大を家となす。

是の身は空たり、我々所を離る。是の身知なし、草木瓦礫の如し。是の身作無し、風力の轉ずる所なり。是の身不淨なり、穢惡充滿す。是の身虛僞たり、假に澡浴衣食を以てすと雖、必ず磨滅に歸す。是の身災たり、百の病惱あり。是の身丘井の如し、老の逼る所となる。是の身無常なり、要ず當に死すべしと爲す。是の身毒蛇の如し、怨賊の如し、空聚の如し、陰界諸入の共に合成する所なり。

詰富樓那に言ふ

彼自無瘡(カレミヅカラキズナシ)　勿傷之(コレヲヤブルナカレ)

七月十四日。（金曜日）　今日は珍らしく日本晴れに晴れて、而かも涼しい風が西南から習々として吹いてゐた。何ともいへぬすがすがしさだつた。

朝、農場の帳簿を見た。

晝から吉川に案內されて普く場內を巡視した。灌漑溝が立派に完成されて水田が三十町歩ばかり出來上つてゐた。稻は三四寸に延びてゐたが、所によつては新田である爲めにあはれに見える所もある。「こんなに場內が立派になつたのを見たら、場主は恐らくは慾が出て土地を拋棄するのをひかへはしないか」と誰かゞいつたとか吉川がいふ。そんなことはない。私はそんなものが出來るのを見て益々物淋しいやうな感じがする。三角地の中央あたりに清冽な清水の湧いてゐる泉がある。一喫腸を洗ふに堪へたり。

午後、木田金次郎君が訪ねてくれる。夜十二時近くまで話す。時の觀念に關して彼はアインスタインの如き考へを成せり。我等は時の流れを逆つて動く、時も亦動く。然らば、過去、現在、未來は畢竟根據なき空想に過ぎざるに似たらずやといふのにある。

此日夜八時頃戸外を見ると樹木や草叢などが丸で月あかりの中にあるやうに見える。其の光りは西の方から來る。月の光りにしては變だと思つてよく見ると、ニセコアン嶽の奧に沈み切つた落暉の殘照がこんな現象を起してゐたのだつた。露西亞邊にある白夜といふ感じをまざ〳〵と感ずることが出來た。

今夜くたびれてよく寢た。

馬鈴薯の花咲き、麥穗に出で、荳蔓枝にからまり、稻の穗四五寸、玉蜀黍三尺程、かぼちやの葉擴がり、紅白のクロバー盛り、カッコー、駒鳥、稀に鶯。駒鳥は落日の後迄。

七月十五日。(土曜日)　曇り。夜來强雨があつた爲め道路はひどく惡くなつてゐる。午後二時半頃、森本君、小林、松田の兩助手を連れて來てくれる。木田君は行きちがへに歸る。着場の上すぐ森本君を案內して農場をまはる。非常にむし暑し。歸來入浴。夜は組合の相談や、土地共有の議論になる。小林氏は帝大法科の出身でそのいふ所を聞いてゐると如何にも常識的で而かも功利的だ。あすこの大學の氣風が窺はれるやうな所がある。松田氏は今年卒業の札幌出身者だが、落着いて眞面目な好靑年らしい。質問なども極めて質實なものであつた。あの靑年は將來屹度立派な學者になると思つた。若し彼が基督敎理に從つて低級な平和主義者にならず、自己の要求に從つて進んで行つたら、單に學者であるばかりでなく、ある實行を爲し得る人であるかも知れない。然しそれには彼は refine され過ぎて居るか知らん。

此夜十二時半頃就寢。

七月十六日。(日曜日)　半晴。朝、吉川を呼び、總がかりで農場の內容について調査する。午後二時何分かの汽車で三人は歸札。

三人を停車場に送り、水力發電所を見に吉川と行く途中、そこの主任金子祐氏に遇つたら、氏は俱知安に行く所を引き返して普く場內を見せてくれた。現在水力電氣を起すにつけての發動機は Francis Turbine と Pelton wheel とで前者は主に小規模なものに用ひられてゐるさうだ。此處でも前者が三個用ひられてゐる。

ボルトとアンペヤーは水力に於ける水壓と水重とのやうな關係を爲すもので、落差を多くすれば少しの水重で水力は出るやうに、ボルトを高くすれば少しのアンペヤーで同じ電力を出すことが出來るのだが、ボルトが高ければ高い程送電には都合がいゝのだ。水重が多ければそれを入れるのに大きな器を要するやうに、アンペヤーが多ければそれを送電するのに大きな線が必要となるのだ。又アンペヤーは小錢で、ボルトは金貨の如しともいへる。送金するのには金貨を以てする方が（多少の兩替賃は出しても）安くつくし、實用にはボルトが高きに過ぎて困る故、アンペヤーを高くするやうにするのである。直流、交流、脈流――この中、交流は貯電する事が出來る故、電車、劇場等には交流を用ゆるをよしとし、醫療には主として脈流を用ひる。云々。

場内一覽の後、ピンポンなどをして時間を費やし、五時三十分發の列車にて氏と共に狩太を發す。金子氏は倶知安に下車私は小澤にて木田君に迎へられ、田坂、前田等の水田地を、たそがれの空の下に見やりながら七時半岩内についた。十三四人の出迎へを受けた。

人々は岩内の人が久しぶりで歸つて來たやうだといつてよろこんでくれた。藤田旅館の主人榮八氏が是非といふので、御鉾内町藤田旅館に泊ることになり、そこに行つた。薄い髮の毛を横撫でにした馬顏の主人が大騷ぎで接待してくれたが、餘り氣持ちはよくなかつた。木田君が餘り鄭重にしてくれるのも、私には却て心苦しかつた。そこで食べられもしない馳走澤山の夕食を供せられ、すぐに町會議事堂に行つた。人々は既につめかけてゐた。町長の小田切亮次及び助役某もやつて來てゐた。小田切といふ男は一見昔風の役人じみた人間だと思つた。八時頃から講話をして九時半に及んだらうか。それからつぎ〳〵に質問が連發されたが、明快に答辯することが出來た。自分の氣持ちが自分にすつかり落着いた事が察せられる。宿に歸ると有志の人達が押しかけて來て、下の座敷で三十人程で十二時過ぎ一時頃まで又話し合つた。實に一同の熱心なのには驚く外なかつた。

七月十七日。（月曜日）朝、四時半頃、沖釣に行つて居た烏賊釣船の歸港で夢を破られた。階下で女中や番頭が話をして

ゐるのかと思つたら窓前であつた。そこには女房、娘連が迎ひに出て來てゐて、器具の類や捕獲された魚類を家路に運んで行く。船は漁夫の掛聲と共にロクロで濱に引き上げられる。鷗が沖合から群を爲して集つて來て、そこには鳥も居たが、互ひに妙に繩張りを守つてか喧嘩をしない。何時見ても働いてゐる人は男女によらず美しい。見て居るとひとりでに其美しさに涙ぐむ。働きながら互ひに交はす一つの言葉一つの微笑も美しい。かけ聲はあの北海道獨特の淋しい調子を持つてゐる。

八時頃木田氏が來て、それに二三人の人が加はつて、木田君がよく寫生に行く某氏の莊園に遊びに行つた。途中、遊廓地を過る。右手に大きな煉瓦造りの建築物を見た。倉庫會社か何かと思つてゐたらそれが妓樓ださうだ。窓には鐵のボートがはめてあるし、窓ガラスには糊がひいて而かも何れもが堅く閉されてゐる。一種異樣の不快さを持つてゐる。莊園の中にはお爺さんがゐて私達を迎へてくれた。其お爺さんも昨夜は話を聞きに來てくれたのださうだ。非常に美しい紫色のあぢさゐ、菖蒲、薔薇、など。亭に茣蓙を敷いてくれて、やがて其家(といつても留守番人なり)の娘さんがサイダーを持つて來てくれた。丈けの高い、此地方特有の從順さうな、稍肉感的な(能の面のやうな)容貌を持つた美しい人だつた。ふと思ひついて同行の人の持つてゐる扇面に萬年筆で歌を書いて與へた。其娘さん(といつても物慣れた樣子から私は人妻だと思つてゐた)が硯箱と紙とを持つて來たので歌一首を書いた。あとで木田君の話す所によると、其人は親がどうかして多少の金に窮した爲め、かの牢獄のやうな妓樓に身を賣つて三年の年季を勤め上げ、而かも多少の貯金をして去年とか歸つて來たのださうだ。高等小學校などは最優等で卒業した人だといふ事だ。小樽あたりから、嫁にもらひたいと此頃頻りにいつて來るのだが、それには更らに應じないでゐるさうだ。それを若し私が彼女に遇つた時知つてゐたら、私の彼女に對する心持ちはどんなに動いたかも分らない。

九時半に女子小學校に行つた。而して其講堂で男子校からも集つて五年以上の生徒六百名程の爲に話をさせられた。涙が出て仕方がなかつた。熱心になつて五十分程話したら聲がつぶれてしまつた。そこには梅澤といふ岩内一の富豪も來てゐた。その息子のことを私は「生れ出る惱み」の中で惡く書いたのださうだ。其人は今でも私に對して恨みを懷いてゐるといふ事だ。

それから木田君の家に行つた。海岸に面した二階家で、かなり古くさびれてゐるのが知れた。父上は私が十時何分に發つものと思つて停車場まで送りに行つてくれたさうで、襦袢一枚になつてゐた。二階は二間から成つてゐて、手前の間には木田君の花の靜物がかゝつて居り、奥の間には粗末な木田君の机（硯箱とコップに蓋のしてあるもの）が置いてあり、床の間には私の寫眞とミレー、セザンヌの寫眞、及びセザンヌの書簡が一つの額に入れてかけてあり、壁には、ミケランヂエロのシステン壁畫の一部の複製がかゝつてゐた。こゝにゐて彼は働き、且つ考へてゐるのだらう。港內には泥浚ひ船が繫がれてゐて、三十萬圓の浚泥工事の爲めに頭の心まで響くやうな音を立てゝゐる。朝の四時から晩の九時頃までさうやつてゐるのださうだ。それ故に强ひて泊めることをやめたのだと君はいふ。そこに木田君の親友の（缺字）君が、仕事着のまゝでやつて來る。而して岩內の製造家と船持ちと船夫との關係について述べる。現在岩內には約三百四五十艘の川崎船があつて、漁夫が約千人定住してゐるさうだ（鰊の漁期が來ると更らに三千人位外來するとの事）。それ等は船持ちに對して前借をする事を以て、彼等の生活の一つの途だとしてゐるが、實際其生活は悲慘を極めてゐる。鑛山勞働者などはそれから比べれば遙かに優越な處にゐる。縱令海上で仕事の犧牲となる樣な事があつても、彼等の得る處は三圓程の香奠と、前借を帳消して貰ふ位に過ぎない。而かも其人達は其貧窮を以て年中船持ちの脅威となつてゐる。一方製造家は船主から非常に安い價格を以て漁獲物を買取り速かに自分の懷を肥やして行きつゝある。かういふ有樣で中間に挾まれつゝ、船主は全く立瀨がないといふのだ。

然し私は云つた。それは現在の經濟制度では船持ちは進んで資本家となるか、勞働者になるかの二途よりない。結局はさうなるのだと。而してそこから革命の火は燃え上る。階級間の距離が甚しく擴がるからだ。そこで晝食を貰ひ、或人の依囑によつて一枚の絹を書き、それから三十人程の人と一緒に岩內から約一里ほどの距離にある安達淸吉氏の牧場に行く。日が雲の間から漏れて遠山が天鵞絨のやうな藍色を呈し、圓い山の上には麥と燕麥と菜種の赤いからとの縞が織りなされてゐる。相當の老人の安達氏は其細君、一人の息子、二人の娘と共に河邊に席を設けて歡待を極めてくれた。何といふ氣持ちのよさか。私はそこでホヰットマンの詩を朗讀した。グミの實が赤く實り、西洋クルミの樹膚は靑桐の如く、潤澤な牛乳と輕い菓

子。時間の短いのが惜まれた。こゝの老人も昨夜の講演を聞きに來てくれたさうだ。出發前の二十分程にそこにゐる限りの人の扇面や短册に何か書き、寫眞を寫してもらひ、岩内に歸つて四時半の汽車に乘り、木田君に伴はれて農場に歸る。夜、木田君にどれ程とまれといつても如何しても聞かないで遂に歸つてしまふ。

この夜疲れてよく眠る。

七月十八日。（火曜日）　此日郵便局長木村氏が來訪す。話してゐて不快ならざる人なり。何かかにか話す中、晝になる。中食を供す。この日午後二時に農家一同を集めて話をする事になつてゐる。定刻に神社の處に行つて見たが、まだ七八人しか來てゐなかつた。空が薄曇りでひどく暑い日だつた。やがて諸方から農民がだん〳〵集つて來た。一人の百姓――それはもう此農場に二十年の餘も住んでゐるといふ人――が懷舊談をやつてゐた。其人の話によると、後志川には勿論橋はなく、舊市街地には僅かに三軒の家があつたきりで、淋しいものであつたとの事、彼は又水田にも相當の自信があるらしく、色々の話をしてゐた。雪の中に、田の中に牧草の苅つたのを播いておくと、雪解けと共に牧草は熱を持つてぬら〳〵になつてゐるから、其儘田の中にすき込むとこの上ない肥料だといふ事。今日のやうな晝も夜も同じやうに蒸す天氣は惡い。人體に惡く感ずるやうな天氣は稻作にも惡いに決つてゐる。晝間はいかに熱くとも、夜冷えこむやうならば日中に水がぬるんでゐる故、稻の根は害されずに葉だけが涼しい風の爲めに生き〳〵となる效果があるが、今日のやうな天氣では葉は冷えないから、從つて害蟲も發生し易いといふ事。植樹の事にも相當の經驗を持つてゐるらしかつた。ある年傭はれて落葉松の移植をやつた事があつたが、其時監督に來てゐた人の植ゑ方は實に素晴らしいもので、其行程も常人の十倍位はやるし、今植ゑたばかりの苗木が何年も植つてゐたやうに堅固に地面に着いてゐる。自分等は土を掘りくり返して植ゑるが故に、木の葉が苗樹の根に這入り込み、そこから空氣が通ふので枯れがちだが、其監督といふ人の土の掘りかたは單に鍬で地上に十字を切り其一角だけを鍬で一寸掘り起し、そこから苗木をさしこむと、掘り起した土をそつと蓋して一踏み踏むのださうだ。それだから土も崩れてはゐないし、空氣も侵徹しない譯だ。――そんな話をやつてゐた。最後に第一農場の人々が集つた所で、私は立ち

上つて大體左のやうな趣旨の事をいつた。（趣旨に就ては「泉」第一號を見よ）

農民達はやゝ不思議な面持ちを以て私に耳傾けてゐた。

この日も何やら蒸暑い半曇りの日であつた。

七月十九日。（水曜日）この日、朝農場を發つて札幌に向つた。吉川の外に農民の殆ど全部が見送りに來た。こんな事は嘗てない事だ。彼等は緣が切れやうとする私に名殘を惜んで來たのか、思はざる利益を得た爲めに急にかう親しくなつたのか、其邊は分らない。倶知安からは佐藤眠羊氏が乘り合せ、小澤からは木田君が乘り合せ、話はそれからそれへと擴がつた。小樽で四十分程の休みがあつた。其ひまに本間、高田の諸君が來て、是非小樽でも話をしろとの事であつた。それを承諾した。何しろこの日も無性に暑かつた。小樽から汽車に乘らうとすると河崎君が汽車の窓から顏を出し、僕等の汽車に乘り移つた。手には其朝採りためたといふ櫻桃の籠を持つてゐる。何ともいへないよい味のするものであつた。河崎氏の親なる人が君の歸省の時與へようと一樹だけ採集せずに取つておいたものだといふ。札幌に汽車が着くと森本君其他が迎へに來てゐてくれた。森本君の家に泊る事になる。庄司の床屋で髮をかる。田舍らしい色々なものを頭に塗つたり顏に塗つたりするので中々はかゞ行かない。やうやく濟ますとそこに佐藤氏が偶然來てゐた。それから人力車で森本に行く。人力車を引く車夫は札幌在住時代からなじみの、あのよい車夫なり。あの人を見ると安子の事が妙に思ひ出される。安子を病院に送つたのも、東京に歸る安子を停車場までひいて來たのも、思へばこの車夫君なのだ。彼にはよい心が其心臟に埋められてゐる。車夫君のいふ所によれば、其細君も動けないやうな病氣になつて永い事臥たきりの由。

森本の子供は皆んな大きくよくなつてゐる、殊に和子はまるで小天使だ。彼女の無邪氣、淸淨な心は顏にまで突き出てゐる。賀川君も彼女を此上なく愛したさうだが、僕も彼女を深く愛せずにはゐられない。

夕食後直ちに時計臺に行く。聽衆約六百人。學生の殆ど居ない夏休みの割には多く集つた方なりとの事。約一時間半を語る。此收入はアイヌ保護の資金に編入されるとの事だ。此夜二階北向きの、もとの安子の部屋で眠る。暑苦しい位なり。

七月二十日。（木曜日）又札幌には珍らしい暑い日が來た。朝農大の馬車で森本君と宮部先生の所を訪れる。そこに鈴木といふ海軍中將の一家族が來てゐた。其奥さんといふのは攝政宮の保姆たりし人なりと。非常に感じのよい人だつた。宮部先生と園内を歩く。例ながら非常に美しい。攝政宮が來られたので殊に美しくなつてゐるのだらう。それからクラーク・ホールの建築を見に行く。復興期式のもので、中條博士の設計に成るものだとの事。相當によく出來てゐる。こゝで宮部先生に別れ、市内を見、遠友夜學校に至り、中島遊園地を見て歸家。

晝食には同級生の星野、半澤、岩波及び佐山が來る。時任博士も加はる。食事を濟ますと學生達が澤山集つて來て歡談湧くが如し。四時の汽車で札幌を去り、小樽に行き人々に迎へられて、或る西洋料理屋の二階で四五十人の人々に話をする。皆んな滿足してくれる。それから其夜の汽車で歸途につく。バチェラー・マックラレー女史同行。連絡船は實におだやか。函館では山本行雄君が出迎へて、其日是非講演をしろとの事であつたが、日が無い故强ひて斷る。

七月二十二日。（土曜日）朝六時東京着。非常に暑い。タキシーで家に歸る。皆無事。母上甚だ樂しまざる顔付きなり。どうも理由が分らなかつたが、あとで聞くと又佐田の奥さんといざこざがあつたらしい。佐田の奥さんが手紙で餘計な事をいつてやつたわけなり。困つてしまふ。此日の二時に山本及び直忠が洋行する事になつてゐるので、大急ぎで支度をして東京驛に行く。えらい見送手であつた。横濱埠頭に見送つてから、隆三、行郎、毅一、小田君と共に居留地の方でアイス・クリームをのみ、自動車をやとつて根岸海岸を一週して歸家する。

これから先きは又日記が途絕える。個人雜誌「泉」を出す關係から、そちらにばかり頭が向いたので日記を書く餘裕もなかつた。たゞ東京は今年は非常に暑氣が烈しくて、明治十七年以來の事だとの噂があり、夜になると奇妙に風がなぎてしまつて閉口する日が續いた。それから八月の十一日に平塚に呼ばれて行つて、一回講演をしたのと、七月の二十七日に一橋の敎育會場で女子文化會といふ會に出席して、四時間の講演をした事を記しておく。而して後者の休憩時間に私が幼年の時お茶の水の幼稚園でお世話になつた喬先生に邂逅したよろこびを記しておく。

八月十二日。（土曜日）この日午後四時の汽車で輕井澤に行く。同伴者房子及び千代。夜九時過ぎ輕井澤着。

八月十三日。（日曜日）一日を輕井澤にて過す。

八月十四日。（月曜日）午前十時某分の汽車で木崎夏期大學に向け出發。篠井で偶然北村及び他の一君に遇ひ同伴、六時頃木崎湖に着く。中々よい所。松本といふ町も一覽。

八月十五日。（火曜日）晴天。朝八時から十時に亙つて「新舊文藝の交渉について」といふ題で話をする。聽講者が約百四十名位もあつたらうか。熱心に聞いてくれる。「世界パンフレット社」の茂森氏が來てゐて筆記をしてくれる。佐田氏夫人及び弟妹の人も來て居られる。十時からは山岡といふ法學者が「少年保護法案」について談る。傍聽す。さして得るところもなし。

午後は一時半から又二時間、ホヰットマンについて話をする。それから北村氏等に連れられて湖上にボートを浮べる。對岸に學者村といふのがある。同型の家屋が十軒建てられてゐる。二千圓づゝで出來たものだとか。かなり殺風景なものだ。字を書いてくれとてしきりに持つて來る。夜に至つてもやまず。うるさき事限りなし。

八月十六日。（水曜日）晴天。中々に暑し。朝は如例文藝上の話をし、十時から又五六人で湖上にモータ・ボートを浮べ、遂に我慢がし切れなくなつて泳ぐ。水の清い事は類ひなし。

午後又ホヰットマンの話をする。それを濟ますと直ぐ自動車を賴み北村、山本、佐田の諸君と青木湖に行き、和泉屋といふ旅館に案內さる。そこに住んでゐる先生方が親切に世話してくれ、舟を湖上に浮べる。時に微雨が來る。

湖畔に住んでゐる老人が獨りで釣を垂れてゐる。赤魚といふ魚が中々よく釣れる。白馬のすそが雪をいたゞいて見える。夜、和泉屋の土藏に草でしつらへたる細長い部屋に泊る。前には中綱とかいふ小さな湖水が見える。野趣横溢。こゝでも又書をしこたま書かせられる。

八月十七日　(木曜日)　晴れ、暑し。朝七時この地を辭し、木崎大學にて皆んなと別れ、北村、山本二氏と共に自動車で明科の停車場から汽車に乘る。車中石丸梧平氏あり、別に話もせず。元政和尙の傳を讀む。更科のあたりの風景は誠によい。大分客がそこに降りた。

長野に着いたら人々が迎へてくれ、停車場の旅館で中食をしたため、二時某分の汽車で野尻に向ふ。

野尻の池田萬作氏には別に變りなし。長娘が他に嫁いで今は臺灣にゐるとの噂を聞く。柏原から野尻まで自動車が出來てゐる。この夜隣客の中氏夫人と知り合ひになる。中勘介氏の義姉で其主人は福岡醫科大學の敎授であつたが、十年前に中風にかゝり口がきけなくなつたのだとの事。翌日その人にも遇ふ。二人ともいゝ人で氣に入つたり。此夜は蚤にせめられてよく寢られず。

信濃尻の湖の水底ににじみ入る
　雲の行手に物をこそ思へ
信濃路は悲しかりけり眞夏にも
　憂ひの如く雪の殘れば

八月十八日。(金曜日)　晴れ。朝早く眼がさめ直ちに湖畔に行つて見る。靜かなよい景色なり。朝は格別の事もせず、午後から小學校で會員の親睦會をする。參集者十四名ばかり。去年と比べると大變人數は減つてゐるけれども、親しい人の顏

ばかりでうれしく思ふ。

八月十九日。（土曜日）晴れ。朝九時頃から小學校で集會を催す。ホキットマン。午後小學校でテニスをやる。宮川氏の家族傍觀。

八月二十日。（日曜日）晴れ。朝同樣。午後愛子、直正、房子が來訪。場所が大層氣に入る。夕方モーター・ボートで湖心を一週する。

八月二十一日。（月曜日）晴れ。この朝、愛子等講筵に列し午後歸る。夜宮川氏の家族來訪。

八月二十二日。（火曜日）晴れ。朝柏原まで靜かに歩き、八時某分の汽車で歸途につく。美しい人と乘り合はせる。輕井澤には十二時頃着。愛子、直武、行光が停車場まで迎へに來てゐてくれる。輕便で家に着く。母上はじめ無事。

夕方から雨が催す。野邊地天馬君その子息東洋を伴ひ來り泊す、

八月二十三日。（水曜日）曇り。何事もなし。午食を愛子の馳走で三笠ホテルで。エリーナ・パブロバが來てゐる。

八月二十四日。（木曜日）曇り。後大雨。十時頃より異常の大雨となり、風まで加はつて來る。野邊地君その雨の中を歸京す。足助自動車にて膝かけにくるまれて來訪。昨夜輕井澤に來り、萬松軒に泊つたけれども、待遇極端に惡きため我慢が出來ずしてやつて來たりといふ。「泉」の校正刷が出來て來てゐる。これが私の雜誌の第一の出發點かと思ふと、矢張り可愛いゝ。

午後から夜にかけては素晴らしい風雨になつた。私の好きな雨だ。この日は雨にもかゝはらず晴間は頗る客來が多く、神尾の母、國分の叔母、栃木子爵夫婦、井高香遥、長泰、その他があつた爲め、すつかりつかれてしまひ、夜、九時に就寢する。

昨夜國分の叔母上來り愛子と歌會を催す。水の歌は、

（違）　ガンジスの大川隈にうつしたる　、

影かもこれや古沼の蓮

（紅葉早し）　信濃路を今朝越え來れば時雨して
はるけき目路の峰はもみじぬ

（雨）　いづこ經ていづこに行くか雨の脚の
聞え聞えず夜をこむるかな

（團扇）　夏ゆきぬ都にかへる汽車の棚に
おき忘られし團扇の上に

（百合）　かつ咲きぬかつ又散りぬ百合の花
人のとつぎしその夏の庭

（雫）　思ひ出もかばかりなりや軒の端の
雫の音の絶え續きして

八月二十五日。（金曜日）　昨夜は雨が晴れて、滿天の星秋の如くであつたが、今朝は又稍雲があつた。然し大丈夫と思つて足助を案内かた〴〵峠に登る事にする。直正、淸水、行三、敏行同行、女中二人も。

晝食を山本でもらふ。足助への馳走なり。午後より雨もよひ、夕刻より昨日同樣の空合ひとなる。新聞によれば東京より北海道の東部も大分の損害ありしものの如し。

母上は豐川氏方の新築祝ひに赴かれ、雨に閉されて同家に一泊の事になる。夕食後足助と二兒と樂しく夜を過す。行光はこゝにての滯在中全く山本家にて過し、敏、行三の二人は家にあり。近來の傾向は甚だよろし。極めて自然なる發育を爲しつゝあり。

八月二十六日。（土曜日）　朝六時起床。矢張り雨が降つてゐる。床中で聞いてゐると風が凪ぎてしまつて、點滴の音だけ

の聞えるのがまるで春雨のやうだ。あの春の雨は眞に日本に特有なものだと思はれる。その奥床しいしめやかな感じが、却てその時節より今頃の方がしみ〴〵感ぜられる。起き出て見ると雨はやんで、風が西方から吹きはじめた。今日こそは晴天になるらしい。朝寢衣のまゝでそこゝを散歩する。朝食後、町に出で三笠にて井高の金澤時代に造つた花瓶を買ひ、それを持つて豐川氏を尋ねる。母上等、朝食事中。永平寺に行つてゐる未亡人になつた令孃も同座。かねて其噂は聞いてゐたが、大變によい印象を受ける。それから母上と共に山本に行き、暫らく話して歸家。途中小兒等テニスをやつてゐるのを見る。足助もそこで見てゐた。風が稍强く大分暑くなつて來た。昨日の日付の戸川からの葉書に東京にも風雨が來り、昨朝はやんだが、朝、寒暖計は八十度を示してゐた由。東京の暑氣が思ひやられる。

八月二十七日。(日曜日) 朝は曇つてゐたが午後から晴れ出して、東京に着いた夕方は何ともいへない氣持ちのよい涼しい晴れ日になつた。朝八時某分の汽車で山本、直正、直武、行光と共に歸京の途についた。母上は昨日あたりから何か不快な樣子をして居られる。生活革命に對する反感が、時間と共に增長してくるやうだ。困つたものだと思ふ。愛子達が停車場まで送つて來てくれた。途中は隨分暑くつて弱つた。加藤博士の三男も同伴してゐた。吞氣なふとつちよだ。家には章子がゐた。夕方行郎が中野のテニスから歸つて來た。夜は割合に早く寢た。

勝見君が白關に出來たといつて立派なメロンを持つて來てくれる。

八月二十八日。(月曜日) 快晴。今日はこぢれたやうな風の來る快晴であつた。朝早く山本一郎が來る。上海から格別の收穫も收めずに歸つて來たらしい。雜誌發行の相談だが、「勞働社」の連中は銘々のいふ事が一致しないのでよく事情が分らないといつて置いた。それから理髮屋に行き按摩を頼む。頸筋から頭をもんでもらつて大に元氣を囘復する。午後は諸方に手紙を書きなどす。夕方英夫來る。此夏は盛んに運動したりとて日燒けがして多少瘠せてゐる。行光は朝から直武と中野にテニスに行き、夕方歸つて來る。來月一日から中野に宿泊し獨立の生計を營むのだといつてゐる。夕食後、獨り上野驛に行き、八時の奥羽線に乘る。偶然松村松年氏と遇ふ。この夜蒸暑。

八月二十九日。（火曜日）　朝の空模樣は左程でもなかつたけれども、大曲邊に來た時から段々具合が惡く、仕舞には雨を催した。十一時五十七分、秋田驛に着く。相澤氏等が出迎へてくれる。而して自動車で土手長町の石橋旅館（だるまや）に投宿する。この市にはもう一つ小林といふ大きな旅館があり。石橋は非官僚畑の人が泊り、小林の方には官僚及び政友畑の人が泊る事になつてゐるといふ。由來此市は政爭の盛んな所だとの事だ。石橋といふ家は古い家だが趣の惡くない庭もあり。女中なども不愉快ではない。午後多少の人々の訪問がある。一時に故大脇博士の葬儀が天德寺にあるとの事で、松村氏と共にそこに出かけた。此旅館は內町にあるのだが、旭川といふのを渡ると外町になり、舊城址なる公園の下あたりには昔の士族町と思はしいものを見る。仙臺などより規模は小さいが、矢張り或る崩壞の風情はある。天德寺といふのは畷手を遙かに行つた山の下にある禪刹だ。たしか萬固山といつた。一時四十分頃柩が到着して、式がはじまつた。非常にしんみりしたよい葬式だつた。歸りがけに未亡人や、子供さん達にも面會した。

この頃から雨が時々ばら〱と降りみ降らずみ降りはじめた。夜は美術倶樂部の十色會、金砂會及び教育者同志會の小集に臨み、ホヰットマンに就て二時間ばかりの話をした。會集約四十人。折柄土崎に來遊中の中川一政君も同列した。而して氏は十時過ぎに其友大橋君と土崎にもどつて行つた。夜古川氏といふ人が三十里程はなれた所から尋ねて來た。夜は蒸暑さが中々ひどくつて寢られない。おまけに隣の客が女中を相手に大聲を出して騷ぎ立てる。夜明けの二時頃から大雷雨が見舞つて來た。二度ほど市內に落ちたかと思ふやうな落雷の音がし、雨はさながら瀧津瀨の如く間歇的に降りしきる。碌々寢ないで眼をさましてしまつた。

八月三十日。（水曜日）　昨夜の約束通り中川君から電話がかゝつて來、天氣だから土崎に案內するとの事だ。

待つてゐる中にやつて來る。大橋氏も同乘。高淸水の公園から土崎を一望する。雄物川が透曲して流れ、幕洗濱の白砂が見え、町は黑ずんで入江のふちに立ちならび、遙かに赤を交へた日本石油の工場。遠く沖合に三艘程の汽船。町に這入ると家造りに一寸特色がある。

舊秋田城址が公園となつてゐる。そこを經て、池鯉亭といふ所で早い晝飯の馳走になる。金子洋文、今野賢三、其他の若い人達が集る。非常に氣持ちのよい連中で全く打解けて色々の話をする。十二時少し過ぎ又自動車に送られて秋田市に歸る。土崎では少しも降らなかつた雨が秋田に近づくとさつ〳〵として降つてゐる。單に二里程の距離に過ぎず。その間には丘陵といふ程のものもない。記念會堂といふ大阪の公會堂見たいなものが元の佐竹の重臣の屋敷跡に建つてゐる。折柄の大雨にそこに着く。一時半開會。聽衆約五百。熱心に聞いてくれる。「惜みなく愛は奪ふ」を話す。約二時間話す。會後露國饑民の集金をしたら約四十圓が集つた。家に歸つて暫らくすると又古川氏がやつて來た。

今朝笹島秀雄氏といふのが大館町から尋ねて來て、厚い手紙を置いて行つた。その手紙を讀んで非常に私に厚意を持つてくれてゐる人で、而かも中々考へのある人だといふ事が知れた。今京都の經濟科に居るのだ。

夜、同窓生と主催者との慰勞會が旭亭といふ所で開かれた。勝手なことを九時過ぎまで話し合ふ。秋山熊次郎、石川、などいふ同窓と遇つたのも愉快だつた。此夜星月夜になつて晴れさうなり。今夜は昨夜より少しく眠る。

八月三十一日。（木曜日）この頃又驟雨。十人程の人の需めに應じて字を書く。二十八圓某の潤筆料を得、是れを講演料の半額五十圓に加へて露西亞の饑饉に寄附する。

午に俱樂部といふ料理屋の同窓會に列す。折柄札幌から來た時任教授と共に集會者十四名を算する。笑談風發の有樣。午後三時半頃、四五人の同窓生に擁せられて公園に行つて見る。中々規模の大きなものなり。太平山といふ山が上半霧にかくれて美しく眺められる。そこから旭が出る由なり。停車場に行つて四十分程待たねばならぬ。見送人十七八人になる。秋山、西田の奥さんも見送つてくれる。

九月一日。（金曜日）朝宇都宮の少し手前にて夜が明ける。寶積寺などいふ停車場を通り、嘗て見習士官の時演習に來た時の事など思ひ起す。大宮にて列車に乘りかへ、正午少し過ぎ輕井澤に着く。人力車中、歸京の途にあるいくよさんの夫婦に遇ふ。莊につけば一同無事。子供達は自轉車に乘つてゐた。非常につかれ正しく坐して話をする力もなし。直ちに午睡。

深眠し夕方やゝ元氣を回復する。三四通の手紙がとゞいてゐた。夜食後、足助を要屋に訪れる。三四日來催眠劑を飮み過ぎた爲めか、非常に頭の具合よろしからぬ由。あつちこつちと喧嘩してゐる彼の生一本な性質が事每に衝突してゐるのを見ると悲しくも思ふが、彼の純眞な態度には感心せずにはゐられない。夜十二時近くまでかなり眞面目な話をし、雨が降り續けてゐる故遂にそこに泊りこむ。六時頃までよく眠る。終夜海賊になつた不良少年の群の夢を見る。不思議に其不良少年の不埒な行動に同情がされる。

九月二日。（土曜日）　朝は恐ろしくよく晴れたが、すぐ曇る。然し雨が降るまでの事はなし。朝、足助の處から歸つて見ると、家には誰も居らぬ故、母上を迎ひに山本に行き、靑木と駒村との爲めに字を書く。正午歸宅。午後は家にあつて「改造」などを讀む。四時頃折柄ホテルに來合はせてゐた倉田君を愛子と共に訪問し、六時頃迄語る。君は赤倉、野尻湖を經めぐり、こちらに來たのなりと。珍らしい遠征をした事なり。なほ子といふ若い婦人が同伴してゐた。彼の妹さんによく似た人であつた。

今日は倉田氏とは色々に入り込んだ事を語り合つた。余の意見が大分君の考への中に這入り込んだやうに思ふ。君も此七月頃生命を脅かされるやうな事件にぶつかつて、理想と實行との關係について考へさせられてゐるやうだつた。夕方、豐川、神尾、山本の人々を招き、夕食をホテルで馳走す。倉田君も珍らしく食堂に下りて來てゐた。

九月三日。（日曜日）　今日はやゝ雲はあつたけれども、雨は來なかつた。朝七時の輕便で山本、豐川、淸水の人々と押出石に行くことになる。敏と行三とが同伴する。輕便に乘ること二時間程で目的地なる停車場に着く。その間の道も目的地から押出石までの風光も、實に美しいものだつた。輕井澤以上に宏大な高原の風色で、而かも美しい立木がある。(それを或る會社が村から買收したさうだ。十年間くらゐの間には坊主山のやうになるとの事）北海道の高原の最も美しい部分と比較しても決して遜色はあるまい。停車場から步くこと一里半。桔梗、かるかや、松蟲草、鈴蘭、しやくなげ、苔桃、淺間葡萄、丈け低き樅等。押出石は熔岩が淺間の噴火口からなだらかに押し出したもので、まだ地皮が出來てゐない。それを見ながら晝

食を食ふ。
午後二時の汽車で歸途につく。敏行發熱、房子よく世話をしてくれる。
小瀨停車場より私ひとり歩いて歸家す。足助が遊びに來てゐる。敏行は停車場から歸ると直ぐ就寢。大分熱があるらしく見える。兩三日前より寒い／＼といつてゐた由なれば、少し風邪にかゝつたものならんか。
九時頃就寢、夢更らになし。〔此處に挿繪あり、略す〕

九月四日。（月曜日）朝敏行が不快な事を發見す。少し發熱してゐる。多分便祕と昨日遠足した結果だらう。緩下劑と解熱劑とを與ふ。夕方に至つて全く回復した。この朝足助が歸京の途に就いた。實に美しい天氣だつた。實に美しい天氣だつた。秋の中の秋といふ氣持ちがする。晝頃西村伊作君が二人の子供を連れて來訪。いつもせか／＼した人なり。一寸井高の窯の處に行つて見る。
午後テニスをやる。滿身の汗になる。それが快い。夕食後井高來訪。夜山本に至り靑木より依賴の書を書く。及び井高所有の母上の文を横幅になしたるものに箱書きす。井高の駄法螺を聞き、夜十時頃歸宅就寢。
今朝、性的の夢を見る。
津輕伯夫人より靑森のなりといふ林檎を送り來る。
倉田君は今夜月に乘じて自動車を驅りたる由。近來にない淸快を襲ひたる事と思ふ。今夜の月は實に麗はしかつた。

九月七日。（木曜日）この日十二時某分の汽車で敏行、行三、敬子と歸京。停車場まで大勢見送つてくれる。暑氣猛烈、加之乘客多くして座を得る事不能。輕井澤では楓樹が既に紅葉してゐた。五時過ぎ着京。

九月十二日。（火曜日）朝曇りたれど後晴れ。夜は星美しかりし。晝頃木村德藏と谷川とが來る。Kは更らに千圓を借りたしとの事ながら、到底都合がつきさうもない故斷る。午後より谷川と帝劇に女優劇を見る。成瀨無極の「池」がありし爲めなり。悉く面白からず。劇場内の空氣は全く濁つてしまつてゐる。夜、谷川と又アンナ・パブロバの露國舞踊を見る。無言

なのが非常に氣持ちがよい。久し振で全く陶醉の氣分にひたる事が出來る。何といつても立派なものといはなければならない。Chozvianéa などは實に美しい形の配列變化だつたといつてゐる。壬生馬、行郎夫婦も來てゐる。家に歸つてからも、十二時過ぎまで語る。

遺された手帖から

一九〇一年（明治三十四年）

七月二十三日。午前六時十分發の汽車にて札幌を去る。此日天氣晴朗、朝來の濃霧全く霽る。小樽より馬車に乘じ（父上、余、阿部）て發す。車の震動甚だしく、殆んど座上に跳躍す。十時桃内に着し、少憩す。十一時十分桃内を發して、十二時十五分、大川町鍵叉旅館に着し、中食す。一時半出發。四時、山道村（峠下）に着す。大川より五里なり。途上日中暑氣強く、車上の人皆眠る（甚だしき震動の中に）馭者亦眠る。

峠下五時發、七時十五分前小澤村荒井旅店に着す。峠下より四里なり。

中澤村に人家の出來しは四十年程以前なる由なれども、著しく發達進歩し來りしは、七八年來にして、今は戸數凡て二百七十餘戸あり。四年來殊に景氣よかりしが、昨年に至りて一旦減退し、本年に入りてより更らに活氣を呈し來れり。

此日は余に取りてつらき日なりき。余の心をひく幾多のものを札幌に殘して去らざる可からざればなり。鳴波五里、霧長きが如くにして甚だ長からず。回顧すれば、我の爲せし處何事ぞや。我は何事もなさゞりしも、神は我に甚だ多くを爲し給へり。我が眞生命の生れし故郷は札幌なりき。我の嘗めたりしやるせなき苦痛、味ひたりし深き歡喜の是等は、凡て札幌の自然と人が、余に供したる處なりき。之れを思ひて感謝の涙溢れざらんや。神よ、罪多き卑僕にさへ、再び去るべからざる生命を附與し給へる惠みに滿てる神よ、願くは益此卑僕の弱く汚れたる心を扶け給ふて、幸に精神を弘くし、渇を醫して、

此卑僕が主に從ふを得るに至らしめ給へ。我が心、我が身、凡ては主のものなり。主、我をよきに導き給ひ得べし。主よ凡てを捧げしめ給へ。

七月二十四日。 五時少し前起床。空には少しく雲ありたれども、多分霽るゝなるべし。六時二十分小澤村を發す(馬を僦ふて)。九時十五分、倶知安×旅店に着す。午後二時四十分山本農場事務所着。

小作人姓名及移住年月

姓名	移住年月
山本甚藏	三十三年四月
佐藤由藏	同
安田八太郎	同
神田榮太郎	同
本田政之助	同
吉川銀之丞	同年六月
牧　榮次郎	三十四年七月
內山正源	同
廣岡宗助	同

少憩の後、吉川銀之丞氏に案內せられ、松岡農場を經て基線道路に出で、市街線空地を通過して眞狩別川に出で、本流後志河と合流する所に遠望し、深飼農場事務所を經て歸る。夜、農場の經營に付き警告注意をなして、十一時に至り就寢す。蚤多くして眠屢々破る。

夜、月中天にあり。マッカリヌップリの高峰高く雲表に聳えて夜衣を纒ひ、崇嚴高崇の景、襟を正ふせしむるものありき。

七月二十五日。朝五時起床。屋を出で小谿に下りて顔を洗ひ、體を拭ふに、淸冽なる淸水、膚に透りて齒の震ふを覺え、快云ふべからず。事務所の前に立ちて東方を見れば、例のマツカリヌツプリ曉雲に閉され、時々其頂腹を示し、朝暉其左肩を排して徐々に昇り來るの狀、壯快と稱すべし。

小作反別十二三町歩。

小作人山本を伴ひ諸方を見物す。

午後一時眞狩太驛亭に到り、馬を傭ふて留壽都に向け發足。

眞狩太を發足し、近藤農場を通過して眞狩別に出で行く、單獨農事經營の模様を見て、後志山下の荒涼たる平原に出で、一望漠々たる靑原の野と、倒鉢の狀をなせる後志山と、後方は形よく富士に似たるマツカリヌツプリとを見て、高原の逕路を拾ふもの殆んど二里、遂に加藤牧場の中に入り、漸く山を下りて留壽都に入る。發してより五里半なり。

五時十分前、留壽都驛大野方(加藤農場及び牧場のある所)に着す。眞狩村郵便局のある所なり。

午後六時。馬車を傭ふて留壽都を發す。里程三里半にして、初めて路甚だ平易なりしも、行く事二里、この原を過ぐる頃より漸く凹凸を生ず。西方昆布岳の邊に日沒を見る。雄渾名狀すべからず。既にして羊腸たる阪路を下り、再び上り、又下りて午後九時十分前、湖暮れ、山黑みて月獨りかすかに明るき道を經て漸く湖畔三橋旅店に着す。車にバネなき爲、動搖一方ならずして、三人の疲勞甚し。

七月二十六日。雲多し。朝早く湖畔に嘯き、汀際を歩して無限の感興を得たり。湖中に死せる伊藤氏を追懷して情甚だ切。

例のバネ無しの馬車を傭ひ、八時半三橋を發し、孤兒院の下道を經、湖畔に沿ふて行く事凡そ二里、峠を越えて山中假野の地に畑を開けるもの甚だ多きを見る。遂に虻田の所在する內浦灣を遠望する所に來り、漸く下りて普く開拓されたる畑の間を過ぎて旅店新井に入る。時に一時半。

朝來暑氣實に甚し。

洞爺より虻田まで凡そ三里半と稱せらる。

新井に中食し、此に再び馬車を傭ひ、海岸に連れる砂丘の後方を走らせ、有珠、長流等を經、有珠岳を望み、內浦灣に面する明媚なる風光と內地府縣の如く收致的に開拓せらる畑とを經て紋鼈（モンベツ）に出で阿部旅店に投ず。時恰も五時。

隣室にゆくりなくも佐藤六郎に會す。

夕食後市中を散步す。

夜佐藤の室に佐々、芳賀の二人來る。共に談し十時頃に至れり。

夜に入り風出で、又雨少し至る。

七月二十七日。朝來雨、少時にして止む。

八時十分前、馬を傭ふて發す。

十時舊室蘭に着し、舟を傭ひて發す。十二時十分前室蘭に着し、㊀旅店に入る。

午後より三人栴北氏に伴はれて角力見物に到る。三時十分、母上、湯地氏夫妻と共に栗山より到着せらる。

此夜九時半、汽船薩摩丸に搭乘す。夜靜かにして霧深し。甲板の上に立ちて見るに、海と空と共に霧中に隱れ去り、天地唯一の國、飄然として白雲の間を分けて天に昇るの思あり。後舷に立ちて瞑想時を久ふす。北海の天地に逍遙するの時も既に瞬轉の後に終らんとするなり。嗚呼慕はしき札幌の地よ、汝と相遇はんは何れの時なるべきぞ、嗚呼愛すべき札幌の人々よ。汝と相見んは何れの時なるべきぞ。我は新に祈らん。是れ我が彼等に報ゆる最もよき道なり。人、人に智惠を傳へ得可しとせば、神豈其嬰兒に祈禱を敎へ得給はざらんや。

七月二十八日。昨夜汽船は午後十時室蘭を發したれども、濃霧の爲めに遮られ、海中に漂蕩するもの甚だ長く、夜十二時頃漸く室蘭港を出で、夜の明けたる時も、船は尙四顧漠々たる霧中に彷徨せるに過ぎず。かくの如くして九時半頃、漸く沿岸の風光を見るに至り、十二時頃函館港に着す。

龍岡、藤井の兩氏郵船會社の小蒸汽船を以て迎ひに來られ、郵船會社の樓上に少憩したる後車を連ねて公園に至り、一覽の後、野地頭の鑛泉浴場に至りて馳走になる。

此夜十時、汽船東海丸に乘じ十二時出航す。海上多少霧ありし由なれども幸に甚だしき事なく、翌朝(十)

七月二十九日。(七)六時頃無恙、青森灣頭に入れり。我遂に北海の人にあらずなりぬ。本島の風光は依然として本島なり。我洵に彼地の風光を追懷するの念に堪へざる哉。

午前八時に汽車に乘じて盛岡に向ふ。暑氣甚し、過來の疲勞一時に發し、睡魔の襲ふが儘に華胥の鄉に入りて、夢中に幾驛の風光を過ぐ、二時四十分頃盛岡停車場に着す。沖氏ありて迎ふ。共に陸奥館なる旅店に入る、樓上清風あり。三時頃以前より此地に滯在しつゝありし英夫來る。此夜疲れて寢ね、夢なし。

七月三十日。朝、沖、英夫と共に市內を見物す。去る三十年に來れる時に比すれば、少しく活剌の氣を呈し來れるが如し。殊に織物業の著しく盛大となれるを見る。城のありし跡に至る、眺望甚だ佳なるに、石階悉く草の茂るにまかせぬ。城亡有山河と云へる句、不思して脣頭に浮び來るなり。午食を久慈氏の家にて馳走となり、此に五時まで語り居り、父上六時五十分の汽車にて歸京せらるゝに就き停車場に送る。此夜月よし。三千里外故人心!

夜遲く久慈氏の家に移り、此日より茲に厄介となる事となる。此日夕刻心地よき驟雨あり。快哉を三呼せり。

(七月二十五日洞爺湖を過ぎし日)七月二十五日、夜九時、余等を乘せたる荷車は惡路を跳躍しつゝ馳せて、漸く洞爺湖畔の一逆旅に入りぬ。余は洞爺湖に對し二つの抹殺すべからざる記憶を有す。一つは明治三十年、此地を跋涉して月明の一夜を湖畔の清風に過せし事。一つは其時一面の識を得し孤兒院の一助手伊藤君が、一昨年此湖に投じて死せりと云ふ事是れなり。

夜は更けつ、余は餘りに疲れたりき。されど腦は是れ等の記憶に動搖せられて直ちに床に入るに堪へず。遂に家を出でて湖邊に步し到りぬ。

夜と寂寞とは今世界を主宰せり。山眠り水死して、一葉のさゝやく聲、一波の動く音だに聞えず。濃霧は深く天地を罩め、天地をして一塊の中に融合せしめぬ。我に近き水は霧を通して來る。十三夜の月も爲めに曇れる銀の如くなれども、五十弓の彼方は、何れも綿の如き混沌の中に隱れ去りて、我は眠れる天地が見つゝある夢の中央に立てる心地す。

周圍十三里の湖水。丘陵の如き連山は小なり。されど全能の手は此小天地を霧によりて宇宙につなぎ給ひぬ。星の光、日の色も、かすかならでは漏さぬ此深さ、深き霧の遠きかなたに如何なる手の働きにて、如何なる酒の醸されつゝあるや。戰かるゝまでに嚴しく意味深きは、沈默せる自然の姿ならずや。

內浦灣の山色波光を、室蘭港より漸く東に數へ來れる旅客は、幾干もなく、一奇峰の煉瓦色に禿げたるが、突兀として、未だ煙を絕たざる噴火口を、天に向つて開けるを見る可し。海岸線より連れる紋髓の沃野は、其山麓に至りて俄然火山的岩石となり、狂へるが如く崛起して此峰を爲せるなり。旭日の映じて燗銅の色を爲す時、夕暉に背きて紫藍の彩を馳する時、濃霧麓を包む時、輕煙嶺に騰る時、直線的にして單調なる海岸の旅程に疲れし海人、行客は此奇峰に接し、沙漠に入りてオーシスに遇へるが如き心地するなり。此峰の東、若くは西を繞り、花環の如く圓く連れる山を截すれば、花環の中央に如何なる美しき手の投げ棄てたる明鏡ぞ。周圍十三里の洞爺湖は、四山の翠を韲して眠れるが如く橫るなり。

湖心には島三つあり。倒鉢の形せるが、倒影と相合して三個の線なる菱形を爲せり。其島には數百年來安置せられたる觀世音の大像ありて、そを持來れる一僧の經歷は、地人の質朴なる口角に、神仙の如く傳說せらるゝなり。數百年の昔、圓滿無缺の女神を此に移したる一僧の心、强ちに罵りに値せざる可くや。

島には北海道に產出し難き竹あり。巨大なるつゝじあり。其他草木の此處に非らざるものなしとは、我等の馬を驅りし馬丁の得々として放語せる所なりき。

水は一種淡藍の色を湛へ、水晶と綠玉を交へ摧きたるが如く、烈甚なる北海の冬にさへ嘗つて氷を結ばず。水の深きこと

は幾干なるを知らずと云ふ。嘗つて孤兒院の一助手これを測らんとして舟上より絲を垂れしに、絲は恰も水に溶解し去るが如く、之れを垂るゝ事幾千尺なるも絶えて底に徹する狀なかりしかば、慄然として膚の戰くを覺え、蒼皇として絲を收めて船を返せりとか。靈湖と稱する故なきにあらず。

余は今其北岸に立てるなり。

沈思は屢々昏睡に似たる無我を齎し來る。余、今正に然なりき。全く無意義に漣波が目前に織なす彩紋を凝視しつゝ、而かも何物を凝視しつゝあるかを知らず。時限なく、永劫獨り長へなりき。

忽ちにして我が耳、先づ覺め、何物か聞ゆるなり。聲幽かにして而かも散漫、例へば夜靜なる時、高丘に登りて、僅かに響き來る遠き村落のさゞめきを、聞ける時の如し。或は聲なかりしにはあらざるか、されど又聞ゆるなり、耳を欹つる事再三、再四、物ありて漸く我が下に近く來るが如し。遂に耳に入りぬ。而して嚴かに我に私語せり。

TO BE OR NOT TO BE, THIS IS QUESTION!

須臾にして再び私語けり。我は心中にて其語を繰り返しぬ。三たび私語けり。我又心中に其語を繰返しぬ。四たび私語けり。我初めて其意を了せり。背と腹と掌裏に冷汗の一時に逬れるを感ぜし時、其物、其聲後にあらずして我の眼甫めて覺めぬ。我は依然として湖畔に立てりき。

嗚呼我れ罪の子弱き者。玆に獨り天地の眠の中より覺めて、淸くして脆かりし彼の短生涯を回想しつゝありしなり。年齒凡そ我と同じかるべし。

「時」は彼に對する我の記憶を抹殺し得ず。我の孤兒院を訪へる際、一靑年助手ありて共に語りぬ。寧ろ短小なる軀幹は質素なる綿衣を纏ひ、面淸く痩せて額高く、口角緊し眼冴え、一見忘れ難なき印象を與ふ。寡言と云はんより沈默に近く、常に何物かを思索しつゝある如き容顏は、確かに其の思想の人なるを示しき。是れ彼なりしなり。

さはれ、我れ彼と多くを語る時なくして袂を分ちぬ。かくて月を閲する事若干、一夕某雜誌を窓下に繙きつゝありし時、我

が注意を固く捕へし一論文ありき。カーライルとエマーソンとバイロンとを評論し、結ぶに自己の深き感慨を以てせるなりき。我は其該博なる智識と、深厚なる思想と、敬虔にして沈痛なる懷膽とに深き注意を拂ひぬ。あらず、我は學者が邊僻なる北海の洞爺湖にあるを知り、神遂に北海の好風光を空しく造り給はざりしに深き注意を拂ひぬ。あらず、我れ學者が嘗つて一面識ある沈着なる一青年なりしに、深き注意を拂ひぬ。是れ彼なりき。伊藤氏其人なりき。

かくて日出で丶入り、月缺けて圓み、我等人の子永劫の面に刻まれたる悲しき時限を、若干か閲し去りぬる明治三十二年の月は忘れたり、日は元よりなりき。不圖新紙の一隅に、孤兒院の助手伊藤某なるもの洞爺湖に投じて死す。其因絶えて知るに由なしとの記事あるを見き。余新紙を投じ茫乎として爲す所を知らざりし事分時。嗚呼彼洵に死せるか。洵に自ら殺して死せるか。理想の紫雲彼より遠かりしや、現實の汚泥彼を倦かしめしや。傷める葦よ誰が折りしぞ、煙れる麻何によりてか消えけん。青春の血熱すれば、即ち沸々として鐵と金とを併せ銷すべきに、如何なれば空しくこれを擧げて、靈湖の水に冷し了れる。青年の氣、激すれば即ち昂々として雲霄だも凌ぎなんに、如何なれば遂に湖心底深きあたりに藏し去れる。年齒僅かに二十の前後、彼の髮緑に、彼の脣紅に、希望の光、春の若さを捨てしや。嗚呼神よ、彼を省み給はざりしや。我切に彼の死因を知らん事を希ひ、これを我等が馬車に鞭取れる若者に問ひぬ。

彼得々として語るらく、世にあらずなりし彼人は沈着、溫厚なる青年なりき。彼は痛く鄕黨の尊敬を買ひ、遂に洞爺村の小學校に教鞭を執るに至りぬ。父兄は皆彼を校長として得たるを喜び、安んじて其子弟を託せり。彼は爾來小兒を酷愛したれば、彼等亦よく彼に懷きぬ。さるに一生徒あり。年齒尚幼きに、人の誘ふ所となりて、放蕩度なきに至りしかば、彼痛く憂ひて、屢々窃かにこれを諭せしも、遂に省る所なかりき。一日天晴れて風靜かなりし時、彼はかの放蕩兒を合はせ、四五の生徒を伴ひ、獨木舟を操りて湖に浮びぬ。かくて小兒の懼れて歸りを希ふまで遠く進みし時、俄然水中に投入しぬ。銀色に驚かされたる一群の鳩の如く、兢々として僅かに湖畔に舟を還せる小兒等の、村人に告げし所は唯是れのみなりき。世に小心の人も多し、されど彼の如きは幾數ならむと、これ我を滿足せしむべき答へにあらず。嗚呼愚かなりしかな、人に問ふ

に伊藤氏の死因をもつてせんより、土鼠に問ふて天の一角に美しく流れて消ゆる星の心を以てすべかりしなり。

さらば我遂に彼の死因を知るに由なかるべきか、石を取つて水に投ずるに、波紋廣くして影淺く、幾何か擴がり盡して再び始めの平靜に歸る。石は尙水心に潛めるべきも、人再び其の波紋を見ざるなり。彼水に投じて村民其死因を知るもの一人だになく、其名湮滅して、世は永遠に嘗て地球の面に彼ありしを忘れんとするか。嗚呼冷たき石魂と溫き靈魂とは遂に同じき運命の末に走らんとするものか。

冷たき石魂、溫き靈魂遂に同じ運命の末に走らんものか。

狂へるが如く心熱したる我は遂に此祕密をあばくに由なし。主よ、我が凡てよ、迷へる羊に直き道を敎へ給へ、みまへに跪きて我が靈痛く戰けり。

〔左の日記は明治三十四年豫備見習士官として、步兵第三聯隊に勤務中、府中方面に演習に行きたる際かき綴られたるものなり〕

十月九日。朝。雨。此日記を認めつゝあるは九日の午前五時半、府中町なる〔缺字〕と云ふむさき蕎麥屋の、二階の三尺廊下にてなり。廊下につきて六疊の室二つ、夫れに十一人と云ふ士官と、見習士官が雜魚寢をしてゐて、客も女中も未だ起きぬ。廊下には釣ラムプが心を細めて置いてあつて、板葺の屋根には秋雨が降りそそいで居る。吸口の狼藉した煙草盆の傍に、夜具を敷いて坐つて居るのである。「蚊のおやぢ」が二三四、クスブツタ壁に長い脚を休ませて、障子に映る灯の光は紫がかつた赫黃色に見える。

蚯蚓が鳴いて雨垂の音。先刻先發した騎兵の蹄音を聞いた外には靜まりかへつた曉である。

昨八日七時三十分、靑山練兵場に整列した、第一大隊は先發し、第二、第三大隊は合併して第三大隊を作り旅次行軍で府中に向つた。朝晴れの美しい秋日和、我等は〔二字不明〕として先發し、甲州街道を西に向つて行く。厚着やら、薄着やら、

黑い色が一際くすんで赤い色が殊に目だつ。梨、柿、栗は水菓子屋の店に、白く洗つて靑々とした葉の大根と、赤い薩摩芋と、白莖の長い葱とは八百屋の店に、乾物屋の乾物、吳服屋の色々の美しい布地、其の間に屋並が絕えると屋根がツヤ〳〵した日に光つて柿の葉が稍色づいて居る。折々見える富士の頂には心細い迄雪を見せて、秩父の遠山は、名にしおふ武藏野の桑、秋草を蒲團に寢た形。

十一時半、下布田と云ふに着いて、或る旅店で中食をする。水の多い大きな梨に秋の味をなつかしみながら、折しも來合せた聯隊長と話などした。

府中に着いたのが二時半。大急ぎで、偵察の報告作業にかゝる。

夫れより大國魂神社で聯隊長の講話があり、又問題二つ與へらる。

諸隊は警戒舍營と云ふことになつて、第十二中隊と第九中隊の一小隊は前哨だ。蘆田、茂木と僕と三人で一々見て廻つたが、面白かつた。

道を間違へて無名寺に行つた時なぞは實に詩的だつた。

薄い灯が障子に映つて、絲繰車の影が見える。訪ふと障子が開く、老媼が一人、車の前に、老僧が一人、其向ひに五ツ六ツ程の子供が四人讀書して居た。話が長びく中に、奥から十三四の美しい少女が物珍らしさうに出て來た。

書き忘れたが、昨日來る道に調布の里も過ぎた。機が殆んど家毎にあつて、トンバタンと音が聞えて居た。

十時頃巡察を終つて、此蕎麥屋に着いたのである。

十月十日。晴。朝八時半整列と云ふので支度をする。宿の女中は商賣柄に似ず朝寢坊で、未だ夢の中に居る。

小さな中庭に雨がサラサラと降りそゝいで、靑桐の葉が、一片二片落ちて來る下に、名も知れぬ秋草が咲いて居る。

昨日露營した第十二中隊は嘸難儀な事であつたらう。信子は未だ夢でも見て居るか、壬生馬は佛國で何をしてゐるだらうなど〻、とりとめもないことを、それからそれへと思ひ入りながら、黑い柱に凭れて庭を眺めて居た。兎角涙になりたがる

僕の弱さよ。
其中に町が急に賑やかになつたので、表を見ると、宿の直前に大隊長以下が集つてゐた。兵士の頭巾を取れと聯隊長が嚴命する。
秋の雨が霏々と乘馬の背を垂れ下つて、尻のあたりから湯氣が面白い樣に立ちのぼる。慘として僑らずと云ふのか列兵の釘打の靴が礫交りの土を踏む特殊の音のみ聞える。
命令が出て、前衞と共に見學の爲め隨從する。例によつて蘆田、茂木と一緒である。
くねつた桑園の一條道、或る時は灌木の林も通る。旅の人には一人も逢はぬ。試みに若い農夫が、何かの事から家を脫して、斯かる秋雨の中を、他鄕に訪はうとする道すがらの事を、小說にして描くとして、此道のあたりを如何形容したものであらうなどと思ひながら俯首して行くと、蘆田君が、道の邊の秋草の花の哀れなさまなど云ひ出したので、妄想が破れて見ると、自分は戎衣を着て隊尾に侍して居ると云ふ仕合せ。玉川上水の水が、黃色く量を增して、眞直に流れて居るのを渡ると、秋の心が身に泌みる。此邊には敵兵の設けた鹿砦らしいものがある。飯粒の散つた所がある。戀が窪と云ふ村の道は、河のやうに雨水が流れて居る。
やがて敵は、久米川附近に陣地を設置して居ると云ふ騎兵の報告が來たので、部署が定る。小川と云ふ一寸した村の北方の大森林の五叉路、一昨夜敵が前哨を張つた邊りを過ぎて杜端に出ると、淺間祠と云ふのがある。赤松と杉の亭々たる一構へ、それに前衞が停止して、本隊は林を右方に大岱に展開せるのを待つ事になる。右側衞は又も右方に居る。時は十一時頃、雨は篠をつく計りである。
安東大尉が來たので、一所に大隊長の居る所に行つて見て居る中に叱られて、右方の百姓家に入ると、鷄が寒む相に片脚で立つて居る。流し元には栗のゆでる香ひがして、子供が大きな傘をさしかけながら馳け出して來る。栗を拾つて一つ二つ生で食ふ。

敵の砲兵陣地を、味方の右側衞が、側方から攻擊を初めたのを見て、久米川村に入ると、町中の人が擧つてこれを見て居る。雨傘の黃色と秋の雨。

直ちに敵を追擊しながら所澤の北端まで出て、演習中止となる、二時半。中食後少暇をぬすんで一軒の百姓家に入る。此家の主人は明治十四年に、花房公使ヽ朝鮮に護衞して行つた人ださうだ。白湯を煮て吳れる。裏では豚がうめいて、堆肥の香ひがキビシクする。

兵を宿舍に入れたのは七時過ぎであつた。大きな金物屋の裏座敷に我等五人宿る。新らしい浴衣を出して吳れたので、グショ濡れの戎衣を脫ぐ。當番が働いて吳れる。雨は小止みなく降つて居る。

一九〇七年（明治四十年）

八月四日。日曜。晴。午後時々雨。午前十一時四十五分、父上と共に上野驛を發す。高木、山本、奧園の諸君見送れり。

八月五日。月曜。曇り、風、霧。朝七時、靑森停車場待合室に於て朝食。郵船支店長來訪。十時住ノ江丸に搭乘。波稍荒く、船客船暈を感ずるもの多し。五時函館着。龍岡郵船支店長代理諸氏も出迎へらる。旅館勝田に投宿。夜は野地の勝田に於て龍岡氏の饗應。松前追分、義太夫等を聞く。十一時歸宿。

八月六日。火曜。朝七時二十分函館を發す。郵船支店長龍岡氏及び勝田女將に見送らる（出發に先ち旅館に藤井氏來訪）。車中時々來雨。沿道の風光好きところ、大沼、小沼。耕地の見るべきもの、目名、菊越。わが農場の景況は五年以前に比すれば大差あり。吉川銀之丞及び農夫五人出迎へあり。高木氏と別れて農場に向ふ。行く行く新市街地、製麻會社用外灕等を拾視す。

此夜吉川が單に監督人たるの職責を守り、地主請負人の資格に立入らざる旨を話す。

八月七日。水曜。朝曇、朝の話——

一、全部ノ附與ヲ受クレバ、製麻會社ト地上權設定ノ約束。
一、新貸防風林ト會社トノ境ノ事。
一、空間地ハ先取權ヲ主張スル事。
一、立木拂下ゲ及處理ノ事。
一、貸與地附與願ノ事。
一、當年收納金ノ事。
一、吉川トノ契約追加ノ事。

午前、村役場に村長を訪問し、談話十一時に至る。山内榮喜より鷄卵十個を送り來る。午後少しく午睡、クロポトキンを讀む。五時近く、小吉川氏を伴ひて防風林地を東方に小林農場境より三角地の東端に到りて七時歸宿。午後空は曇りたれども時に雲切れし、蝦夷富士の頂、纖雲を破りて立てるを見る。

八月八日。木曜。雲あり。正午八十七度。早起結束して出發し、第三線北際、小鐵境界を踏査し、隧道を經て、極北の地に入る。草、膝頭を沒して困憊甚しく、暑氣亦强し。阿部、伊藤の二人草を分けて案内す。午に近く河畔に出で、少憩して河膳を開く。林中遊蝶頗る多く、繽紛として碧葉の間にむらがり飛ぶ。若しツルゲネーフあらば此夏の深林の様を如何に美しく描きしものならむ。歸路默歩せる儘にフト、ゲーテーの風貌、性格などを烈日の下に思ひ起す。

彼の眼の如何に美しく輝けるか、彼の激烈なる情緒が殆んど冷淡と見ゆる深刻なる修養によりて內向し、そが爲めに如何に多くの恨を人より買ひしかなど。

家に歸りて飲みしサイダーの味！　裏の河邊に衣を脫して入らんとすれば冷水身を切るが如く、長く浸るに不堪。

愛子より端書あり、母上の病漸く癒え給ひしを報ぜり。

壬生馬の端書には COROT の畫あり。余の嘗て眼に遑はざるもの、必らずよき作なるべしと思ひしに、壬生馬の短文を讀めば、彼も亦近く見るの喜びを得べき其畫を賞すること甚し。

ティルディ、アグネス、エルキントン及び森本諸君よりの端書、或は書狀、心深く讀む。

午後、父上が河島長官と共に旅行せらる可き少旅の準備を爲す。午下雷鳴。

八月九日。金曜。曇。朝七時五十六分の汽車に乘じて小樽に向ふ。汽車の遲行と、停車場に於ける待ち合はせの長き齒がゆさに不堪。十一時五十六分小樽着、越中屋に投宿。午後散策。夜九時、增毛に向ふ可く釧路丸に搭乘。凉味最も佳。

八月十日。土曜。曇。午後四時、釧路丸小樽を發す。原內務大臣、河島長官、安東警視總監、高岡、廣井氏が同乘す。不意に西村汪吉氏に會し、喫驚。八時增毛に着す。直ちに市中を見物す。戶數約二千と稱せらる。暑寒川は市の西方を流る、三吉神社對岸にあり。全市街を展望す可し。十二時乘船中食。一時出帆。一時四十五分留萠着。蒸汽船に引かれて、留萠河を溯る事約一里半にして上陸し、小寺の立てる山腹に至りて概景を展望す。市街の地形は、增毛に比すれば甚だ廣濶に、河流の便も亦大に可なり。然れども波濤の荒き時には二十尺に達し、一立方尺に加はる可き壓力は實に六千斤に達するが故に、防波堤を築くに當つては、二十噸の角石を要すと云へり。戶數約二千と稱す。

山を下りて再び引舟に乘じ、港口に出で、警標所より港內全般を眺望し、丸二旅館に投ず。當旅館は三叉路の交點にあり。伐木せられて草のみ青々と生じたる狀、波の如き連丘を東方に望む。店前には少女の二三、手毬を弄べり。今日氣候は烈暑を極め、殆ど困憊せんとす。宿に着して浴す可き湯なし。隣室には色青ざめたる病者臥せり。

八月十一日。日曜。曇。昨夜蚊と蚤とに攻められて、寢ること僅かに二時間。朝四時、早起結束して、一行と共に汽船に行かんと、河を渡り、昨日の地點よりトラックを以て、大和田炭鑛に至り、一行五臺の馬車に乘りて發す。暑氣甚しく、馬車は留萠川に沿ふて峠を上り、其絕頂に於て中食す。洗ひたる葉の上に副菜を置くなど面白き事あり、時に十一時。再び發して峠を下り、御料林を經て北龍の本願寺開墾場に少憩、こゝにて沼田農場のことを聞く。

約田一反ニ付

一等田、大豆、小豆、小麥　　各一斗宛

五等田、同上　　各六升宛

米　　五斗宛

小作千餘戸。沼田農場。北龍村。

後雨龍川を渡り、荒漠たる泥炭地を經て、妹背手に入る。驟雨如篠。五時着。

停車場側の茶屋に少憩す、蒸熱益々甚しく、衣襟汗に濡る。

七時四分の汽車に乘じ、七時四十分頃、瀧川に着し、停車場より五丁計りなる渡邊旅館に入る。

寢具清潔熟睡、終日の疲勞を醫すことを得たり。

八月十二日。月曜。朝曇。午後晴れ。朝五時起床。冷氣身に適す。八時十一分の汽車にて札幌に向ふ。十一時半札幌着。

五年前の敎鄕之事夢の如く腦裏に浮ぶ。不言の情。山形屋に入る。

愛子、壬生馬、Lili Beschlin、龍岡、大野、吉川より來信。母上樣の御病氣御快方の由大に安心す。

午後休息。夕刻より馬車に乘じて中島遊園地、西田氏、農科大學、博物館等を訪ふ。變りしものあり、變らざるものあり。

我は果して變りしものゝ一か、將た變らざるものゝ一か。

八月十三日。火曜。晴れ。朝西村氏を訪ひ、氏及び其妻君に面會す。例によりてよき人なり。買物に南一條に行き、後宿にて諸方に出す端書など認む。

農業學校の鐘聲と、甲斐甲斐しき學生と、殊に我が心臟を躍らしむ。

ティルディ、フォルスター、大野、孝太君より來信。

八月十四日。水曜。晴。午後農學校に至り、田中稔氏に面會す。夫子依然孜々として其職に忠なり。星野其他に會はんと

場に送り、西田氏に至りて晩餐の馳走となる。

したれど、會はれず。去つて、星野を共寮に訪ふ。東海林、渡邊の二人來り會す。快談半時間後、大臣等一行の出發を停車

停車場にて、校長、安部、南、橋本の諸教授及び前田君に會ふ。

此夜同窓會に於て、星野、渡邊、半澤、東海林相會して快談す。父上三時三分の汽車にて室蘭に赴かる。

八月十五日。木曜。晴。涼。朝校長を訪ひ、一身上の相談をなし、西田氏を訪ひて歸宿。朝食の時女中タケと語る。

星野を訪ひ、東海林と共に札幌農學校を見る。中食は星野方、三時過まで語る。

八月十六日。金曜。曇。暑し。朝丸井にて買物。一時十分父上御歸札。

午後暇乞ひの爲、西村、高岡、校長、西田訪問。夜西田氏來訪、談十時半に至る。

八月十七日。土曜。曇。暑し。朝六時十五分札幌を發して農場に歸る。

午後三時半母上御着。停車場に迎ふ。雨到りて夜尙やまず、大いに秋冷を感ず。夏逝かんとす。壬生馬より端書來る。

八月十八日。日曜。晴。

一、空間地、山浦支店長と談合、又西村とも打合はせの上、取計らひの事吉川に依賴。

一、貸附地名前換。

一、製線取道路を相當代價にて引受くること。

一、新貸附地に屬する追加約束。

一、木材取分の事。

一、學校前新道足兩側、又は片側を相當代價にて引受くる談を爲す事。

一、本年收納豫算。

一、明治三十九年八月廿一日付契約に左の條件を追加すること。

一、年月日付許可の貸附地線何坪、及び將來增加する地積。

一、管理の報酬年金參拾圓とありしを金五拾圓と改むる事。

以上父より掲示。

朝母上に從ひ農場地巡視す。午後新築家屋の設計。夕方より父上と共に松岡町に至り、諸買物などす。夜事務所の前庭に火を燃して、涼を取る。夜中の草花漸く凋落して秋行適しぬ。月は九日頃なるべし。

八月十九日。月曜。曇。冷。朝洗面せんと戶外に出づれば、冷涼の氣身に泌みて、北海の天地は既に秋なり。朝、母上に從ひて新農市街を見る。秋雨時々に至りて、衣袂を濕す。午後二時より彌照神社に臨時祭あり。雨となる。參詣人大人五十名。夜謠。夜半急雨。

八月二十日。火曜。朝曇り後晴　朝十一時三十六分發にて狩太を辭す。小作其他見送人多し。七時十五分函館着。勝田旅館に入る。

八月二十一日。水曜。半晴。冷。朝龍岡氏夫人、郵船會社支店長、區役所書記來訪。父上は共進會開會式に列席。母上、行郎と共に十時旅館を發し馬車にて湯の川、林長館に至る。着せるは十一時半。一浴清爽を感ず。午後、父上來館共に散步して南方に至ること約十町。歸館すれば江夏夫妻あり。夜九時頃まで遊ぶ。

八月二十二日。木曜。半晴。風。午前玉突、入浴其他に費す。午後高野、藤井、江夏の三氏來訪。前二者は一泊、夜龍岡、一木夫人及び龍岡老母來訪。

八月二十三日。金曜。晴。大風。午後謠の師匠、高木其他來訪。夜月明(十四日)、市に盆踊を見る。余が盆踊を見しはこれが初めてなり。夜に入りてより風強し。

八月二十四日。土曜。晴。大風。午前中は謠數番。午後、村角方を見る。母上愛國婦人會の歡迎員と共に、榊館に赴かる。榊郵船支店長來訪。夜津田氏より電報あり。一年

志願兵の事は思はしからず、服役せよとのことなり。無據、佐藤校長に就任延期の事願ひ置き、明日歸京の事に決す。

八月二十五日。日曜。曇り、午後晴。大風。朝七時、父上と別れ、行郎と共に馬車にて勝田旅館に歸り、母上と面談、英夫よりの來狀を報告す。龍岡氏訪問。午後一時半玄海丸にて函館を發す。波稍高し。靑森一泊。

八月二十六日。月曜。曇。風。朝六時十五分靑森を發す。途中、利根川にて增水の爲め汽車不通の報に接し、五時半松島驛に下車し、車にて松島ホテルに入る。Nを夢む。

八月二十七日。火曜。無風。雨。朝瑞嚴寺(葡萄木鼠、政宗公)、半月庵、三交松、觀瀾亭其他を見る。午後、獨り五大堂に上りて靜思す。

五時一分前發して松島驛より五時三十分發の汽車に乘じて、六時仙臺着。仙臺ホテルに投宿す。此夜大雨傾盆。函館大火の報あり。母上、行郎の安否を思ひて、熟睡し得ず。屢々夢む。

八月二十八日。水曜。曇。五時起床。六時六分の汽車に乘じて仙臺を發す。沿道の河流皆大溢。取手――間、龜有南千住間、二ヶ所汽車不通の爲め、二時半頃土浦柴田旅店に一泊するの已むなきに至る。此夜晴れ、市中を步む。

八月二十九日。木曜。曇。朝五時五十分、土浦を發し、取手驛より此方、利根川の甚だしく增水せるを見る。龜有に着せるは午前八時二十分頃なりしなる可し。

然るに、荒川の水亦增水して、渡船の便なしとの事に、此停車場にて渡船の用意なるを待つ外なきに至れり。

年譜

有島武郎年譜

(一) 舊全集版の年譜に增補訂正を加へて作成した。
(二) 最後の調査の結果故、凡てこの年譜に依るものとする。
(三) 作品名の下に(I)とあるは本全集第一卷所揭なる事を示す。
(四) 發表個所の明かなるものは、發表の年月を掲示し、完成の月日は之を明記せず。
(五) 發表の月の不明のものは、その年の最後に、年の不明のものは表末に附記する。

年譜の事實上の責任は私にある。——織田正信。

生る

一八七八年(明治十一年)(寅歳——三月四日未明、東京小石川區水道町五十二番地に生れた。父は武。薩摩藩北郷氏の臣。當時大藏省より松方公に從ひ海外派遣中であつた。その性格は「非常に眞正直な、又細心な或る意味の執拗な性質を有つて居た。そして外面的には隨分冷淡に見られる場合が無いではなかつたが、內部には恐ろしい熱情を有つた男であつた。此點は純粹の九州人に獨得な所である。一時に或る事に自分の注意を集中した場合に、殆んど寢食を忘れて了ふ」教育は「父の若い時代としては新らしい教育を受けた方だが、その根柢をなしてゐたものは矢張り朱子學派の儒學であつて、その影響からは終生脫する事が出來なかつた」健康は少年時代には生長を氣遣はれた程だつたが、後年に至つて次第に强壯となり、「身體こそ小さかつたが、精力の强い、仕事の能く續けて出來る體格」であつた。その生ひ立ちは非常に不幸で、父の父、即ち武郎の祖父に當る人は、「薩摩小藩の士で、島津家から見れば陪臣であつたが、その小藩に起つたお家騷動に捲き込まれて、

琉球の某處へ遠島された。それが父の七歲位の時で、それから十五か十六位までは祖父の薰陶に人となつた。從つて小さい時から孤獨で（父はその上一人子であつた）獨りで立つて行かなければならなかつたのと、父その人が餘りに正直である爲め、屢ゝ人の欺く所となつた苦がい經驗があるのとで、人に欺かれない爲めに、人に對して寬容でない褊狹な所があつた。これは境遇と性質とから來て居たので、晩年には追々練れて、廣い襟懷を示すやうになつた」

母は幸子。南部藩の江戸留守居役山內氏の長女。明治十年に武に嫁した。

母方の祖母は久留米の產、九州人の血を持つた人で非常な女丈夫。篤信家で、初め自力を信じてゐたが、後に他力を認めて淨土眞宗に歸依した。

母方の叔父は大阪の集稅長をした人で、風采の立派な快男子で、親分肌の大酒家で早世した。維新の際、南部藩が朝敵に廻つた爲め、母は十二三歲から流離の苦を甞めて、結婚前には東京でお針の賃仕事をしてゐたと云ふ事である。氣性は濶達な方面と共に人を呑んでかかるやうな鋭い所がある。結婚後は「當時の女庭訓的な思想の爲めに、在來の家庭的な、所謂ハウスワイフと云ふやうな型に入らうと努め、又入りおほせた。然し性質の根柢に有る烈しいものが間々現はれた。若い時には極度に苦しんだりすると、往々卒倒して感覺を失ふことがあつた……しかし此の發作がヒステリーに變つて、泣き崩れて理性を失ふと云ふやうな所はなかつた。……後に母方の祖母が同棲するやうになつてからは、その感化に依つて淨土眞宗に入つて信仰が定まると外貌が變じて我意のない思ひ切りのいゝ、平靜な生活を始めるやうになつた。そして癲癇のやうな烈しい發作は現はれなくなつた。……母の藝術上の趣味は、自分でも短歌を作る位の事はする程で、かなり豐かに有つて居た」

武郎は長男として生れ、二人の妹と四人の弟とがあつた。

武　郎――明治十一年生る。

愛　子――明治十三年生る。（山本直良に嫁す）
壬生馬――明治十五年生る。
志満子――明治十七年生る。（高木喜寛に嫁す）
隆　三――明治十八年生る。（父方の祖母の生家佐藤氏を冒す）
英　夫――明治二十一年生る。（母方の生家山内氏を冒す）
行　郎――明治二十七年生る。

二　歳　一八七九年（明治十二年）

三　歳　一八八〇年（明治十三年）

四　歳　一八八一年（明治十四年）――高等師範學校附屬幼稚園に入つた。この頃から多少蒲柳の體質となり、北海道に轉學して後まで時に藥餌を絶たなかつたが、身長五尺四寸、普通人の均齊な體格を備ふるに至つた。中學時代心臓による障害は脚氣を起し、父母を苦慮せしめた。

五　歳　一八八二年（明治十五年）――父が横濱の稅關長に任命さるゝと共に一家を擧げて横濱月岡町官舍に移つた。歐米主義と國粹主義とを兼ね奉じた父は、敵の刃を奪はうとする心持から、出來るだけその子に歐米風の教育を授けようとしたので、武郎は妹愛子と共に或る米國人の家庭に送られ、終日その家で過し、多少英語の素養が出來てから山手二十番の英和學校に入れられた。同時に父母からは最も嚴格な武士風の庭訓を授けられた。曉晨の劍法、弓、乘馬、大學、論語、灸罰、禁錮。性格は非常にいぢけた。學校で繪具を盜み露見された恥かしさ。好きな若い女教師から泣きやむやうに葡萄棚の一房をもぎつて與へられた記憶が殘された。
（明治十六年三月より同十七年八月まで英語會話實習の爲め米國人ギウリック・ルイニ氏の家庭に通ひ、八月後英和學校に入學。）

六　歲　一八八三年(明治十六年)

七　歲　一八八四年(明治十七年)

八　歲　一八八五年(明治十八年)

九　歲　一八八六年(明治十九年)

十　歲　一八八七年(明治二十年)――五月、英和學校を退き、學習院に入學準備の爲め自牧學校といふ或る老女先生の寺小屋式の變則な學校に通つた。この極端な變化は彼を驚かした。

六月、學習院豫備科第三級へ入學した。そして寄宿舍に入れられ、土日曜毎に横濱の官舍へ歸宿した。この頃から年長の學生が彼に對して與へた恐ろしい男色の壓迫が始まつた。

十一歲　一八八八年(明治二十一年)――皇太子殿下の御學友に選ばれ、每土曜日に吹上御苑に伺候した。この頃から「少國民」「少年文學」等を亂讀し、繪畫にも趣味を感じ、觸目の事物を容易且つ巧妙に寫生することが出來た。又「少國民」に現はれる輛音の挿繪に傾倒した。

十二歲　一八八九年(明治二十二年)――憲法發布式の雪の朝、森有禮の横死を聞いて非常に感動した。この頃から海軍人たらんとする志望を抛擲し、農業に從事してみたいといふおぼろげな欲求を感じ始めた。武郎自身曰く「何がその原因であるか分らない。恐らく人前に出て臆病な自分の性質をしみ〴〵感じた結果だらう」と。

十三歲　一八九〇年(明治二十三年)――七月、學習院豫備科卒業、中等科に編入。

十四歲　一八九一年(明治二十四年)――父が大藏省の關稅局長專任となつたので一家は東京に移つたが、武郎は依然として寄宿舍にゐた。彼自身曰く「善良な少年と不良少年との間に自分の位置を定めかねてゐた。……若し羞恥の念さへなかつたら私は恐らく後者に屬してゐたらう。學業の成績は優等だつた。そんなに勉强しないでも樂だつた」と。同級に鹽谷溫、松平保男、大久保利賢、吉井仲助、德大寺則麿氏等があつた。

十五歳　一八九二年（明治二十五年）――横濱の舊友を訪ねた時、中年の寡婦の誘惑を受けたが遁れた。この一事は非常に惡い影響を與へたと自ら信じた。

十六歳　一八九三年（明治二十六年）――父が渡邊國武氏と政治上の意見の衝突から大藏省國債局長の職を退いて鎌倉に幽居した。父は家財全部を賣却したが、殘るものは借金ばかりだつた。武郎自身曰く「骨董屋が車夫部屋に集まつて小さなセリをやつた。その時の光景は尙眼の前に殘つてゐる」と。然し父母は子供達に不如意な生活を見せまいとしたので、その爲め彼等がいぢけるやうな事はなかつた。武郎と妹の愛子とは東京に殘つて外祖母山內靜子の世話を受けた。この秀拔な女丈夫の感化は著しかつた。

十七歳　一八九四年（明治二十七年）

十八歳　一八九五年（明治二十八年）――岩倉具張等と共に白鳥博士の私塾に入つた。この頃から病氣のため屢〻休學し成績が惡くなつた。文學書を耽讀し、奇怪な空想に耽り、良友に靑山原に連れ出されて激しい忠告を與へられたりした。增田英一と知つた。

九月――斬魔劍（1）

十九歳　一八九六年（明治二十九年）――七月、學習院中等全科卒業。

九四年以來、腸チフス、肺炎、脚氣、心臟病に罹つて幾度か危險に瀕したので、最早東京にゐられない程の體になつてゐた。ふと札幌農學校に入る氣を起した。その動機は百姓の仕事を研究してみたかつたのと、北海道には、嫌ひな蛇がゐないだらうといふ事からであつた。

八月下旬、大風雨を冒して北海道に渡つた。新渡戶博士の家に寄寓し、同夫人の殊寵を蒙つた。九月、札幌農學校豫科第五年級に入學。新渡戶博士の英文學の講義に非常な興味を感じた。森本厚吉と知つた。

二十歳　一八九七年（明治三十年）――外祖母の感化による宗敎生活の第一步として試みた禪堂の修行を廢し、キリスト

敎に近づいた。友人森本厚吉は當時、懷疑の絕頂に悶えてゐた。これから二人の間に苦しい砥礪の日が續いた。性の目覺めが障碍となり鞭撻となつた。

七月に農學校本科に進級する。

二十一歲　一八九八年（明治三十一年）

遠友夜學校々歌（1）

二十二歲　一八九九年（明治三十二年）

花語り（1）

二十三歲　一九〇〇年（明治三十三年）――決心して獨立敎會に入つた。內村鑑三氏に負ふ所が多かつた。父は家族主義の立場から斷然として武郎の基督信者たることに反對した。然し常にその善良高貴なる人格はこれを推賞して止まなかつた。

足助素一、末光績と相知つた。

人生の歸趣（5）、「學藝會雜誌」第三四、五號（一九〇一年）所揭。

札幌農學校々歌（1）

二十四歲　一九〇一年（明治三十四年）――三、四人の青年が中心となつて獨立敎會を改革し、敎會を全く敎派から獨立させた。「鎌倉幕府初代の農政」（5）なる卒業論文を提出して、七月札幌農學校全科卒業。

十二月、一年志願兵として第一師團步兵第三聯隊に入營。

十一月――五日集（詩）（1）

札幌獨立敎會（歷史）、「聖書之硏究」第一四、五、六號所揭。

夏に、森本厚吉氏と共著で「リビングストン傳」を警醒社より出版。

二十五歳 一九〇二年（明治三十五年）――十一月三十日退營。成績優秀、見習士官に任ぜられた。

二十六歳 一九〇三年（明治三十六年）――皇太子殿下御輔導に推されたけれども辭して受けず。八月、米國に遊學し、ペンシルヴァニヤ州のハアヴァフォード大學院に入學、歴史、經濟學專攻。この頃から宗教的生活に不安を懷き始め、深い懷疑に陷り出した。

五月――獨旅短信（5）

七月――草いきれ（1）

二十七歳 一九〇四年（明治三十七年）――六月、「日本の歴史に影響したる外國文明」といふ論文を提出して、マスター・オブ・アーツの學位を授與されてハアヴァフォード大學院を出で、直にフランクフォード精神病院に入つて看護夫となつた。米國に於ける勞働の眞意は弟生馬を歐洲に留學せしめんがためであつた。二ヶ月の苦しい勤勞の結果、自己の精神狀態にも不安の念を感じ出して同院を退き、九月、マサチューセッツ州のハアヴァード大學の大學院專攻科に入り、歴史及び經濟學を專攻したが餘り興味がなかつた。唯、モーア博士の中世紀建築史には深い研究心を起した。エマスンを讀み、ホヰットマンの詩に親炙し、ブランデスとツルゲーネフに傾倒した。此處では或る米國人と共同生活をした。

金子喜一と知つた。

二十八歳 一九〇五年（明治三十八年）――思ふやうな收穫もなく大學を去り、その夏はニューハンプシャー州の或る農家で働いた。

バルチモアで暫く森本厚吉と同棲した。

九月ワシントン市國會附屬圖書館に於て歴史及び文學を專攻した。渡米以來、最も興味をもつて勉強をやり出した。イプセン、トルストイ、クロポトキン等の著書を心讀した。

百姓にならうか、教育者にならうか、文學者にならうかといふ實際問題にぶツつかつた。

ブランド(5)、一九〇五、六年に渉つて「校友會雜誌」に發表、一九一九年四月「白樺」に再掲。

二十九歳　一九〇六年(明治三十九年)――ある友人の戀愛事件に坐し短銃を以て生命を脅かされた。極度の神經衰弱に陷つて農家に遁れた。

九月一日、歐洲歷遊の途に上り、九月十三日ナポリで弟生馬と落合ひ、それからイタリイ、スイス、ドイツ、オランダ、ベルジューム、フランス、イギリスとあわたゞしい旅を續けた。

四月、「イブセン雜感」を執筆、一九〇八年三月「文武會報」に掲載。

かんく蟲(1)、ワシントンに於て執筆。一九一〇年十月「白樺」所掲。

三十歳　一九〇七年(明治四十年)――二月、ロンドンでクロポトキンに會つた。四月十一日神戶著、歸朝。

九月から豫備見習士官として再び軍隊生活に入つた。

十二月五日、東北帝國大學農科大學の英語の講師となつた。

志賀直哉、武者小路實篤と知つた。

三十一歳　一九〇八年(明治四十一年)――一月七日、學長附主事を命ぜられた。三月六日、學生監部勤務を命ぜられた。

五月六日、明治四十一年度大學豫科、農學實科、土木工學科、林學科、及び水產學科生徒入學試驗委員を命ぜられた。六月一日、陸軍步兵少尉に任ぜられた。六月四日、英語講師囑託を解かれ、大學豫科敎授に任ぜられた。敍高等官六等七級俸下賜。十月十日、學生監部勤務を解かれた。十月二十日、敍正八位。十月三十日、敍正七位。

吹田順助、神尾安子と知つた。

三月――イブセン雜感(5)、「文武會報」第五三號所揭。

四月——米國の田園生活(5)、「文武會報」第五四號所掲。
十二月——札幌獨立教會沿革(5)、「獨立教會」第三七號所掲。
日記より(5)、「文武會報」第五四、五號所掲。

一月二十八日、獨立教會二十五年祭に際して、教會史を朗讀。

三十二歳

一九〇九年(明治四十二年)——三月、神尾光臣の二女安子と結婚した。四月三十日、明治四十二年度大學豫科、農學實科、土木工學科、林學科、及び水產學科生徒入學試驗委員を命ぜられた。
七月三日、日英博覽會出品委員を命ぜられた。
十月十八日、大學豫科第二年學級主任を命ぜられた。
十月二十七日、日英博覽會出品英文大學一覽編纂委員を命ぜられた。
柳宗悅と知つた。

二月——半日(1)、札幌に於て執筆。

三十三歳

一九一〇年(明治四十三年)——五月十三日、明治四十三年度大學豫科、農學實科、土木工學科、及び水產學科生徒入學試驗委員を命ぜられた。八月十六日、陞敍高等官五等。十月六日、臨時特別取調委員を命ぜられた。
十月二十一日、敍從六位。
武郎　文學的活動は此年から始まつた。四月、自然主義に對し人道主義を提唱して雜誌「白樺」が創刊された。弟生馬、弴と共に同誌の同人となる。

四月——西方古傳(1)「白樺」所掲。
五月——二つの道(5)「白樺」所掲。
七月——老船長の幻覺(4)「白樺」所掲。

八月――もう一度「二つの道」に就て(5)「白樺」所掲。

十月――かん〱蟲(1)「白樺」所掲。

十一月――叛逆者(5)「白樺」ロダン記念號所掲。

三十四歲

一九一一年(明治四十四年)――五月四日、明治四十四年度大學豫科、農學實科、林學實科、土木工學科及び水産學科生徒入學試驗委員を命ぜられた。

長男行光が生れた。結婚生活の危機が來た。夫婦共に屢〻離婚を眞面目に考へた。

獨立敎會を去り從來の基督敎的信仰を捨てた。危險人物として北海道廳から監視を受けた。

一月――或る女のグリンプス、後に「或る女」(2)と改題、「白樺」に連載しはじむ。

二月――潤鳴氏への返事(5)「白樺」所掲。

四月――「お目出たき人」を讀みて(5)「白樺」所掲。同級生(5)所載場所不明。

三十五歲

一九一二年(明治四十五年)――五月四日、明治四十五年度大學豫科、農學實科、林學實科、土木工學科、及び水産學科生徒入學試驗委員を命ぜられた。

大正元年、次男敏行が生れた。

三月――小さい夢(4)「白樺」所掲。

三十六歲

一九一三年(大正二年)――三男行三が生れた。

五月十七日、大正二年度大學豫科、農學實科、林學實科、土木工學科、及び水産學科生徒入學試驗委員を命ぜられた。九月十一日、本學年間大學豫科第一年學級主任を命ぜられた。

二月――或る女のグリンプス「白樺」連載のもの完了。「或る女」前編(2)の二十一まで。

六月――ワルト・ホヰットマンの一斷面(5)「文武會報」所掲。一九一九年一月「大觀」再掲。

七月――草の葉(5)「白樺」所掲。

八月――故田中稔氏に就いて(5)「獨立新報」所掲。本學の過去「東北帝國大學記念集」所掲。

三十七歳 一九一四年(大正三年)――四月三十日、大學豫科、農學實科、林學實科、土木工學科、及び水産學科生徒入學試驗委員を命ぜられた。

九月十一日、本學年間大學豫科第二年學級主任を命ぜられた。

夏父母と共に一家を擧げて九州へ旅行し、久留米に師團長たりし神尾家を訪ひ、又初めて父の郷里に至つた。秋安子が肺を犯された。冬、一家を擧げて札幌から東京に移つた。幼年より生家に留まつたことの少い武郎は今や心身を盡して兩親に孝養を營んだ。

一月一日――眞夏の夢(3)「小樽新聞」所掲。

二月廿三日――新しい畫派からの暗示(5)「小樽新聞」所掲。

四月――An Incident (1)「白樺」所掲。

七月――内部生活の現象(5)發表個所不明、講演筆記?

八月――幻想(1)「白樺」所掲。

三十八歳 一九一五年(大正四年)――農科大學の教職を辭した。

安子は鎌倉の轉地先から平塚の杏雲堂病院に入院した。

三月――首途(「迷路」の序篇)(1)「白樺」所掲。

七月――十二月、宣言(1)「白樺」所掲。

九月――サムソンとデリラ(未定稿)(4)「白樺」所掲。

三十九歳 一九一六年(大正五年)――五月生馬離婚問題起り、八月二日愛妻を失ひ、十二月四日父を失つた。それがため

生涯の一大轉期となつた。
五月、慶應大學教授就任の議ありしも、不調に終る。
與謝野晶子と知つた。
一月――お末の死(1)「白樺」所揭。大洪水の前(4)「白樺」所揭。
三月――フランセスの顏(1)「新家庭」所揭。
四月――惠迪寮々歌集序(5)
七月――クロポトキンの印象(5)「新潮」所揭。潮霧(1)「時事新報」所載。
八月――松蟲(5附錄)の序と跋。

四十歲

一九一七年(大正六年)――此の年左に列記する多くの作を發表し、文壇の地位名聲漸く確固たるものとなる。
十月、初めて武郎著作集第一輯「死」を新潮社から出版した。
十一月、中央公論は兄弟號を出し、有島三兄弟、谷崎兄弟の作を掲載した。又十一月に正宗白鳥、島崎藤村と共に「新愛知」懸賞小說の選者となる。
一月――「聖書」の權威(5)「新潮」所載。
二月十一日――再びロダン先生に就て(5)「讀賣新聞」日曜附錄所揭。(前の日曜にも執筆せられたものらし。)
三月――ミレー禮讃(5)「新小說」所載。
五月――死と其の前後(4)「新公論」所載。
六月――惜しみなく愛は奪ふ(5)「新潮」所揭
七月――平凡人の手紙(1)「新潮」所揭。カインの末裔(1)「新小說」所揭。

八月――「平凡人の手紙」に就いて(5)「讀賣新聞」所揭。"Love, the Plunderer"(?)"The New East"所揭。

九月――クララの出家(1)「太陽」所揭。實驗室(1)「中央公論」所揭。

十月――凱旋(1)「文章世界」所揭。奇蹟の詛ひ(4)「東方時論」所揭。私の母(5)「新家庭」所載。藝術を生む胎(5)「新潮」所揭。私の創作の實際(7)「文章世界」所揭。

十一月――迷路(1)「中央公論」所揭。云ひたい事二つ(5)「中外」所揭。氣分で生きて行く人(5)「新潮」所揭。自己主義の考察「北海タイムス」所載。

十二月――四つの事(5)「新潮」所載。ロダン先生の藝術の背景(5)「中央美術」所揭。嘗てない多作をした年(7)「新潮」所揭。

十二月十七日――岩野泡鳴氏に(5)「國民新聞」所載。

講演――十一月、自我の考察(5)札幌農科大學辯論部講演會に於て。その他神戸女學院(四月)、救世軍(九月)に於て講演。

四十一歳

著作集第一輯(十月)「死」――お末の死。死と其の前後。平凡人の手紙。第二輯(十二月)「宣言」。

一九一八年(大正七年)――毎月諸雜誌に創作や感想を發表し且つ著作集を五册出した。(第三輯より第七輯まで)。但し第六輯以下は舊友足助素一の要望により、その新らしく經營せる叢文閣から出版されることになつた。從つて新潮社との契約を改めた。三月、「新潮」に大正六年迄の「有島武郎年譜」が載つた。

十月に同志社大學、京都キリスト教青年會館にて講演する外、屢〻招かれて講演した。

又十月三日から五日間、牛込區横寺町の藝術俱樂部で、藝術座研究劇として「死と其の前後」が上演された。

これより先き、八月、島村抱月、松井須磨子と相知る。又秋田雨雀、藤森成吉等と相知れるも、この年の事で

ある。

一月――曉闇（「迷路」の續編）新小説」所揭。小さき者へ（1）「新潮」所揭。動かぬ時計（1）「中央公論」所揭。
二月――藝術家を造るものは所謂實生活に非ず（5）「新潮」所揭。
三月――死を畏れぬ男（1）「新時代」所揭。
四月――生れ出づる惱み（3）「大阪毎日新聞」に一部所載。石にひしがれた雜草（3）「太陽」所載。想片（5）「新潮」所揭。林檎の野（5）「新小説」所揭。
七月――ある六月の日記（5）「新潮」所揭。武者小路兄へ（5）「中央公論」所揭。
八月――私の友達（5）「文章俱樂部」所揭。若き友に（5）「秀才文壇」所揭。藝術製作の解放（5）「新公論」所揭。大なる健全性（5）「文章世界」所揭。自己と世界（5）「新小説」所揭。
九月――讀者に（5）「白樺」及び「新しき村」所揭。旅の心（2）（後に「旅する心」と改題）、「讀賣新聞」に連載
十月――運命と人（5）「中外」所揭。予に對する公開狀の答（5）「新潮」所揭。
十二月――私の父と母（5）「中央公論」所揭。

著作集――第三輯「カインの末裔」（二月）――カインの末裔。凱旋。實驗室。クララの出家。第四輯「叛逆者」（四月）――叛逆者。草の葉。ミレー禮讃。第五輯「迷路」（六月）。第六輯「生れ出づる惱み」（九月）――生れ出づる惱み。石にひしがれた雜草。第七輯「小さき者へ」（十一月）――An Incident。幻想。小さき者へ。潮霧。動かぬ時計。老船長の幻覺。

四十二歲

一九一九年（大正八年）――二月、九、十の兩日、木田金次郎の習作展覽會を弟生馬の畫室で開いた。
三月三十一日、後備役滿期。

三月三十一日から四月二十一日迄、「或る女」後編執筆の爲め圓覺寺の塔頭の一つの松嶺院といふ無住の寺に引籠つてゐた。同月二十七日、東京出發、京都に赴き、同志社で昨年の續きの藝術論とホヰットマンを講じた。又この旅行の閑暇に、京都左京油小路の北向不動堂の一室に於て「或る女」後編を執筆完成した。

四月、朝日新聞社員たる事をすゝめられしも、斷る。

八月、三人の子供と共に北海道を十六七日間旅行した。歸路、輕井澤に立寄り、大學擴張講演會にホヰットマンを講じた。十月末から同志社でイブセンを講ずる爲め京都に赴いた。母を伴つた。

此年は、輕井澤、同志社の外、東京高等女學校聯合同窓會、東京女子大學、大阪十日會、京都ＰＬ會、第二高等女學校同窓會等で講演した。

八月、白樺演劇社成立の記念として、武者小路實篤、長與善郎、千家元麿、近藤經一、犬養健と合著で「白樺脚本集」を出した。此年、秋の末、京都エラン・ビタルの同人によつて「死と其の前後」が公演された。

一月——小さき影(6)(五日——十二日「大阪毎日新聞」所揭) 自己を描出したに外ならない「カインの末裔」(6)「新潮」所揭。ワルト・ホヰットマンの一斷面、「大觀」(再揭、一九一三年一月號)。

二月——御嶽敎の中敎正となつた祖母(6)「中央文學」所揭。批評といふもの(6)「早稻田文學」所揭。松井須磨子の死(6)「新潮」所揭。和辻兄に(6)「讀賣新聞」(二月九日所揭)。雜信一束(7)(今月より一九二一年四月まで「我等」に連載)。「或る女」前編の書後(6)。

三月——「リビングストン傳」の序(6)「東方時論」二號より——後に第四版の序、將來の新劇團に對する二三の註文(6)「早稻田文學」所揭。聖フランシス「完全の鏡」の序文(6)執筆。

四月——春(6)「新小說」所揭。「野性の呼聲」のあとがき(6)「ブランド」「白樺」(再揭、一九〇五年)。

五月——往來雜記(6)「大阪朝日新聞」所揭。「或る女」後編書後(6)

六月――藝術的氣分に生きよ(6)「讀賣新聞」所揭。
七月――若き友の訴へに對して(6)「新潮」所揭。「題言」(6)「中央文學」所揭。
九月――「リビングストン傳」の序(第五版)(6)
十一月――文學は如何に味ふべきか(6)「女學世界」所揭。「三部曲」書後(6)。帝展の日本畫より石山氏のそれへ、「太陽」所揭。
著作集――第八輯「或る女」前編(三月)。第九輯「或る女」後編(六月)。第十輯「三部曲」(十二月)――大洪水の前(4)、サムソンとデリラ(4)、聖餐(4)、三作共に十月に完稿。
四月に、Whitman's Poetical Works, selected by T. Arishima を叢醒社から發行する。

四十三歲

一九二〇年(大正九年)――創作物としては武郎自身曰く「德田、田山兩氏祝賀記念小說集(『現代小說選集』)に『卑怯者』と云ふ小說を一つ書いただけです。その外一つ長いものを企てましたが全然失敗に歸しました。『卑怯者』に就いては別にいふべきものを持ちません。然し何か私の心の中が變化して行きつゝあるやうに思ひます。本當に創作するやうな氣持が近い中に來ることですか、來ないことですか、それすら自分にははつきりしてゐません」と。
四月、東洋大學の文藝講演會で「惜みなく愛は奪ふ」と題して講演。五月、同志社大學で課外講演。七月、上宮敎會で文藝講演。その他輕井澤夏期大學、玄文社主催の劇に關する講演會、「謠曲界」主催の謠曲に關する講演會及び新人會主催の講演等に出た。十月、北海道の農場視察に行つた。
一月――內部生活の現象(6)「婦人の友」所揭。文藝と「問題」(6)「新潮」所揭。ルベックとイリーネのその後(6)「文章世界」所揭。美術鑑賞の方法に就いて(6)「太陽」所揭。
二月――イプセン研究(6)「大學評論」(三月號に涉る)。

三月――自分に言ひ聞かせる言葉(6)「改造」所掲。惜みなく愛は奪ふ(6)(十五日――三十一日に渉つて執筆)。懸賞短篇小說に就て(二月十五日執筆)「大阪朝日」夕刊所掲。

四月――美術鑑賞の方法に就いて再び(6)「雄辯」所掲。藝術に就いての一考察(6)「中央公論」所掲。婦人解放の問題(6)「改造」所掲。ケーベル博士小品集(6)「著作評論」所掲。水野仙子氏の作品について(6)(二十五日執筆)。生活と文學(6)「文化生活研究」所掲。(一九二一年三月に渉つて連載)

五月――溝を埋めよ「婦人公論」所掲。價値の否定と固定と移動(6)「人間」所掲。「惜みなく愛は奪ふ」の書後(6)(八日夜完成)。

六月――再び本間氏に、「早稻田文學」所掲。信濃日記(6)「新家庭」所掲。

七月――イブセンの仕事振り(6)「新潮」所掲。三つの希望、「婦人俱樂部」所掲。

八月――穢多の歌へる(6)「著作評論」所掲。愛――米川正夫氏に(6)「時事新報」(二十九日)。

十月――悲痛の哲理(6)「著作評論」所掲。一つの提案(6)「女性日本人」所掲。自分自身の覺醒――文學者の女性觀。「婦人公論」所掲。ホヰットマンに就いて(6)(新人會第二回學術講演會に於いて講演)。「旅する心」書後(十日執筆)。卑怯者(3)「現代小說選集」所載(二十三日完稿)。

十一月――文藝家と社會主義同盟に就いて、「人間」所掲。

その他に「運命の訴へ」(3)なる一九二〇年春作の未完稿の創作あり。又、「讀賣新聞」所載の「クロポトキンの印象と彼の主義及び思想に就いて」(6)なる一文あり。

著作集、第十一輯「惜みなく愛は奪ふ」(六月)――惜みなく愛は奪ふ。惜みなく愛は奪ふ餘錄――四つの事、藝術家を造るものは所謂實生活にあらず、想片、大なる健全性へ、自己と世界、批評といふもの、若き友の訴へに對して、美術鑑賞の方法について、美術鑑賞の方法について再び、藝術を生む胎。第十二輯「旅する心」

(十一月)。

四十四歳

一九二一年(大正十年)——創作物としては武郎自身曰く「小說としては『白官舍』戲曲としては『御柱』この二つがあるだけです。これほどに自分の創作慾が退縮したことを恥づる。その外に申すやうなことはありません。但し胸の中のものが無くなつたわけではないのですから、執筆に氣乘りのする時機が近い未來に來ないものでもないと思つてゐます。自分に絕望などは全くしてゐません」と。

文部省の國語調査會委員に選ばれた。同志社大學でバイロンを講義。

九月、有樂座で舞臺協會によつて「死と共の前後」が、十月、新富座で中村吉右衞門等によつて「御柱」が、十一月、牛込區若松町飯塚邸で合唱小劇場第一回室內劇試演として「老船長の幻覺」、がいづれも上演された。

一月——自己の要求(7)「改造」所掲。秋(7)「婦女界」所掲。藝術の不變性(7)能樂文藝協會講演、「謠曲」所掲。白官舍(3)一八一頁——二三七頁)「新潮」所載。

二月——「聖餐」に就いて(7)「讀賣新聞」所載。御柱(4)「白樺」所掲。

三月——一人の人の爲めに(7)「自由敎育」所掲。生活と文學(6)(一九二〇年四月より「文化生活研究」に連載されしもの完結)。

四月——雜信一束(7)(一九一九年二月より「我等」に連載中のもの完結)。「小さな灯」書後(7)。

五月——地方の靑年諸君に(7)「寸鐵」所掲。美を護るもの(7)、泉(7)、いづれも文化生活講演集、「私共の主張」所掲。

六月——餘裕と文化(7)「文化生活」所掲。

七月——紅海を離れて(7)「週刊朝日」所掲。

八月——筆頭語(7)「新文學」所掲。自然と人(7)「文化生活」所掲。北海道に就いての印象(7)「解放」

所揭。

十月――「御柱」上演に就いて(7)「讀賣新聞」日曜附錄(二十一日)。

十一月――生活と言ふこと(7)「文化生活」所揭。藝術家の生活に就いて(7)「文章俱樂部」所揭。「御柱」劇餘談(7)「中央文學」所揭。

十月に、ホヰットマン詩集第一卷(4)を叢文閣から發行す。

著作集、第十三輯「小さな灯」(四月)――跫音。北光。美を護る者へ。喫茶。春と秋。

この外に「一房の葡萄」(3)、「溺れかけた兄妹」(3)、「碁石を吞んだ八つちやん」(3)、「僕の帽子のお話」(3)の四篇の童話あるも創作月日不明。

四十五歲

一九二二年(大正十一年)――二月、新しき村後援の爲め志賀直哉と共編で「現代三十三人集」を出した。

七月十六日、岩内に遊び同夜町會議事堂で「惜みなく愛は奪ふ」を講演、同十七日岩内小學校で男女生徒の爲めに「一人の人の爲めに」を講演した。八月十七日、自己所有の農場開放に就いて小作人に告別の辭を述べた。

この夏信州木崎湖畔の夏期大學で「新舊藝術の交涉」(7)と題して講演。

八月、北海道狩太の有島農場開放の宣言をする。

十月、個人雜誌「泉」叢文閣より創刊し、他雜誌新聞への寄稿を一切斷る。十一月、狩太共生農園(舊有島農園)記念碑建立さる。

十二月下旬、報知講堂で「ドモ又の死」が新劇座によつて初めて上演された。

一月――宣言一つ(7)「改造」所揭。廣津氏に答ふ(7)(十九日)「東京朝日新聞」所載。藝術について思ふこと(7)「大觀」所揭。自由は與へられず(7)「文化生活」所揭。驚異(7)「文化生活」所揭。滿韓旅行と個人雜誌(7)「新潮」所揭。第四階級の藝術(7)(一日)「讀賣新聞」所載。片輪者(3)「良婦の

友」所揭。

二月——生活よりジャーナリズムを排せよ（7）「文化生活」所揭　野尻湖（7）「婦女界」所揭。雪の日の思ひ出（7）「母の友」所揭。

三月——片信（7）「我等」所揭。謠曲「綾鼓」（7）「新潮」所揭。主義はない（7）「野依雜誌」所揭。

四月——私の態度（7）「文章倶樂部」所揭。小兒の寢顏（7）「文化生活」所揭。「涙の底から」の序（7）。反キリスト教問題より一般宗教批判へ（7）「讀賣新聞」所載。藝術と革命の關係（7）（一、二日）「時事新報」所揭。星座（完稿）。

五月——子供の世界（7）「報知新聞」所揭。想片（7）「新潮」所揭。互ひの立場を認めよ（7）「文化生活」所揭。ホキットマンに對する一英國婦人の批評（7）「學藝」所揭。マルクス女史の「女」に就いて（7）（發表個所不明）。教育者の藝術的態度（7）「帝國教育」所揭。

六月——己れを主とするもの（7）「文化生活」所揭。繰り返しの生活を憎む（7）「報知新聞」所揭。生活の歐化と文化生活（7）「婦人公論」所揭。言葉と文字（7）「オヒサマ」所揭。「太陽の沈みゆく時」の序（7）（二十九日朝完成）。

七月——描かれた花（7）「改造」所揭。生命によつて書かれた文章（7）「文化生活」所揭。子供の素樸さ（7）「新潮」所揭。「米國學生々活」の序（7）（二十六日午後）。「藝術と生活」書後（7）（三十一日夜）。獨り行く者「文化生活」所揭。三大偉人の懺悔（7）「婦人世界」所揭。

八月——心に沁みる人々（7）「中央公論」所揭。木曾山中（7）「婦女界」所揭。上田博士の就任を機に漢字制限に就いての意見を徵されたのに答ふ（7）（三日）「讀賣新聞」所載。火事とポチ（3）「婦人公論」所揭。新舊藝術の交渉（7）木崎夏期大學に於ける講演。

九月――文藝に就て、「婦女界」所掲。

十月――個人雜誌「泉」創刊。「泉」を創刊するにあたつて(7)、ホヰットマンの「言葉の歌」から、ドモ又の死(4)、小作人への告別(7)、いづれも「泉」第一卷第一號所掲。愛に就いて(7)、大阪毎日新聞社主催文化大學講座に於ける講演。卽實(7)、愛知縣立第一高等女學校に於ける講演。道德と道理(7)國民婦人會講演會に於いて。

十一月――十二月、「靜思」を讀んで倉田氏に(7)「泉」第一卷第二號及び三號所掲。

著作集、第十四輯「星座」(五月)。第十五輯「藝術と生活」(九月)――藝術について思ふこと、藝術の不變性、描かれた花、生命によつて書かれた文章、心に沁みる人々、小兒の寢顏、餘裕と文化、筆頭語、互ひの立場を認めよ、已れを主とするもの、生活といふこと、自然と人、宣言一つ、片信、想片。

六月に、童話集「一房の葡萄」を叢文閣より發行、前年創作の四篇を收む。

四十六歲

一九二三年(大正十二年)――二月十九日發行の「讀賣新聞」に「革命心理の前に橫はる二岐路」と題する談話筆記が掲載された。その一節に曰く「私の立場から云へば――私は自分自身を決してボルシェヴィキの條文の中に當てはめようとも考へないし、またアナーキズムの中に見出さうとも思つてゐないが、――從つてそれ等のすべてを肯定しすべてを否定するものでもなく、要は各個人のテンペラメントに據るものであると信ずるが故に、自分自身の行くべき道に順應して進退しつゝあるものであるが、强ひてその何れに屬するかを問はれるならば、アナーキストであると答へるに躊躇しないものである……」と。

六月八日(午後三時頃)着物を着替へ、袴をはき、小風呂敷一つを持つて、麴町下六番町の家を出て、九日早曉、信州輕井澤三笠山の別莊淨月庵階下の一室で、波多野秋子と共に死す。

七月七日、兩人の死體が發見された。同夜火葬に附し、翌早朝、骨上げをした

九日午前十時から十一時の間に下六番町本邸で告別式擧行。田島進が故人の著書を朗讀した。同日午後三時、靑山墓地有島行直家の龕の中に永へに葬られた。行光、敏行、行三、外親戚友人會葬。

一月――酒狂(3)、文化の末路(7)、愛の表現(ホヰットマン譯詩)、お斷り(7)、いづれも「泉」第二卷第一號所揭、ワルト・ホヰットマン「草の葉」所揭。

二月――或る施療患者(3)「泉」第二卷第二號所揭。

三月――斷橋(4)、「ホヰットマン詩集」第二輯を出すに當つて(7)、永遠の叛逆(7)、いづれも「泉」第二卷第三號所揭。「濕地の火」の序(7)。「斷橋」の題材(7)「演藝畫報」所揭。

四月――骨(3)。瞳なき眼(3)その一、詩への逸脫、いづれも「泉」第二卷第四號所揭。生活革命の動機(7)「文化生活」所揭、私有農場から共生農園へ(7)「文章世界」所揭。農村問題の歸結(7)「靑年」所揭。農場解放顚末(7)「帝國大學新聞」所揭。

五月――親子(3)、瞳なき眼(3)その二、いづれも「泉」第二卷第五號所揭。文化生活の基礎「文化生活」所揭。藝術敎育私見(7)「藝術敎育」所載。

六月――獨斷者の會話(7)、バルビユスの「クラルテ」の譯文を讀みて(7)、いづれも「泉」第二卷第六號所揭。農民文化といふこと(7)「文化生活」所揭。時評三つ(7)「女性改造」所揭。文化に就いて(7)「文化講演集」所載。

七月――行き詰れるブルジョア(7)「文化生活」所揭。

八月――絕筆、和歌十首(7)「泉」終刊號所揭。

備考――その他創作年代不明のものあれど一々これを擧げず。
尙第一卷所載、「夕暮海邊に立ちて」はこれを除く。

有島武郎系譜

父

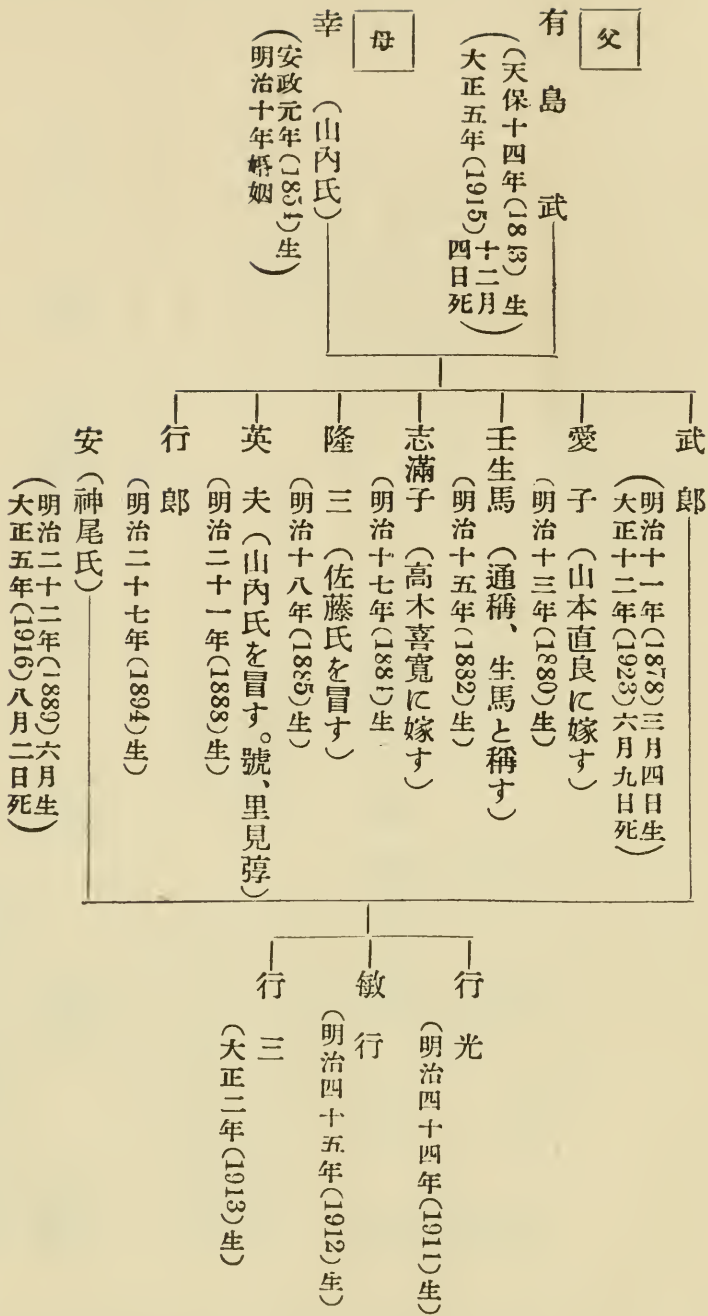
有島武（天保十四年(1843)生 大正五年(1915)十二月四日死）

母

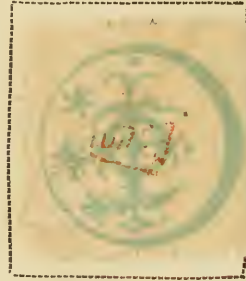
幸（山内氏）（安政元年(1854)生 明治十年婚姻）

- 武郎（明治十一年(1878)三月四日生 大正十二年(1923)六月九日死）
- 愛子（山本直良に嫁す）（明治十三年(1880)生）
- 壬生馬（通稱、生馬と稱す）（明治十五年(1882)生）
- 志満子（高木喜寛に嫁す）（明治十七年(1884)生）
- 隆三（佐藤氏を冒す）（明治十八年(1885)生）
- 英夫（山内氏を冒す。號、里見弴）（明治二十一年(1888)生）
- 行郎（明治二十七年(1894)生）

武郎 ― 安（神尾氏）（明治二十二年(1889)六月生 大正五年(1916)八月二日死）

- 行光（明治四十四年(1911)生）
- 敏行（明治四十五年(1912)生）
- 行三（大正二年(1913)生）

——第十巻 了——

昭和五年二月二十日印刷
昭和五年二月廿五日發行

非賣品

監輯者　有島生馬
　　　　里見弴
發行者　佐藤義亮
印刷所　富士印刷株式會社
製本所　東京印刷製本株式會社

發行所　東京市牛込區矢來町
（振替東京七九七七〇）
新潮社
電話牛込・八〇六番・八〇八番
八〇五番・八〇七番・八〇九番